和装の描き方

和装イラスト完全マスターブック

YANAMi／二階乃 書生／JUKKE　著
菊地 ひと美／八條 忠基 監修

ヘンテコ和装なんていわせない！
和装の描き方のコツがわかる！

着物／ゆかた／狩衣／水干／十二単／巫女
束帯（文官・武官）／遊女／忍者／新撰組 ほか
烏帽子や草履などの小物や、帯の締め方一覧まで

玄光社 MOOK

名代の座舗

九(ひげ)すぎめた のとしこ。

現代舞妓
われしのぶ

本書の見方

1 服の特徴が分かる

それぞれの衣装の特徴を解説。
構造の解説の他に、その衣装に必要な持ち物なども紹介。

正面　現代女性なら、正装から普段着まで
このお太鼓結びの絵で OK。

伊達衿
見せかけの衿。
帯の下まで続く。

襦袢（下着）の半衿
背面からは見えない。

帯

袖山

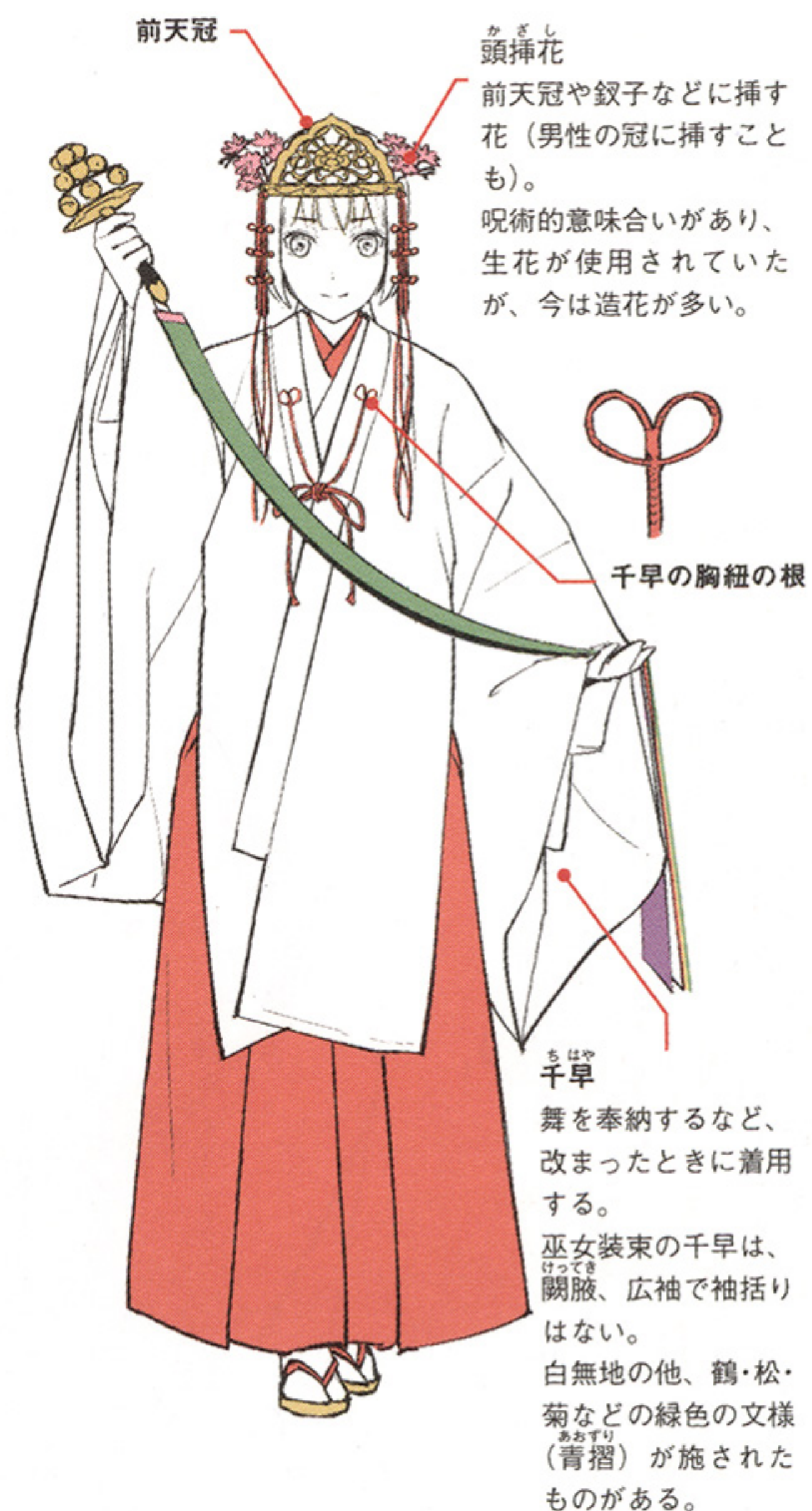
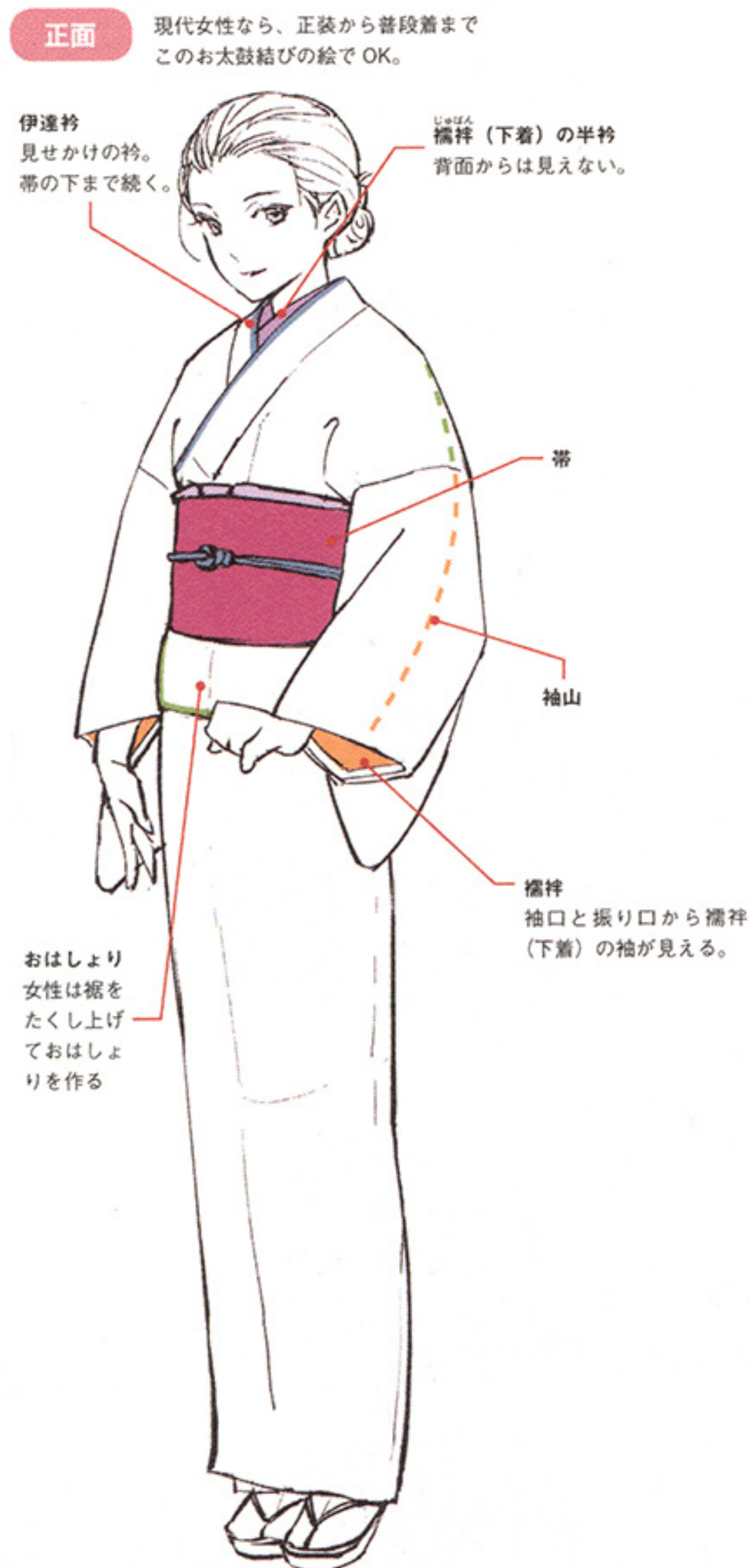
襦袢
袖口と振り口から襦袢
（下着）の袖が見える。

おはしょり
女性は裾を
たくし上げ
ておはしょ
りを作る

前天冠

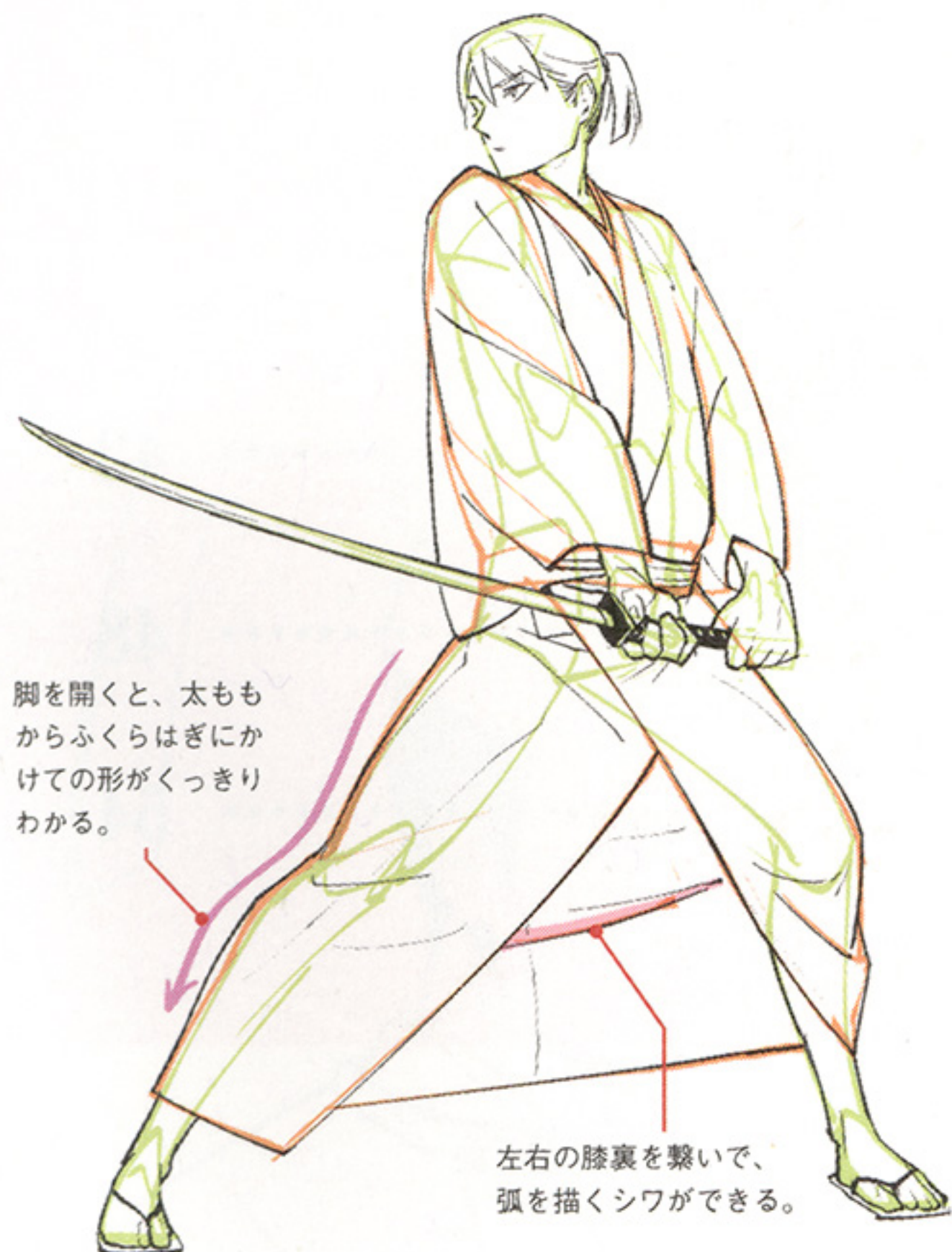
頭挿花
前天冠や釵子などに挿す
花（男性の冠に挿すことも）。
呪術的意味合いがあり、
生花が使用されていたが、今は造花が多い。

千早の胸紐の根

千早
舞を奉納するなど、
改まったときに着用
する。
巫女装束の千早は、
闕腋、広袖で袖括り
はない。
白無地の他、鶴・松・
菊などの緑色の文様
（青摺）が施された
ものがある。

2 布の動きが分かる

動いた時のシワのできかたや、布の動きを解説。

脚を開くと、太もも
からふくらはぎにか
けての形がくっきり
わかる。

左右の膝裏を繋いで、
弧を描くシワができる。

3 手順が分かる

衿や髪型など複雑なものなどは、手順をおって解説。

日本髪の描き方　日本髪は、手順を追って描けば難しいことはありません。
基本が描けるようになれば、あとは前髪や髷、髱の形でアレンジが可能です。

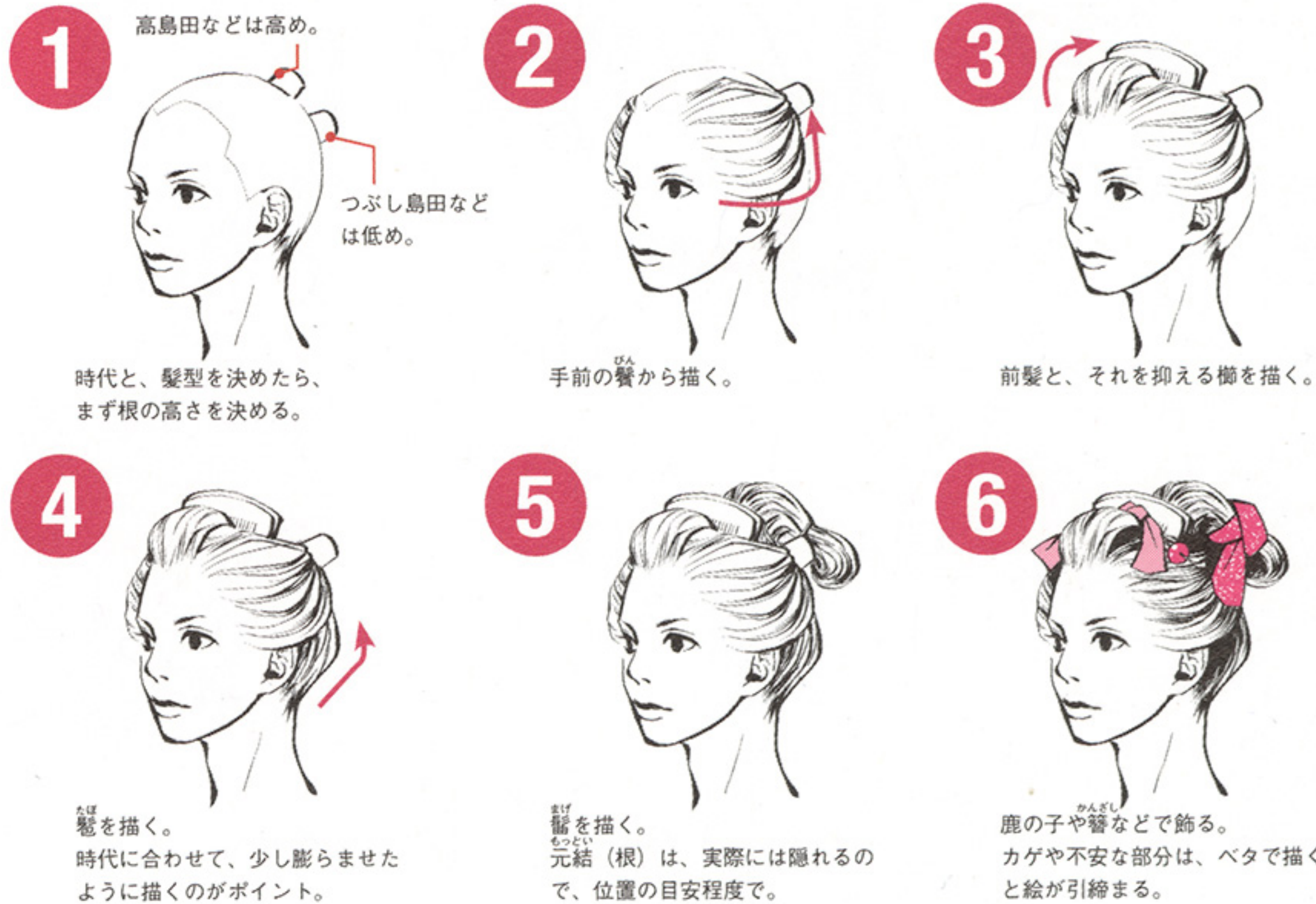
1 高島田などは高め。
つぶし島田などは低め。
時代と、髪型を決めたら、
まず根の高さを決める。

2 手前の鬢から描く。

3 前髪と、それを抑える櫛を描く。

4 髱を描く。
時代に合わせて、少し膨らませた
ように描くのがポイント。

5 髷を描く。
元結（根）は、実際には隠れるので、位置の目安程度で。

6 鹿の子や簪などで飾る。
カゲや不安な部分は、ベタで描く
と絵が引締まる。

その他、和装に欠かせない小物なども紹介。

もくじ

1 服装編

2 小物編

1

服装編

01 男女の体の違い

男女の描き分けで一番顕著なのは筋肉ですが、筋肉以外にも細かな違いがあります。
特に肋骨・骨盤の大きさと形状の違いを理解すると、筋肉やバストを描かなくてもシルエットだけで、男女を描き分けることもできます。

正面

斜めから見た輪郭は、頬骨を脂肪がカバーして、低い位置が一番膨んで見える。

産毛が多く、生え際は丸くぼんやりしている。

斜めから見た輪郭は、頬骨から顎へシャープな線になる。
頬の高い位置が、一番膨らんで見える。

硬い髪が多く、生え際は四角くハッキリしている。

CHECK
男性の顔のコツ
鼻筋のラインをはっきり描き、顎のラインも耳の下までしっかり描くと、男性的な印象になる。

CHECK
女性の顔のコツ
鼻は鼻先を少し描く程度で描き、顎のラインは、耳の下あたりを省略すると、女性的な印象になる。

鎖骨は、外へ向かうほどやや下がり、撫で肩になる。

鎖骨は、外へ向かってやや上がる。

肋骨が小さい。
開口部の角度が、約60度、縦幅は頭の1.3倍程度。

肋骨が大きい。
開口部の角度が約90度、縦幅は頭の1.5倍程度。

60°

90°

骨盤は男性より一回り小さく、特に縦幅が狭く横長に見える。
横幅も男性より小さいことに注意。

骨盤が大きく、正方形に近い形をしている。
頭は、骨盤にすっぽり収まるサイズ。

CHECK
女性の胸
女性の胸は、大胸筋の真ん中あたりに、水風船がぶら下がったようについている。

ボールのような丸ではなくしずく型を意識する。

CHECK
男女の体格差
女性は、男性より半頭身ほど低く描くと、並んだ時に、ちょうど同年代くらいに見える（小学生以下は、女子の方がやや大きい）。

01

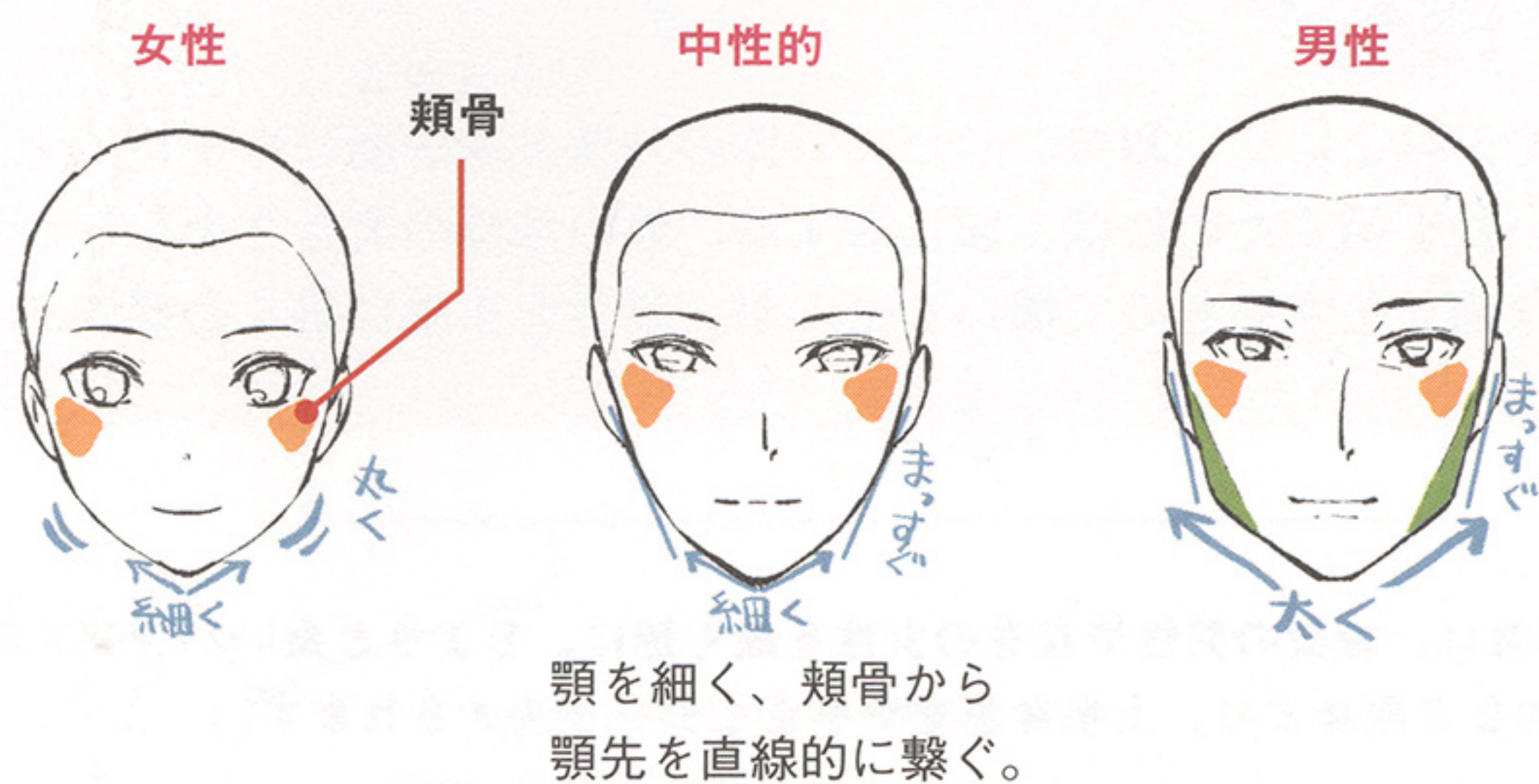
正面から見た輪郭

漫画的な表現では、「女性的な顔＝幼い顔」となる。頬骨と顎先の間を、丸く膨らませて描くほど幼く見える。

女性　中性的　男性

頬骨

丸く　細く　まっすぐ　細く　まっすぐ　太く

顎を細く、頬骨から顎先を直線的に繋ぐ。

女性とは逆に、「男性的な顔＝年齢の高い顔」となる。顎の幅を太くして、図の緑の部分を頬がこけたように陰影を付けて描くと、男性的に見える。顎が太いほど強面な印象になる。

背面

耳の後ろの生え際は、耳から少し離れたところから始まる。

僧帽筋や三角筋など、肩の筋肉が細くしなやかなので、首が長く見える。

僧帽筋や三角筋など、肩の筋肉が太く厚いので、首がやや短く見える。

女性の背中は男性ほど筋肉は見えないが、背骨の凹み、肩甲骨と三角筋は意識する。

男性は肋骨と骨盤が大きいのに加え、外腹斜筋が厚いため、くびれがほとんどない。

女性のお尻は下部が膨らんだ、ややつぶれた丸を意識する。

男性のお尻は骨盤の上部と脚の付け根の2カ所が出っ張る。四角い形を意識する。

CHECK 背中の筋肉

三角筋（さんかくきん）
僧帽筋（そうぼうきん）
肩甲骨（けんこうこつ）についている筋肉
広背筋（こうはいきん）
大胸筋（だいきょうきん）と前鋸筋（ぜんきょきん）
外腹斜筋（がいふくしゃきん）

恥骨が背中側へ潜り込むように骨盤が傾いているので、ヘソが前へ、お尻が後ろへ出たようなシルエットになる。

恥骨が前へやや突き出ているため、骨盤が真っ直ぐになり、あまりお尻の丸みが目立たない。

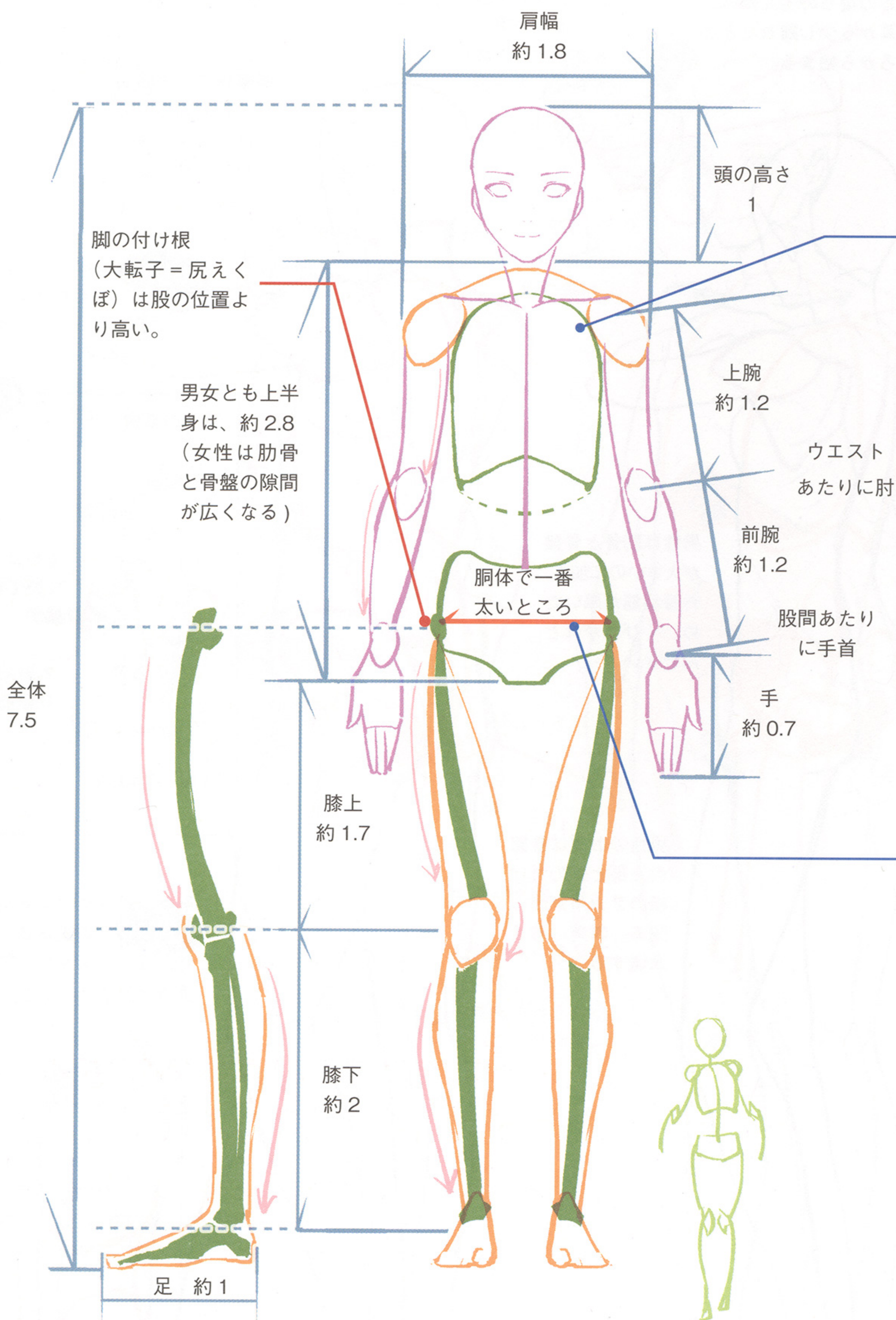
CHECK 和装の時のコツ

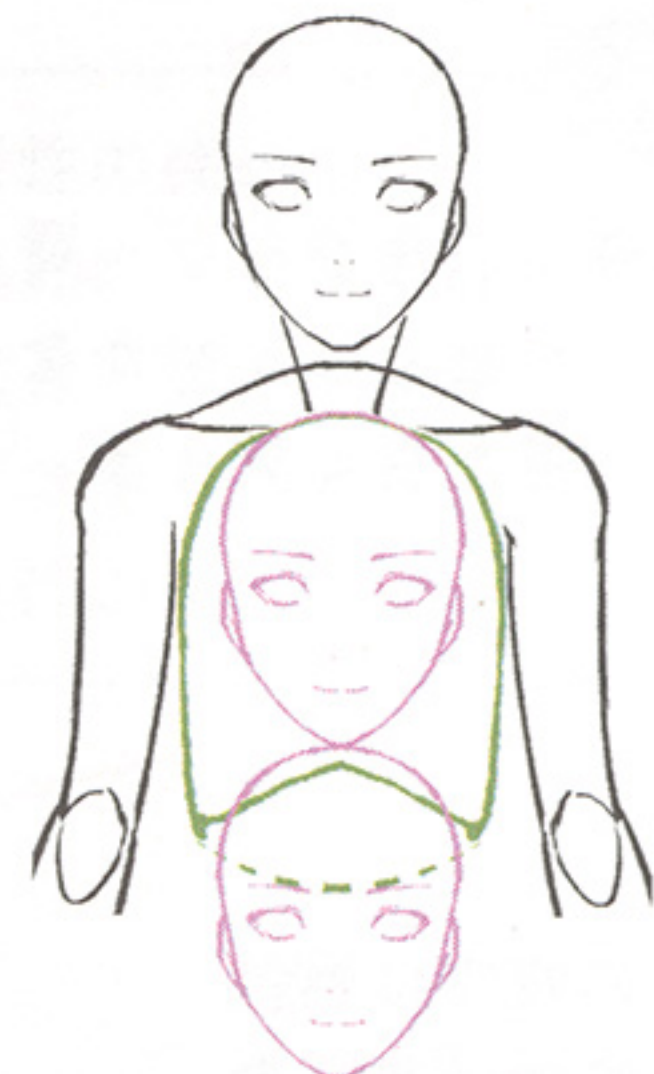
男性は胴長短足気味に、女性は胸とお尻を小さく描くと和服が映える。

02 アタリの描き方

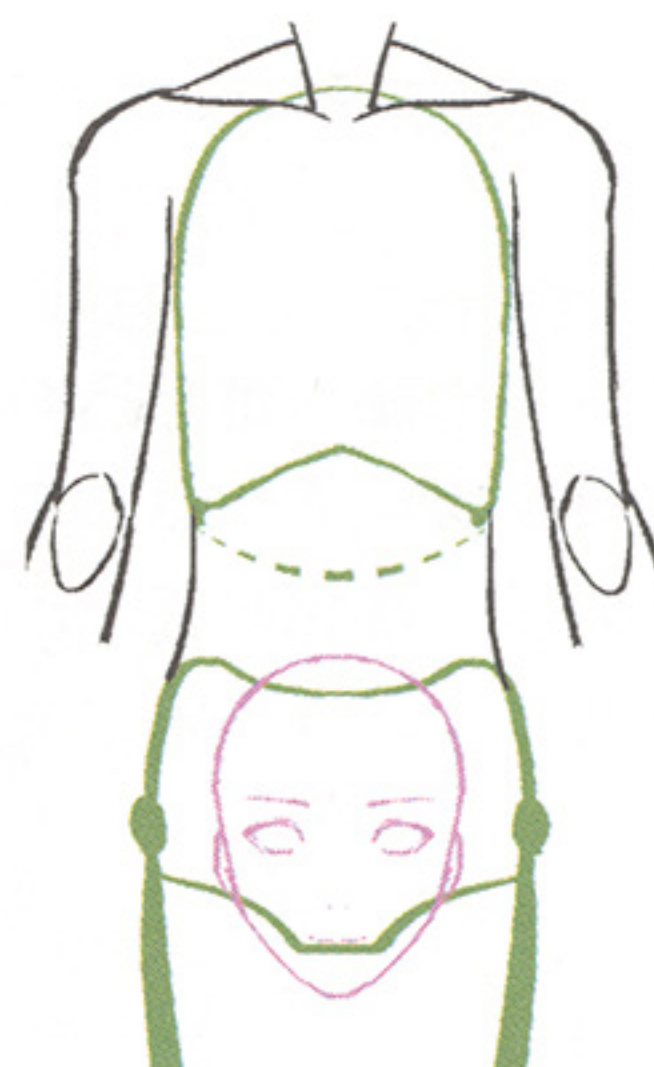
ボディラインが見えにくい和装の絵は、全体のバランスが崩れやすいです。
違和感のない絵を描くためには、頭に対する、他の部位の大きさをしっかり把握することが重要です。
アタリの形は描きやすいもので構いませんが、長さを正確に描く必要があります。

7.5 頭身の比率

7.5 頭身は、細身の男性や長身の女性を描く際に、ちょうど良いバランスのプロポーションです。
写実的な 8 頭身より、上半身がやや小さくデフォルメされます。

CHECK

肋骨の縦幅

肋骨の縦幅は約 1.4
（女性は 1.2 〜 1.3）

CHECK

骨盤の縦幅

骨盤の縦幅は約 0.9
（女性は約 0.8）

手足の筋骨にはカーブがあるので、直立で気を付けをしても真っ直ぐにはならない。
また、自然に重心をとると真正面からも、背骨はややカーブして見える。

02

体のアタリのコツ

関節のアタリ（卵型）を描くと、骨の描き込みをする時に分かりやすい。

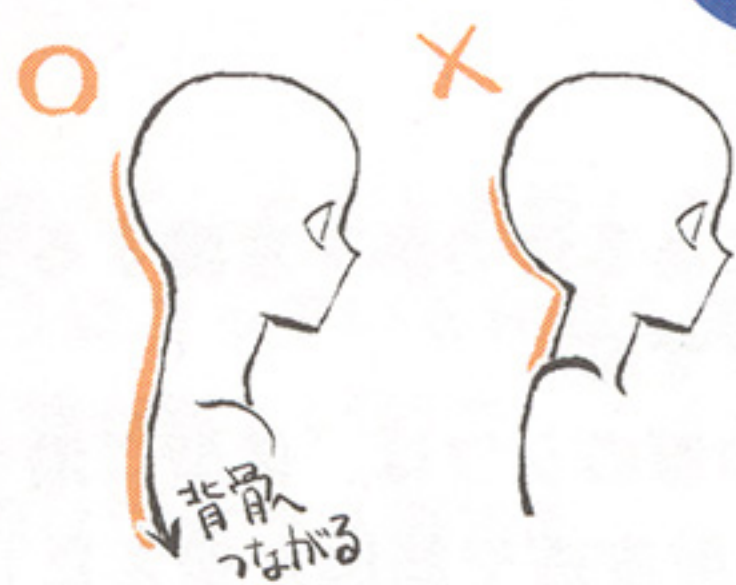
CHECK

首のカーブ
頭と首は必ず、滑らかなカーブで繋がる。

背骨つながる

腕を上げたポーズの時は三角筋のアタリに、肩甲骨上の筋肉（大円筋など）も含めて、大きな丸を描くと脇の下が描きやすくなる。

背骨

肩幅の差は肋骨の横幅で表現する（肩だけを大きくしないように注意）。

背面は僧帽筋の稜線に注意（山のような形になる）。

背骨は必ずS字カーブを付ける。
このカーブに沿って腰のラインを描くと自然なくびれになる。

斜めアングルは肋骨と骨盤の幅が、狭すぎたり太すぎたりしないように、おおよそ頭の幅と同じくらいを意識して描く。

背骨

手首に角度を付けると、自然なポーズになる。

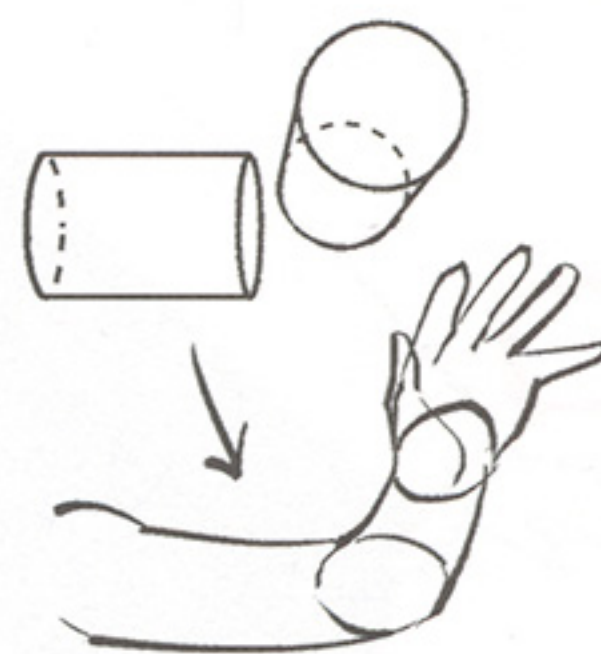
脚は骨や筋肉を意識して、外側から内側へカーブさせる。

脛（すね）の骨は、カーブを控えめに。

アタリの段階で手先足先を描き込むと、後から修正しにくい。

膝や肘の向きに対して、手首足首が不自然な方向に曲がっていないかを、注意する。

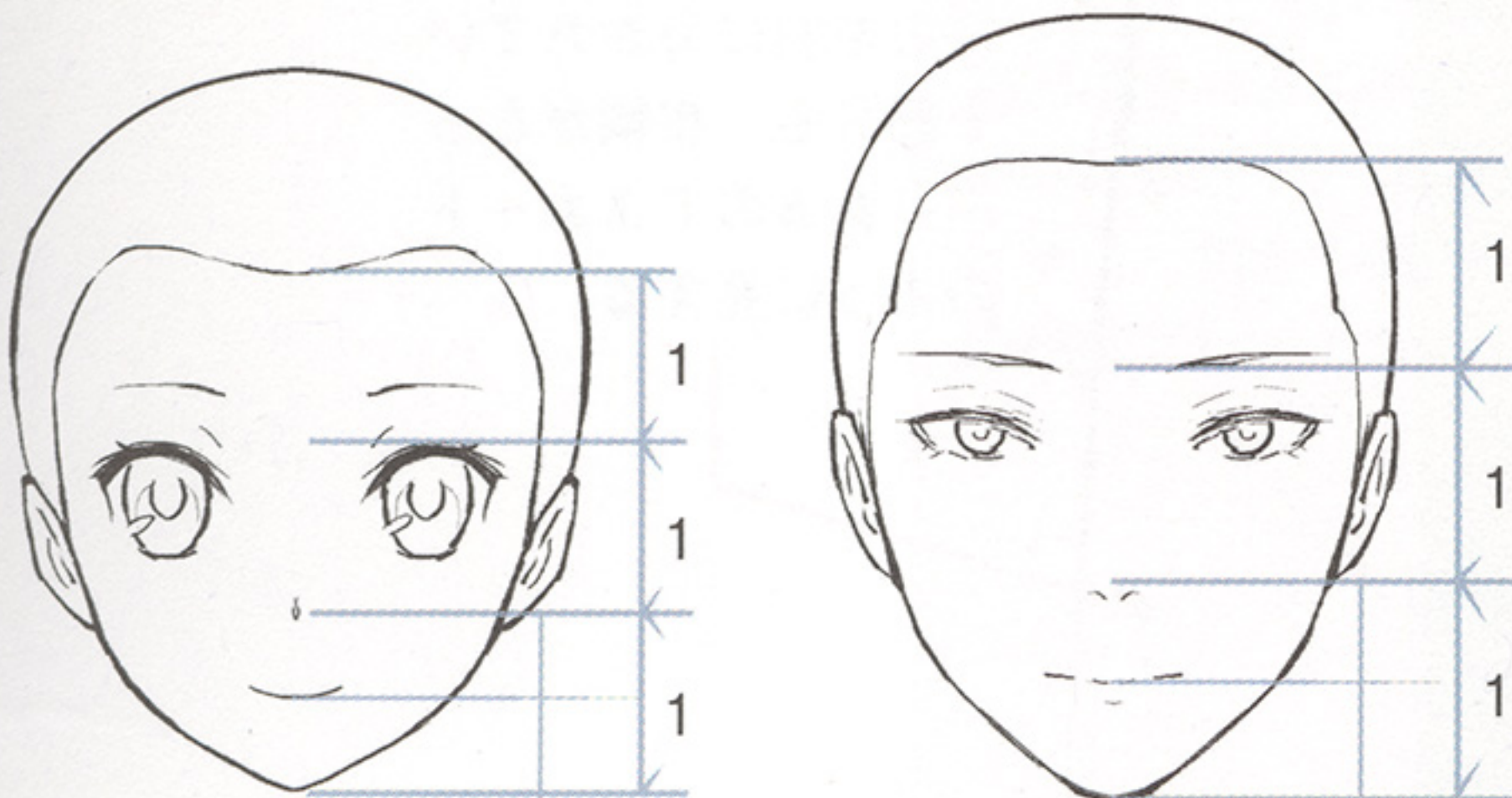
CHECK

腕と脚
パースのついた手足は、茶筒のような立体を意識してアタリを描くと遠近感を掴みやすい。

２つの筒の重なる部分が、関節部分になる。

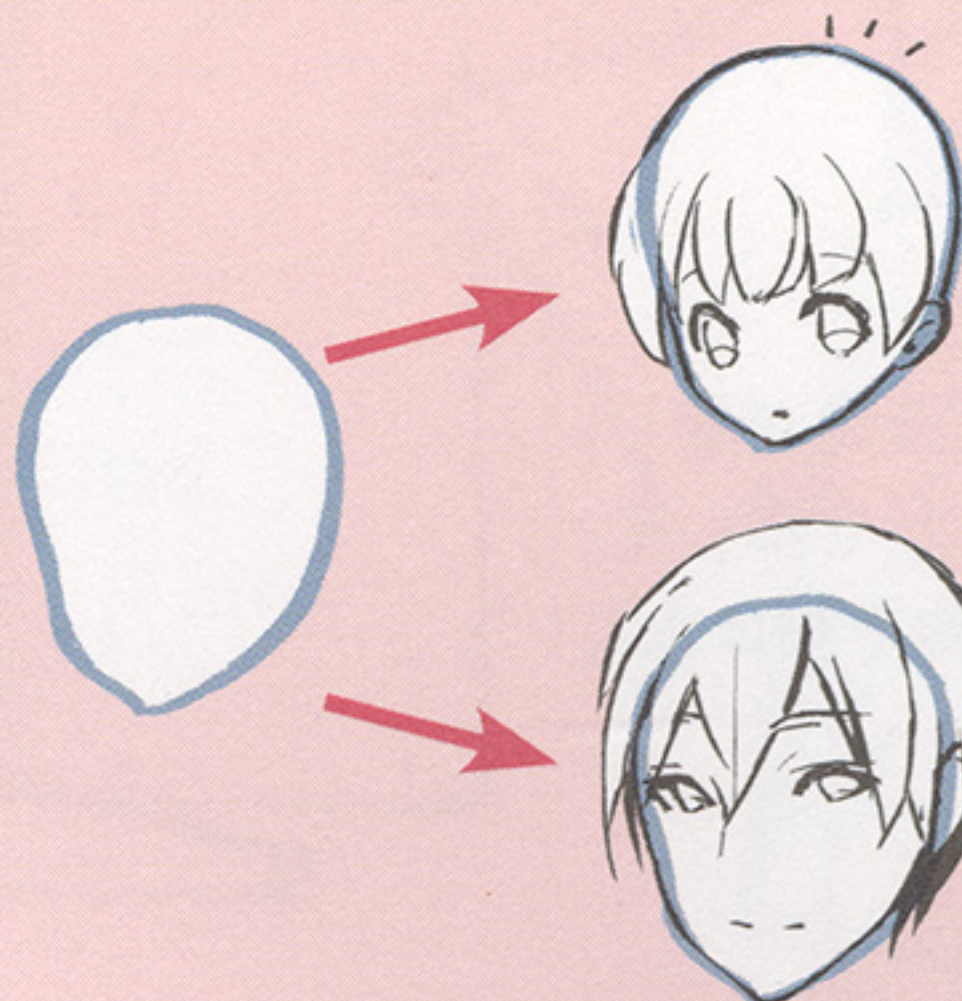
顔の比率

頭は、目や鼻を描き込んで仕上げていくうちに、全身とのバランスが崩れてしまいがちです。それを防ぐため、頭と顔のアタリは少なくとも「目の位置と大きさ」が把握できるものが理想的です。目の位置と大きさを決めると、頭の大きさが定まります（下図参照）。

1
1
1

1
1
1

・「生え際～眉」、「眉～鼻先」、「鼻先～顎」は等間隔。
・女性や子供のように目が大きい場合、「生え際～瞼（まつげ）」を等間隔にする。
・口は鼻と顎の間の1/2よりやや上になる。

ONE POINT

顔を描き込むうちに頭の大きさが変わってしまう!?
顔に何もないアタリで全身のプロポーションを決めてしまうと、途中で頭と体の大きさが、合わなくなることがあります。

目の位置を低く描いたため、頭頂部が尖ってしまった例。
顔が小さすぎる。
萌え絵でやりがち。

目の位置を高く描いたため、当初のアタリより頭が大きくなってしまった例。
リアル系の絵でやりがち。

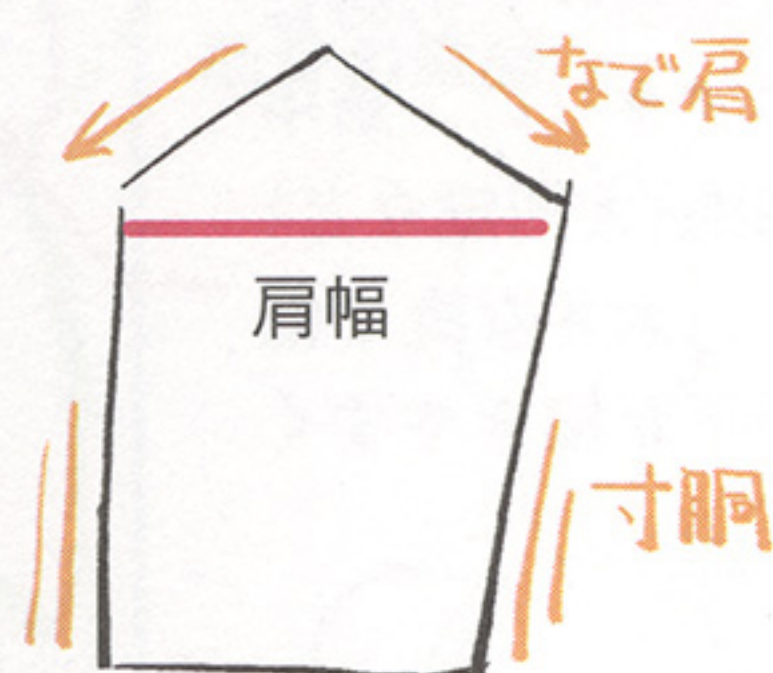
和装のアタリのコツ

洋服の場合は、シワを描くコツとして「下にある体の形を意識する」というのがありますが、和服は布の上からでは、ほとんど体の形が分かりません。
着流しの男性など、極軽装の場合を除いて和服のシワは、体型に沿ってできた形よりも「四角い布が折れてできる形」がほとんどです。「もう一層皮膚や筋肉が増えた」ようなイメージで、実際の体より太いアタリを描いて、和服のフォルムを掴みましょう。
ここでは女性の袴を例にとって解説していきます。

袖は四角い。

脇の下あたりは布が余るので、シワが多くなる。

腕を伸ばしてもあまり隙間ができない。

上半身は、帯や袴の紐まで含めて大きな五角形で描くと和服らしい寸胴になり、実際の肩や首より大きく膨らんだ、撫で肩のシルエットも描ける。

衿の線は肩より高い位置（首の半ば）から始まるので、撫で肩に見える。

上半身のアタリは、着物も袴も同じように描く。

着物の袖の縫い目は、肩からズレた位置になる。

腕は手羽先のような形でアタリを描き、袂（たもと）は別パーツのように描き加える。

袴の膝丈あたりまで、スカート状になっているので、ズボンのようなシルエットやシワはできない。

袂は四角い形をしている。
よれてひし形に見える場合もあるが三角形ではないので注意。

袴の左右に分かれている部分も、布幅がたっぷりあるのでスカートのように見える。

いきなり和服の形でアタリをとるのが難しい場合は先にボディラインのアタリを描いて、その上から一回り大きく（特に腕や脚は太く）和服のアタリを描く。

NG

和服は、ボディラインに沿って描いてしまうと失敗します。
ゲームなどの3DCGで、このようになっている和服を見かけます。
「布が体とは別に動く」という処理が難しいので、こうせざるを得ないのでしょうが、絵の参考にする際は注意が必要です。

肩の位置に、袖の縫い目がくる。

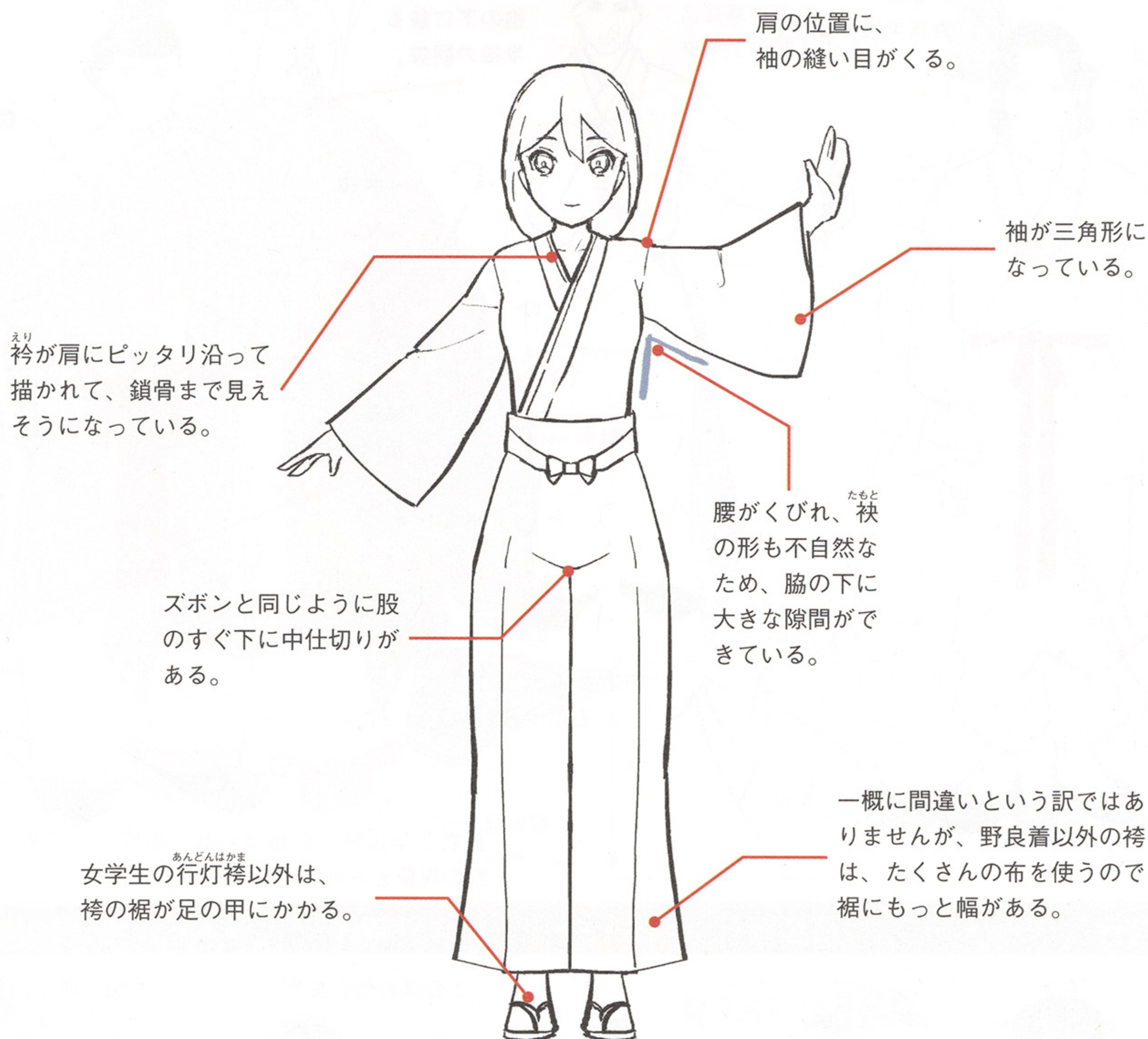
袖が三角形になっている。

衿（えり）が肩にピッタリ沿って描かれて、鎖骨まで見えそうになっている。

腰がくびれ、袂（たもと）の形も不自然なため、脇の下に大きな隙間ができている。

ズボンと同じように股のすぐ下に中仕切りがある。

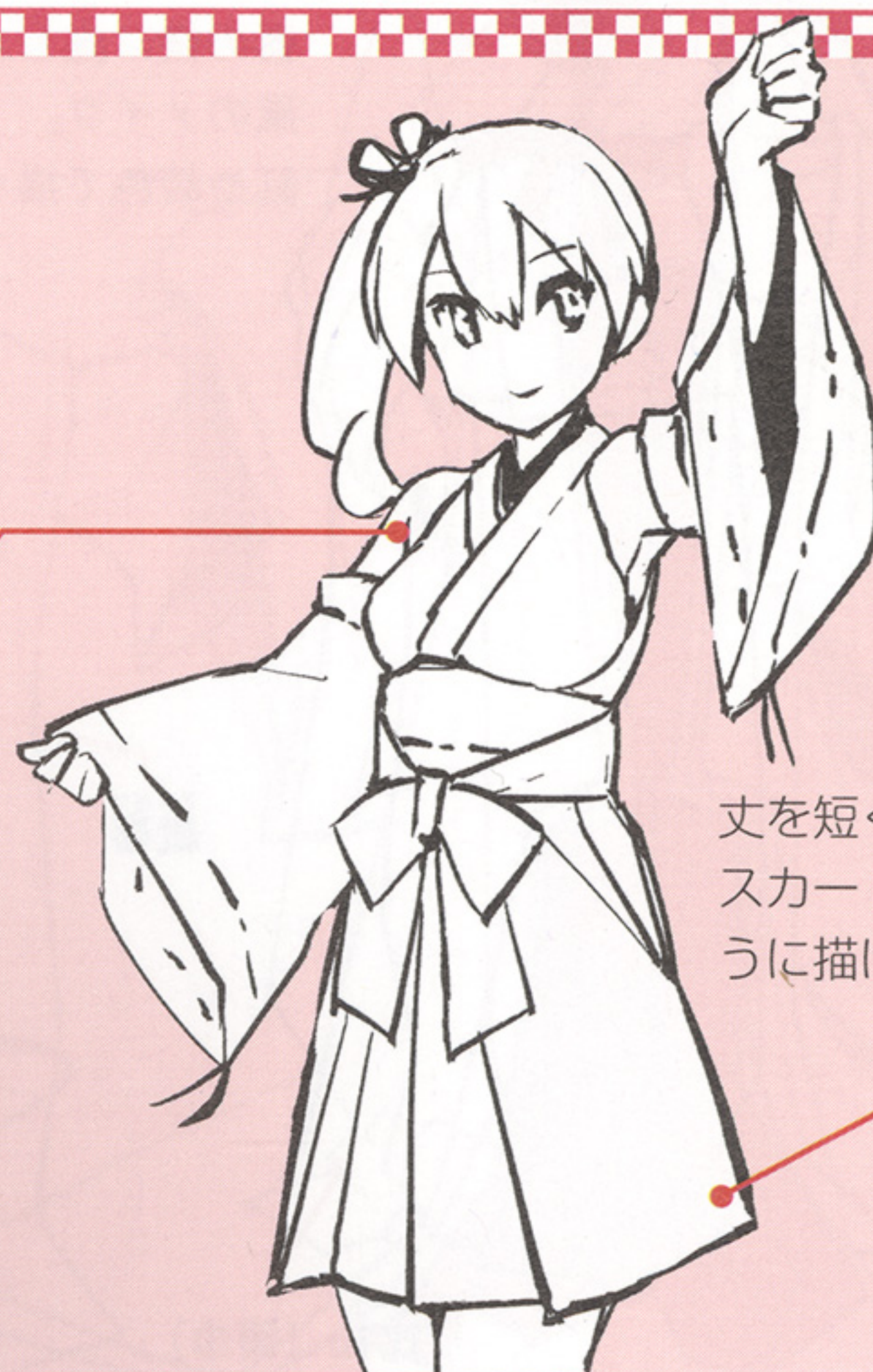
一概に間違いという訳ではありませんが、野良着以外の袴は、たくさんの布を使うので裾にもっと幅がある。

女学生の行灯袴（あんどんはかま）以外は、袴の裾が足の甲にかかる。

ONE POINT

改造着物が人気な理由？

アニメやゲームで見かける改造着物は、形状がほとんど洋服と同じうえ、おかしくなりやすい部分を大胆に改造しているため、3DCGになっても上述のような違和感が少ないです。
煩雑な処理や、作画の手間をさほどかけずに、和服の魅力も描けるのが人気の秘密でしょうか。

袖を別パーツにすることで、腕の動きに制限がなくなる。
思い切り振り上げても脇の下が不自然にならない。

丈を短くすれば、スカートと同じように描ける。

03 和装の移り変わり

和装は現在の「着物」に至るまで、動きやすさやオシャレなどを追求し、さまざまな変化をしてきました。一例ではありますが、和装の移り変わりを見ていきましょう。

衣（きぬ）
日本の衣料は、狩猟・採集に適した左前（左衽）だった。

美豆良（みずら）
貴族男性の髪型。

褌（はかま）

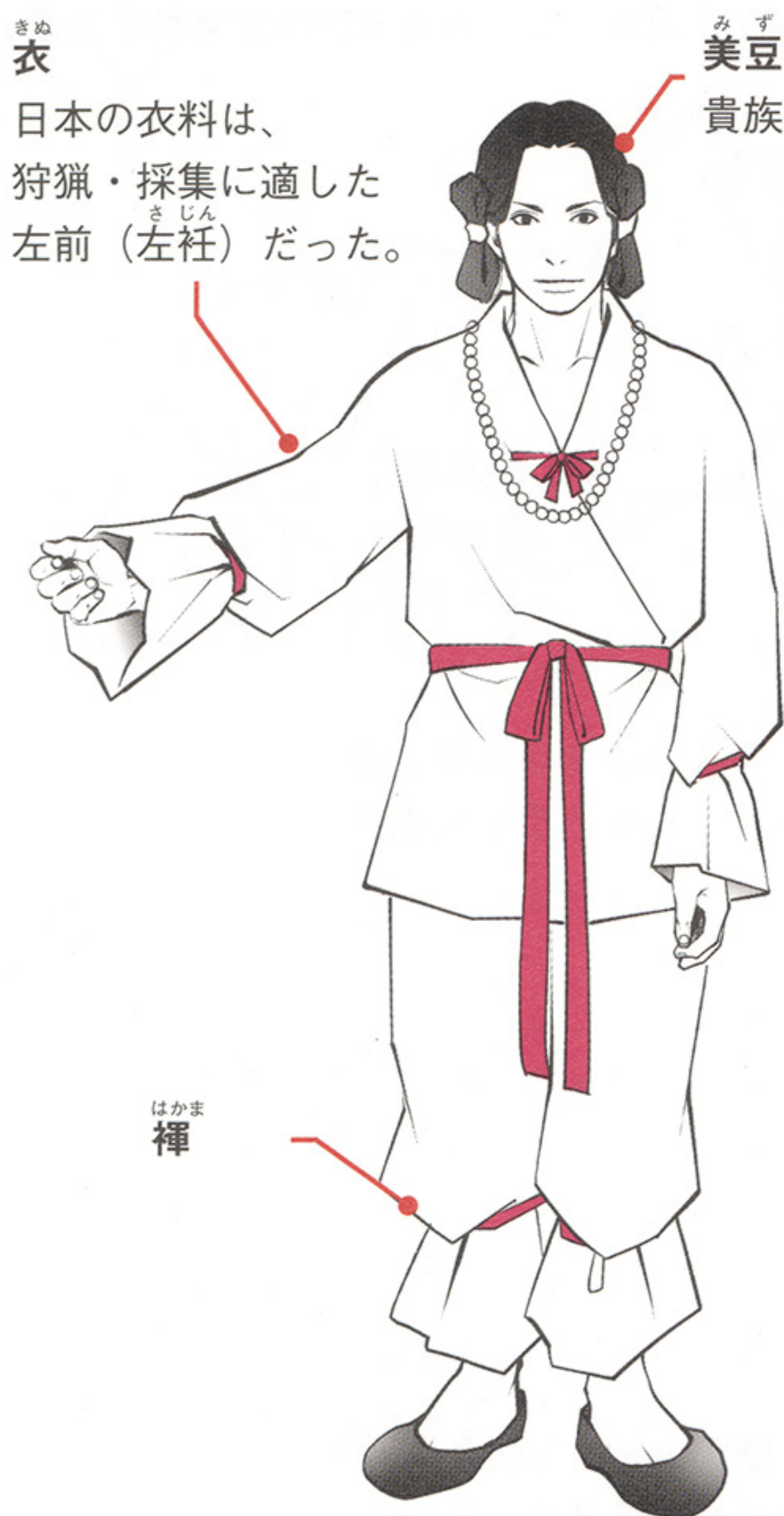
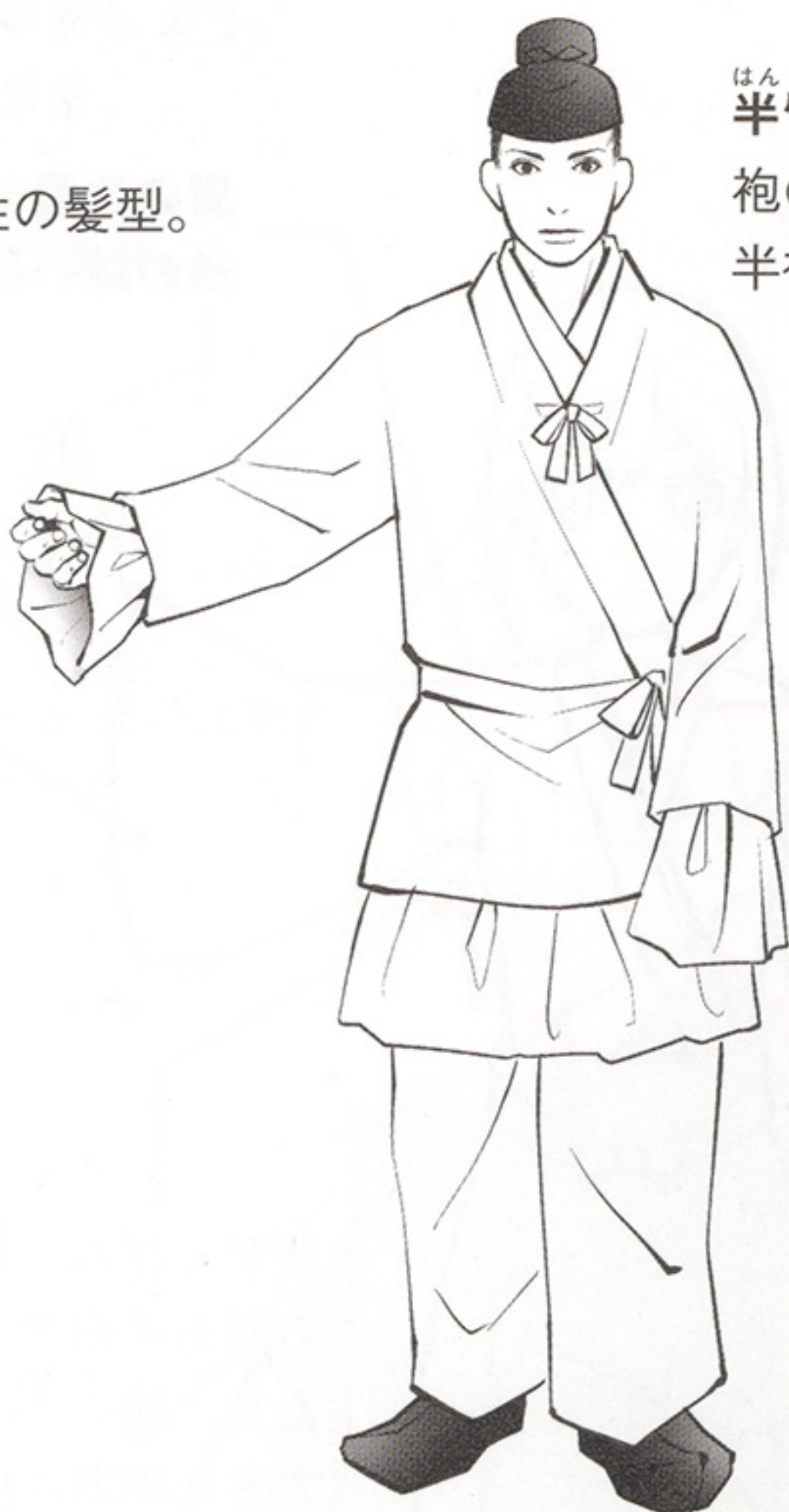
半臂（はんぴ）
袍の下に着る半袖の胴着。

闕腋袍（けってきのほう）

木笏（もくしゃく）

絛帯（くみのおび）
房のある帯。

だんだんと、右前に移行していった。

烏皮履（くりかわのくつ）

養老3年以降、衣類は右前（右衽）と定められ、左前は蛮族の風習とされる。官服は唐風に。

古墳時代 ▶▶▶ 飛鳥時代 ▶▶▶ 奈良時代 ▶▶▶ 平安時代 前期

日陰蔓（ひかげのかずら）（平安以降に神事の冠の装飾にも用いる草）を頭に巻いている。

横

花子（かし）
唇の横に施した唐風のメイク。紅や碧色で描く。

双髻（そうけい）

この頃の他の髪型
高髻（こうけい）　頭上二髻（ずじょうにけい）

花鈿・花子の色々

花鈿（かでん）
額に描く唐風のメイク。

背子（からぎぬ）

紕帯（そえおび）

翳（さしは）

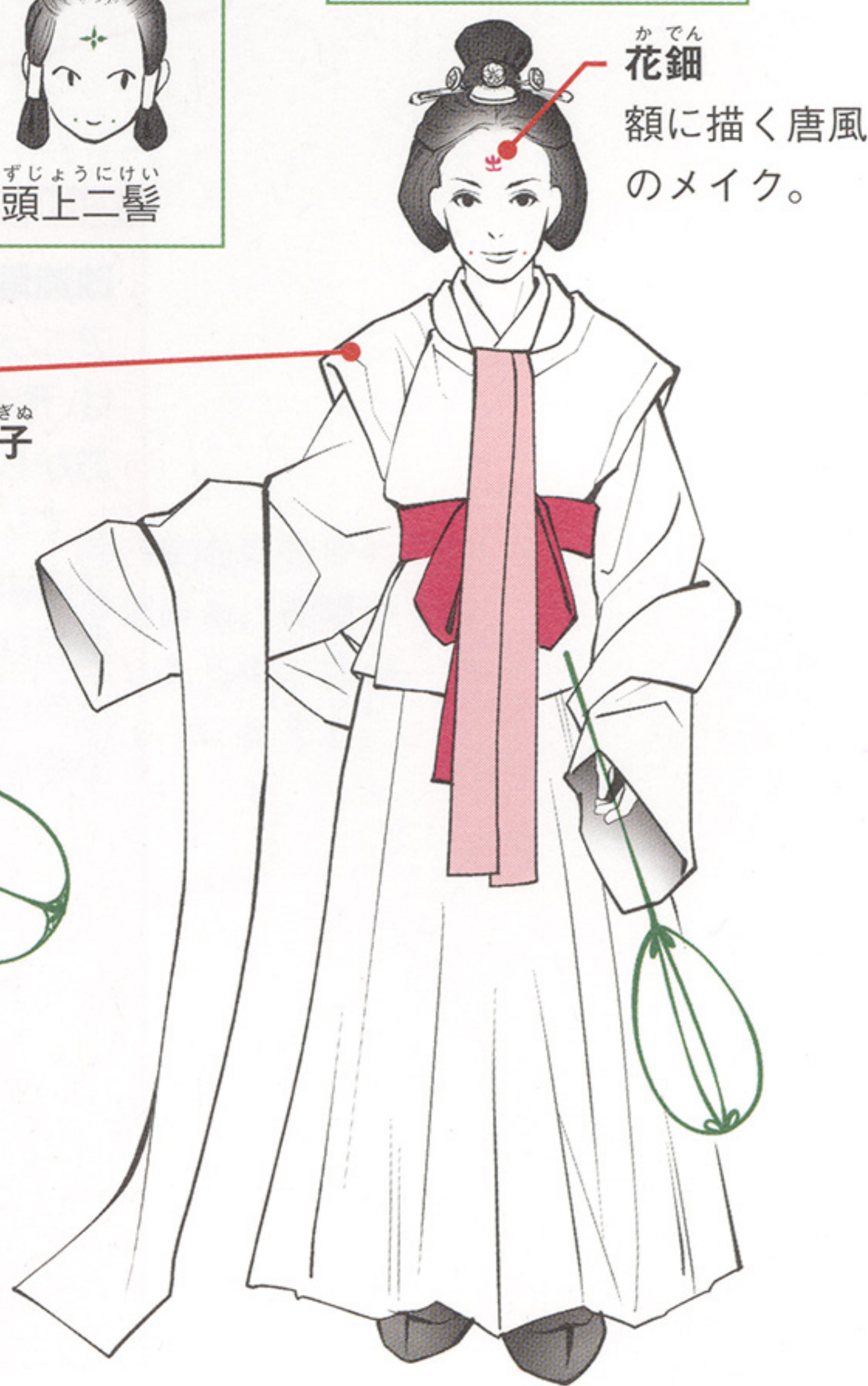
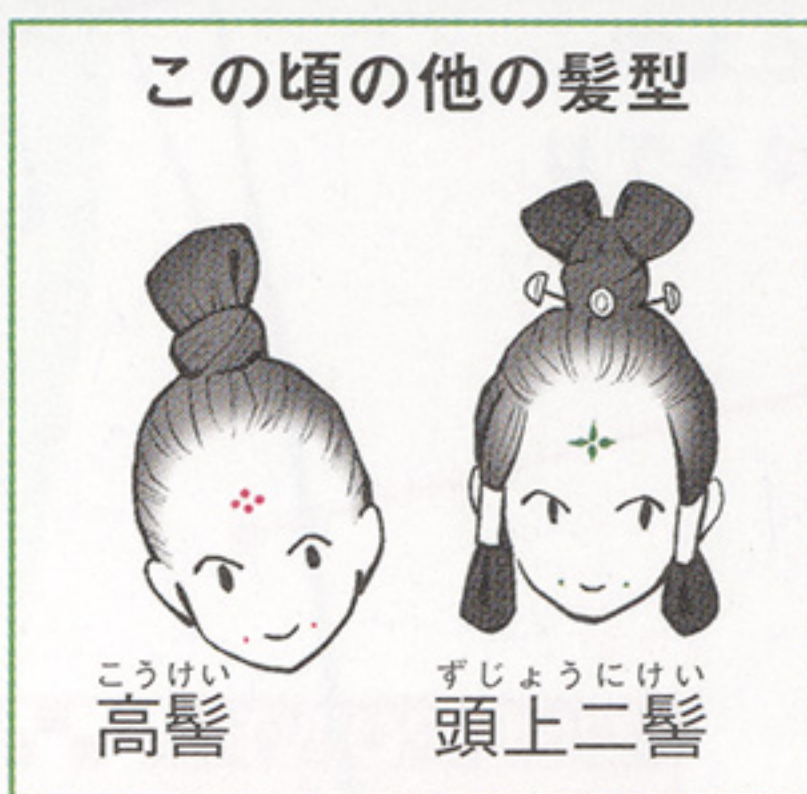
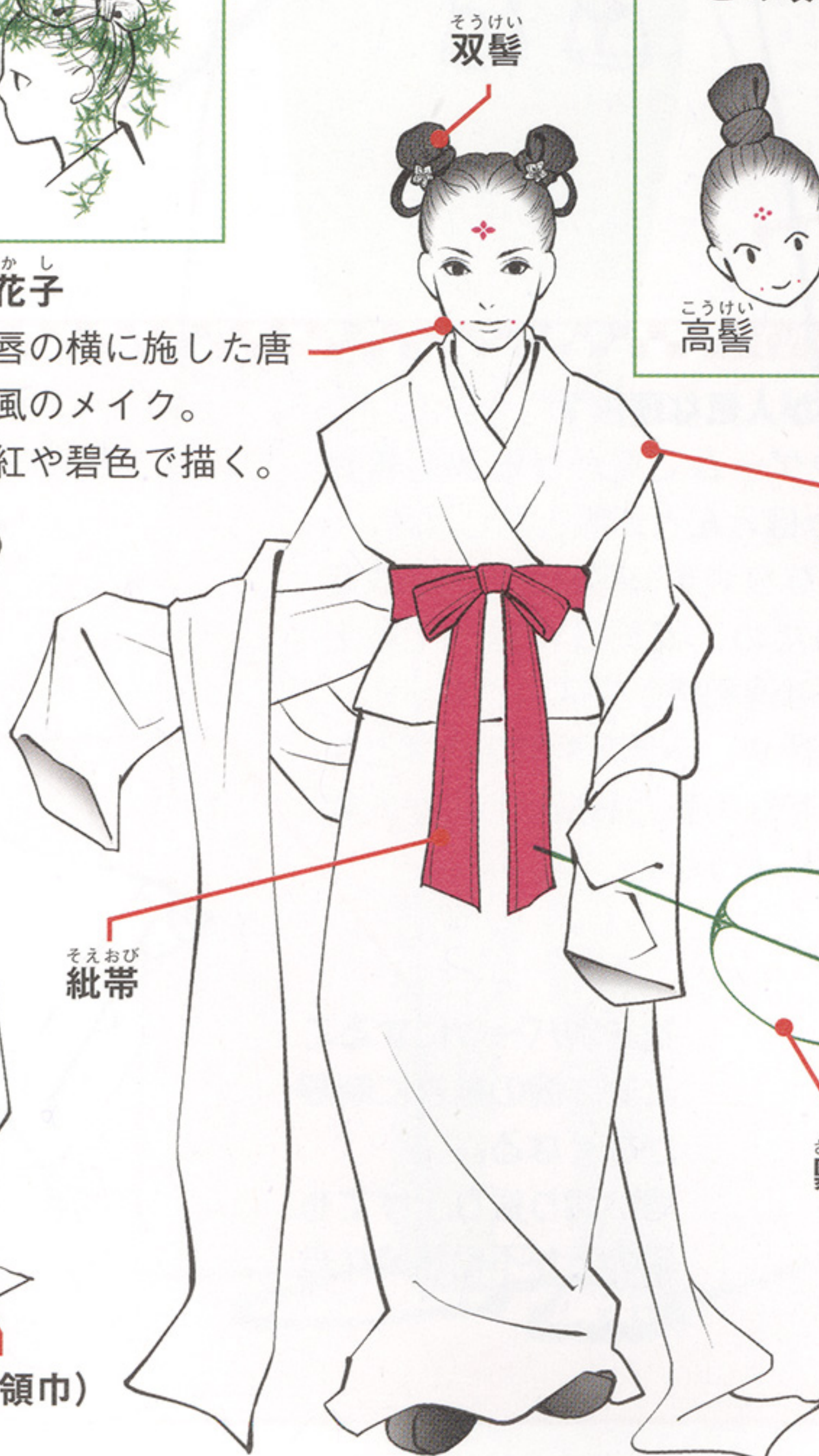
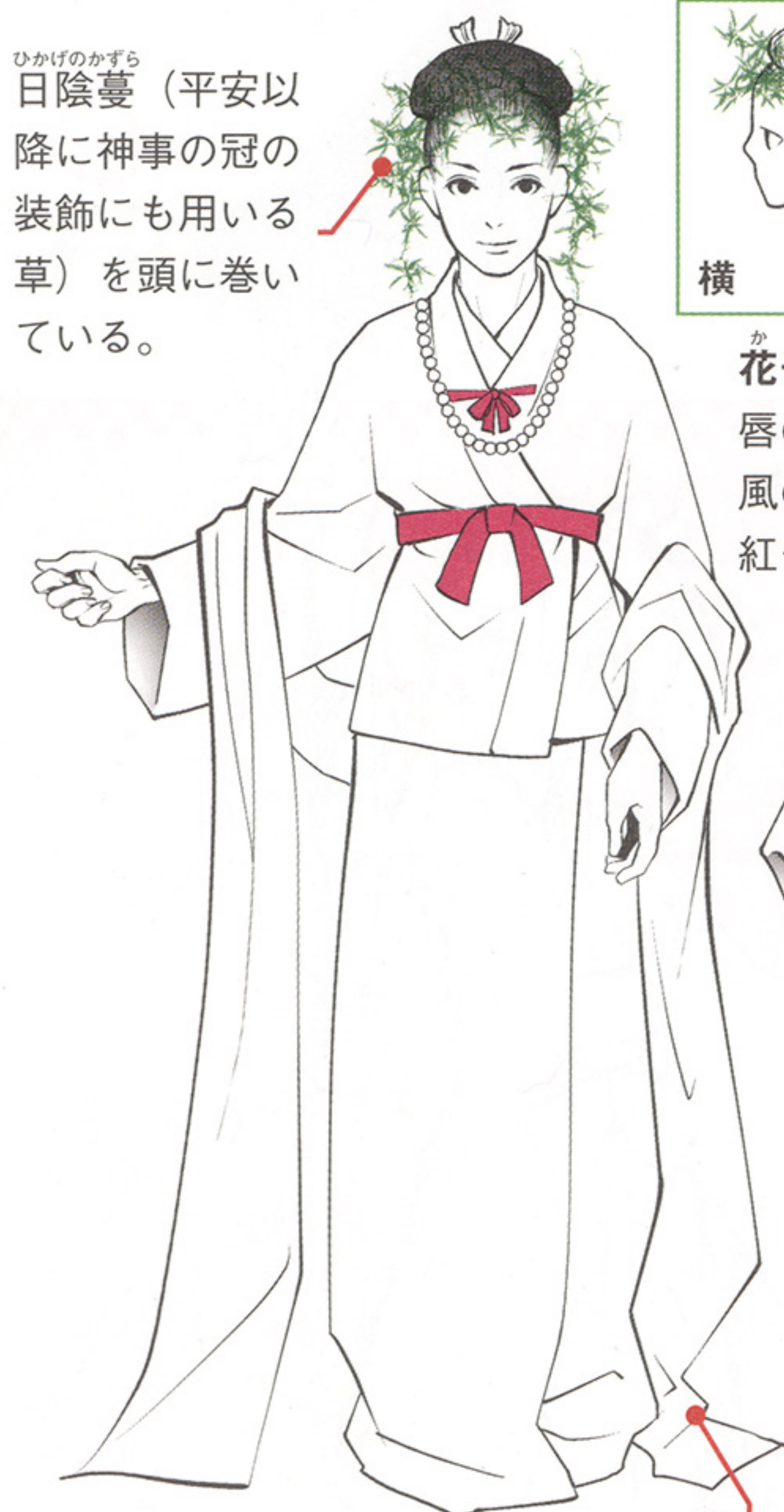
比礼（領巾）（ひれ）

● 束帯（そくたい）（参照 60 ページ）

（参照 60 ページ）

これは文官の束帯姿。

冠（かんむり）
平緒（ひらお）
襴（らん）
表袴（うえのはかま）
烏皮履（うひり）
後世には浅沓（あさぐつ）。

● 直衣（のうし）

束帯をカジュアル化した公家の私服。
やがて公服になる。

烏帽子（えぼし）

私服なので、生地・色・文様に規定がなく、烏帽子をかぶる。

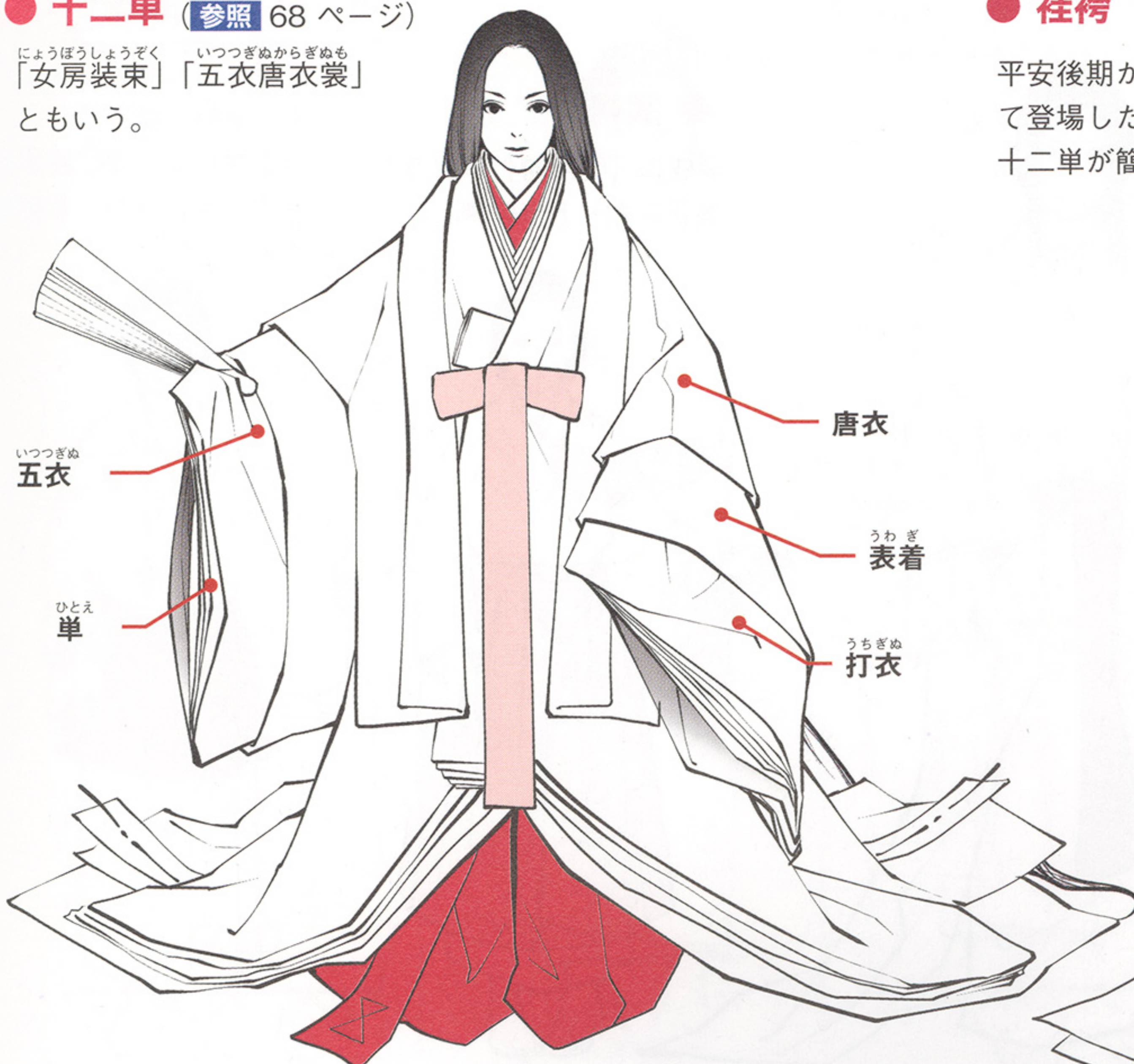
指貫（さしぬき）

平安時代　中期　▶▶▶　後期　▶▶▶

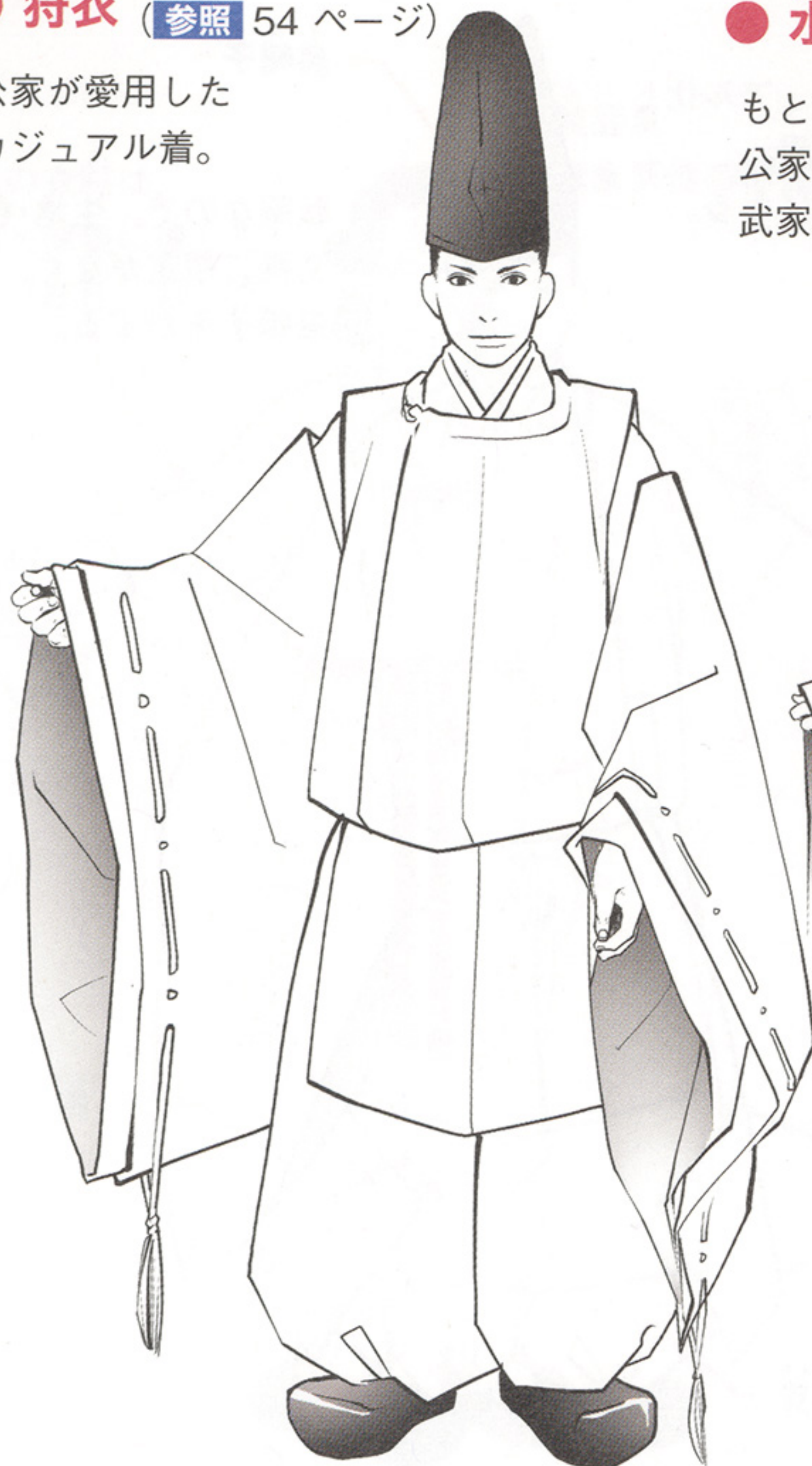
● 十二単（じゅうにひとえ）（参照 68 ページ）

「女房装束（にょうぼうしょうぞく）」「五衣唐衣裳（いつつぎぬからぎぬも）」ともいう。

唐衣
表着（うわぎ）
打衣（うちぎぬ）
五衣（いつつぎぬ）
単（ひとえ）

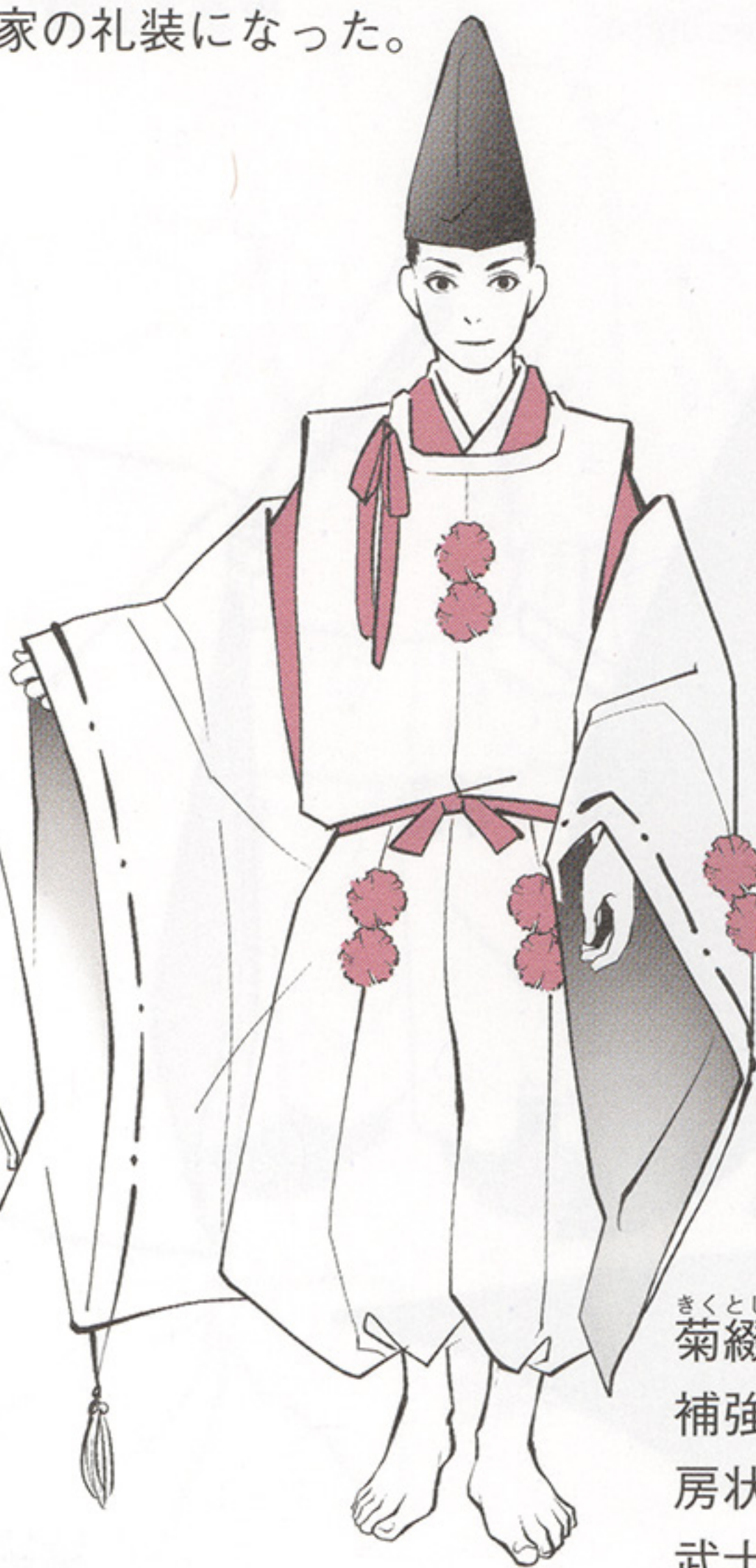
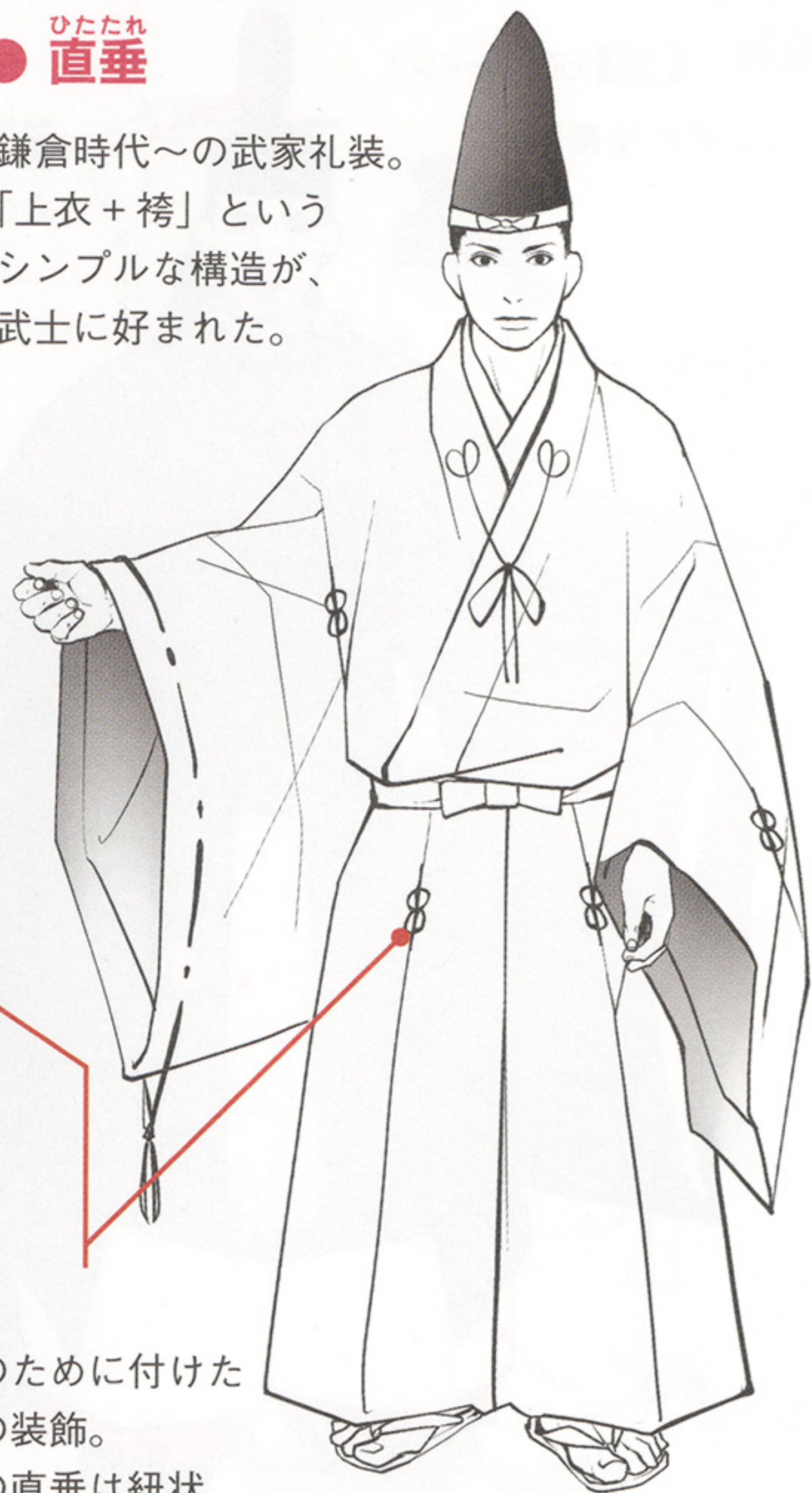
● 袿袴（けいこ）

平安後期から鎌倉時代にかけて登場した「袿袴」。
十二単が簡略化されたもの。

● 狩衣（かりぎぬ）（参照 54 ページ）

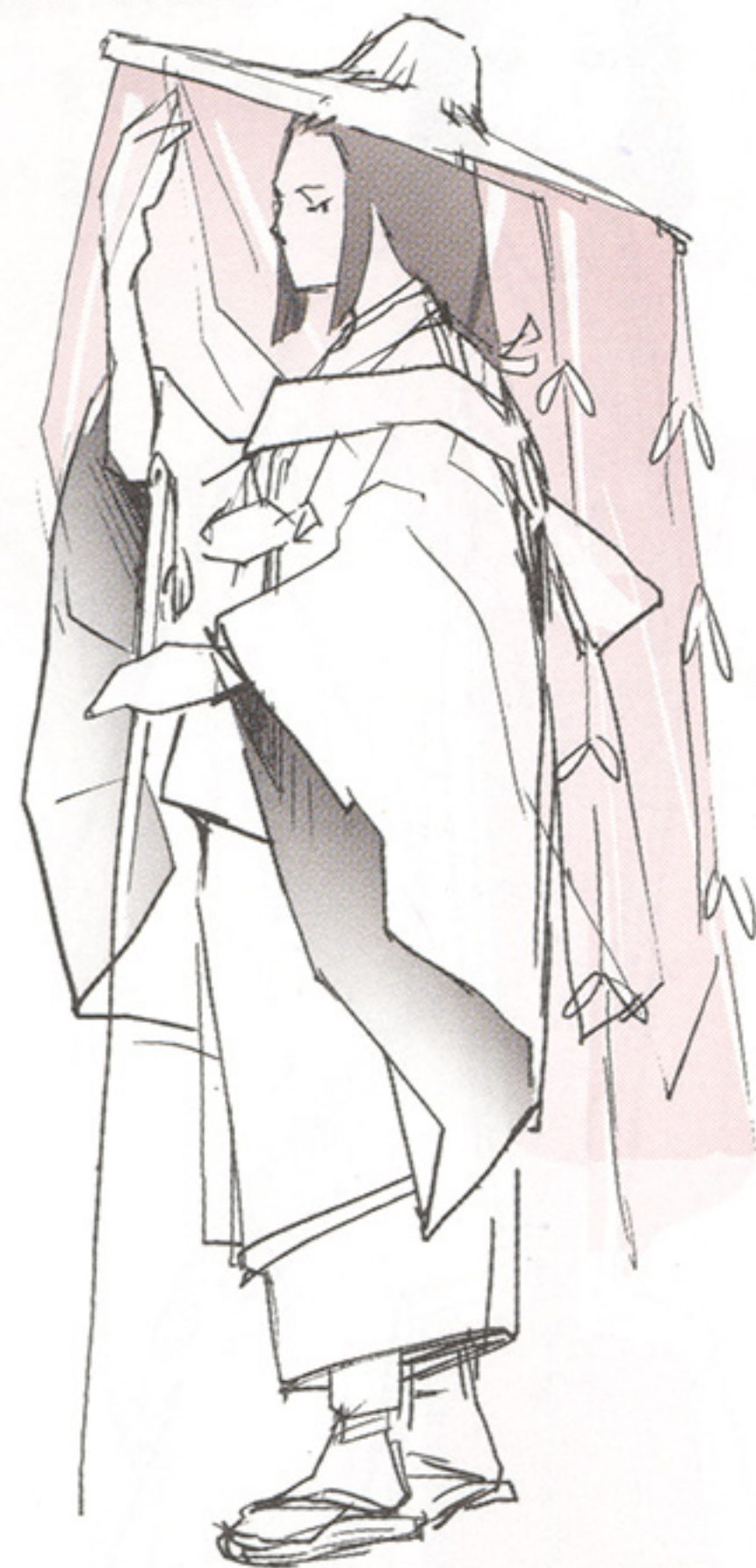
公家が愛用した
カジュアル着。

● 水干（すいかん）（参照 58 ページ）

もとは労働着だったものが、
公家のカジュアル着や
武家の礼装になった。

● 直垂（ひたたれ）

鎌倉時代〜の武家礼装。
「上衣＋袴」という
シンプルな構造が、
武士に好まれた。

菊綴（きくとじ）
補強のために付けた
房状の装飾。
武士の直垂は紐状。

鎌倉時代 ▶▶▶ 室町時代 ▶▶▶ 安土桃山 ▶▶▶

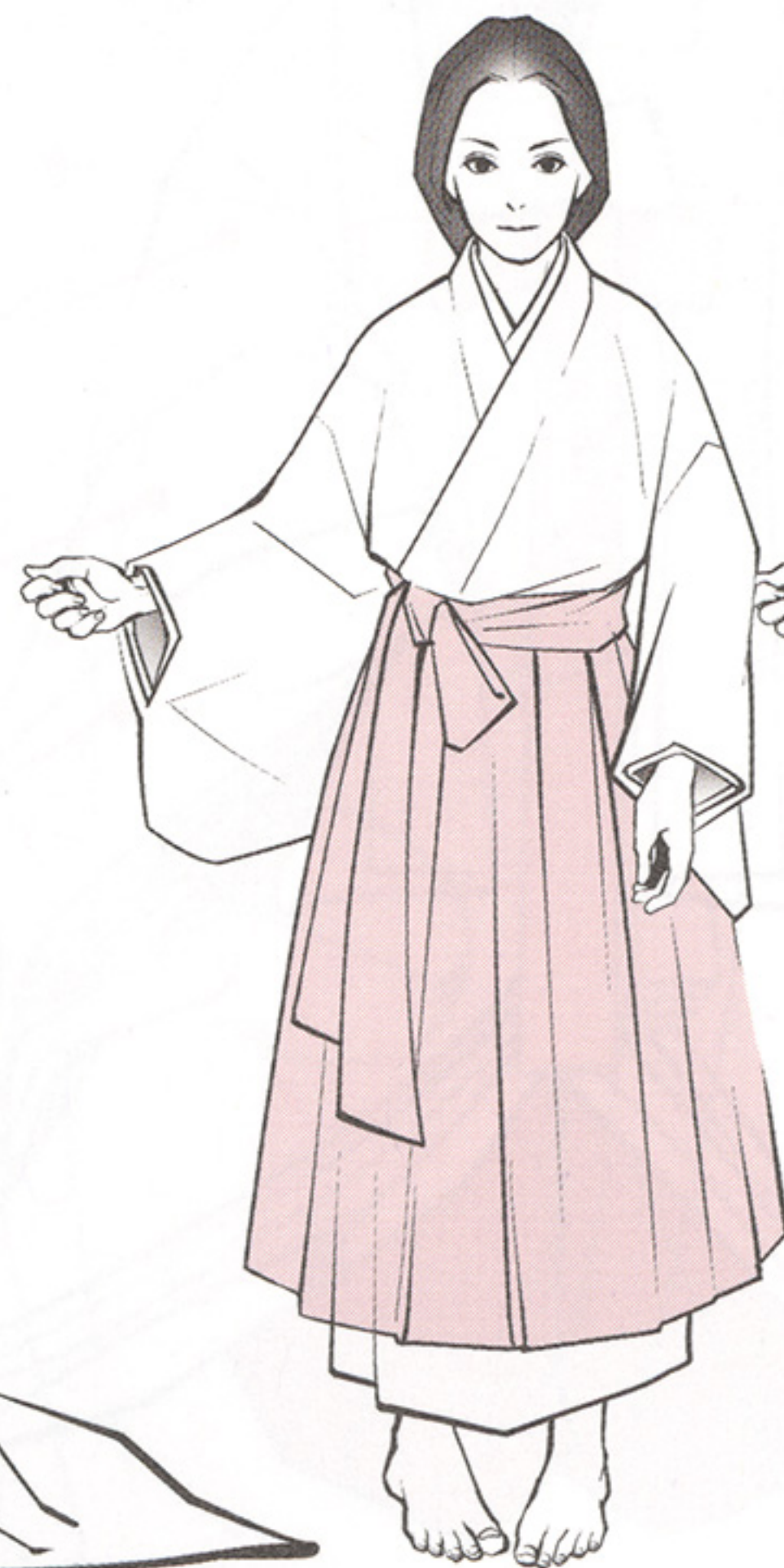
平安時代までは、下着として着られていた袖の小さい着物が、
上衣（じょうい）として着られるようになっていく。

● 壷装束（つぼ）

公家や上流の武家婦人のもの
であった旅装の「壷装束」は
まだ広袖の袿（うちき）であった。

● 打掛姿

袖口が小さい。

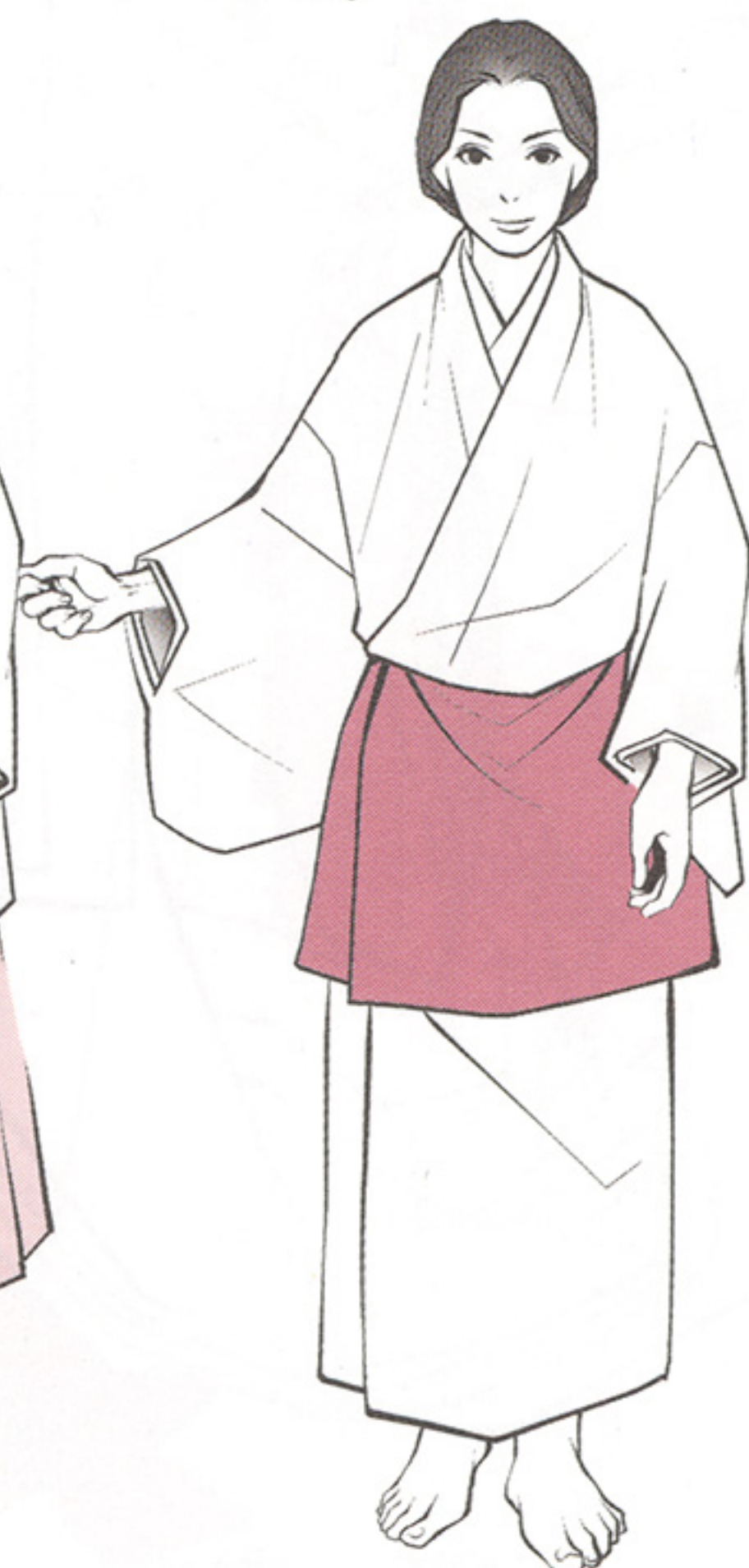
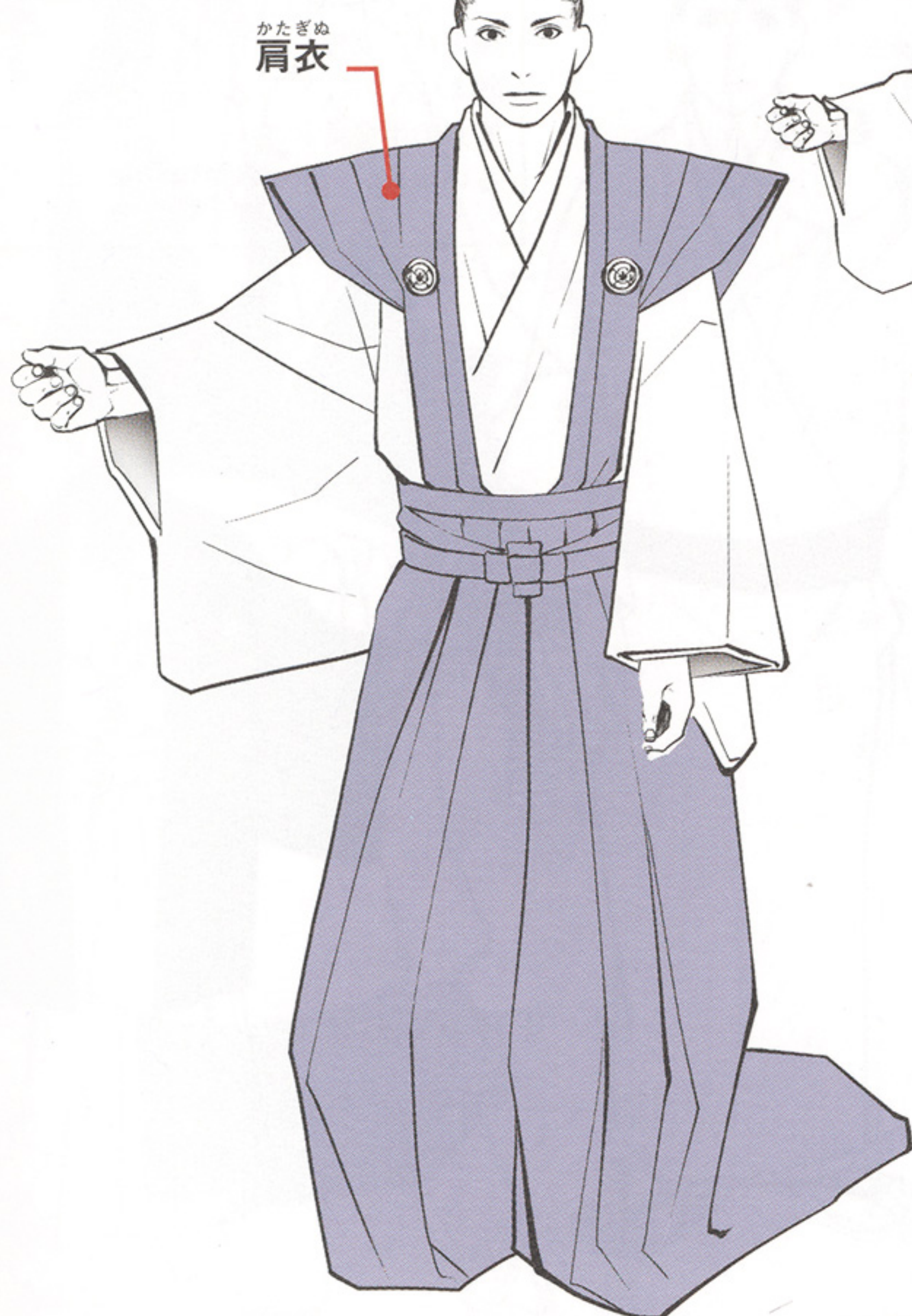
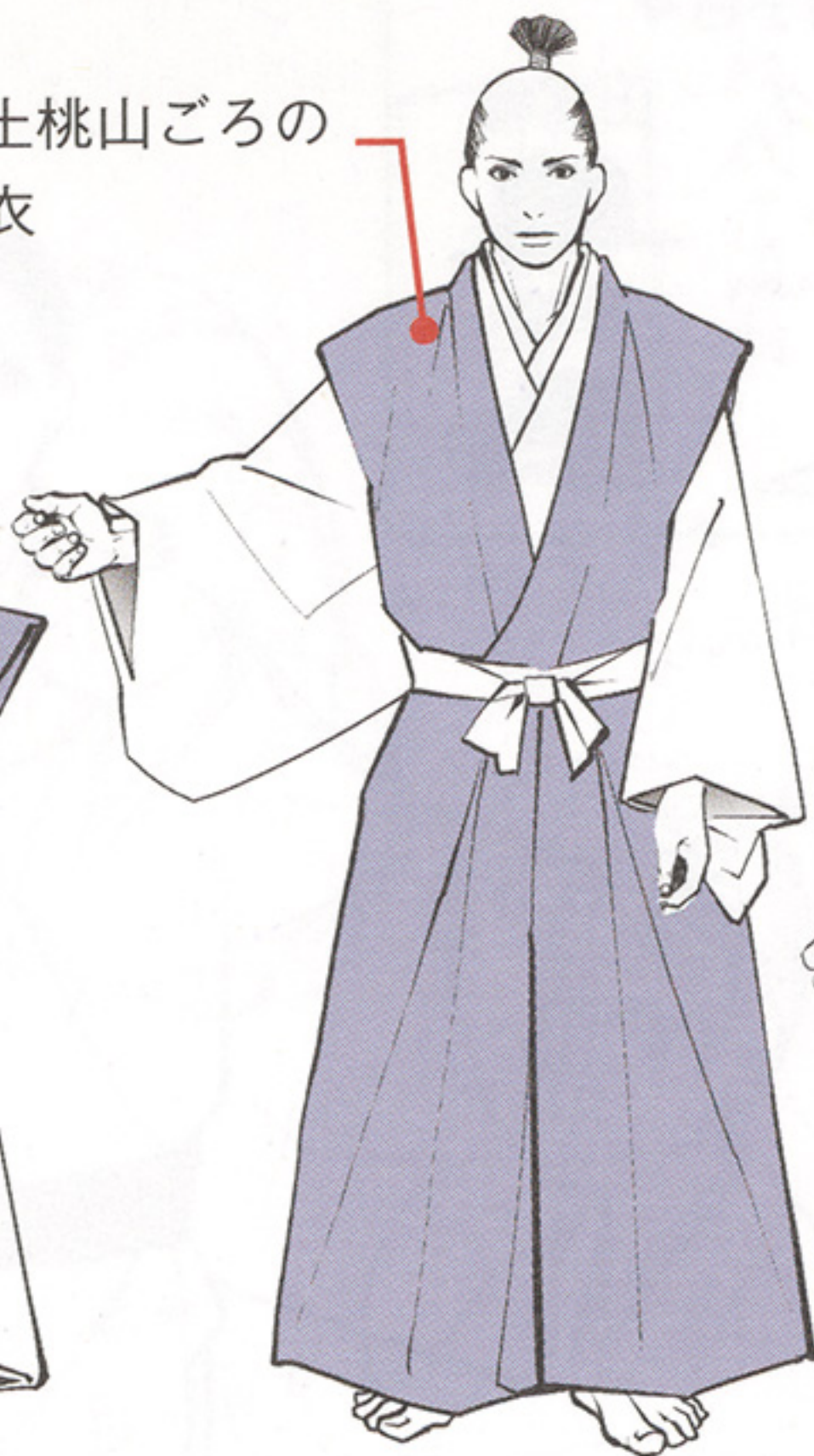
● 裳袴（もばかま）

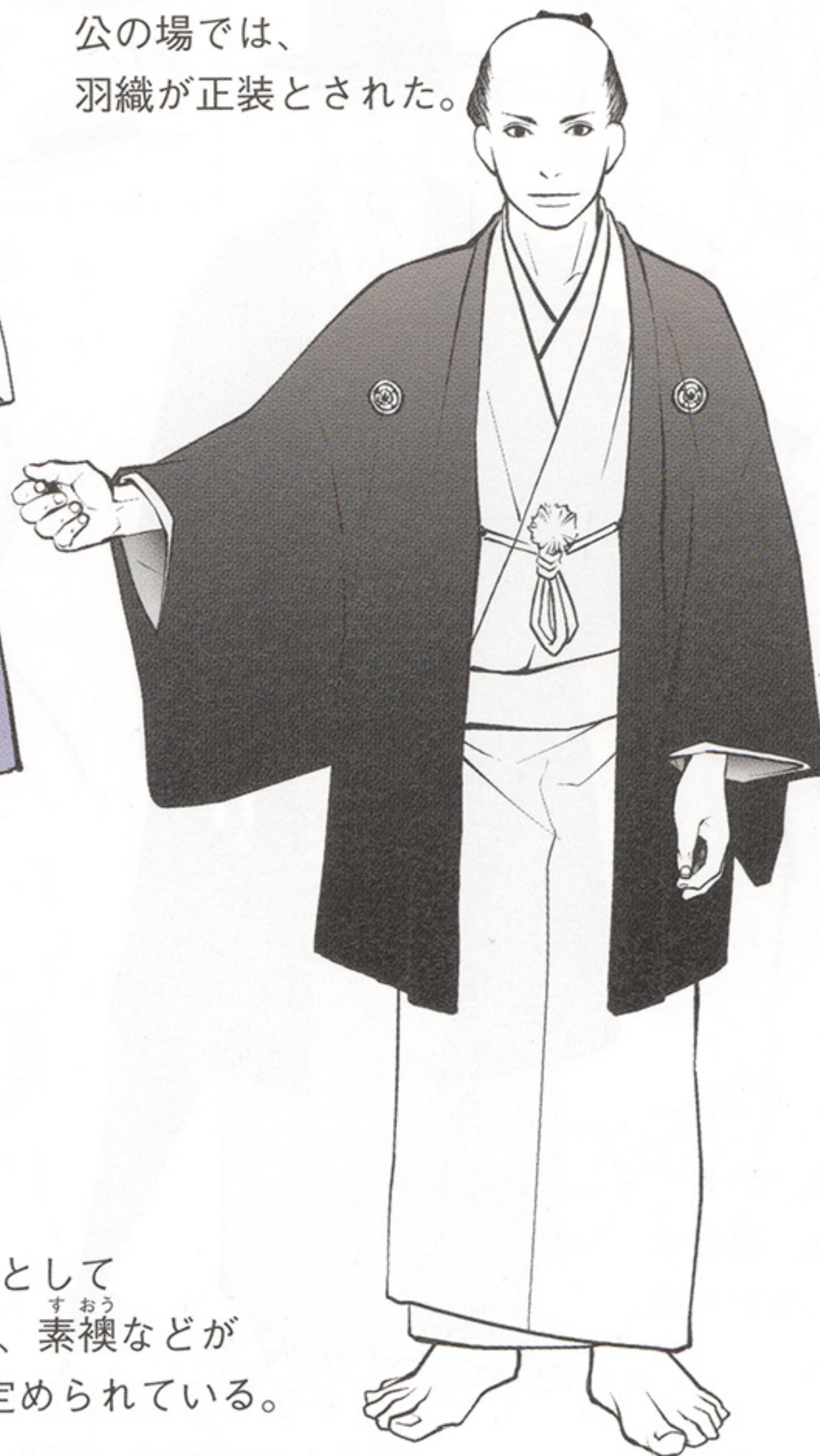
現在の「行燈袴」のような
巻きスカート型の袠。

● かけ湯巻

庶民はより簡略化して、
もっと短い裳や、
布を巻いて、腰に挟むだ
けの「かけ湯巻」も登場
する。

● 裃（かみしも）

上級武家の
普通礼装。

肩衣（かたぎぬ）

安土桃山ごろの
肩衣

● 町人の正装

町家では着流しが通常で、
公の場では、
羽織が正装とされた。

男子の礼服は厳然として
束帯（そくたい）、直垂、大紋（だいもん）、素襖（すおう）などが
階級・場によって定められている。

江戸時代　前期 ▶▶▶　中期 ▶▶▶　後期 ▶▶▶

慶長小袖

衿を
折って着る。

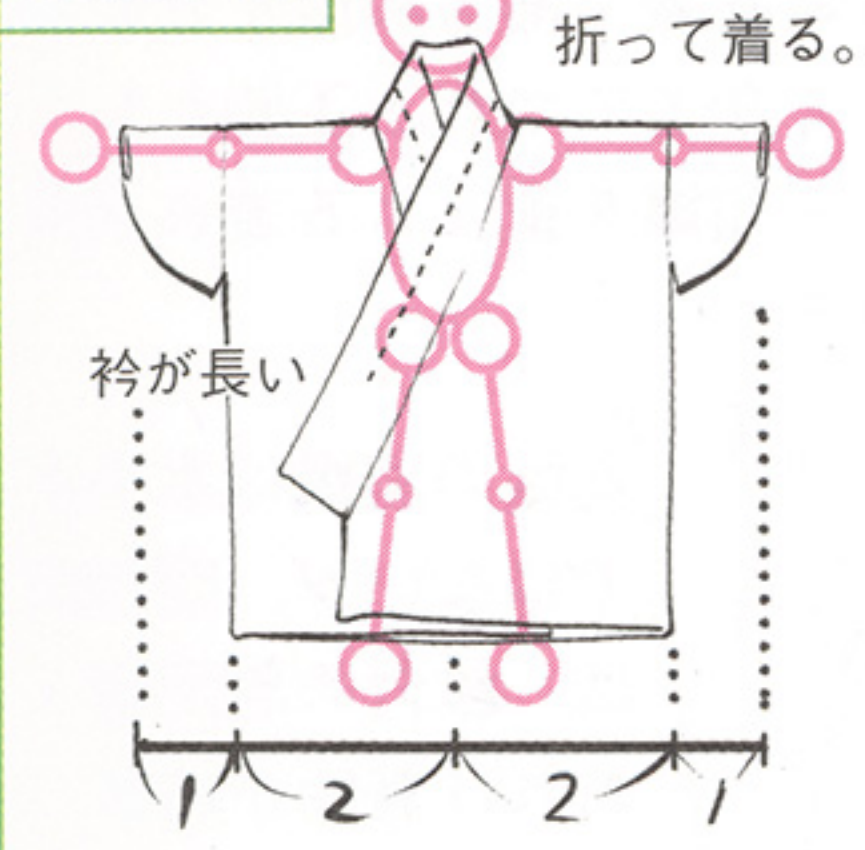
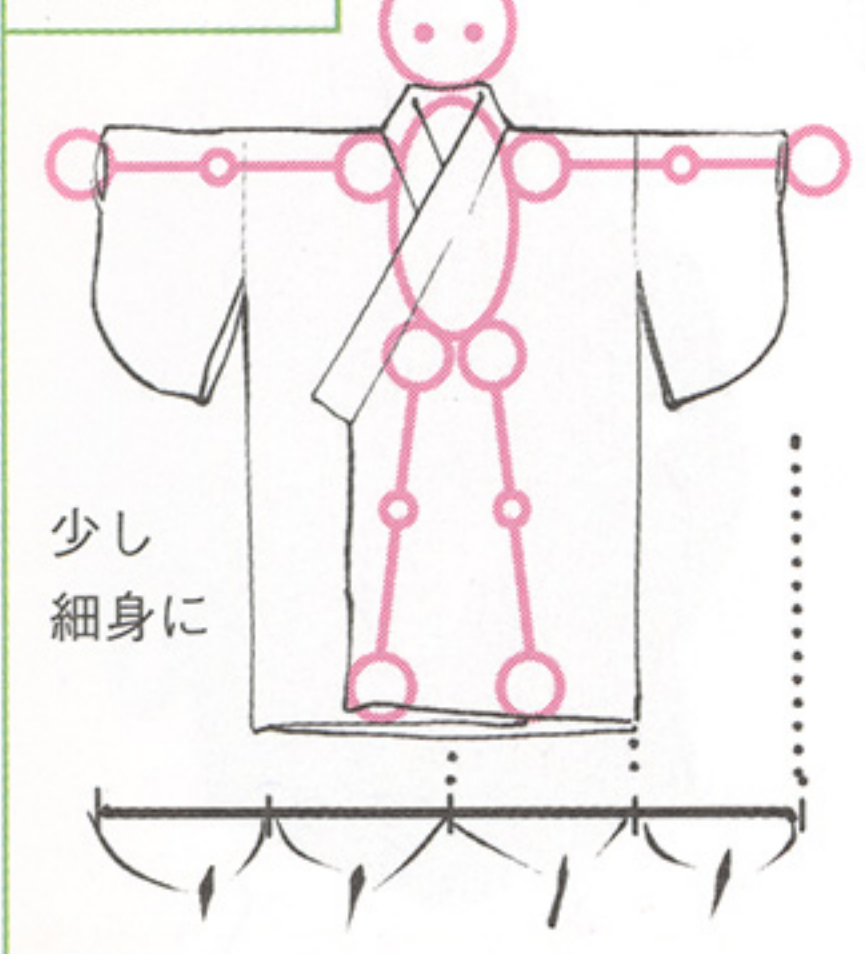
衿が長い

2　2

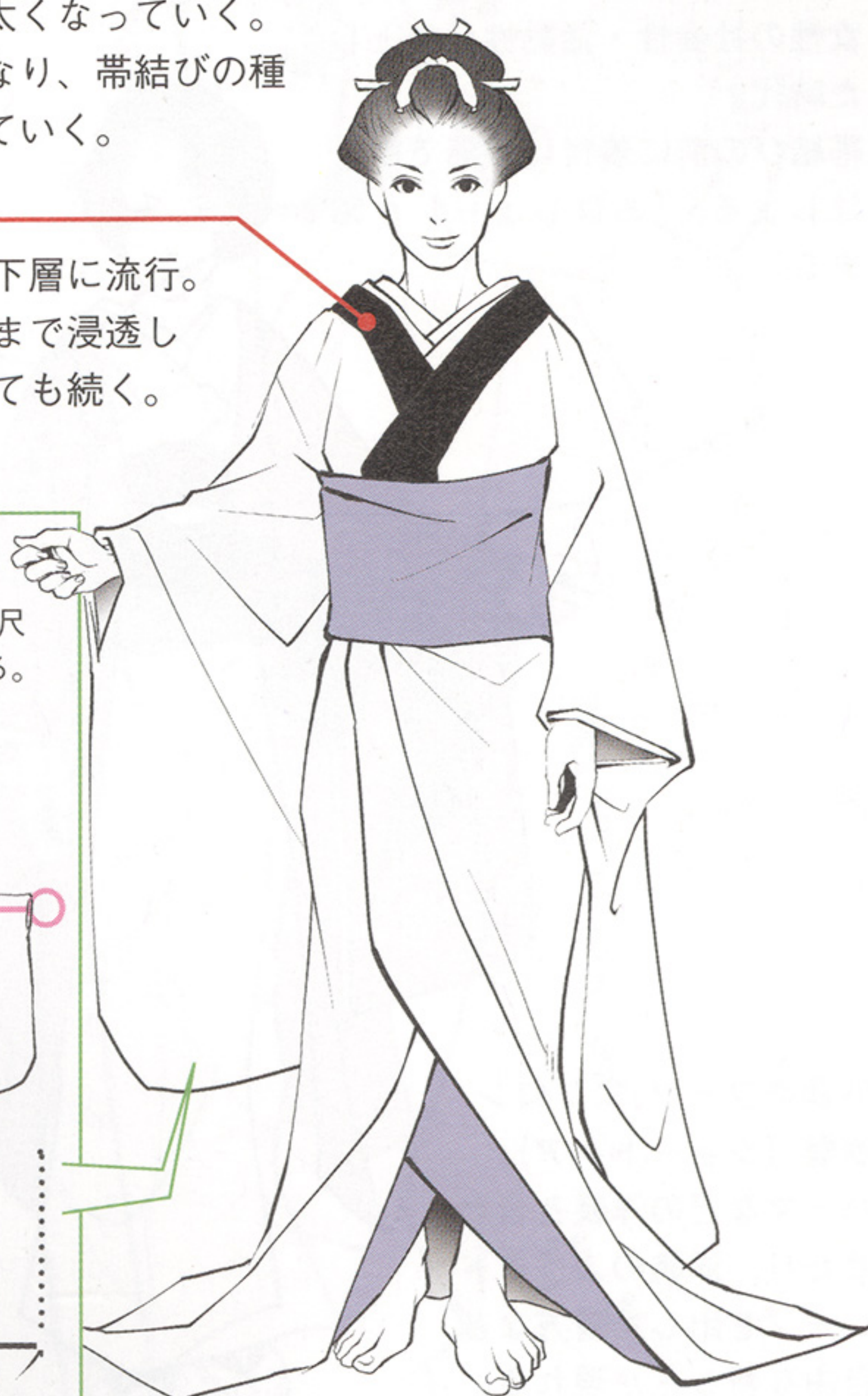
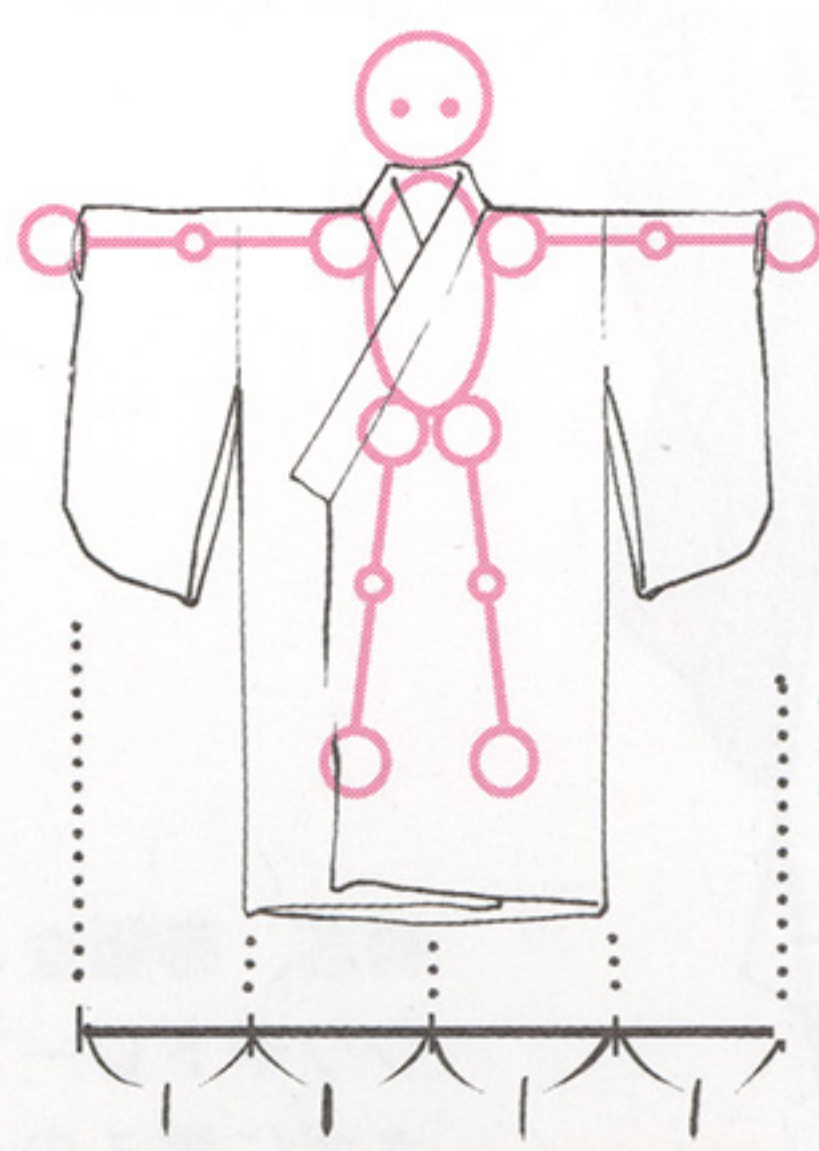
変遷

寛文小袖

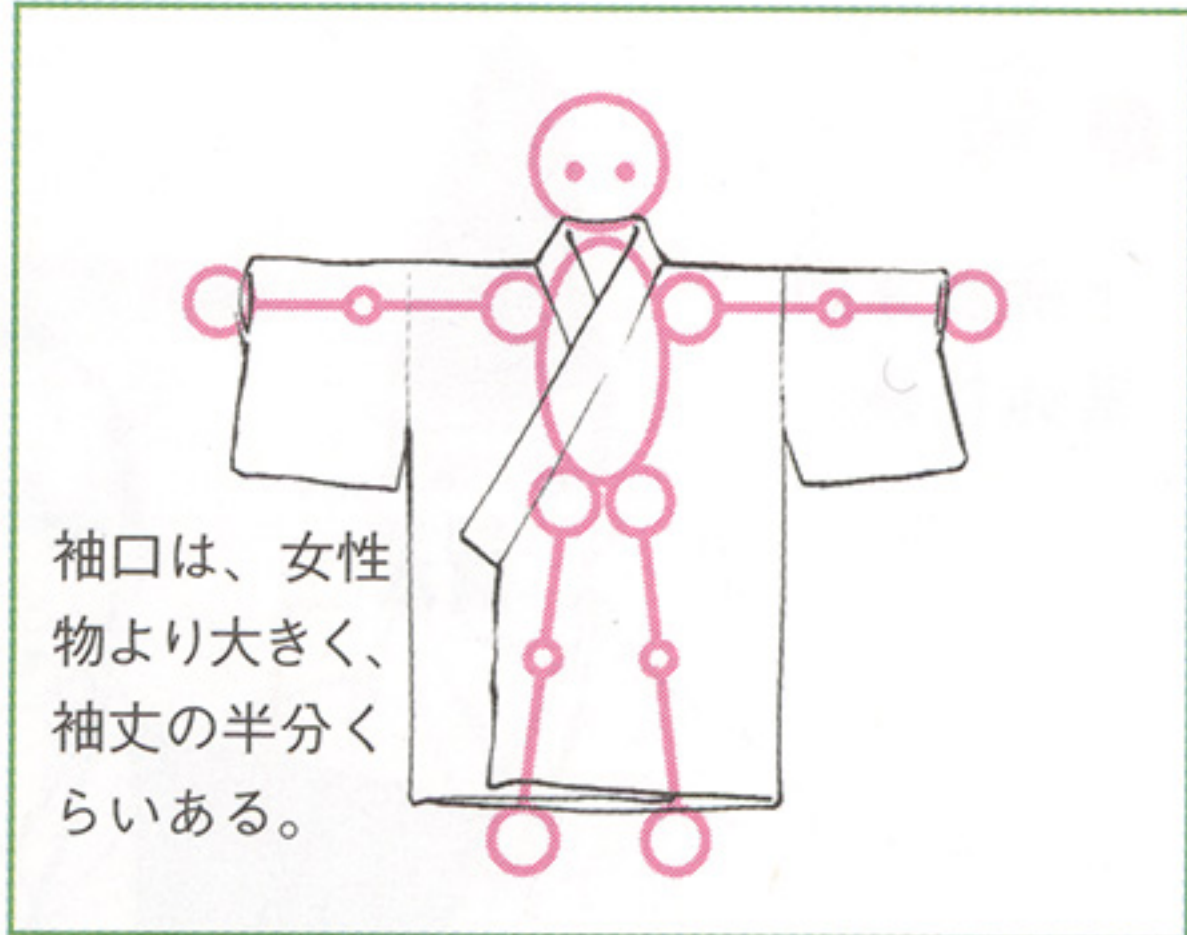
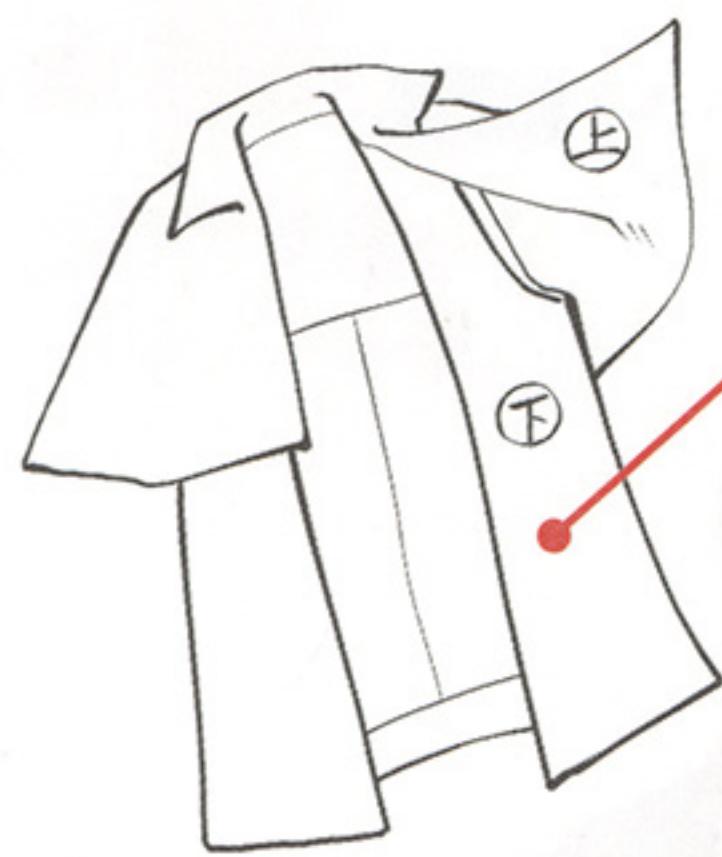
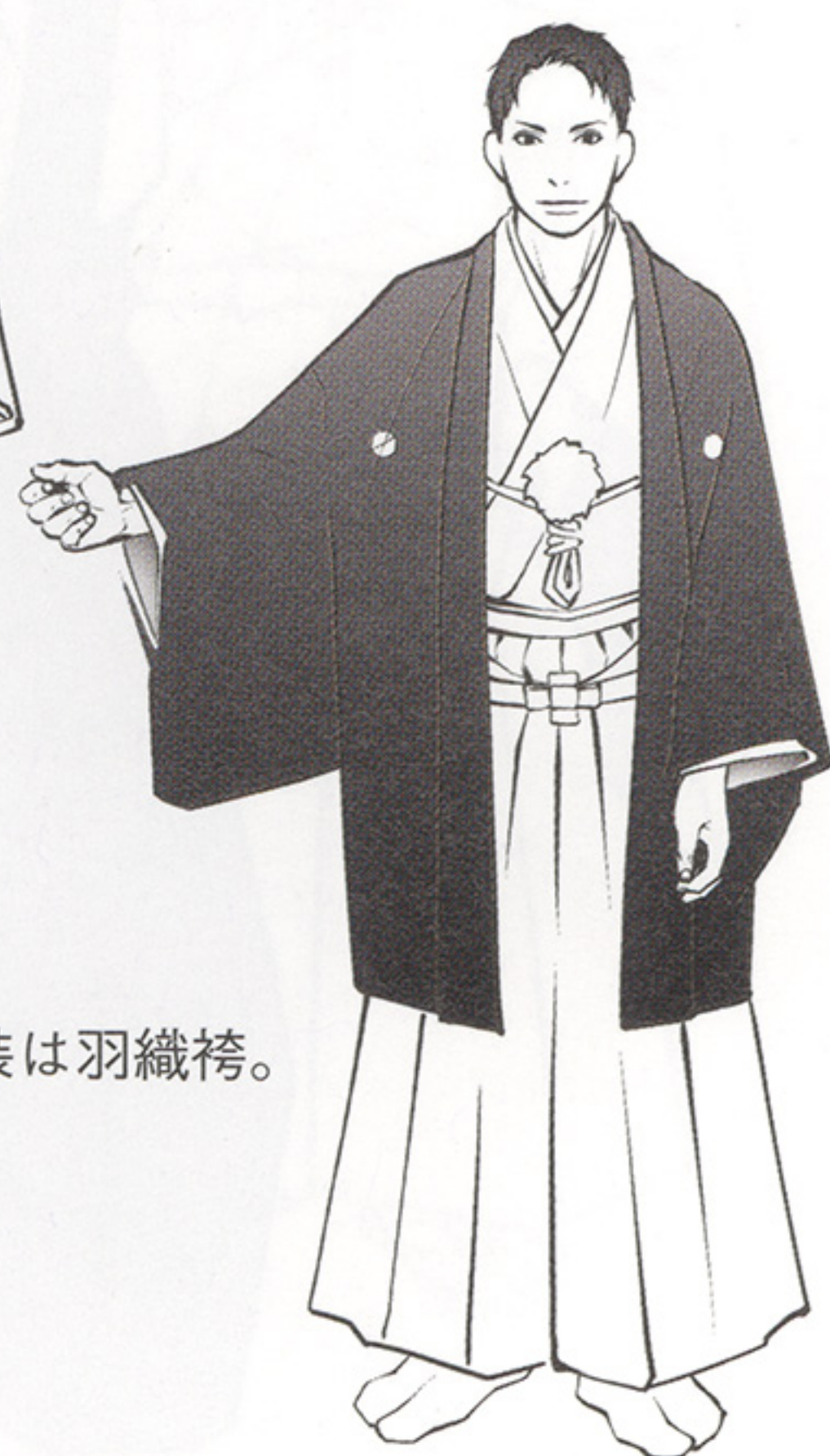
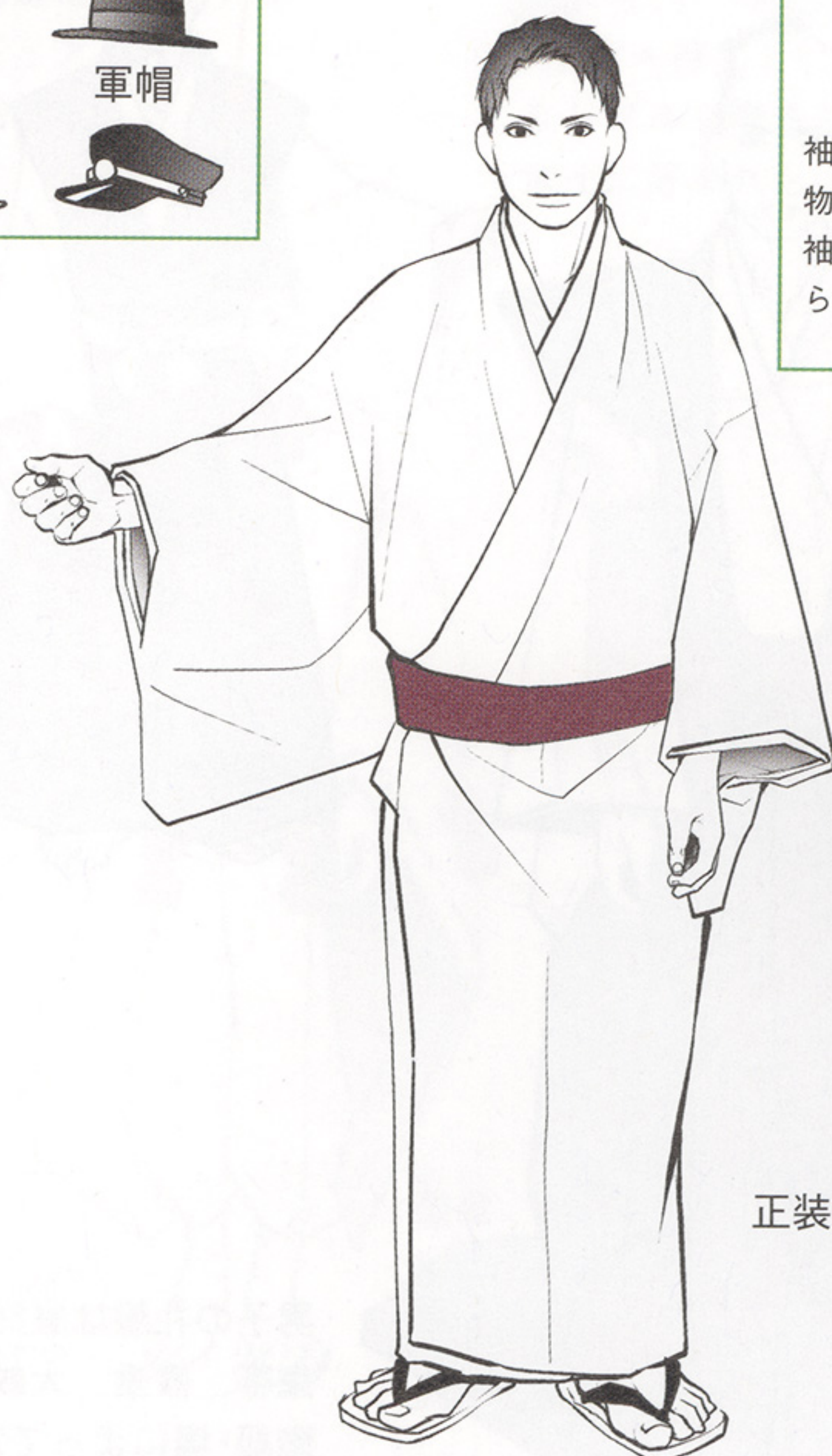
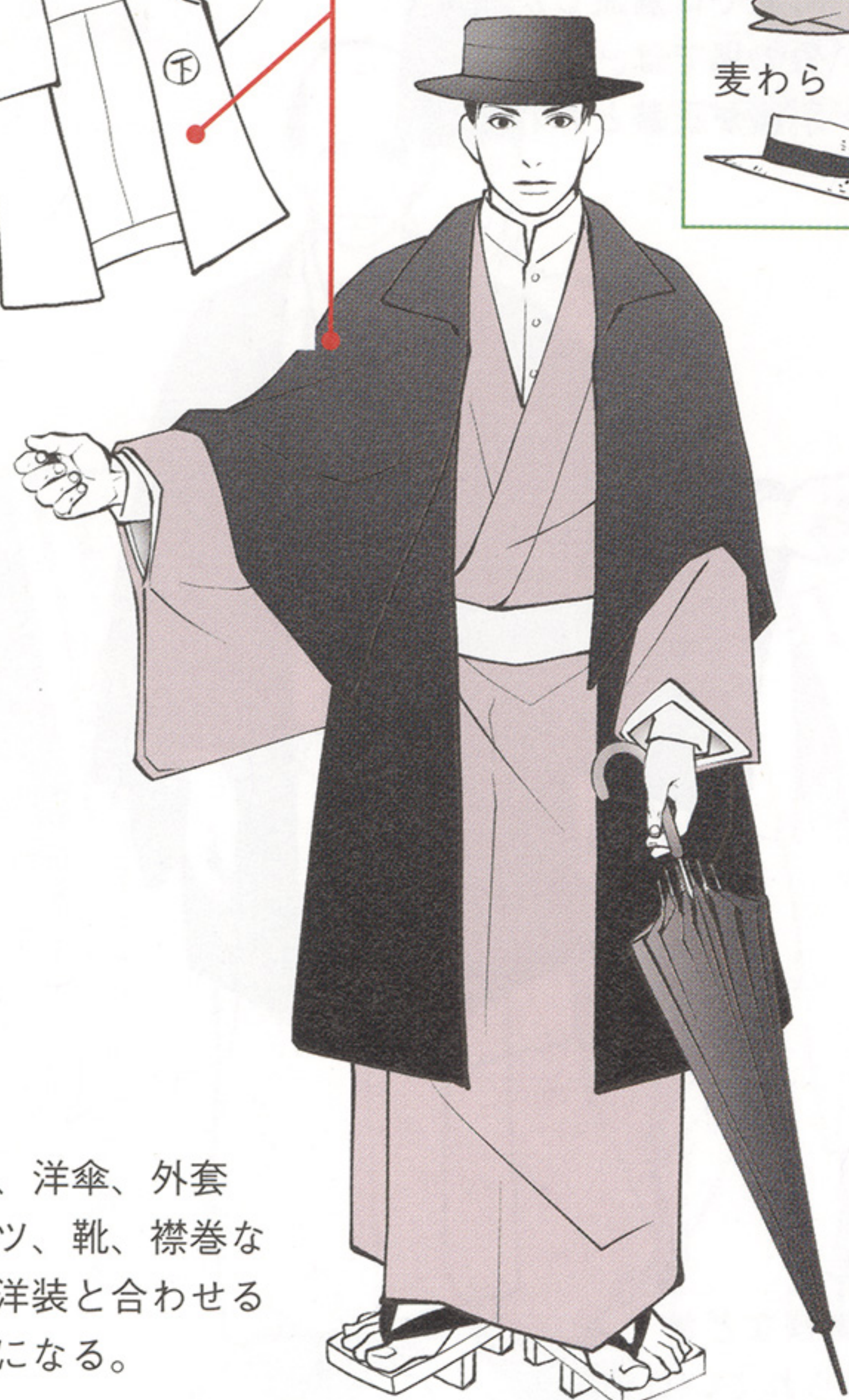
元禄小袖

少し
細身に

身丈が大きくなり、帯も幅が太くなっていく。
女性が帯を後ろで結ぶようになり、帯結びの種類・技工が多種多様に変化していく。

黒繻子（くろじゅす）の掛衿（かけえり）。
文化文政ごろ～下層に流行。
やがて上流層にまで浸透し
明治時代になっても続く。

袖も長大化。
江戸末期には振袖が、三尺（約90cm）まで大きくなる。
既婚者は留袖にするが、
これもまた長大化した。

トンビコート
ベスト状の袖なしの上に、マントがついているコート。

帽子色々
ハンチング　山高帽
麦わら　軍帽

袖口は、女性物より大きく、袖丈の半分くらいある。

帽子、洋傘、外套シャツ、靴、襟巻などの洋装と合わせるようになる。

正装は羽織袴。

着るものの構造は現代とほぼ変わりない。

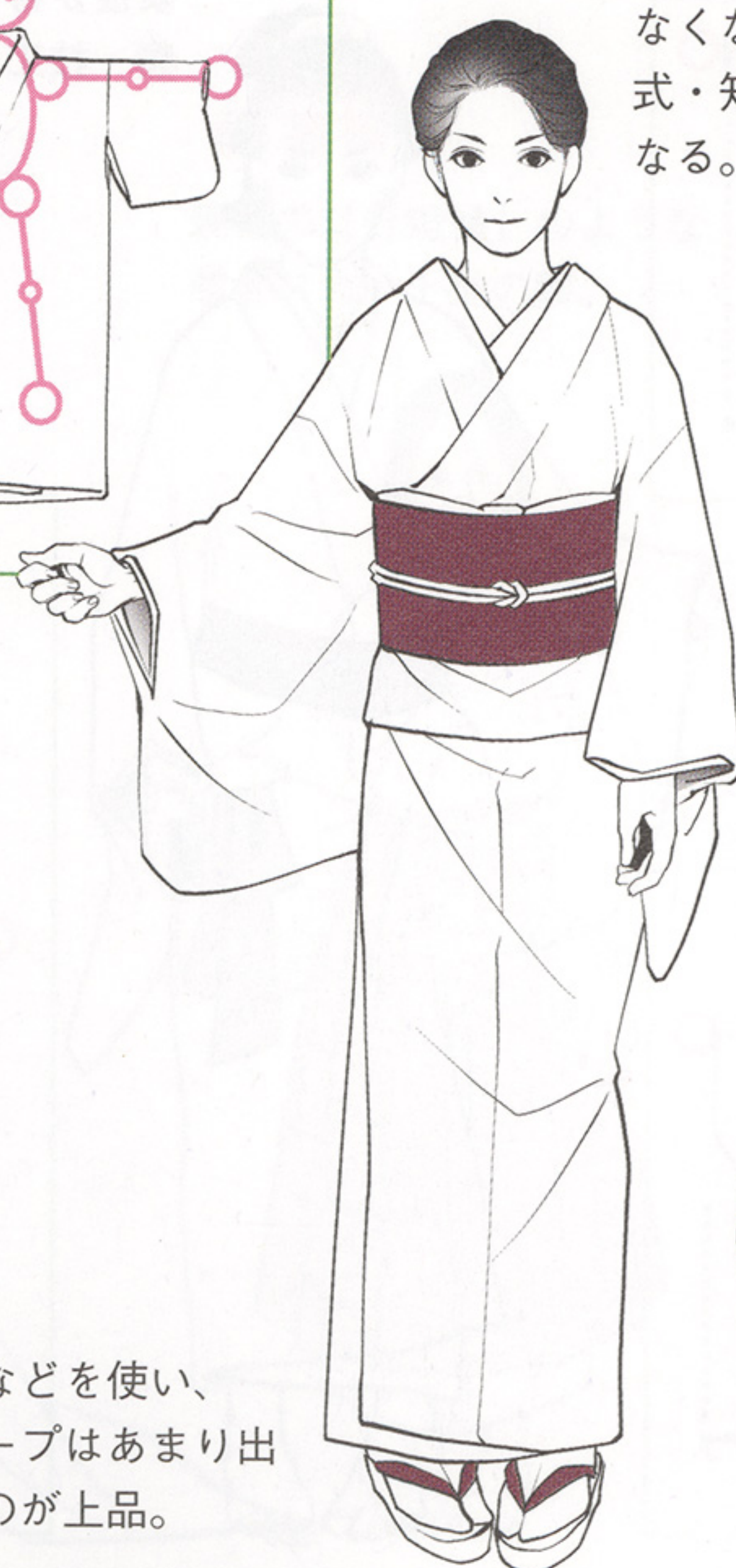
明治・大正・昭和初期 ▶▶▶ 昭和後期・平成

女性の社会性・活動性が向上した時代。
帯結びの前に着付け段階で裾をはしょる、「おはしょり」が始まる。

袖の振りと、身八つ口があいている。

伝統衣装である和服が日常着でなくなるにつれ、正装として格式・知識を重んじる流れが強くなる。

女性の羽織は本来正装ではないが、昭和期には、紋付の黒羽織をはおれば着物が紋無しでも「略礼装」と見なし女性の公の装いとして一般的だった。

外套やブーツ、エプロン、断髪（ショートヘア）、パーマなどの洋装と合わせたり、洋装のようなドレープを出した着方など自由な新しさが現れる。

衿芯、帯板などを使い、シワやドレープはあまり出さずに着るのが上品。

こらむ

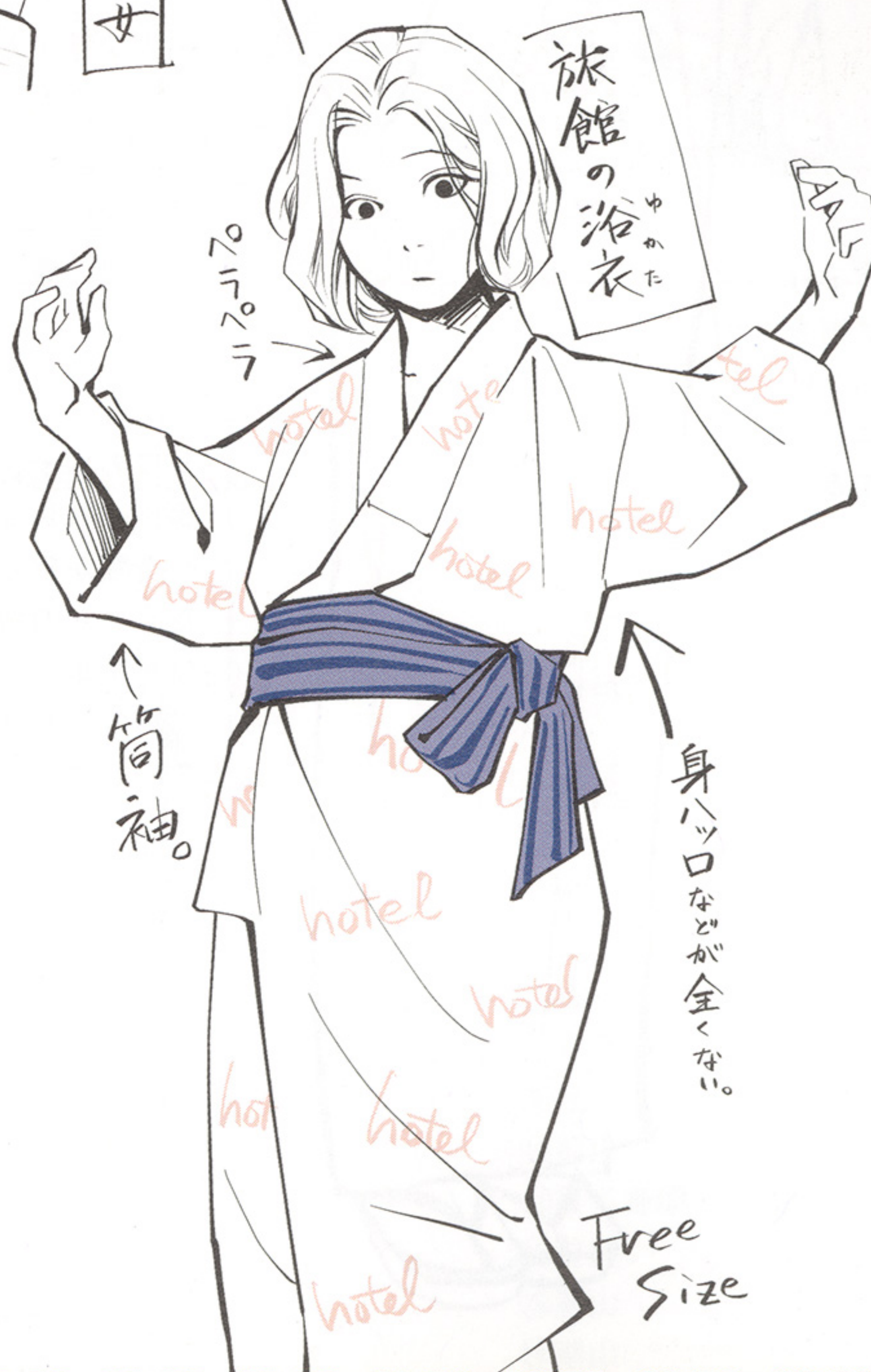
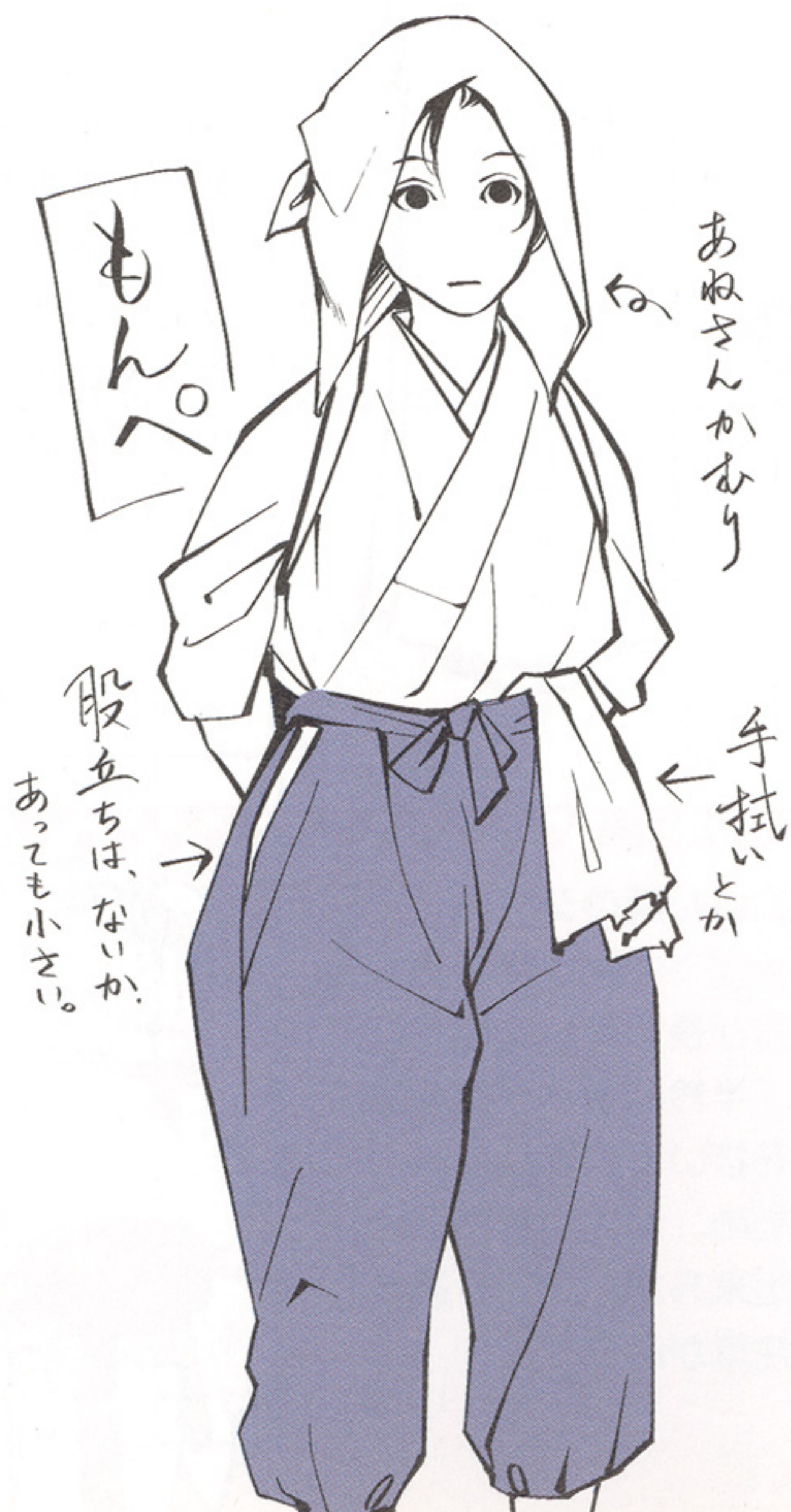
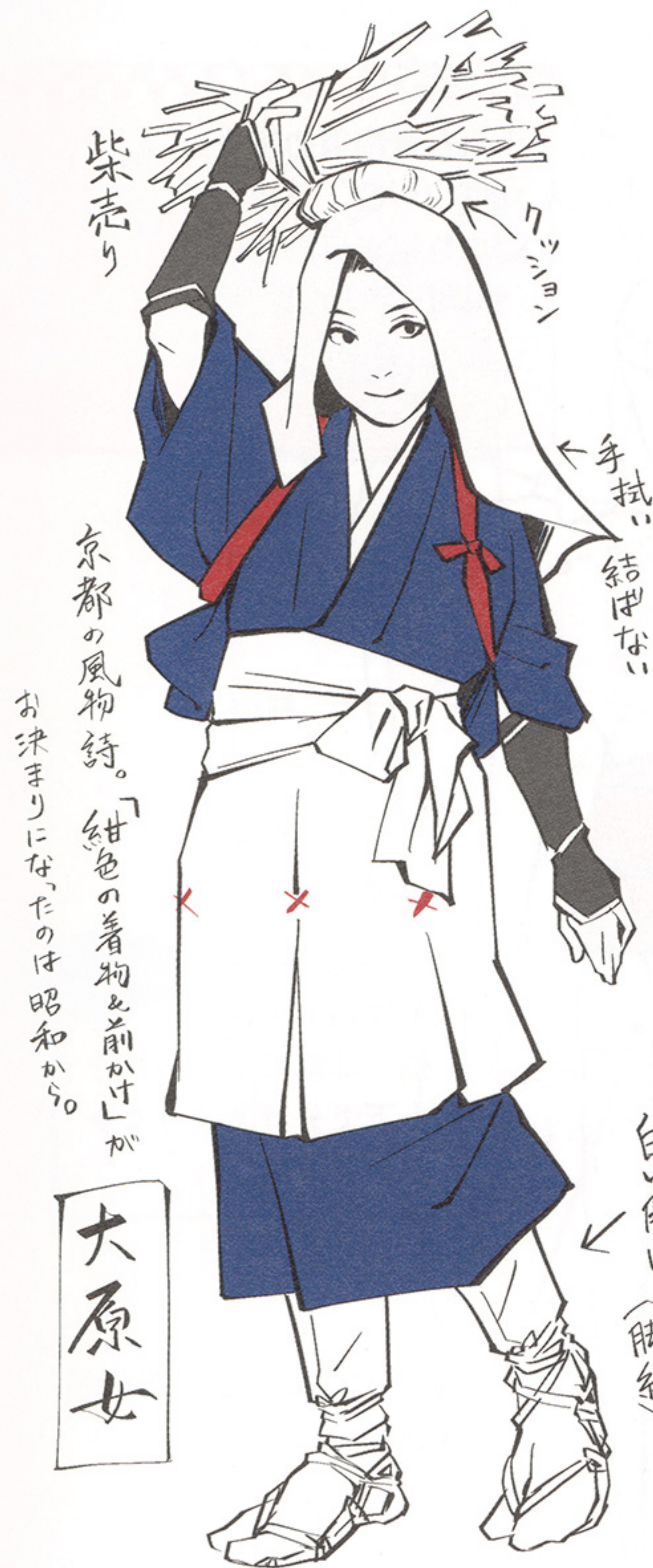
その他のさまざまな装い

柴売り
クッション
手拭い
結ばない
京都の風物詩。
「紺色の着物&前かけ」がお決まりになったのは昭和から。
白い脛巾（はばき）〈脚絆〉
大原女

室町時代から流行
巻髪（まきがみ）
←この垂髪を、頭にくるんと巻く。
上から白い布で巻き包む
どんなに働いてもくずれません。
桂女

貧乏人は髻（もとどり）をワラで結んだりも。
ちぎれっぱなしの袖
帯ひももワラ縄。

もんぺ
あねさんかむり
股立ちは、ないか、あっても小さい。
手拭いとか

旅館の浴衣（ゆかた）
ペラペラ
筒袖。
身八つ口などが全くない。
Free Size

04 着物（女性）

現代において単に「着物」という場合、袖下が縫われ袖口を小さくしたものを指します。こういった小さい袖口の着物は、平安貴族に下着として取り入れられ、時代がくだるうちに正装へと昇格しました。
現代の着物は素材、色や模様（女性の場合なら縫い目で絵柄が途切れない絵羽模様（えばもよう）が最も格上）、家紋の数（五つ紋、三つ紋、一つ紋）、合わせる小物などで格付けされ、それぞれに相応しい場で着用されます。

正面　現代女性なら、正装から普段着までこのお太鼓結びの絵でOK。

伊達衿
見せかけの衿。帯の下まで続く。

襦袢（じゅばん）（下着）の半衿
背面からは見えない。

女性は衿を抜く（肩山を背側へずらす）。

帯

袖山

襦袢
袖口と振り口から襦袢（下着）の袖が見える。

おはしょり
女性は裾をたくし上げておはしょりを作る

後ろ

肩山

衿先はおはしょりの内側に隠れる

ONE POINT

正装と普段着の描き分け
女性の場合、正装と普段着の一番簡単な描き分けは、「縫い目」です。「絵柄が途切れない模様」は正装。「縫い目で途切れる繰り返し模様」は普段着です。

CHECK

シワのポイント
袖には脇の下から袖を上下で分けるようなシワができる。

CHECK

シワのポイント
現代の着物は古い着物より身幅が狭く、帯の下はたくさんの紐で整え、シワがあまりできないように着付けられている。

CHECK

腕の動きの制限
現代の着物は、動きがかなり制限されるので、写実的な着物を描きたい場合は
- 腕を肩より高く振り上げられない
- 洋服を着た時の歩幅では歩けない

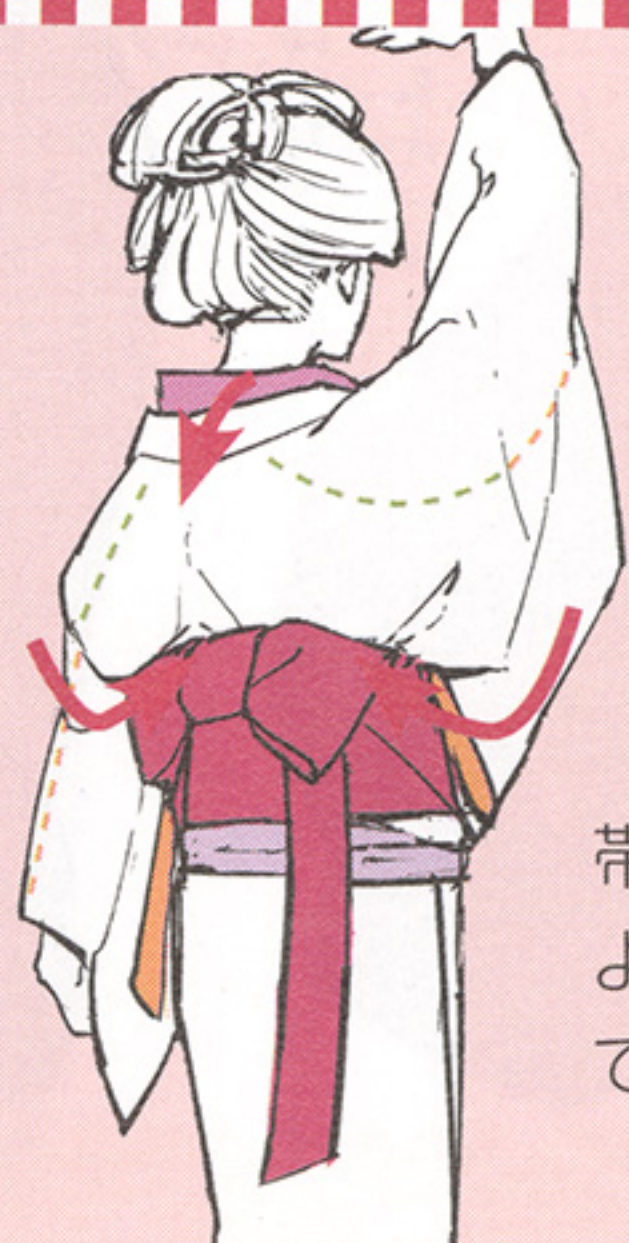
この2つを意識する。

ONE POINT

衿を抜いた時のシワ
江戸時代（中期以降）の女性は、首が長く美しく見えるように、半衿の全体が見えるほど衿を抜いていました。
このため、現代の着物とはシワの出来方が、かなり違うことに注意が必要です。

帯の上に乗るようなシワができる。

04

横

身八つロ
ほとんど見えないが、開いていることを意識する。

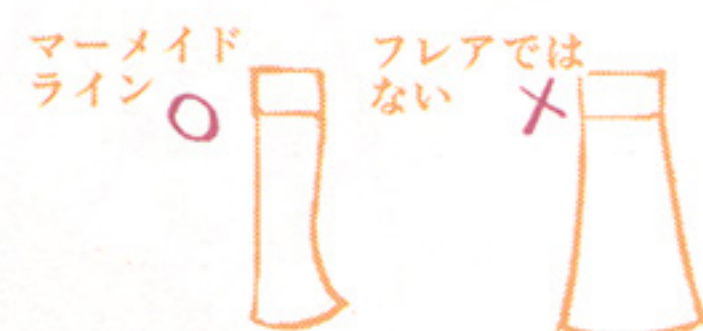
正面から見た時は分かりにくいが、袖の振りはお尻をカバーするように背面へ持ち上がる

振袖の袖は、一回背面へ持ち上がってから重みで、前面へひるがえり、また背面へ持ち上がる。

振袖などの晴れ着は、ふき仕立てで、裾を大きく跳ね上げ裏地を見せる事で華やかにしてるものもある。

マーメイドライン ○　フレアではない ×

振袖の袖は約 76cm ～ 125cm で長いほど格が上がる。

裾はかかとを隠すほど長い。
短かくても、かかとに半分かかる。

裾は必ずすぼめて描く

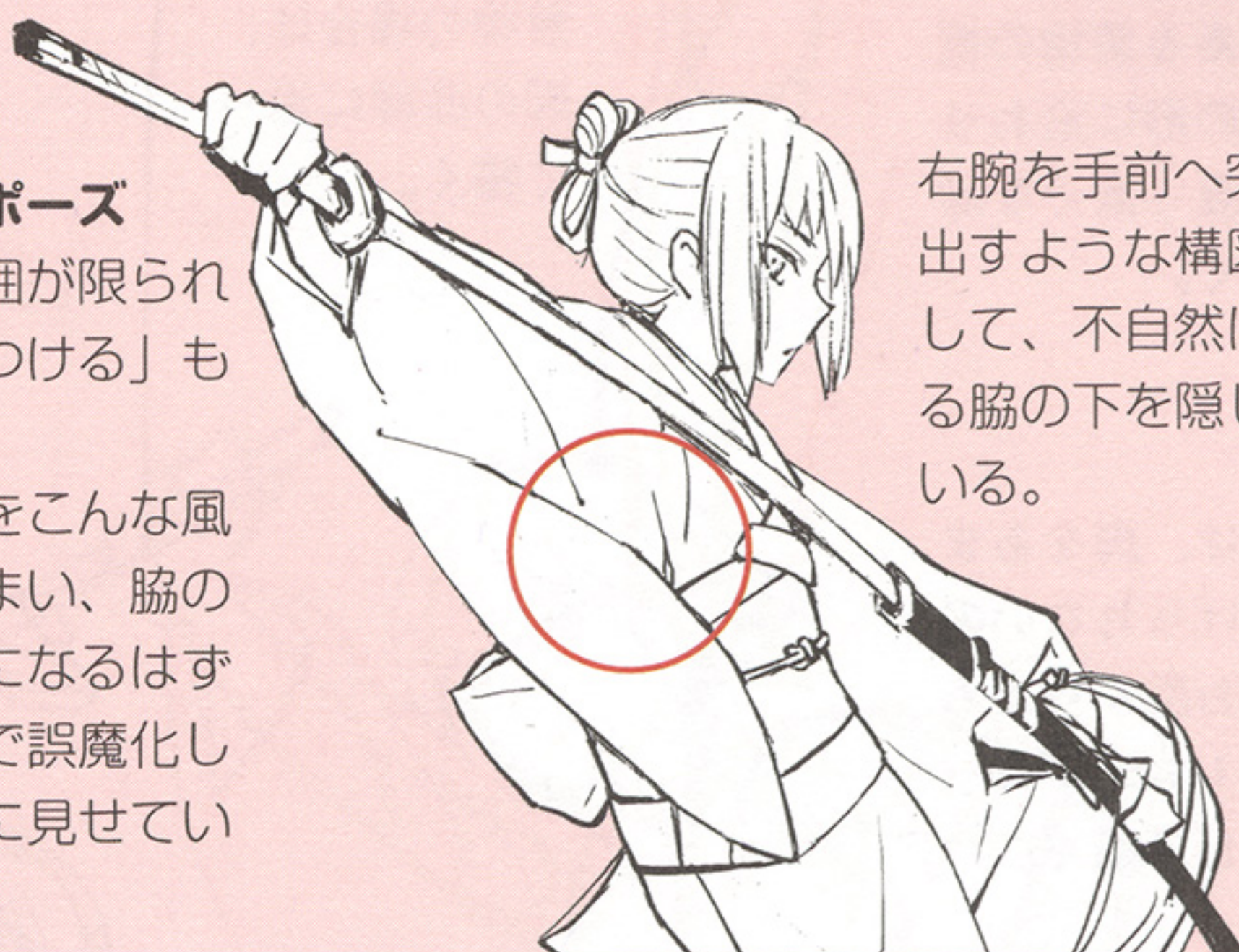
ONE POINT

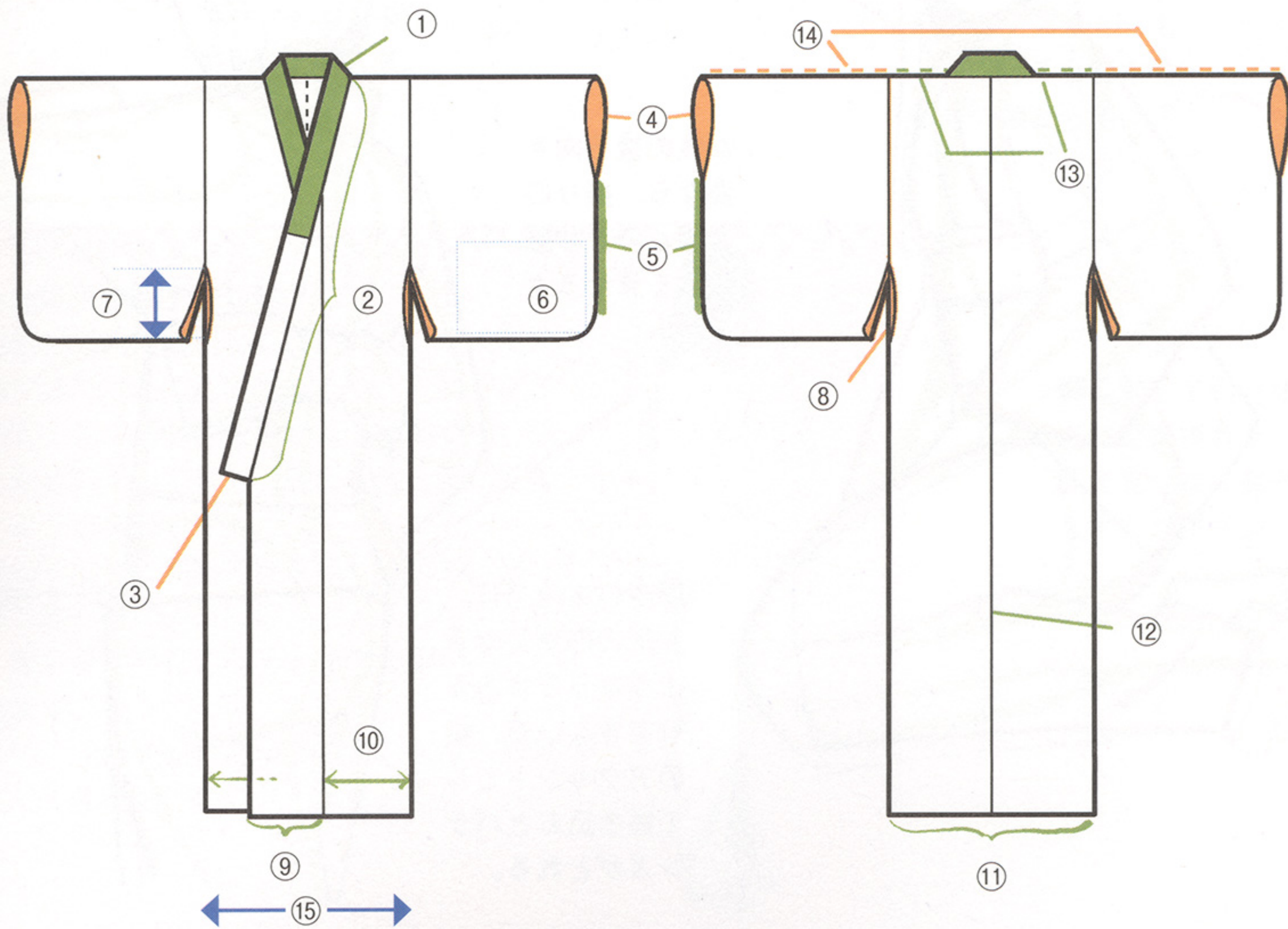
振袖と留袖の違い

振袖は、袖の袂(たもと)の長い着物で、未婚の女性が着ます。留袖は、短い袖丈の着物で、既婚の女性が着ます。
どちらも、礼装用としても用います。

ONE POINT

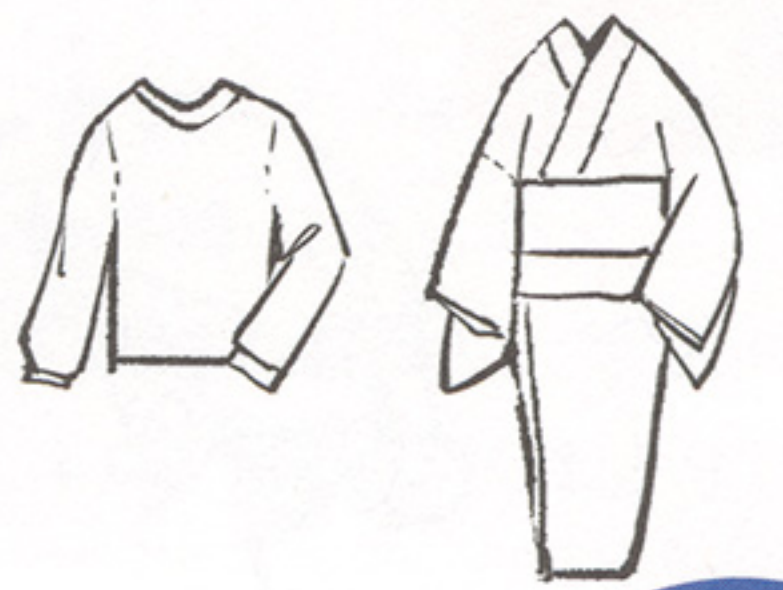
イラストだからこそできるポーズ

実際の着物は手足の可動範囲が限られますが、イラストは「嘘がつける」ものです。
右のイラストも、実際に腕をこんな風に振り上げると着崩れてしまい、脇の下のシワや帯などが不自然になるはずですが、それをレイアウトで誤魔化して着崩れていないかのように見せています。

右腕を手前へ突き出すような構図にして、不自然になる脇の下を隠している。

各部の名称

①掛衿(かけえり)
②衿(えり)
③衿先(えりさき)
④袖口
⑤袖下
⑥袂(たもと)
⑦振り
⑧身八つロ
⑨衽(おくみ)
⑩前巾
⑪後ろ身頃
⑫背縫い
⑬肩山
⑭袖山
⑮身幅

シワや袖の動き

洋服のシワと和服のシワ

＊洋服も和服も、脇の下を中心にシワが生じるのは同じ。
＊和服は袖が太いので、シワの開始点が洋服より下方（腹の辺り）にある。
＊肩の縫い目の位置が違うため、洋服の肩のシワは『＼ ／』形、和服の肩のシワは『／ ＼』形になる。
＊袖にできるシワも、和服は長いシワ、洋服は短いシワ。

CHECK

シワのポイント
女性は衿を抜いて帯を高い位置で締めるため、男性の着物とシワ（背中や脇の周り）の形が異なる。34ページの絵と見比べてみるとよく分かる。

上半身のアタリは帯やおはしょりまで含めて大きくとる

和服の肩は、撫で肩。おにぎりのような、丸みのある三角形を意識して描く。

腕を前へ動かしても袖の袂はお尻にひっかかるように残る。

腕を通している部分だけ先に描いて、袂をお尻にくっつけるように描き足すと、より和服らしくなる。

振袖や留袖など格式のある着物の裾は脚の形に沿わせず、真っ直ぐな線を描く。

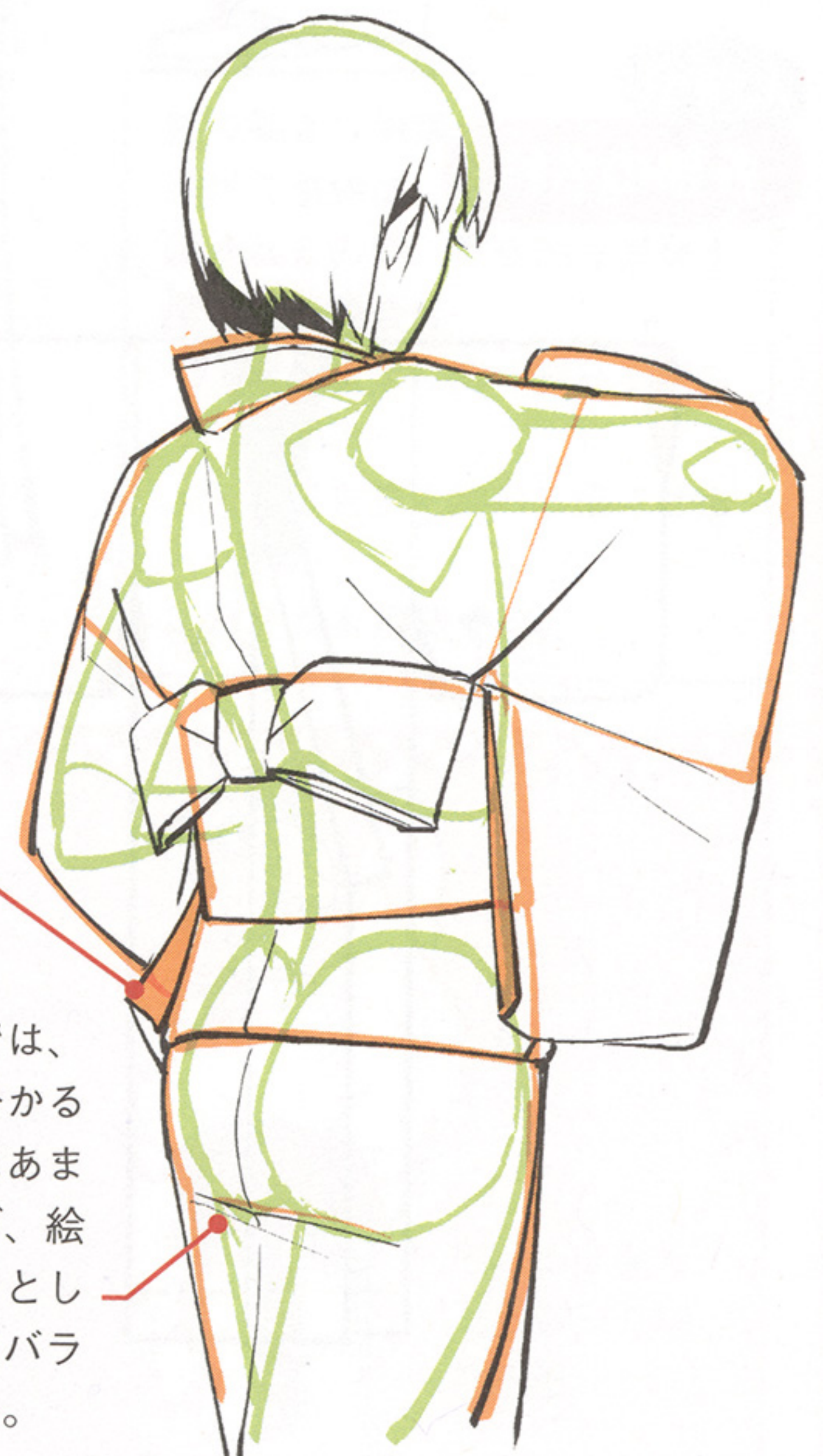
ゆかたなど薄い着物の場合は、脚の曲線に沿って描く。

和服は、脚をあまり広げられないので、お尻から太ももを1つのブロックとして描く。

大人の女性は和装では必ず髪を結いますが、あえて下ろした髪で描くことで、幼さや、寛いでいる姿、幽霊などの人外として表現できる。

女性の後ろ向き姿なら、振り口を描くのも和服らしく見せるポイント。

座った時などは、足首に裾が引っかかってシワができる（裾も少し捲れる）。

ぴらっ

厚手の生地では、お尻の形が分かるようなシワはあまりできないが、絵のアクセントとして描き込むとバランスがとれる。

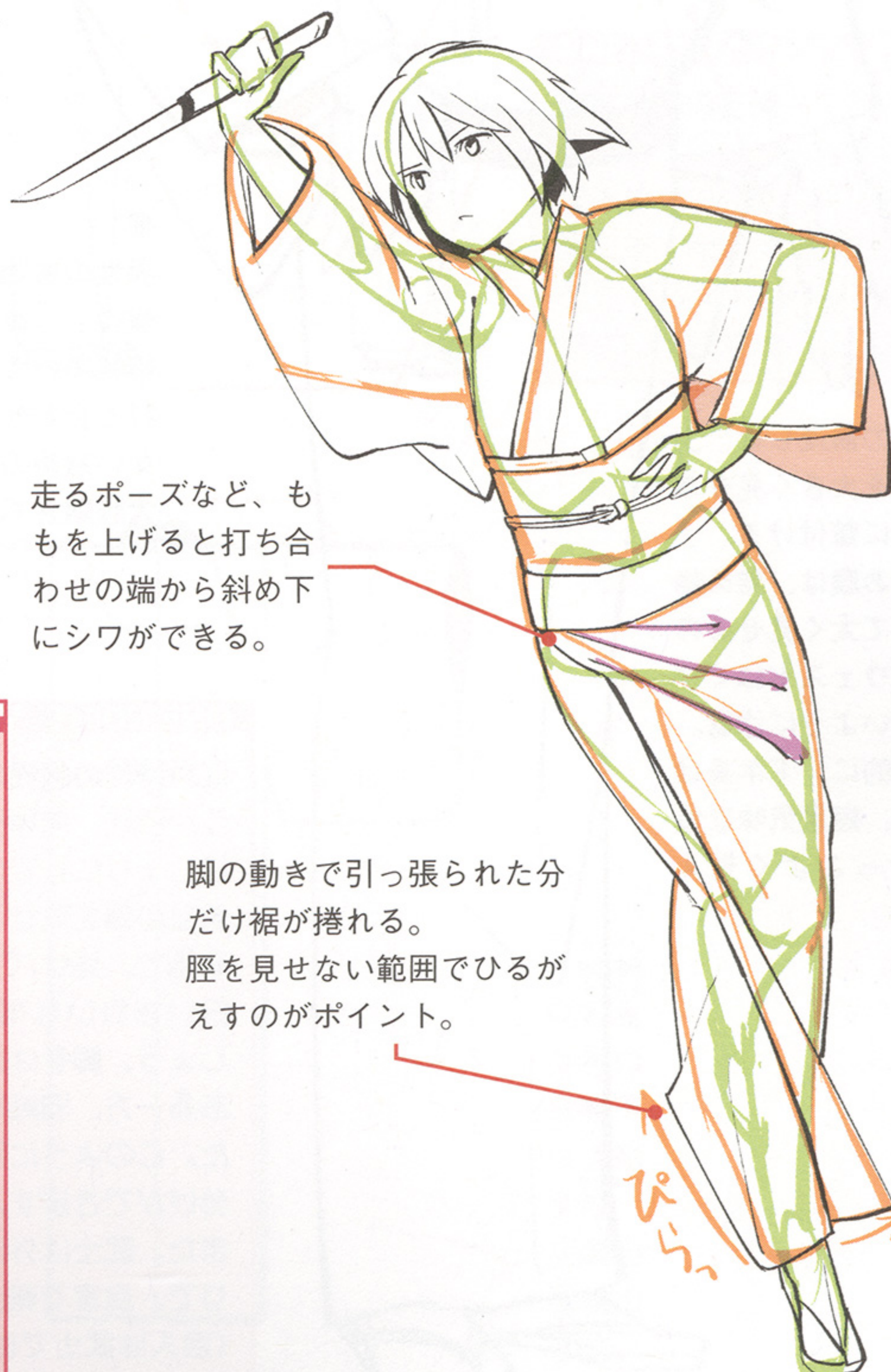
袖の長さは、腕を伸ばすと手首が見える程度。

和服の袖のシワは、腕へ螺旋状に巻き付くように長く伸びる。

袖は腕を下ろしていると、袂が袖の下にくっついた別パーツのように見える。

ぴら

和服の打ち合わせは、体の前を覆うように重なっているので、上にずり上げないと広がらない。

襦袢の衿は、裾まで続いてても OK。

走るポーズなど、ももを上げると打ち合わせの端から斜め下にシワができる。

脚の動きで引っ張られた分だけ裾が捲れる。
脛を見せない範囲でひるがえすのがポイント。

ぴらっ

ONE POINT

ふくらはぎは恥ずかしい？

和服を日常的に着用していた時代、成人女性は胸がはだけることはあっても、人前で裾が乱れて、ふくらはぎを見せるのは恥ずかしいこととされていました（現在の胸と脚が逆転したような関係です）。
ですので女性の和服の絵を描く場合も、裾があまり捲れないように描くと大人らしく上品に、逆に脛（すね）を見せていると子供っぽい印象になります。
大人で、すねを見せている場合、只ならぬ雰囲気で不気味な印象になります。

足があってもユーレイっぽい。

05 着物（男性）

現代の男性着物の原型は、平安時代の武家の鎧下です。
その頃の男性の公服は、袖口が大きく唐風の丸い衿「盤領（あげくび、まるえり）」のものが主流でしたが、庶民は男女ともに、こういった袖口が小さく垂領（たりくび）（斜めに合わせる衿）の着物を着用していました。

正面

袴を着用しない着流しは、オシャレ着やゆかたでの着こなし。現代男性の着物は無地が最上で、模様（絣（かすり）や亀甲（きっこう）など）は、細かいものほど格が上とされる。

後ろ

伊達衿
男性で伊達衿を付けるのは珍しいが、舞台衣装やカジュアルなオシャレとしてはあり。

襦袢（じゅばん）（下着）の半衿
背面からは見えない。

肩山

袖山

人形
振り口は無く、縫われている。

帯はお尻（骨盤）にひっかけるか、お尻より下に締める。
結び方は女性と比べると割と自由（イラストは貝の口結び）。

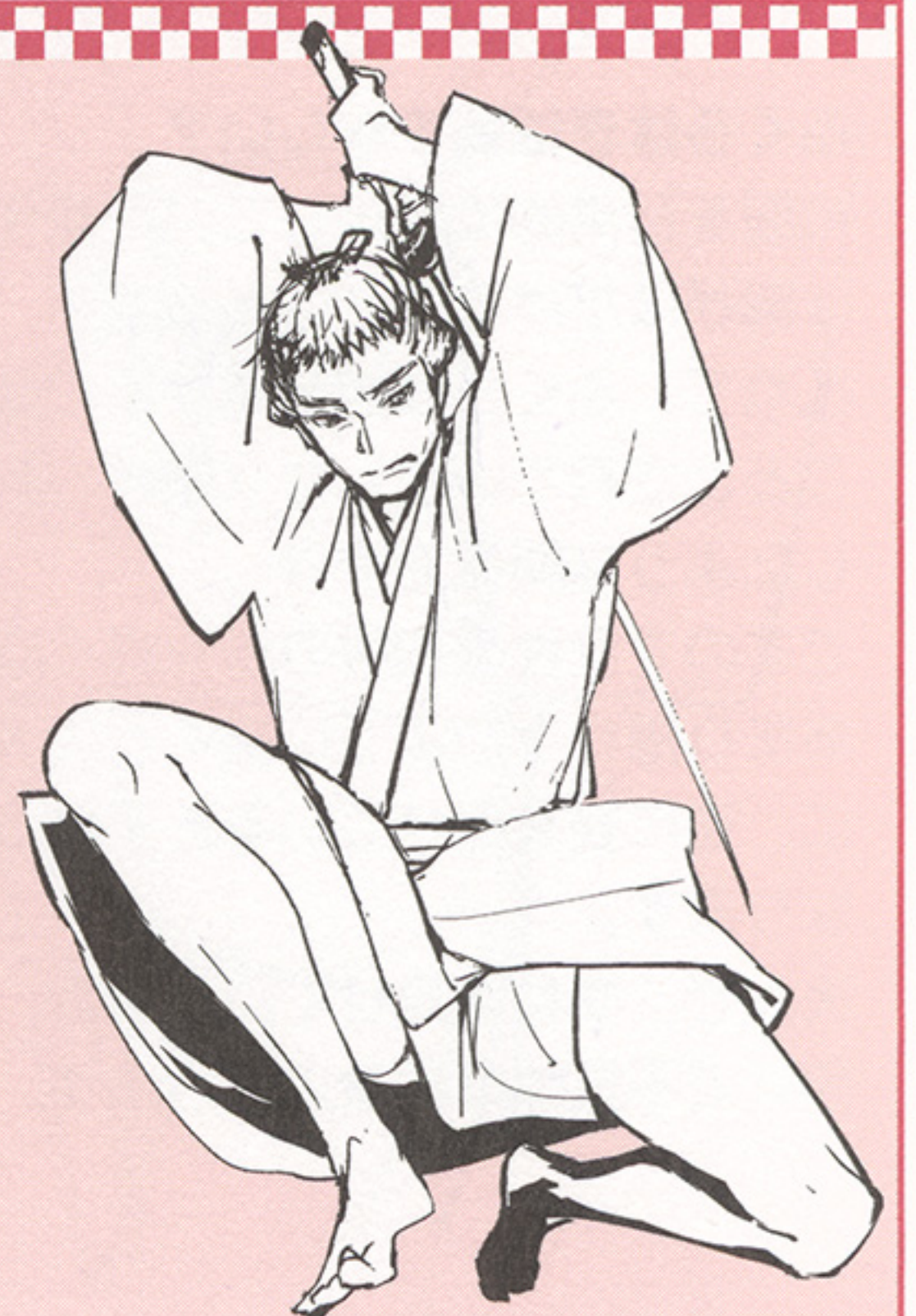
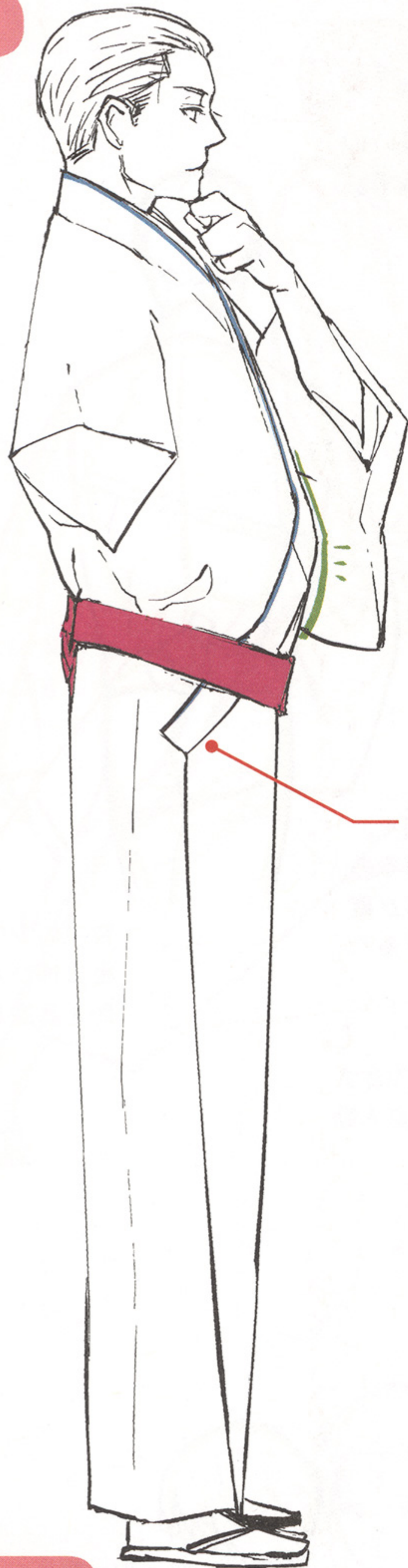
帯
男性の着物はこの細い帯一本を骨盤に引っ掛けるような低い位置で締めているので、腕の自由がきく。打ち合わせも緩いため、正装用でない短めの着物であれば、簡単に大股開きもできる。

男性の着流しは、上半身を大きく見せるように着付ける。
特にお腹は、詰め物をして太く見せるので、ウェストはくびれないように注意。
対照的に、下半身は細く、短足気味な位がかっこよく見える。

ONE POINT

江戸時代の男性のオシャレ

江戸時代、肉体労働の男性などは着流しで裾を尻はしょりにして仕事をしていました。次第に脚や、新品の褌（ふんどし）を見せることがオシャレの一環に。褌は高価で、見せパンのようなものなので、描く際は白いきれいな布を恥じらわずに威勢良く見せましょう。脚をはだけさせるのが庶民のオシャレである一方、羽織を着るのが富裕層のオシャレでした。このように同じ着流しでも身分によって描き分けができます。
また、武士は外出時や来客時は袴を着用する決まりで、自室で寛いだ時だけ着流しを着ていました（浪人は武士ではないので、着流しで外出しています）。

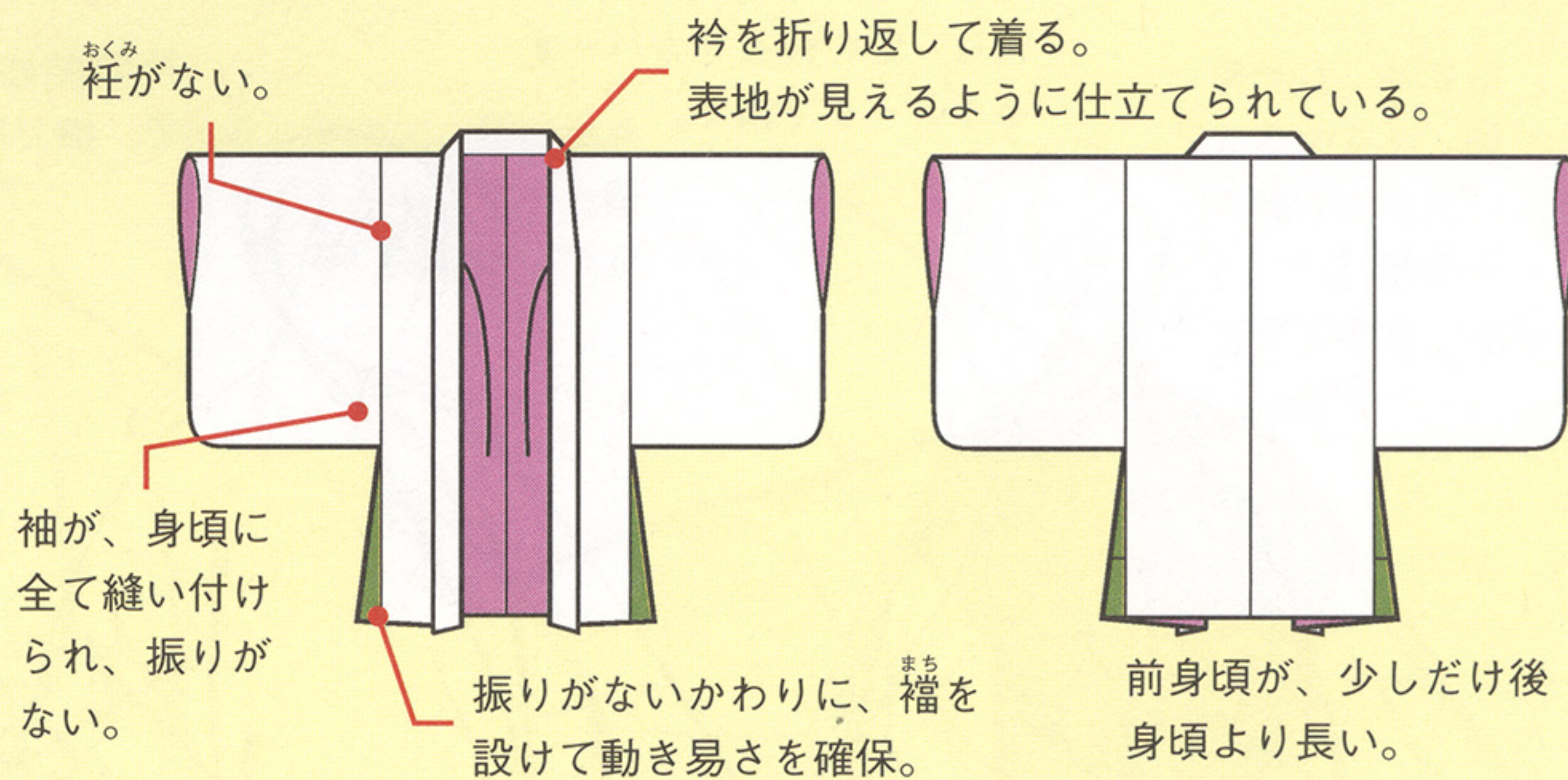
横

● 羽織　半纏や半被に似ていますが、微妙に仕立てが違います。

衽がない。

衿を折り返して着る。
表地が見えるように仕立てられている。

袖が、身頃に全て縫い付けられ、振りがない。

振りがないかわりに、襠を設けて動き易さを確保。

前身頃が、少しだけ後身頃より長い。

元々羽織は、戦の時に甲冑の上から羽織った衣類の派生なので、男性のための衣類であることが分かる。現在は身八つ口と振りのある女性用の羽織もある。

おはしょりを作らないので、衿先が表に出る。

紋を付けない羽織を着流しに合わせれば、ちょっとした会合に出られる程度のオシャレ着になる。

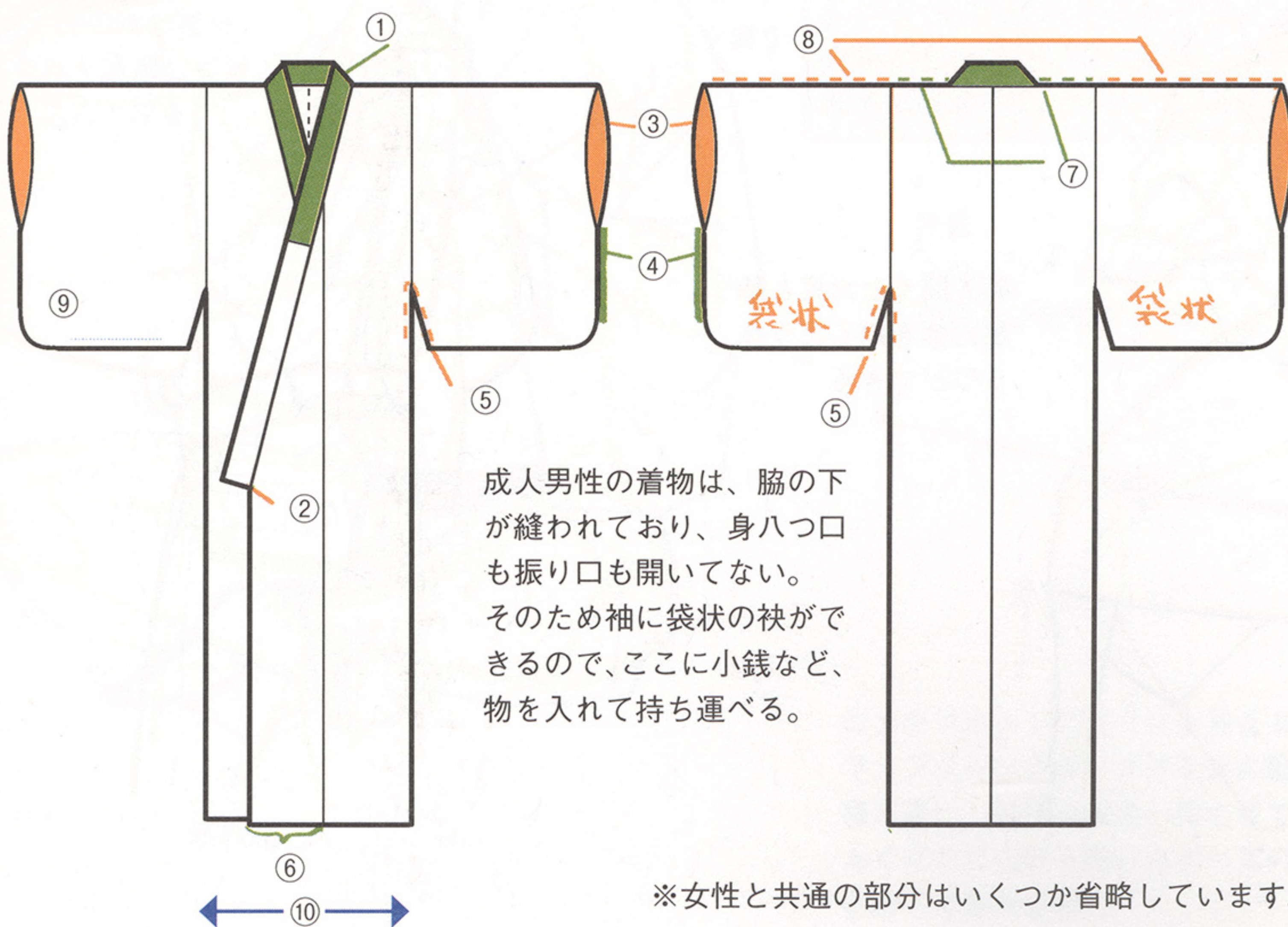
振り口が無くても袖は、お尻をカバーするように持ち上がる。

羽織の丈は、流行によって変わり、厳密に決まってはいない。

ONE POINT

男性着物の正装

男性の正装は、仙台平（白黒の縞）の袴に、紋付きの羽二重（無地）の着物と、紋付き羽織を合わせます（紋はどちらも五つ紋）。

各部の名称

袋状　袋状

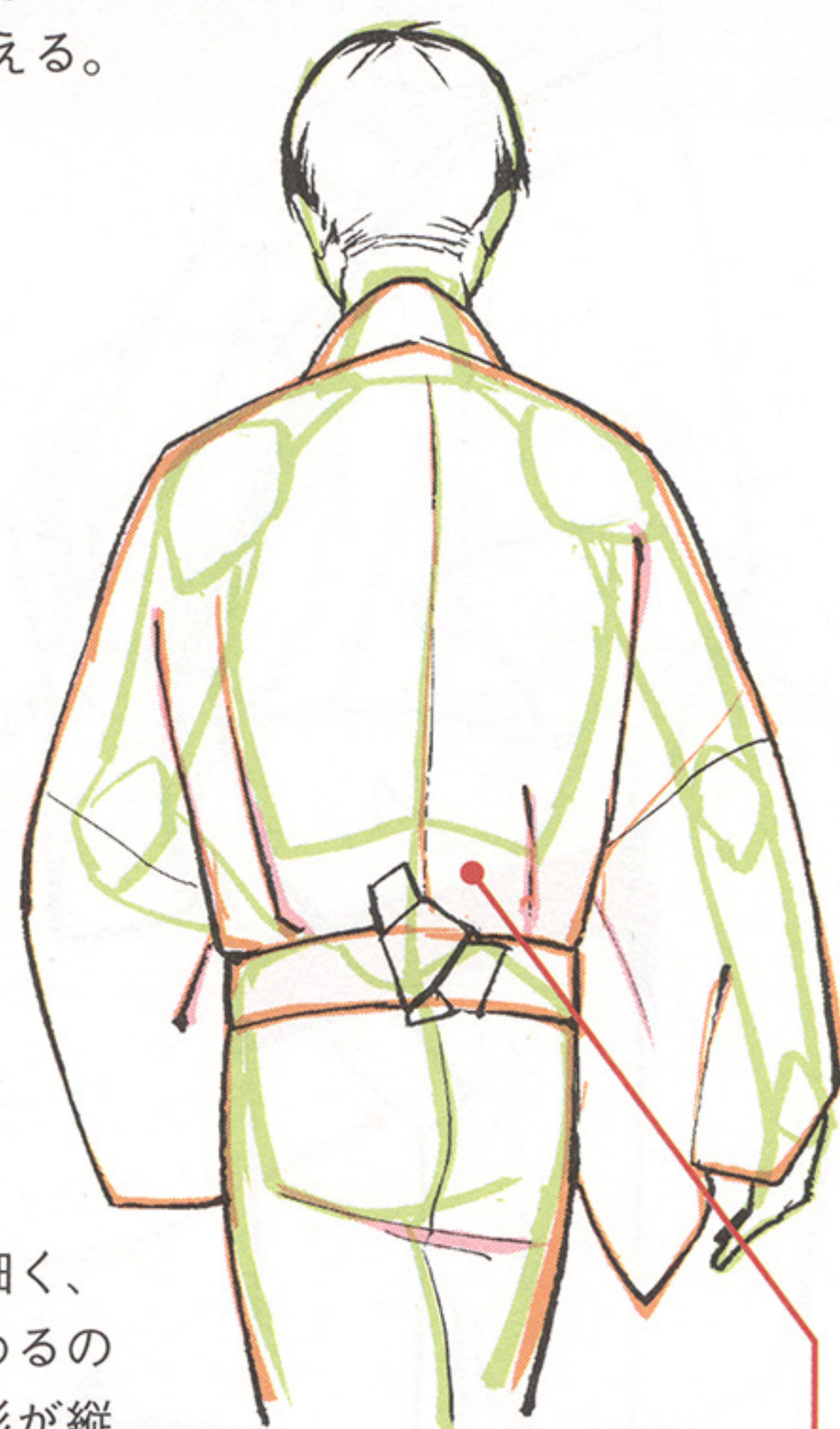
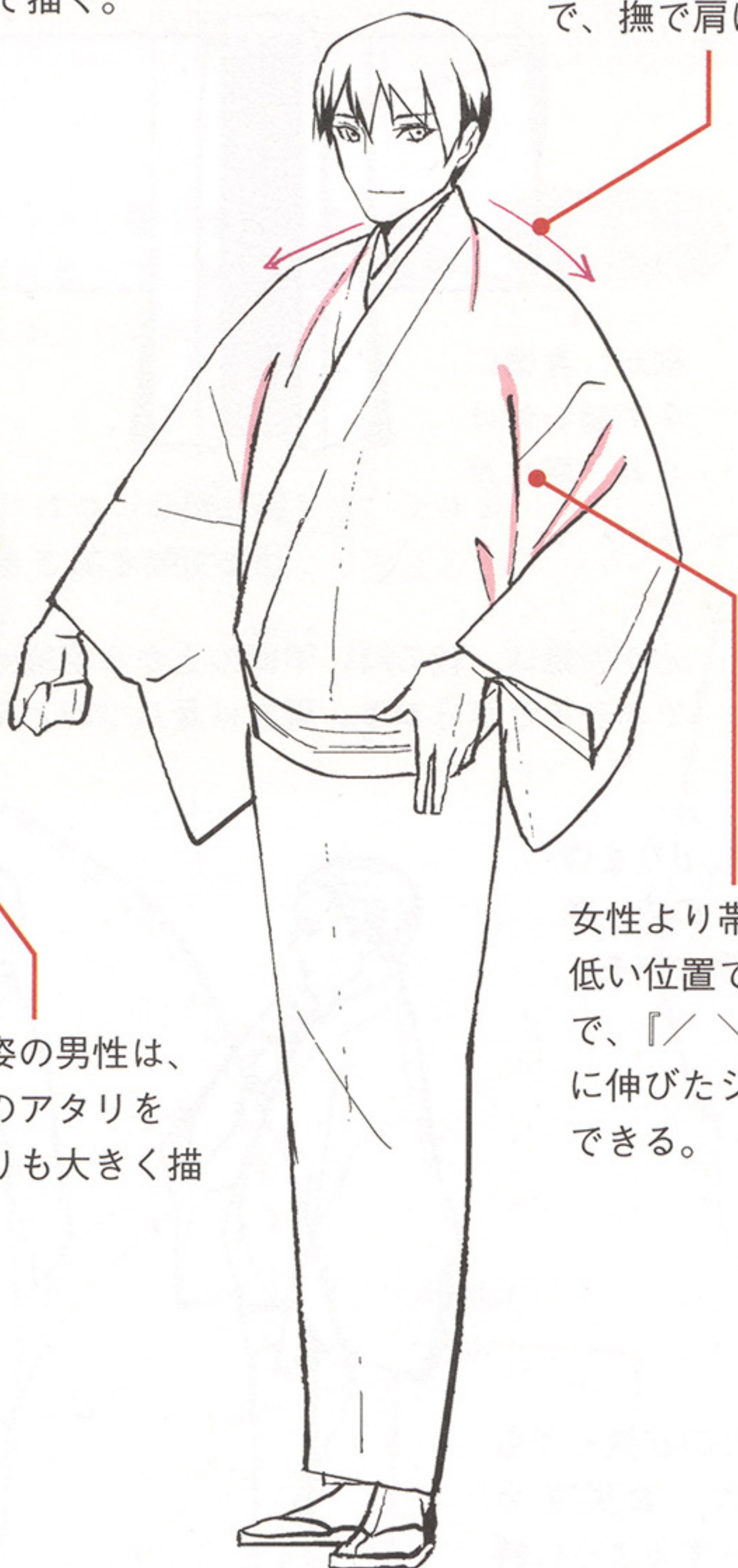
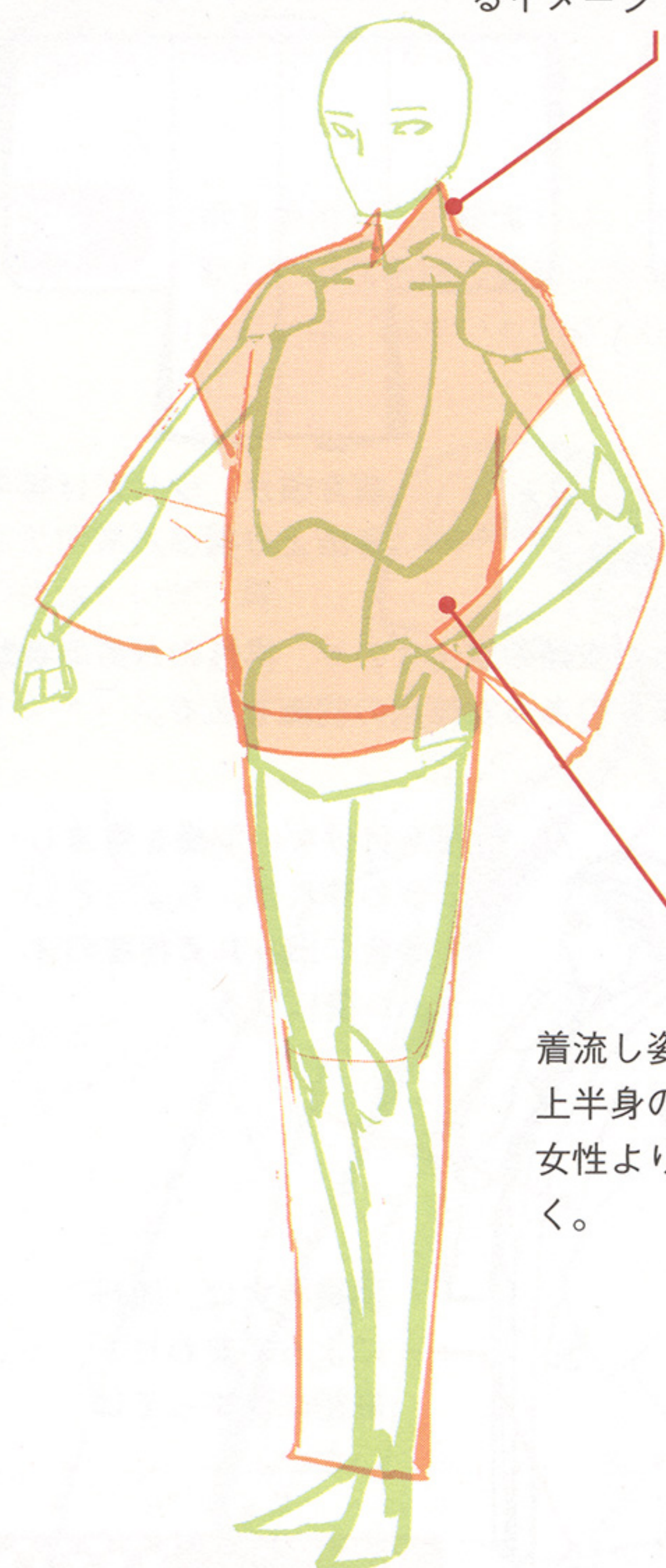
成人男性の着物は、脇の下が縫われており、身八つ口も振り口も開いてない。そのため袖に袋状の袂ができるので、ここに小銭など、物を入れて持ち運べる。

①掛衿
②衿先
③袖口
④袖下
⑤人形
⑥衽
⑦肩山
⑧袖山
⑨袂
⑩身幅

※女性と共通の部分はいくつか省略しています。

シワや袖の動き

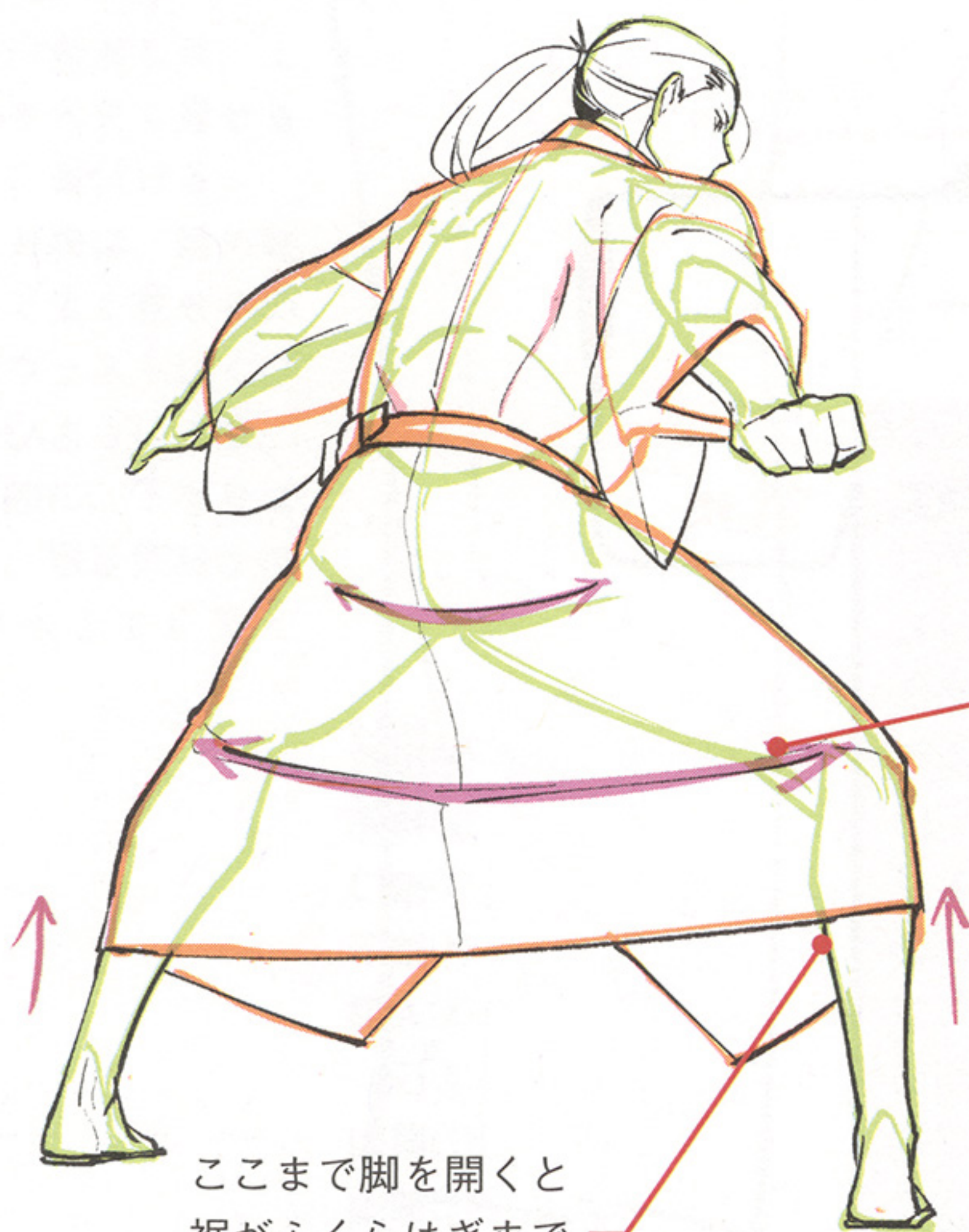
衿を抜かないので、急角度のVネックに見える。衿は、首の後ろをカバーするイメージで描く。

衿の開始点が高いので、撫で肩に見える。

着流し姿の男性は、上半身のアタリを女性よりも大きく描く。

女性より帯が細く、低い位置で締めるので、『／ ＼』形が縦に伸びたシワが多くできる。

背中のシワは、縦に伸びた『＼ ／』形を意識して描く。

着流しで大きな動きをすると、ボディラインが浮き出るうえ、裾もはだけるので、筋肉の形を意識して体のアタリを描く。

どんなに細身の男性でも、お腹や背中は丸みを帯びたラインで描く。

脚を開くとお尻と膝裏に弧を描くようなシワができる

ここまで脚を開くと裾がふくらはぎまで捲れあがる

05

女性と同様に、腕に巻き付くようなシワや、お腹の『／ ＼』形のシワができる。

男性は、衿を抜かないため、首の後ろからも『／ ＼』形のシワができる。

脚を開くと、太ももからふくらはぎにかけての形がくっきり分かる。

左右の膝裏を繋いで、弧を描くシワができる。

ONE POINT

時代劇は男性和服のお手本

男性で着物を着慣れている人は、女性以上に少なく、なかなかカッコイイ着流し姿が見られる機会はありません。時代劇なら、お手本のような着こなしの主演俳優さんの他、チンピラ風や浪人風のアレンジもたくさん登場します。どれくらい動いたらどう着崩れるか、着崩れないためにはどういう仕草をするのかなども分かるので、絵の参考に最適です。

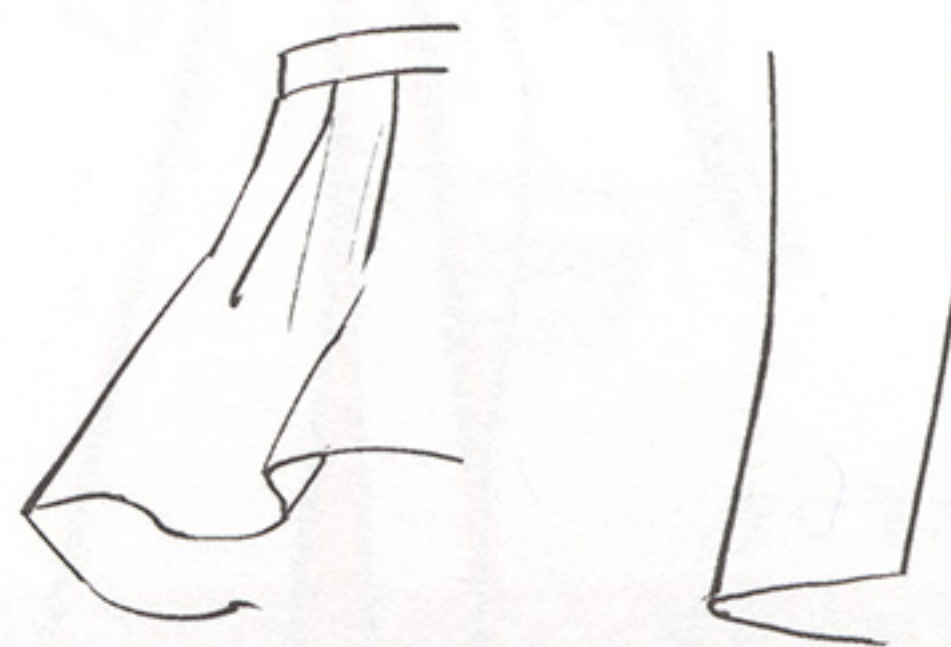
あぐらをかいた時、すねの上あたりを通っているのは裾ではなく、衽(おくみ)の端の部分。そのまますねを通過して足の下に折り込んで座る。

衽の端

洋服

プリーツやタックは、見た目より横幅がある。

和服

四角い布なので、見た目そのままの布幅しかない。

ロングスカートのようにも見える着流しは、体の形に布を裁断して、プリーツやタックで手足の動きを考慮した分の布幅をとる洋服と違い、和服は四角い布だけで構成されている。
あぐらなどの脚を開いたポーズの時、裾は洋服と同じ位置にこないので注意が必要。

06 現代の着物が完成するまで

現代、一般的に「着物」と呼ばれる袖口が小さな衣類は、古代から庶民層に着用されていました。この質素で簡便な着物を愛用してきた武士の権威が高まると共に、貴族が用いた盤領の着物にとって変わります。江戸時代になると女性のファッションの移り変わりに合わせて形状が変化し、現代の形となりました。

鎌倉時代 武士の正装

鎌倉時代の武士の正装は直垂でした。元々直垂は、地方の労働者が着た袖口の小さい着物ですが、武士が好んで着用したため、次第に正装へと格が上がりました。
直垂とほぼ同形の装束に大紋や素襖があり、素襖の袖を省いて肩衣にしたという説もあります。

正装となり、広袖に変化した直垂。

貴族文化では下着だった袴が表に見えるようになった。このため時代が下る程、袴も正装に相応した形へ変化し（参照 80ページ）、現代のように折り目のはっきりしたヒダや腰板がついていく。

江戸初期の着流し

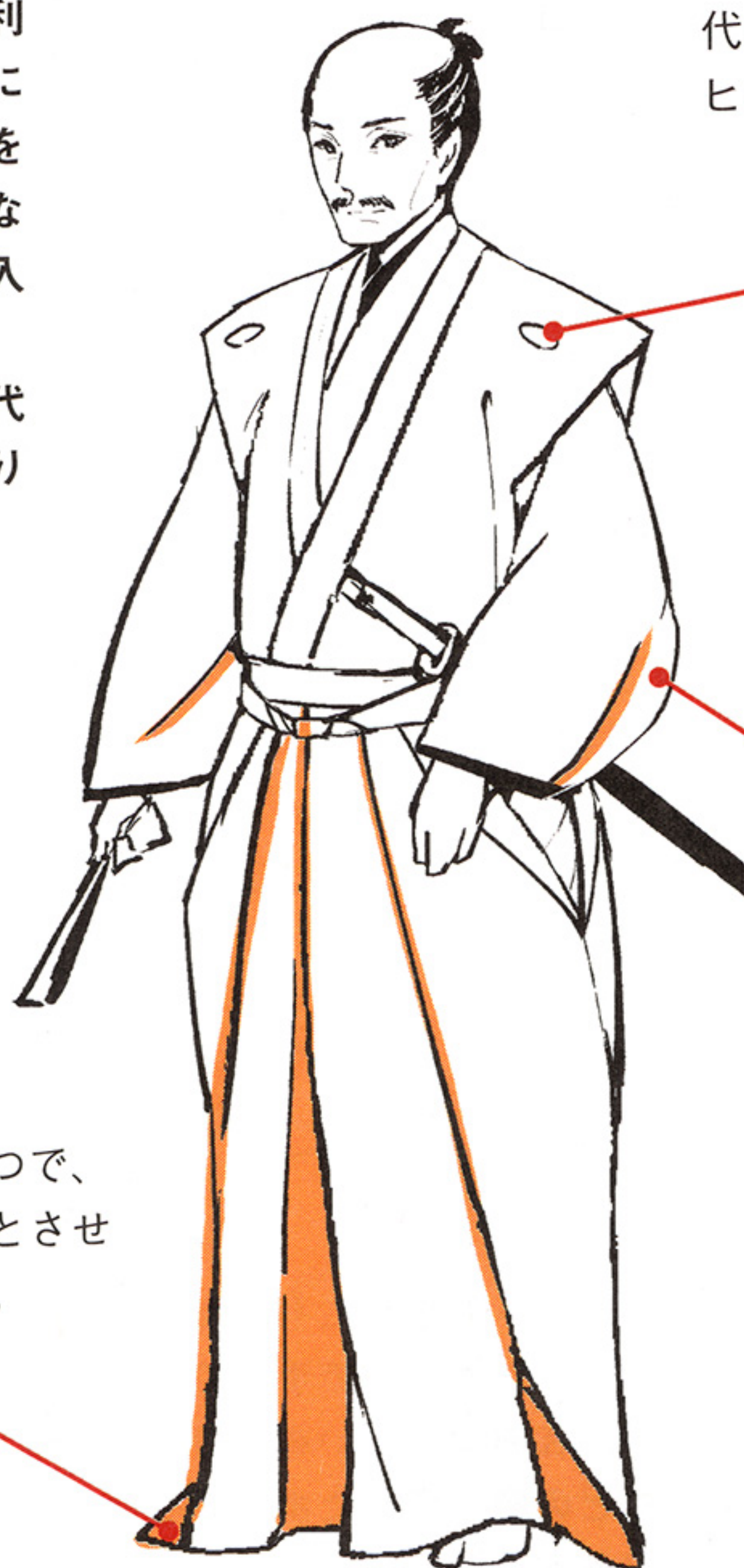
正装が簡略化していくと、カジュアル着やくつろいだ場面では着流し姿が見られるようになります。舟形袖で、身幅が広く、衿が長い点が現代の着物とは違います。
下半身の幅を広めに描き、ひらひらと裾の布を余らせると古い着物らしく見えます。

男髷
武士から町人まで広く用いた髪型。

広い身頃を折り返して衿の裏地が見えている。

身幅が広いので、少し裾が広がる。

安土桃山時代の正装

室町幕府12代将軍の足利義晴が、礼装化して動きにくくなった直垂や烏帽子を嫌ったため、邪魔な袖のない肩衣を正装として取り入れたといわれてます。
形を変えながら、江戸時代まで武家の礼装として残ります。

古い肩衣は、江戸時代の肩衣より小さくヒダもない。

振りの無い舟形袖は、パジャマの袖のような感覚でふわっと描く。
袖の折れ目を一本描くと和服らしくなる。

前ヒダは片身2本ずつで、余り折り目をパリッとさせず柔らかな線で描く。

貴族が文化の中心だった平安時代だと、男性はどんなにラフな格好であっても、人前では盤領の上着を着るのが、エチケットだったようです。

時代がかわればルールもかわる

06

江戸初期

江戸初期頃まで男性の着物とほとんど変わらなかった女性の着物は、当時のファッションリーダーである高級遊女や芸者たちの考案した新たなスタイルによって次第に現代と同じ形へ変化していきます。

一般的にはまだ下げ髪（結ばないロングヘア）が主流の中、遊女が若衆髷を真似て結髪を始める。
初期の女髷は、髱（たぼ）が張り出していないので、衿は抜かない。

袖には振りがなく、脇は完全に縫い付けられ身八つ口もない。

身幅が大きく、いまの男性の着流しのようにおはしょりを作らず、お腹まわりにゆったりと布が余る。

帯は細く、腰の高さで結ぶ。

衿先

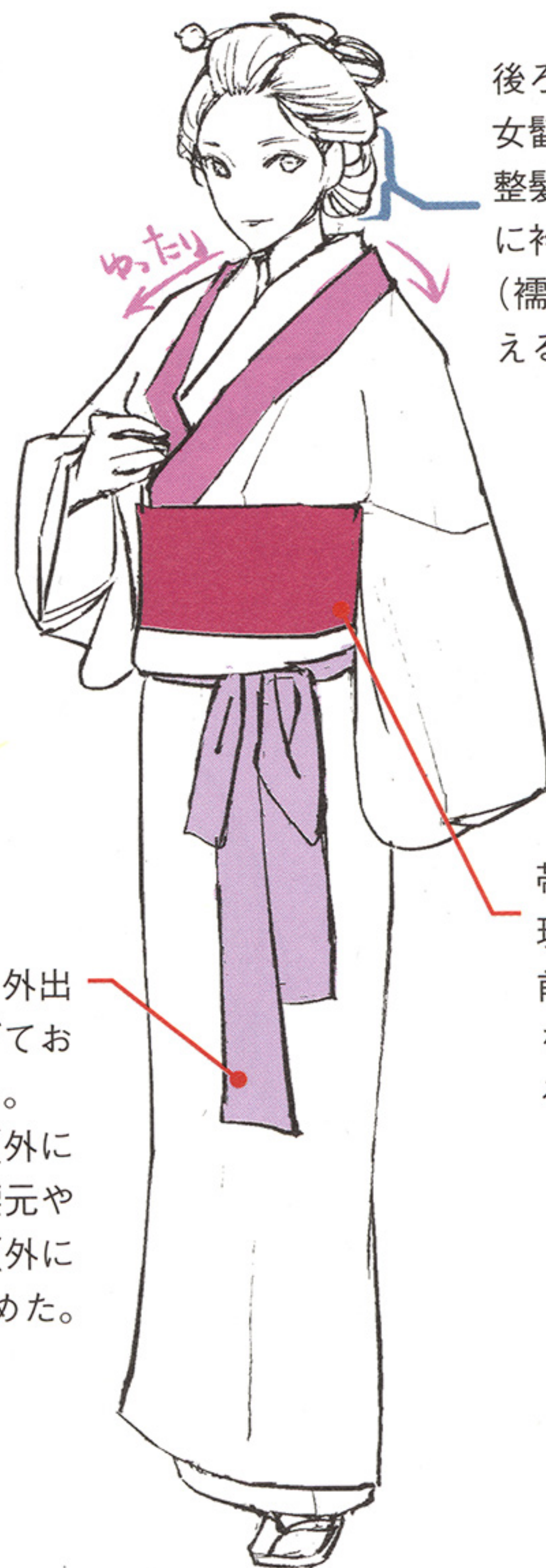
身幅が広いため、裾がやや末広がり。

遊女たちは裾を長く引いていた。
庶民はくるぶし丈の短い着物を着ていた。

● 舟形袖

振りが無く、袖口も小さい。

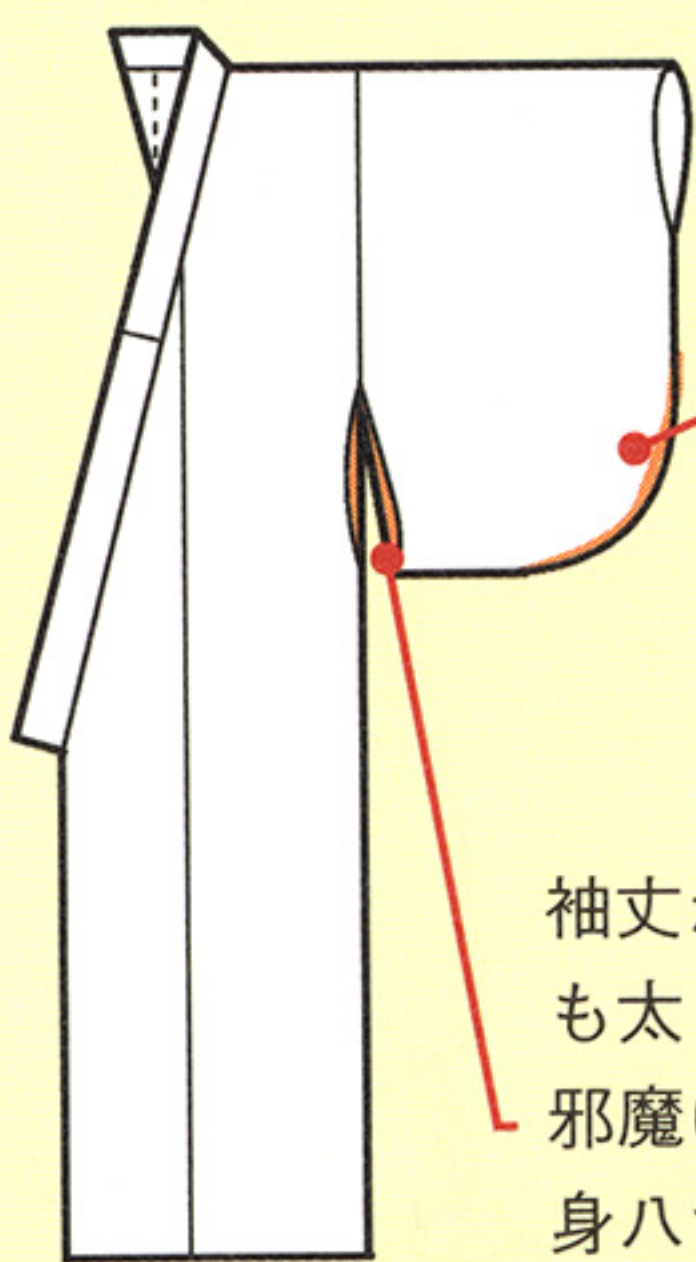
衿は長いが、丈は今より短い。

江戸中期

ゆったり

後ろに髷が張り出した女髷が流行りだす。
整髪油で汚さないように衿を抜くようになる（襦袢の半衿が全て見える程ゆったりと）。

帯締めは江戸末期に現れるので、それ以前は今より細めの帯をゆるく巻き付ける。

長く引いた裾を外出時だけ持ち上げておはしょりをとる。
遊女はしごき（外に見せる）で、腰元や一般人は腰紐（外に見せない）で締めた。

● 元禄袖

今より袖下が丸い。

袖丈が長くなり、帯も太くなったため、邪魔にならないよう身八つ口が開き、振りができる。
この頃、男性の着物の袖も「人形」と呼ばれる、身から離れた部分ができた。

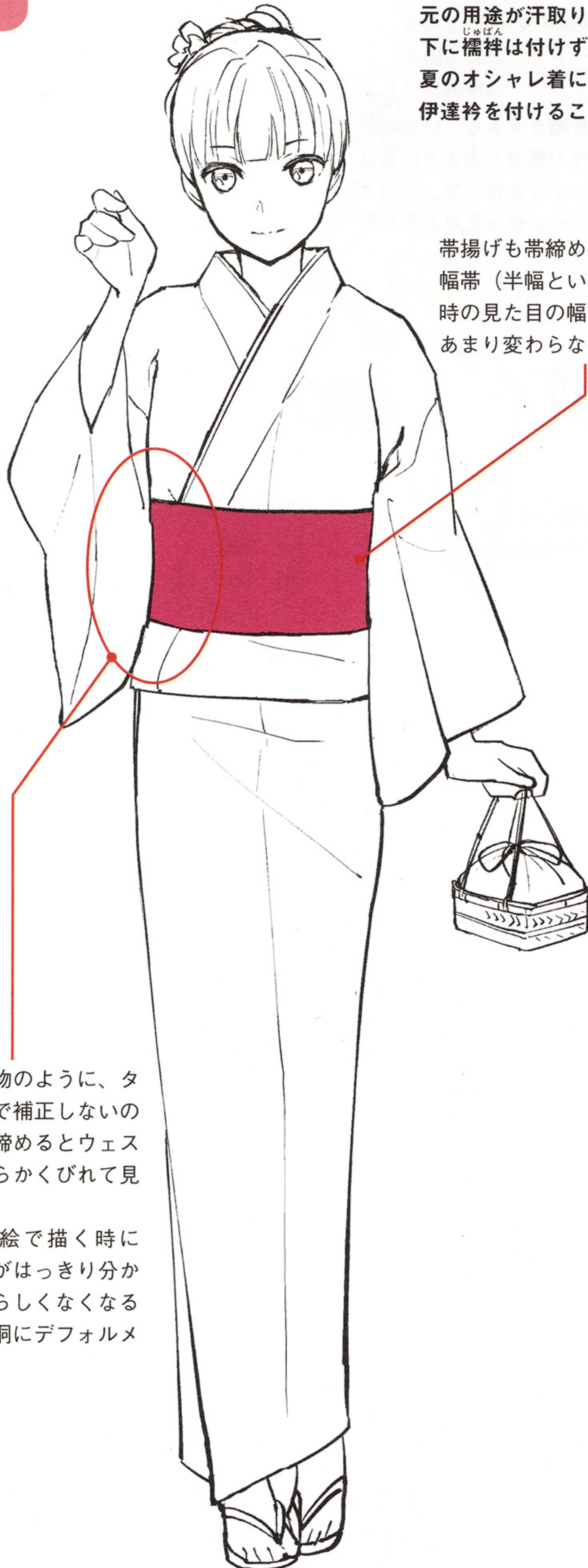
ONE POINT

振袖は子供服だった

成人女性の晴れ着としての振袖やお太鼓結びなど、現代ではポピュラーな和服の着こなしは、江戸後期〜末期に生まれます。
それまでの振袖は、子供（男児も）が着るものでした。

07 ゆかた

ゆかたは、湯浴みをする時に着た湯帷子(ゆかたびら)という着物が原型といわれています。元々は湯上りの汗取りですが、江戸時代になると夏のくつろぎ着として広く流行し、夕涼みや夏祭りなど、夕方以降のための遊び着になります。現代では高級素材で作られた、よそゆき着のゆかたもあります。

正面

元の用途が汗取りだったので裏地はなく、下に襦袢(じゅばん)は付けずにこれ1枚で着ます。夏のオシャレ着になった現代では、襦袢や伊達衿を付けることもあります。

帯揚げも帯締めもなく結べる半幅帯（半幅といっても、締めた時の見た目の幅は、普通の帯とあまり変わらない）を締める。

男性の着物のように、タオルなどで補正しないので、帯を締めるとウェストがいくらかくびれて見える。
しかし、絵で描く時にウェストがはっきり分かると和服らしくなくなるので、寸胴にデフォルメする。

後ろ

薄い布ごしに肩の形が分かるので、四角くを意識する。

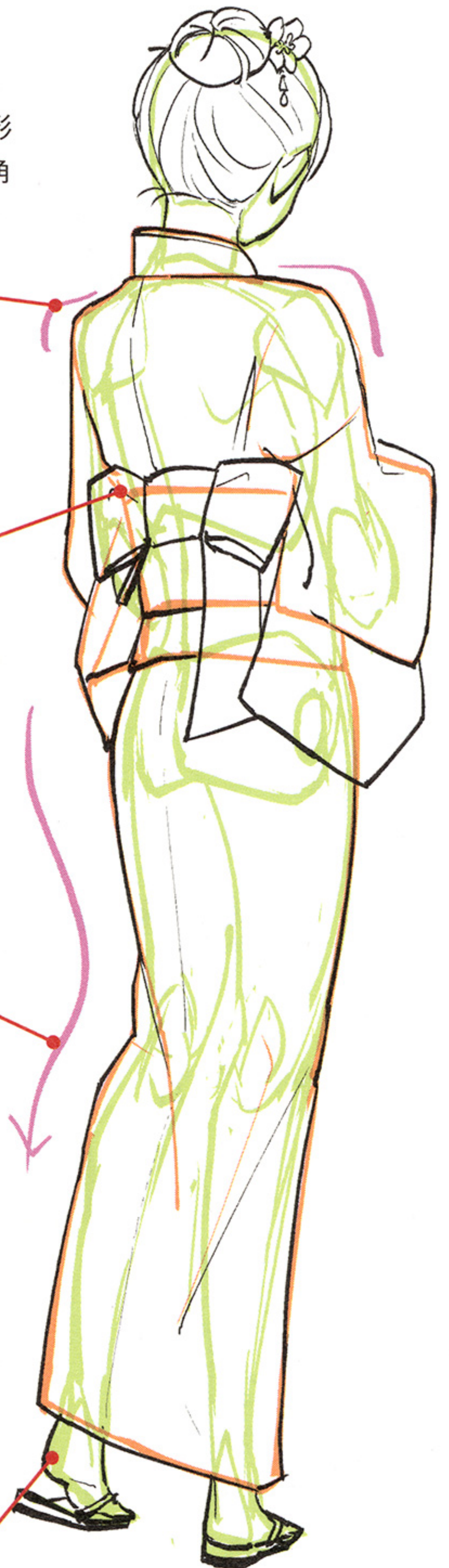
半幅帯の結び方で一般的な文庫結び（シンプルなのでアレンジの方法が数多くある）。

布も薄く一枚しか着ないので体のラインがやや分かる。

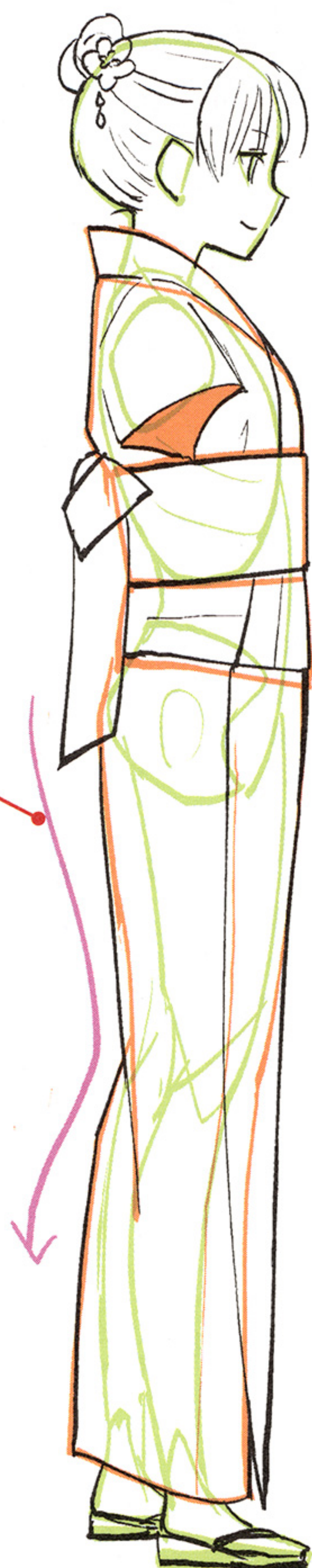
ゆかたなら、裾はくるぶしが見えるくらい短くても OK。

07

横

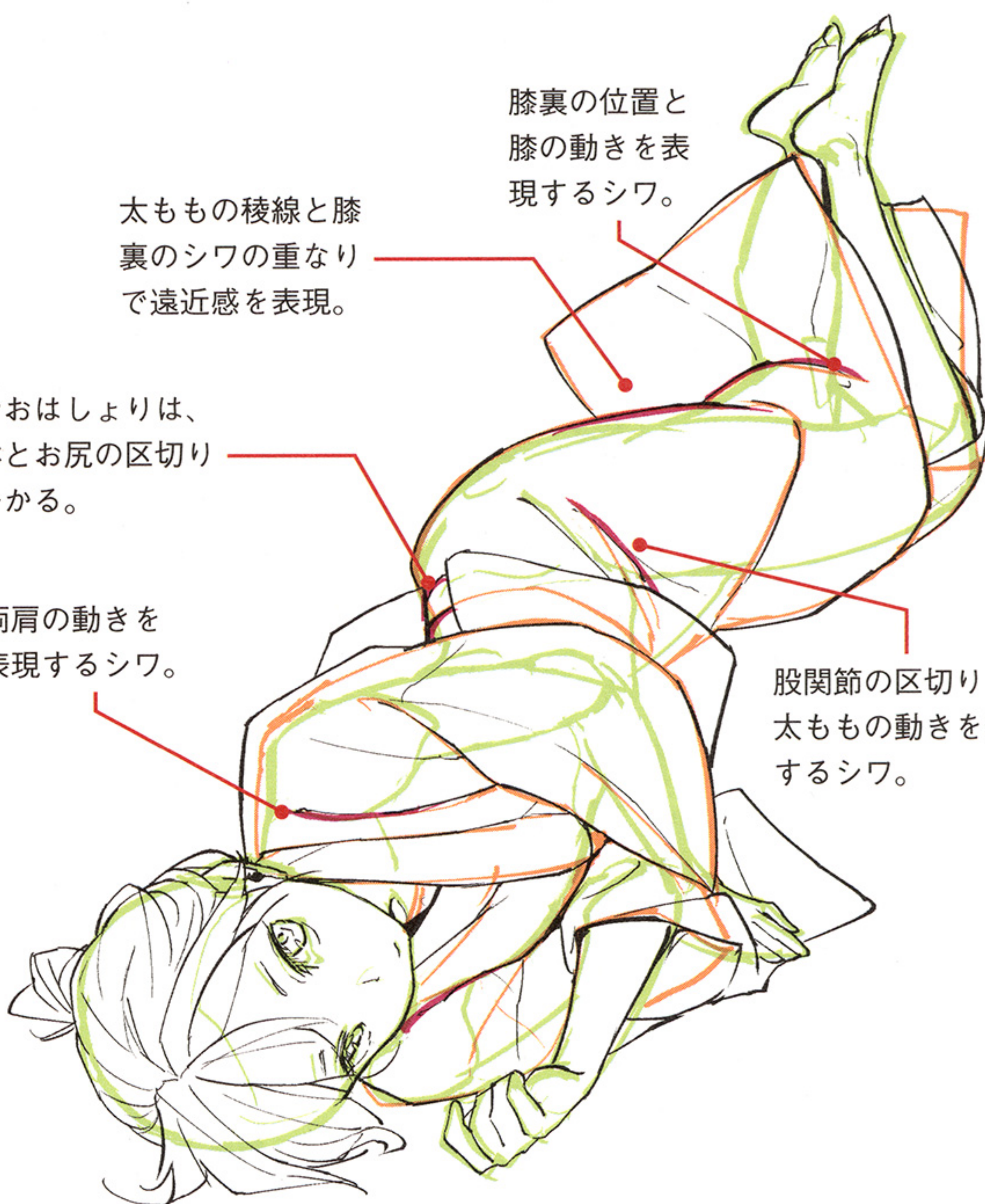
着物と違い、ボディラインに沿わせて描く。

寝る

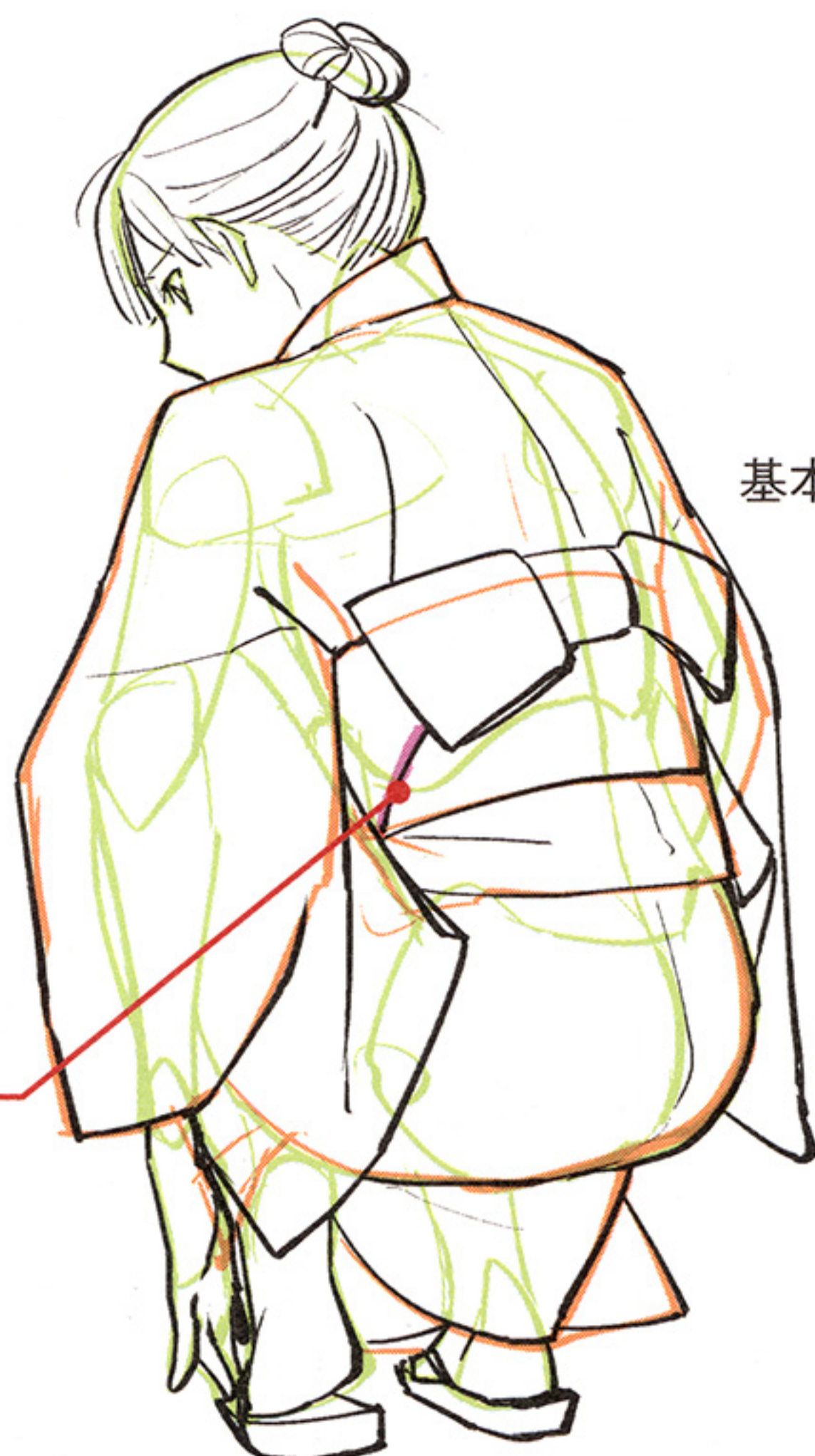
ボディラインが出にくい着物は、遠近感を表現するための線が余り描けませんが、ゆかたは布が薄くボディラインが出やすいので、このような寝ポーズなどでも、自然な表現ができます。

膝裏の位置と膝の動きを表現するシワ。

太ももの稜線と膝裏のシワの重なりで遠近感を表現。

帯やおはしょりは、胴体とお尻の区切りが分かる。

両肩の動きを表現するシワ。

股関節の区切りと、太ももの動きを表現するシワ。

座り

文庫結びでは体の左側にだけこの斜めのラインができる

基本、はだし

ONE POINT

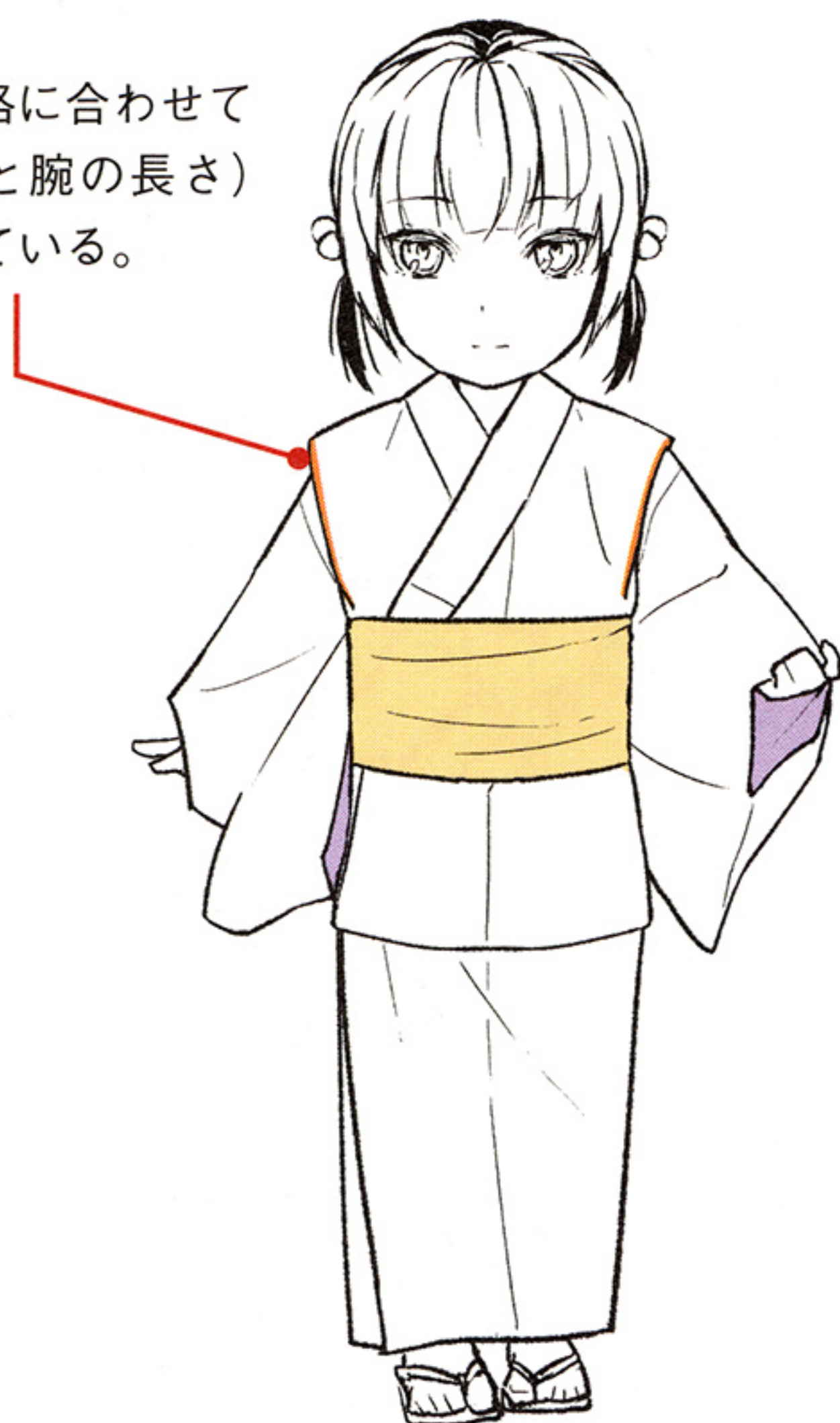
着物とゆかた

ゆかたは目にする機会の多い和服ですが、他の和服と比べると、肩まわりや胸、ウェスト、太ももなど、ボディラインが目立ちます。
振袖や訪問着など、格式のある着物を描く時に、手近にあるゆかたの写真をモデルに使うと、ボリュームが足りず細すぎになるので注意が必要です。

子供のゆかた

子供の着物は、男女とも衿を抜かず、大人に着せてもらいやすいように身八つ口があり、振り口も開いています。これは子供が正装した際の振袖や羽織袴も同じです。

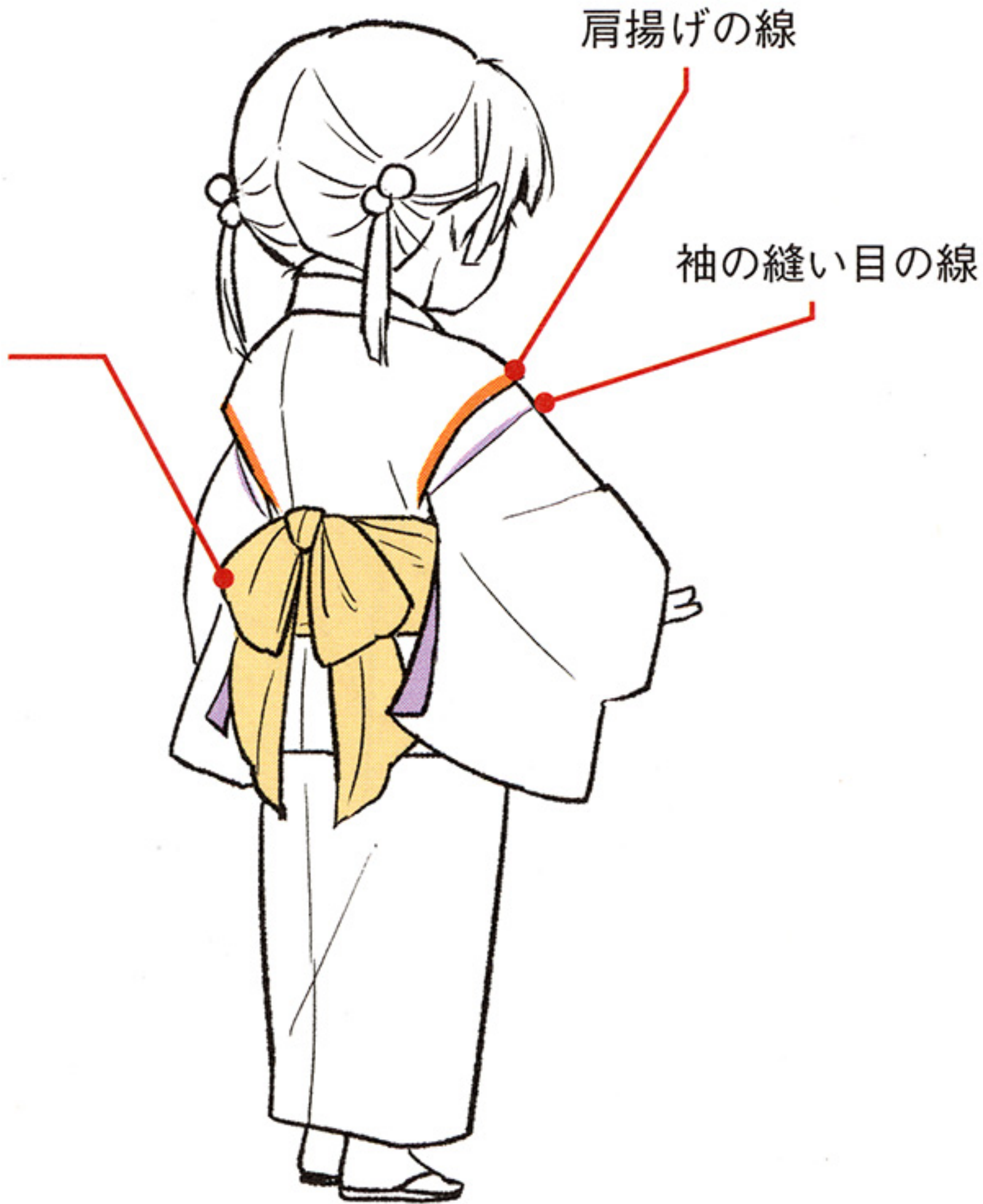
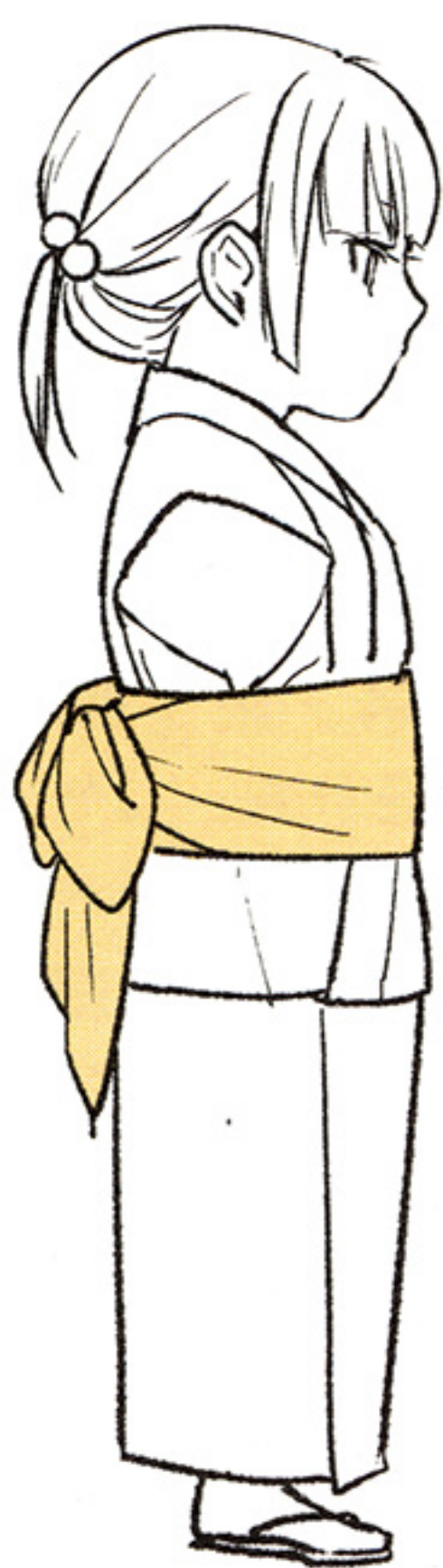
肩揚げ
子供の体格に合わせて桁丈（肩と腕の長さ）を調整している。

腰揚げ
長い着物を、子供の身長に合わせて縫い上げている。
見た目は、おはしょりのようだが、男児の着物にもある。

ONE POINT

肩揚げと腰揚げ
昔は大人サイズの着物を、子供のサイズにするために肩揚げや腰揚げをし、成長に合わせて幅を調整し、大人と変わらない体格の 15～18 歳になると下ろすものでした。
しかし、現在は「子供」のシンボルとしての、装飾的な意味合いが強いです。
また、舞妓さんは 15 歳を過ぎていても肩揚げのある振袖を着ていますが、これは、かつて 10 歳前後でお座敷に上がっていた頃の名残です。

肩揚げの線

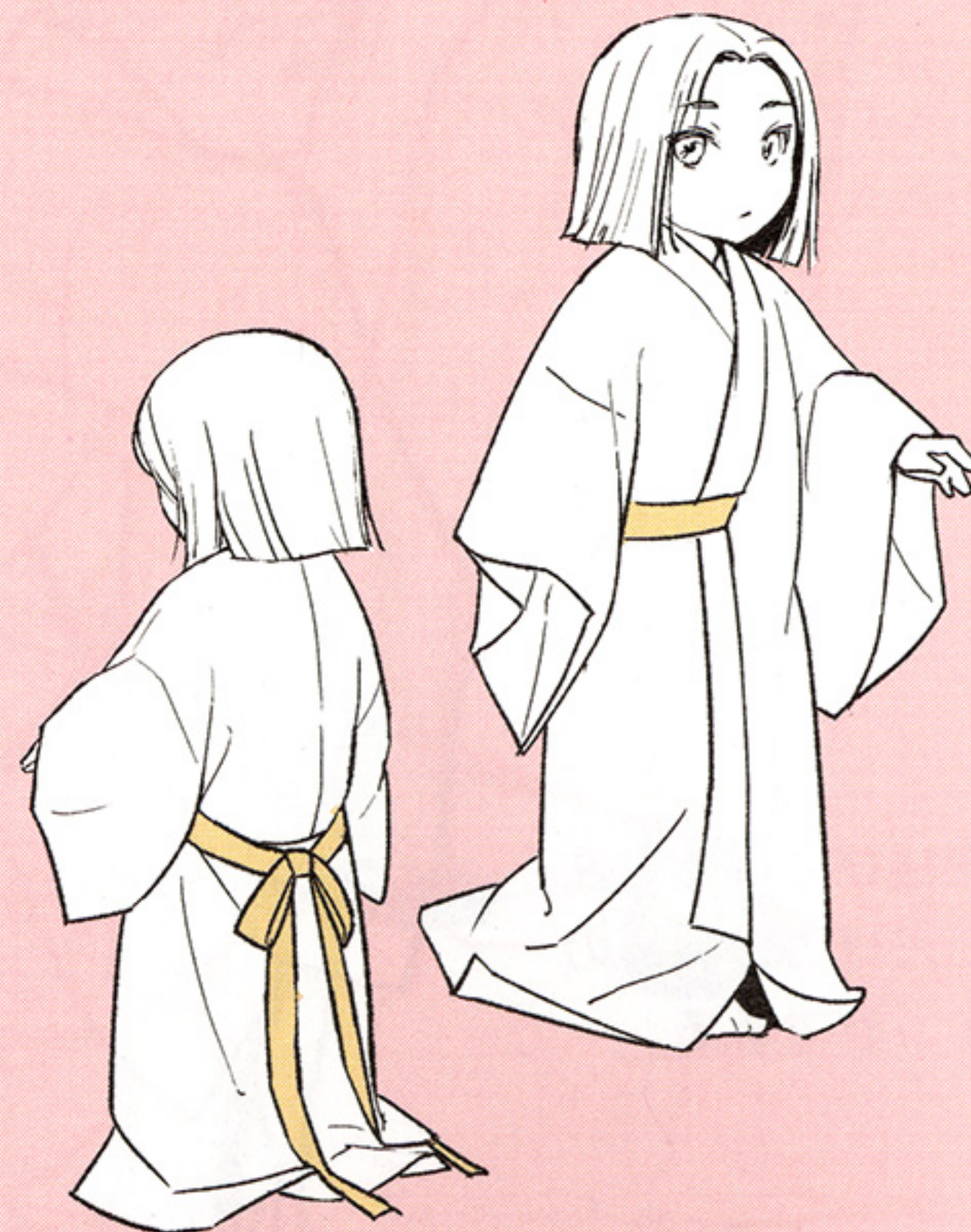
袖の縫い目の線

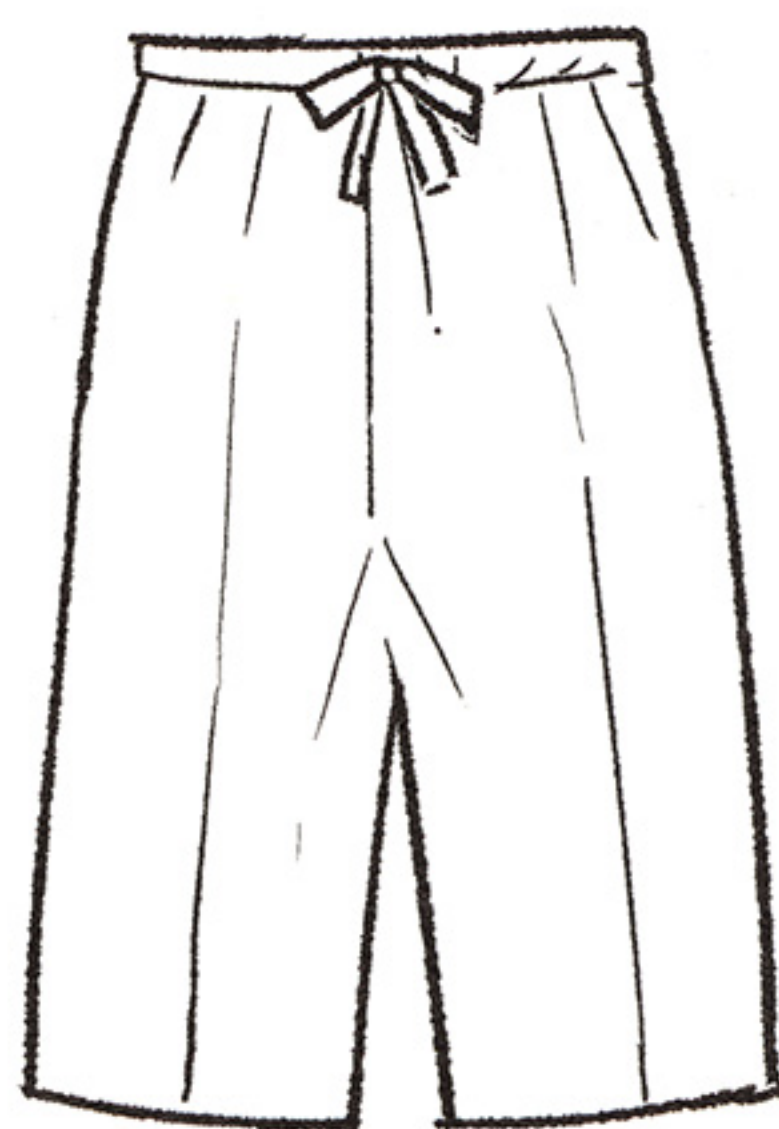
兵児帯
縮緬などでできている非常に柔らかい帯。苦しくないので子供のゆかたに使われる。

ONE POINT

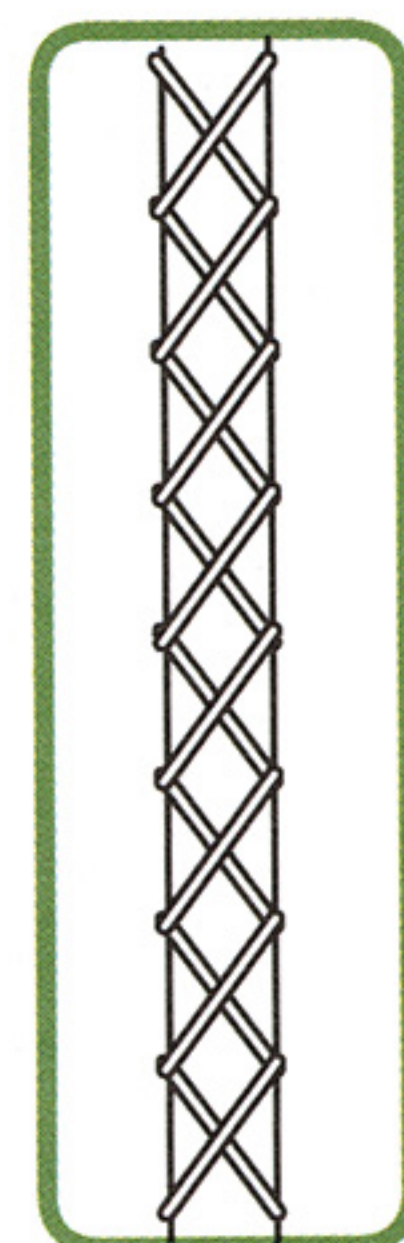
子供服の工夫
楽に着物を着せるため、江戸時代の子供服は、着物の端に「付け帯」という紐を縫い付けて後ろで縛っていました。
7 歳くらいになると別布の帯を使うようになります。
これと同じような服は、中世から見られます。
おもに女児が身に付け、幼い男児も着用したようです。

鎌倉時代の日常の幼児服

甚平

07

ゆかた以上にカジュアルな和服として、甚平があります。
今のような形になってからの歴史は非常に浅く、正式な形というものは特にありません。裏地が無く、袖も広い筒袖で、袖、前身、後身、の縫い目は隙間を作って凧糸で縫われています。とにかく涼しさを追求した作りが特徴です。
着るのも非常に簡単なため、子供や女性もゆかたの代わりに着ることが増えています。

縦方向の真っ直ぐなシワが目立つ。

甚平の原型は江戸時代末期頃の室内着で、袖が無く、丈も長く、それ１枚で着るものだった。
現代の丈の短い甚平には共布で作ったハーフパンツを合わせる。

袖と脇の下の凧糸ステッチ。
もちろん、これもさまざまな縫い方がある。

ONE POINT

肩の凧糸

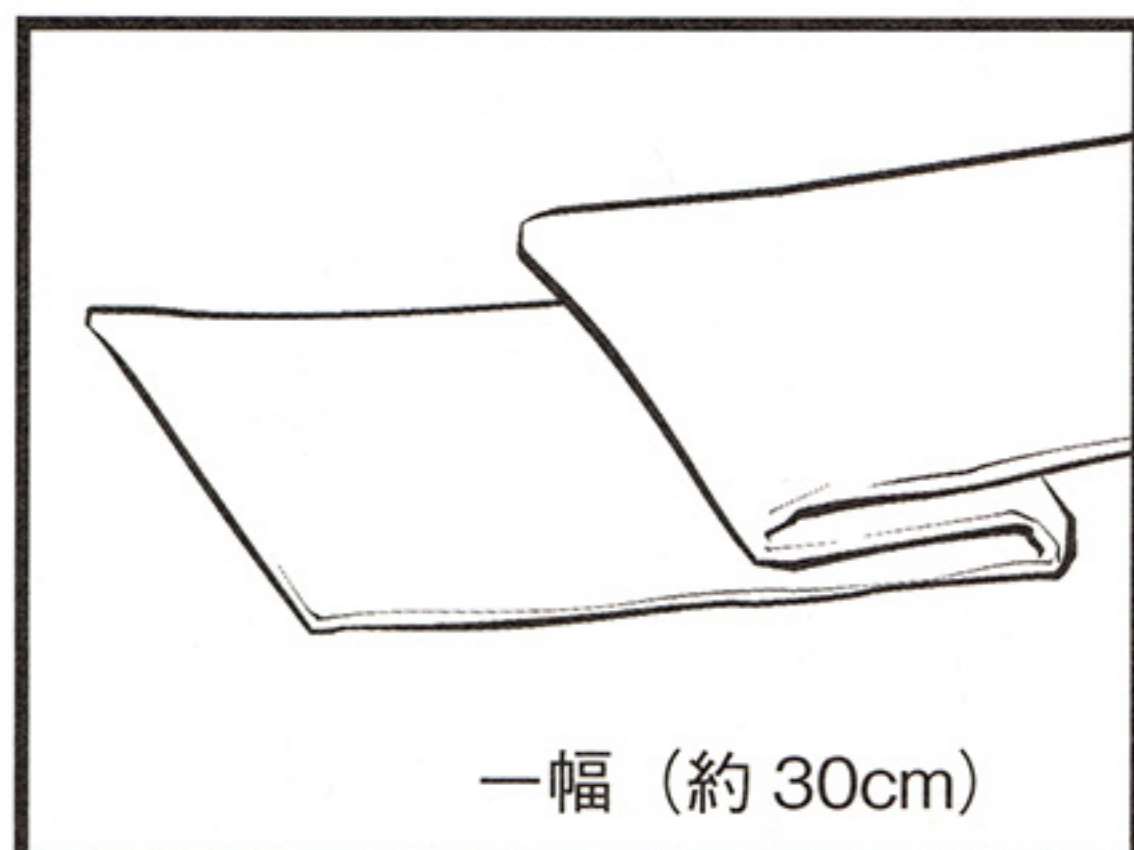
狩衣や巫女装束に似たコスチュームで、肩だけ隙間が開いていたり、凧糸で縫われている絵を見かけることがありますが、古式の着物で甚平のような形をしたものは実際にはありません。

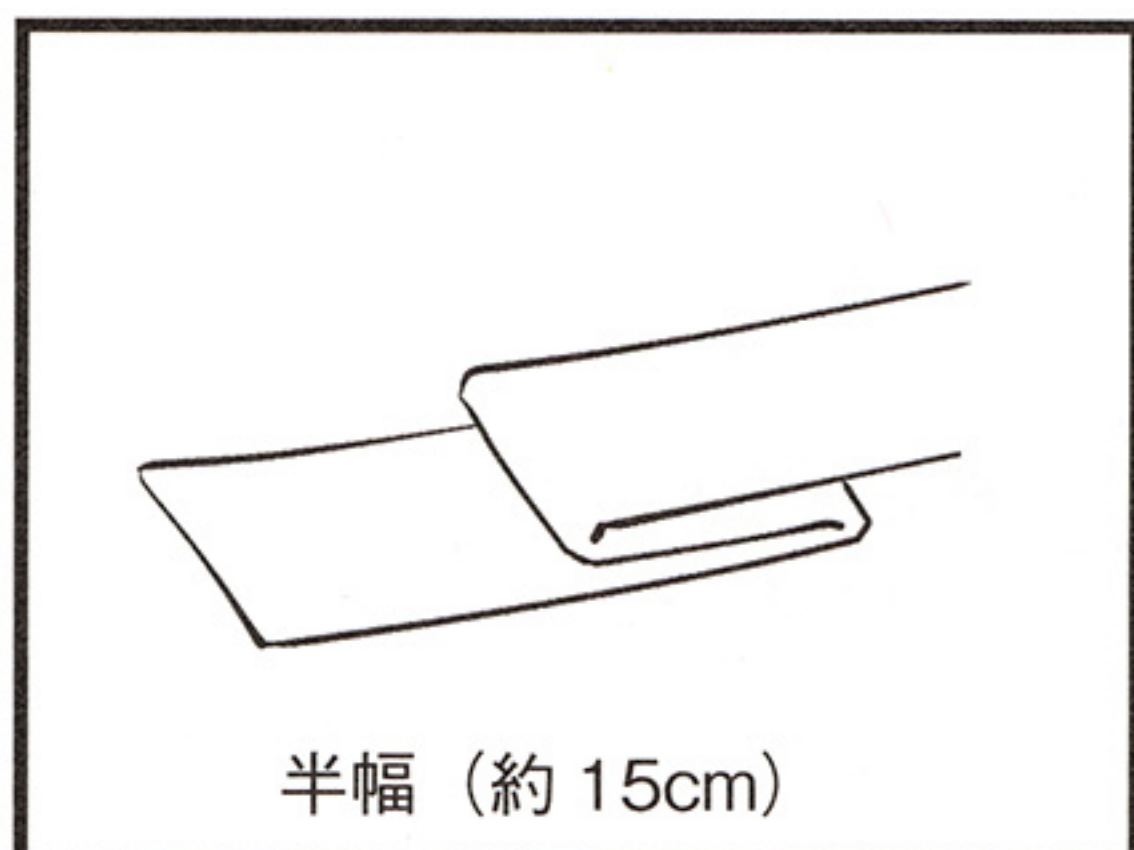
08 帯

時代により流行があり、締め方も多数の派生が生まれ、さまざまな種類があります。
ここでは、現代の帯結びを中心に解説していきます。

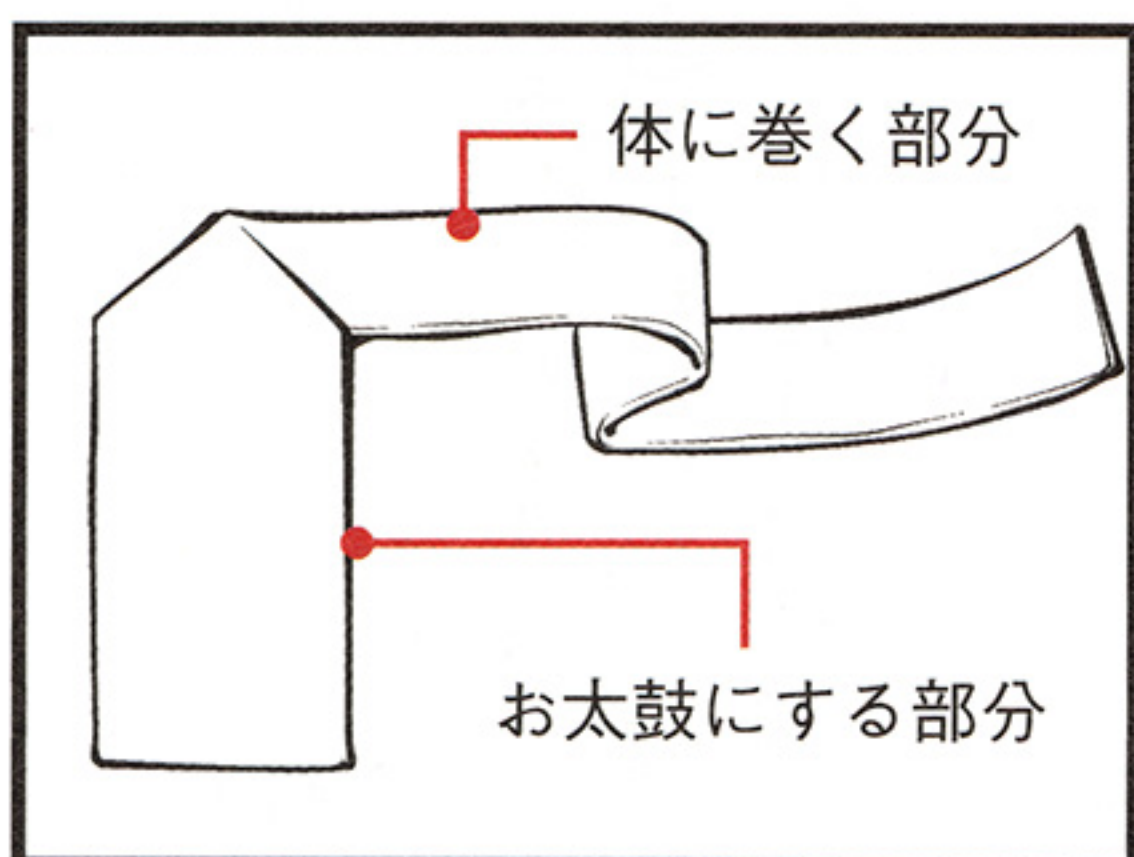
※厳密には、呉服では通常の尺貫法とは別の「鯨尺」（1 尺＝約 38cm）を使用しますが、時代などにより尺貫法・反物幅は様々に変わります。

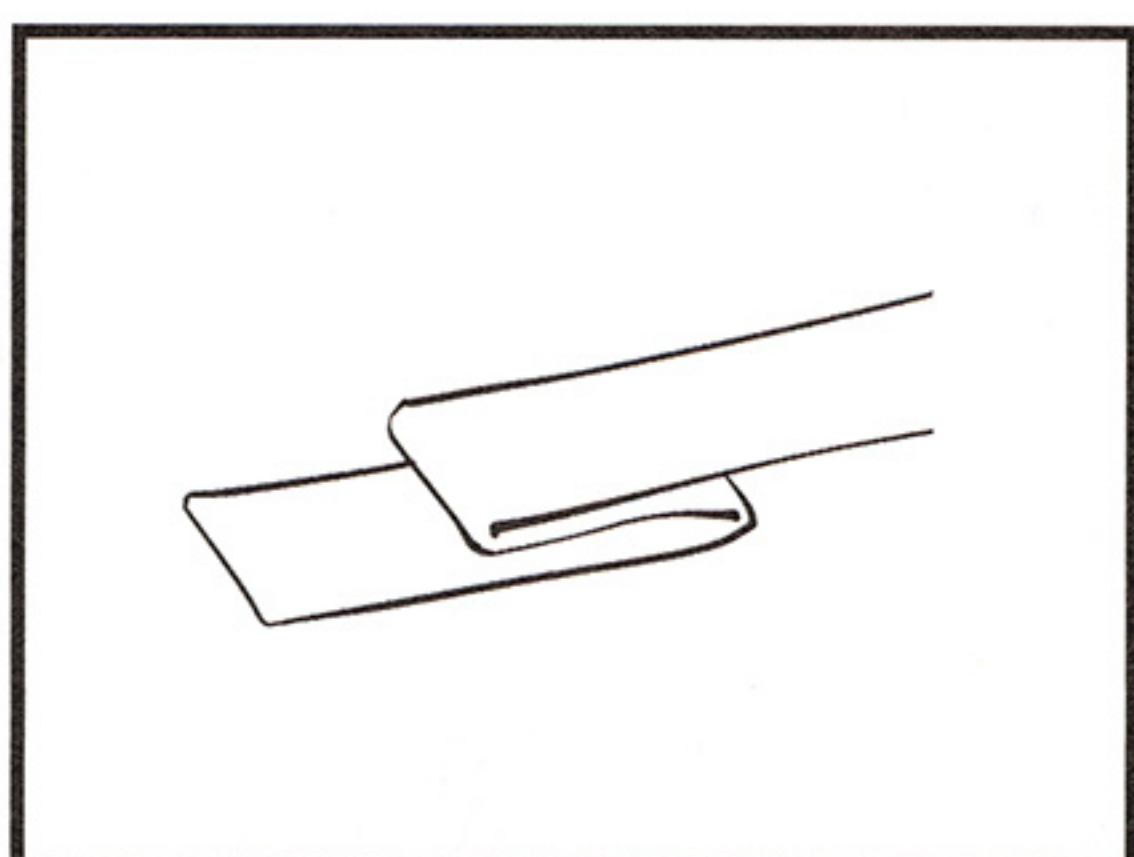
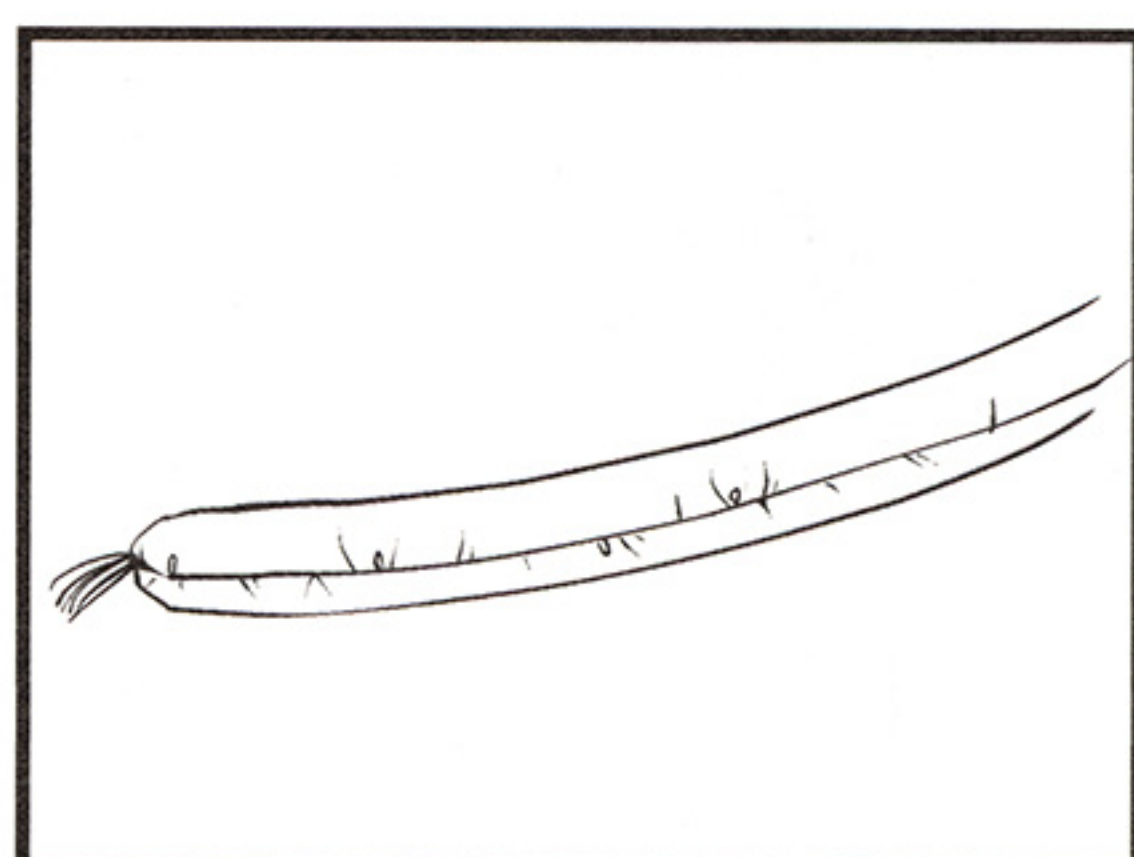
帯の種類

現代の「帯」は、芯（三河木綿など）を入れて縫ったものや、厚い織物のハリのある帯がほとんどです。サイズ、素材、仕立て方はさまざまです。

一幅（約 30cm）

全幅帯（外出、正装用）
江戸後期、女性の帯は幅広になった。体に巻く部分は、体に合わせて半幅ほどに折って巻く。

半幅（約 15cm）

半幅帯（普段着用）
現代の女性も、気軽な装いの際は、半幅帯を使用する。

しごき帯
縫わずに、一幅の布を柔らかいまま、折ったり、手でしごいて使うもの。

体に巻く部分
お太鼓にする部分

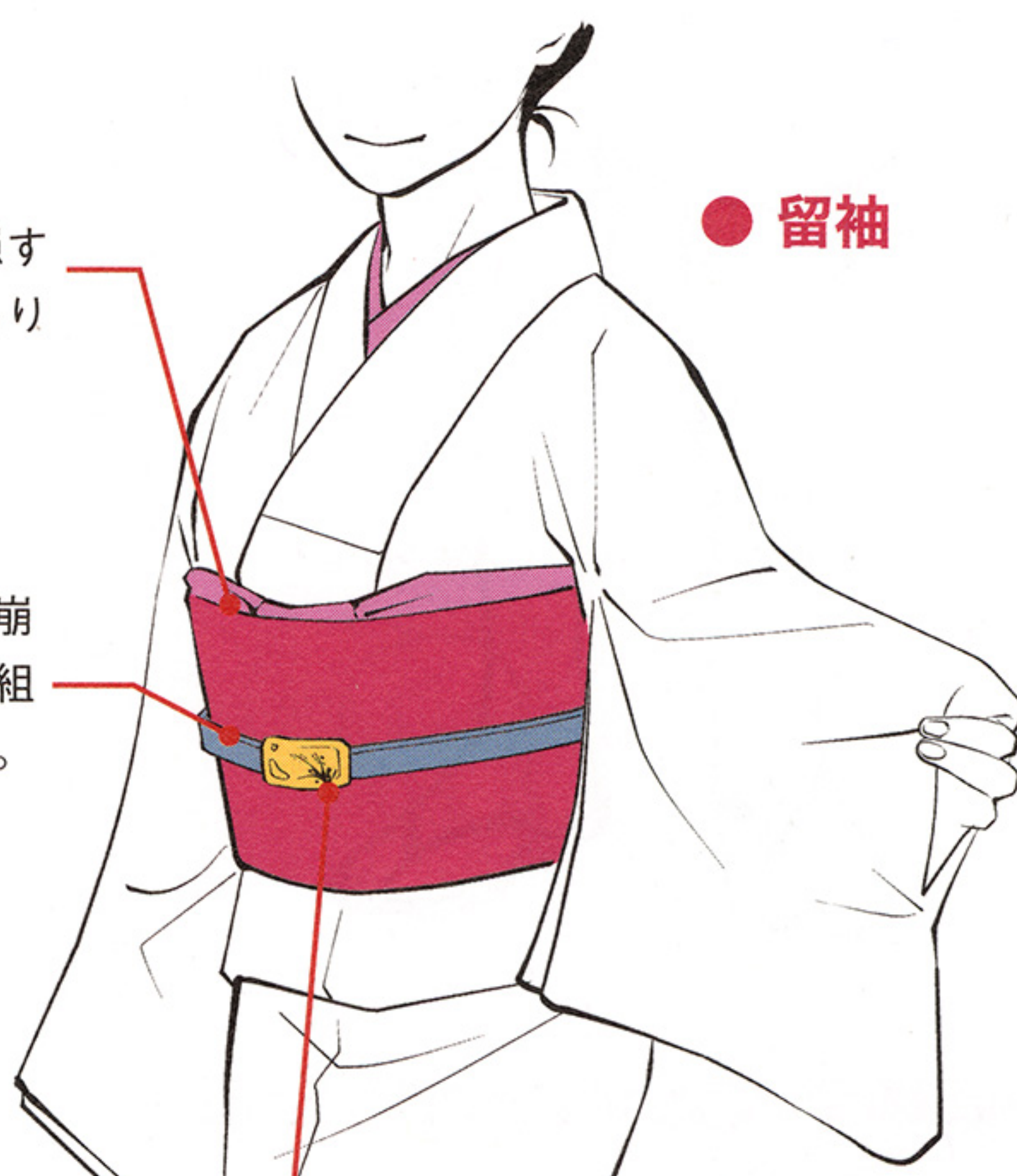
名古屋帯
体に巻く部分だけ半幅に仕立てた、便利な帯。

角帯（男性用）
現代の男性が使う帯。
幅は 6 ～ 12cm 程度でさまざまな幅のものがある。

丸ぐけ帯
綿を布でくるみ、縫った紐。
現在は帯ではなく帯締めとして使用することが多い。

各部の名称

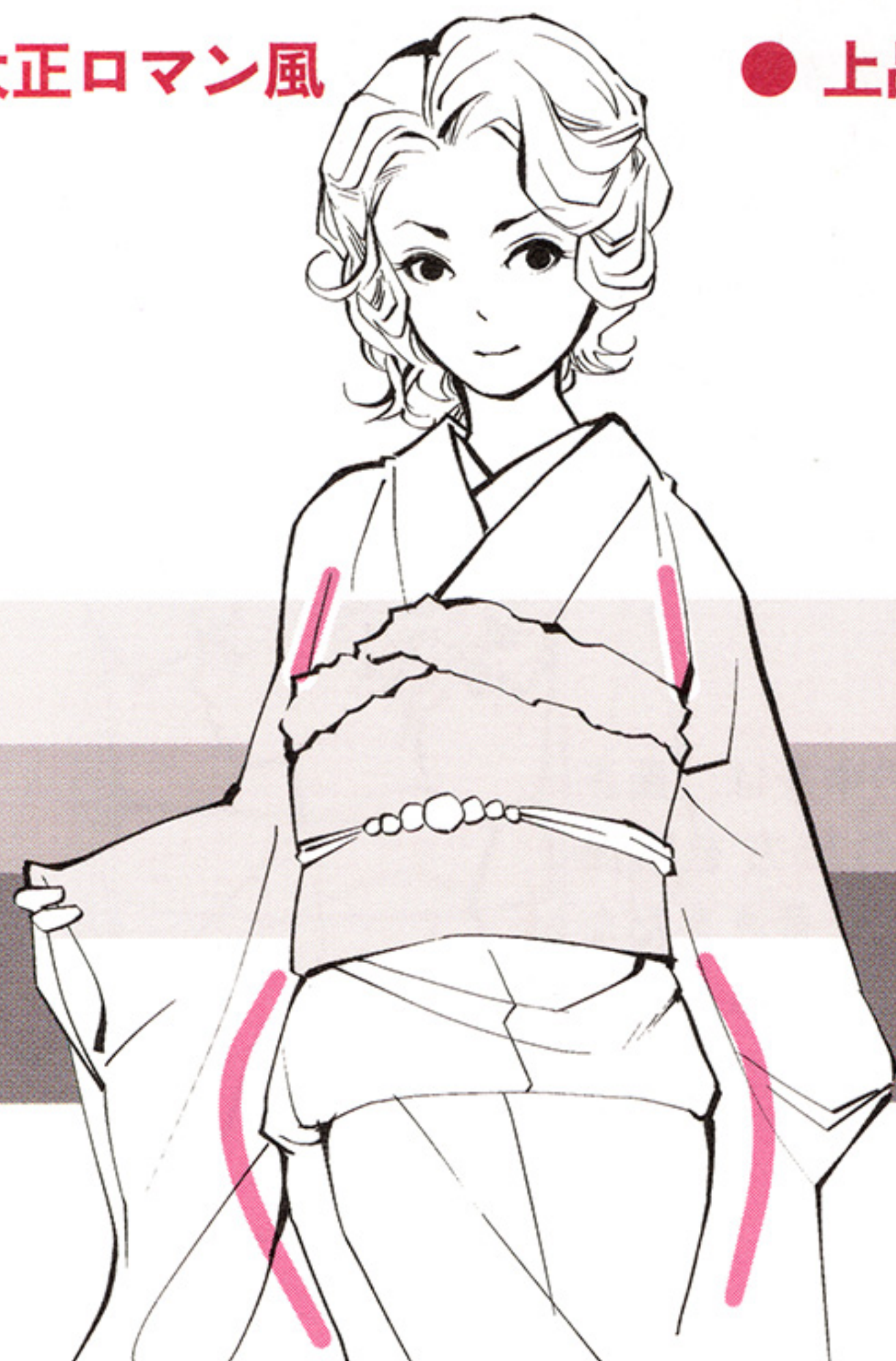
● 振袖

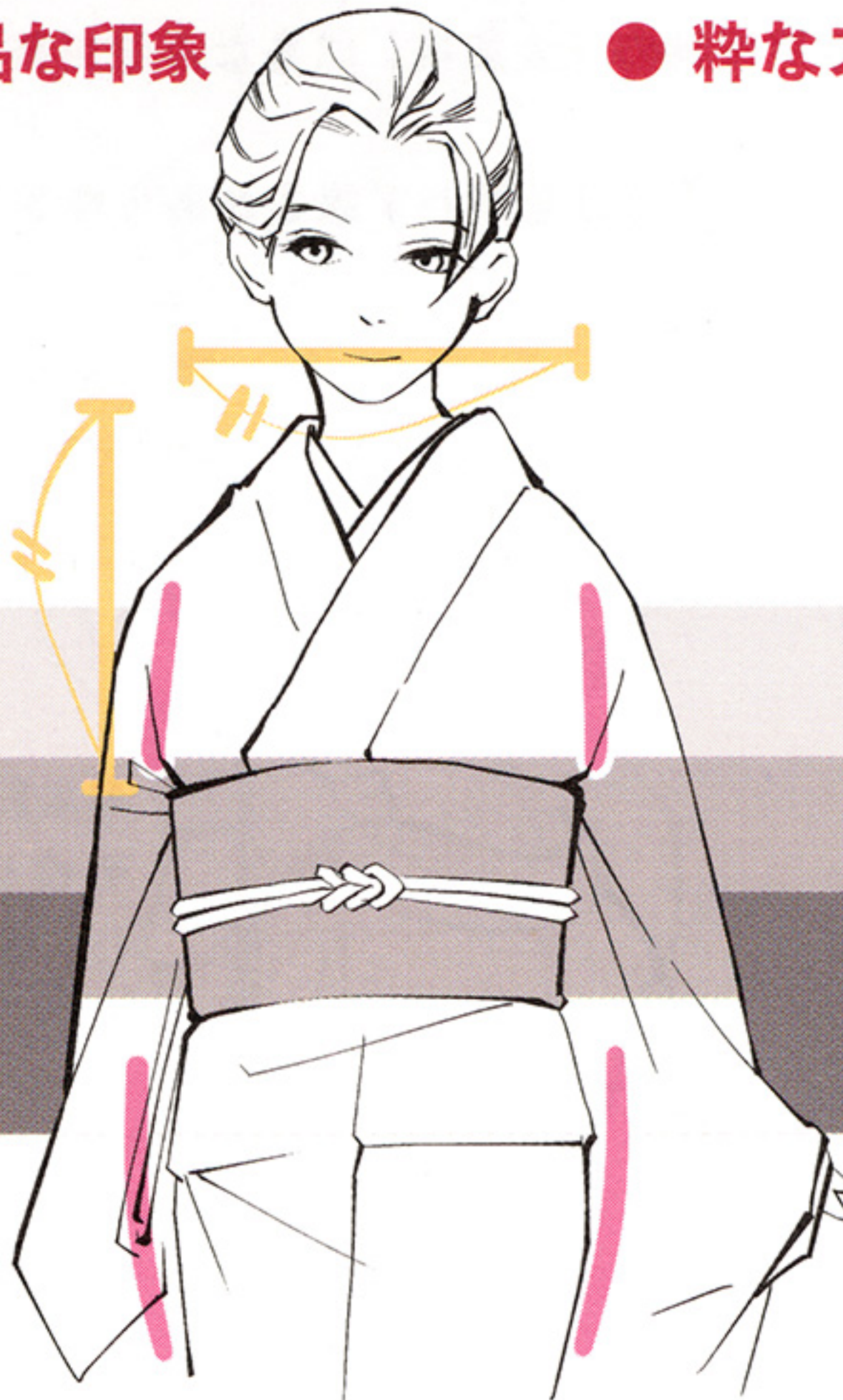
● 留袖

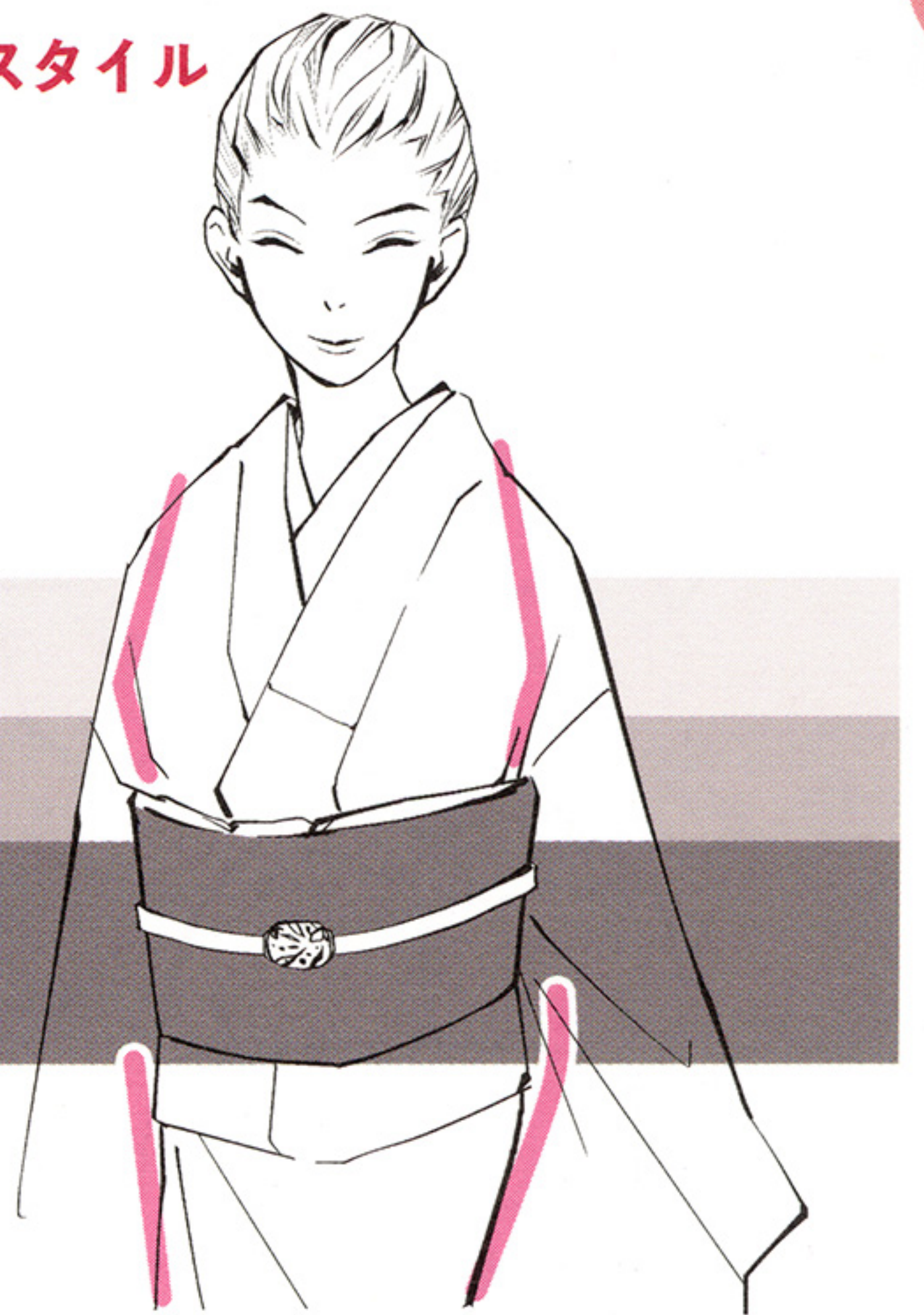
帯揚げ
お太鼓の帯枕を隠すための飾り布。ちりめんや絞りなど。

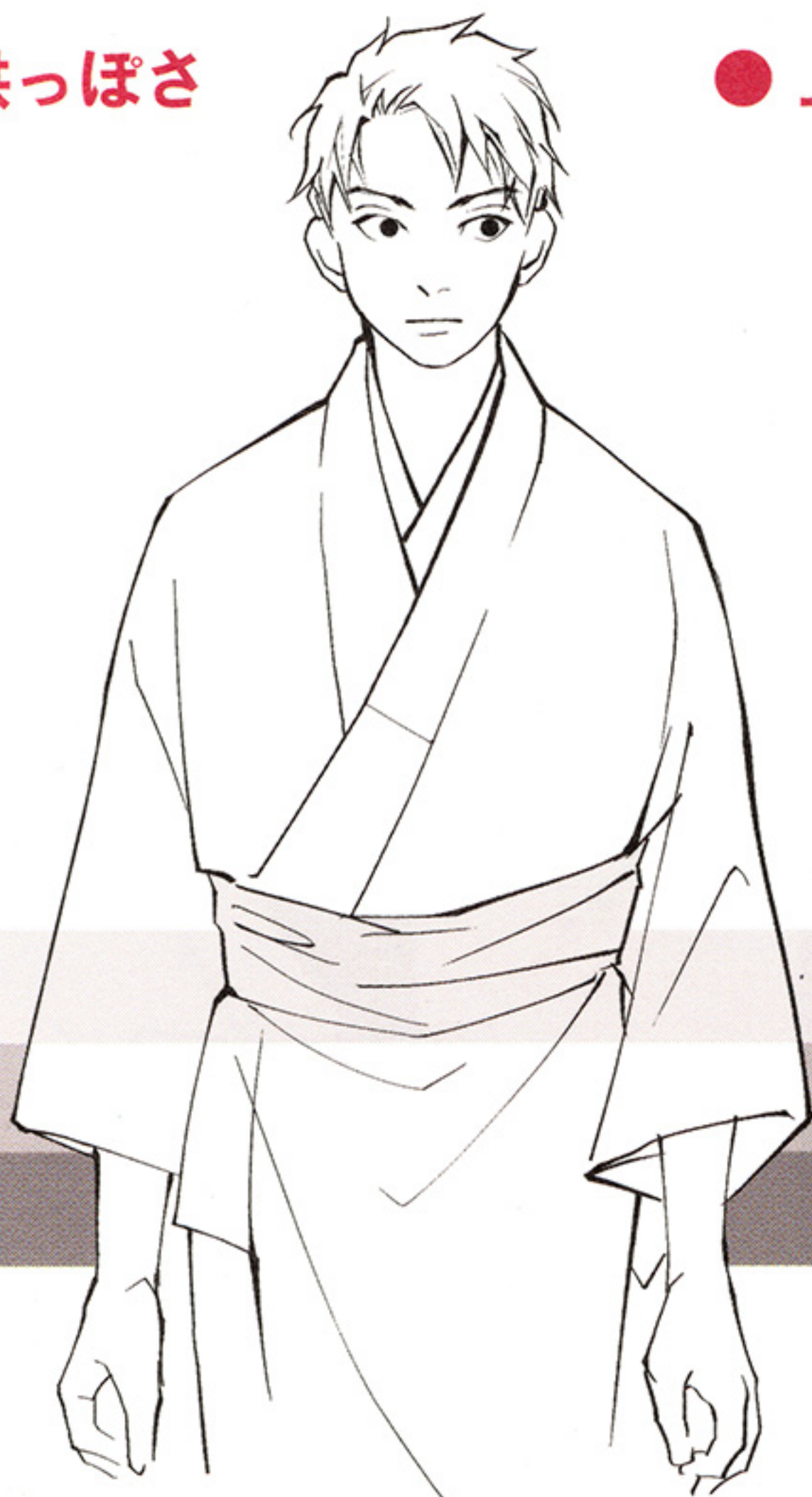
帯締め
帯結びを固定し着崩れを防ぐ紐。絹の組紐や丸ぐけ紐など。

帯留め
帯締めの飾り。
貴金属に宝石、木彫、陶器、蒔絵、蜻蛉玉など。主に平打紐に用いる。

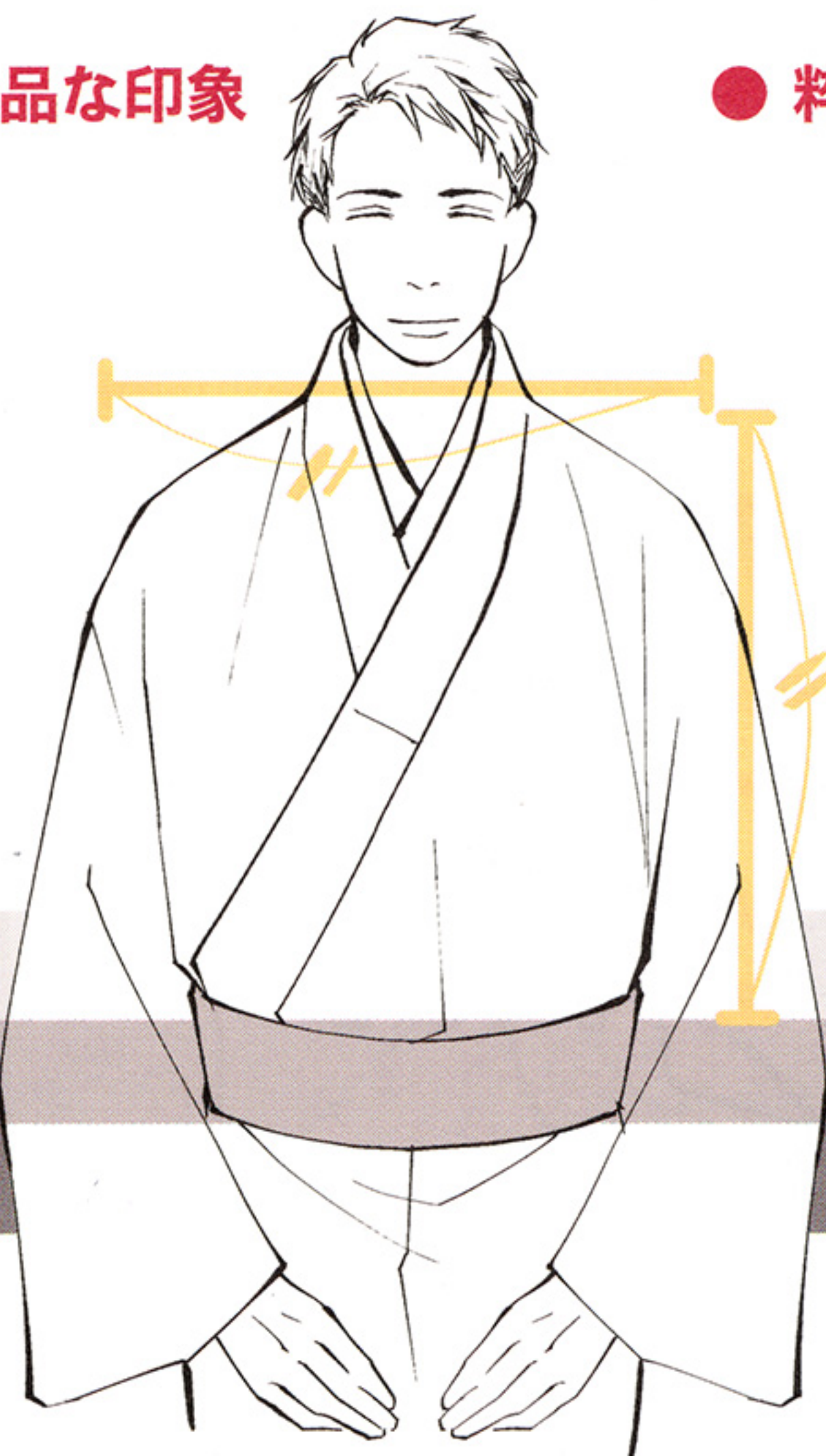
帯の位置

● 大正ロマン風

胸高（むなだか）で、そのぶんヒップ～太ももの丸みを出すと、少女っぽくなる。

● 上品な印象

くびれを埋めるように帯があり、全体的にうまく寸胴になるのが現代風。

● 粋なスタイル

胸の膨らみは抑えめに。
お尻から下がキュッとすぼまるとかっこいい印象になる。

● 子供っぽさ

男性がくびれの位置で帯を締めるのは、子供の時だけ。
成人男性は、胸高すぎるると不格好なので注意。

● 上品な印象

「肩幅」と「帯までの高さ」を「1：1」で意識すると、きちんとした着付けの雰囲気になる。

● 粋なスタイル

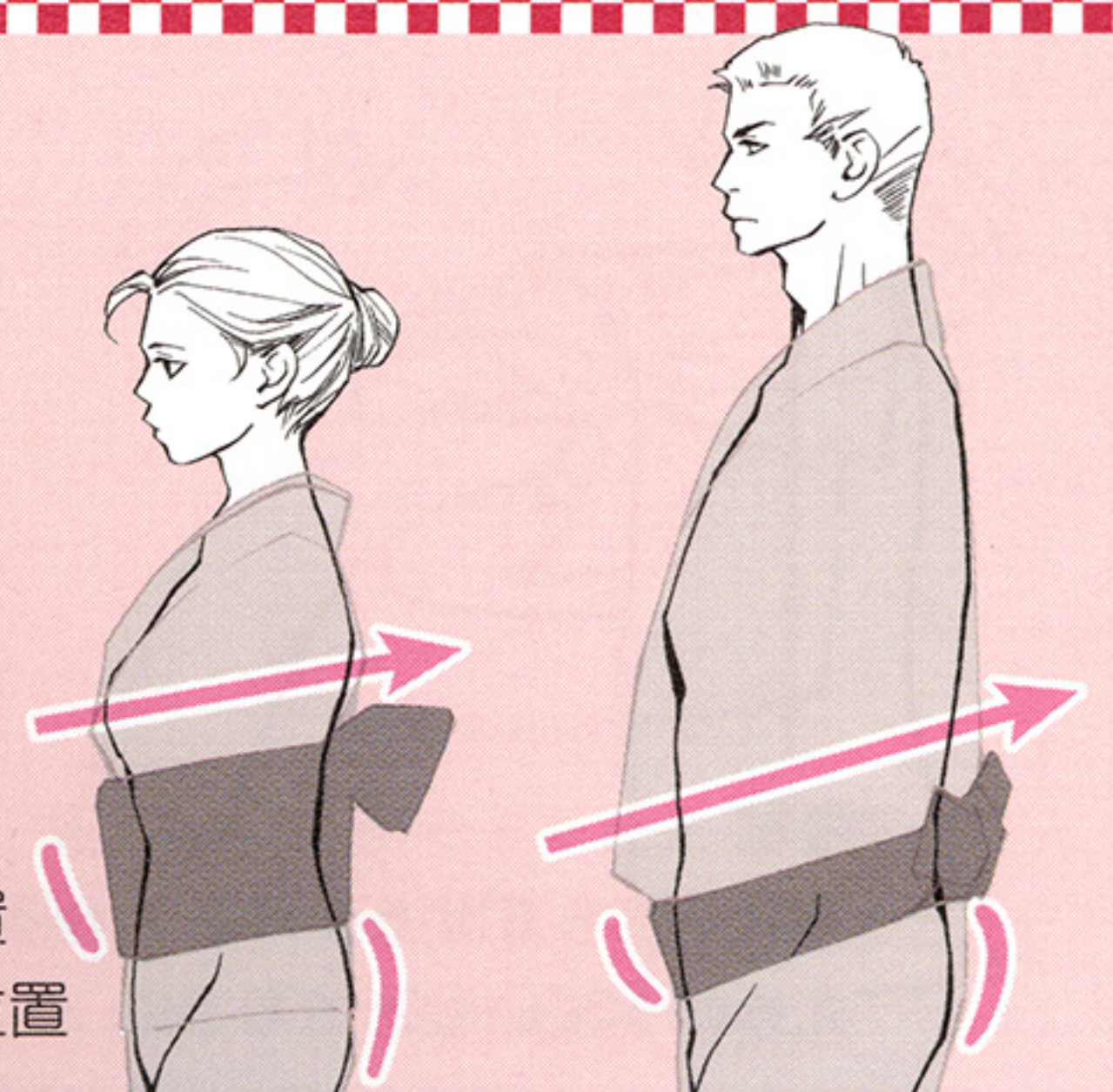
少し下に締めると、粋な雰囲気になる。下げ過ぎると、だらしなくなってしまうので注意。

デフォルメキャラは、帯の幅を広く、胸高めに描くと華やかでかわいい感じになる。

ONE POINT

帯は背中側が上がる

帯は、人体構造上、自然に背中側が上がり気味になります。
実際に、太めのベルトをゆるく腰に巻いてみると似た感じがつかめます。

後…お尻に乗っかる位置
前…お腹を持ち上げる位置

主な帯の締め方

● お太鼓結び

江戸時代後期、江戸は亀戸天神の「太鼓橋」にちなみ深川芸者が考案し、非常に革新的な帯結びだったため、全国に流行したといわれています。
200年経った現在でも、年齢、身分を問わず誰もがあらゆるシーンで結う、最も一般的といっていい帯結びです。

横・斜めからだとお太鼓の中が見えるので、構造を知っていれば簡単に描けます。

お太鼓の中身は、長さや模様の出方を調節し、余った長さをたたんで入れているだけ。

● 手順と構造

※時代、身分、地域、年齢、TPOにより形状・種類・左右などは異なるので、一例を紹介します。

1 体に巻く
何回巻くかは、結び方やTPO、帯の長さなどにより異なる。

手
たれと結んで帯結びを支えるため、初めに数10cmとっておく側。

たれ
飾り結び（ここでは太鼓）になる側

名古屋帯など、はじめからお太鼓になるところに、メインの模様が来るようデザインされている帯が多い

2 ギュッと締める
※たたんで留めたり、結んだり、色々な方法があります。

手

たれ

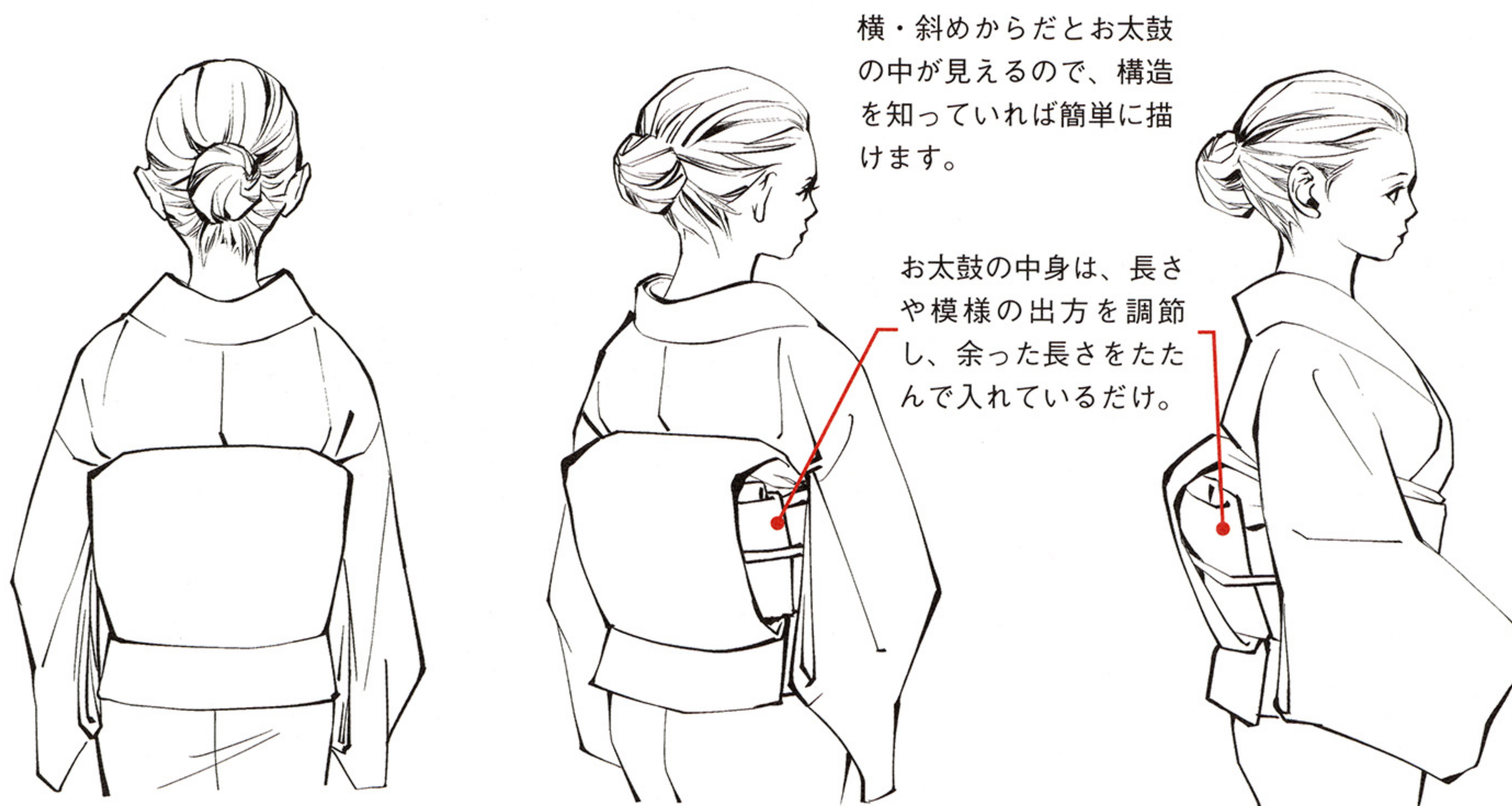
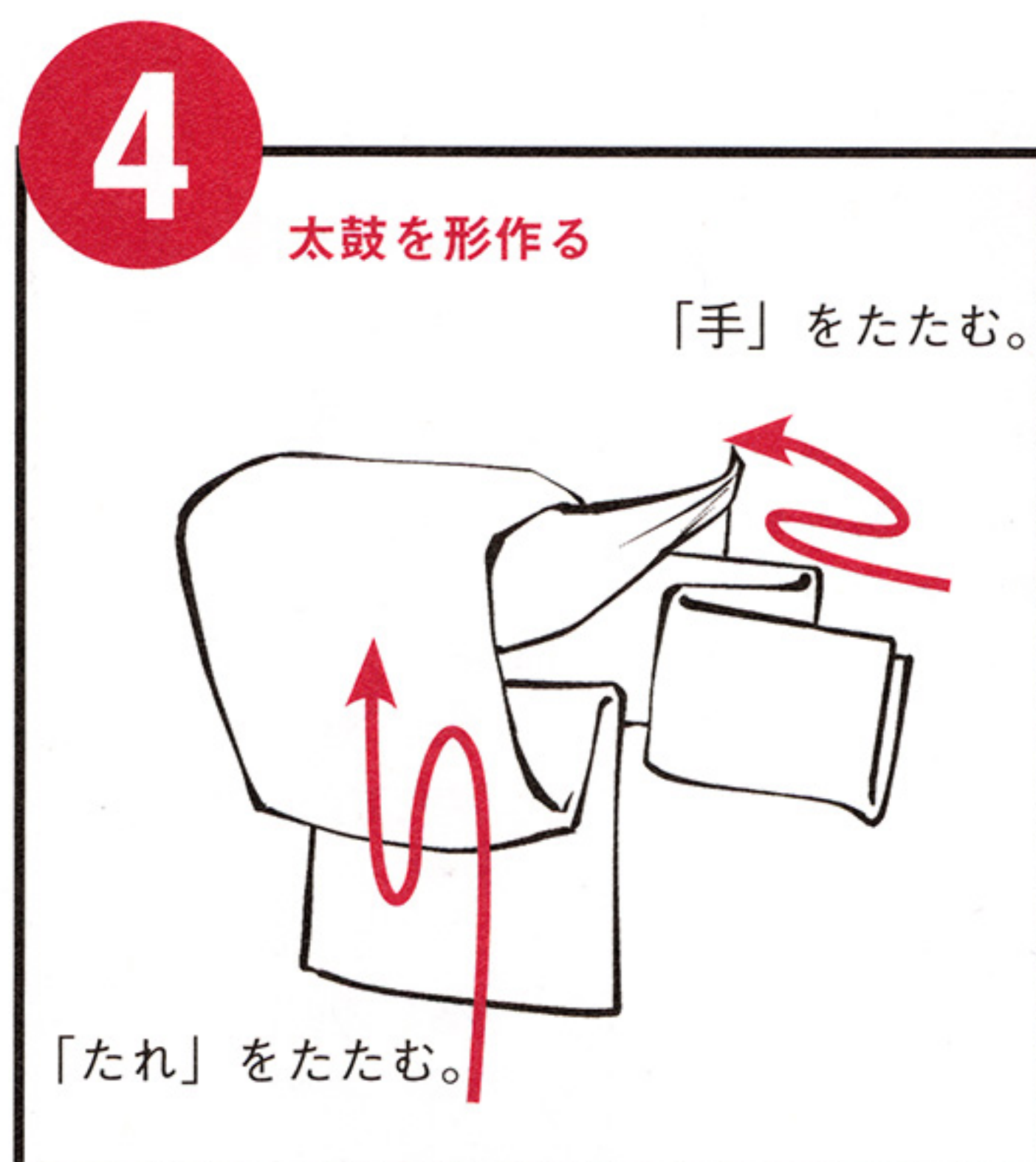
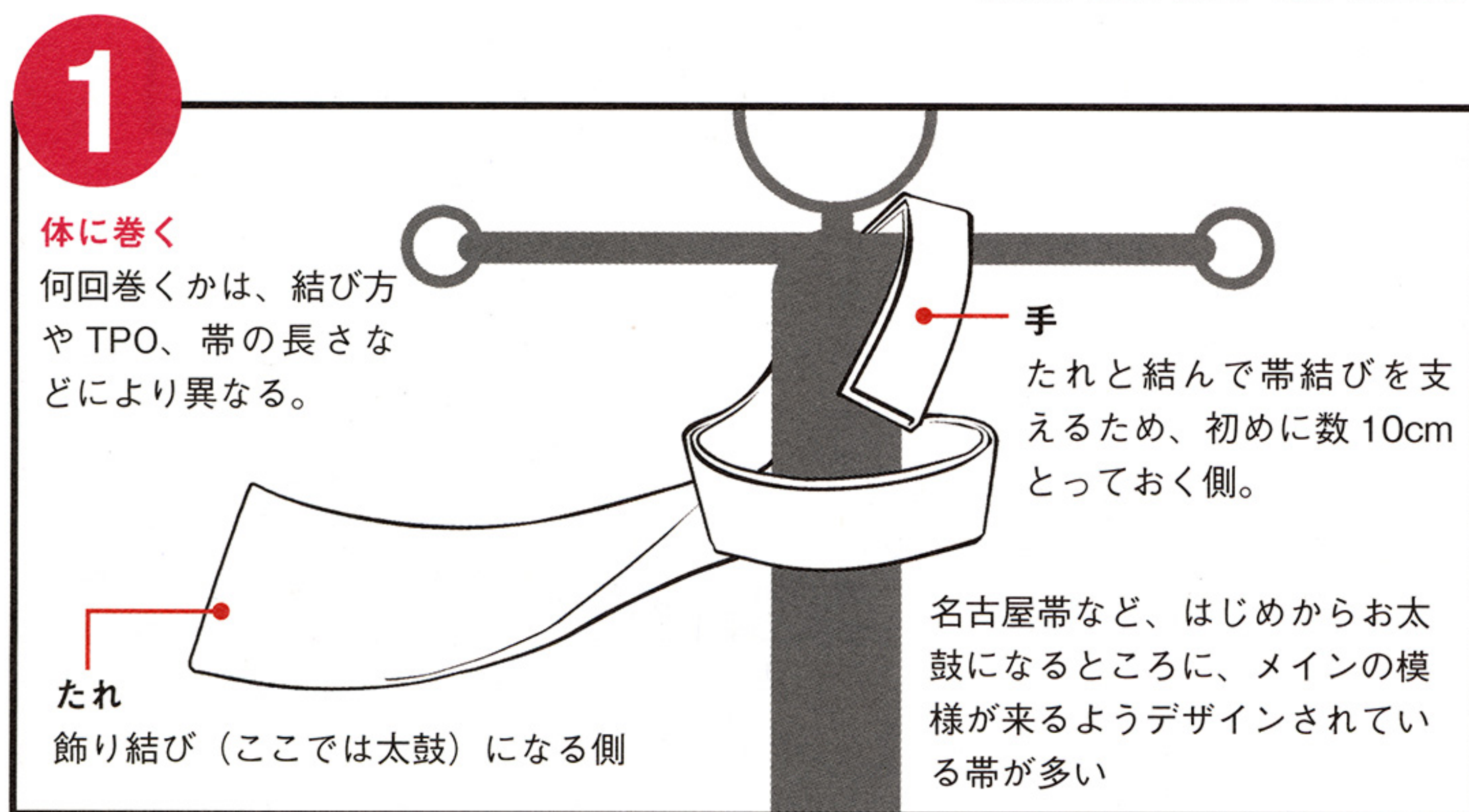
3 帯揚げに帯枕をくるんで結ぶ

帯枕
太鼓を膨らませるために入れる
丸めた手拭いなどでもOK。

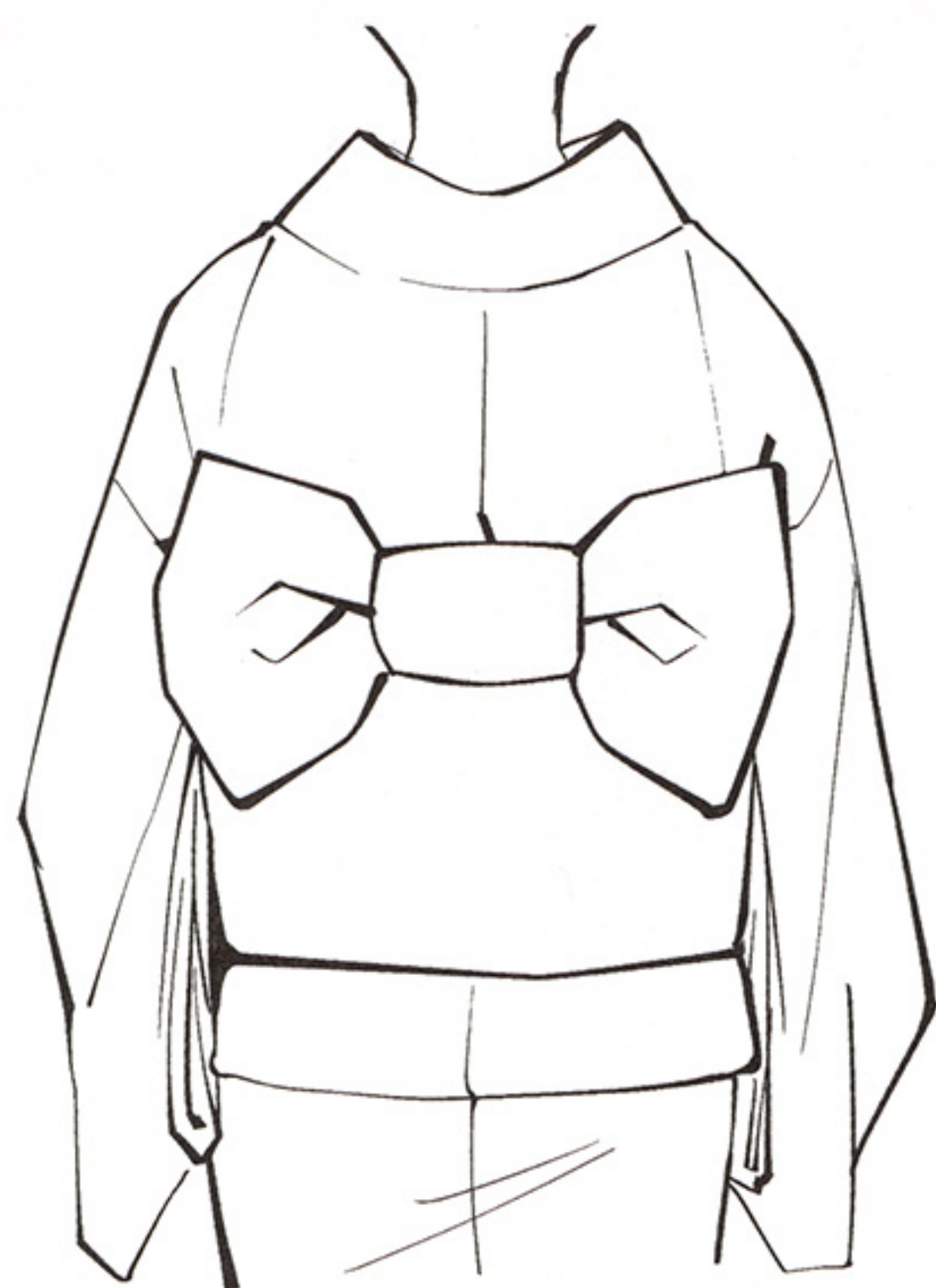
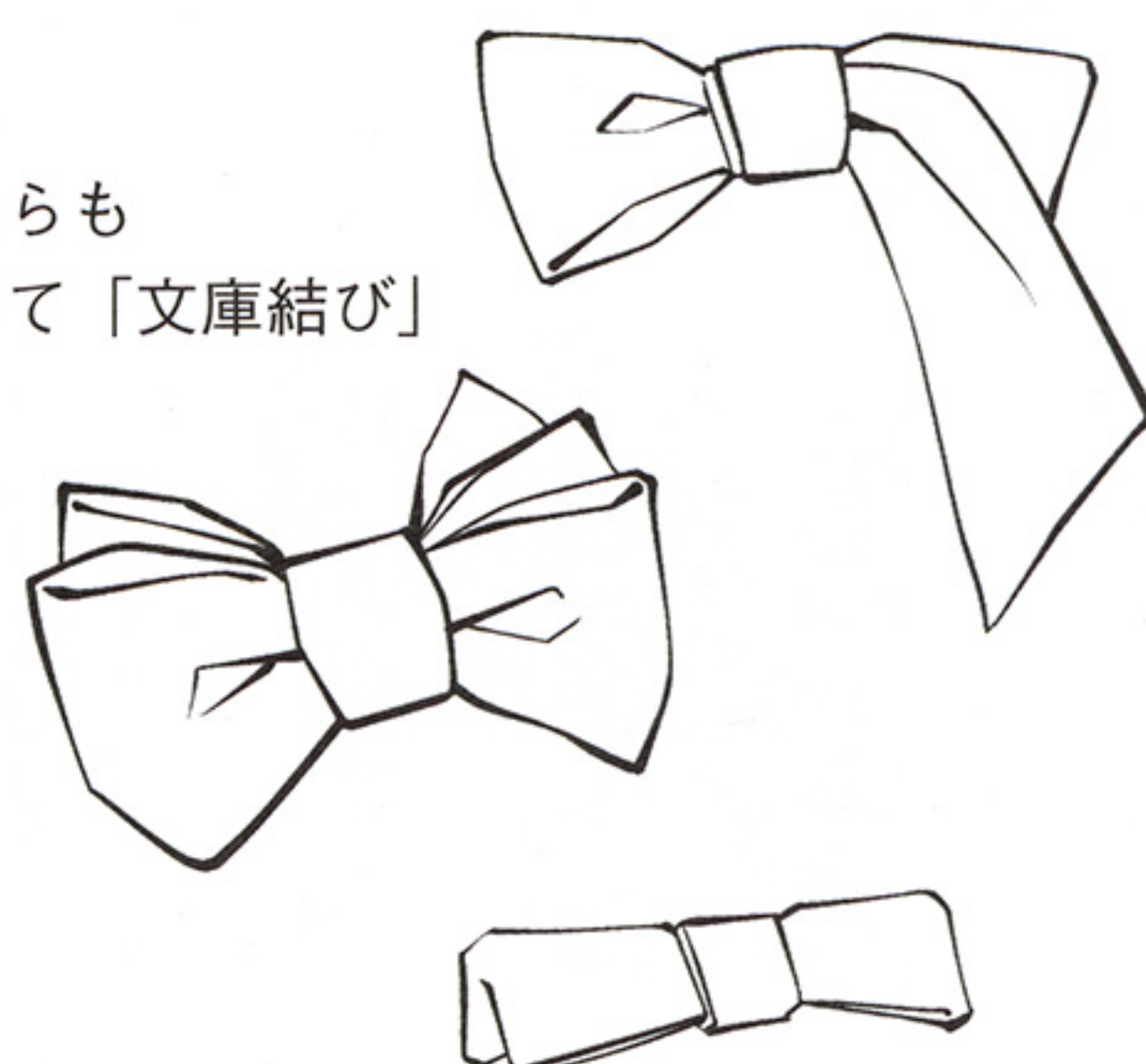
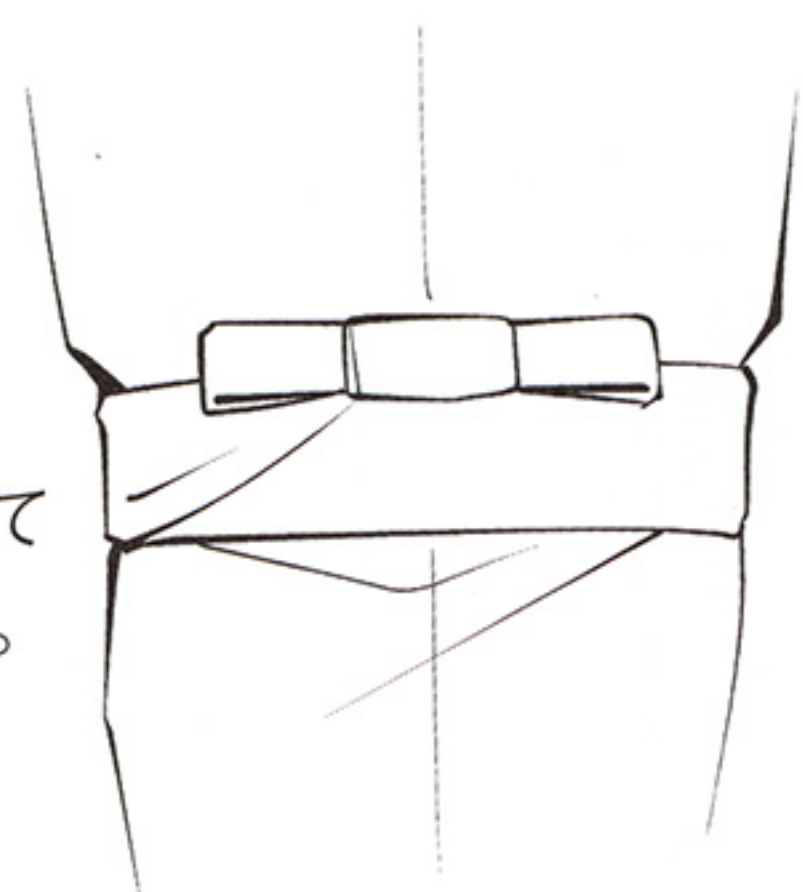
4 太鼓を形作る

「手」をたたむ。

「たれ」をたたむ。

5 帯締めで固定して完成

※実際の着付けでは、このあたりで仮紐やクリップなどを使い、いくつかの手順を踏みます。

文庫結び

ゆかたに半幅帯で結うのにとても簡単な蝶結びです。
それだけでなく帯によっては格調高い装いにも、男帯なら袴下にもなり、アレンジも幅広く、基本の帯結びです。

これらも
すべて「文庫結び」

男性の袴下
この文庫部分に、
後腰のヘラをひっかけて
乗せるように袴を穿く。

武家女性などの文庫
現在の花嫁の帯結び。

手順と構造

※時代、身分、地域、年齢、TPOにより形状・種類・左右などは異なるので、一例を紹介します。

1 体に巻く

手
たれ

2 ギュッと結ぶ

手
たれ

3 羽根を作る

「たれ」をたたんで「羽根」を作る。

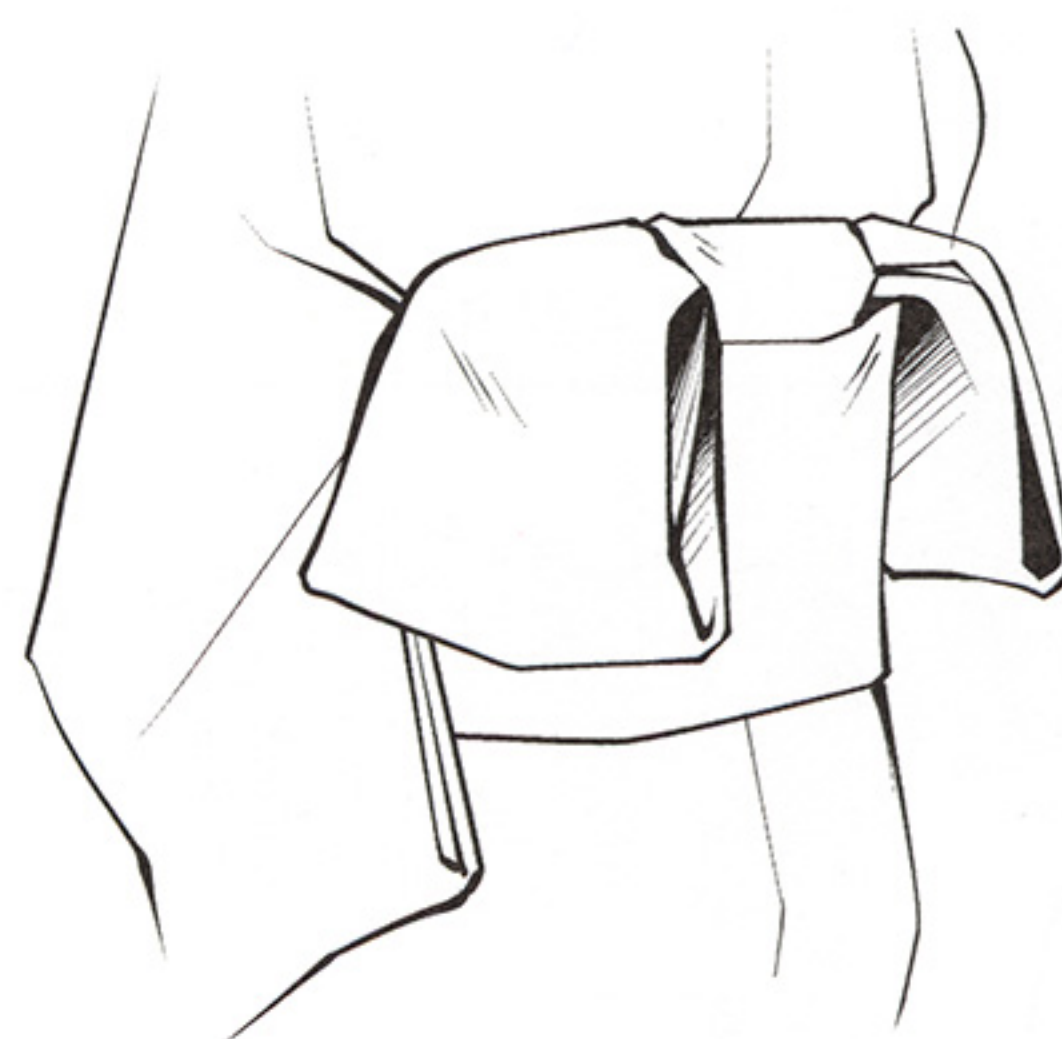
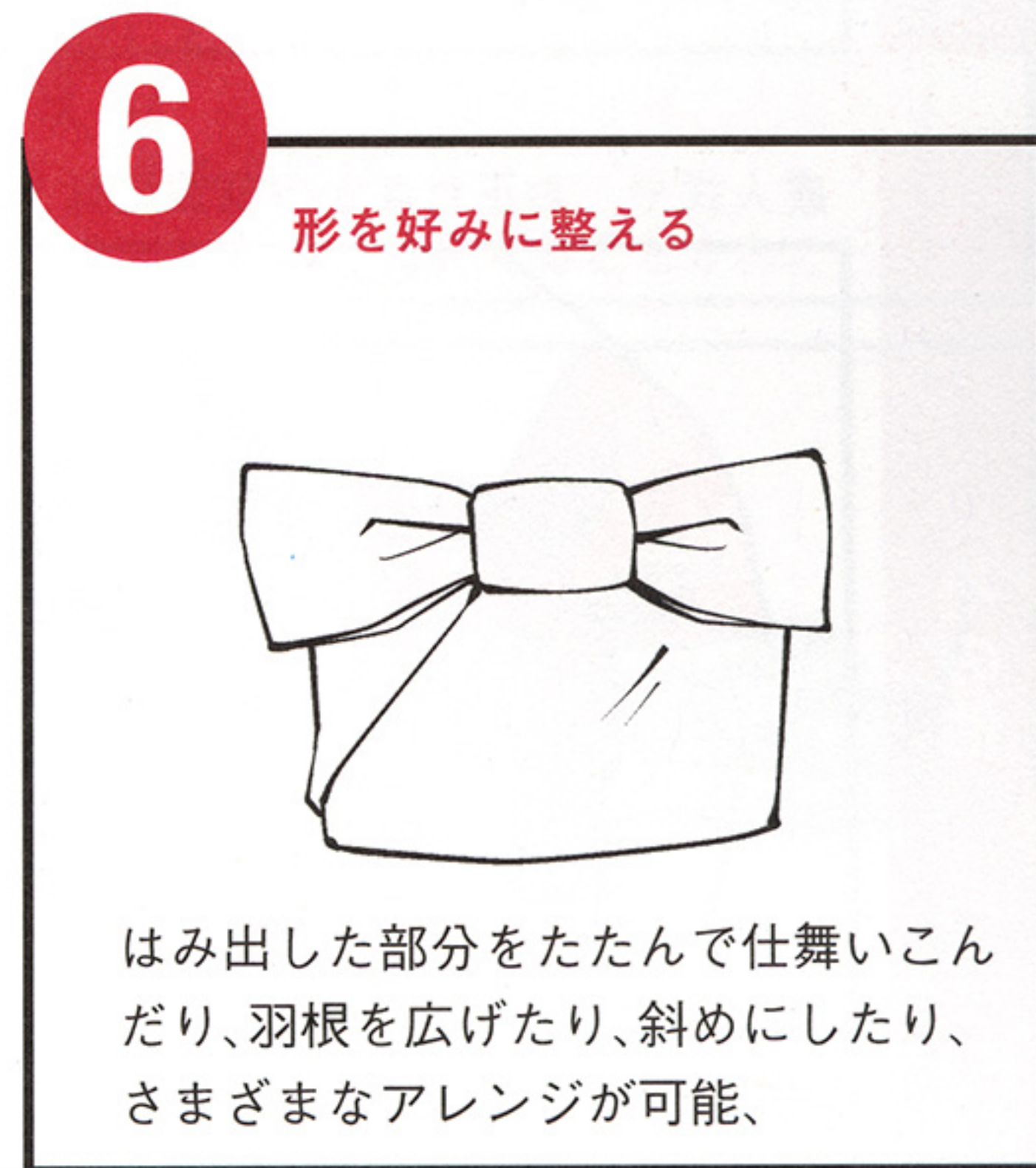
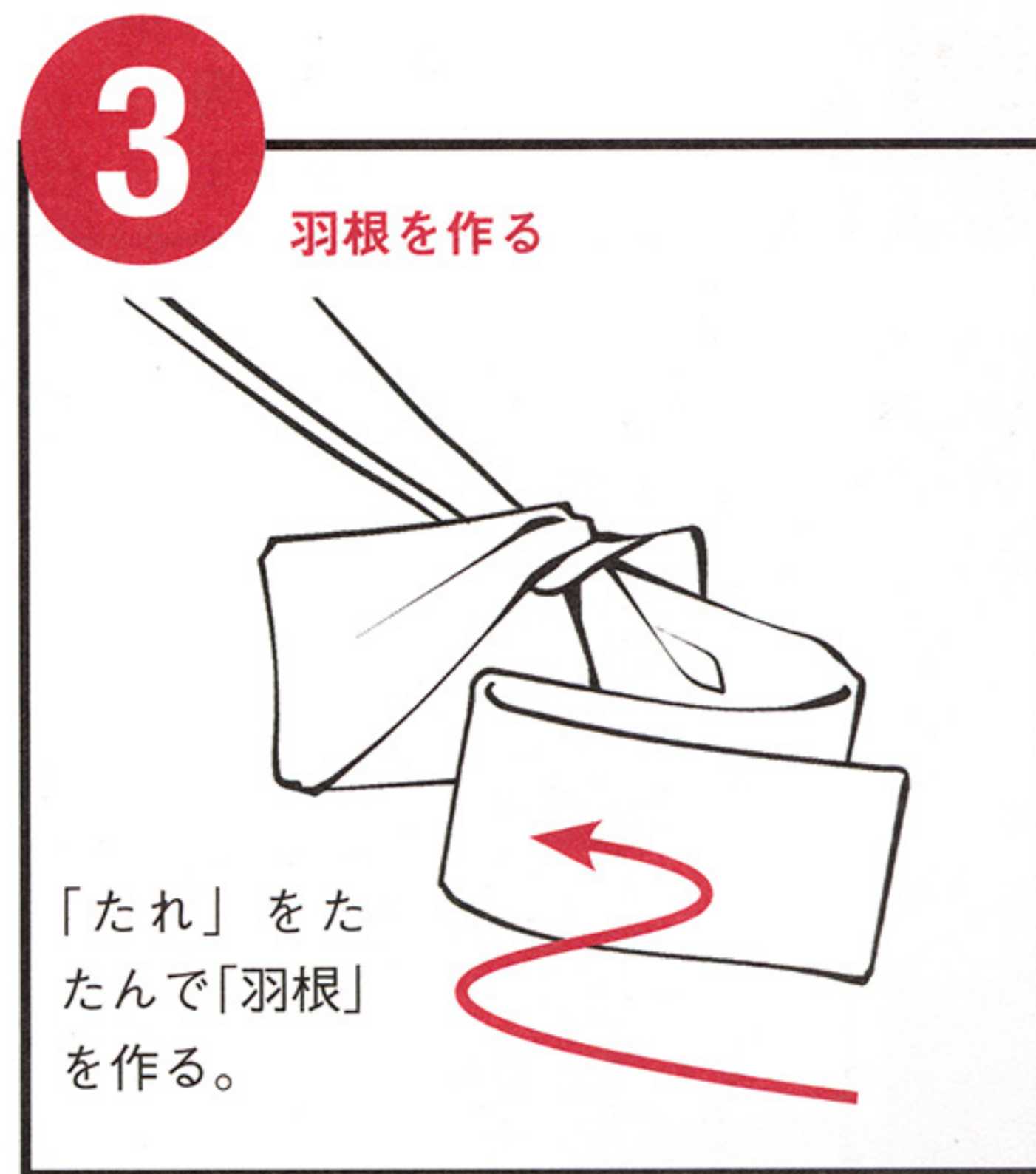
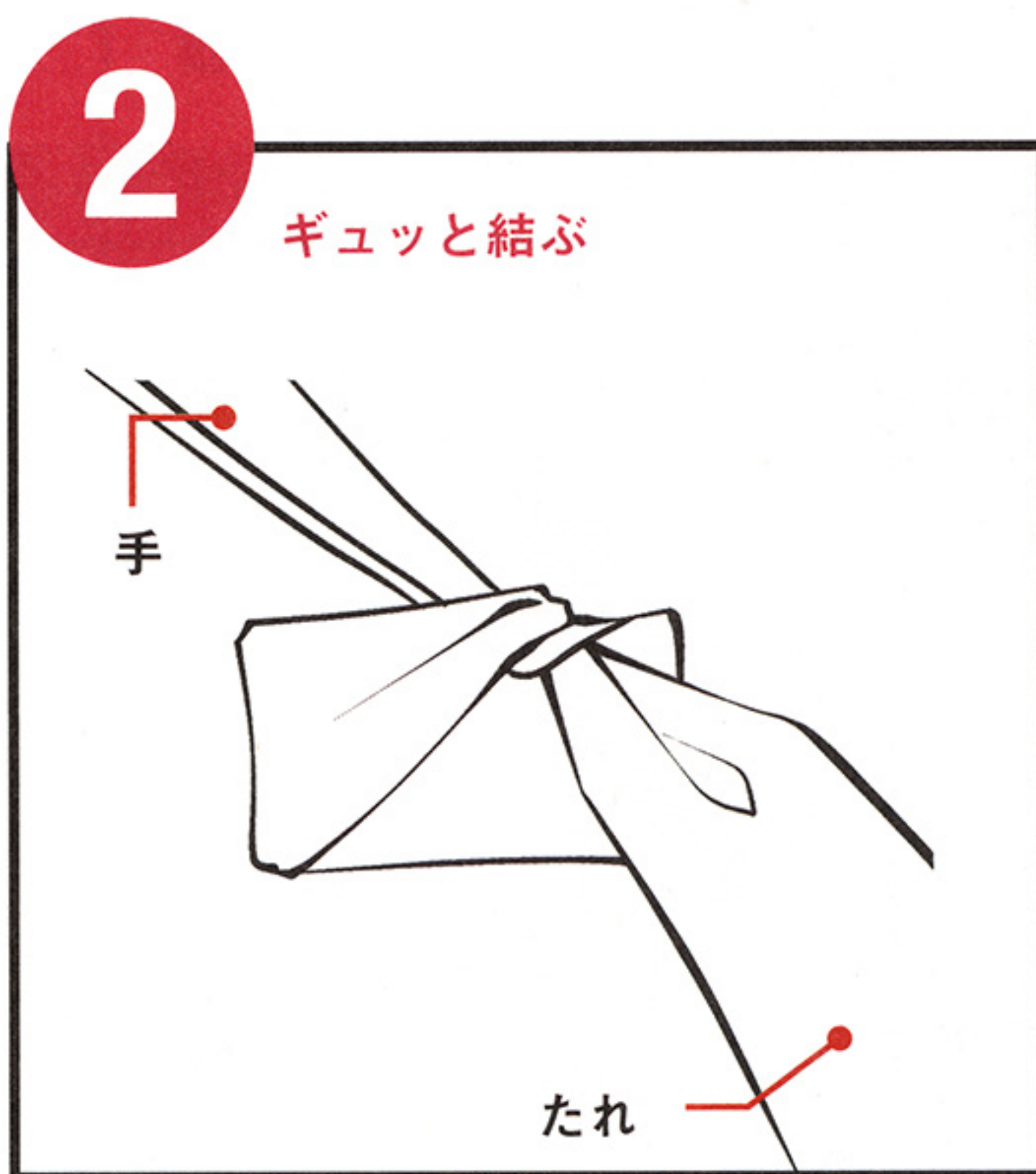
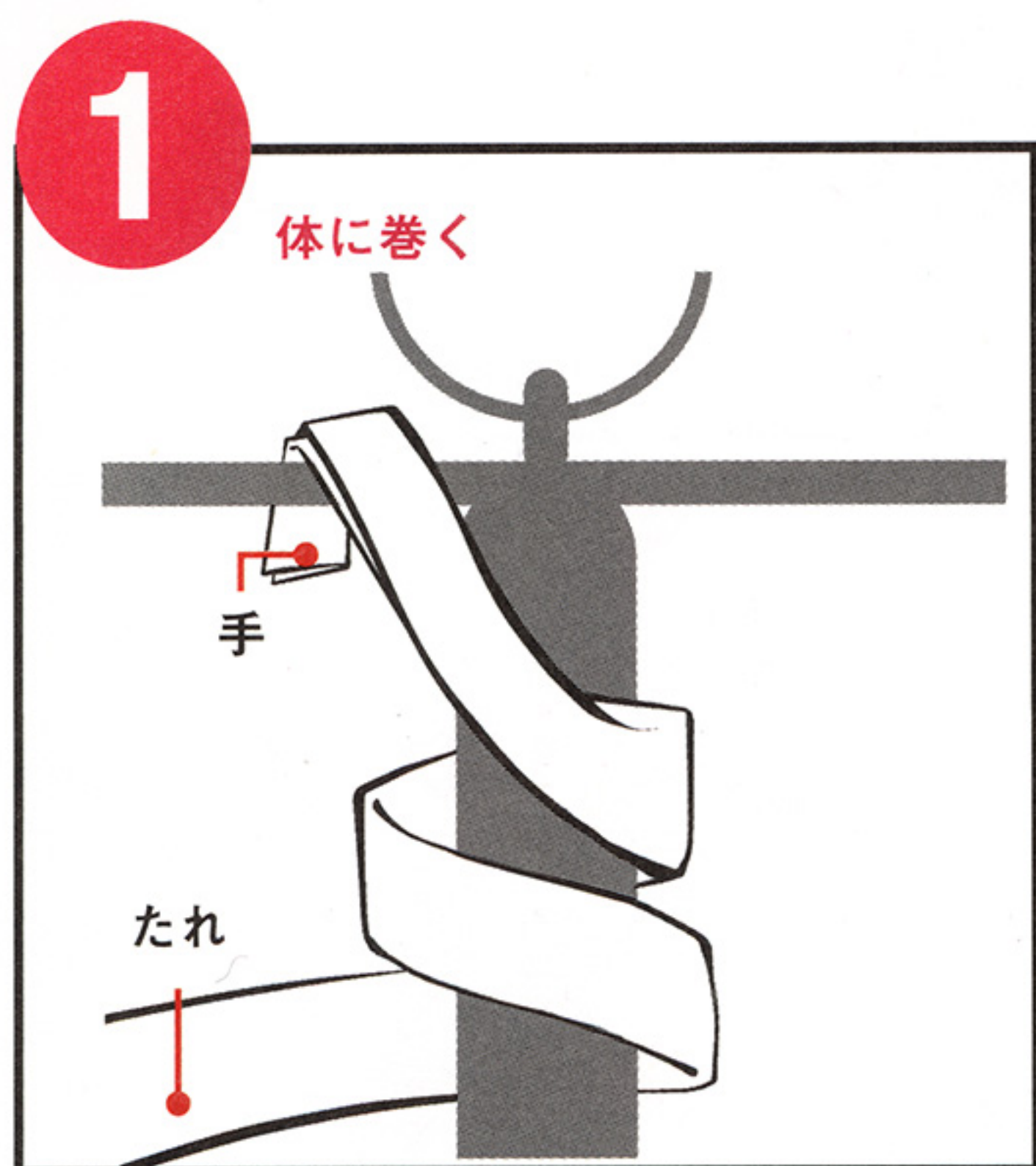
4 羽根を固定する

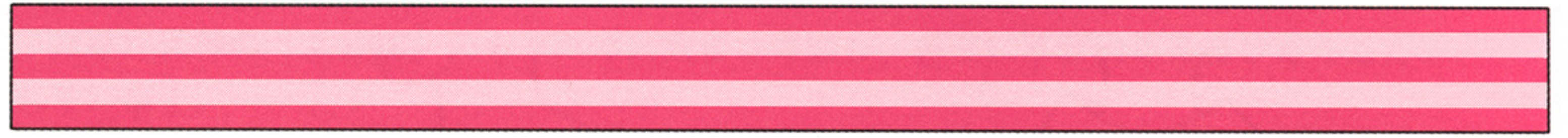
手

※ここで結んだり、1回巻くだけだったり、さまざまな締め方があります。

5 手を帯にしまう

6 形を好みに整える

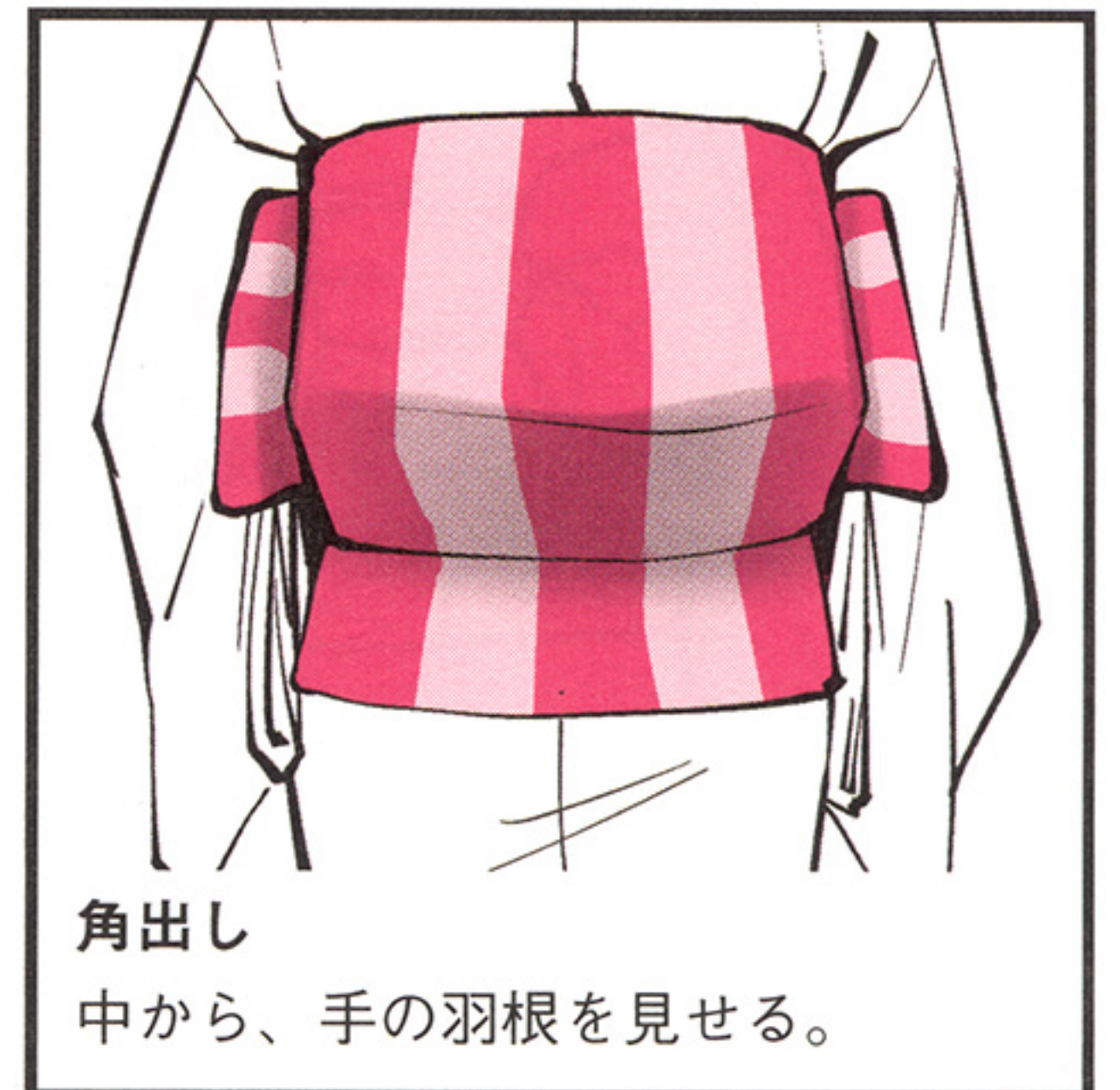
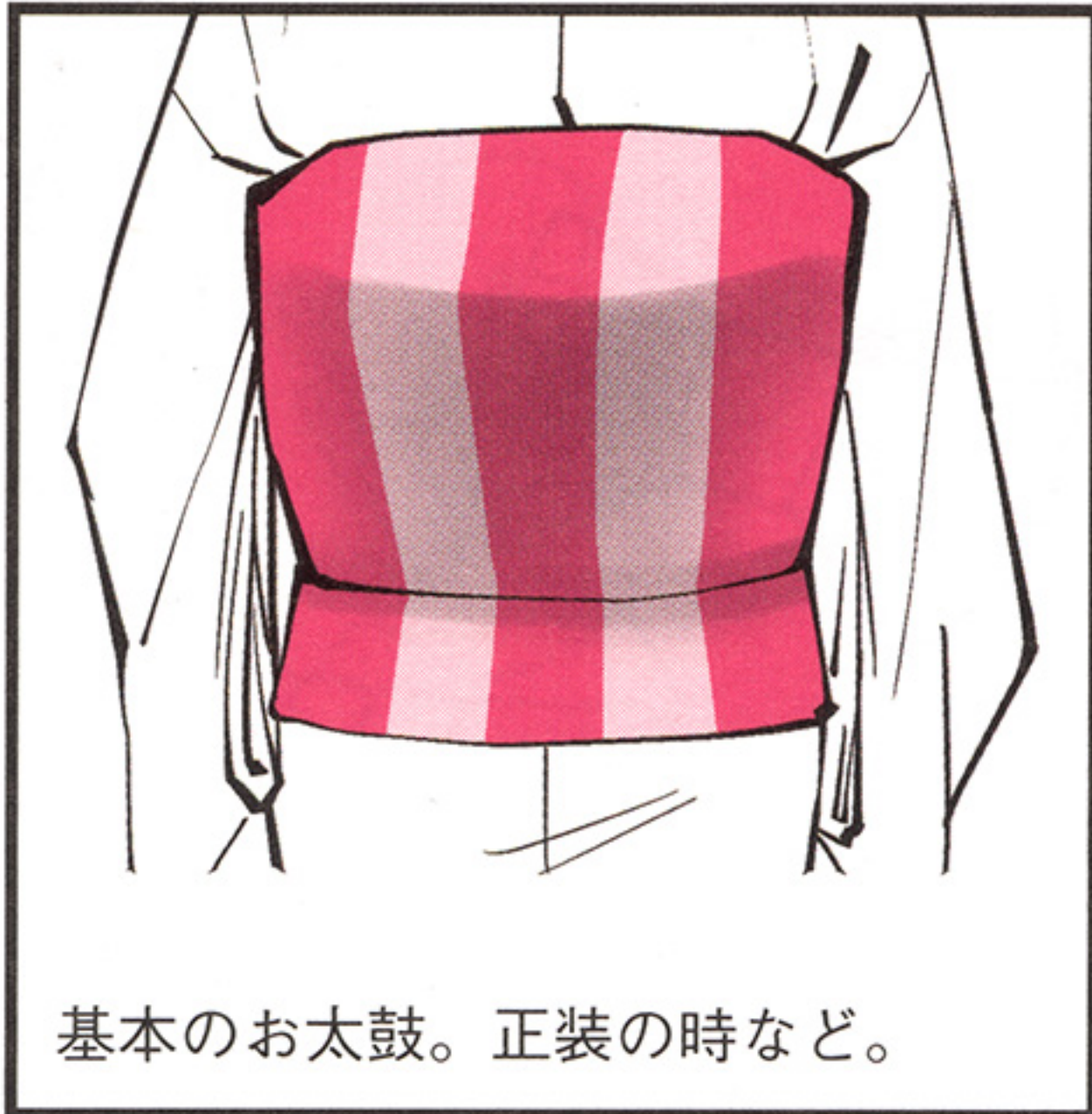
はみ出した部分をたたんで仕舞いこんだり、羽根を広げたり、斜めにしたり、さまざまなアレンジが可能、

全幅帯の一例

現代の帯結びの一例です。構造が分かりやすいよう、右のような模様の帯を仮定して、図解していきます。

お太鼓系

厚い、薄い、大小など、年齢や時代でさまざま。現代人はかっちりと四角に、若い娘は大きく華やかにすることが多い。

基本のお太鼓。正装の時など。

斜めにしてみたり。
着慣れた人の、粋な着こなし。

角出し
中から、手の羽根を見せる。

お太鼓・変わり結び

無難で、一人でも簡単に結べるお太鼓はアレンジがたくさんあり、人気。

細めにたたんで飾りに一周させる。
ずらして折ったりさまざま。

青海波(せいがいは)
お太鼓の山から小さなヒダを見せる。

お太鼓自体にヒダをとって、
間から更に小さなヒダを見せる。

立て矢系

かつて江戸時代に御殿女中が結った華やかな帯結び。諸説あるが、現在は右腕を動かしやすいように左上がりが多い。

立て矢
背の高い女性に合う。

ヒダの開き方で表情が変化する。

熨斗(のし)
立て矢に「のし結び」をのせる。

その他

成人式や、お正月などの晴着には、華やかで、人と被らないアレンジがたくさんある。

ふくら雀
振袖など、若い女性の礼装に。

ふくら雀系の変わり結び。

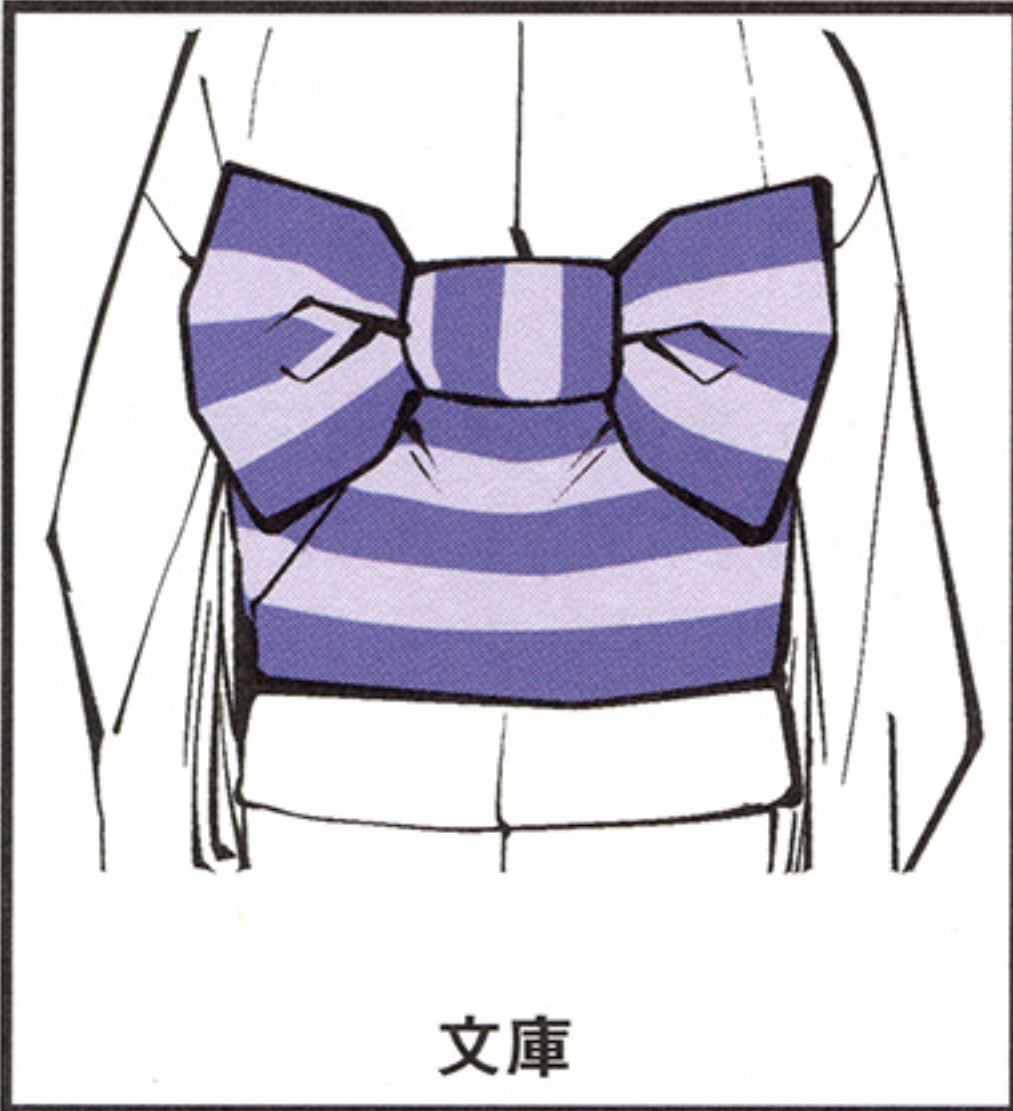
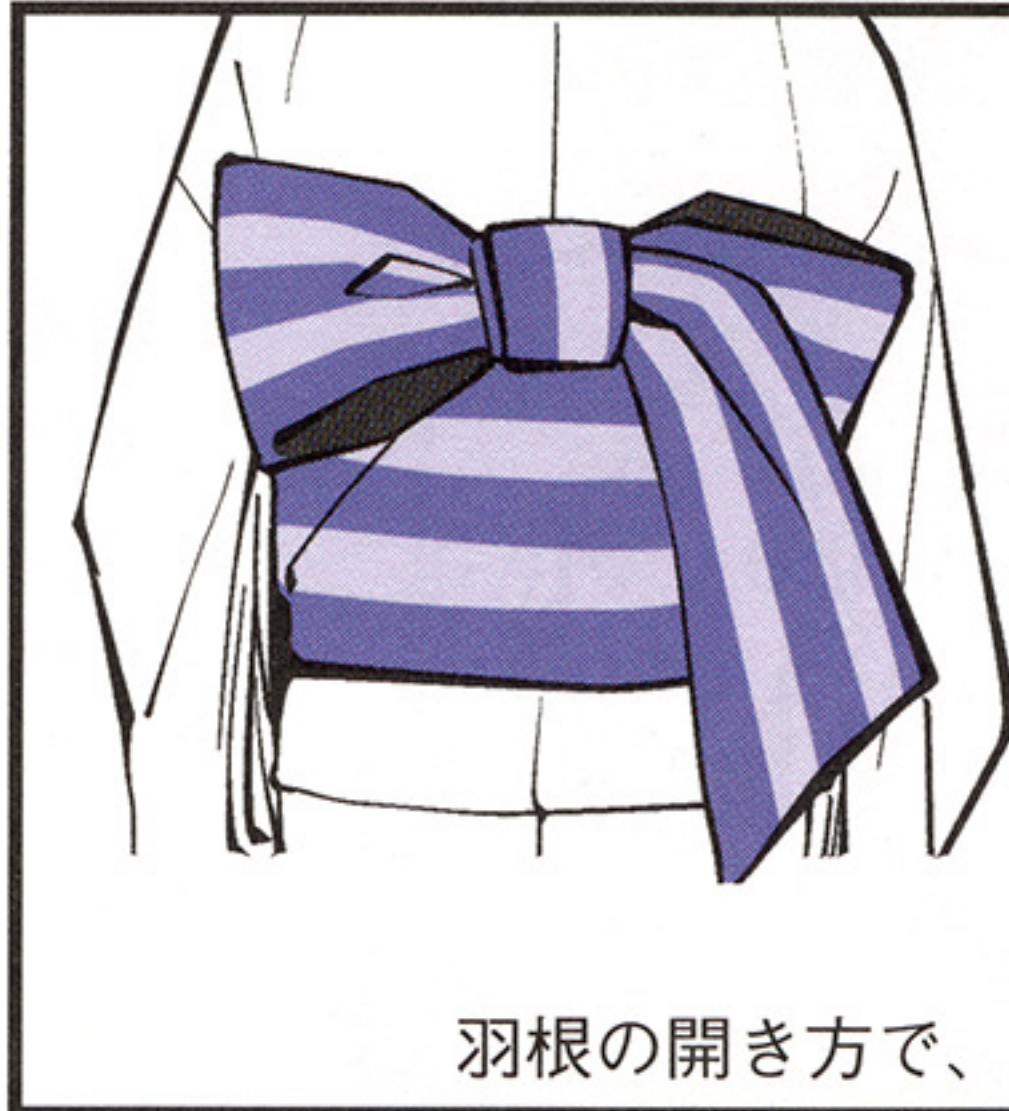
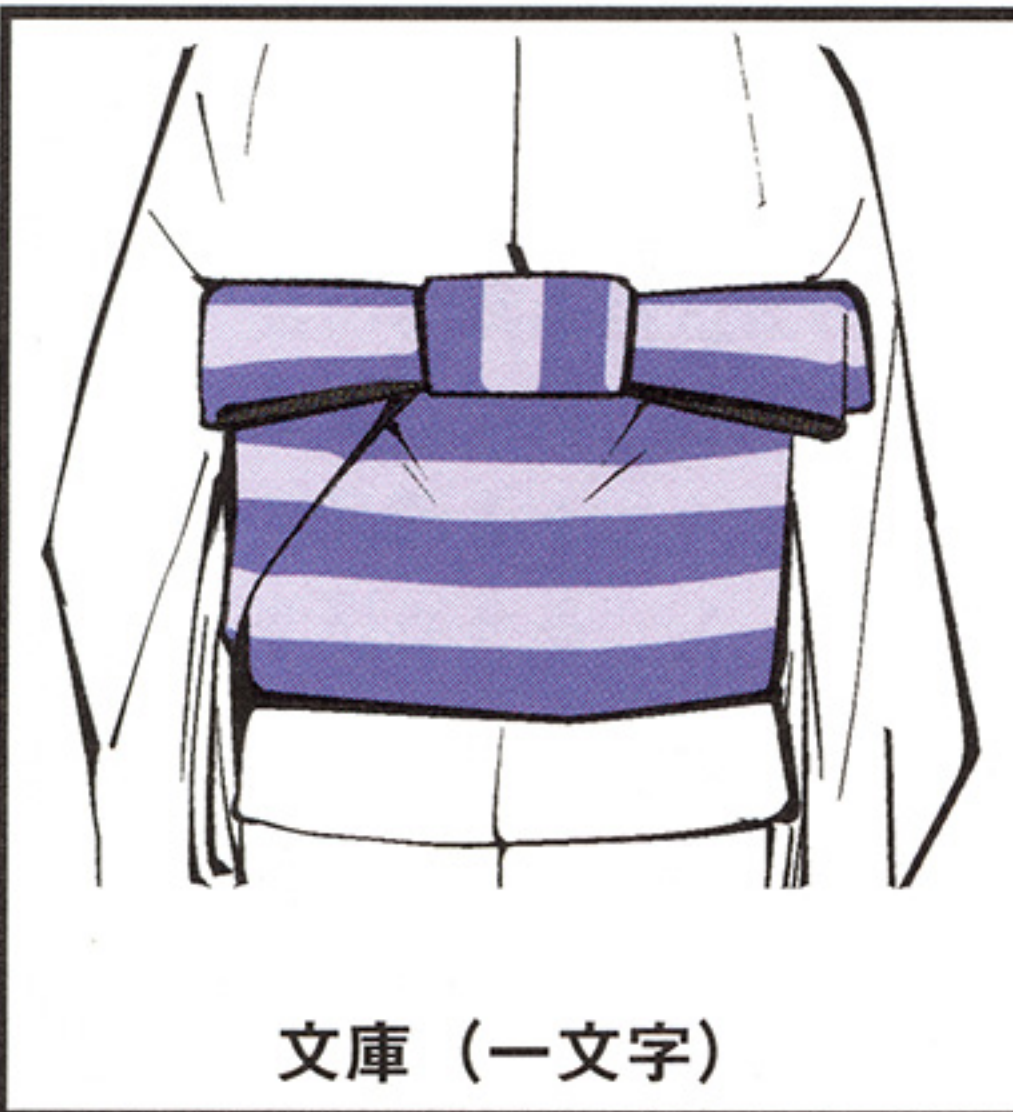
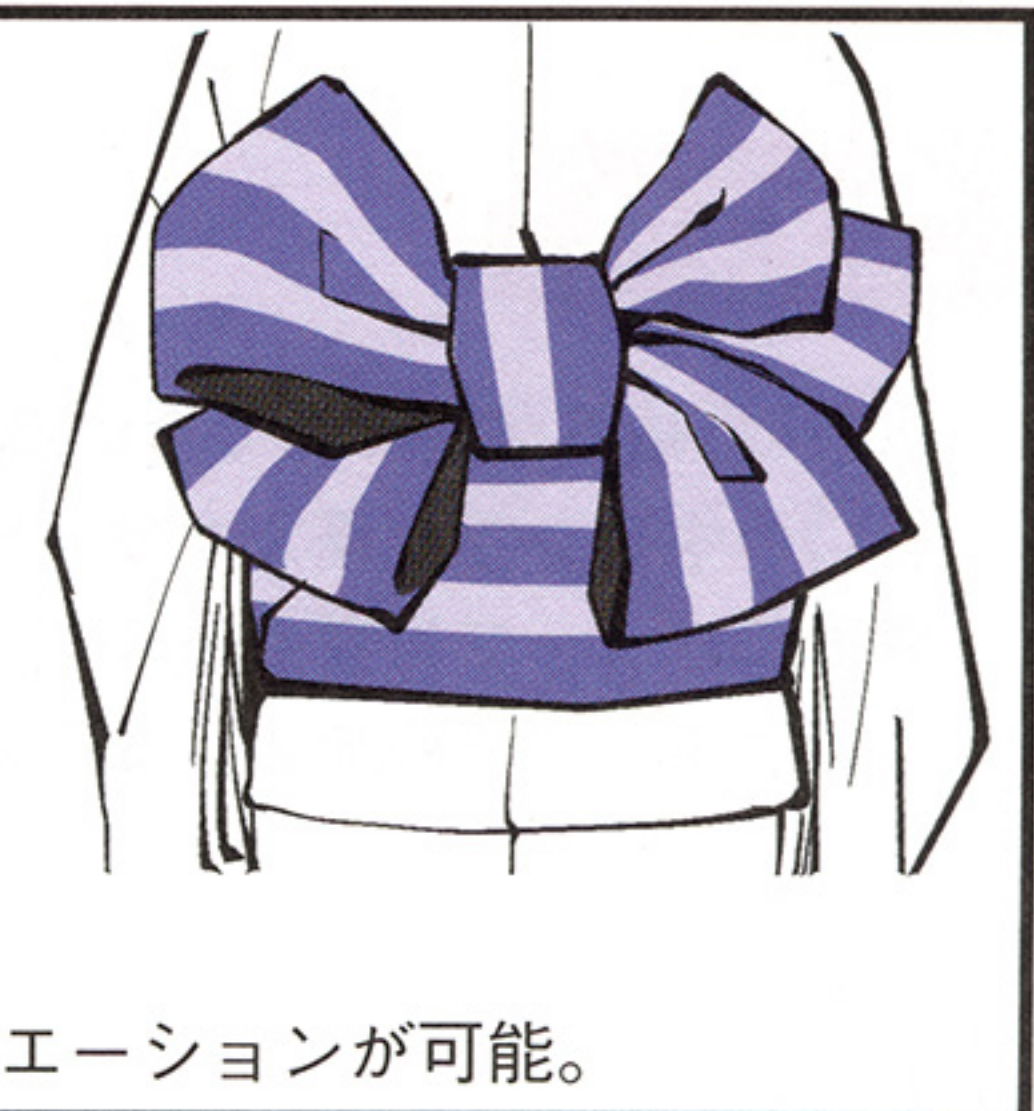
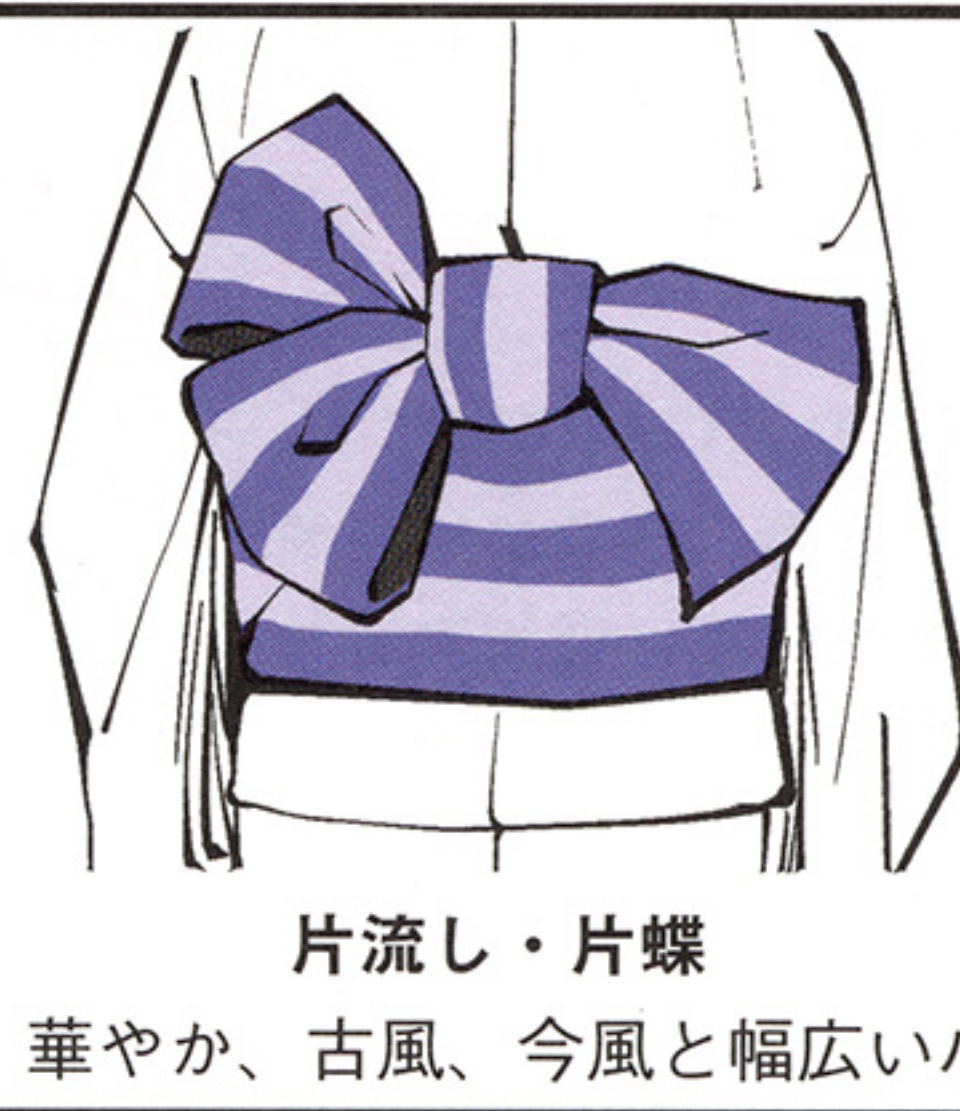
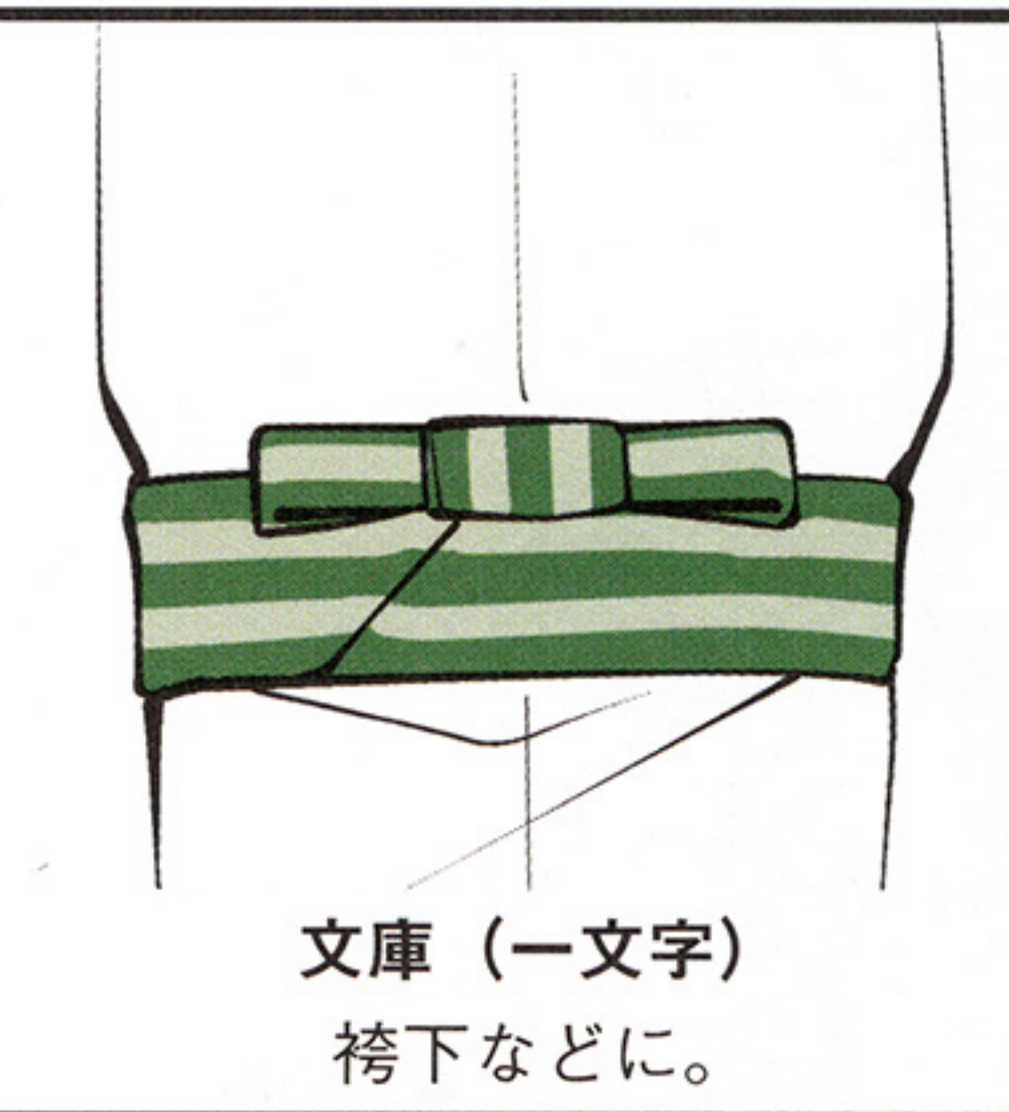
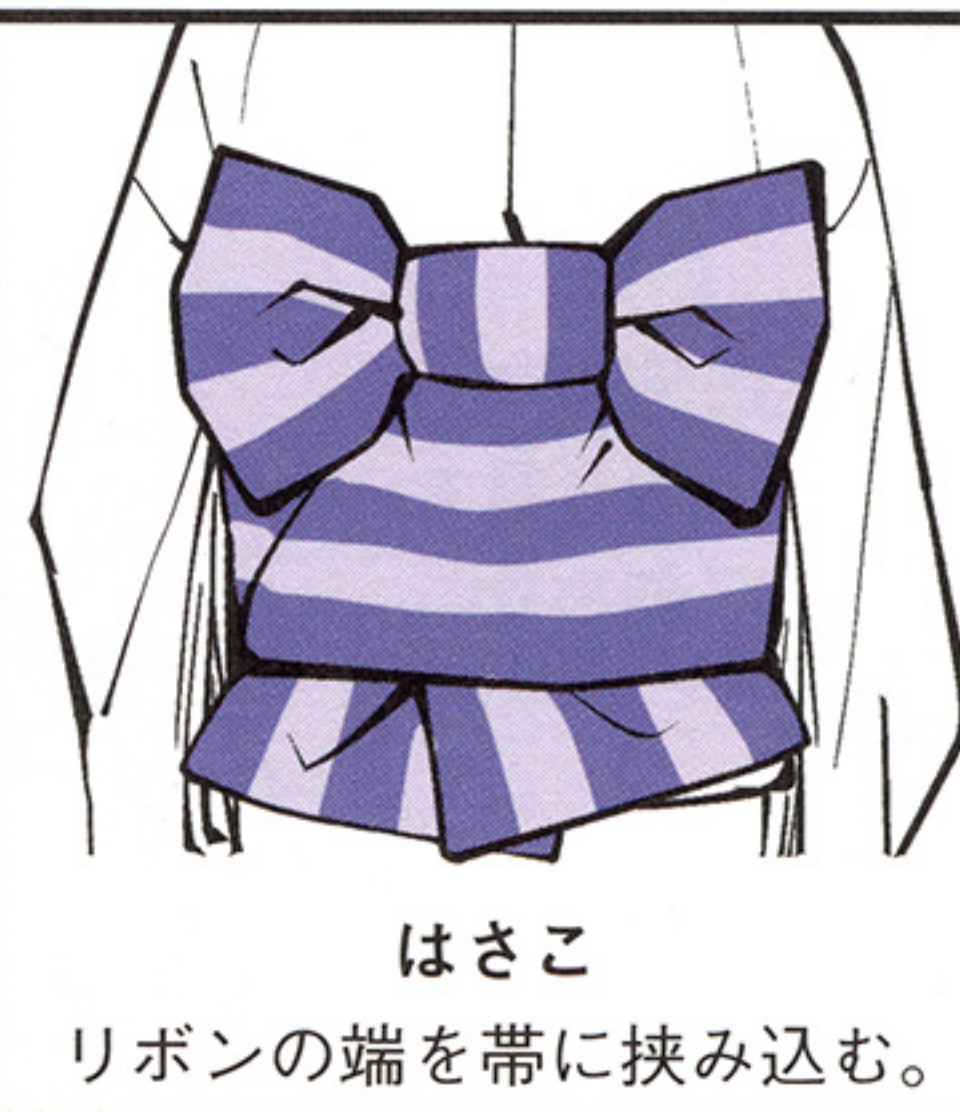
立て矢系の変わり結び。

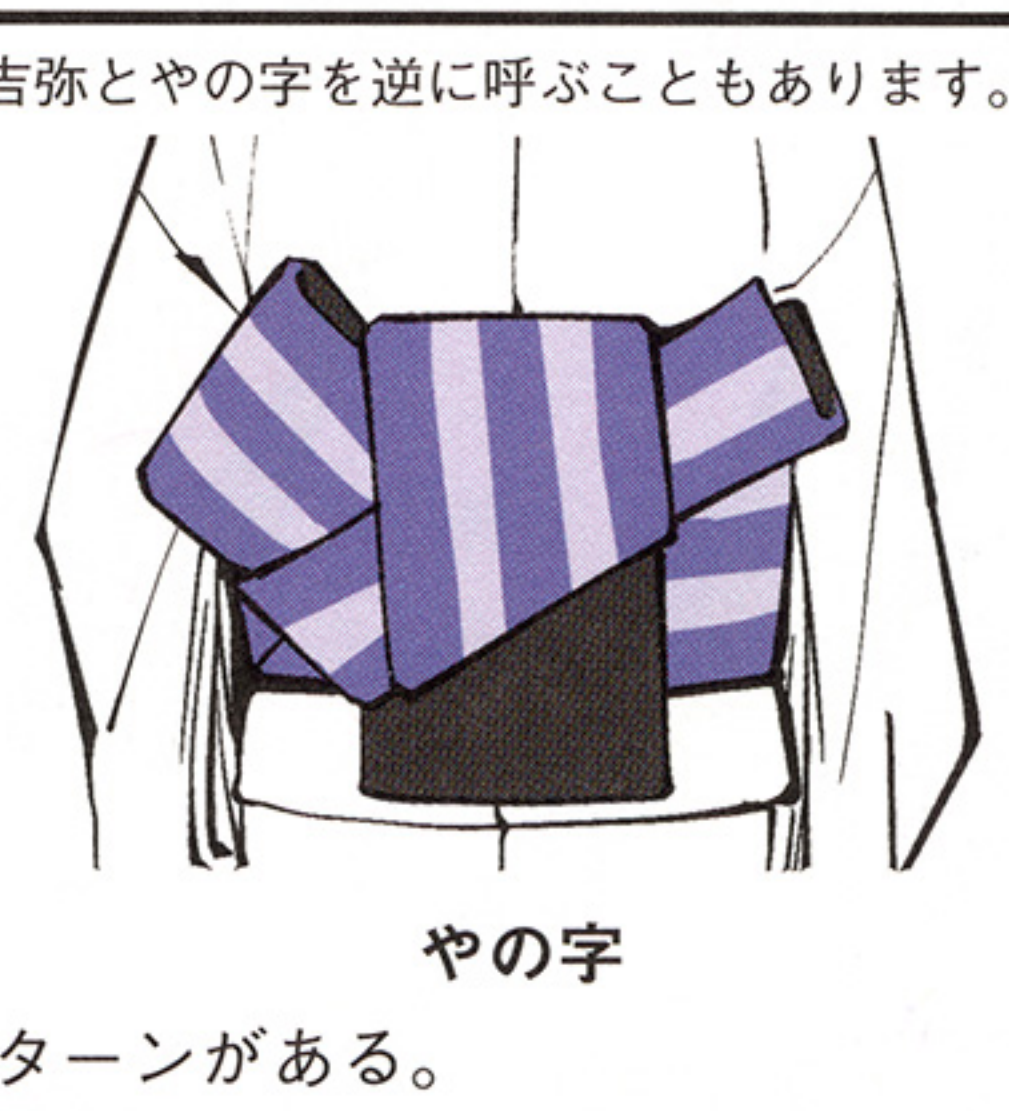
半幅帯の一例

現代の帯結びの一例です。構造が分かりやすいよう、右のような模様の帯を仮定して、図解していきます。

※上方文化（西日本）と江戸文化（東日本）では左右が逆になることが多く、呼称・形状なども、時代、地域、流派、年齢、帯などにより実にさまざまです。帯の柄や仕立て、人の利き手によって左右が変わる事もあります。

女性

男性

文庫

片流し・片蝶
羽根の開き方で、粋、華やか、古風、今風と幅広いバリエーションが可能。

文庫（一文字）

文庫（一文字）
袴下などに。

はさこ
リボンの端を帯に挟み込む。

蝶結び・花文庫

※吉弥とやの字を逆に呼ぶこともあります。

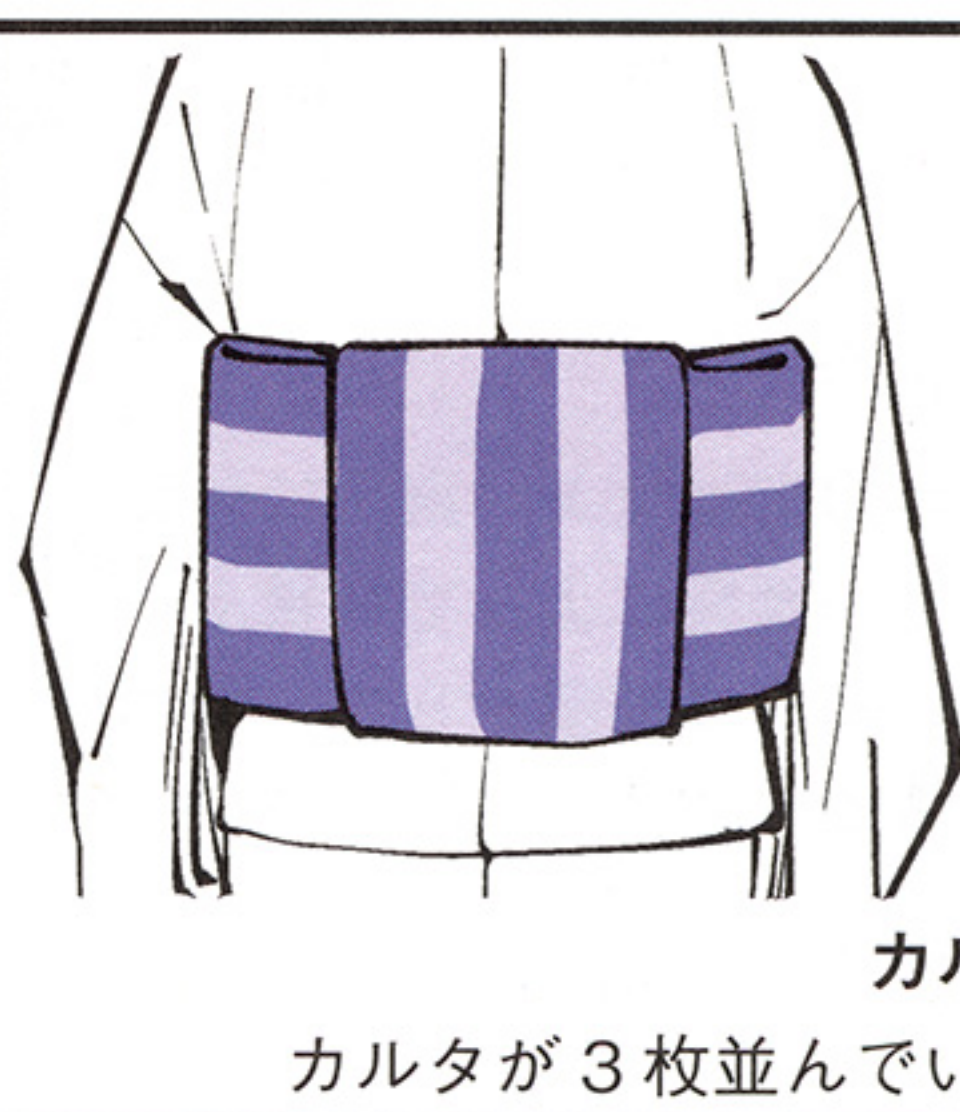
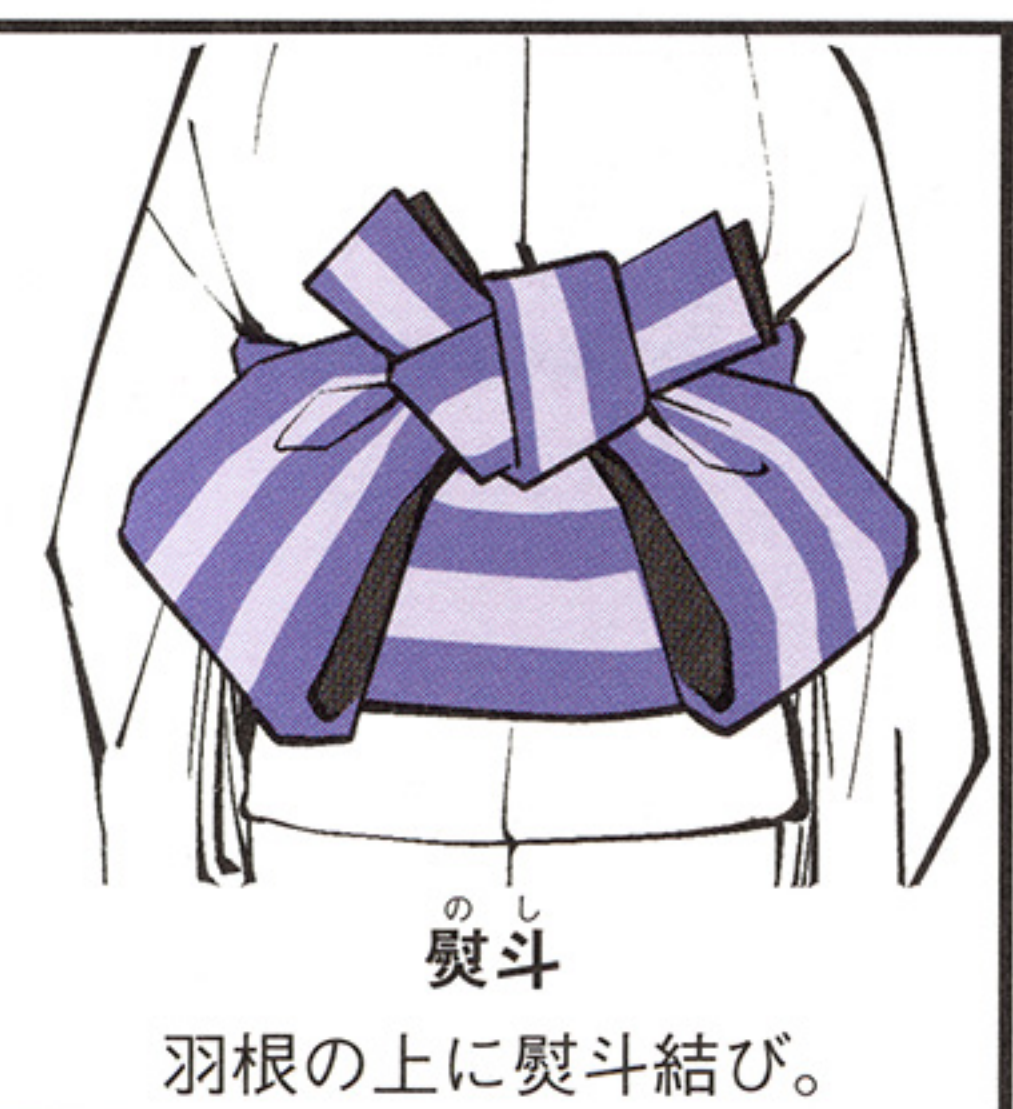
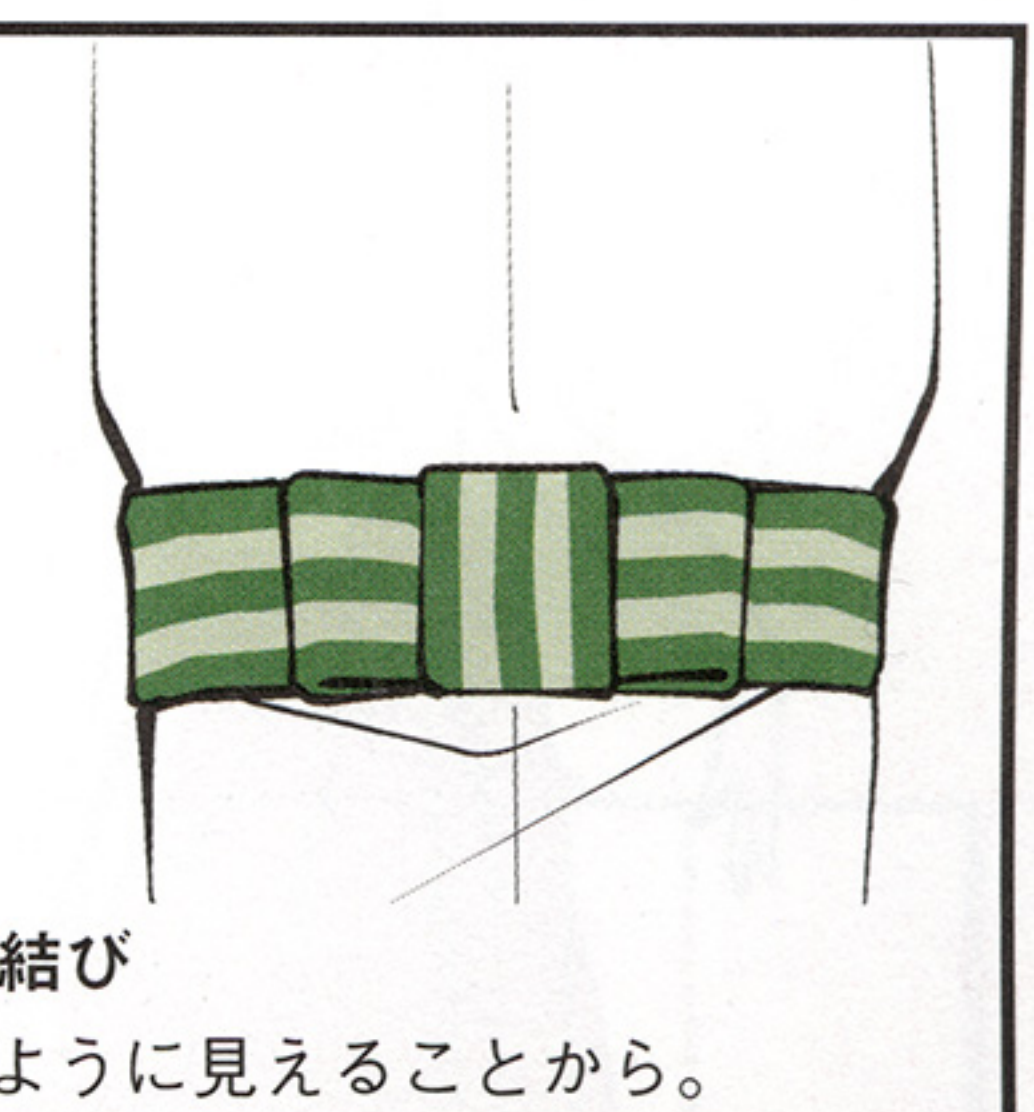
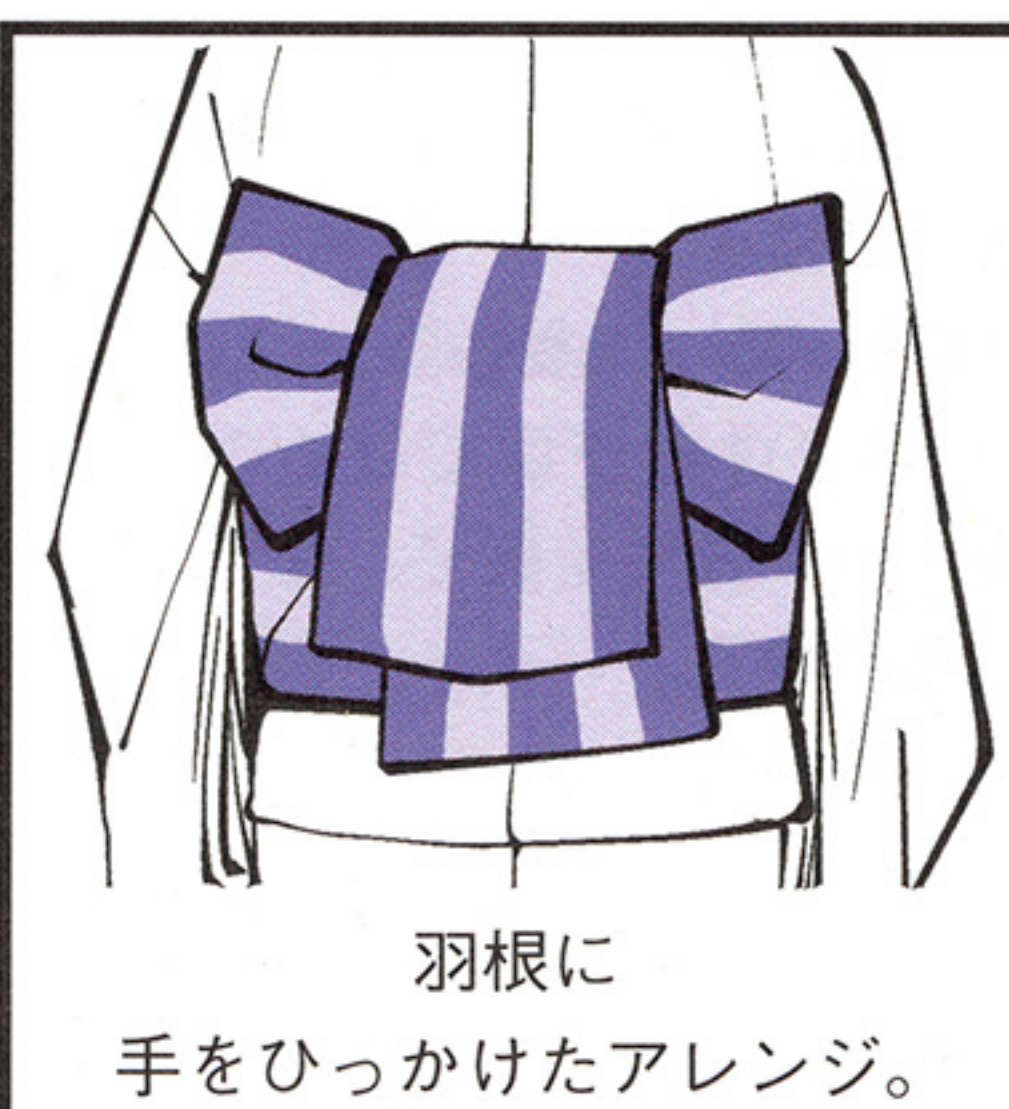
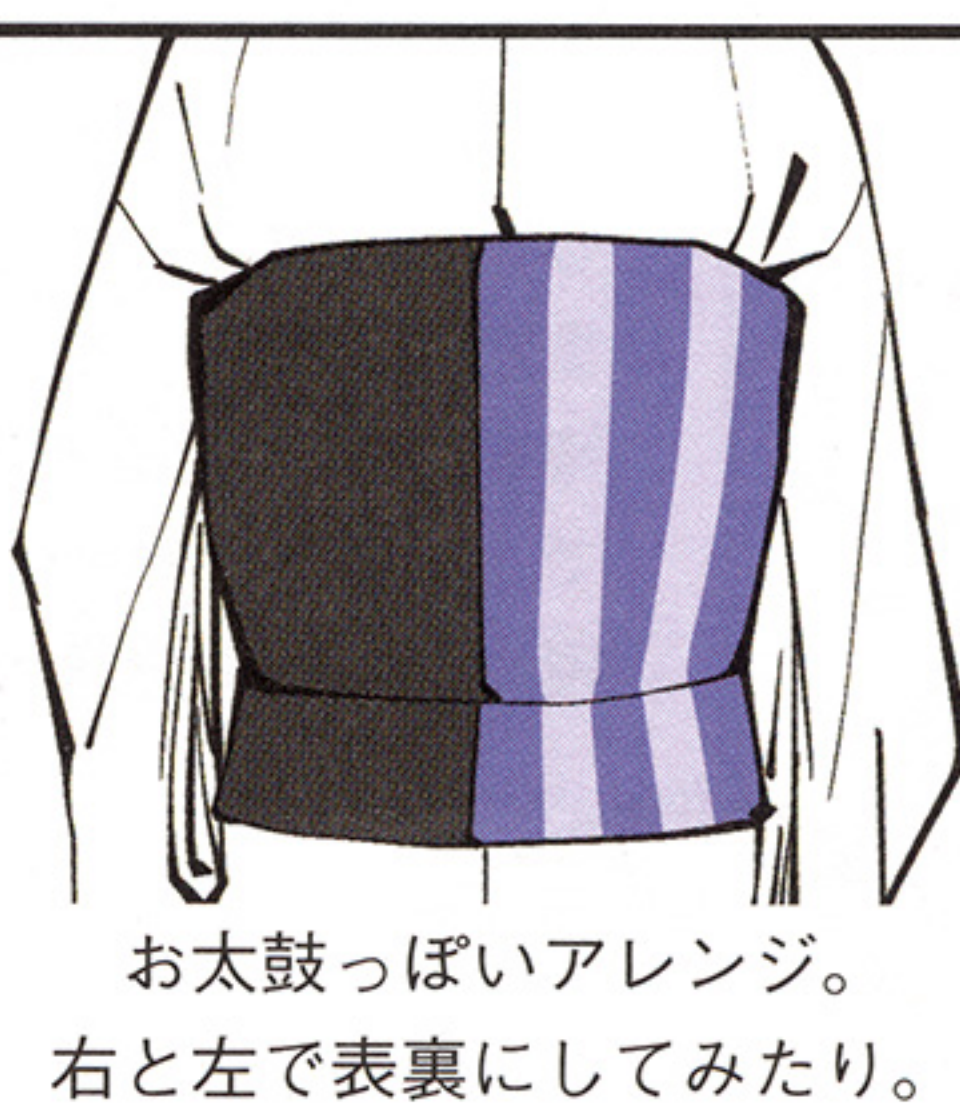
吉弥（きちや、きっちゃ）

やの字

裏表は色々なパターンがある。

貝の口・男結び

浪人結び・笹結び
左に抜いた手を、折り返してたれの根本にはさみこむ。

浪人結び・片ばさみ
武士が袴をしない時に結った刀を差しても緩まない。

カルタ結び
カルタが３枚並んでいるように見えることから。

熨斗（のし）
羽根の上に熨斗結び。

羽根に
手をひっかけたアレンジ。

お太鼓っぽいアレンジ。
右と左で表裏にしてみたり。

職人結び・神田結び

09 着物（広袖）

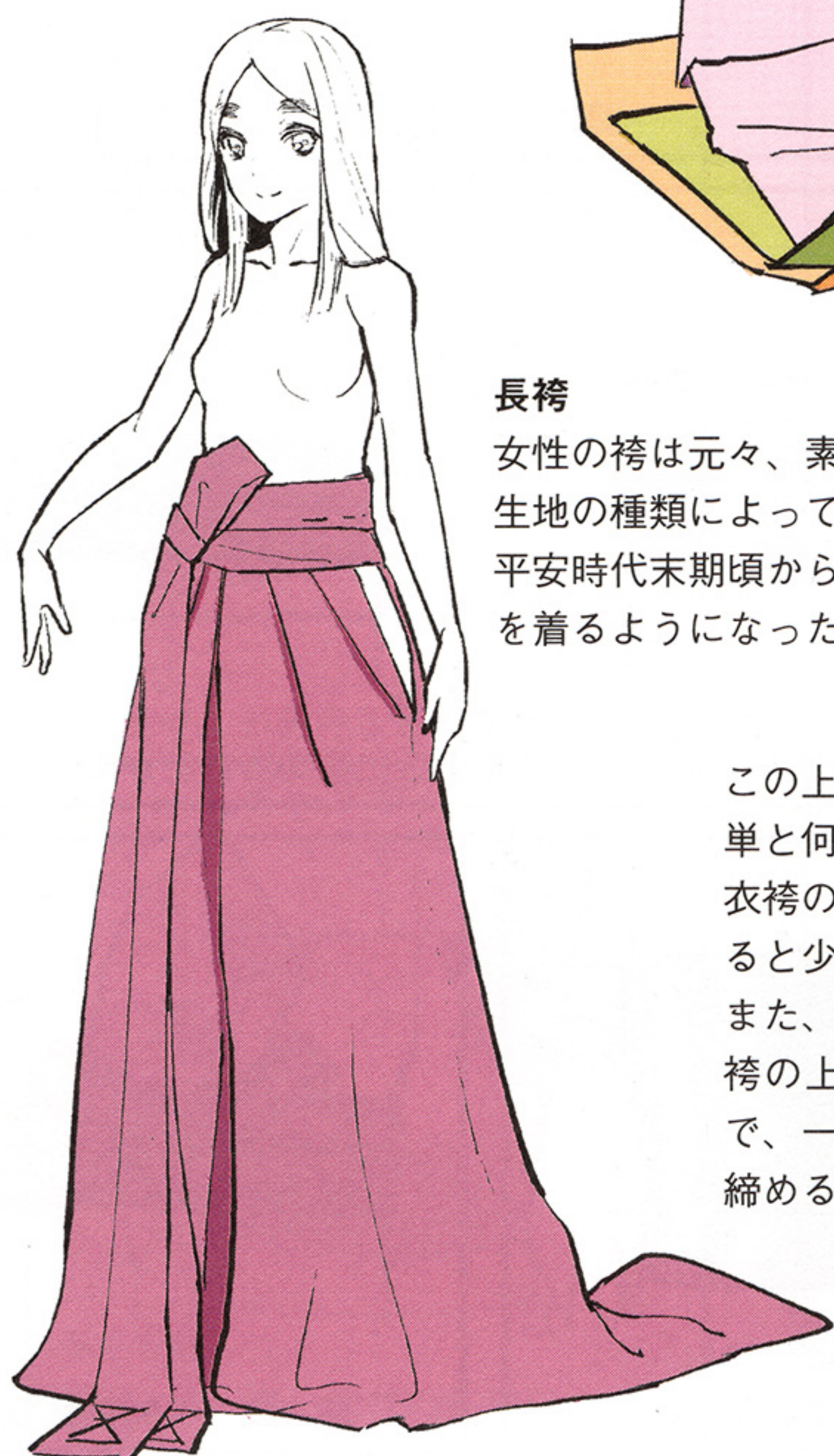
平安時代、公の場で着用されていた装束はみな広袖（大袖）でした。平安時代の末に気候が寒冷化したため、下着として袖口の小さい着物も着用され始めます。簡便さを好む武士が台頭し、貴族が経済的に困窮すると、広袖の着物は、次第に着用される機会が減っていきました。

女性正面

広袖は、袖下が縫われてない広く大きな袖口が特徴です。袖口の中のシワが見えたり、重ねた着物（袿や単）が幾層ものウェーブに見えるので、シワの少ない現代の着物と比べるとフリルのような印象です。

細長
幼児服だとも、高貴な女性の正装だとも伝わる装束。
正確な形状は残っていない。

同じ形の
ウェーブが、
層になっている。

宛帯で
単と袿を
締める。

長袴
女性の袴は元々、素肌に付ける下着であった。
生地の種類によって打袴や張袴とも呼ばれる。
平安時代末期頃からは、袴の下に下着としての着物を着るようになった。

この上から単１枚のみ羽織ると寝間着の「単袴」。
単と何枚かの袿を重ねると日常着の「衣袴」。
衣袴の一番上に紋の入った小さい袿（小袿）を着ると少し改まった日常着「小袿姿」。
また、女児は「衵」（丈の短い袿）を重ねる。
袴の上から衣を重ねただけでは前がはだけるので、一番上に裳や、細長という上着を着て、紐で締めることで正装として形が整う。

女性後ろ

男女とも衿は
抜かない。

宛帯は、脇から細
長の下へ潜る。

脇の下から、袖の下
方へ大きくシワがで
きる。

振りのある広袖は、
お尻をカバーするよ
うに持ち上がる。

裾の長い和装を着た女性
のシルエットは、底辺の
広い三角形をイメージし
て裾を引かせる。

細長の構造

衿を折り返して着る

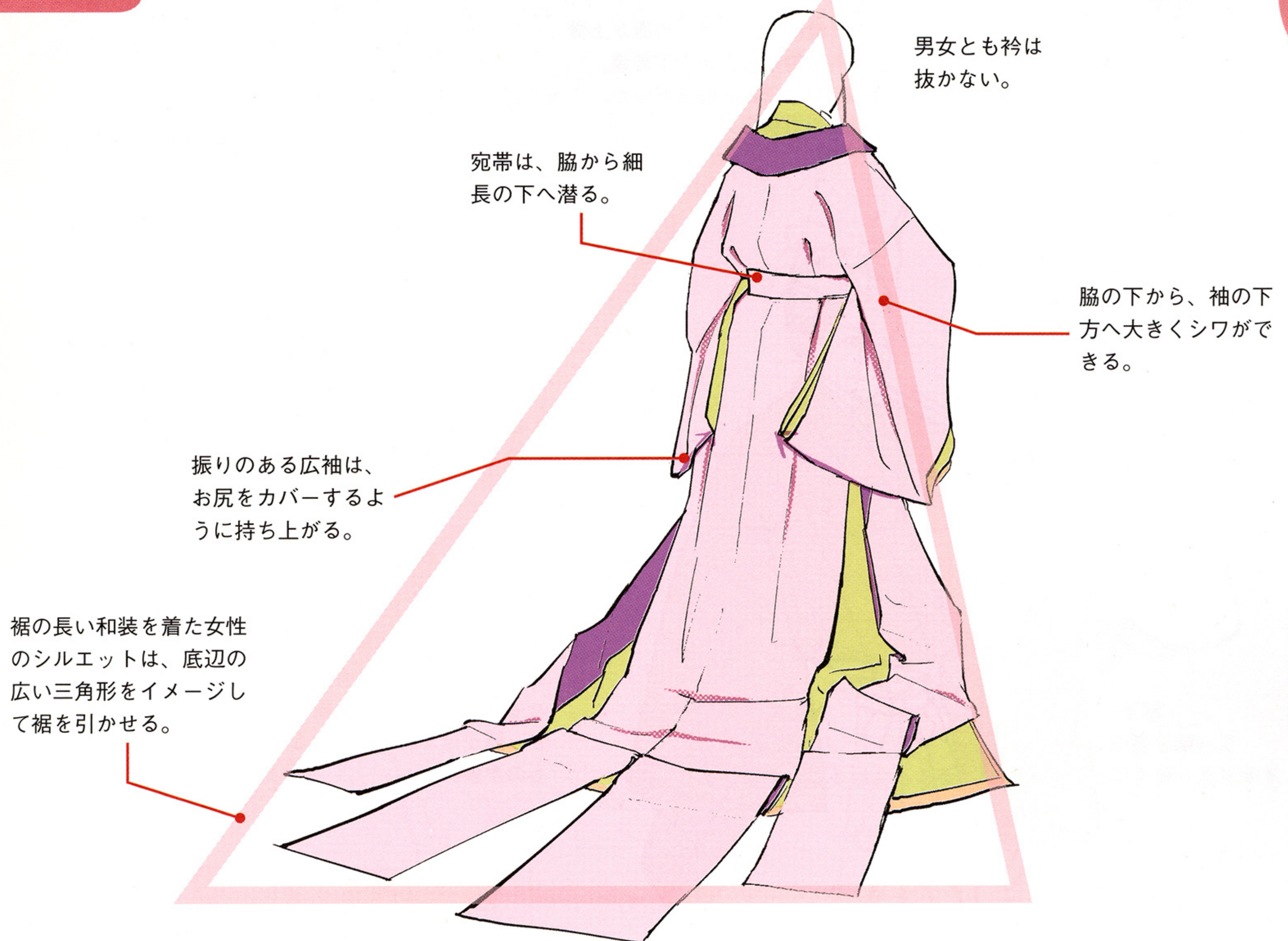
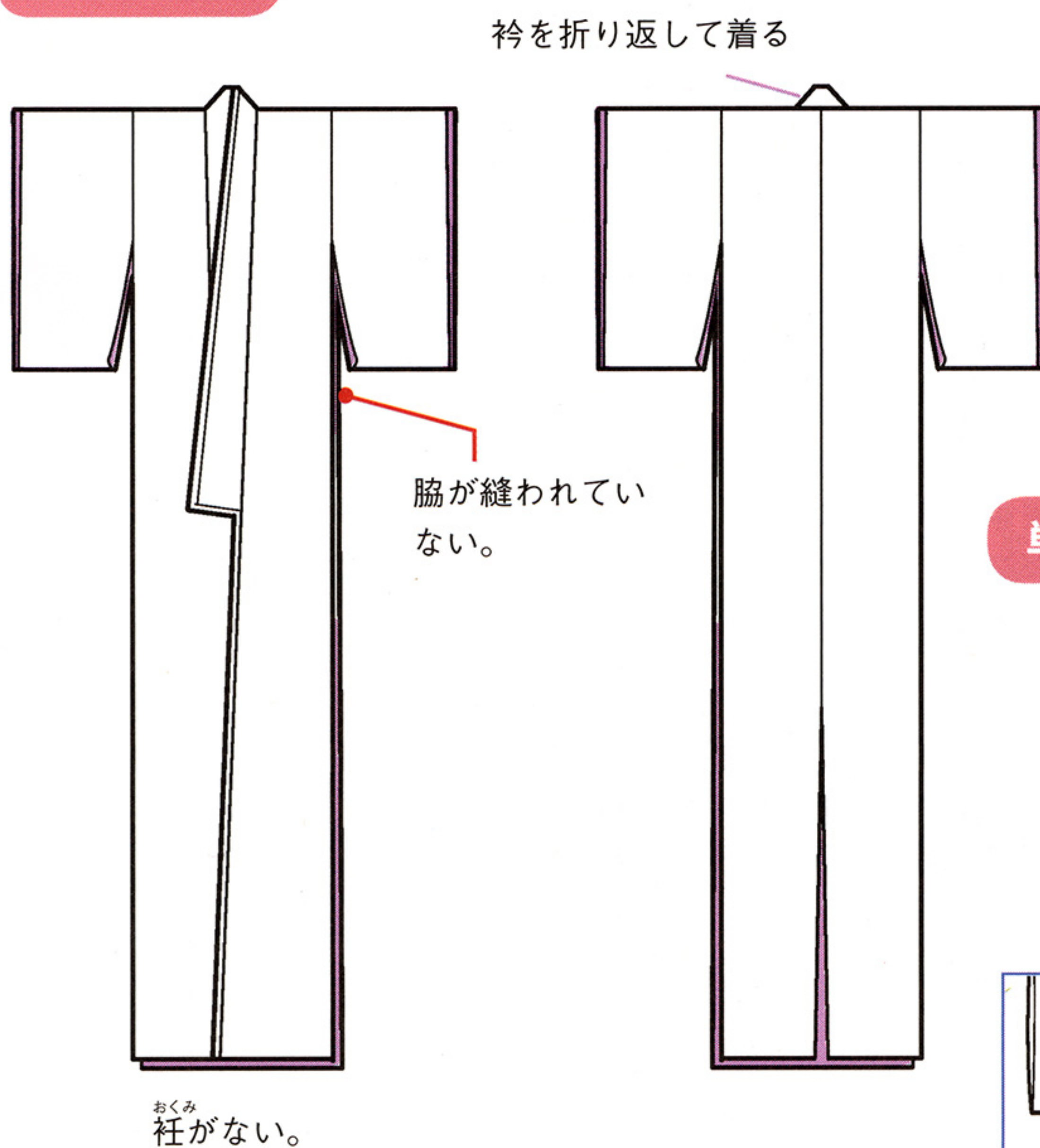
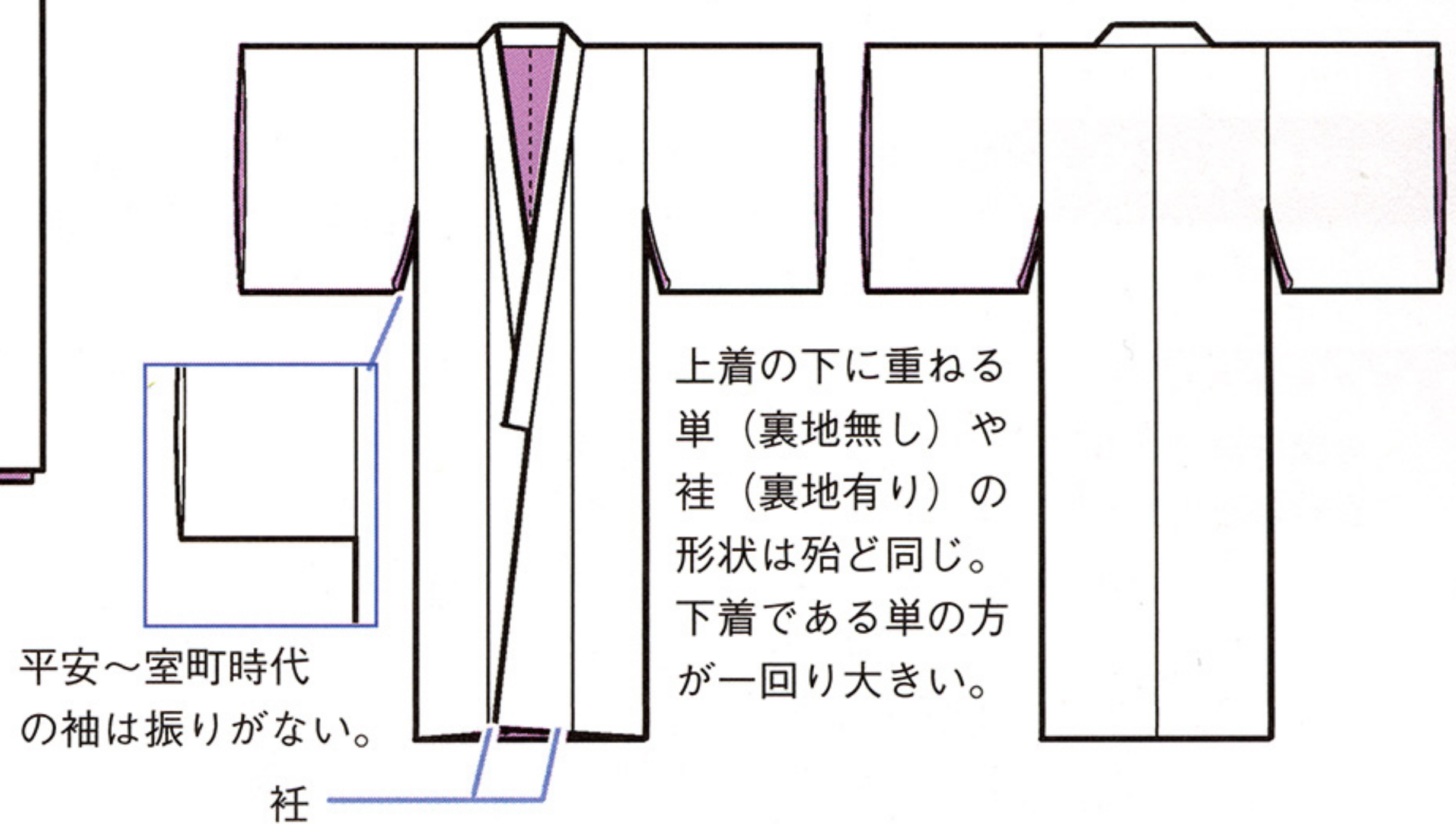
脇が縫われてい
ない。

衽(おくみ)がない。

単（女性用）や袿の構造

上着の下に重ねる
単（裏地無し）や
袿（裏地有り）の
形状は殆ど同じ。
下着である単の方
が一回り大きい。

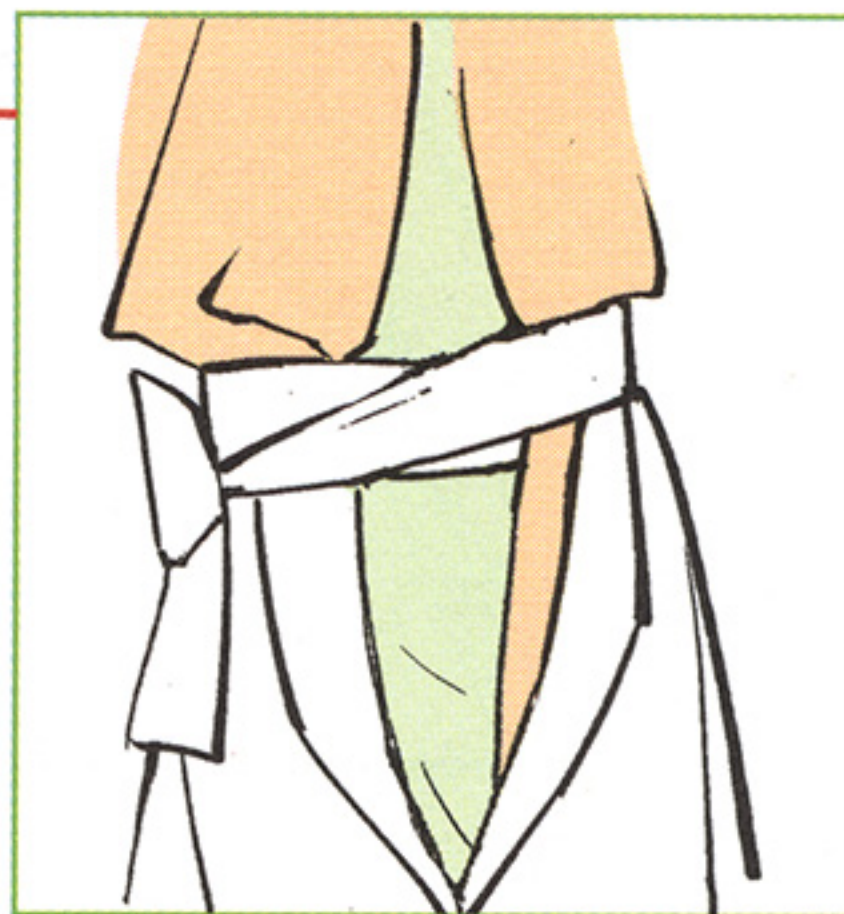
平安〜室町時代
の袖は振りがない。

衽

男性正面

男性用単
狩衣など盤領（丸い衿）の服が上着として一般的だった頃の下着姿。
就寝時などはこんな服装だった。

前にやや傾けてかぶる。

上刺の糸が見える。
（参照 80 ページ）

他人に着付けてもらうので、男性の装束も、身八つ口にあたる部分が開いているものか、脇が全て縫われていないものが多い。

単の脇は縫われていないので横から見ると下着（袖口が狭い着物）が見える。
平安時代末より前は単の下に何も着ないので、衣紋襞の幅を調節してここを閉じる。

袴や帯でキッチリ締めると、腕が上げられなくなるので、脇の下に余裕を作るため衣紋襞（タック）をとる。
このため、お腹周りは布がダブっと膨らむ。

指貫は、裾に通した紐で袋状に括って、足を中に入れてしまうこともあった。
下括なら、足は全く見えないか、つま先がちょっと見える程度。

● 立烏帽子

羅（目の粗い絹織物）の袋に薄く漆を塗って、張りを持たせています。
形状は洗顔料のチューブのようなものをイメージすると描きやすくなります。

前を凹ませると両脇が出っ張る。

衣紋襞のとり方

単の他にも直垂や肩衣などの身幅の広い上着や、女性の装束も衣紋襞をとります。衣類の形状によって、前後にヒダを作る場合と後身にだけヒダを作る場合があります。

お腹の前で折り込んで衣紋襞をとり袴で締める。

腕を動かせるだけの布幅を、袴の中から引っ張り出す。

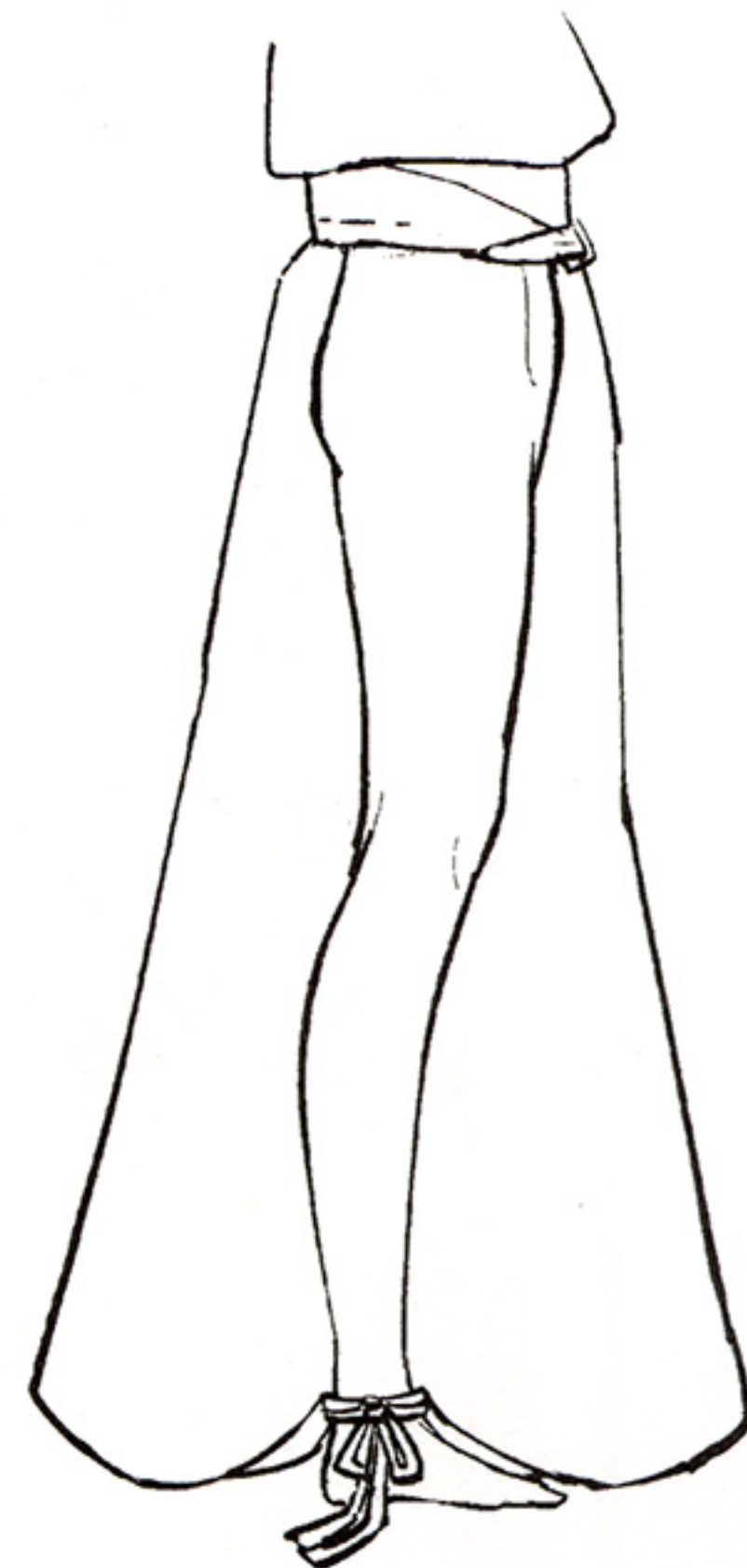
男性後ろ

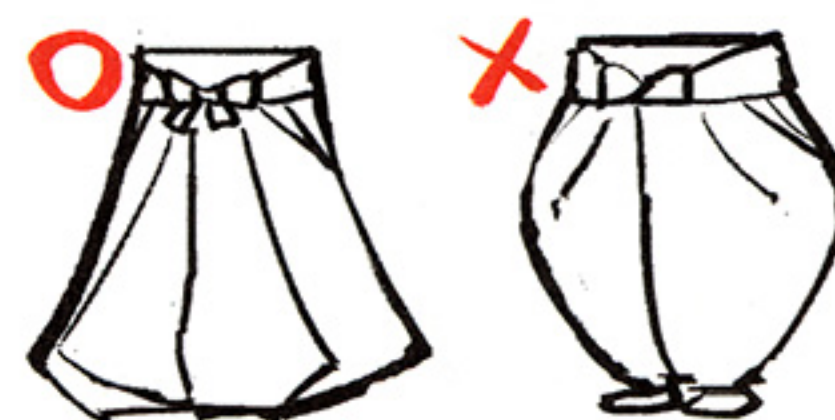
正面側と同様に衣紋襞をとっているので、ダブっとした見た目になる。

下着が見える。

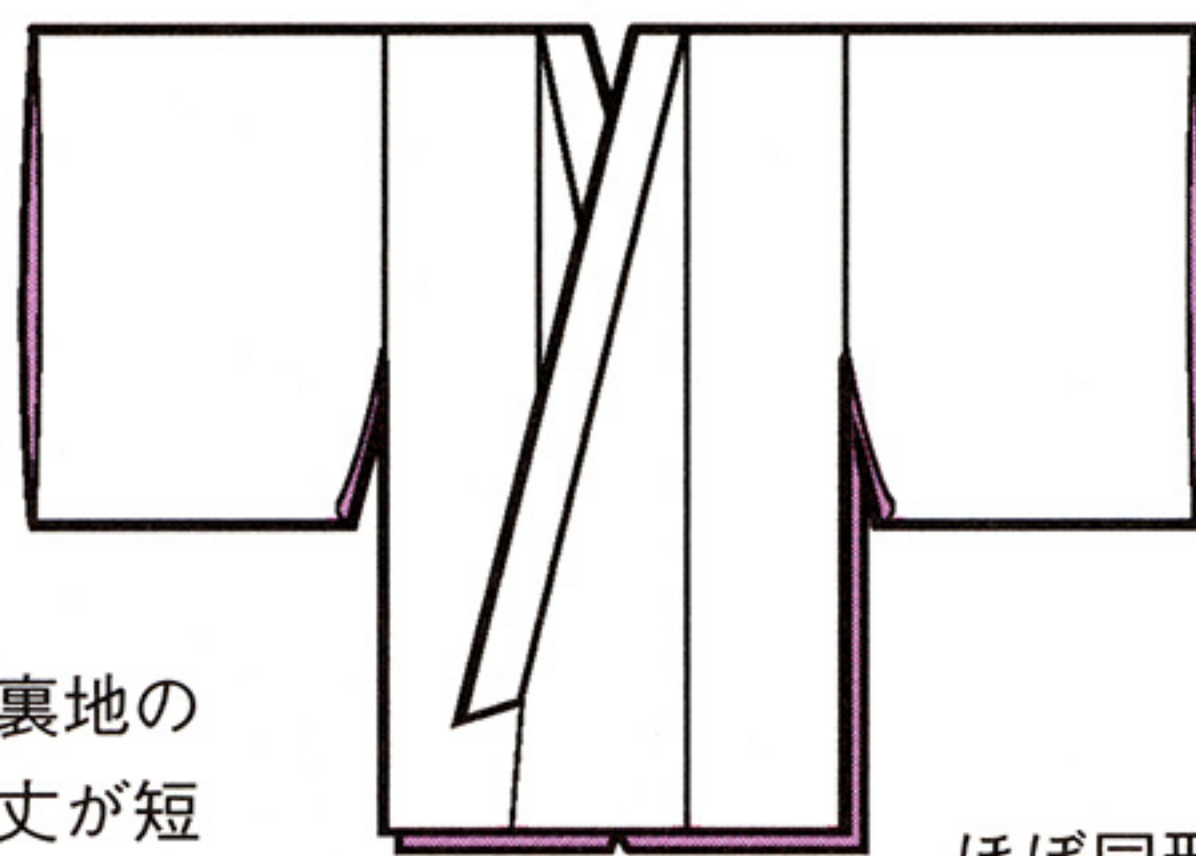
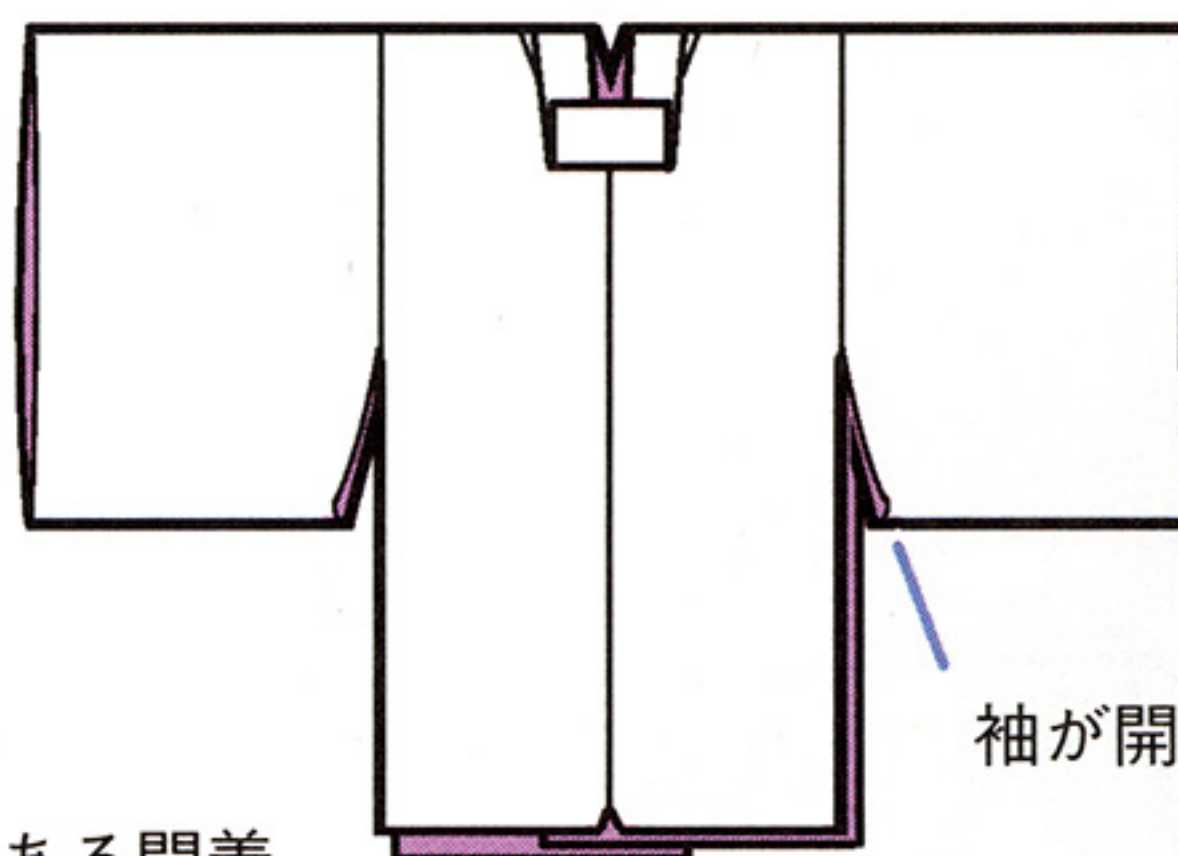
指貫のヒダは前後とも３本。
特に外側の２本のヒダの下部が広がって末広がりなシルエットになる。

指貫の裾には紐が付いていて、これを膝上もしくは膝下（上括）や足首（下括）で結ぶ。
江戸時代以降は紐で吊り上げる形式が一般的。

上括
実用向き
脛が見える程高く括る場合もある

下括
派手な組紐で結んで
装飾として引き摺ったりする

○ ×

真ん中ではなく裾側が膨らむので注意！

単（男性用）の構造

オシャレ着や正装に用いられる盤領に対して、こういった下着や間着のような斜めにあわせる衿は垂領といいます。

男性用の単（裏地のない下着）は丈が短く、脇が全開。

ほぼ同形で裏地がある間着を「袙」や「衣」と呼ぶ。

袖が開いている。

ONE POINT

名前が同じなのに全く違う着物がある？

単は裏地がない着物全般、袙（間籠）や衵（内に着る衣）は、下着と上着の間に着込める着物全般を指します。
そのため一つの衣類に幾つも名前があったり、同じ名称でも女性用と男性用で形状が異なったり、さらに別の時代では同名の全く違う衣類を指す場合さえあります。
こういった名称の曖昧さを知らないと、混乱するので注意が必要です。

シワや袖の動き

現代では見慣れない広袖ですが、シワのできる箇所や袖口の形が特徴的なのでポイントを押さえるとイラストの完成度が上がります。

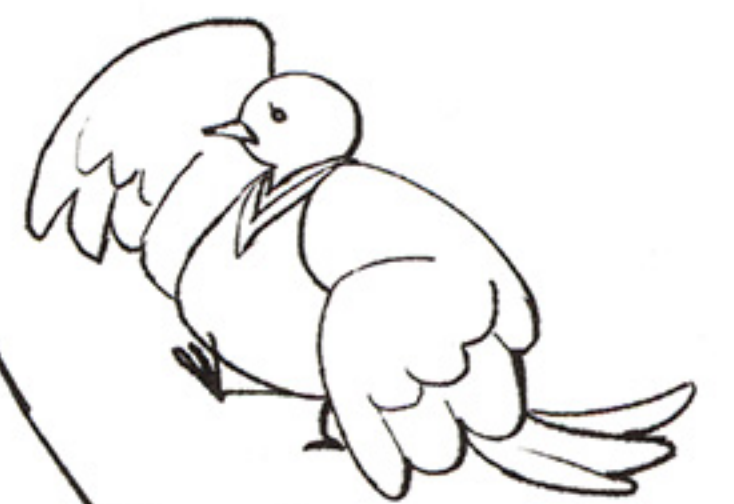
広袖の上半身は大きなベルに耳が生えたようなアタリを意識する。

ベル

体の形は全く見えないので、手足の長さと遠近感さえ掴めるなら、体は棒人間のアタリでもOK。

一番上に重ねた衣の脇の下、身八つ口の辺りの布がたわんで盛り上がるので正面からも見えている。

袖口や裾など、裏地が見えている場所は色を付けておくと分かりやすい。

袖は鳥の手羽のようなつもりで大きく。

裾にはくさび形のシワが２箇所に

背中の布と裾の布が当たる

布が折れる

裾が捲れた形は、大きく傾いた三角形。

袴や帯などで腰を締めた時も、脇の周りに布が余る。

袴の上から羽織った広袖はひし形に背中の布が膨らんで（身八つ口の周りが特に盛り上がる）、脇の下を中心に「く」の字のシワができる。

ひし形

上半身は扇形のアタリ。

おうぎ

背中のシワはひし形を意識する。

袖のシワは袖の高いところから始まっている。

09

曲げた腕の袖は、四角形を折り畳むイメージで描く。

勢いよく腕を突き出すときれいなひし形に袖口が開く。
袖下が縫われていないうえ、袖自体も大きいので、脇まで見えそうになる。

パースのついた広袖は、筒をイメージして描く。

ヒダの線は、真ん中３本、それ以外は２本。

大きく脚を開いた袴は
①スカートを描くつもりで横シワ（赤の実線）を描く。
②その後ヒダのシワ（紫の点線）を描く。

腕に巻き付くようなシワができる。

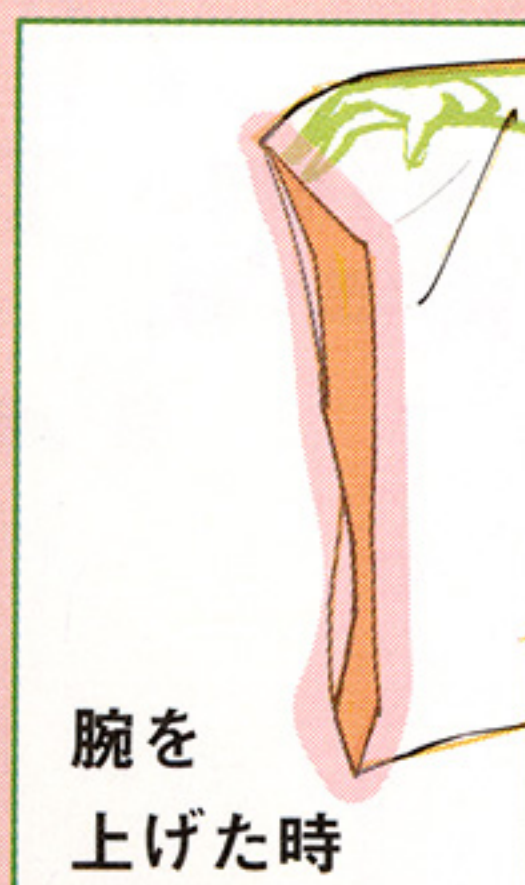
袖は手が隠れるほど大きい（身頃の幅もあるので）。

大きな四角

下げた腕の袖は、大きい三角錐と小さい三角錐が連なった形をイメージする。

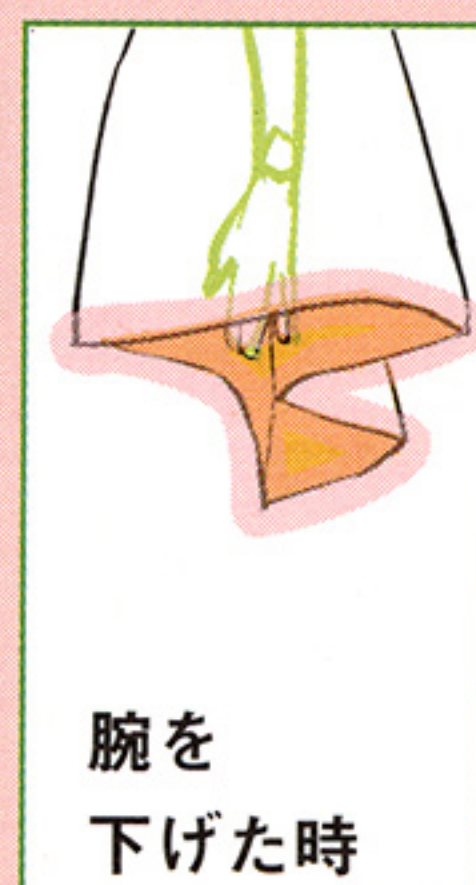
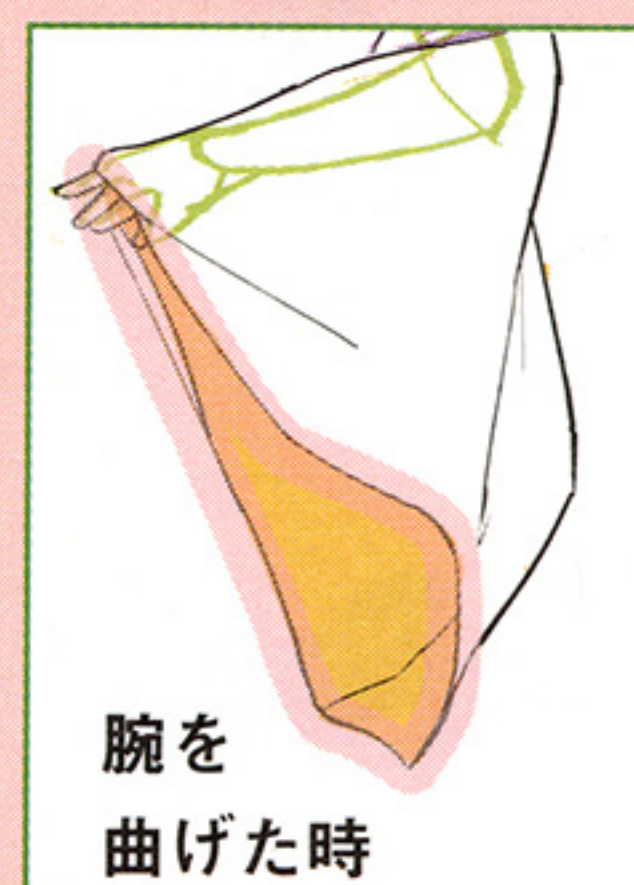
ONE POINT

袖の形色々

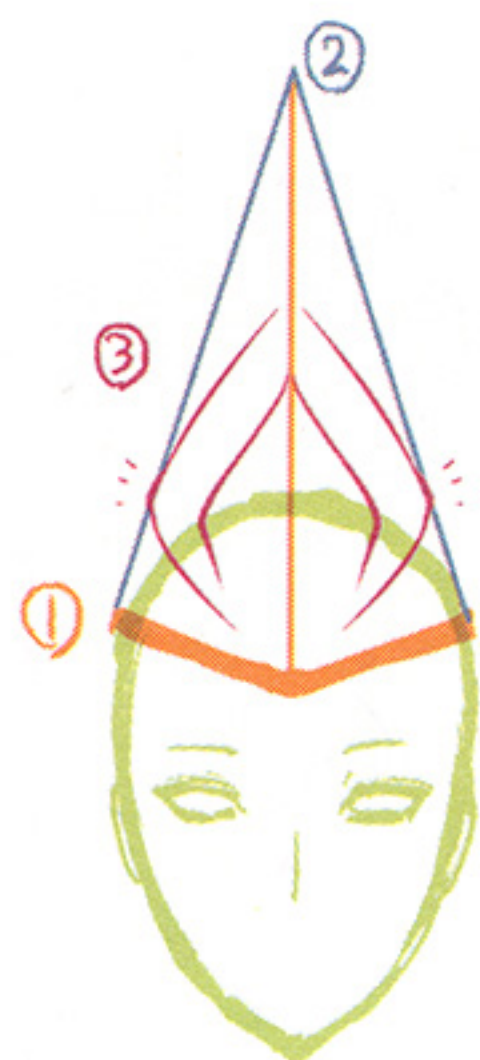
袖口は、腕を上げた時は細く、腕を下げると広く、腕を曲げると上方は細く、下方が太くなります。

腕を上げた時

腕を下げた時

腕を曲げた時

10 狩衣（かりぎぬ）

江戸時代以降に礼装に格上げされ、現代でも男性神職が神事の際に着用していますが、元々は庶民のオシャレ服や貴族のラフな（Tシャツ G パンくらい）日常着でした。
平安時代の装束には位階による色や柄の規定がたくさんありますが、日常着の狩衣は自由な色柄です。

正面

真正面から見た烏帽子
①額にVの字を描く。
②外形線はシンプルな薄い三角形。
③前面の凹ませた部分を中心に、わずかに左右に膨らむので、その陰影を付ける。

全体が三角形のシルエットになるように、左右がだいたい対称になるように、バランスをとって描く。

蝙蝠扇（かわほりおうぎ）
狩衣に合わせる扇。
骨が五本で、骨の片面にのみ紙が張られたもの。

指貫

平安時代ではあくまでTシャツGパンのような扱いなので、上品さや威厳を演出する場合は、同じ公家の私服でも狩衣より直衣（のうし）（参照63ページ）が良いでしょう。

後ろ

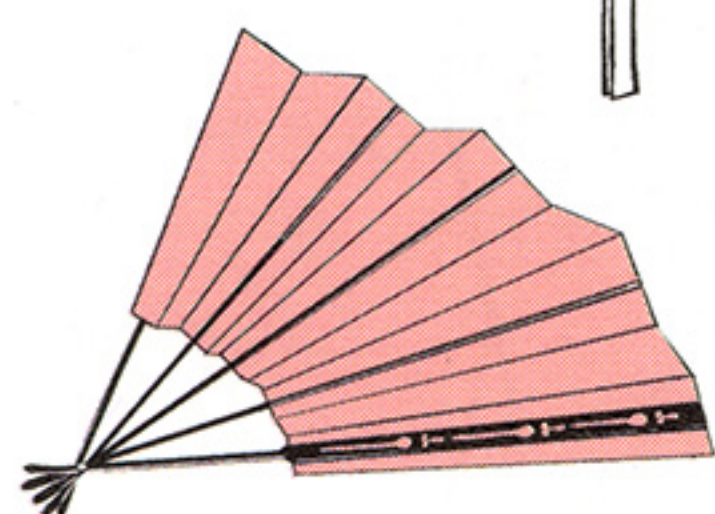
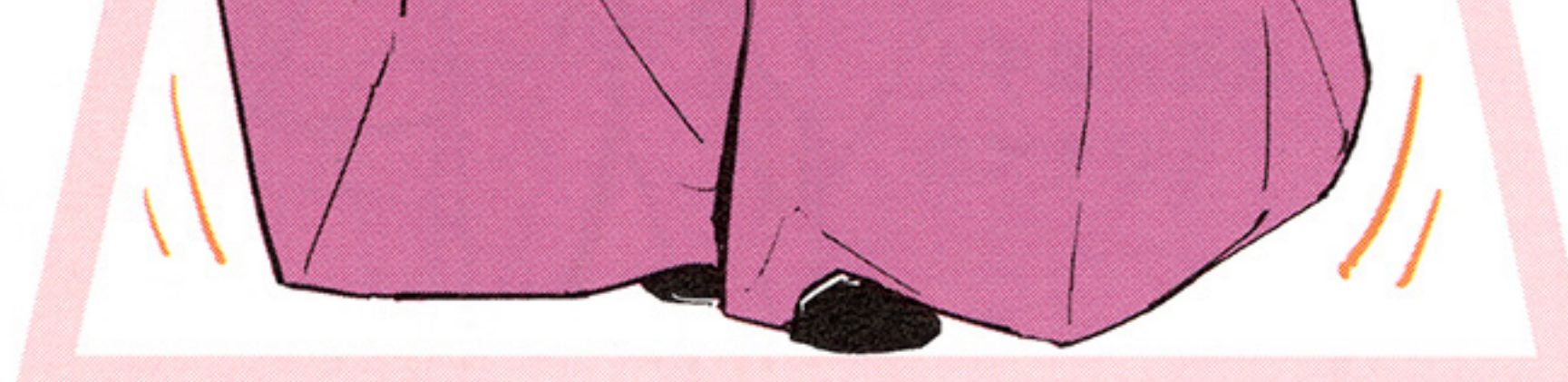
宛て帯
共布で作る。

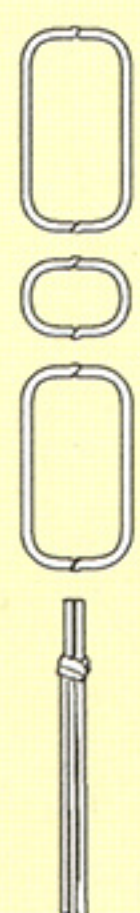
袖はここだけ縫い付けられている。
この部分の両端からシワができる。

袖は、お尻をカバーするような形になる。

背中には、縫い目がない。

狩衣の裾は、床すれすれの長さに仕立ててあるので、邪魔な時は内側に折って、左の腰に挟む。右に挟むのは、凶事の時のみ。

● 袖括の紐（そでくくり）

袖が邪魔にならないように、絞って結んでいた紐が装飾に変化した物です。袖口にあり、肩には無く、年齢や身分で種類が異なります。

置括（おきくぐり）
子供用。
袖に縫い付けられている。

薄平（うすひら）
35歳くらいまでの青年が用いる、幅の広い紐。

左右縒（さゆうより）
50代以上の老年と、身分の低い者が用いる。
白の細い紐。

横

袖が付いている部分。

背の一部しか縫われていないので、腕を動かせば腹まで見える。

● 狩衣の盤領

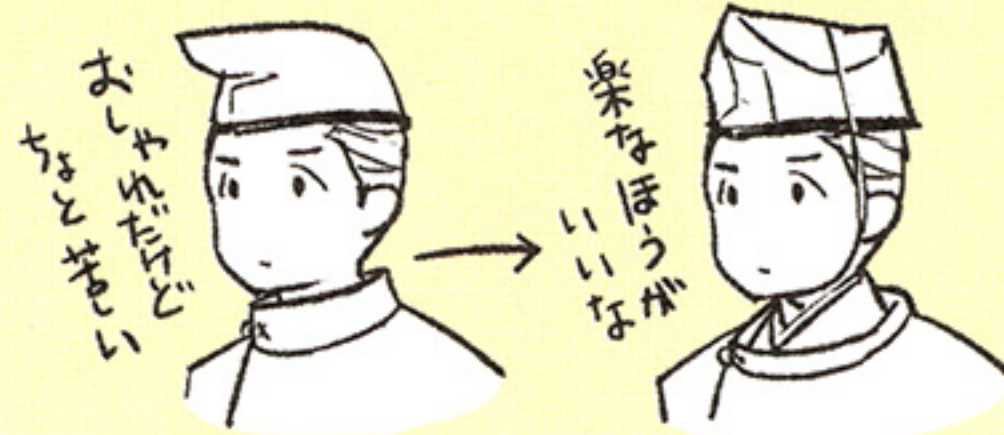
唐風の丸衿は都会的なオシャレでした。

蜻蛉
釈迦結びで作った蜻蛉玉と受け緒でボタンになっている。
この紐は共布で作るので、狩衣と同じ色柄。

首紙
厚紙を中にいれ、衿を立たせている部分。

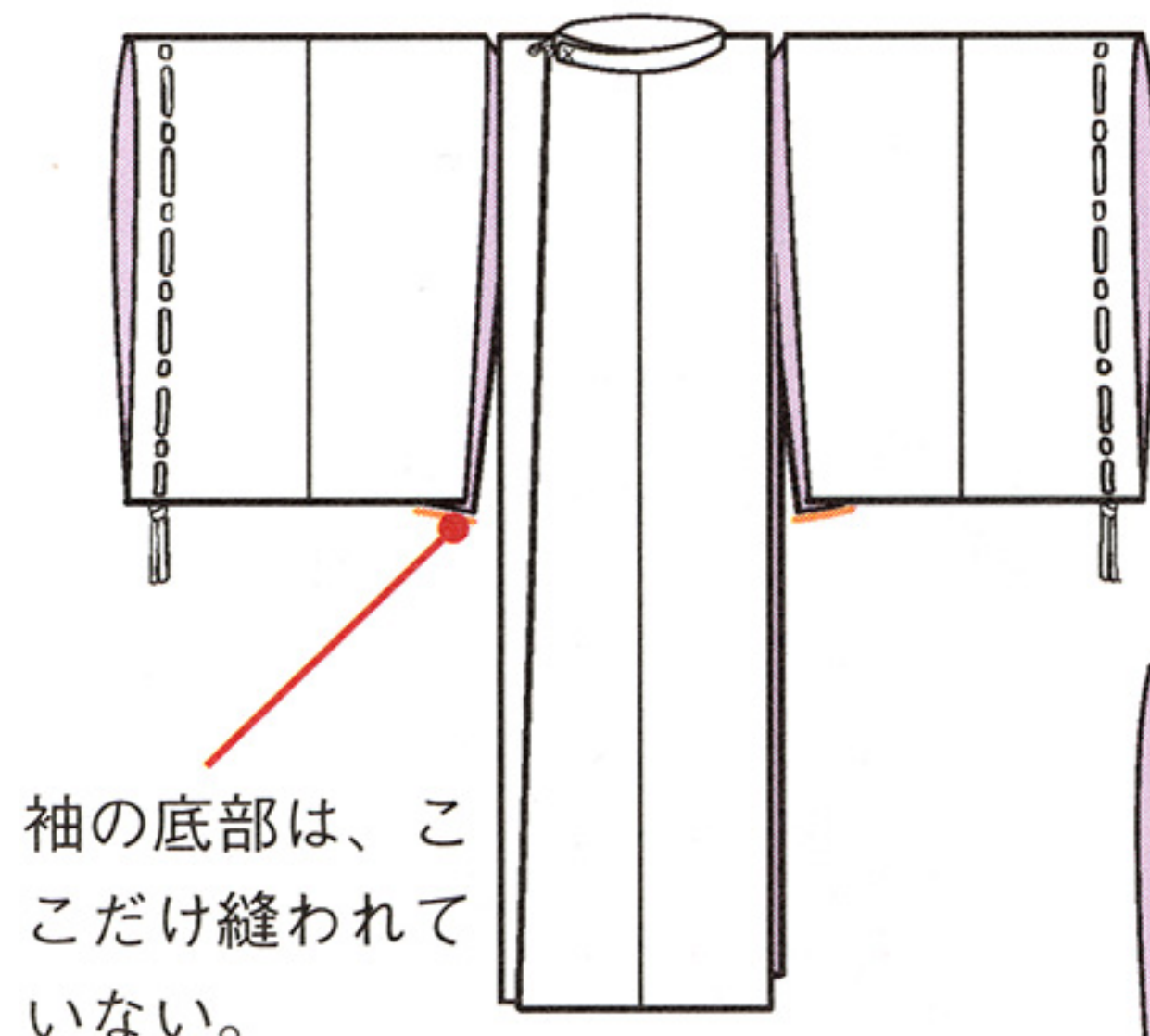
蜻蛉玉を縫い付けたステッチの形は×が一般的。

おしゃれだけどちょっと苦しい

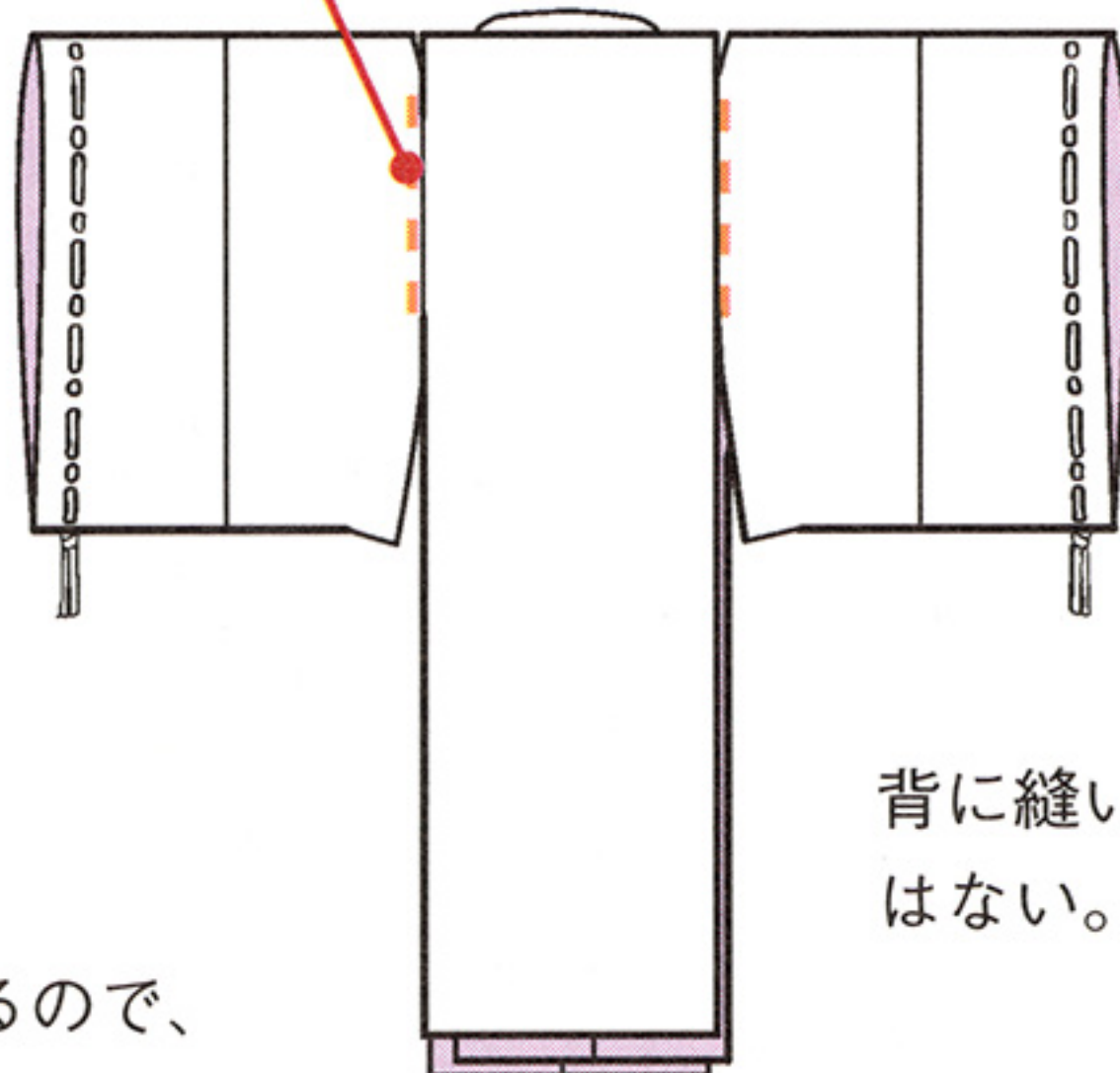
楽なほうがいいな

古い時代は、首紙が高く衿が狭い、詰め襟のような見た目だったものが、だんだん首紙が低く、衿も広がっていった。

宛帯は、お腹のおはしょりの下で、諸鉤結び（蝶結び）で結ぶ。

狩衣の構造

袖と後ろ身は、背中の中程の24cmくらいだけ縫い付けられている。

袖の底部は、ここだけ縫われていない。

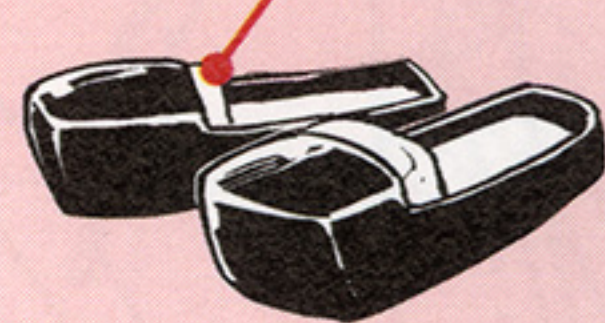
腹の中心に衽の縫い目が見える。

背に縫い目はない。

身幅が狭く袖と身頃が離れているので、腹にはあまりシワができない。

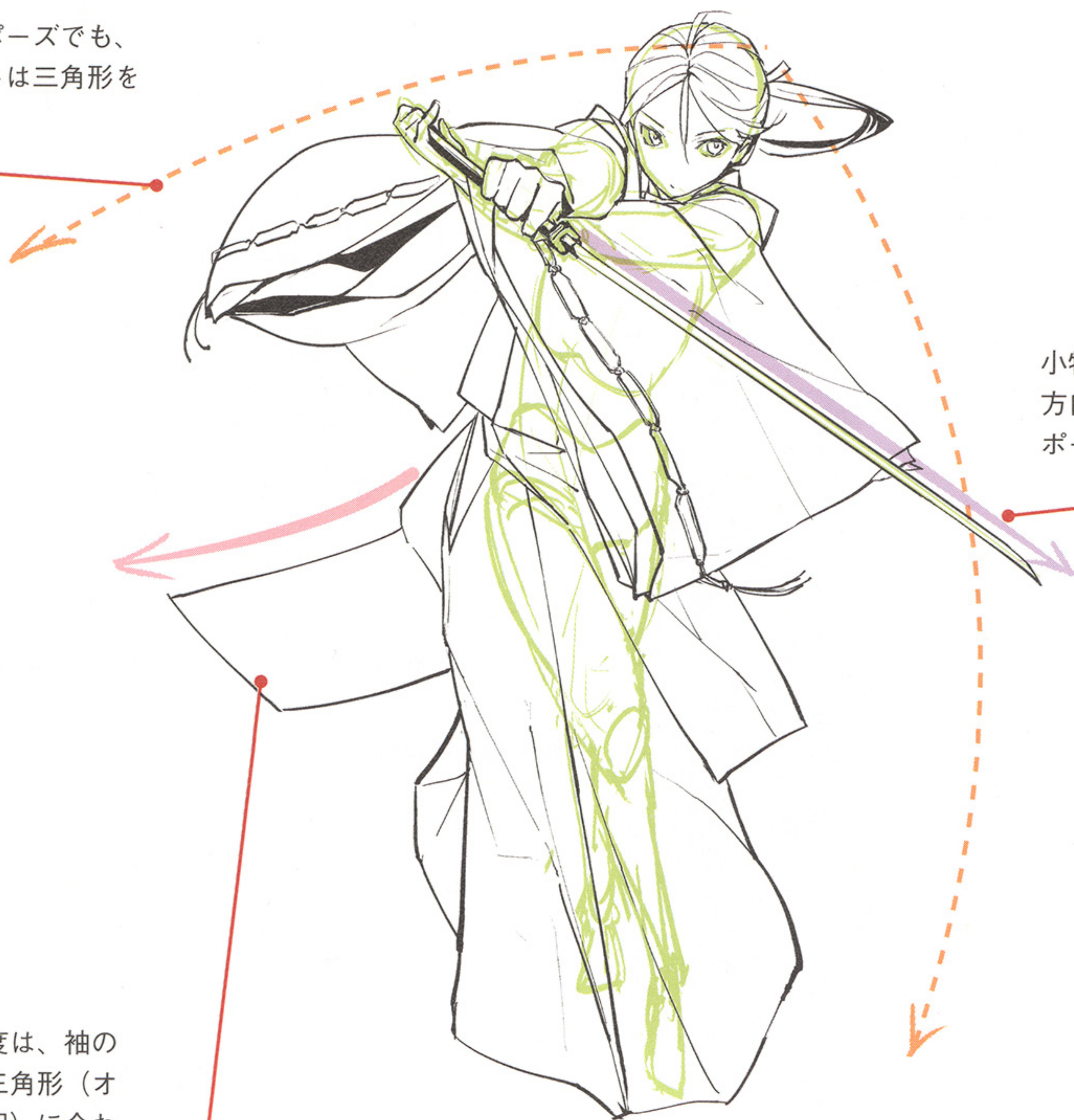
ONE POINT

浅沓と烏皮履
カジュアルな服なので草履でもOKですが、浅沓や烏皮履を描くと雰囲気がでます。

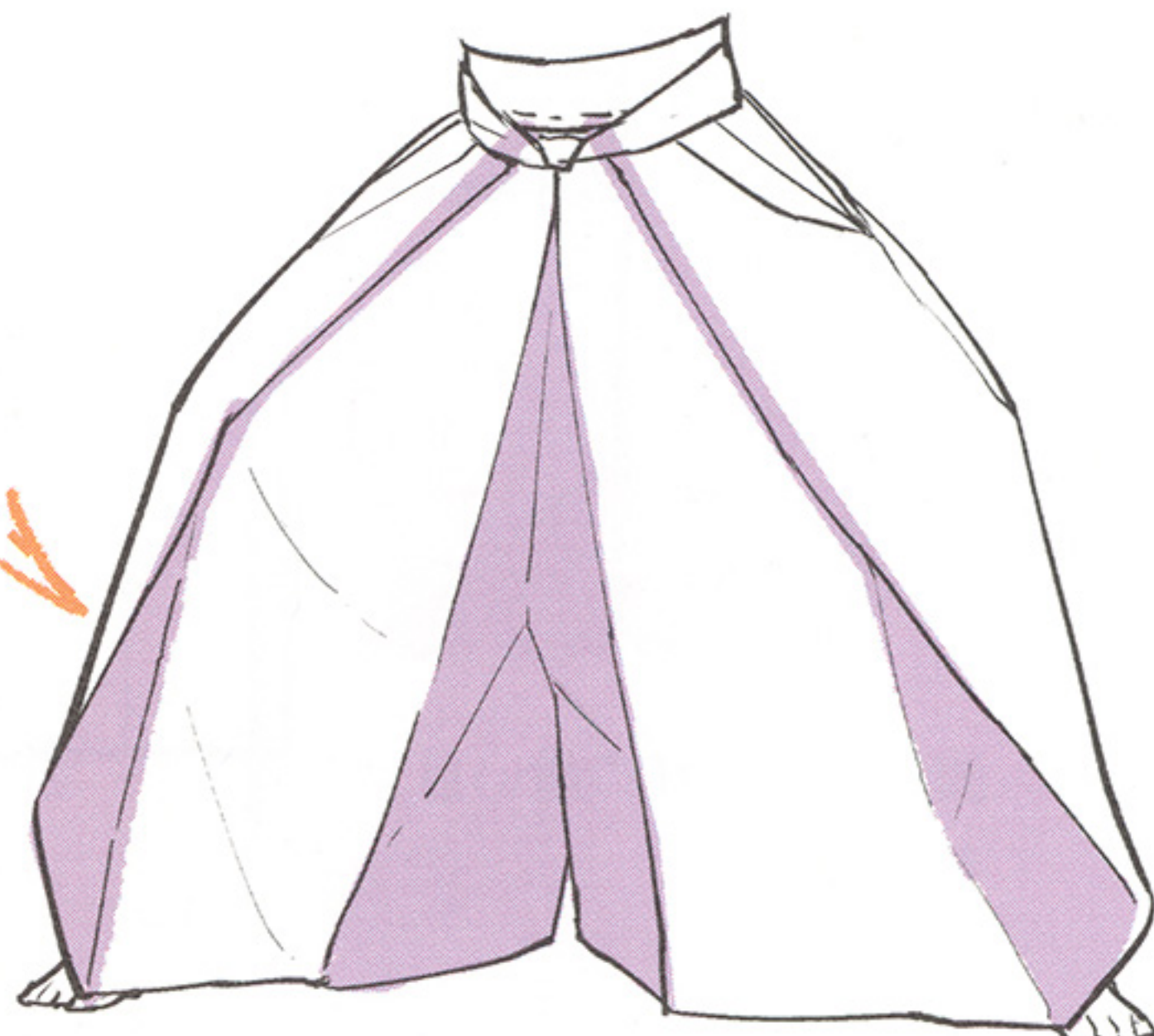
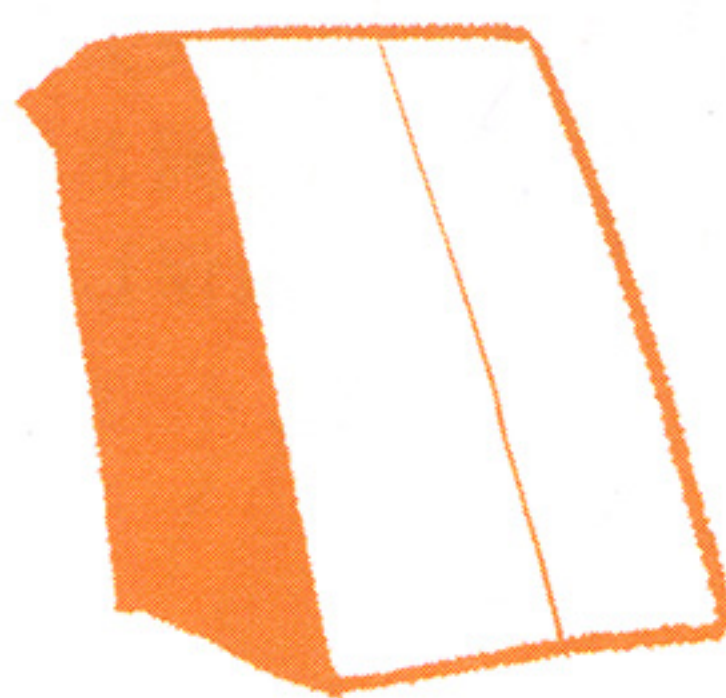
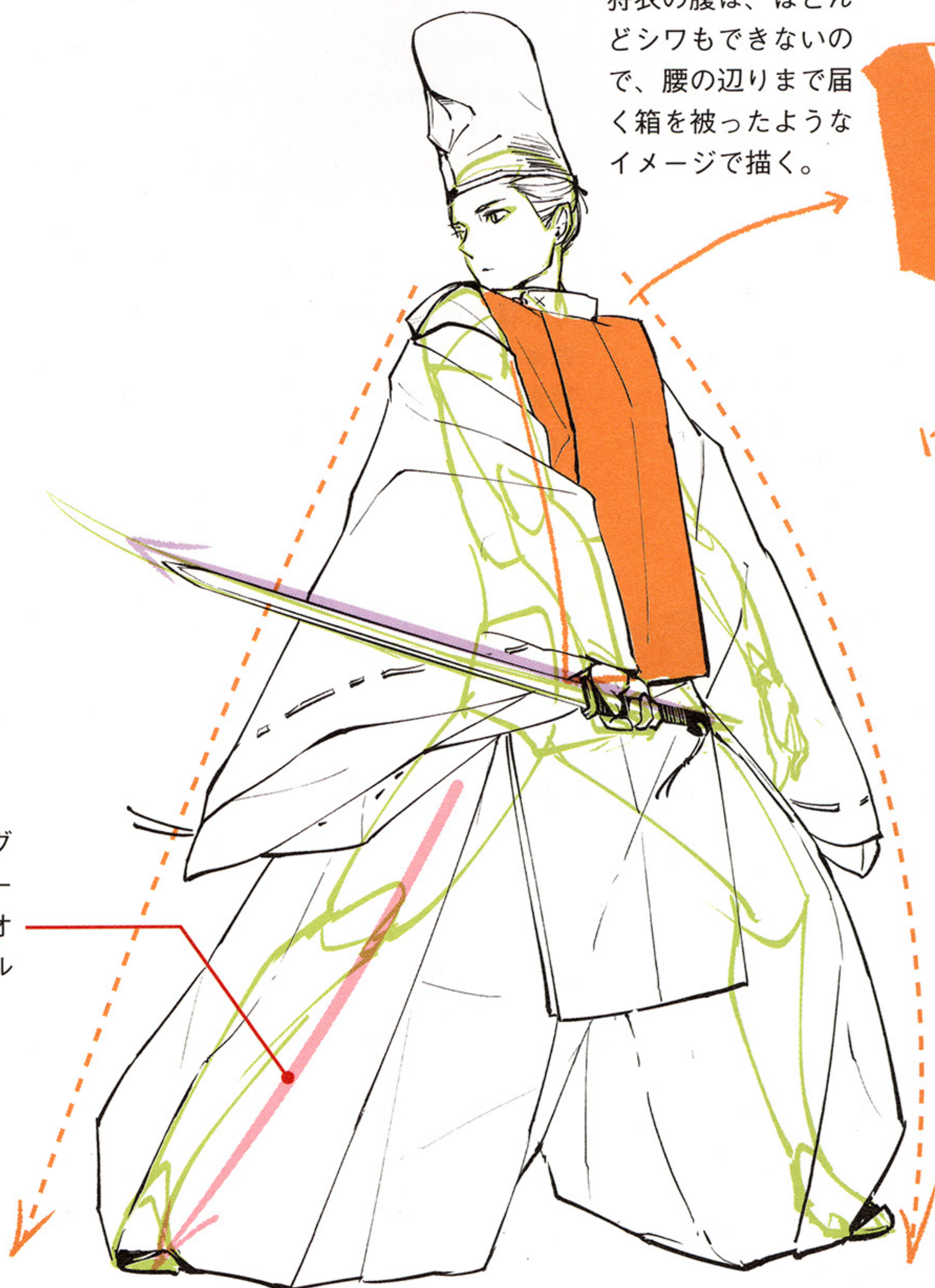
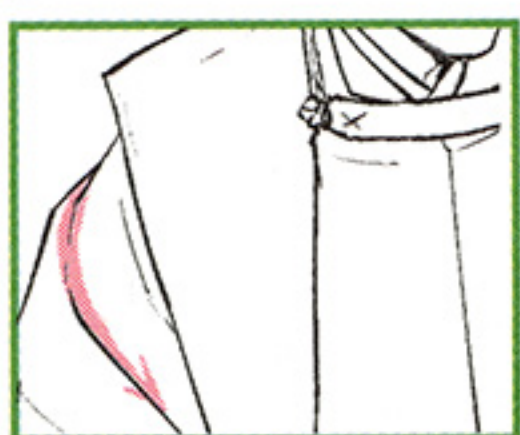
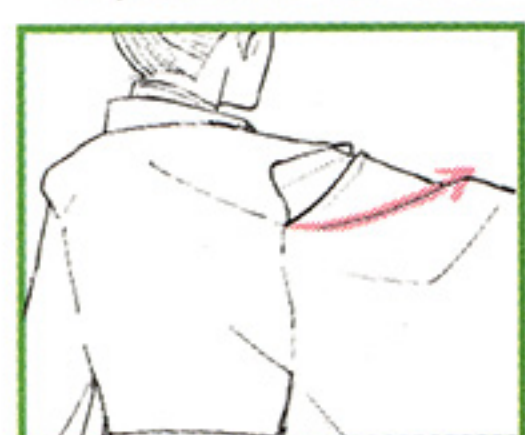
浅沓
紙をふのりで固めて漆を塗ったもので、漆の光沢と、大きくて丸い甲が特徴です。
足の甲のあたる部分には白い布製のクッションがついています。

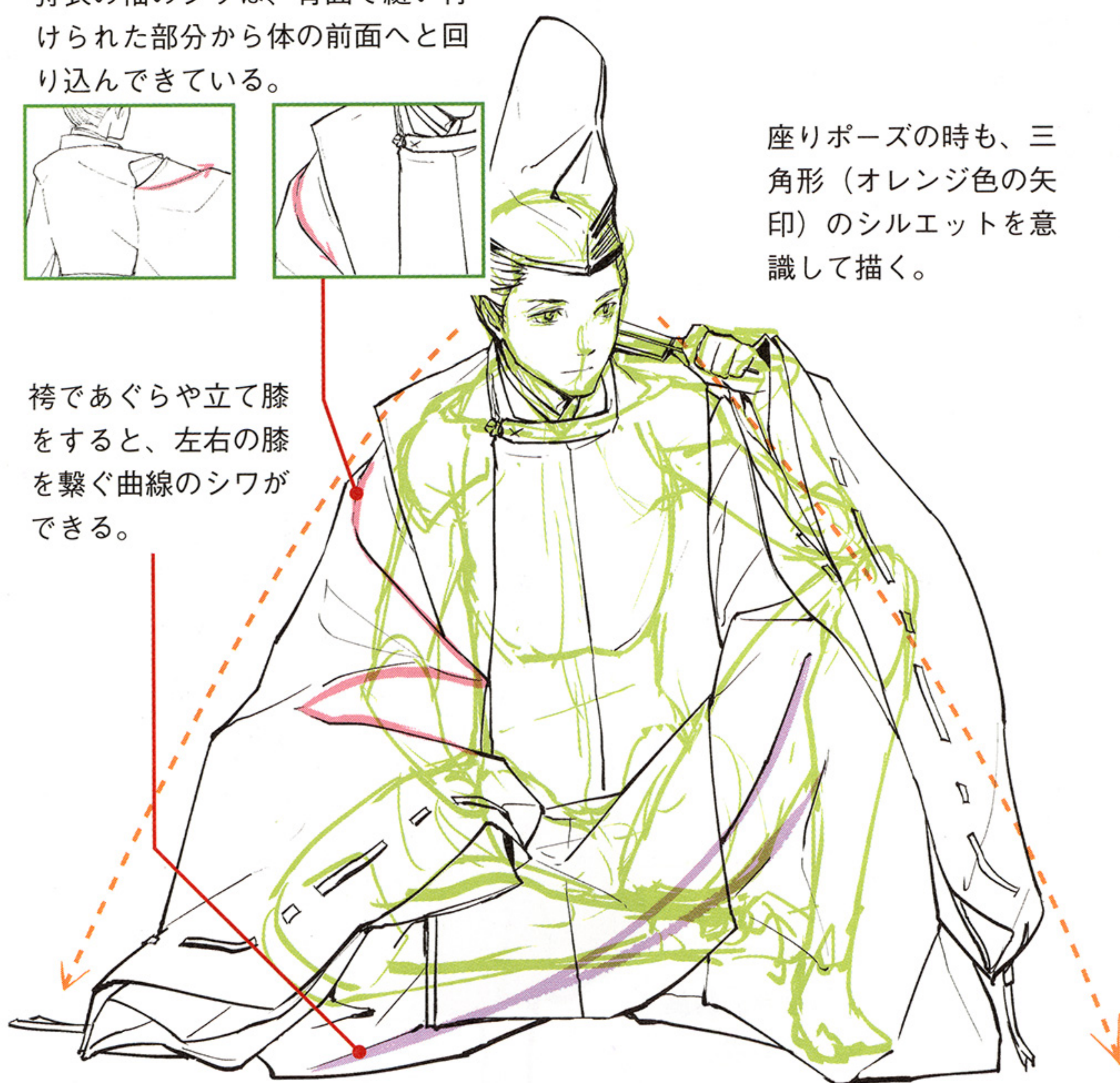
クッション

烏皮履
浅沓の原型である革製の靴です。
爪先が反ったローファーという感じの軽快な作りになっています。
鎌倉時代頃まではこちらがはかれていました。

シワや布の動き

どんなに激しいポーズでも、
狩衣のシルエットは三角形を
意識して描く。

小物は全体の流れと逆
方向に突き出すと、
ポーズが引き締まる。

狩衣の裾の角度は、袖の
動きでできる三角形（オ
レンジ色の矢印）に合わ
せるようにすると、動き
により勢いがつく。

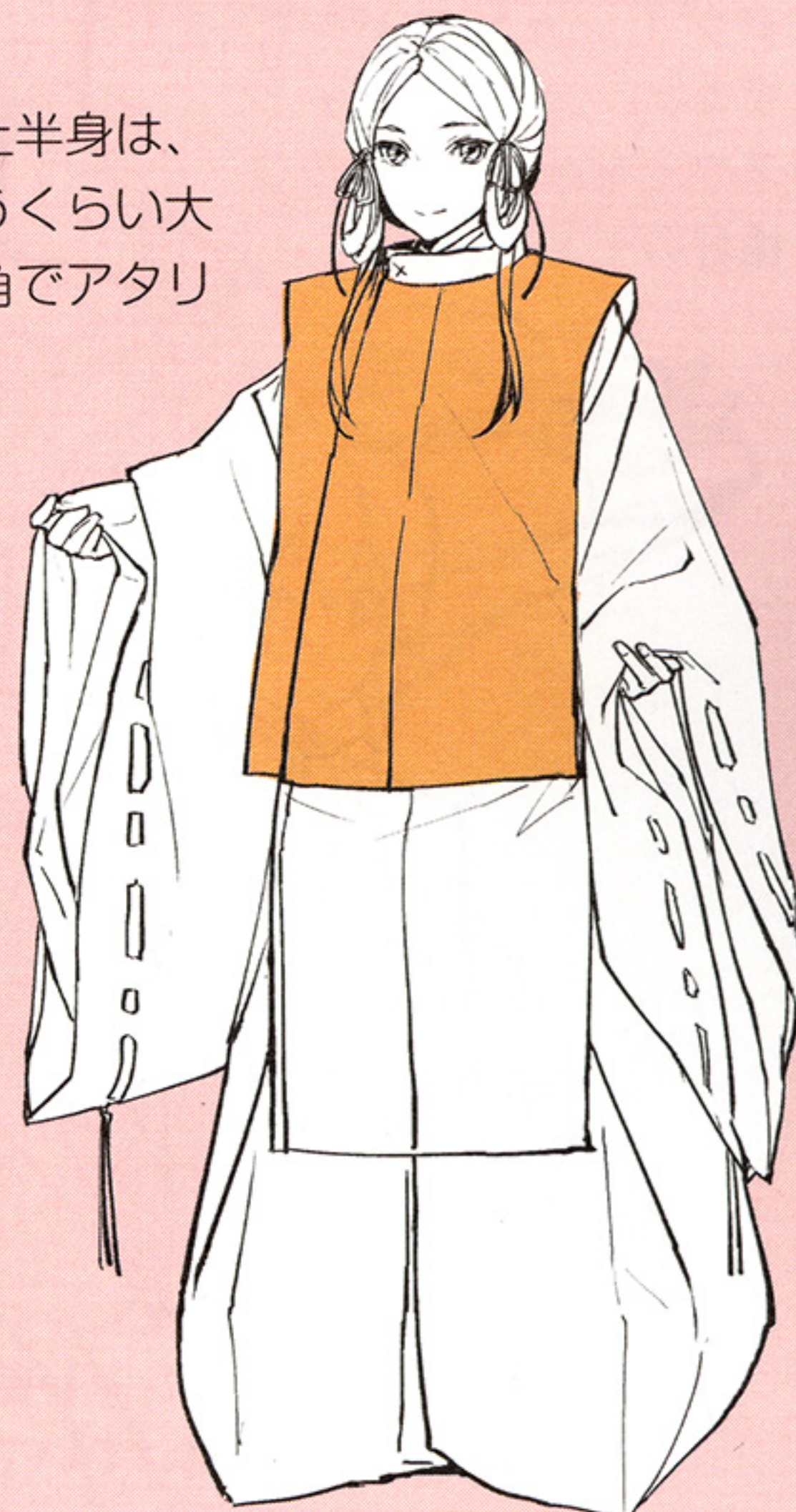
脚を開くと、袴のヒダは
こんな風に開く。

狩衣の腹は、ほとんどシワもできないので、腰の辺りまで届く箱を被ったようなイメージで描く。

狩衣の裾が見えないアングルなので、足を開いたポーズにすることで、三角形（オレンジ色の矢印）のシルエットを強調する。

狩衣の袖のシワは、背面で縫い付けられた部分から体の前面へと回り込んできている。

座りポーズの時も、三角形（オレンジ色の矢印）のシルエットを意識して描く。

袴であぐらや立て膝をすると、左右の膝を繋ぐ曲線のシワができる。

ONE POINT

子供用の狩衣

子供用の狩衣は「半尻（はんじり）」といって、後ろ身を短く仕立ててあります。
前身はたくしあげる長さを調節できるので、見た目は大人と同じようになります。

半尻の上半身は、腰を覆うくらい大きな四角でアタリで描く。

11 水干

水干は狩衣より実用向きの労働服が原型の装束です。
狩衣と混同されたりしますが、衿紐で盤領を留めたり、縫い目に菊綴がついていたりと、動きやすさと丈夫さを確保した作りが特徴です。

正面

水干の衿紐は、赤い組み紐が古式。

労働着だった平安時代は、手が出るくらい袖が短い。時代が下って、お洒落着や礼装になってからは狩衣と同じくらい大きな袖に。

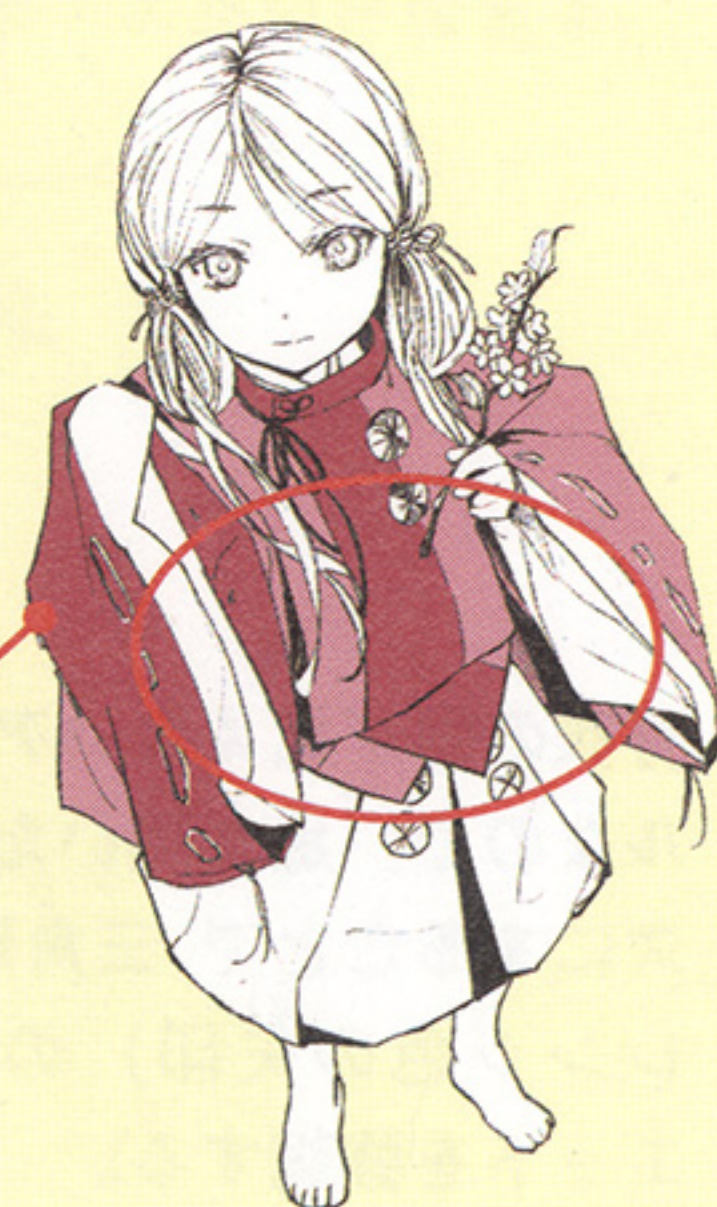
もとは労働服だった水干も、時代が下るうちに色のバリエーションも増え「狩衣よりオシャレ」だと認識されるようになりました。
武士の礼装や公家の子供服としても着られるようになり、この頃から裾を袴の外に出して覆水干で着るようにもなります。

萎烏帽子
麻で作った萎烏帽子。形は立烏帽子と同じ。張りを持たせずに、くしゃっと折って被る。身分の低い貴族や庶民が用いた。

● 覆水干

狩衣と同様に、裾を揃えて見せる他、斜めに重ねる着方もある。

二色の布で作った水干。

袖括りの紐は、狩衣同様に身分と年齢で使い分けた。
平安時代なら左右縒の質素なもので。

腰紐は白で、上刺の糸がある。

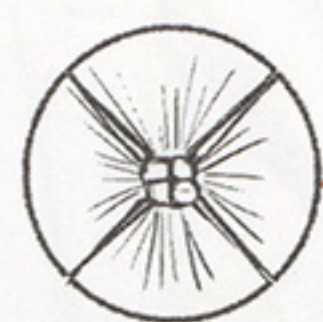
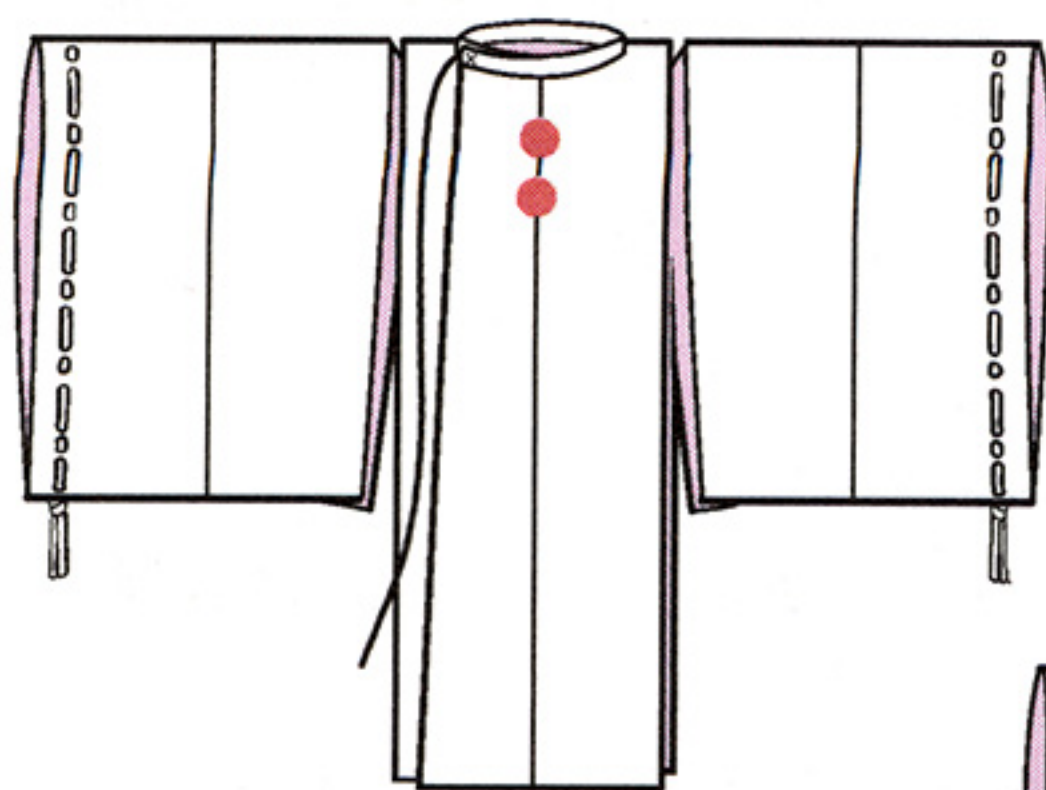
後ろ

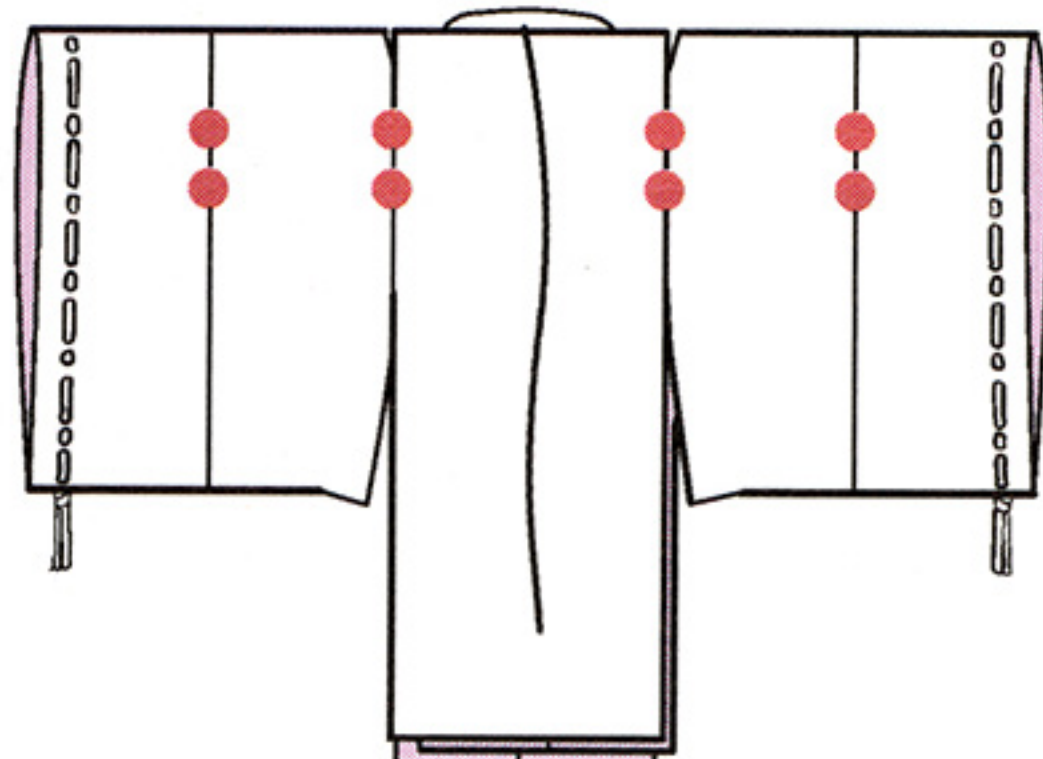
袖はここだけ縫い付けられている。菊綴の縫い付けられたところからシワができる。

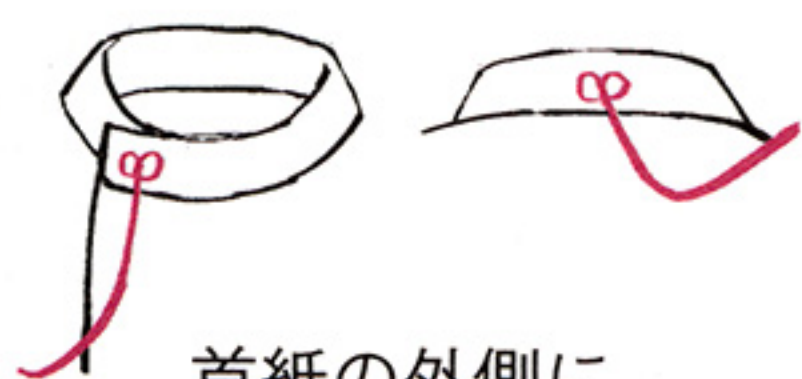
狩衣がTシャツGパンだとすると、水干はジャージかスウェットくらいのラフな格好のイメージ。

水干袴
形は指貫と同じだが、丈が短く、菊綴があり、腰紐が別布なのが特徴。

菊綴
縫い目の補強が、装飾的に変化したもの。

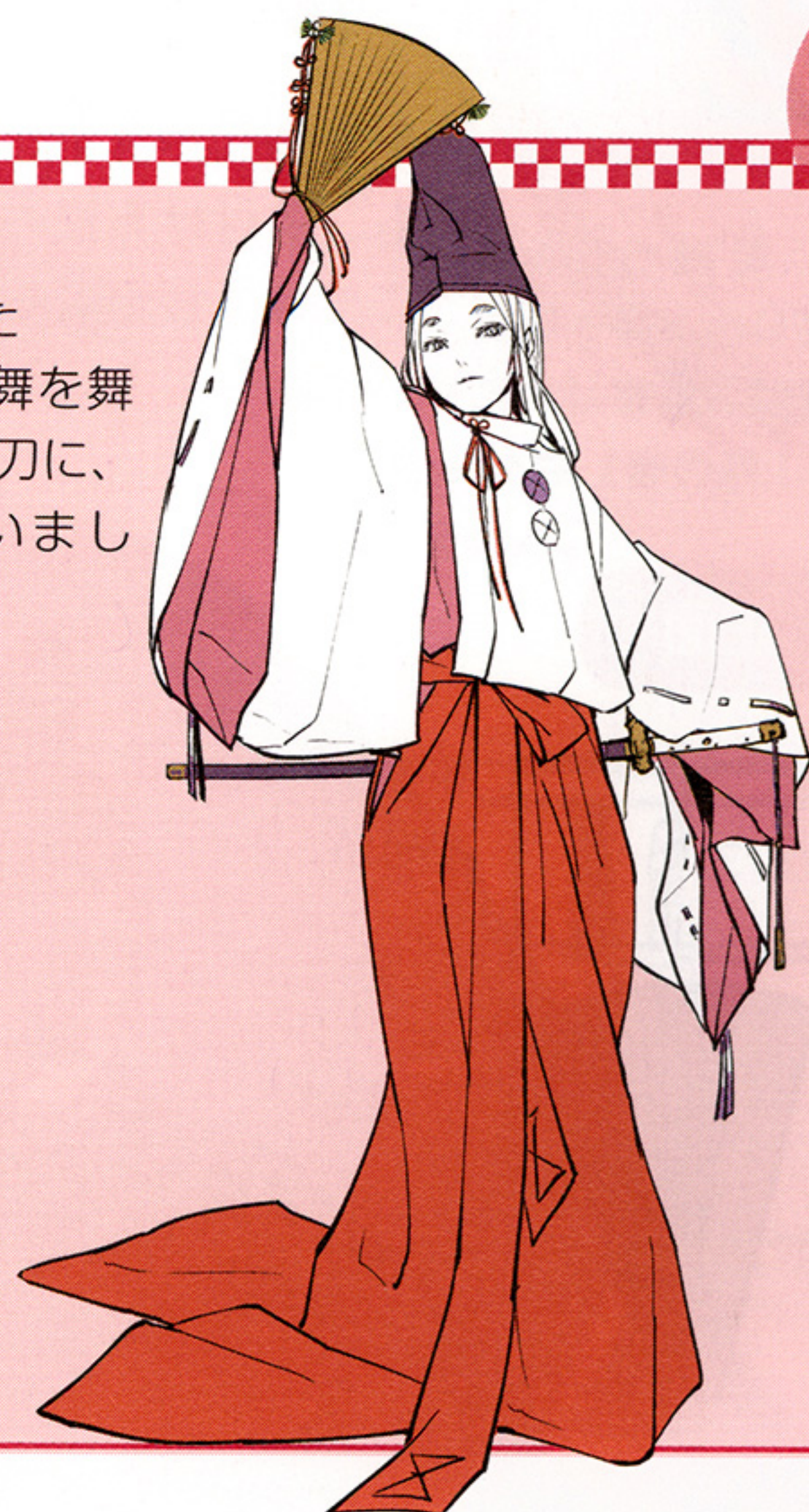
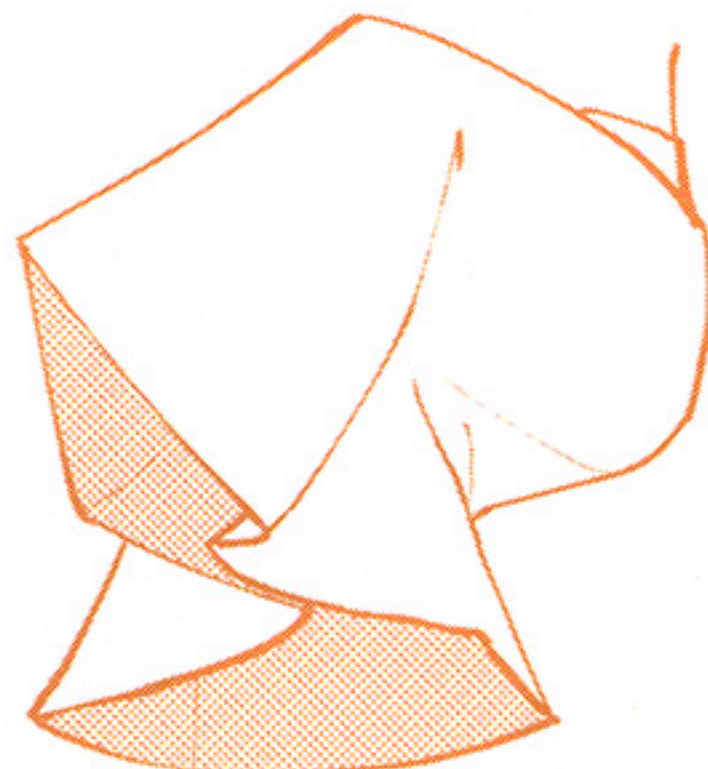
鎌倉時代に衿紐のオシャレ結びが生まれた。
盤領より首回りが開いていて楽な垂領で着用するための結び方もある。

水干の構造

袴の中に着込むため、狩衣より丈が短い。

菊綴は、ほつれやすい縫い目についている。

衿紐のついてる部分

衿の首紙の内側に縫い付けられている。

首紙の外側に縫い付けられている。

ONE POINT

水干の特殊な着方

平安時代末期に現れた芸妓「白拍子（しらびょうし）」は男舞を舞う際、烏帽子、水干、太刀に、女物の長袴を着ていました。

シワや布の動き

複雑な動きをした時の袴は、スカートのヒダをイメージしてシワを描くと分かりやすい。

袖は、常に大きな四角形を意識して。

袖口の後ろに四角い袖の奥行きがある。

くるっと

スカートのように膨らんだ裾を丸くすぼめる。

脚を開くと、ヒダが紫部分のように開く。

12 束帯（文官）

平安時代の官吏の制服から現代の特別な神事などでも着用される正装です。束帯は装束の種類というよりも、着付け方法の名称です。束帯は公卿や文官が着るものと四位以下の武官が着る物に大別されます。ここでは文官が着る束帯を解説します。

正面

懐中に、帖紙と檜扇を入れる。

垂纓冠
※冠の形状は時代ごとに違いがあります。この絵は平安前中期頃の冠を参考にしてます。

縫腋袍
身分によって、色や文様が異なる。

笏

蟻先
襴の端を折り返した部分。

表袴
ヒダがなく、股下に穴が開いた特殊な袴。

浅沓
外側を漆で塗った靴。

折る
襴
蟻先

襴
縫腋袍の裾は、動きやすくするため、幅の広い布（襴）が付いている。

外を歩く時は、下襲の裾を引きずらないように、石帯の上手にくぐらせたり、太刀に引っ掛けたりする。

ONE POINT

束帯の文様
束帯の袍は位袍といって、位によって色と文様が定められています。詳しくは116ページを参照ください。

後ろ

石帯の上手
石帯の余りが、装飾になった部分。輪になるようにして、先を石帯に挟み込む。

背縫がある。

石帯
革ベルト。
（参照 65ページ）

下襲
袍の下に着る衣服。後ろに引きずった裾は、身分が高い程長い。特別な日には豪華な文様が入った色とりどりのものを着た。

横

外見では分かりにくいが、身八つ口、振り口のような穴がある。

魚袋
石帯の、右端２つの石の間に垂らす装飾品。

宮中に入るための勘合符。のちに形式だけになり、公卿や殿上人の装飾品となった。

座る

古代から江戸時代まで、改まった座り方はあぐらだった。

緌
薄い二枚の布が重なっている。

長い裾は、縁側の欄干にかけたり、畳んで座る。

太刀
太刀を下げることを「佩く」という。太刀を佩くのは武官と、文官では警護に関わる役職か勅許（帝の許し）を得た者のみ。

座ると、袍の前身の打ち合わせが開く。

平緒
太刀を佩く時に、石帯の上から締める布。

束帯（文官）の構造

縫腋袍の前側

端袖　奥袖

袍の袖は、台形に仕立ててある。

蟻先

欄

縫腋袍の後側

首紙
狩衣と同じ盤領。袍の背中側に衿があることに注意。

はこえ
縫腋袍の腰の部分にある大きなポケット。束帯の着付けは、おはしょりが台形になるようにはこえへ詰め込み、その台形にベルトを挟み込んで締める。

袍の下には、下襲、衵、単、小袖（下着）を重ねて、表袴を穿く。
文官は、儀式などで肩脱ぎをする必要がない限りは、半臂を省略。

下襲
表は白で、裏は黒。
（古くは裏は蘇芳色）

単
平安時代だと、下襲と単の間に衵を重ねた。

表袴のかえり襠
股を覆い隠す幅の広い紐。

12 束帯（文官）

平安時代の官吏の制服から現代の特別な神事などでも着用される正装です。束帯は装束の種類というよりも、着付け方法の名称です。束帯は公卿や文官が着るものと四位以下の武官が着る物に大別されます。ここでは文官が着る束帯を解説します。

ONE POINT

束帯の文様

束帯の袍は位袍といって、位によって色と文様が定められています。詳しくは116ページを参照ください。

正面

懐中に、帖紙と檜扇を入れる。

垂纓冠
※冠の形状は時代ごとに違いがあります。この絵は平安前中期頃の冠を参考にしてます。

縫腋袍
身分によって、色や文様が異なる。

笏

蟻先
襴の端を折り返した部分。

表袴
ヒダがなく、股下に穴が開いた特殊な袴。

浅沓
外側を漆で塗った靴。

折る
蟻先
襴

襴
縫腋袍の裾は、動きやすくするため、幅の広い布（襴）が付いている。

外を歩く時は、下襲の裾を引きずらないように、石帯の上手にくぐらせたり、太刀に引っ掛けたりする。

後ろ

石帯の上手
石帯の余りが、装飾になった部分。輪になるようにして、先を石帯に挟み込む。

背縫がある。

石帯
革ベルト。
（参照 65ページ）

下襲
袍の下に着る衣服。後ろに引きずった裾は、身分が高い程長い。特別な日には豪華な文様が入った色とりどりのものを着た。

横

外見では分かりにくいが、身八つ口、振り口のような穴がある。

魚袋
石帯の、右端２つの石の間に垂らす装飾品。

宮中に入るための勘合符。のちに形式だけになり、公卿や殿上人の装飾品となった。

座る

古代から江戸時代まで、改まった座り方はあぐらだった。

纓
薄い二枚の布が重なっている。

長い裾は、縁側の欄干にかけたり、畳んで座る。

太刀
太刀を下げることを「佩く」という。太刀を佩くのは武官と、文官では警護に関わる役職か勅許（帝の許し）を得た者のみ。

座ると、袍の前身の打ち合わせが開く。

平緒
太刀を佩く時に、石帯の上から締める布。

束帯（文官）の構造

縫腋袍の前側

端袖

奥袖

蟻先

袍の袖は、台形に仕立ててある。

襴

縫腋袍の後側

首紙
狩衣と同じ盤領。袍の背中側に衿があることに注意。

はこえ
縫腋袍の腰の部分にある大きなポケット。束帯の着付けは、おはしょりが台形になるようにはこえへ詰め込み、その台形にベルトを挟み込んで締める。

袍の下には、下襲、衵、単、小袖（下着）を重ねて、表袴を穿く。
文官は、儀式などで肩脱ぎをする必要がない限りは、半臂を省略。

下襲
表は白で、裏は黒。
（古くは裏は蘇芳色）

単
平安時代だと、下襲と単の間に衵を重ねた。

表袴のかえり襠
股を覆い隠す幅の広い紐。

シワや布の動き

袍（ほう）は身幅が、狩衣（かりぎぬ）の倍ある。幅が広い分、お腹や腰の辺りに狩衣にはないシワができる。

上半身が非常に大きい装束なので、狩衣の５割増しくらいの感覚で描くとそれらしくなる。

袖口の周りは、丸みのある大きなひし形をイメージする。

袖の下の端っこは、尖ったフォルムになる。

袖の縫い目は、肘あたりを意識する。

後ろ姿も、どっしりとしたシルエットを意識する。

狩衣の立ち姿は三角形のシルエットですが、束帯は将棋の駒から足が生えたようなイメージで。

衣冠

略式制服として夜間勤務などに着用された装束の着付け方です。

束帯も衣冠も、あまり激しい動きをするような装束ではありません。
動きのあるポーズを描く時は、魔除けのために弓の弦を鳴らすという古来からの風習があるので、ポージングに迷った時は、弓を持たせると良いかもしれません。

袖口はとても細い8の字に見えます。

縫腋袍

この袖口の下がツンと尖って見える部分。

下着を省いている分、上半身がいくらかスリムになり、大きく膨らむ指貫を穿くので、バランスの良い末広がりなシルエットになる。

外に引き出したはこえの線。

縫い目の線。

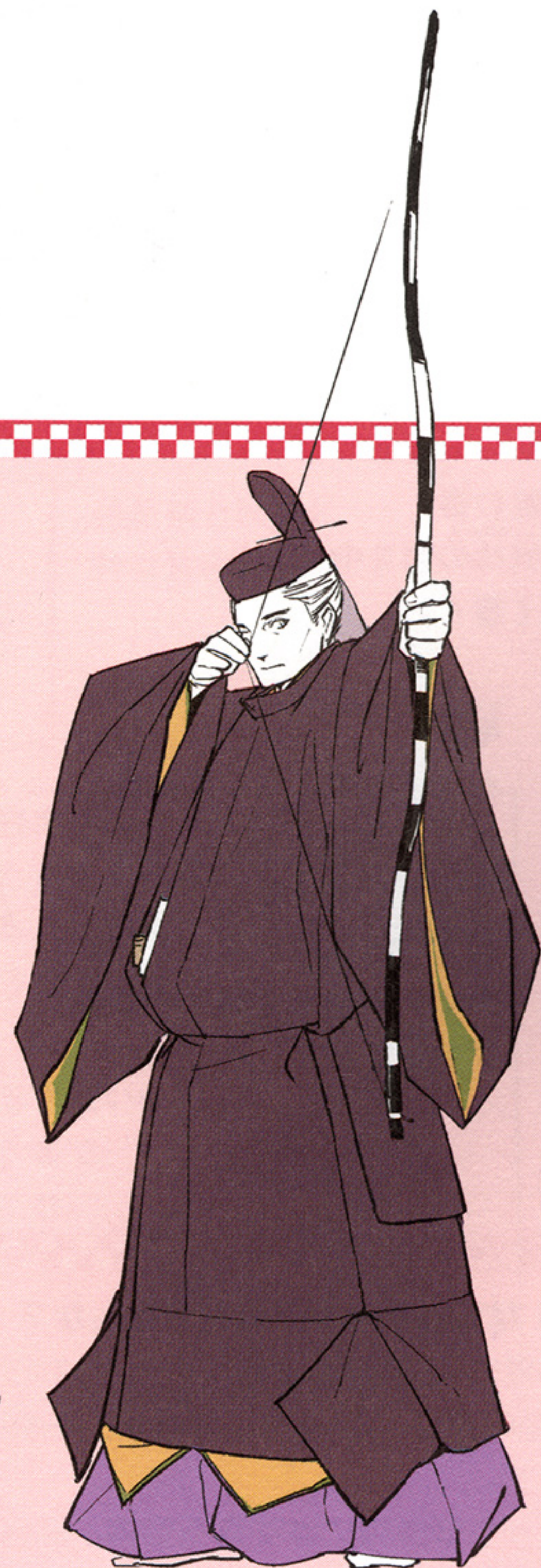
出衣
単の代わりに長く仕立てた衵（衣）を着て、その裾を袍の下から見せたもの。

ONE POINT

文武官共用の装束 「衣冠」

束帯から「石帯」「平緒」「下襲」を省き、「指貫」を穿くと「衣冠」と呼ばれる着付けになります。
略装なので、太刀を佩く時は実用向きの野太刀を革緒で吊ります。
袍と同じ共裂（生地）の「抱え紐」を帯にして、袍の背中にある「はこえ」と呼ばれるポケットのような布を、外に引き出して、紐が見えないように隠していました。

同じ着付けで自由な色の袍を着たのが直衣。

はこえを引き出して、紐を隠す。

13 束帯（武官）

三位より上（公卿）の武官は文官と同じ束帯を着用しましたが、四位以下の武官の正装は武官束帯と呼ばれる華麗なものです。武官は儀式やパレードの花形として活躍し、舞の披露もしました。
文官の束帯との一番の違いは脇の縫われていない闕腋袍と、装飾的な武具です。

正面

緌
馬の尾の毛を使って作った飾り。

やなぐい
本来は矢を入れるための武具だが、束帯のやなぐいは装飾品。

手に弓を持つ場合、帖紙と檜扇と共に笏も懐中に入れる。

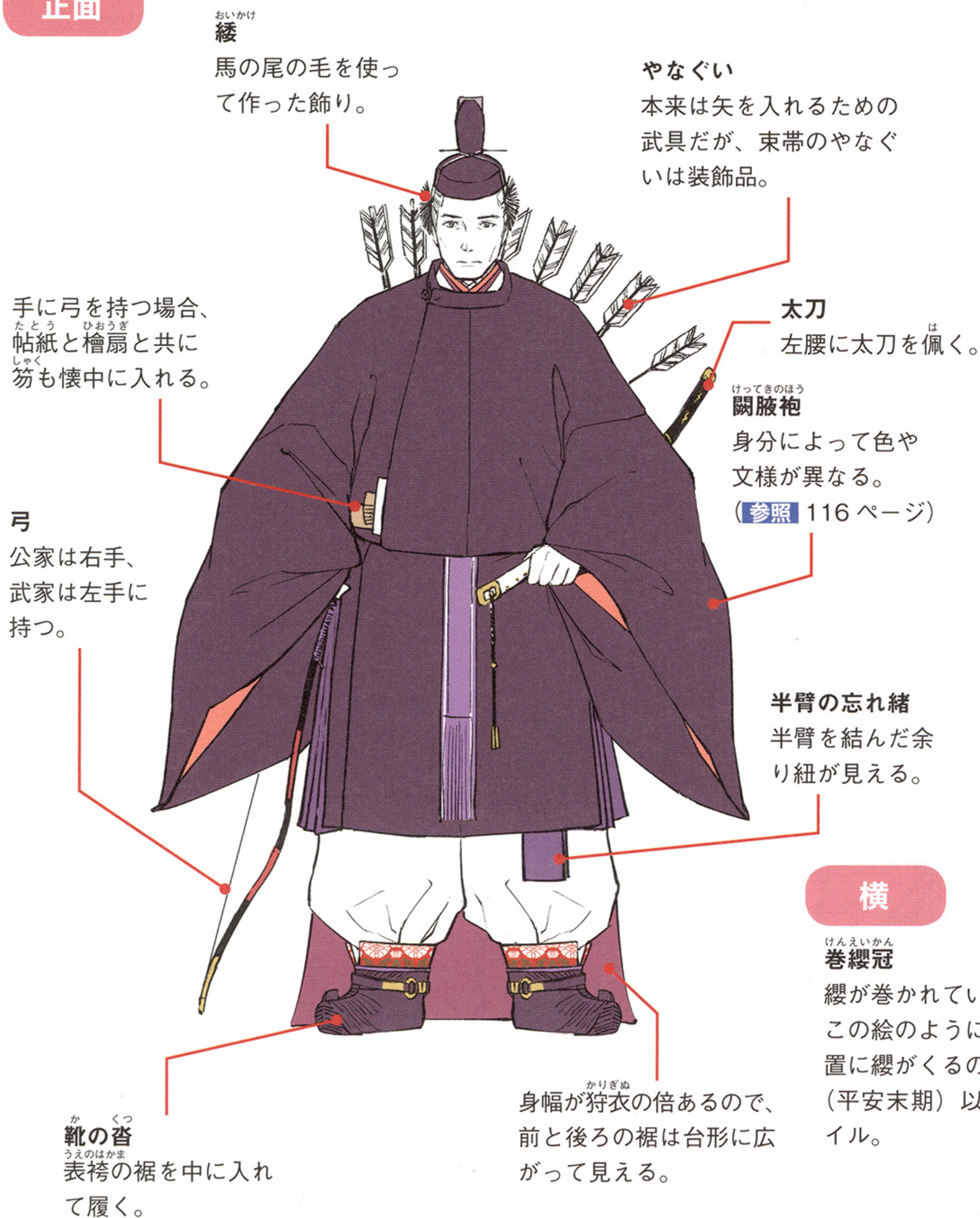
太刀
左腰に太刀を佩く。

闕腋袍
身分によって色や文様が異なる。
（参照 116 ページ）

弓
公家は右手、武家は左手に持つ。

半臂の忘れ緒
半臂を結んだ余り紐が見える。

靴の沓
表袴の裾を中に入れて履く。

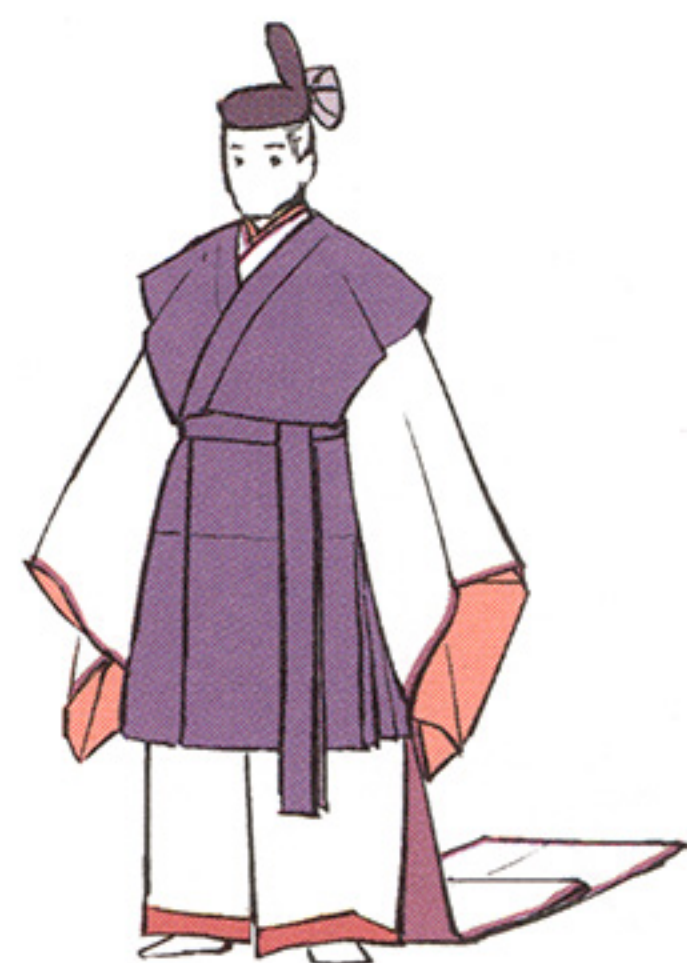
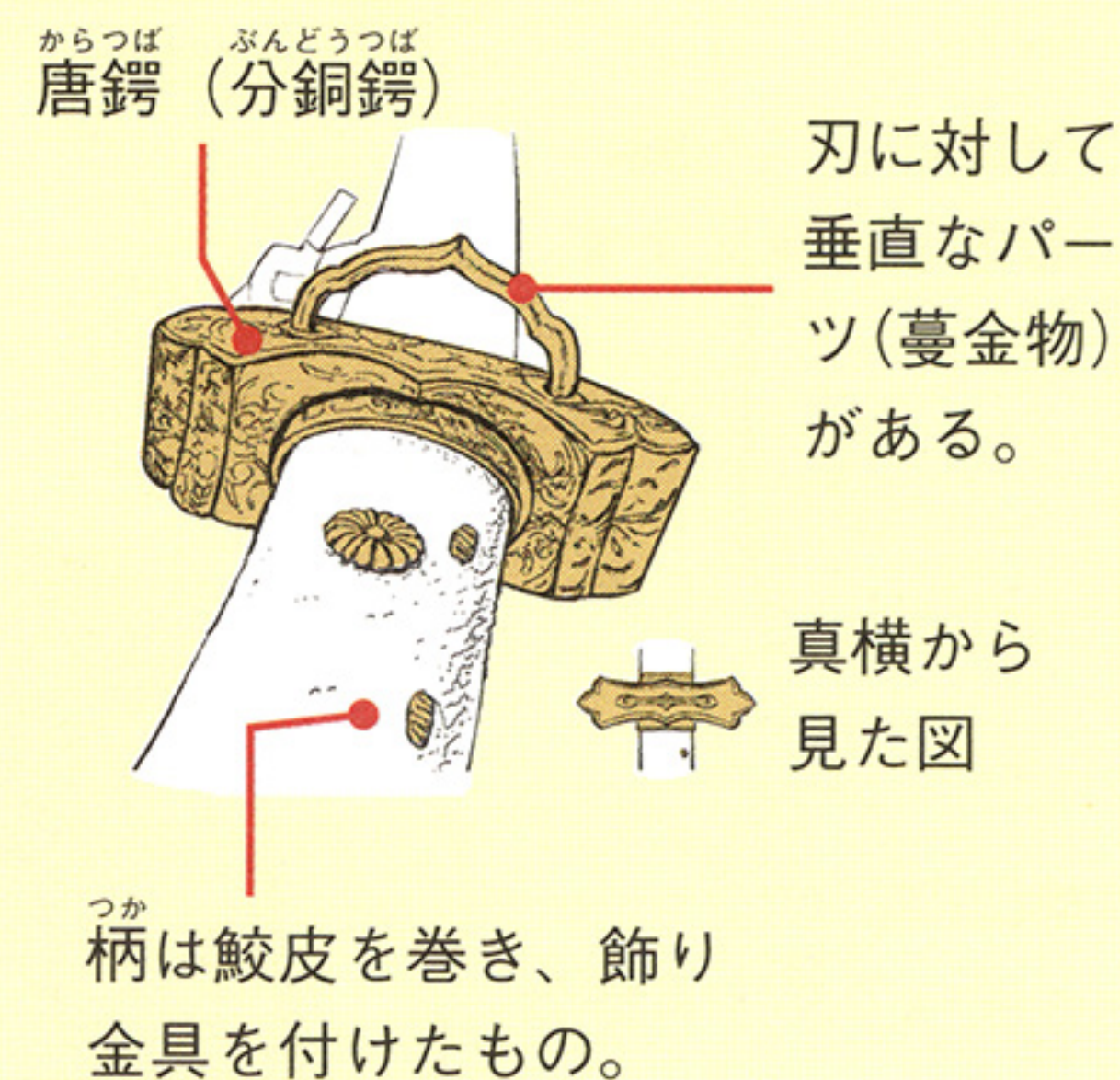
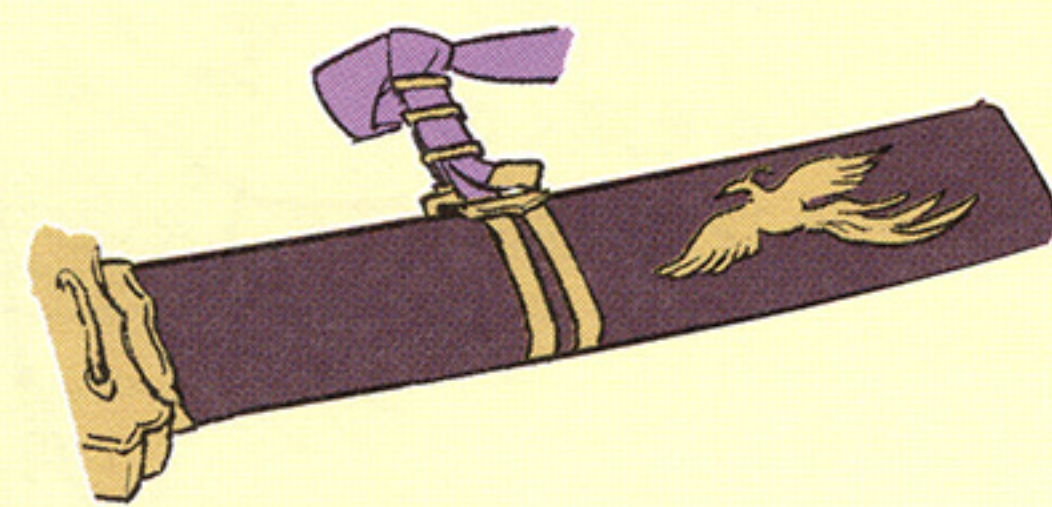
身幅が狩衣の倍あるので、前と後ろの裾は台形に広がって見える。

半臂
チョッキのような見た目。
後ろ側を紐に挟み、「尻はしょり」をする。
武官の袍は脇が開いているので、半臂を省略せずに必ず着用する。

● 太刀

唐鍔（分銅鍔）

刃に対して垂直なパーツ（蔓金物）がある。

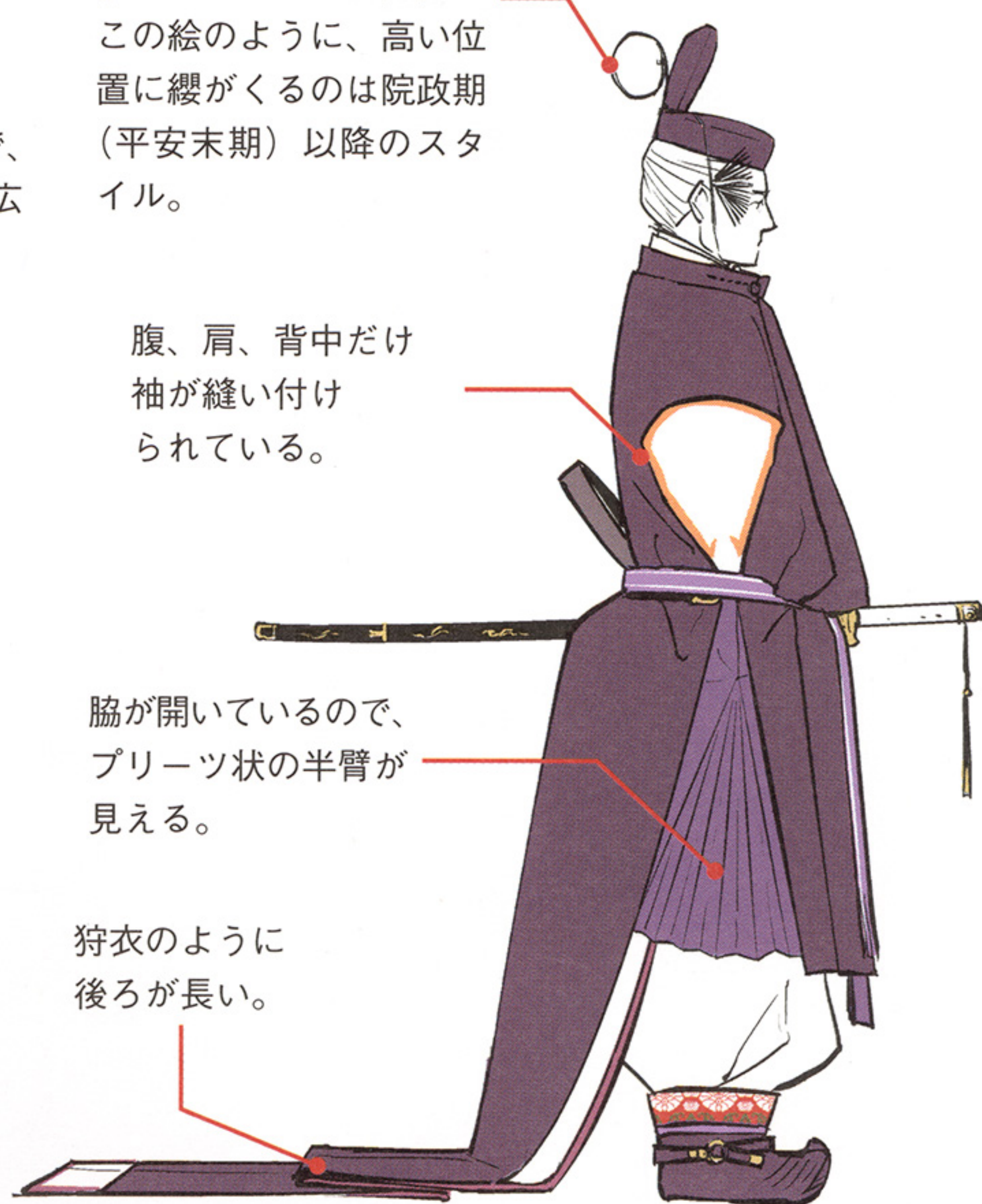
真横から見た図

柄は鮫皮を巻き、飾り金具を付けたもの。

太刀の鞘の装飾は、儀式の格や身分で拵を使い分けしていました。
金細工で唐草文様を全体に施したり、蒔絵と螺鈿で鳳の絵を描いたものなどさまざまなものがあります。

横

巻纓冠
纓が巻かれている冠。
この絵のように、高い位置に纓がくるのは院政期（平安末期）以降のスタイル。

腹、肩、背中だけ袖が縫い付けられている。

脇が開いているので、プリーツ状の半臂が見える。

狩衣のように後ろが長い。

ONE POINT

「纓」は巻きますか？巻きませんか？
冠の纓は「武官は必ず巻く」というわけでなく、「活動の邪魔になる時には巻く」ものだったようです。
ですから緊急時には文官も巻纓、武官でも自分が儀式の主役の時は、垂纓にしています。

後ろ

弓の樺巻
やなぐいの間塞と同じ色で揃える。
壮年は、紅梅色を淡くした色。

落とし矢
やなぐいに収めた矢（古くは 30 本、後世では 15 か 22 本）のうちの 1 本または 2 本を他とずらす。

間塞
やなぐいに巻く紙。
年齢によって色が異なる。
若年は紅梅色、老年は白（壮年はこの絵のように縁だけ紅梅）。

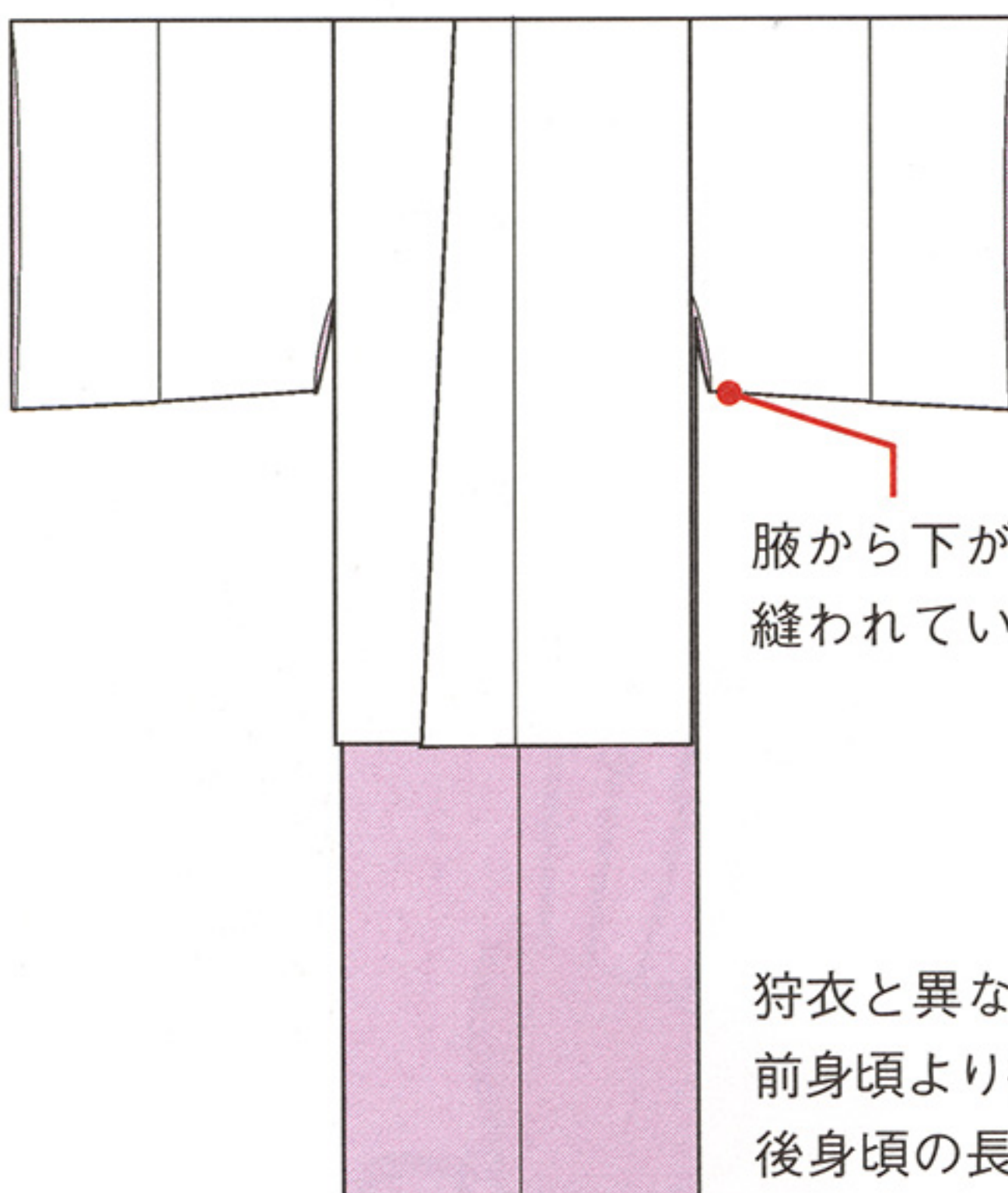
闕腋袍の裾と、下襲の裾は重なる。
下襲が 30cm ほど見えるように着付ける。

石帯
元は普通のベルトと同形で金具で留めていたが、袍が巨大化するにつれ、前部が紐になった。

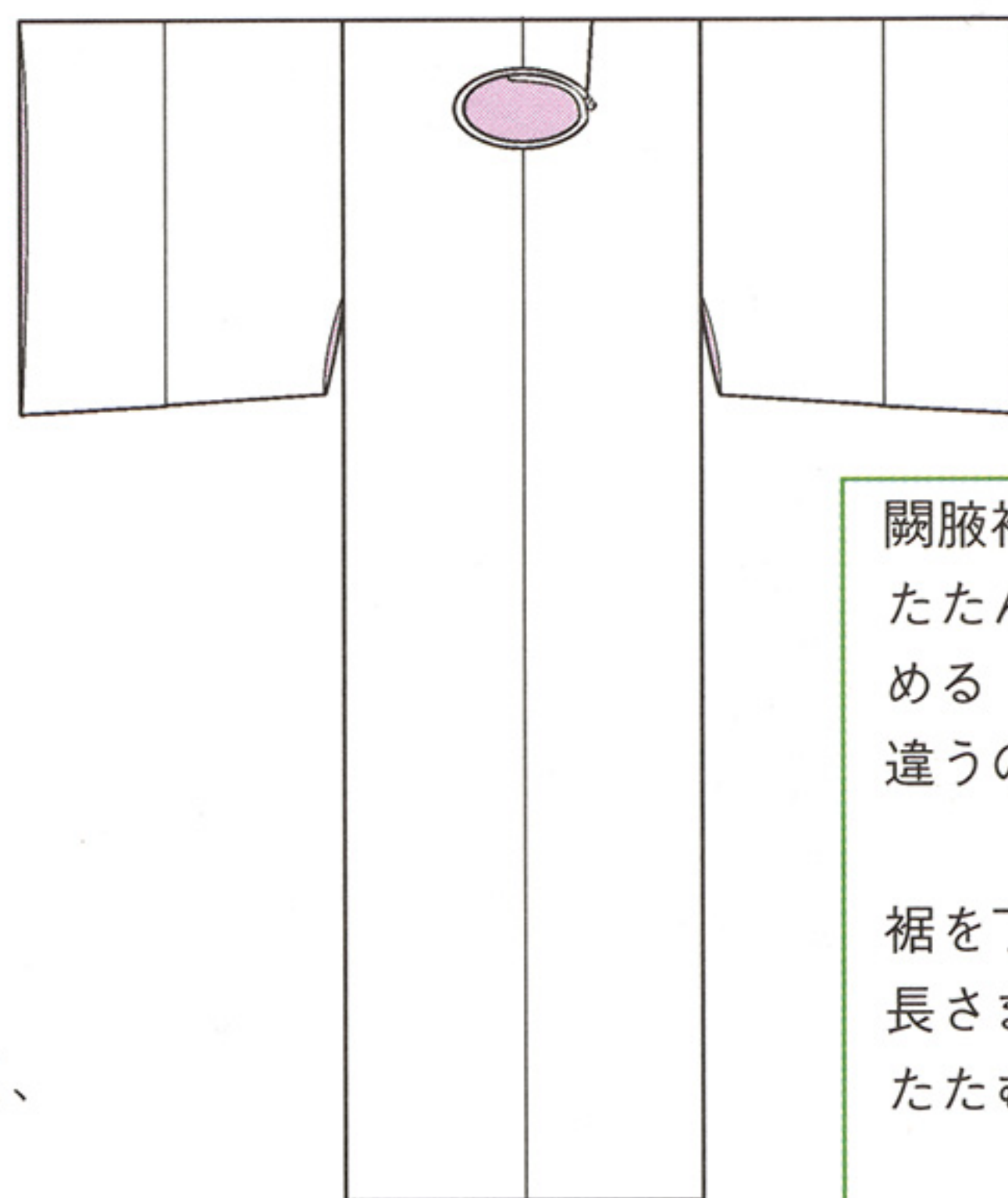
太刀を佩く時は、上から平緒を締めるので、石帯は見えなくなる。

ONE POINT
何色で塗りますか？
高位の武官は文官と同じ束帯を着るので、黒い袍の武官束帯を着用する人は、同時期に 10 人程度しかいません。
もし大人数の武官を描くなら、色は緋色（五位の袍の色）が無難です（縹色の六位以下は冠、靴、やなぐいの種類や着付けも違うので注意）。

束帯（武官）の構造

闕腋袍の前側

腋から下が縫われていない。

狩衣と異なり、前身頃より後身頃が長く、後身頃の長さは身分によって異なる。

闕腋袍の後側

縫腋袍と同様に衿は背中側に。

闕腋袍は、はこえが無いので裾をたたんで上から石帯で押さえて締める（縫脇袍とは石帯の見え方が違うので注意）。

裾を丁度いい長さまでたたむ。

シワや布の動き

シワの描き方は裾以外は文官の縫腋袍と同じです。
石帯で締めた部分を中心にシワができます。

袖口を折って手で摘むと、大きな袖がたわんで図のようなシワができる。

脇の下のシワは、大きな袖を折ったようにできる。

袍の身と袖は境目がはっきりしていない。伸ばすとこんな感じ。

袍の大きな身を石帯で締めてできるシワ。

袖口を折るとここにもシワができる。

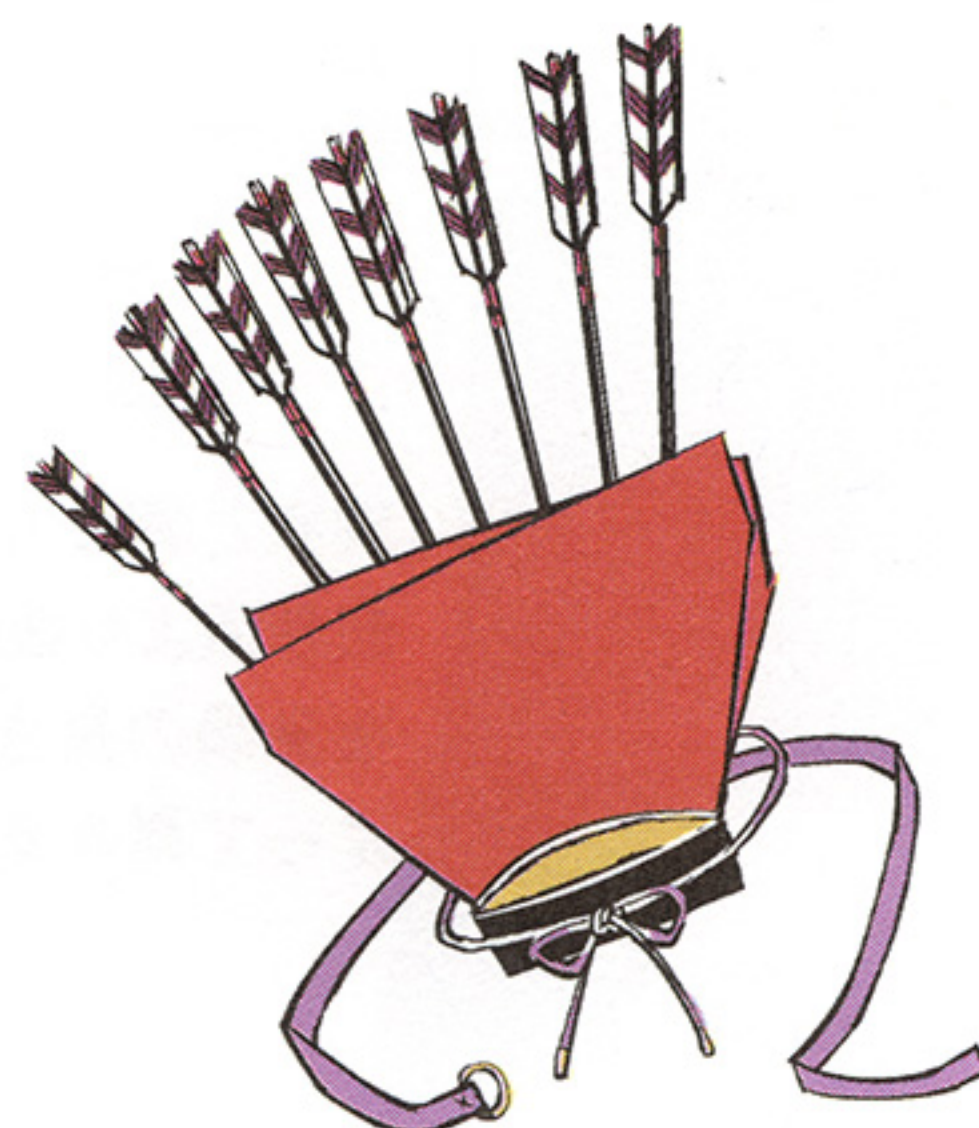
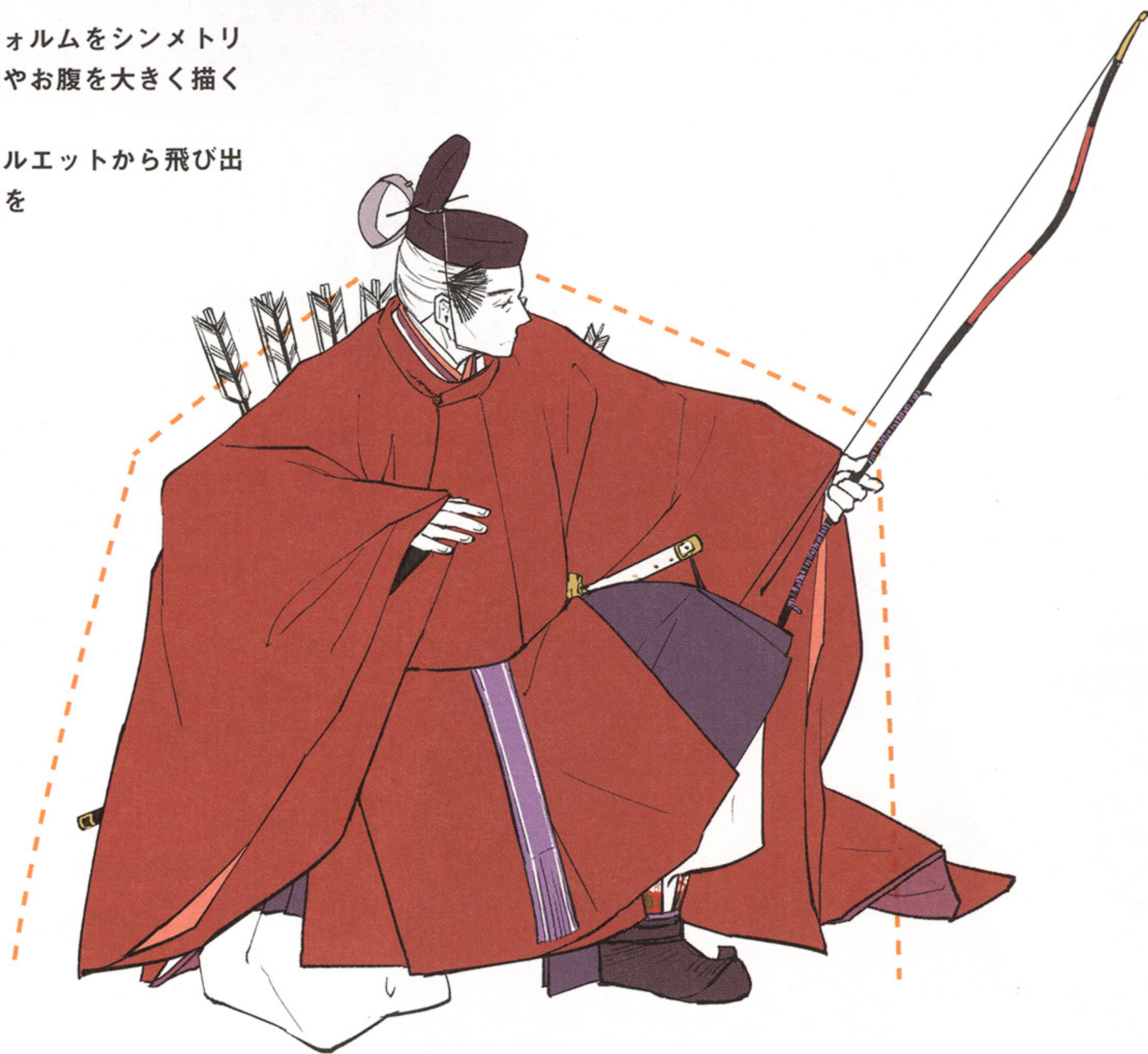
平安中期頃の巻纓冠は、纓が低い位置に。

小物が多いので、体のアタリの他に太刀や弓矢のアタリを描きます。
細部を描き込んだあとで修正するのは大変なので、直線ツールなどを使って正確に。

やなぐいのアタリの描き方

① 右端の矢のアタリを描く。
② 同様に、落とし矢のアタリを描く。
③ 両端の矢を曲線で繋いで扇型にする。
④ 落とし矢の隣の矢のアタリを引く。
⑤ ①の矢と④の矢の中間の矢のアタリを描く。
⑥ ①と⑤の間と、④と⑤の間を三等分して矢のアタリを描く。
以上の手順で矢を均等に並べてから、やなぐいの本体を描く。

長い袍の裾や下襲の裾は、Z字に波打たせるようなシワを描く。

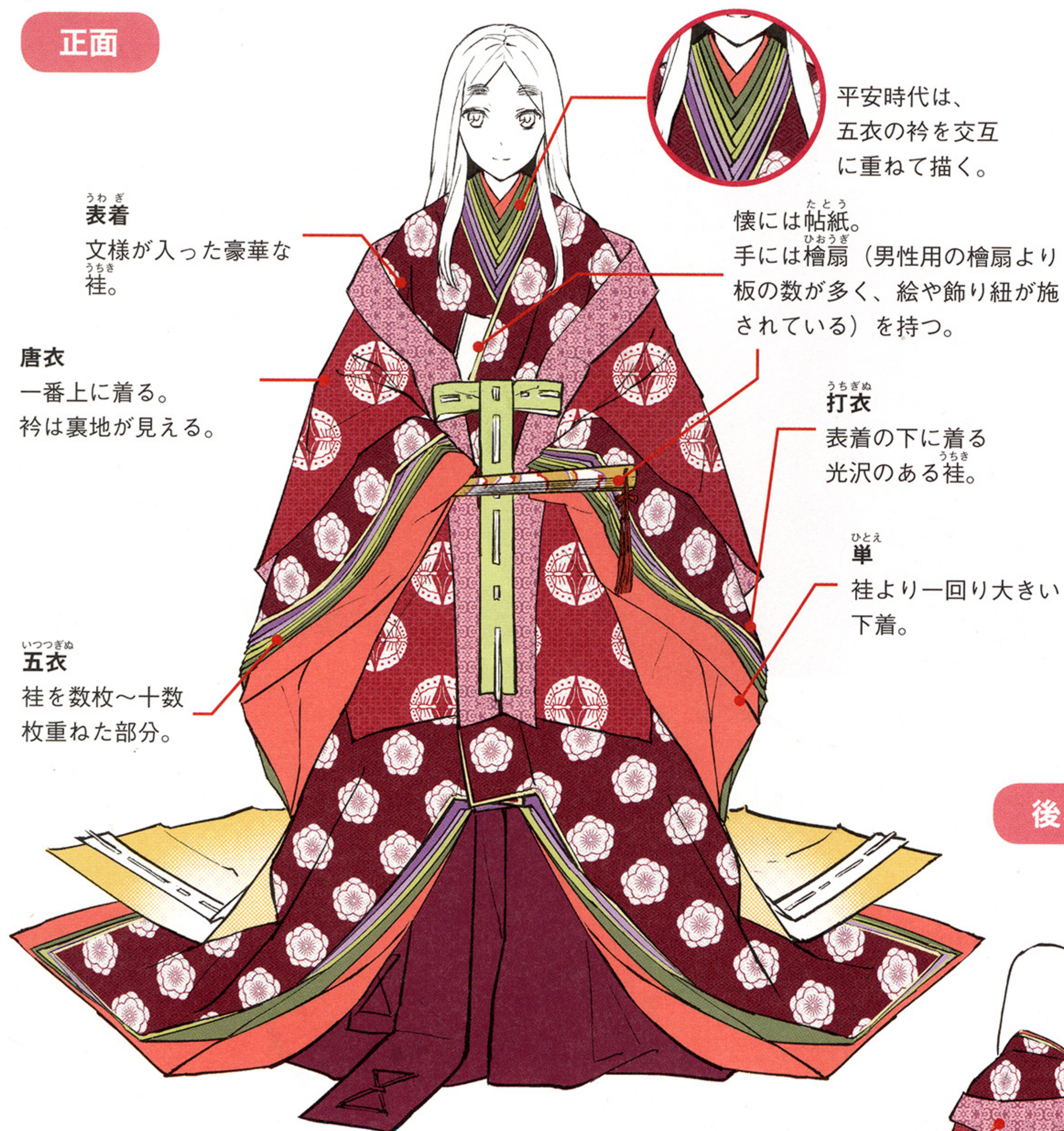
13

文官束帯と同様に、武官束帯の絵も激しい動きが少ないので、極端なパースでカッコ良く見せるのは難しくなります。
動きを表現するよりは、全体のフォルムをシンメトリな三角形や台形になるように、袖やお腹を大きく描くとポーズが安定します。
長い袍の裾や、下襲の裾を体のシルエットから飛び出させる事で、静かなポーズに動きを付けるのも効果的です。

弓の飛び出す角度と長さも、全体を意識してバランスの良い菱型や三角になるように。

台形のシルエット（オレンジ色の点線）を意識してポーズを付ける。

袍の裾が波打ってカーブする様子で動きを想像させる。

14 十二単

「女房装束」「五衣唐衣裳」ともいい、前述の束帯に相当する女性の正装です。男性の正装と同様にTPOに合わせて、唐衣を省略したり、一番上に着る上着を変えたりする略式の着付けもあります。
女性の正装の色は男性の正装よりも色が自由ですが、唐衣については色の規制がありました。

正面

平安時代は、
五衣の衿を交互
に重ねて描く。

表着
文様が入った豪華な
袿。

懐には帖紙。
手には檜扇（男性用の檜扇より板の数が多く、絵や飾り紐が施されている）を持つ。

唐衣
一番上に着る。
衿は裏地が見える。

打衣
表着の下に着る
光沢のある袿。

単
袿より一回り大きい
下着。

五衣
袿を数枚〜十数
枚重ねた部分。

ONE POINT

十二単の着る順番
十二単は、上からこのような順に着ています。
①唐衣（からぎぬ）
②裳（も）
③表着（うわぎ）
④打衣（うちぎぬ）
⑤五衣（いつつぎ）
⑥単（ひとえ）
⑦長袴（ながばかま）

後ろ

● 古い十二単

唐衣に髪置きが無く、裳は唐衣の下に締めている。
平安〜室町時代の女性の装束は、振りがない大きな筒袖で、袖の形が三角に見えるのが特徴。

● 近代以降の十二単

裳は唐衣の上から締め、脇の下から小腰を、唐衣の前身の下にもぐらせている。

唐衣の衿
古い唐衣には三角形
に飛び出た髪置きが
ない。

袖は四角く、振りがある。
サイズを変えて仕立てた袿の、袖口のずれを見せる。

袿がみんな同サイズなので、袖口にたくさんのシワができる。

引腰の山道
縫いとられた
糸飾りのこと。

横

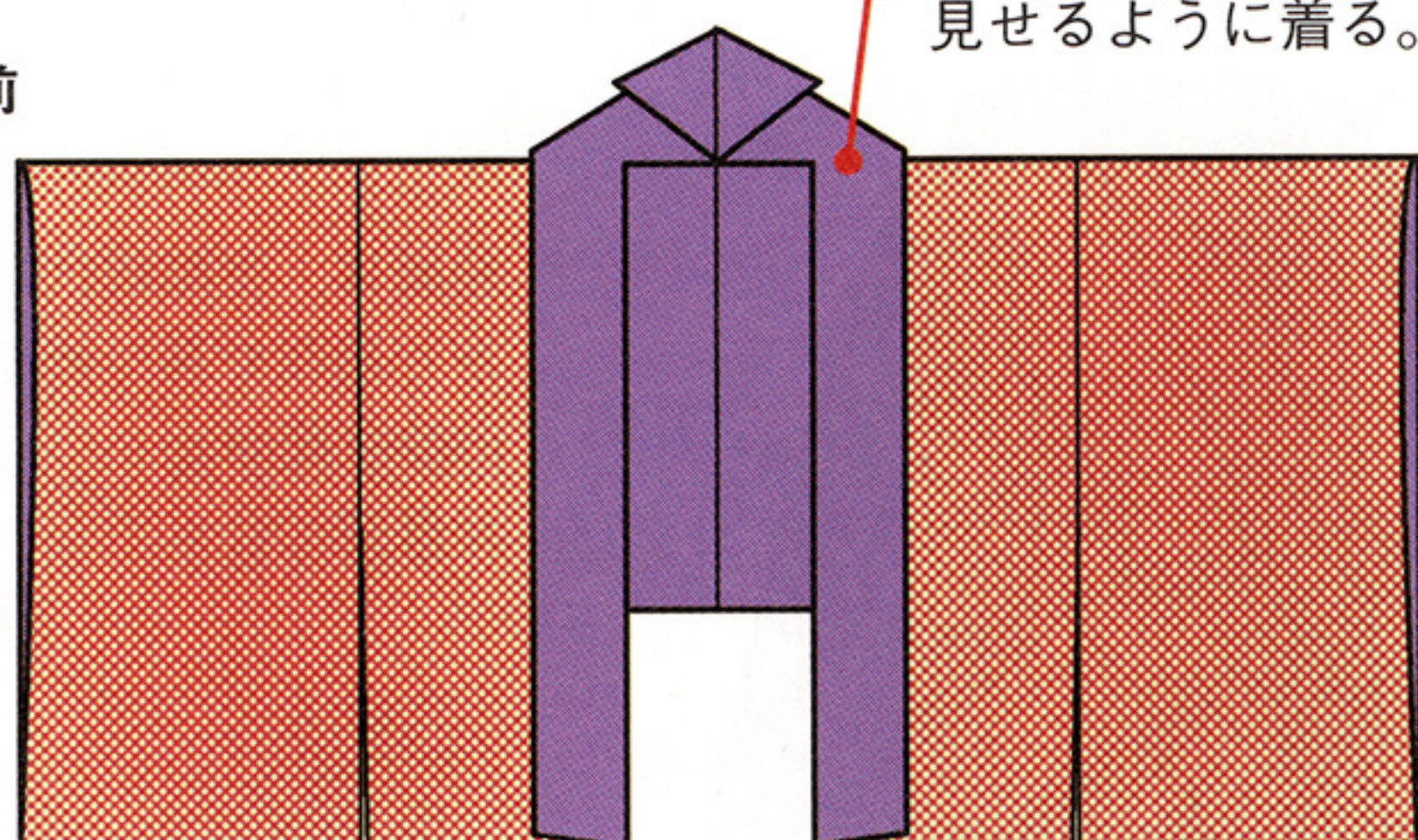
五衣の重ね色目
色の重ね方に四季にちなんだ草花などの名称がついているもの。
グラデーション配色や、トーン配色、同一色相配色などのパターンで季節感を出している。

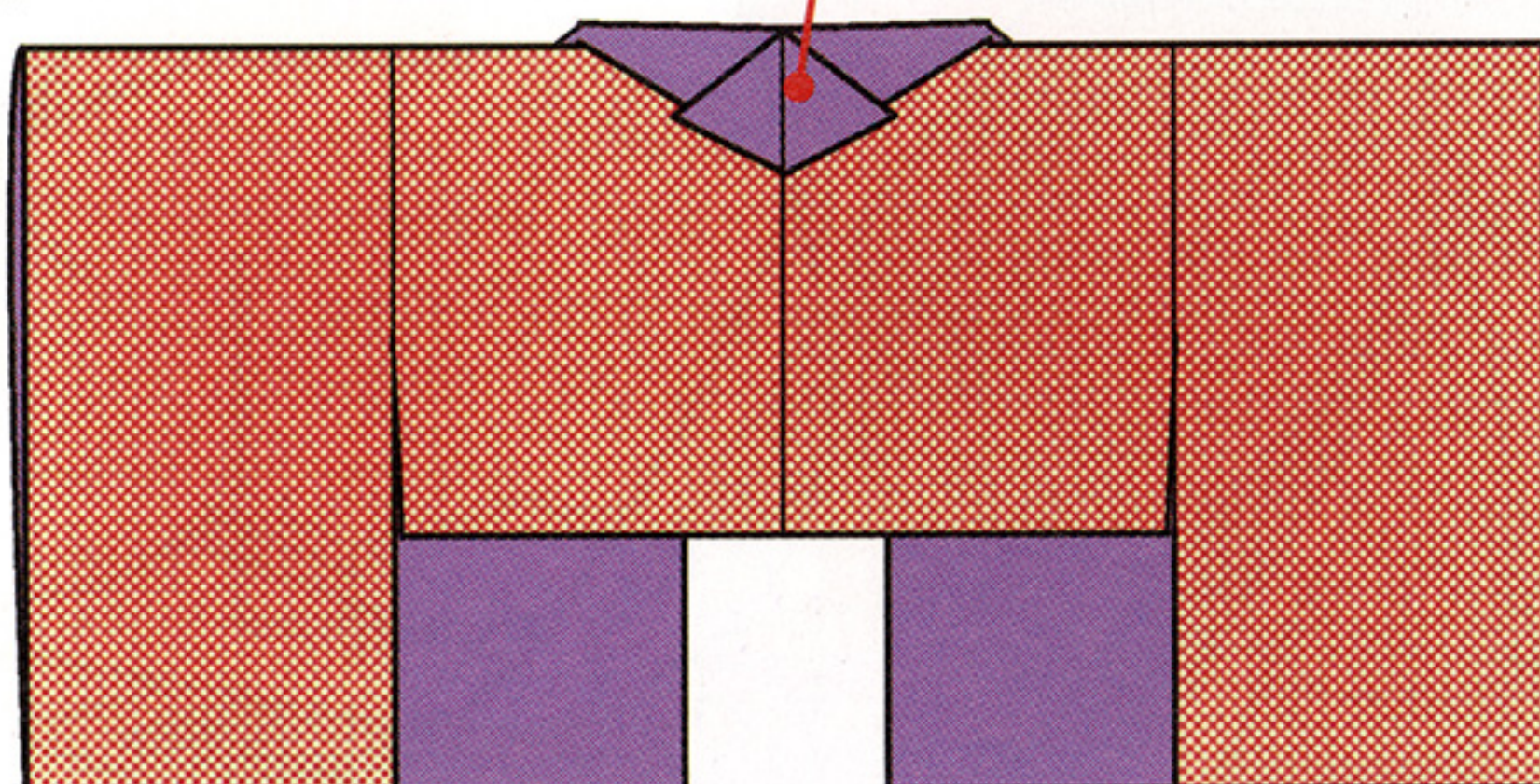
唐衣の衿
衿を裏返して、裏地を見せている。

裳の小腰

裳
平安初期に穿いていた、スカート状の裙が変化して、後ろ側だけ覆う装飾品になったもの。

長袴
紅色か、若年者の晴着なら濃色（えんじ）を着た。

唐衣の構造

衿は裏返して、裏地を見せるように着る。

前

髪置き
院政期以降についた、三角形に飛び出た部分。

後

後見頃の丈が短い

濃赤、濃紫、青（山鳩色という深みのある緑）などの「禁色」は、許可無く着用できませんでした。

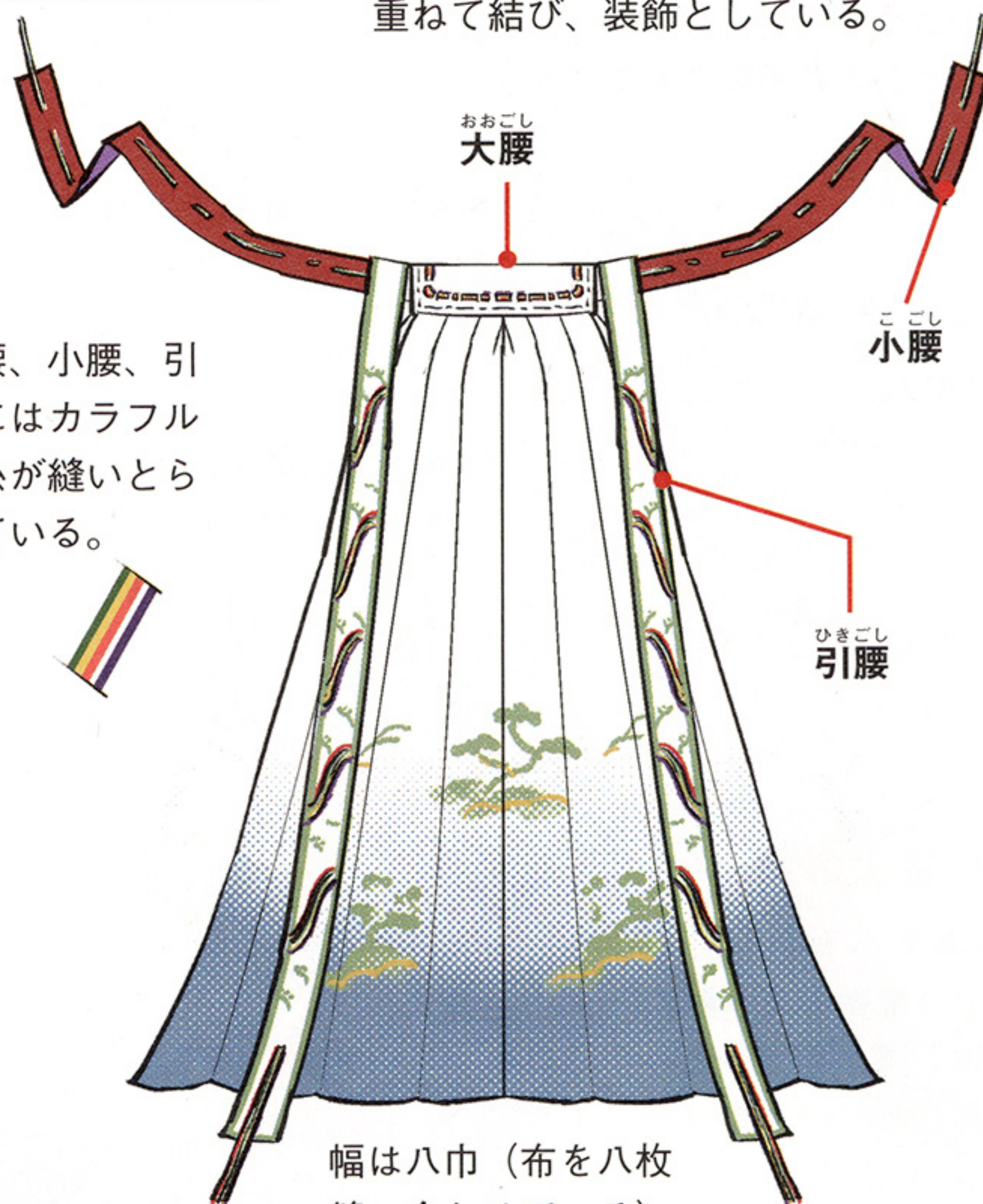
裳の構造

細い小紐で締めた上から、小腰を重ねて結び、装飾としている。

大腰

大腰、小腰、引腰にはカラフルな糸が縫いとられている。

小腰

引腰

幅は八巾（布を八枚縫い合わせている）。

引腰には木々の絵を施した糸飾りを「山道」と呼んだり、八巾の布には青海波や島などの海の絵を描いたりと、自然の情景を描くのが人気だったようです。

女性の正装の変遷

平安初期頃の女性の正装

背子
狩衣や袍と同じように盤領を蜻蛉でとめる上着で、唐衣の原型。

比礼（領巾）

衣
振りのない筒袖の上着。

裙

褶

元はスカート状だった裙が変化し、腰より下だけを覆う装飾のような役割の裳になりました。
裳を付けないのは「スカートを穿いてない」状態だと考えれば、フォーマルな場で裳が必須な理由が理解できます。

ONE POINT

唐衣を肩から落とす理由

十二単では比礼を省いた代わりに、唐衣の衿を肩から落としたり裳に長い引腰を付けたりして、平安初期の装束の見た目に近づけようとしたのではないかといわれています。

現代の十二単

現代の特別な宮中行事で、皇族の女性や高級女官の方々が着用している十二単はこのようなスタイルです。
五衣が大幅に省略されています。

唐衣の衿は、真っ直ぐにして着る。

五衣は、1枚の袿の端に五色を重ねて見せているだけ。

着崩れの原因になる帖紙は、懐に入れない。

檜扇は、室町時代以降から造花や長い蜷結びの飾り紐がついて、より豪華になった。

唐衣と裳の小腰を、同じ布で作るので、唐衣と裳はセットになっている。

髪上の具

「おすべらかし」という髪型を結う際に使う道具を「髪上の具」といいます。

平額

釵子

額櫛

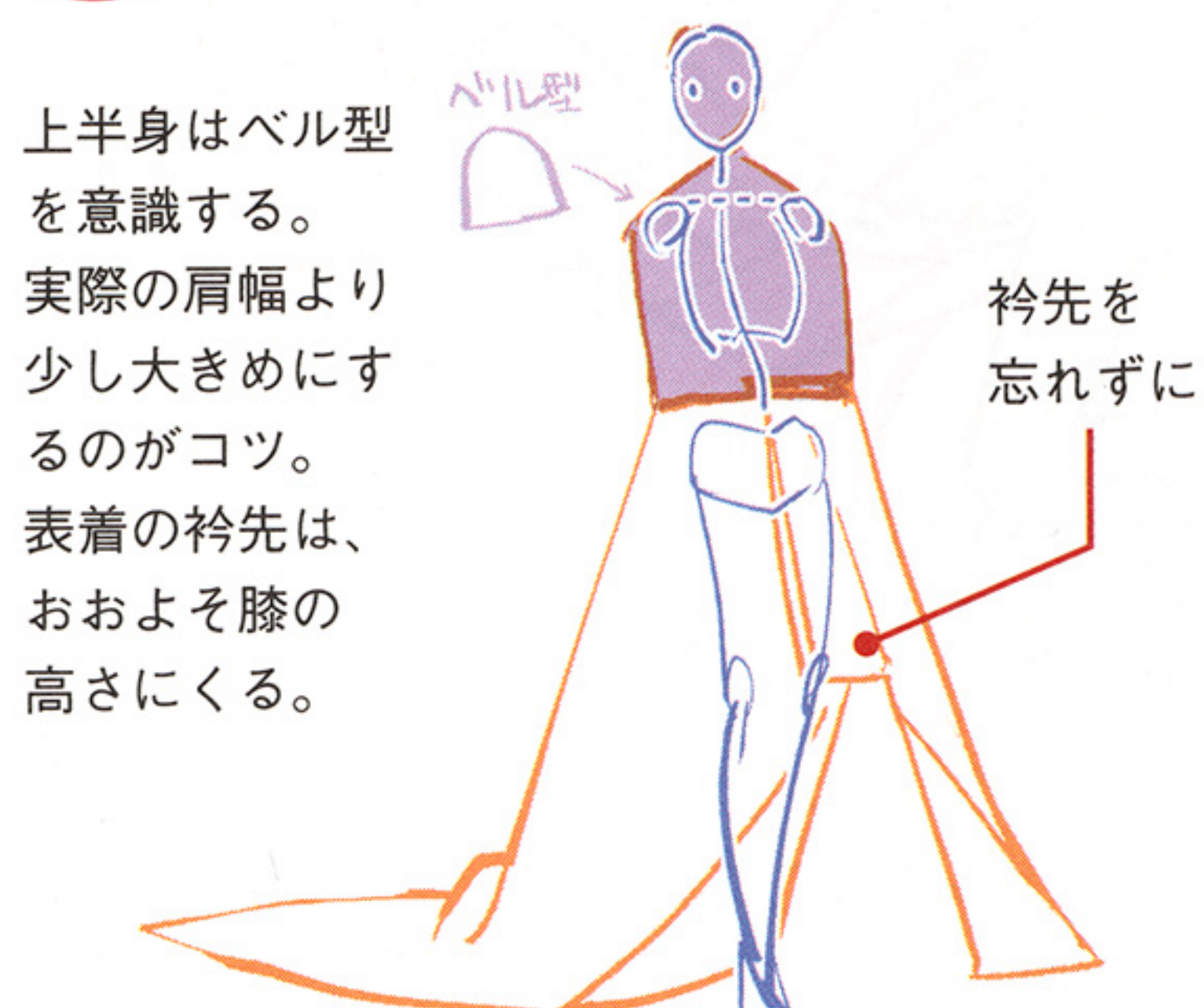
袖のアタリのコツ

十二単は描線が多い装束ですので、どの衣の線だったか分かるように、アタリの段階から色分けしておくと混乱せずに描き進められます。
①唐衣 ②表着・打衣・五衣 ③単 ④裳 ⑤それぞれの裏地
以上の５色を色分けすると分かりやすくなります。

1 頭の大きさのアタリから表着の形状をざっくり描く。

上半身はベル型を意識する。実際の肩幅より少し大きめにするのがコツ。表着の衿先は、おおよそ膝の高さにくる。

ベル型

衿先を忘れずに

2 表着の上に、唐衣の衿（表着の衿先と大体同じ長さ）のアタリと、裳のアタリも描く。

3 唐衣と袖を描く。下に重ねる衣よりも袖が短い。

裳の引腰のアタリ。

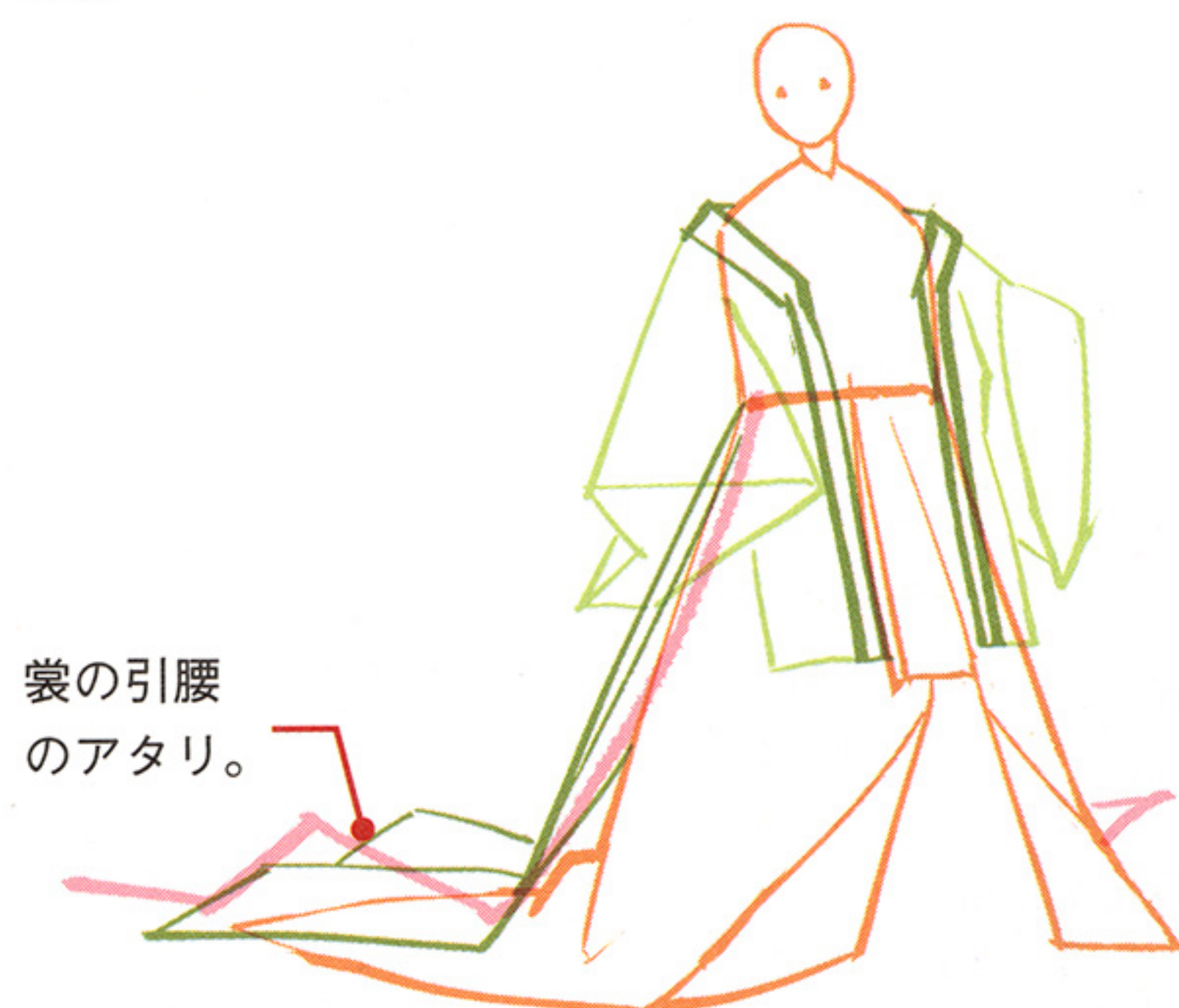
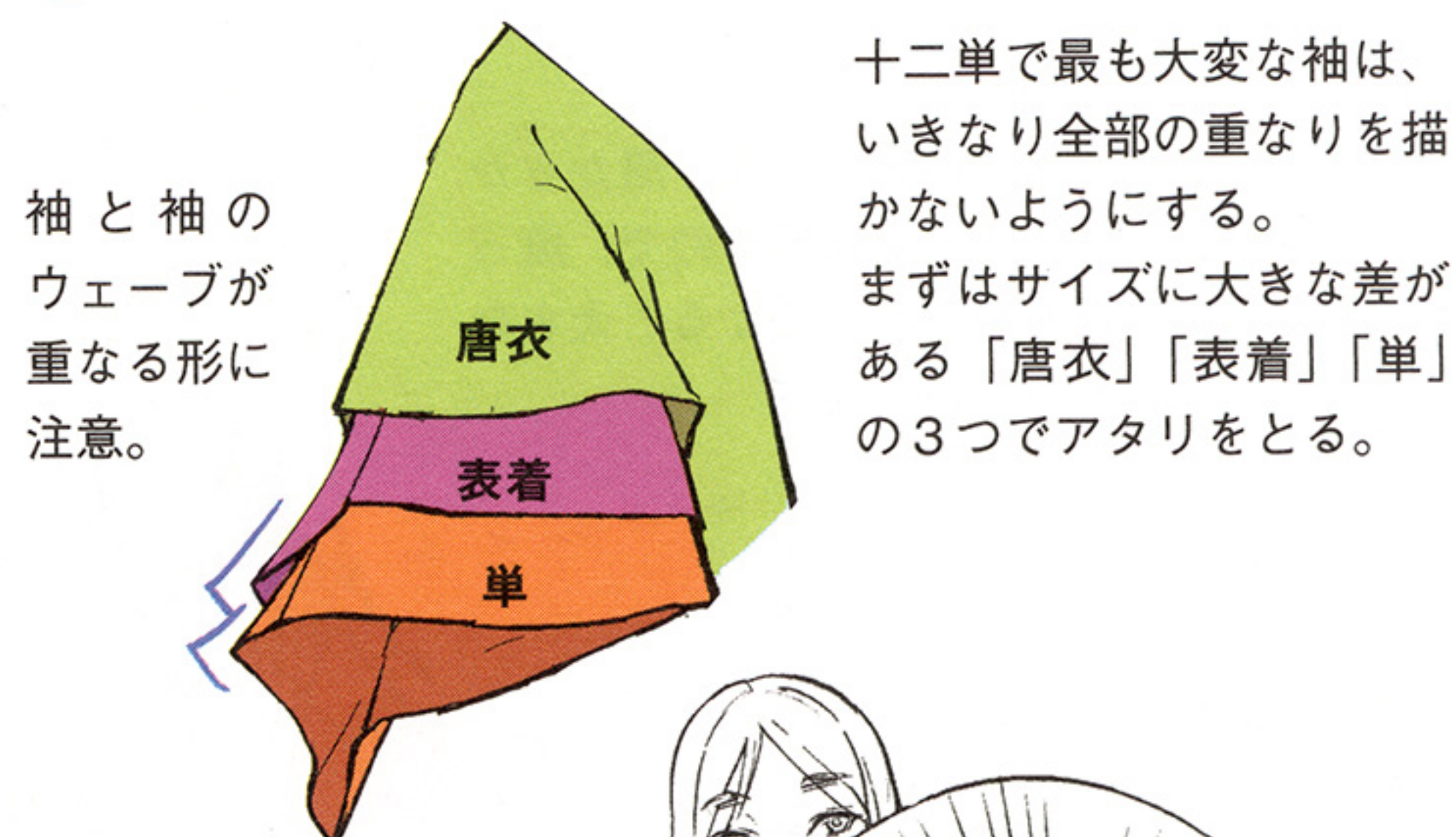
4 袖のアタリを描く。

袖と袖のウェーブが重なる形に注意。

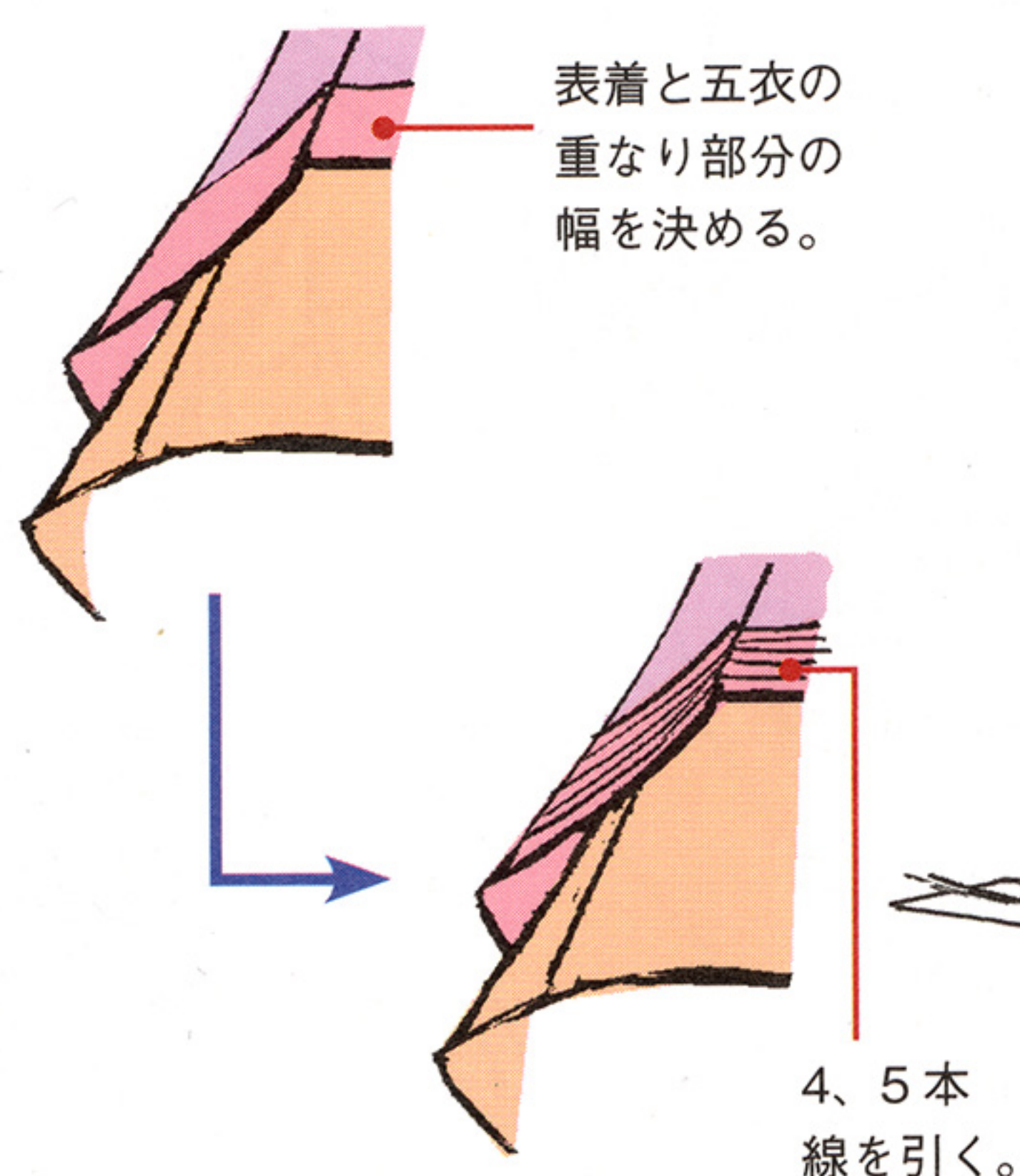
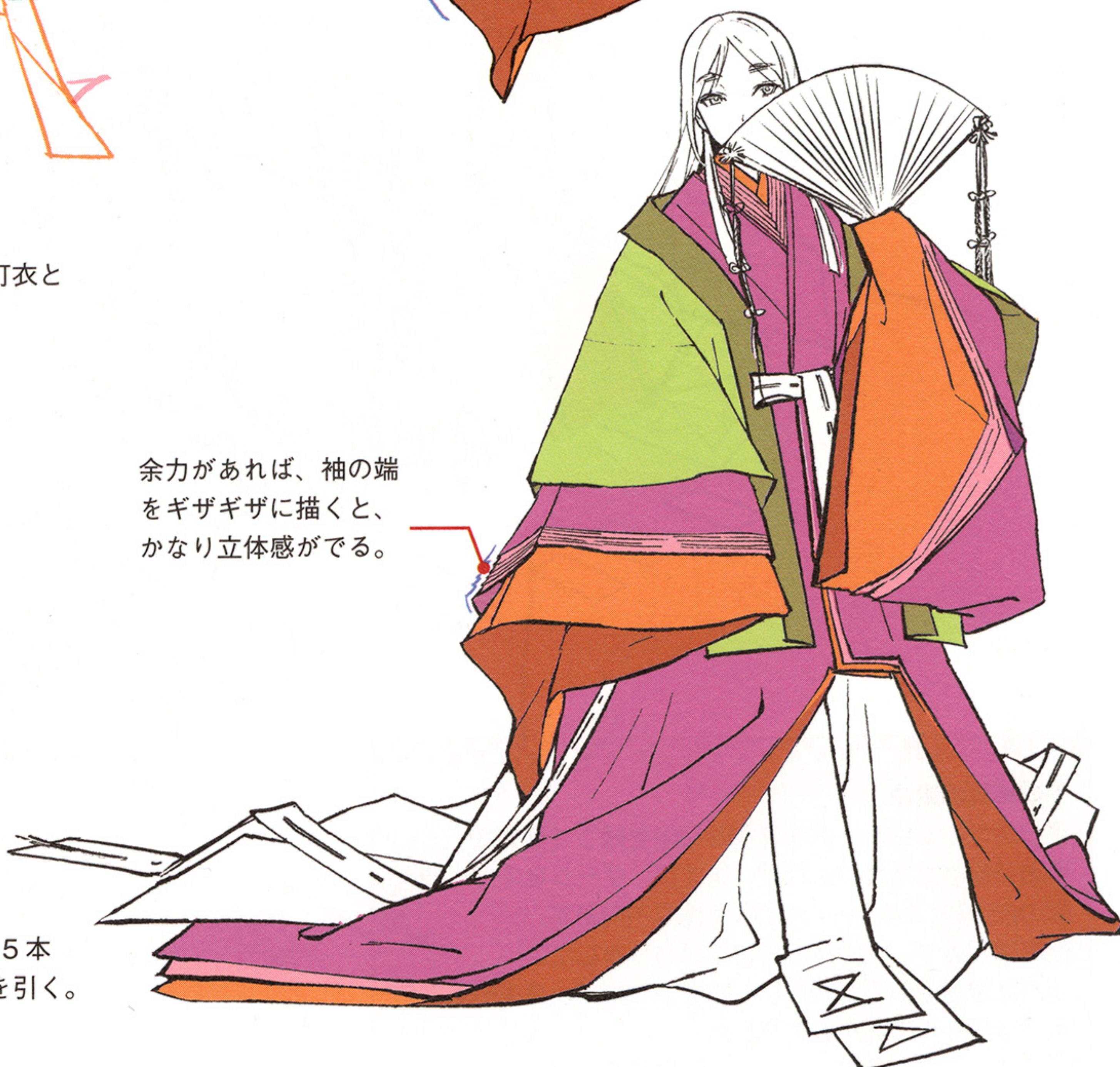
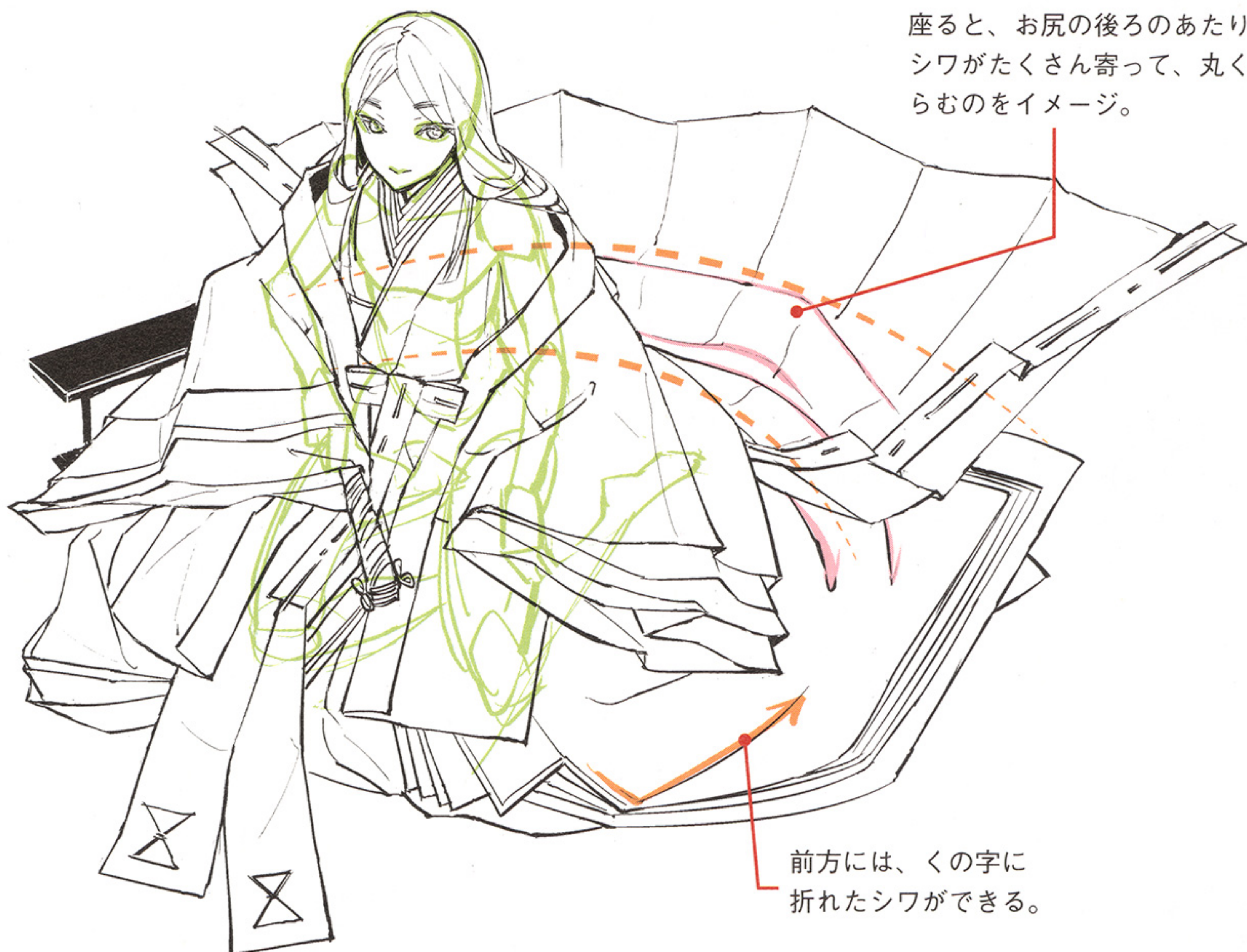
唐衣

表着

単

十二単で最も大変な袖は、いきなり全部の重なりを描かないようにする。まずはサイズに大きな差がある「唐衣」「表着」「単」の３つでアタリをとる。

5 表着の袖のアタリを分割して、打衣と五衣の重なりを描き込んでいく。

表着と五衣の重なり部分の幅を決める。

4、５本線を引く。

余力があれば、袖の端をギザギザに描くと、かなり立体感がでる。

シワや布の動き

座ると、お尻の後ろのあたりにシワがたくさん寄って、丸く膨らむのをイメージ。

前方には、くの字に折れたシワができる。

大きな四角い布を、肩からかけたような状態なので、座ったり前かがみになると大きなシワが生じる。

唐衣を省いた小袿姿なども。
前を締めていないので、唐衣同様、大きなシワができる。

ONE POINT

平安時代の遊び

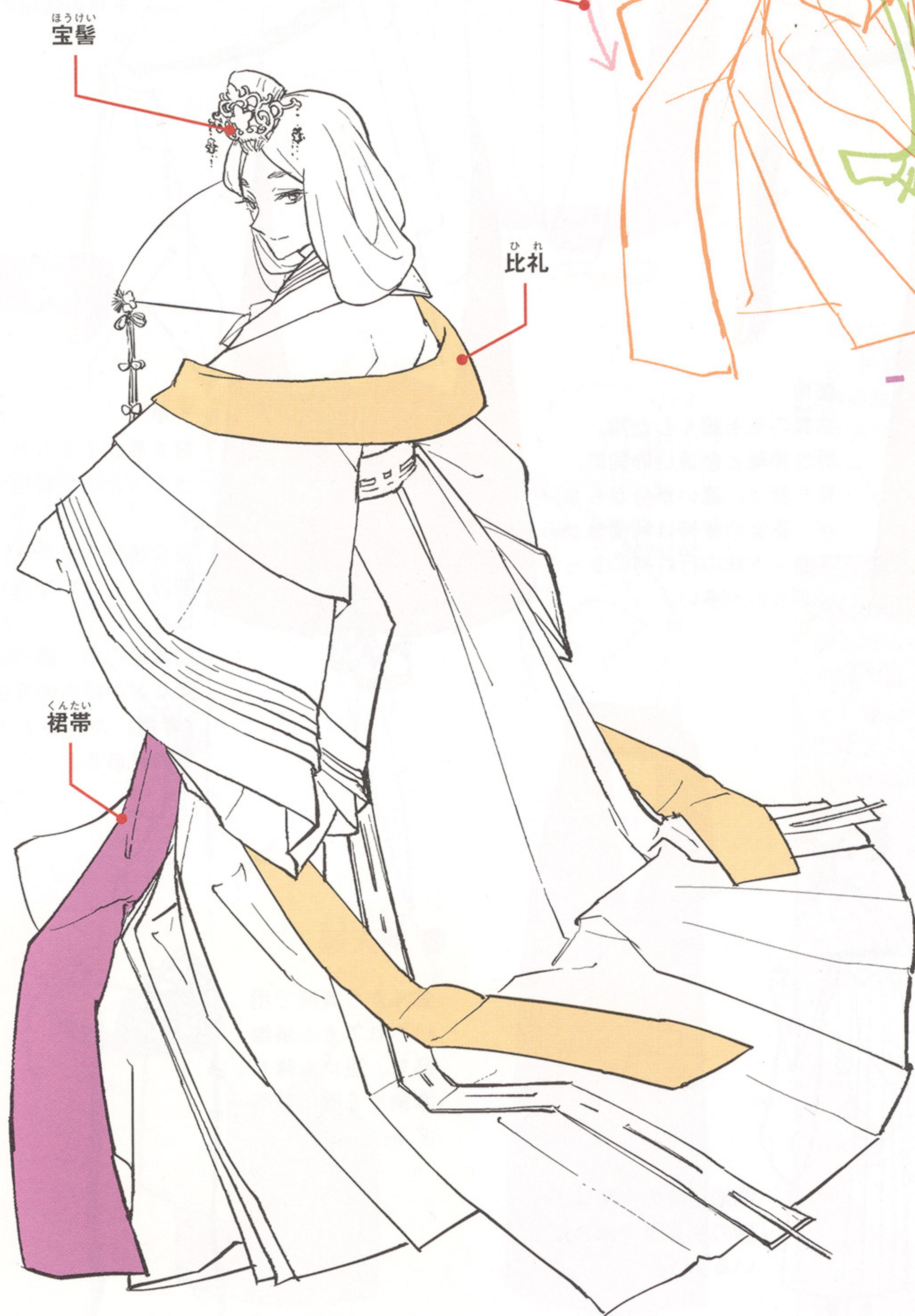
平安時代に女性や子供が漢字の知識を競う「偏(へん)つぎ」という遊びがあったといわれていますが、ゲームなのか、教育なのか、詳しいルールなどの実態は不明です。
他には囲碁や、双六などの遊びがありました。
双六は現在のものと異なり、盤を使ったバックギャモンのようなルールで遊ぶものでした。

俯瞰の視点の時は、裳、袿、
袴などの裾全体を扇形に広
げるのを意識してアタリを
描く。

後ろから見た構図なら、
長袴は一度前へ蹴り出して、
くの字に曲げて後ろへ流すと
シンメトリに近いシルエットに
なってバランスが良くなる。

宝髻（ほうけい）

比礼（ひれ）

裙帯（くんたい）

ONE POINT

物具装束

十二単に比礼（ひれ）と裙帯（くんたい）（裳の小腰を巨大化したようなもの）、宝髻（ほうけい）（髪型の名称でもあり、髪飾りの名称でもある）を加えた最高礼装です。

15 巫女

巫女は日本の規定では神職に含まれず資格も不要ですが、若い女性限定で、勤務できる期間が非常に限られます。実際に見るのは簡単な装いのバイト巫女（助勤）さんがほとんどです。
大きな神社やお祭りの時などは、本格的な装束の巫女を見ることができます。

正面

神楽鈴

掛衿
赤い衿は、白衣と襦袢の間に挟んでいる装飾。白と赤を幾重も重ねている華やかな装いも。

白衣
巫女は、古式の着こなしなので、衿を抜かない。

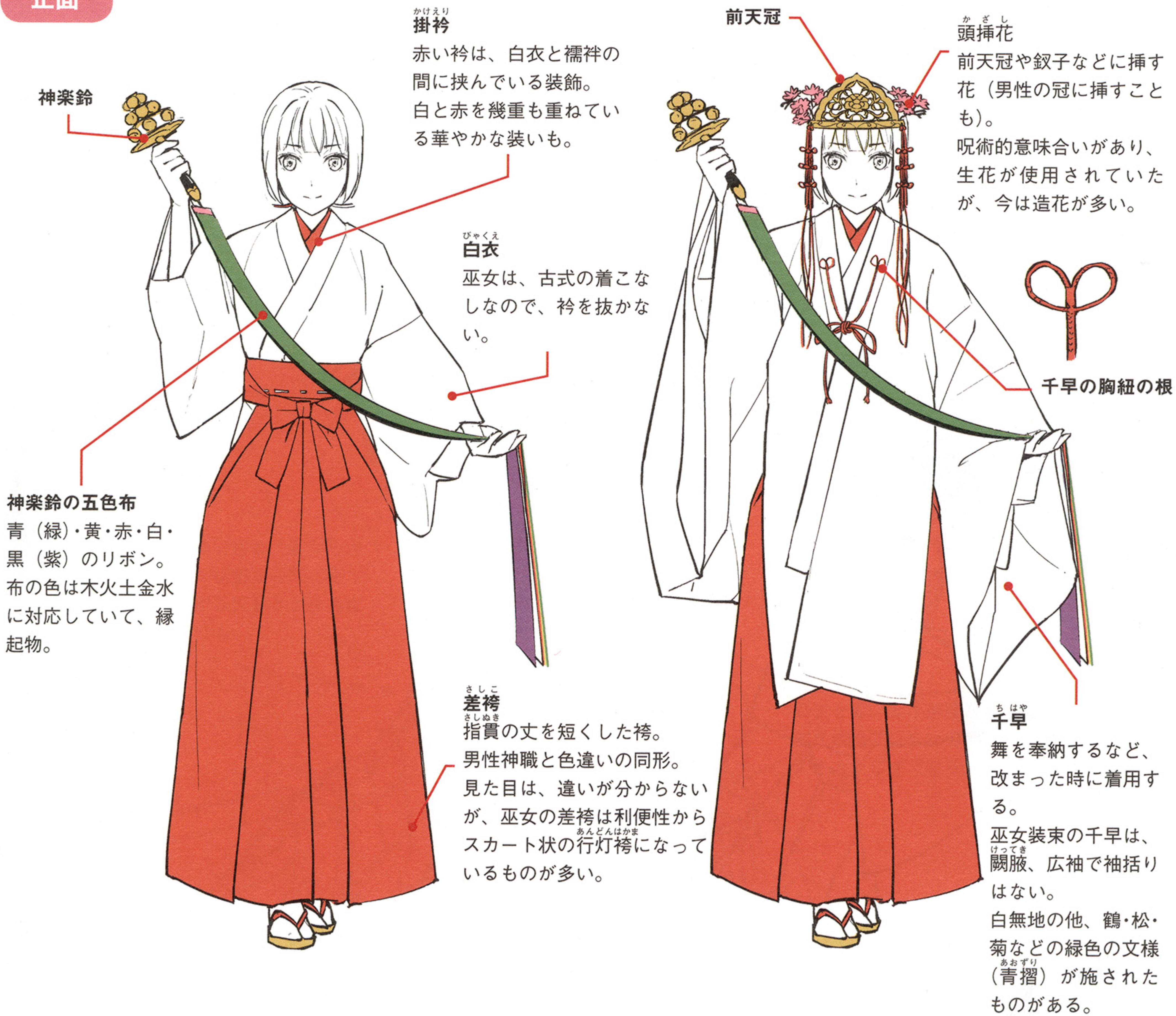
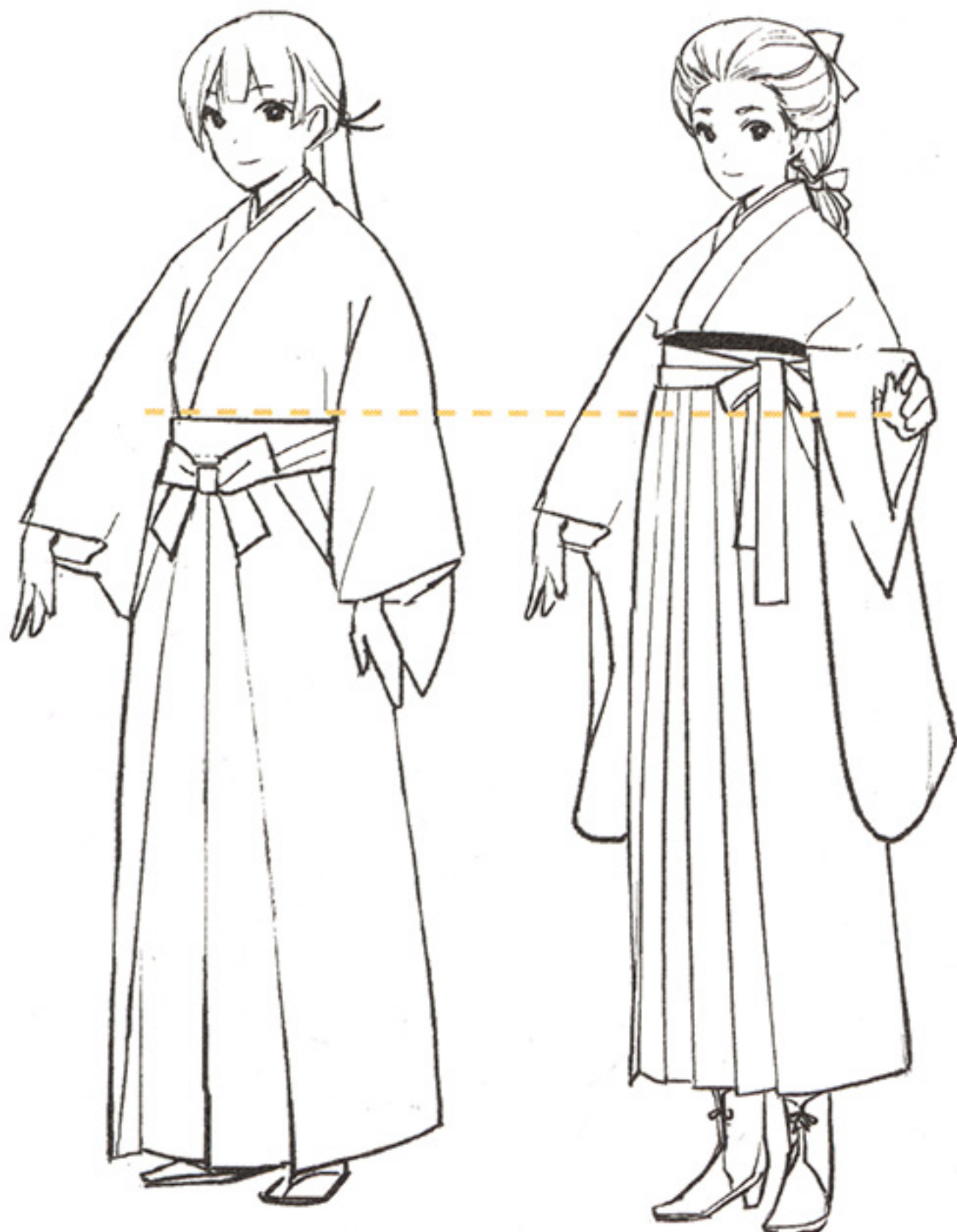
神楽鈴の五色布
青（緑）・黄・赤・白・黒（紫）のリボン。布の色は木火土金水に対応していて、縁起物。

差袴
指貫の丈を短くした袴。男性神職と色違いの同形。見た目は、違いが分からないが、巫女の差袴は利便性からスカート状の行灯袴になっているものが多い。

前天冠

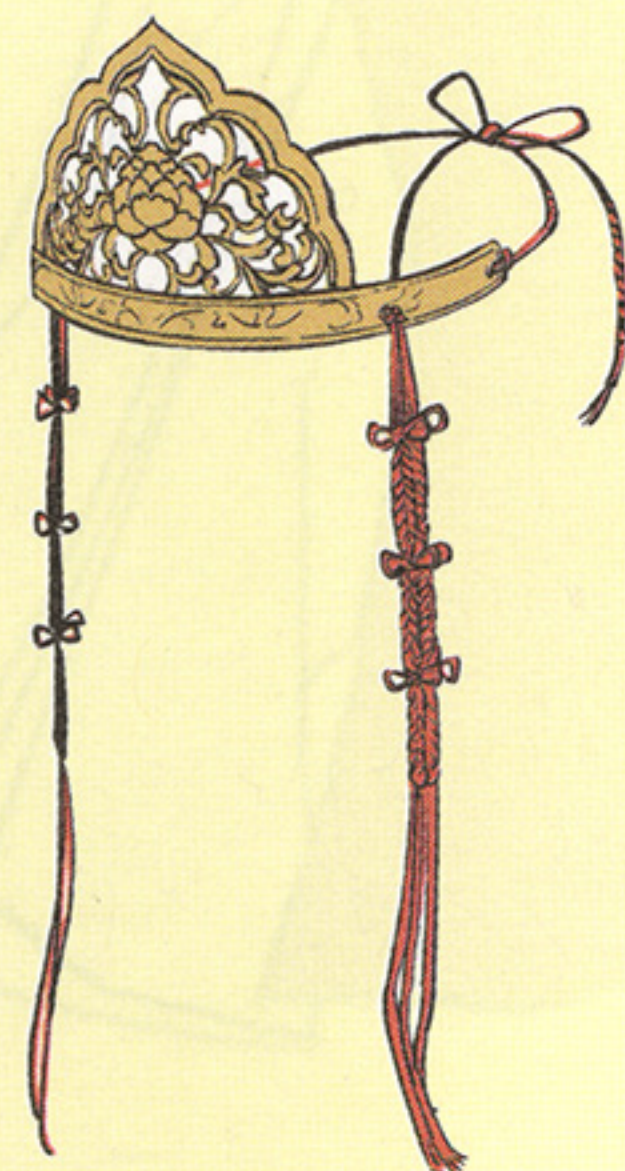
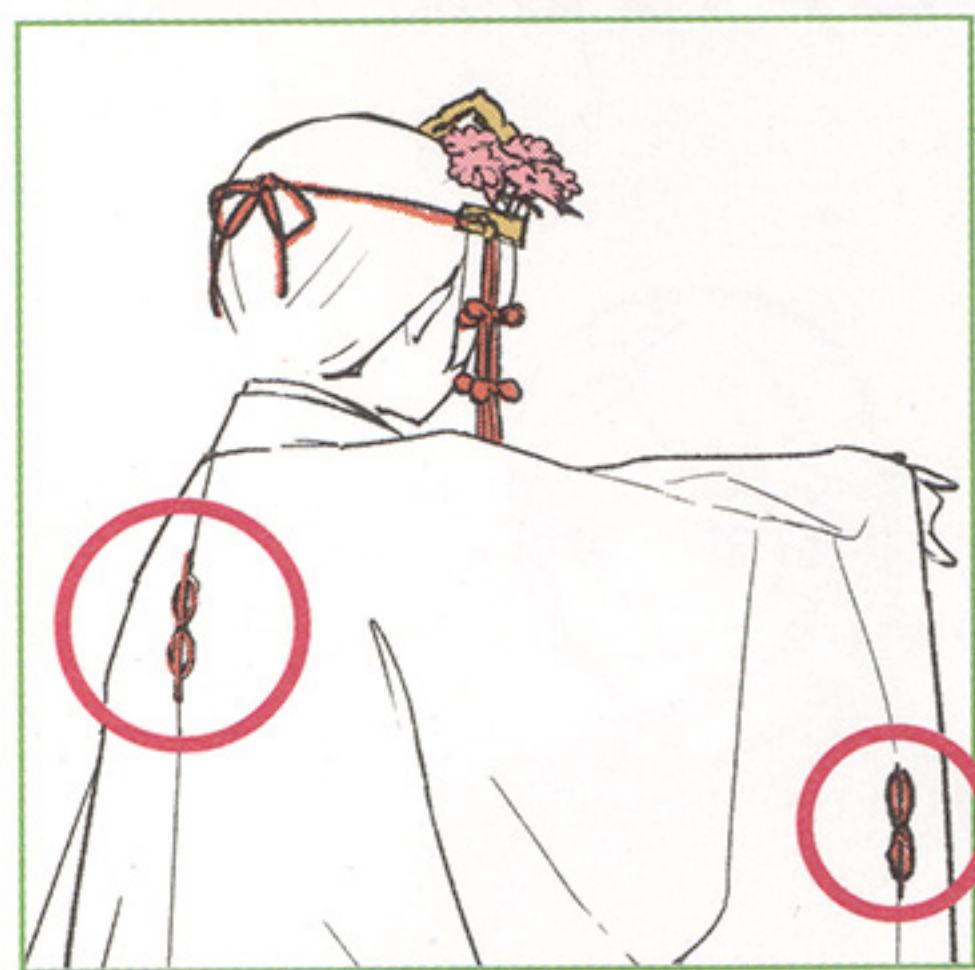
頭挿花
前天冠や釵子などに挿す花（男性の冠に挿すことも）。
呪術的意味合いがあり、生花が使用されていたが、今は造花が多い。

千早の胸紐の根

千早
舞を奉納するなど、改まった時に着用する。
巫女装束の千早は、闕腋、広袖で袖括りはない。
白無地の他、鶴・松・菊などの緑色の文様（青摺）が施されたものがある。

巫女が袴を締める位置は、男性よりやや高く、ウェストくらいの高さ。女学生の行灯袴のような胸高ではないので注意。

明治以降の女袴は、胸のすぐ下で締めている。

● 前天冠
古くから舞楽で用いられてきた装飾品で、巫女も舞を奉納する際に着用する。

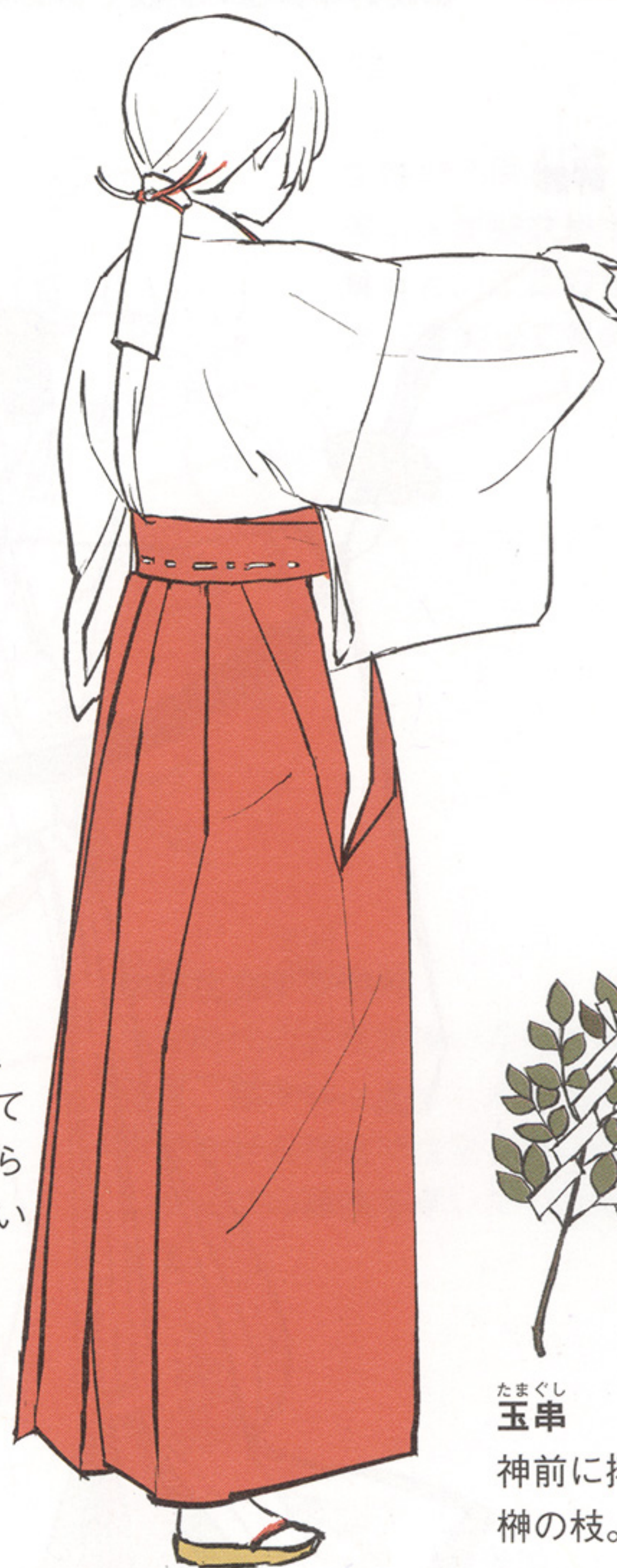
後ろ

紐などで締めないため、脇の下に布が大きくたわんだシワができる。

背縫いがある。

千早の結び菊綴(もの字)
もとは菊の花のようだった縫い目の補強が、簡略化したもの。背中と、袖の背面側にある。

千早の袖と身頃は、肩だけ縫われていて(青い点線)脇から下は縫われていない(青い実線)。

千早の後身頃は狩衣や水干と違い、2枚の布を縫い合わせているため、幅が広い。

玉串(たまぐし)
神前に捧げる榊の枝。

巫女には大麻(おおぬさ)を持たせてポーズを付けたくなりますが、神職でない巫女が大麻を振る事は通常ありません。神楽鈴や玉串(紙垂(しで)を付けた榊の枝)を持たせると、リアリティが増します。

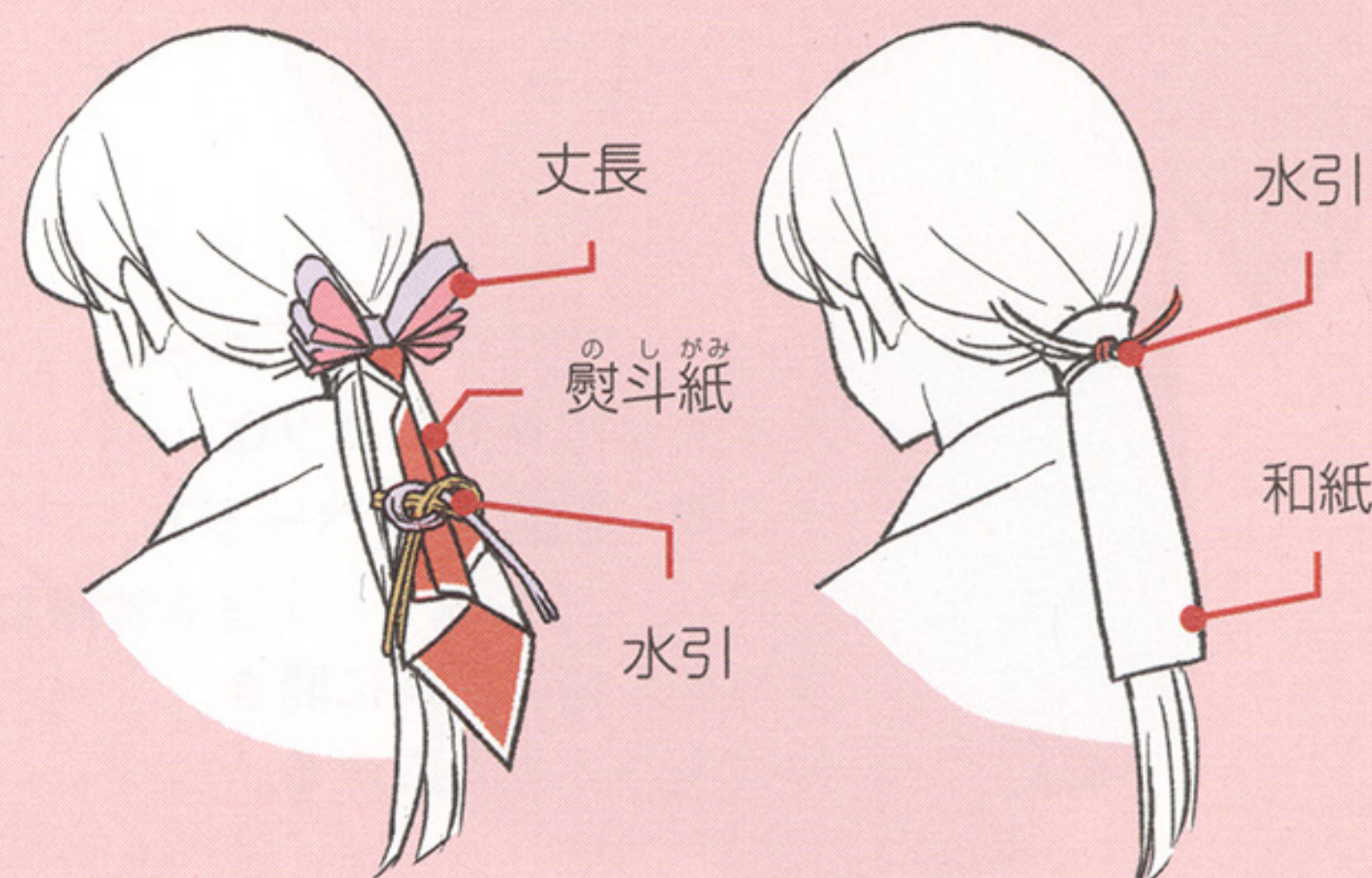
横

袖の線の他に脇の下にできるシワを描く。

ONE POINT

絵元結い

髪を結んだ上から、更に結び付ける装飾のことです。本職の巫女は長い髪を和紙に包んで水引で縛っています。髪の長さが足りない時はかもじと呼ばれる付け毛を付けます。

巫女の装束に付ける装飾品は、舞を奉納したり重い儀式の際は、より華やかなものを付けることが多いようですが、神社によってさまざまで、絵元結いも神社の独自性があるようです。

丈長
熨斗紙(のしがみ)
水引
水引
和紙

舞装束

巫女が神楽舞を奉納する際に身に付ける舞装束は、巫女の晴れ着といえます。伝統的な女性の正装である女房装束をベースに考案されることが多いようです。

鉾鈴

花簪
秋の浦安の舞は菊の簪。
春の豊栄舞は桜の簪と、付ける花が決まっています。

小忌衣
神事の際に正装の上から着用する。形状はさまざまあるが、白い布であることが共通で、菊・松・梅・柳などの緑の文様（青摺）が入っていることも。

浦安の舞 本装束
十二単から唐衣などを省き、簡略化したような装束（袴も短い緋袴）。表着の代わりに小忌衣を一番上に着ている。

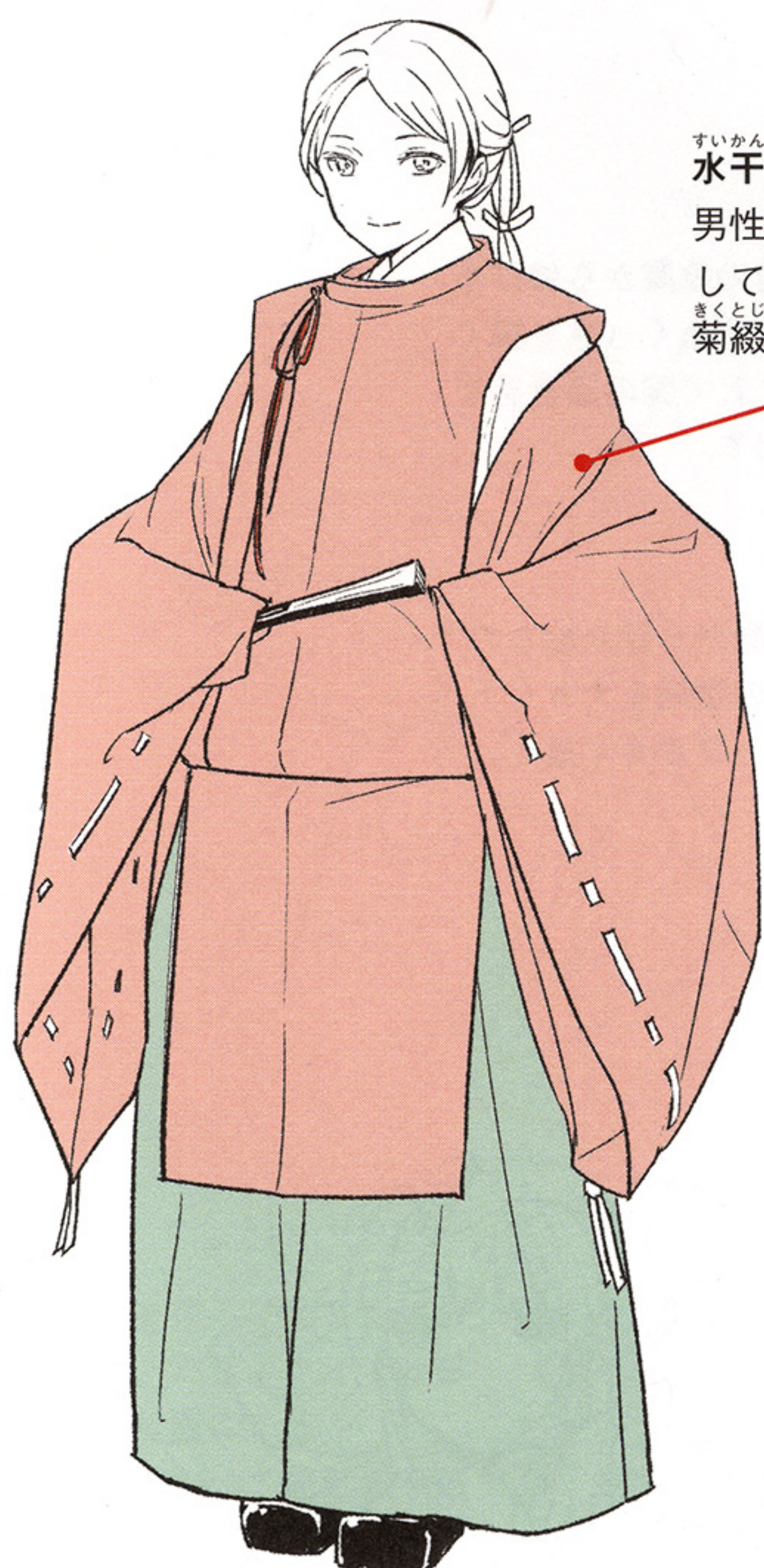
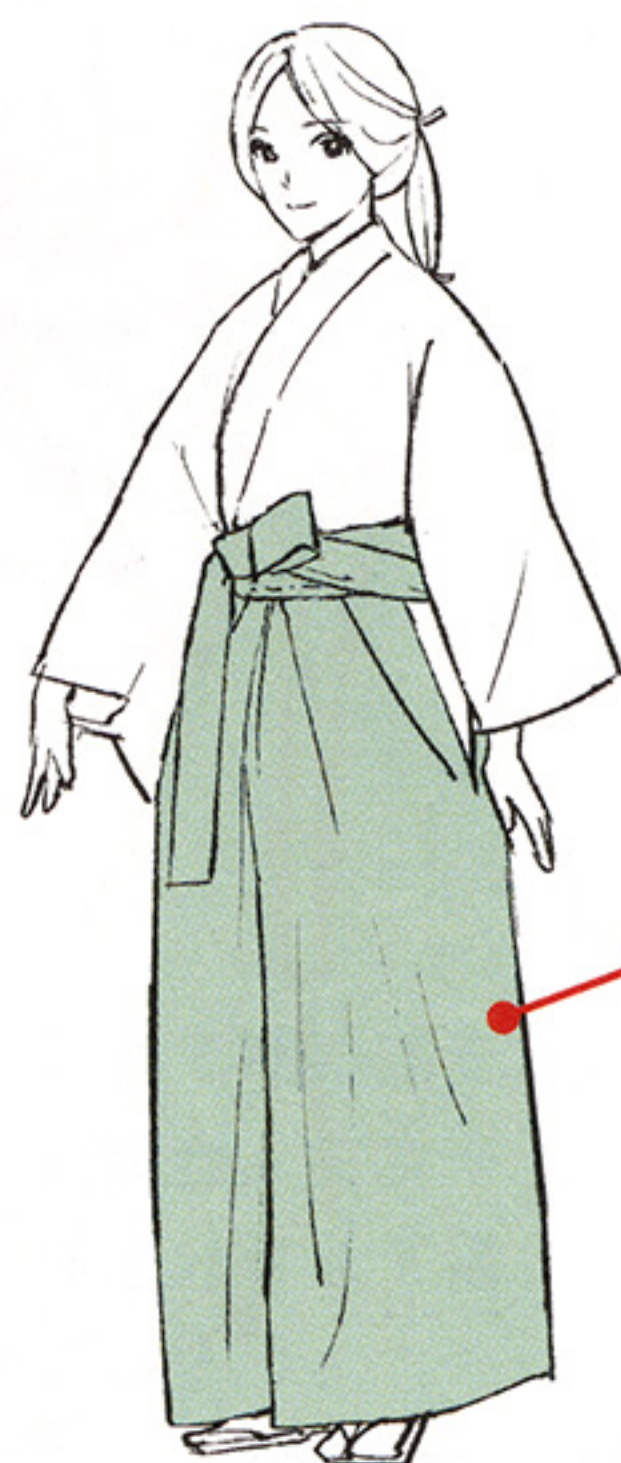
袖が大きいことに加えて、重ね着をしているので、狩衣や水干などより重いことを意識して袖を描く。袖はずっしりと下に垂れて、簡単には翻らない。

女房装束よりは幾らか動きの自由が効くので、この絵のように大きく腕を上げることもできる。

基本的な描き方のコツは、十二単（参照 68ページ）と同じ。
単や袿の裾は三角に開き、体の後ろで丸く広がる。

女性の神職常装

戦後から、女性も神職の資格を取るようになりました。
時代によって形や色が異なります。神職と巫女を混同することが多いので注意しましょう。

● 旧規定（昭和21年制定）の女子神職常装

水干
男性神職の狩衣を摸して、覆水干で着る。
菊綴は付かない。

女性や子供など、肩の薄い人が狩衣や水干を着ると、ここの布があまって尖って見える。

捻襠仕立ての切袴
平安時代の女性が履いた袴と同形で、襠がはっきりしません。
古式を好む神社では巫女も、このタイプの緋袴を穿いていたりする。

● 現在普及している女子神職常装

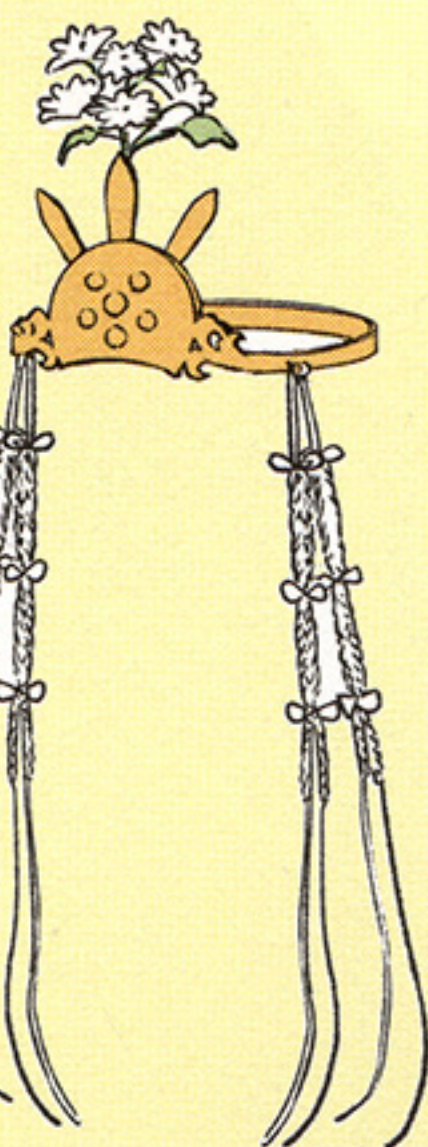
昭和62年に制定された新しい女子神職服。
表着、単（常装の場合は省略可）、下着の小袖、捻襠仕立ての切袴で、女房装束と同じような構成です。唐衣を着て、釵子を付けると正装になります。
活動しやすく裾をたくしあげ、唐衣や表着と共布の紐で締めています。

額当て

表着

単
色は萌黄か紅。

● 女子神職の釵子

女房装束の釵子と違い、輪を頭に被るタイプ。

日陰の糸（日陰鬘）

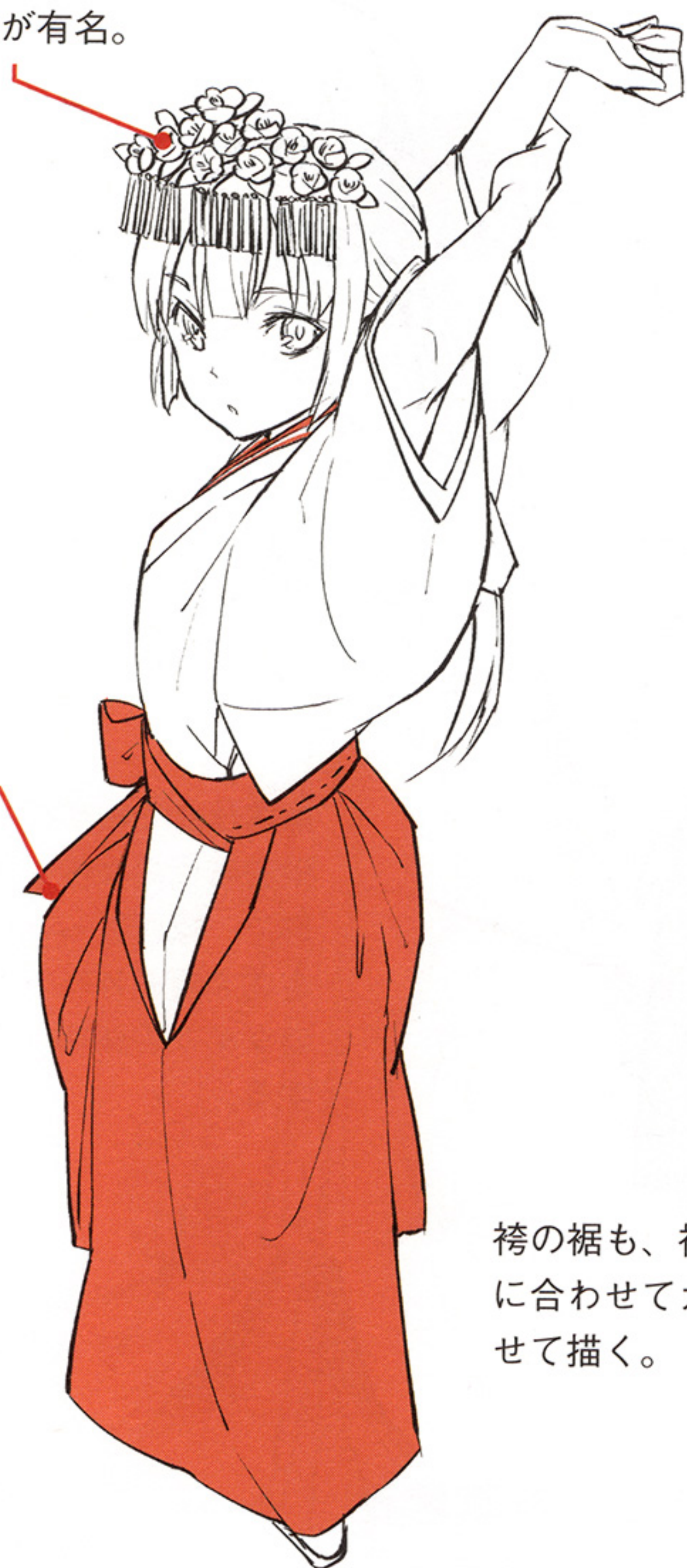
ONE POINT

巫女と神職は混同しやすい？
市販のコスプレ衣装やイラストでは、白衣や千早に袖括りがついたり、肩が開いた巫女装束がありますが、おそらく旧規定で女子神職さんが着用していた水干と混同されているのかと思います。ファンタジー世界が舞台の場合以外はありえないので、気を付けたいポイントです。
まれに巫女が舞装束として、狩衣を着用することもあるようですが、巫女の袴は緋色で、女子神職さんは男性と同様に位によって浅葱、紫、白などの袴を履くので見分けられます。

シワや布の動き

花簪（はなかんざし）

大きい神社では、舞装束でない時も花簪を付けた巫女がいることがある。花の種類は多種多様で、春日大社の藤の花が有名。

関節の位置などの、ボディラインが見えにくい和服では、俯瞰やアオリのイラストは難しいです。遠近感を表現できる部分は、少し大げさなくらいに描きましょう。

肘の位置から伸びるシワをくっきり描くことで腕の遠近感を出す。

捻襠仕立ての切袴（ねじまち）

古式の袴。

俯瞰から見た絵なので袴の腰紐を大きく下へカーブさせて描く。

袴の裾も、袴の腰紐に合わせてカーブさせて描く。

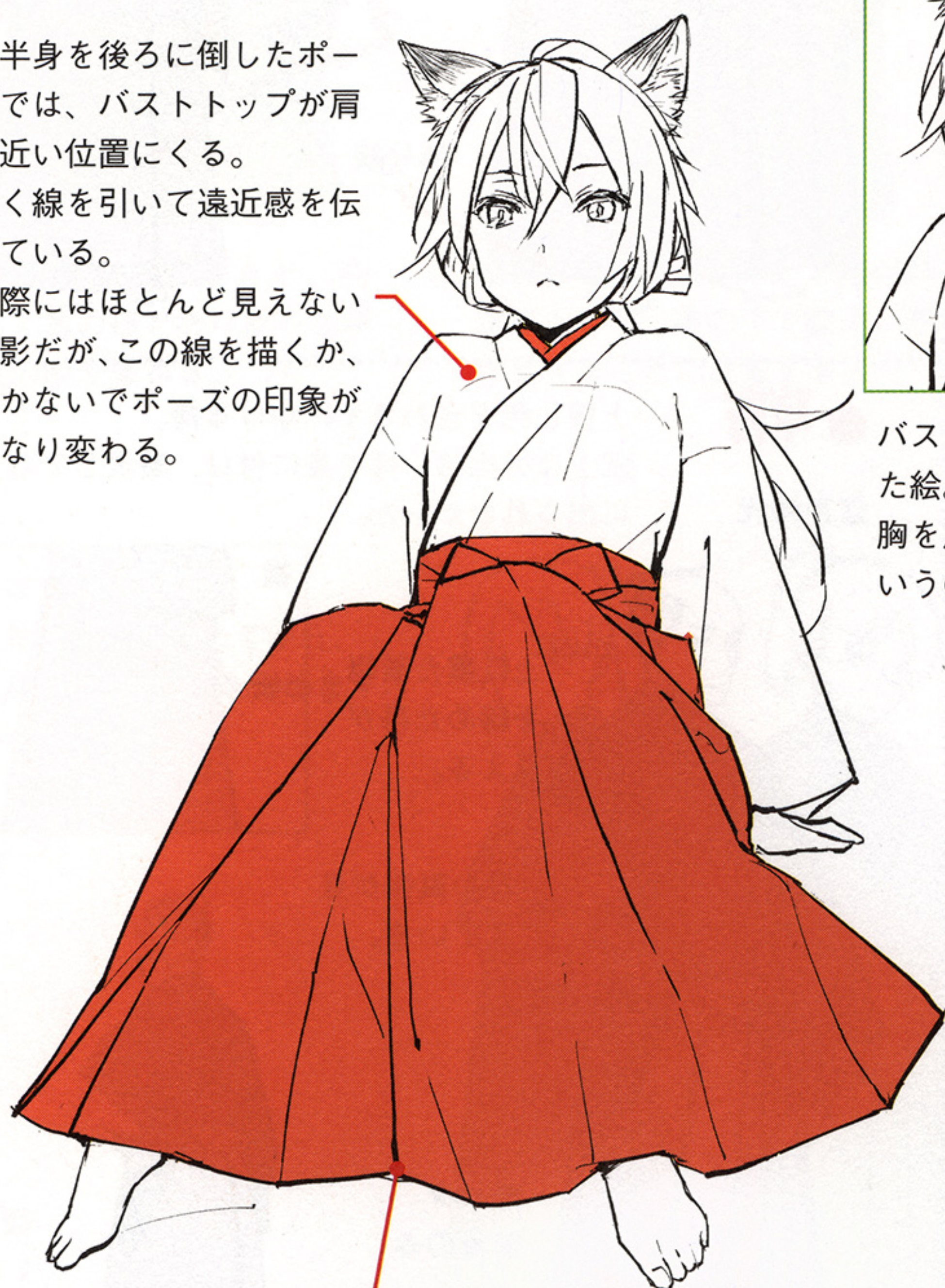
バストトップが、顎のすぐ下にくる。衿元が縦に潰れて見える事に注意。

身八つ口や振り、袴の内側を描くことで、寝そべった人を足側から見た時の遠近感を表現する。

千早も唐衣のように四角い
前身を肩から掛けただけの
もの。
シワの形が帯や袴で締めた
着物とは違うので注意。

千早で腰が隠れて遠近感を
表現しにくい場合、白衣(びゃくえ)や
袴をうっすら透けさせて描
いても良いでしょう。

俯瞰の視点で動きのあるポーズを
付けた場合、ちらっと奥の足が見
えるように描くと、袴独特のボ
リュームが伝わって和服らしく見
える。

上半身を後ろに倒したポー
ズでは、バストトップが肩
に近い位置にくる。
薄く線を引いて遠近感を伝
えている。
実際にはほとんど見えない
陰影だが、この線を描くか、
描かないでポーズの印象が
かなり変わる。

バストトップの線を消し
た絵。
胸を反らせたポーズだと
いうのが伝わらない。

袴はできるだけ左右の足の
間に隙間を作らない。
プリーツスカートのように
ヒダを広げて太く描く。

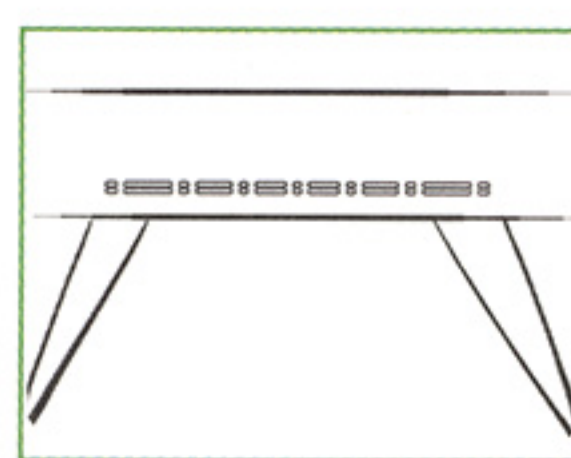
16 袴

袴は最初、男女ともに上着の下に隠れるインナーでした。時代による移り変わりで、正装が簡略化されるとともに、男性の袴は大きく形を変えます。その一方で、女性の袴は一般的な装いでは省略されるようになり、宮中や巫女装束など、極限られた場面でしか目にできないものとなりました。

男性の袴

※着色は解説のための便宜上のもので、実際の色とは異なります。

● 指貫（括袴）

目立たないインナーなので、古くはヒダの折り目がない。

平安時代

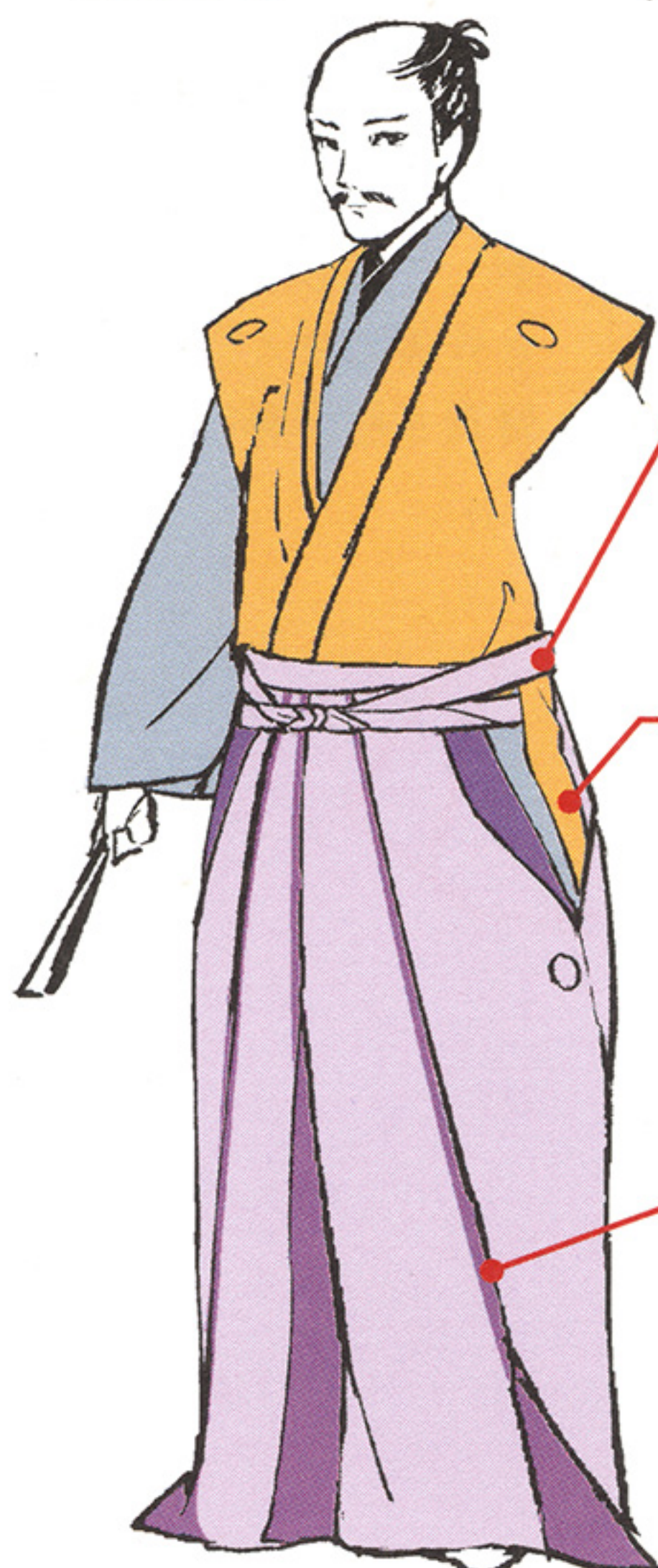
● 直垂袴（切袴）

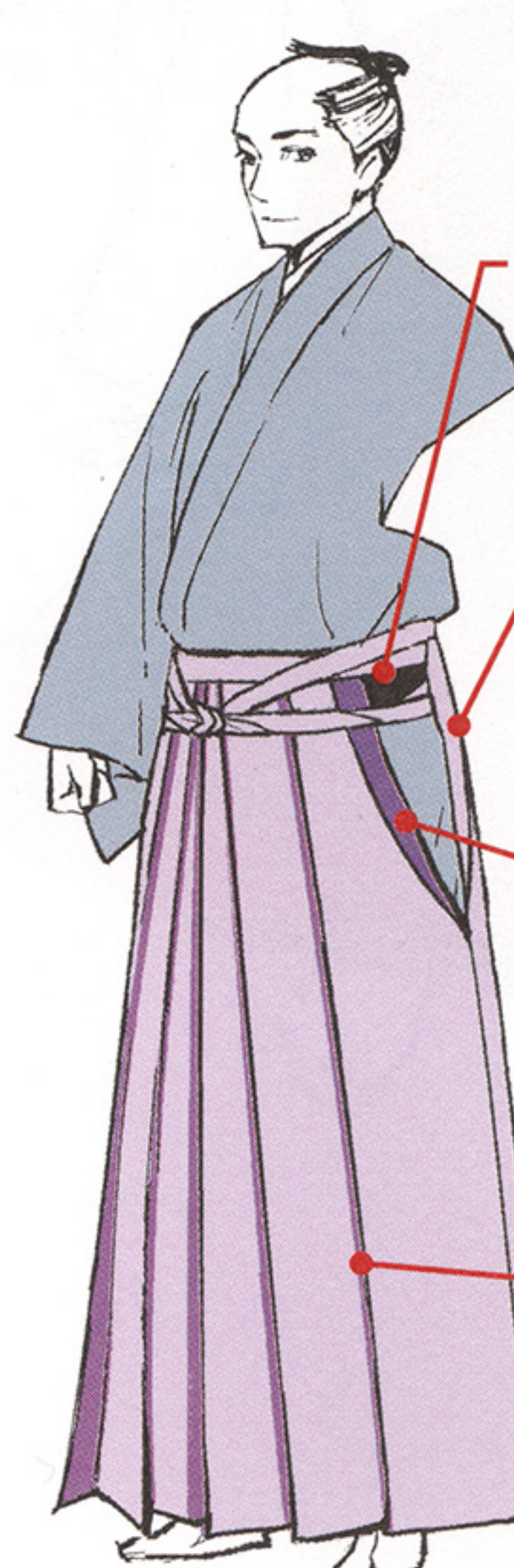
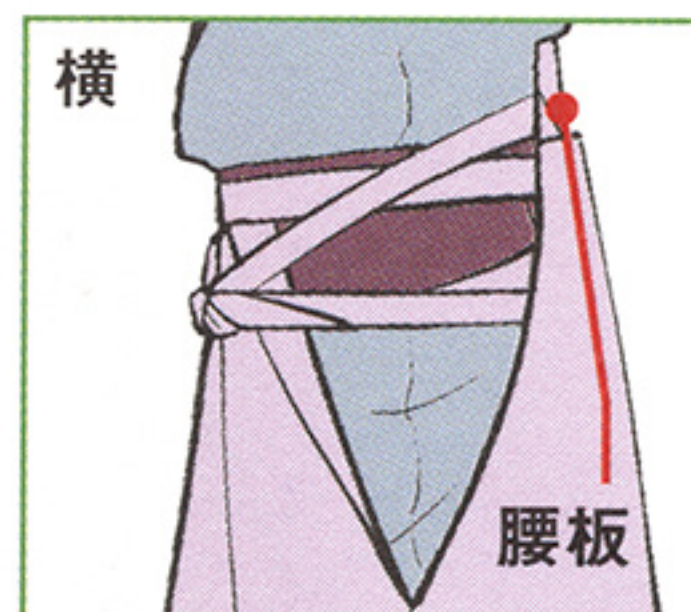
鎌倉時代

● 小袴

正装が一段と簡略化されていく。袴は同色の上着とワンセットで着用すると正式な装いとされた。

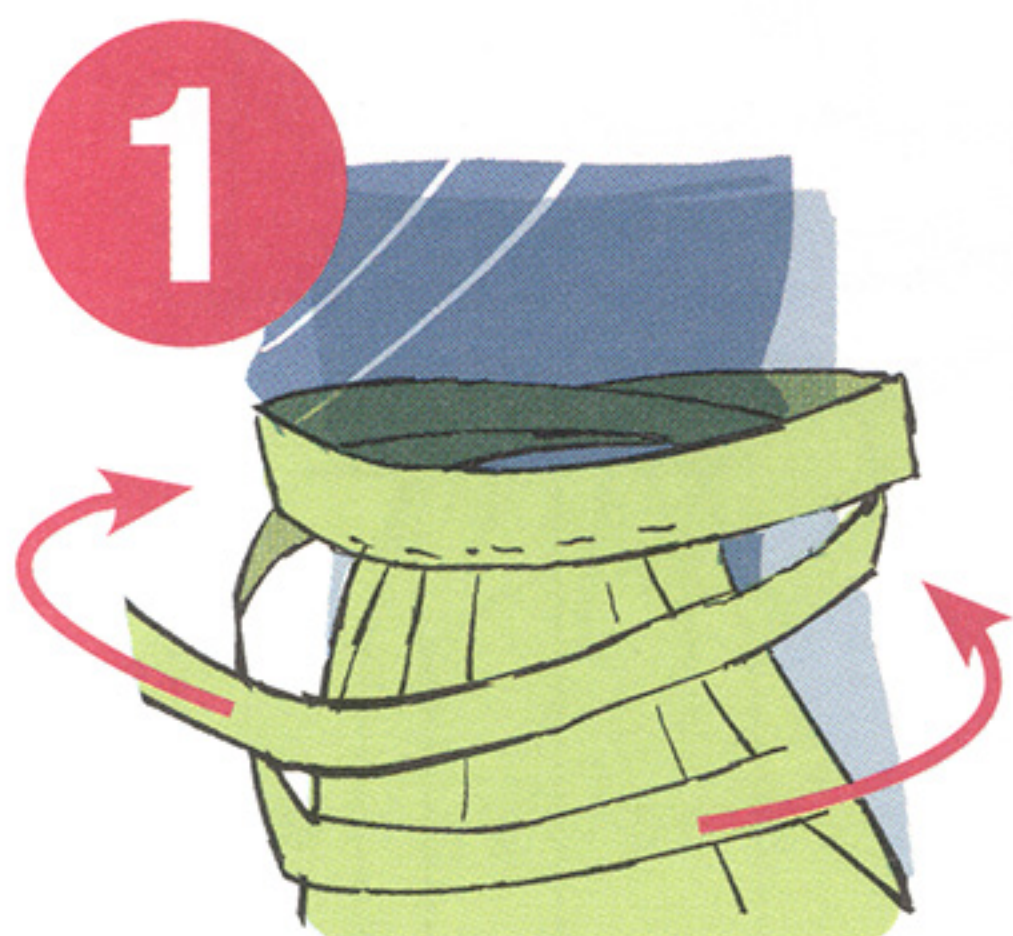
室町時代

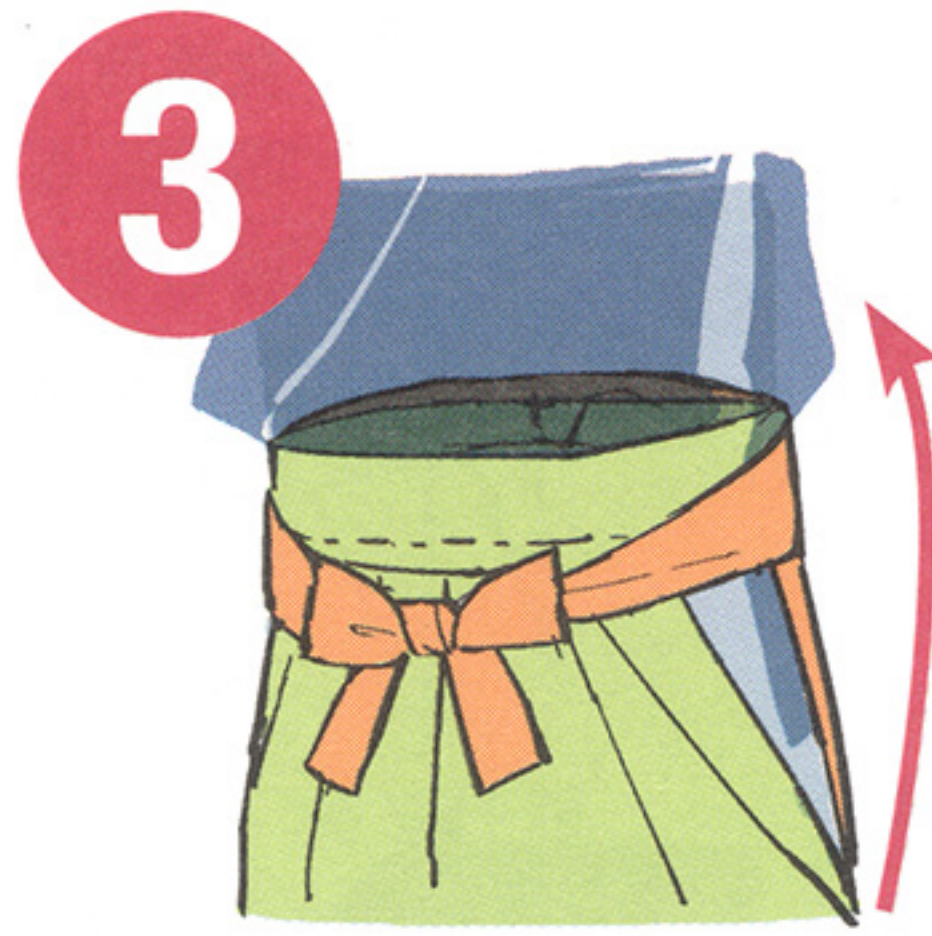
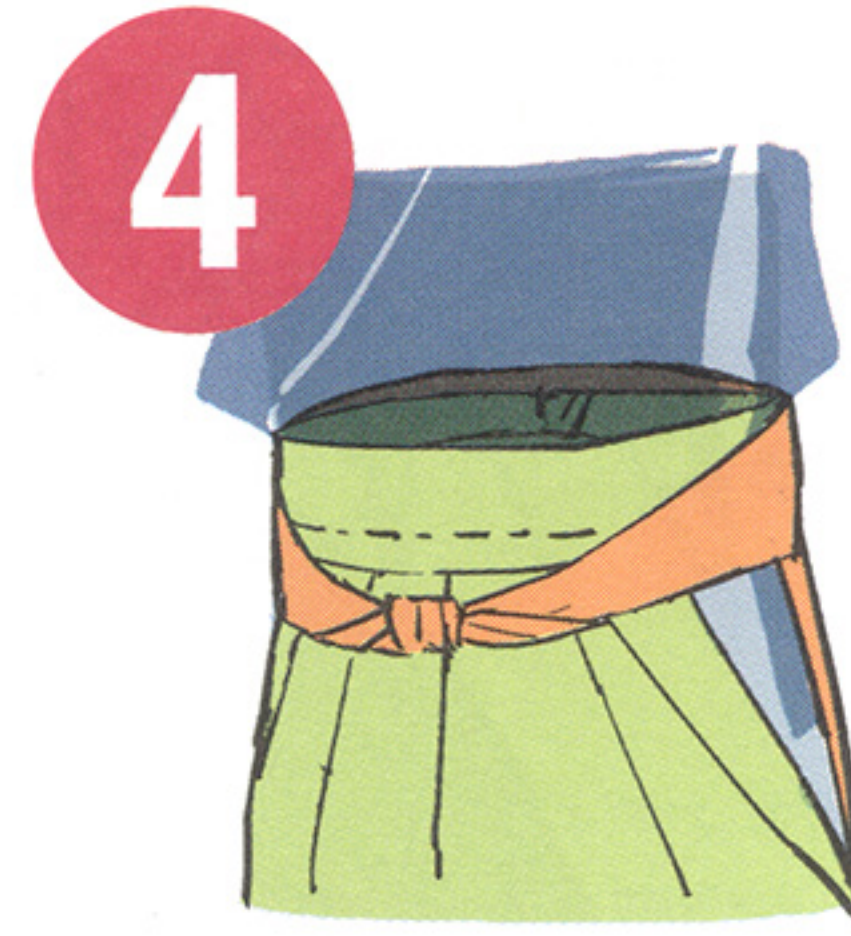
● 平袴

上着と色を合わせずに穿ける袴。武士は外出時、袴を身に付け、着流しでは人前に出られなかった。

江戸時代

袴の結び方

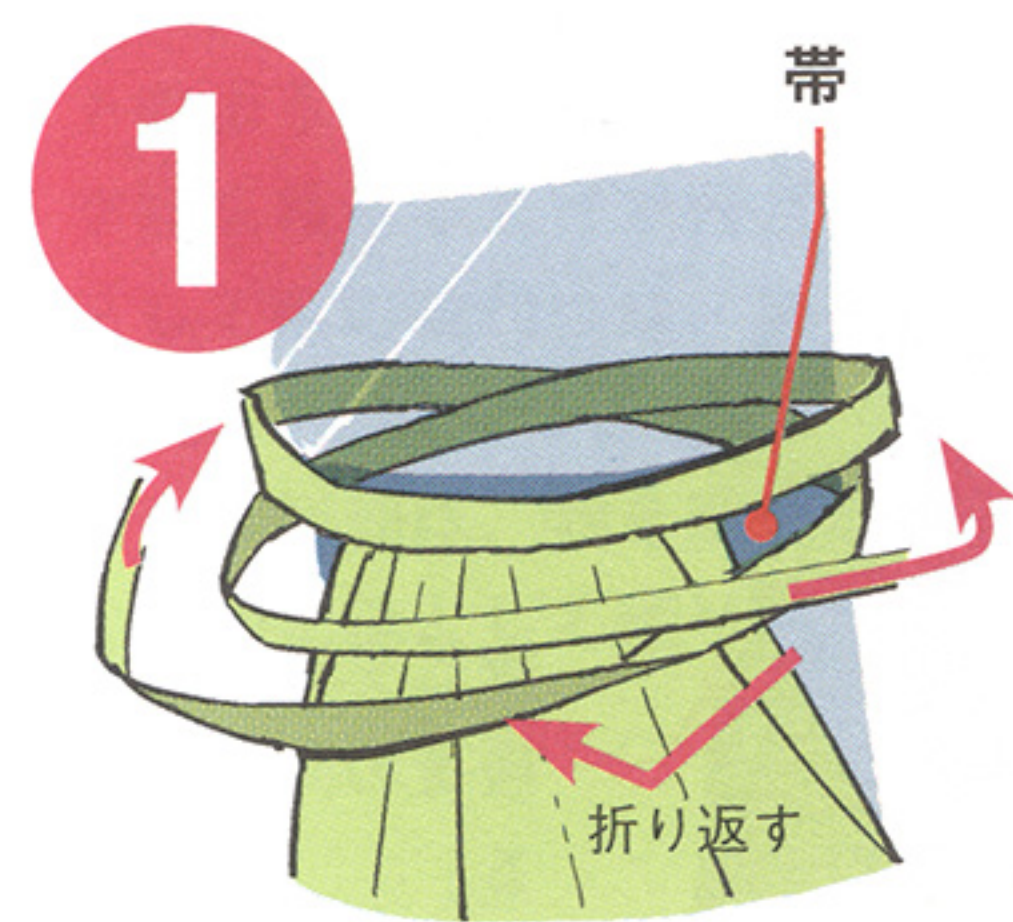
袴の絵を描いていると、腰紐がどう重なっているのか分からずに困る時があります。
古い男性の袴である指貫や直垂袴と、現代の袴と同形である平袴について、それぞれ結び方を解説します。
見た目はずいぶん違っても、基本的な流れは似ています。
ここでは、分かりやすいように前身を緑、後身をオレンジに色分けして解説します。

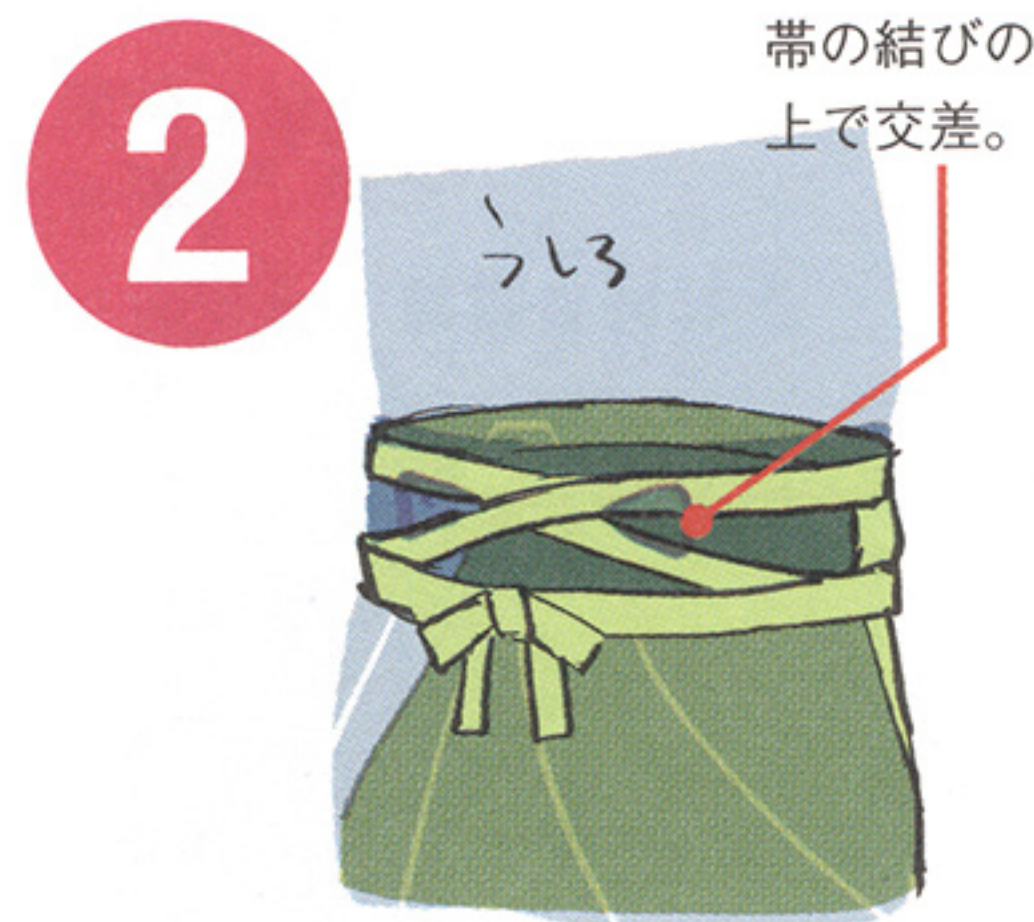
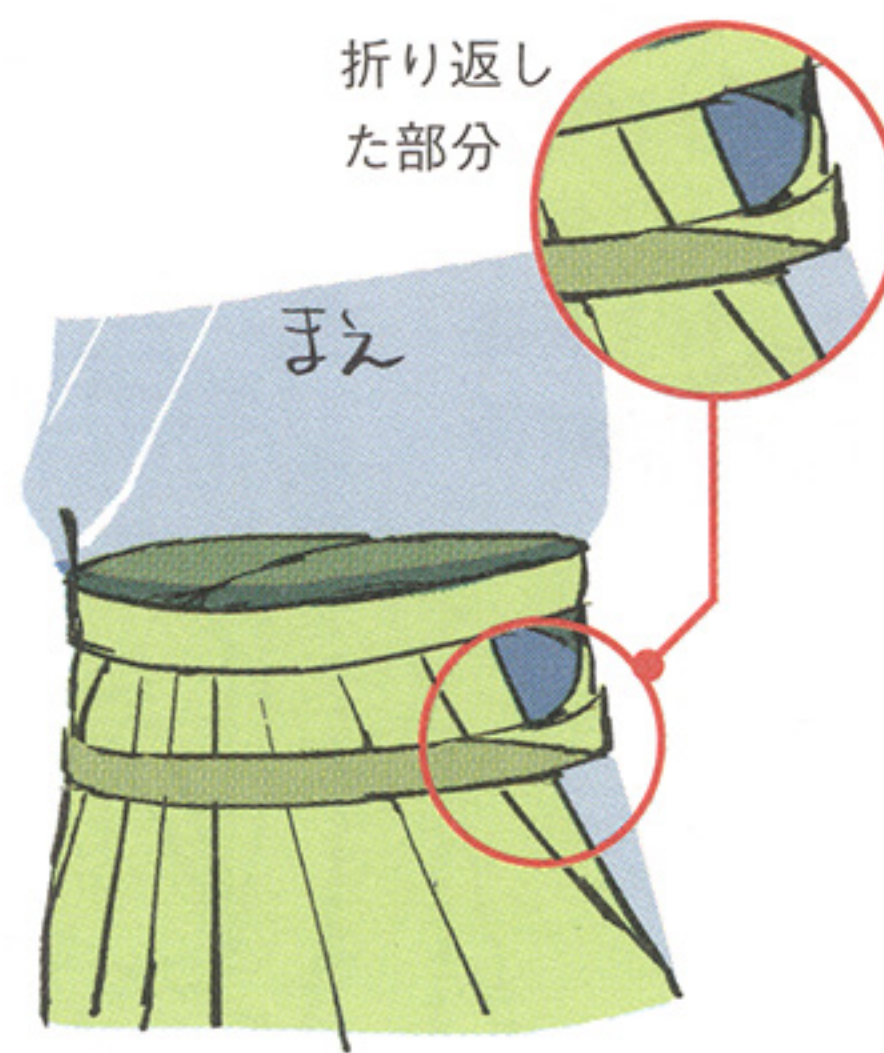
16

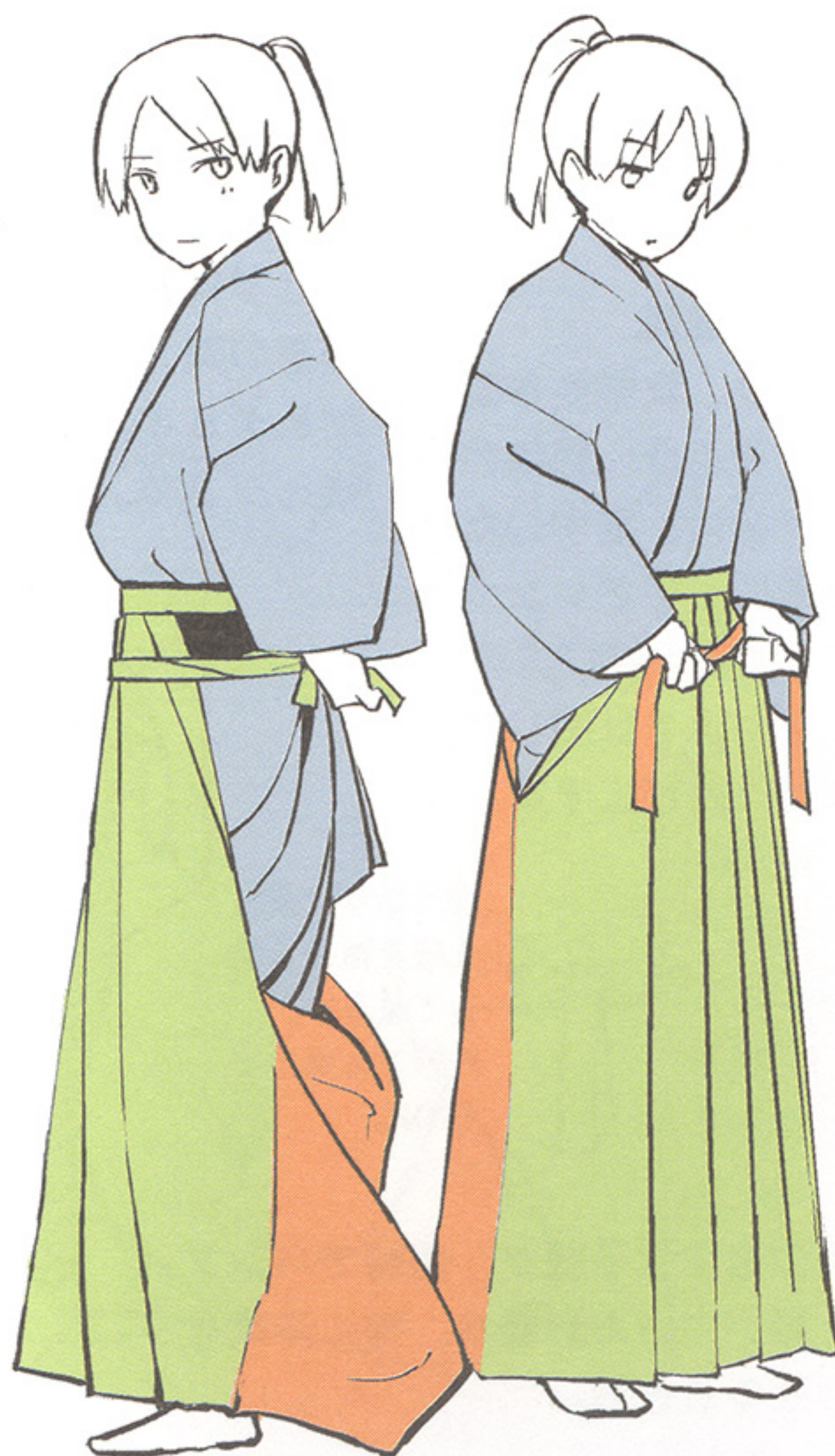
● 指貫・直垂袴

1
袴の前身を腹に当てて、前紐を後ろへ回して１回交差、そのまま前へ回して、さらに交差させる。

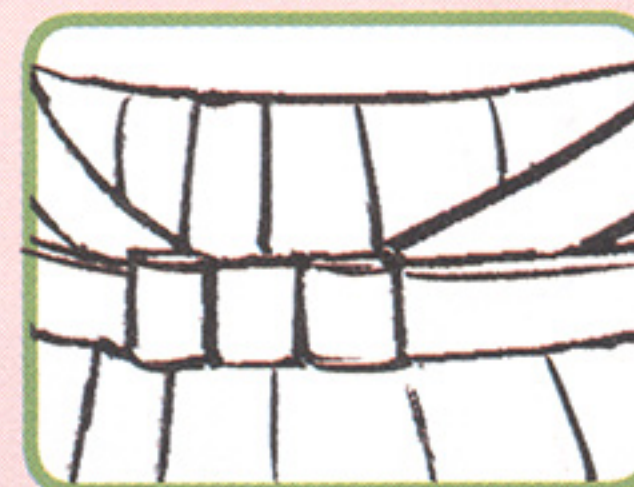
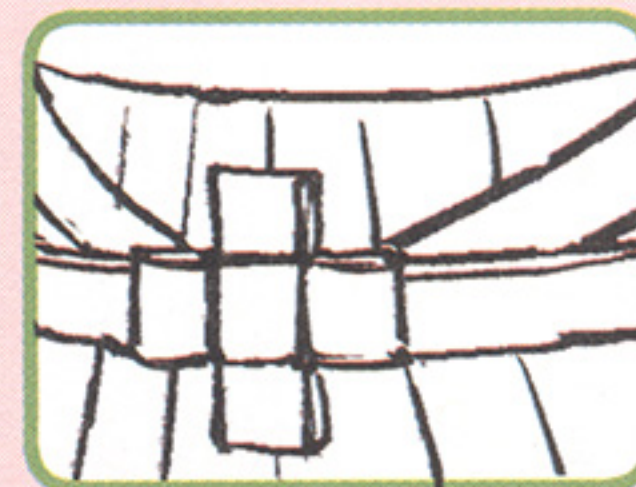
2
前紐を、お腹の下で跳ね上げるように裏返し、腰上で諸わな結び（蝶々結び）をする。

3
袴の後身を腰に当てて、前紐を交差させた部分に重ねるように後紐を諸わな結びで結ぶ。公家の装束はこれで完成。

4
実務で着用する場合は、後紐の諸わなの輪や、残りの紐を下から上へ差し込む。

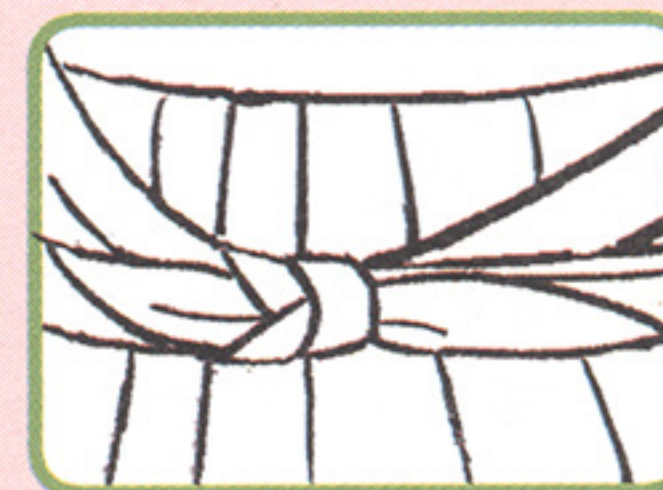
● 平袴

1

前紐を背面で交差させ、向かって右の紐を折り返しながら腹の前で重ねる。

2

指貫などとは異なり、お腹の前で重なった左右の前紐は、大きく跳ね上げず、帯の下で結ぶ。向かって右側にだけ折り返した部分が見えることに注意する。

3
後身の腰板を帯結びに乗せ、後ろ紐を前紐の下へ潜らせて一緒に結ぶ。

袴はまず先に前身（緑）を締めてから、後身（オレンジ）を締めます。

ONE POINT

袴の紐の結び方

一文字結び　**十文字結び（礼装用）**

この２つは明治以降に考案された結び方です。余った紐を畳んだ上から、もう片方の紐で巻いています。

結び切り

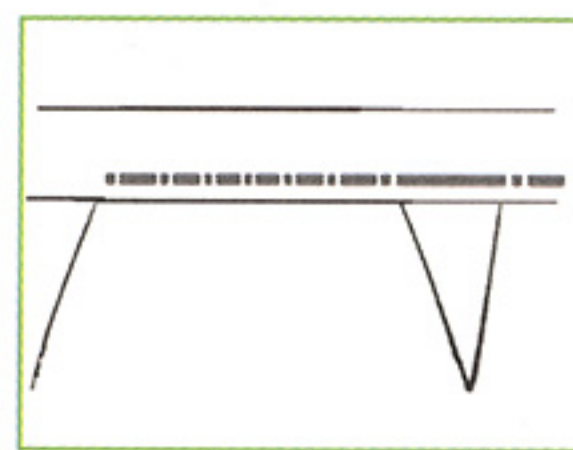
江戸時代以前は、このような固結びが主流でした。

女性の袴

女性の袴はインナーだった時代のまま形状の変化がありません。女性が男性のように袴を表に見せて着用する際には、男性の袴を流用したり、女性的に改造して使っています。解説のため着色しています。

● 長袴（ながばかま）

平安～室町時代
元は素肌に付けた。平安時代末期に袖口の小さい着物を袴の下に着るようになり、鎌倉時代からは単や袿を省きはじめる。

腰紐には刺縫（さしぬい）がある。

折り目のハッキリしないヒダが、前後に５本（広げると６本に見える）ある。

龍鼓（りゅうご）
腰紐の先端に付ける紐飾り。

動きやすく改良

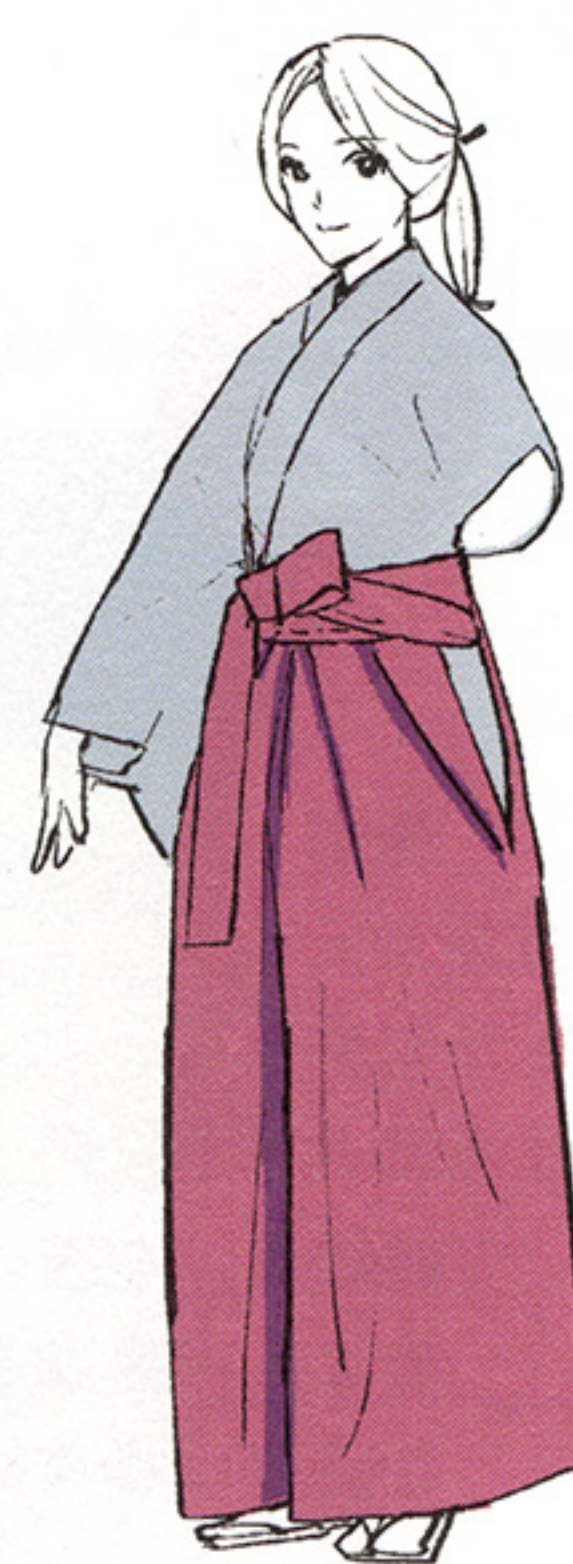
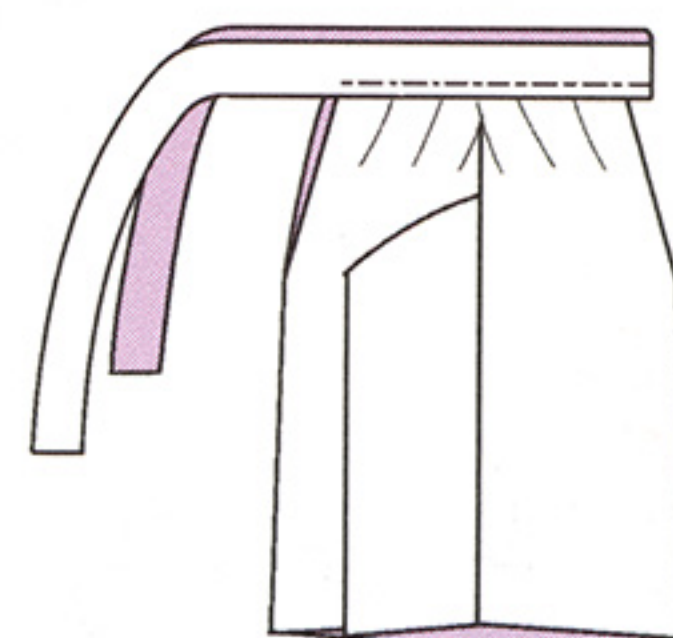
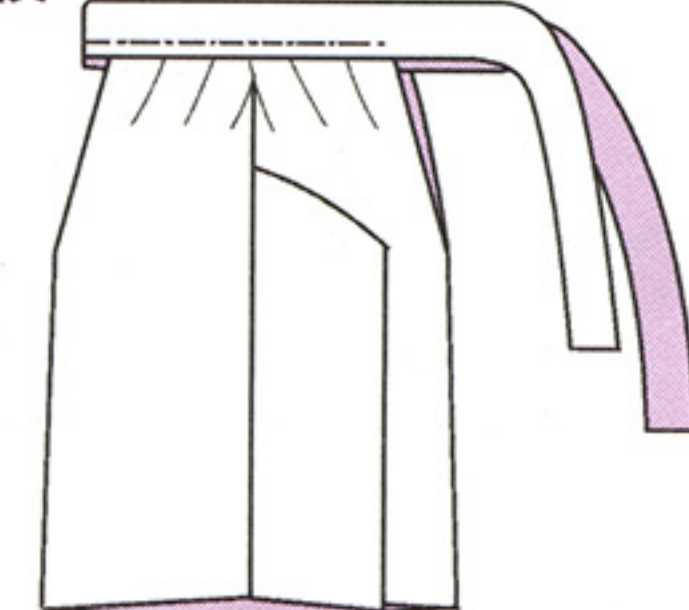
腰紐は１本。左腰でＵ字に繋がっている。

前後とも笹ヒダはない。

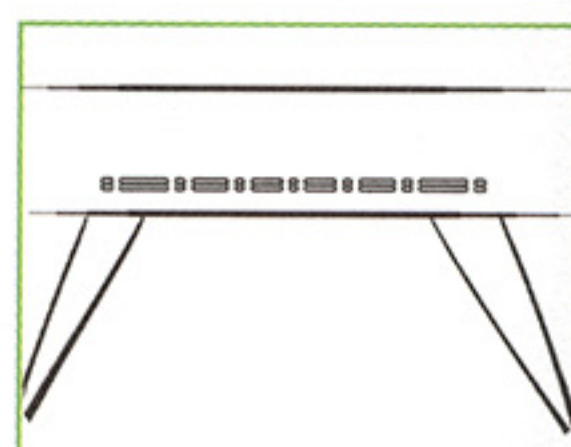
影響を与える

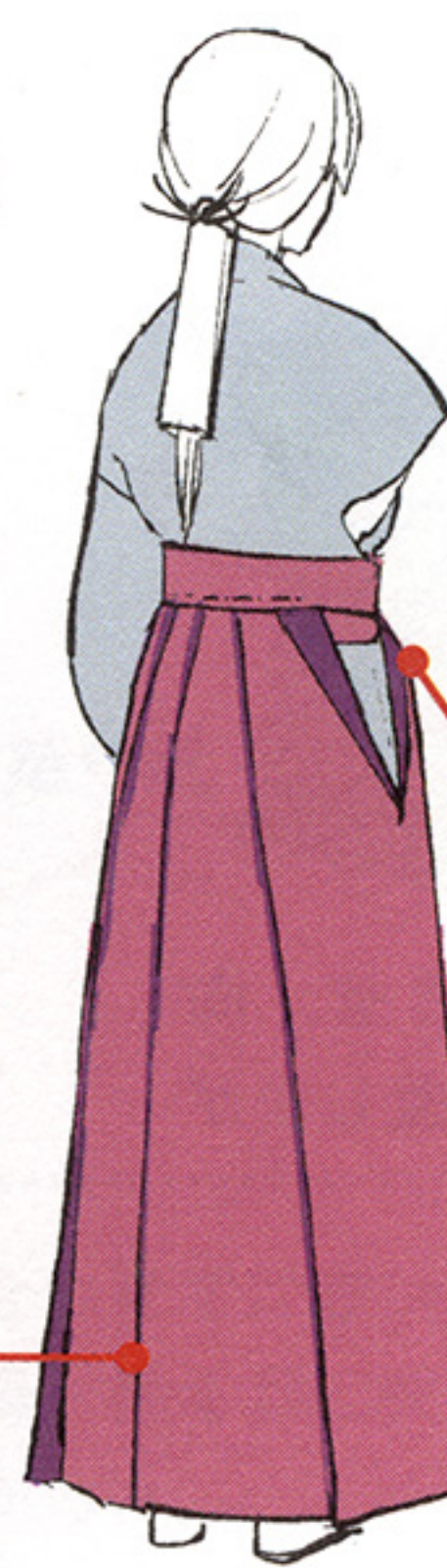
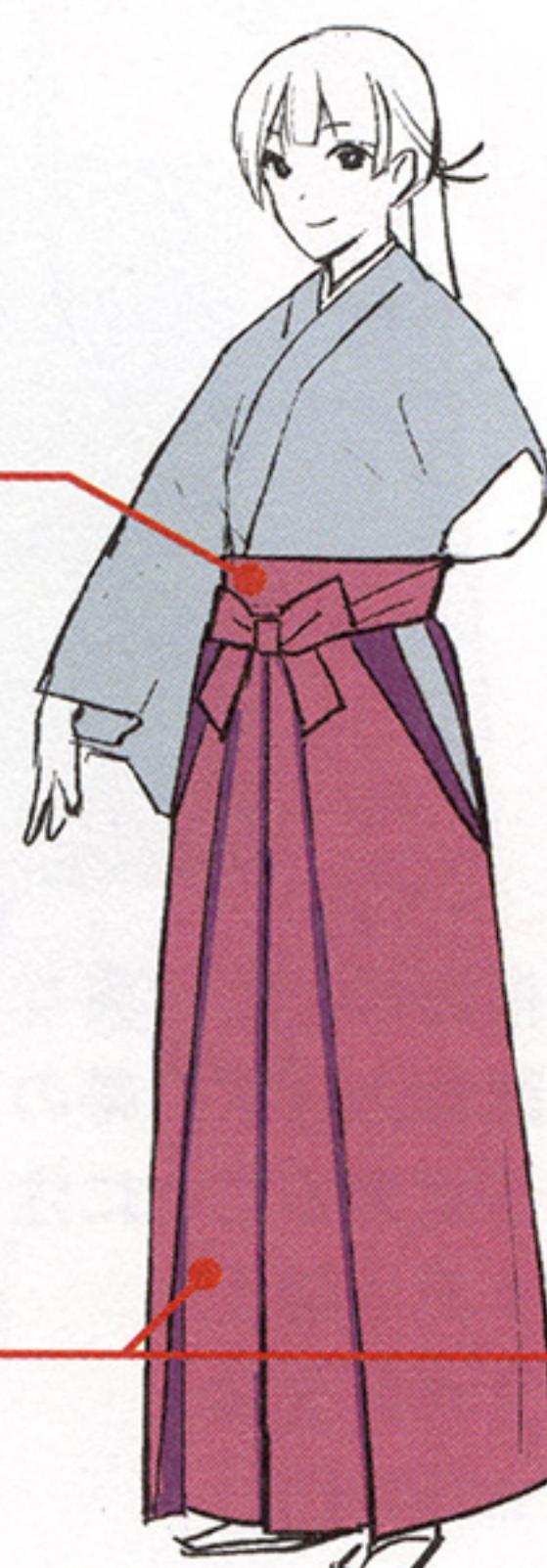
色は紅か、若年者は晴れの場では濃色（濃いエンジ色）を着用した。
光沢と張りのある生地で作られている。
室町時代に、打ち掛け姿にとって代わられ、女性の袴は長く着られなくなる。

● 切袴（きりばかま）

平安時代～現代
長袴の丈を短くしたもので、平安時代でも外出時の女性や、子供が着用した。明治になって、宮中の女子服として再度とり入れられ、現代では女性神職と巫女なども「捻襠袴（ねじまち）」として着ている。

前

後

長袴と同様に、左腰で紐が繋がっている。
※差袴のように前紐と後紐に別れた仕立てのものもある。

● 差袴（さしこ）　男性の袴の流用

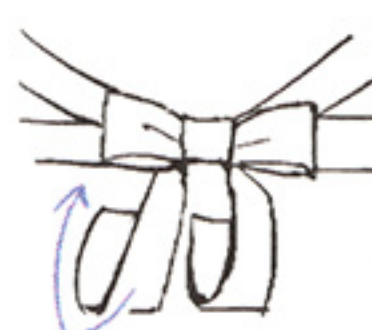
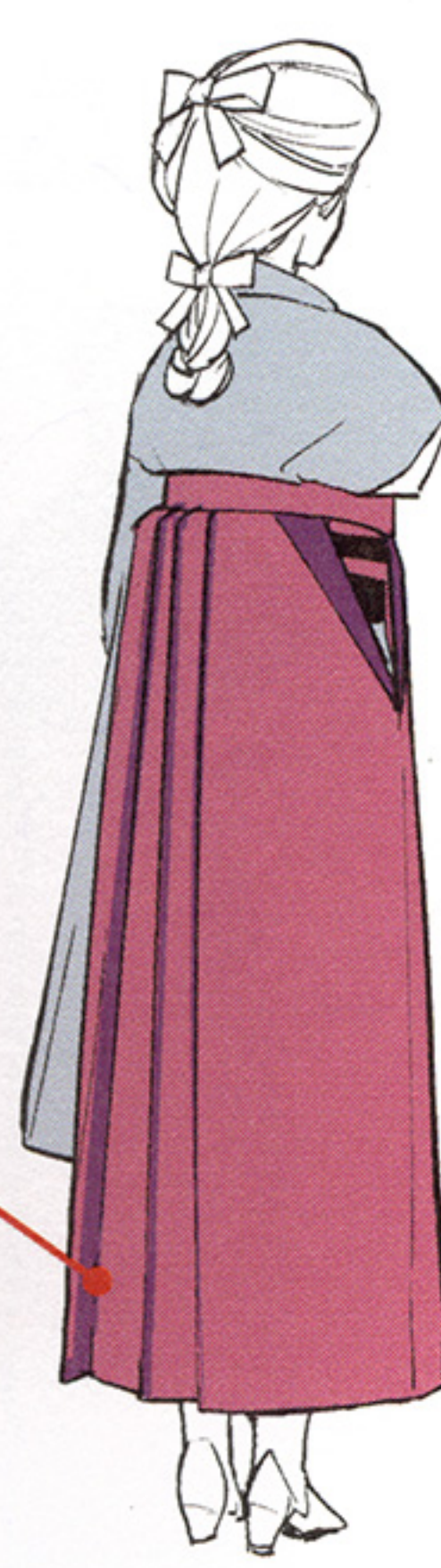
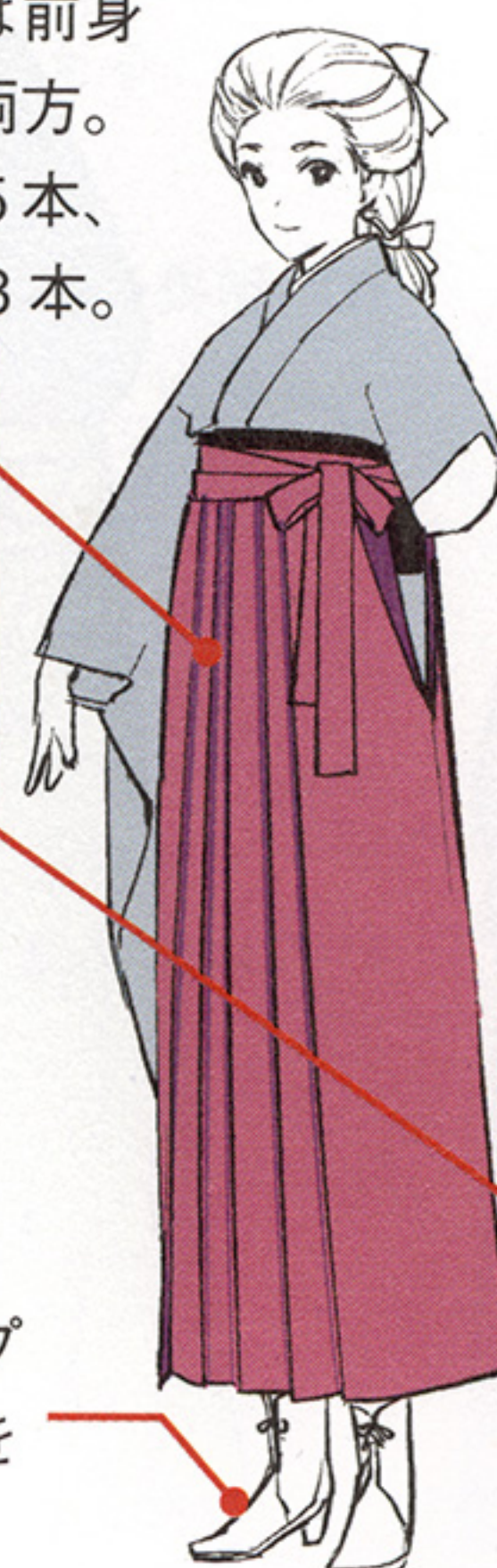
江戸時代～現代
指貫の下を切って丈を短くした袴。

上刺の糸（うわざし）
袴の前紐後紐ともに白い組み紐で縫いとられている。

前ヒダ、後ヒダとも３本。

笹ヒダは、前身後身の両方にある。

男性神職も同形の袴を着用する。巫女は緋色（ひいろ）のものを着るので「緋袴（ひばかま）」とも呼ばれる。

● 女袴（おんなばかま）　原型は男性の袴

明治時代～現代
明治になり、女学生が活動的に動けるよう、男性の平袴をベースに、宮中の女官服を参考にしてアレンジされた袴。腰紐の結び方は、平袴と途中までは同じで、最後は蝶々結びにする。

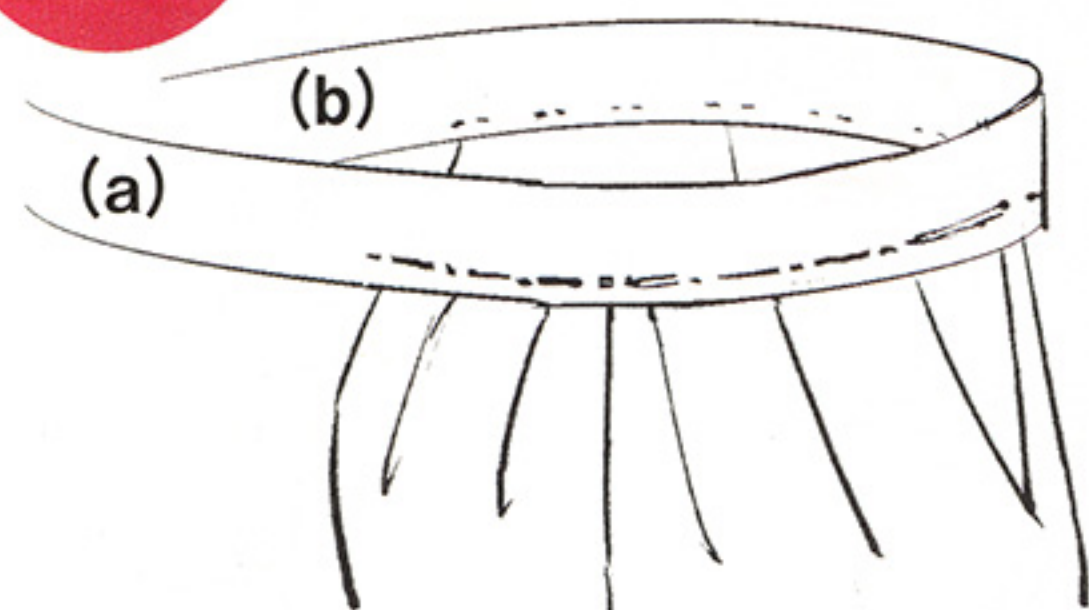
笹ヒダは前身後身の両方。前ヒダ５本、後ヒダ３本。

蝶々結びで余った紐を裏から回して垂らす。片方でも両方でもOK。

明治の宮中女子服が、切袴でパンプスを履いていた影響か、袴に洋靴を合わせることも。

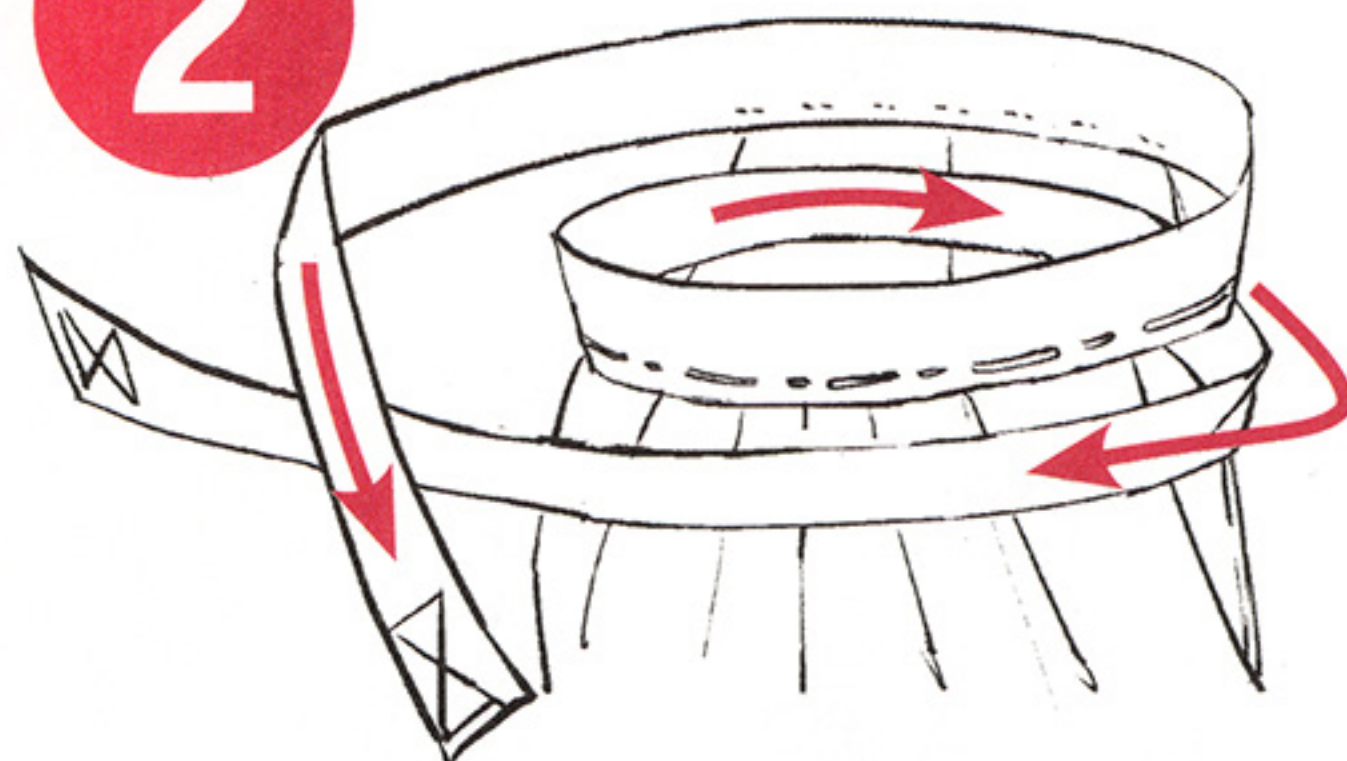
袴の結び方

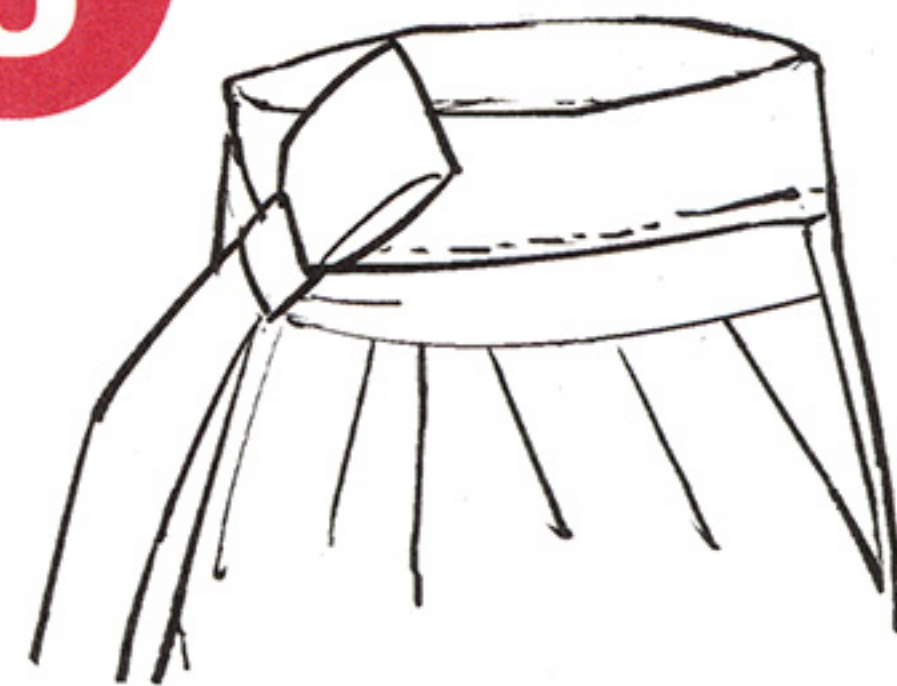
巫女装束の差袴と、明治の女袴は前述の男性の袴と同様の結び方なので、ここでは主に宮中で用いられてきた長袴と切袴の紐の結び方を解説します。こういった古式の女性の袴は紐が一本しかなく、とてもシンプルな結び方です。

● 長袴や切袴

1

(b)
(a)

左腰は繋がっているので、右腰に紐が伸びる。
便宜上、腹を横切る紐を（a）、背を横切る紐を（b）とする。

2

後身を腰に当てながら、（a）紐を左腰の股立（ももだち）に潜らせ、体の前へ持ってくる。
右腰で（b）紐を上にして交差。

3

片わな結び（蝶結びの輪を１つしか作らない結び方）にして、輪がお腹の真ん中にくるように整える。

袴にとって変わった装束

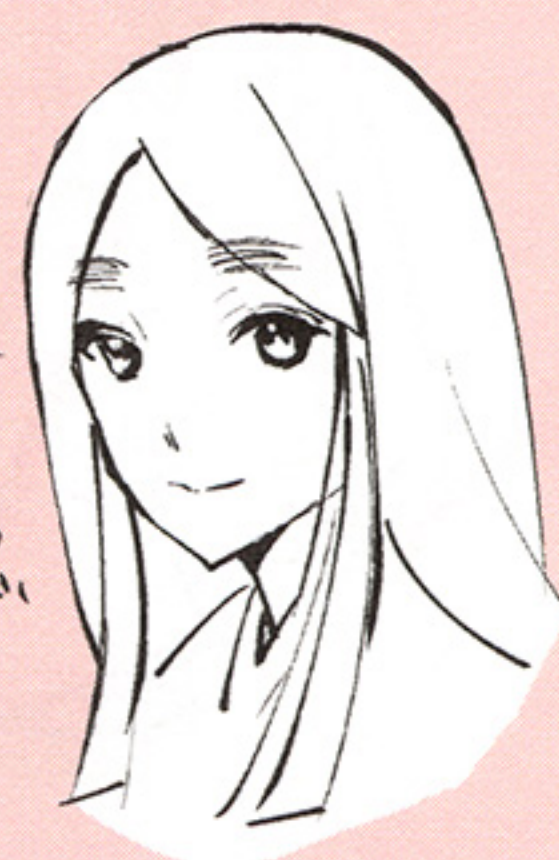
女性の正装では、袴が穿かれた期間が少なく、平安時代に女性の袴（下着）が現れたと思ったら鎌倉時代には巻きスカートのような「褶（しびら）」となり、武家の上流婦人は小袖の上から単や袿（うちき）を重ねるだけで袴を省略し始めます。
そして室町時代には、単や袿の代わりに美しい模様を付けた「打掛」を羽織りました。
この打掛姿は、形を変えながらも江戸時代が終わるまで上流女性の正装として残ります。

夏期
打掛腰巻き姿。
打掛の上から
細帯を締めて、
両袖を脱いだ状態。

冬期
打掛姿。
間着を細帯で締めた上から、打掛を羽織る。

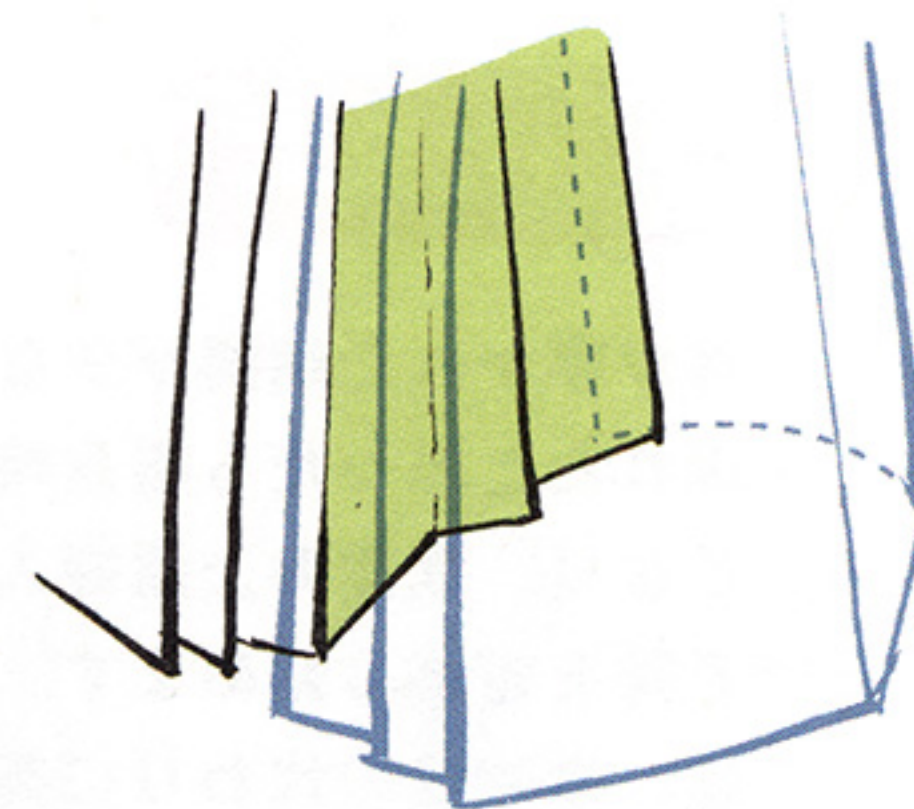
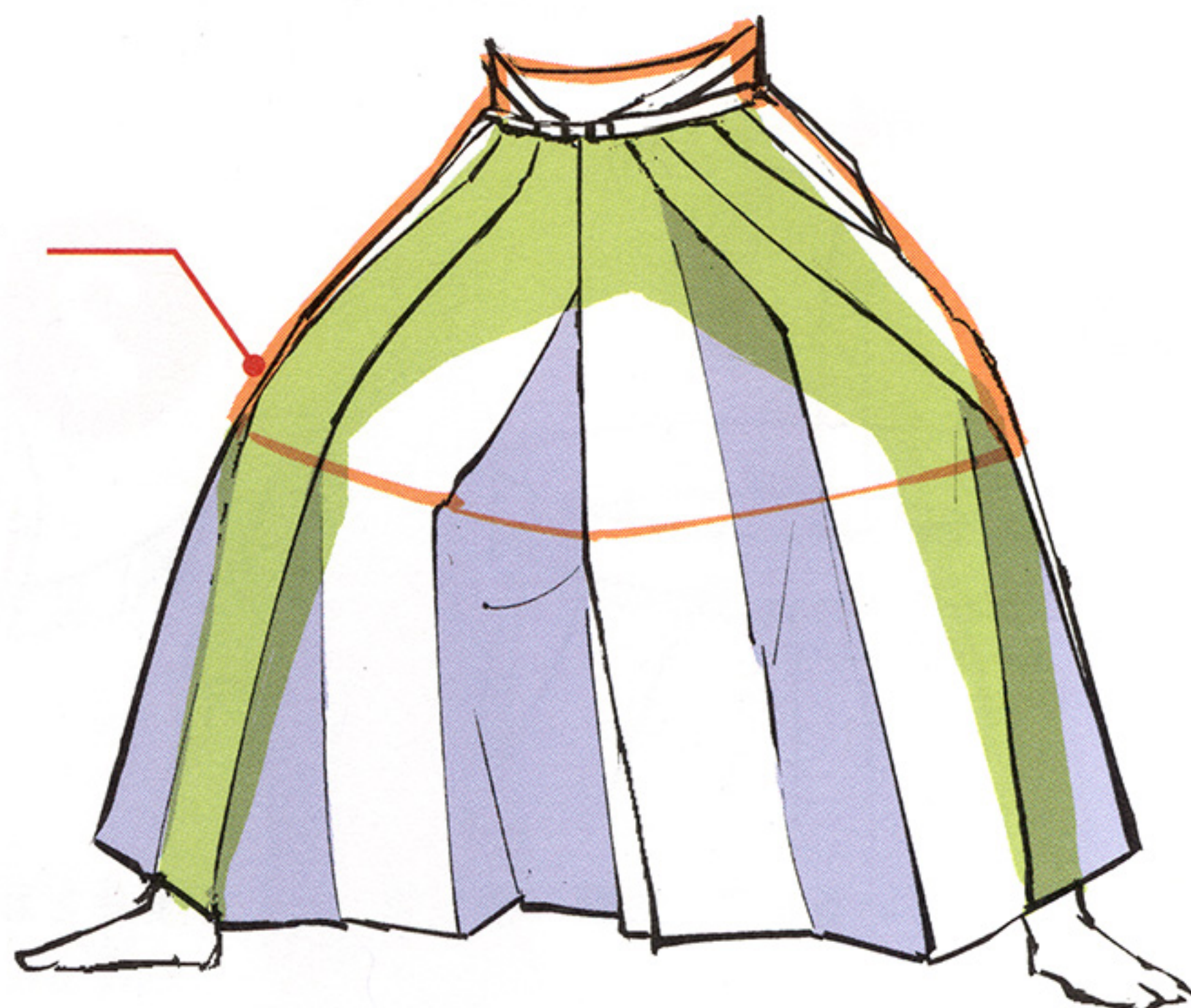
ONE POINT

眉のメイク（作り眉）
実際の眉より高い位置に小さな眉を描くメイクは、実は室町時代になってからの流行です。
平安時代は、実際の眉をより太くぼんやりと描くメイクが主流でした。

平安まゆげ

シワや布の動き

足を広げるとプリーツスカートのように
ヒダの内側が開いて見える。

膝丈あたりまでは
スカート状のため、
ズボンのように、
股下から伸びる
シワはできない。

ひらっ

左右に別れた部分は両脚が入るくらい太く、
内股部分にもヒダがある。
ズボンというよりスカートを2つ膝下に付
けたようなものをイメージする。

脚を動かすと、
スカートのように
裾が捲れる。

裾を括っている指貫（さしぬき）な
ども、スカートと似た
シワができる。

スカートの裾が捲れる
のと同じように尖る。

ヒダのシワの他には、
膝頭から斜め下へ伸びるシワか、
内股の膝丈の辺りからのシワが
一筋すっと入る程度。

浪人が穿くようなくたびれた袴
は、張りがすっかり失われている
ので、このイラストのようにシワ
がなく、更にスカートのようにな
ります。

スカートのように
裾が捲れるのを忘
れずに。

左右の脚の間には、
ほとんど隙間はでき
ない。

固めの袴は、折れ目が
多くなり、左右の脚の
間も隙間ができる。

末広がりにどっしりとしたフォルムが平袴などの男性の袴の特徴。骨格が大きい男性が穿いている時はあまり気づかないが、女性が男物の袴を穿くと、体格に比べて袴が大きく見える。

袴の背面はヒダが少ないこともあり、フォルムやシワのでき方が、よりスカートに近い。

明治に生まれた女袴は丈の長いプリーツスカートと同じ。
女袴は男性の袴のように幅広なシルエットにならず、柔らかく体に沿うラインを意識すると、動きのあるポーズを描いた時に、女性らしさが表現できる。

女袴は胸高く紐を締めるので、腰紐に袖が乗るようなシワができる。
男性の袴のシワとは異なるので注意が必要。

一度丸い形にすぼまってから裾だけちょこっと広がるイメージで。

ONE POINT

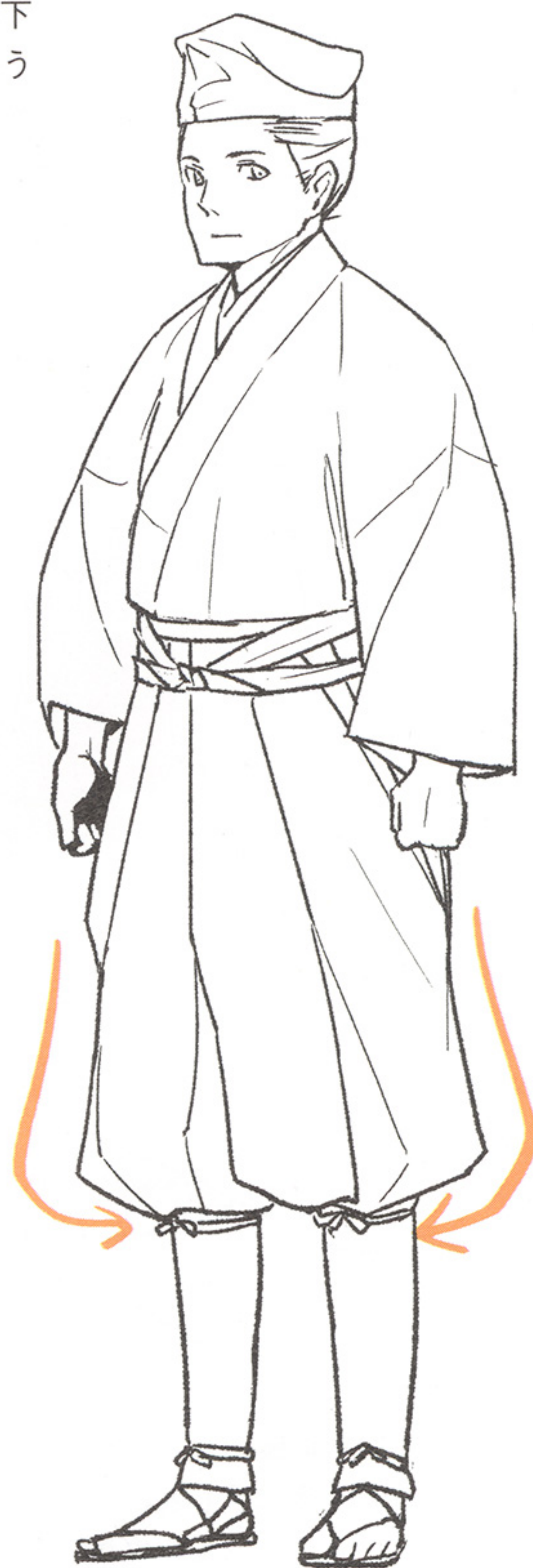
女性用の袴

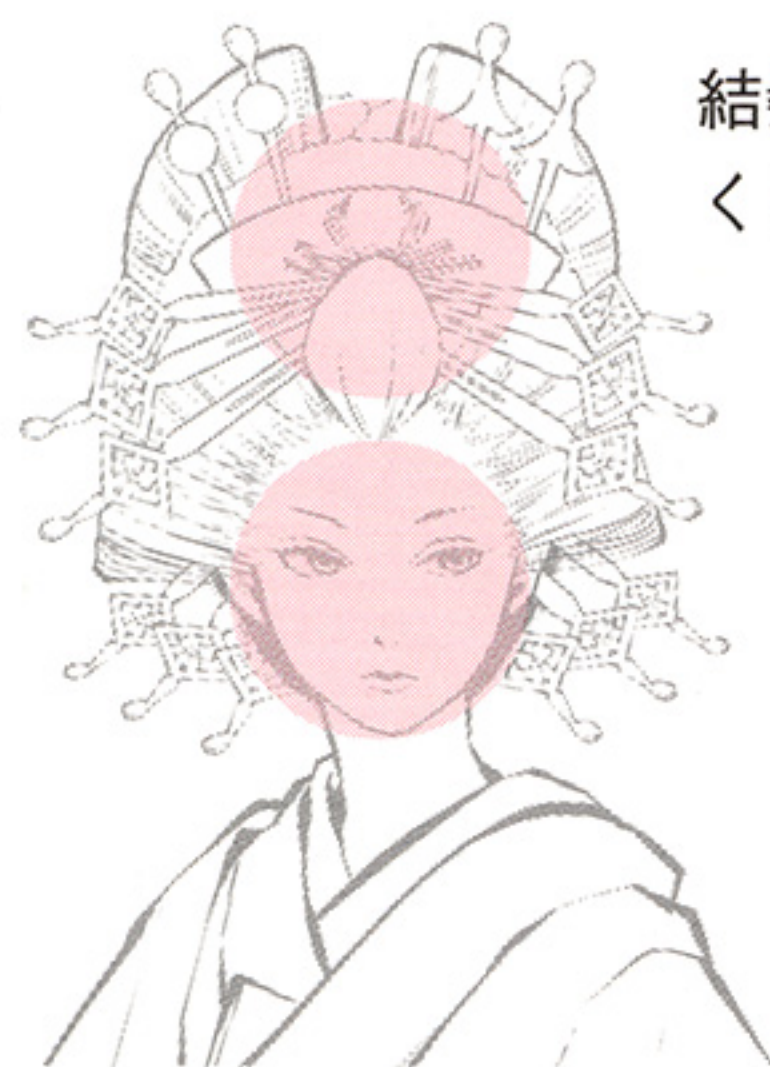
明治時代の女学生は、運動の時などに最初は男性と同じ平袴を穿いていました。
平袴は女性が着るにはかなり大きく見えてしまうため、柔らかな袴が考案されたそうです。

野良着や忍者が穿くような裁着袴（たっつけ）は布も少なく、脛に脚絆（きゃはん）を巻くのでサルエルパンツに近い感覚で描ける。

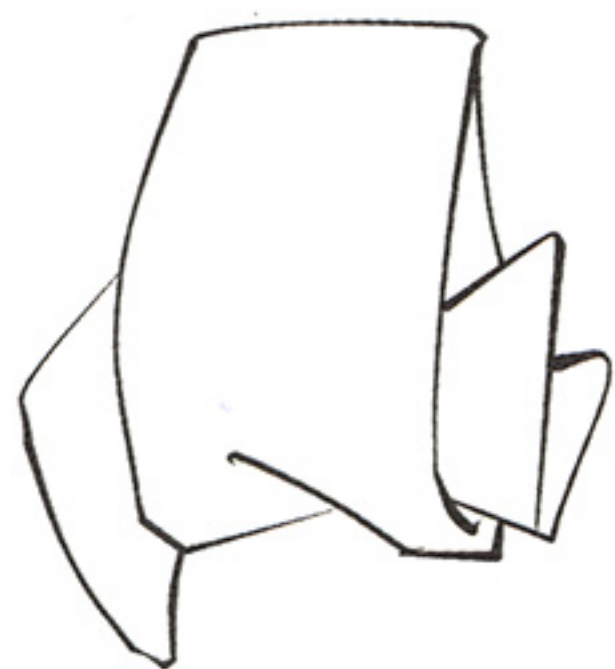
脚を広げた裁着袴の股の下は、左右の膝を繋げるように描く。

室町時代の物売りの男性などが、裁着袴の原型と思しき括り袴を穿いていた。
かなり細身でズボンに近いシルエットをしている。

17 遊女

世の中への流行の発信者であった遊女たちは、常に最先端の装いを取り入れていたため、時代や地域によりその装いは大きく異なります。浮世絵は海外などでも創作の対象にされてきたため、華美で詳細な資料も数多く残っています。

正面

結髪は顔面と同じくらい大きく。

髪型
江戸吉原の太夫で、最も豪華と思われる髪型「立兵庫」。これに更にビラ簪や花簪を付ける。絵に数多く描かれているが「兵庫」以外にも、結髪は多数あり、実際は島田系も多かった。

帯
大袈裟なくらい、大きく描くとそれらしくなる。

高雄結び
吉原で代々受け継がれてきた源氏名「高尾太夫」にちなんでこう呼んだ。

簪
放射線状に、下から挿すと吉原らしく見える。

肩は大きな三角のシルエットに。

手は帯の中に入れる。

一つ結び
結んだあと、二つ折りにして垂らしただけの結び。

帯結びは「一つ結び」「のし結び」などさまざま。

打掛け
公家や大奥、裕福な商家の婚礼衣装などに用いた。吉原では「カケ」「シカケ」などと呼び、多い時は2枚、3枚と重ねて着る。

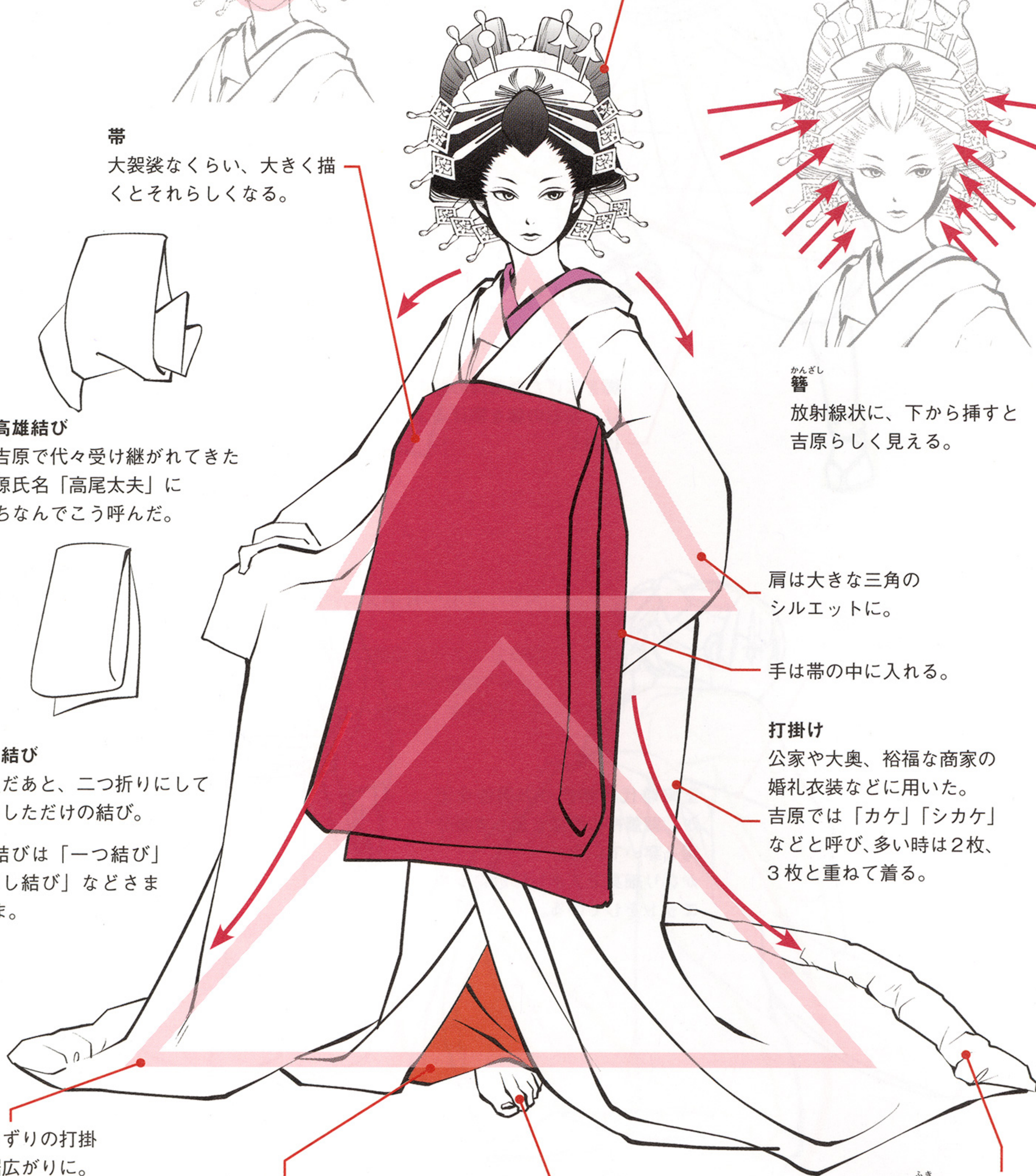
お引きずりの打掛けは裾広がりに。

緋色の蹴出し
歩く度に足もとに、ちらりと見えるのが色っぽい。

裸足
禿は足袋を履いているが、遊女になれば裸足となる。

袘
裏地を折り返して綿を入れる。

17

後ろ

衿白粉（えりおしろい）（衿化粧）
江戸時代中期の衿足を剃って白粉で生え際を描くメイク方法。
高位の遊女は白い部分を２本足にするのが特徴。
上方では、肌色の部分を数えて３本足と呼ぶ。

一般女性のうなじは真ん中に１本足。

横

衿は、緩やかに大きなカーブを意識する。

衣紋を大きく抜くので背中は帯が入っているように見えるくらい膨らむ。

背中の膨らみは三角のシルエットを意識して。

裾は扇形にひろげる。

袖口にもたっぷり厚い袘（ふき）があると豪華になる。

シワや服の動き

● 外出姿

打掛は、肩で着るため、肘を張った感じを意識して、上半身を三角形のシルエットになるように描く。

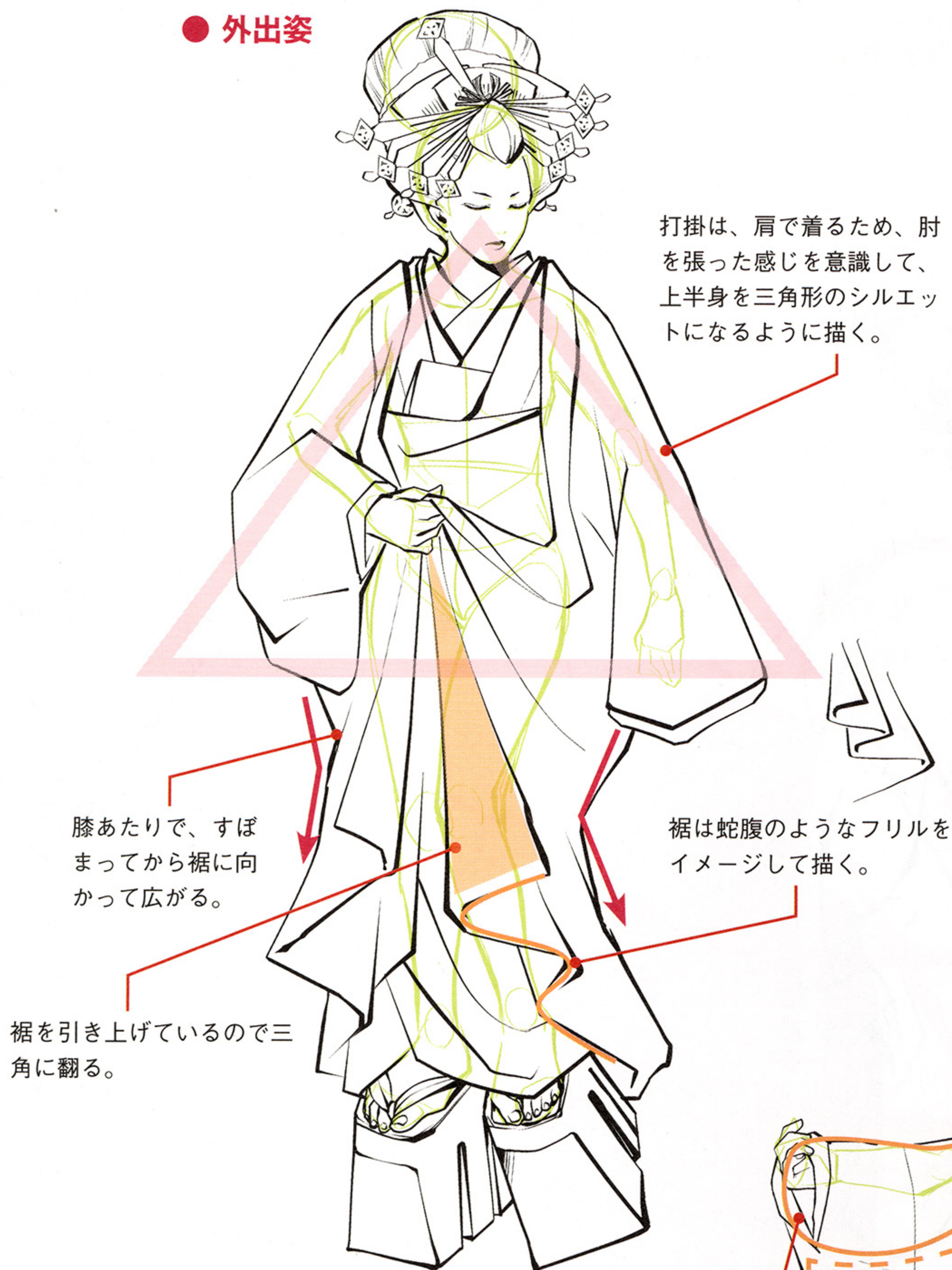
膝あたりで、すぼまってから裾に向かって広がる。

裾は蛇腹のようなフリルをイメージして描く。

裾を引き上げているので三角に翻る。

● 部屋着姿

袖は軟らかい布や、薄い生地なら、しずく型に四角い布が垂れ下がっているイメージ。

帯の右腰を頂点に、裏地が見える。漢字の「入」の文字をイメージすると、雰囲気がつかめる。

花魁道中

高位の遊女は、客の待つ「揚屋（江戸後期は「引手茶屋」）」まで、吉原のメインストリート「仲の町通り」を歩いて出向いていました。
短い道のりですが、新造、禿、男衆、など5～6人を引き連れ、着物も豪奢を競ったといいます。

振袖新造
水揚げ前の若い見習い。
まだ客をとっていない。

禿
遊郭で遊女が産んだか、幼いうちに売られた子の中から特に素質のよい子だけが姉女郎に付く。

花魁

遣り手婆
（香車、花車とも）
場合によって同行する。

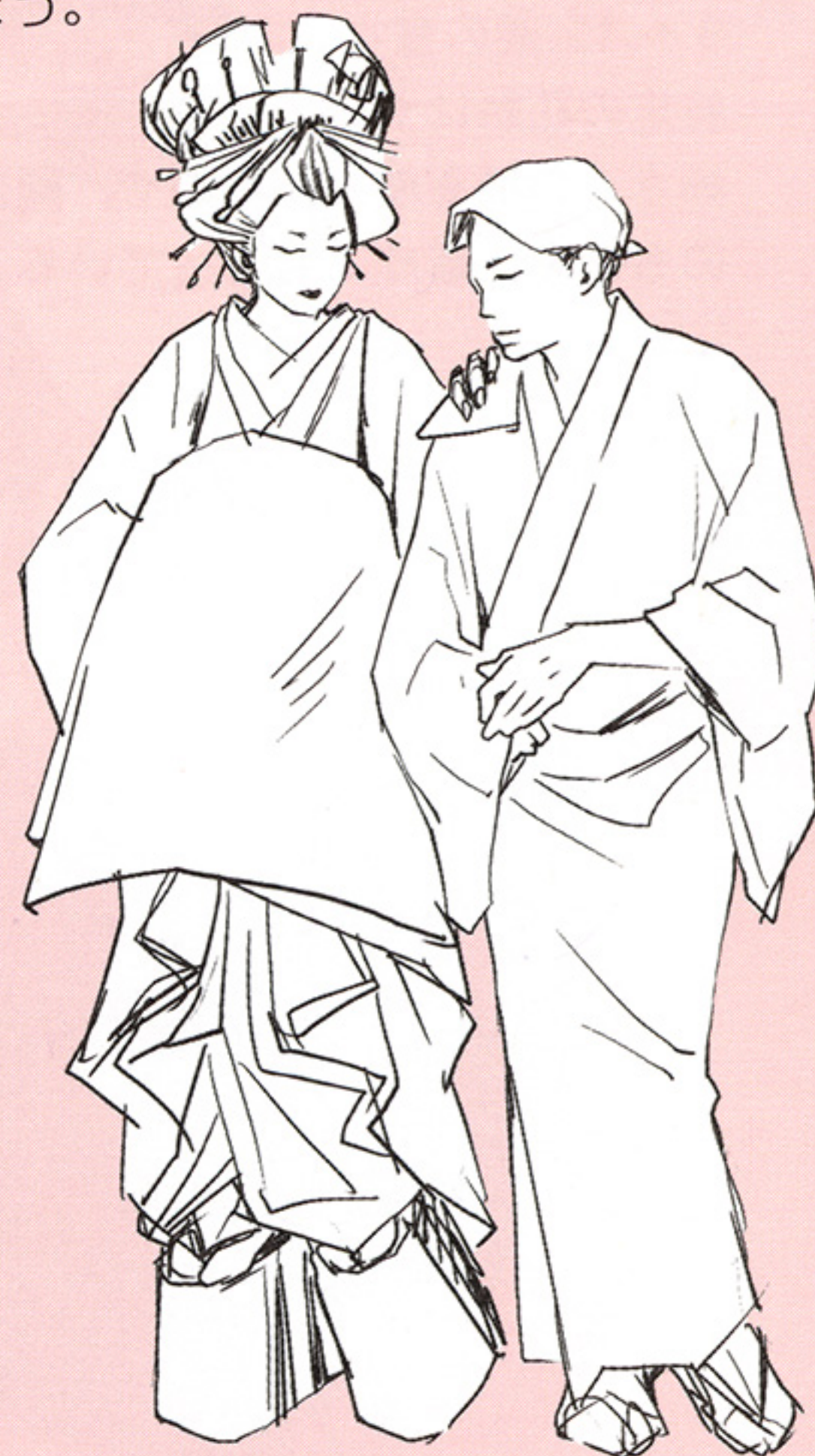
番頭新造
年季明けの元遊女など、年配の女が、遊女の世話をする。
関西では「引舟」と呼ばれる。

帯の下では、長い裾を持っている。
これは遊女の打掛も、新造の振袖も、みんな同様。
帯で見えなくても持っていることを意識する。

幕末ごろには、八寸近い高下駄を履くようになる。

ONE POINT

男衆の肩を借りて歩く花魁

「高下駄の花魁が男衆の肩を借りて歩く姿」は、現在も歌舞伎やお祭りなどの花魁道中で、定番的に行われていますが、史実では大正期のみの姿と考えられています。史実に即したリアルなものを描きたいのか、シンボル的な姿を描きたいのか、あらかじめ決めたうえで、資料を探すと良いでしょう。

遊女の描き分け

江戸時代後期、吉原の道中を例に挙げています。
時代や地域、外出着か内着かなどで違いがあります。

花魁（おいらん）

時代によって階級と呼称は細かく違い、最高位の「太夫」が江戸中期に消滅して以降、上位遊女をまとめて「花魁」と呼ぶようになった。

髪型
櫛（くし）は１～３枚。
簪（かんざし）は最多で、前８本、後８本の計 16 本。
耳かき簪には自分の定紋や花を入れたものなど。

打掛
綸繻子・羅紗・ビロード・金襴・錦・緞子などの豪華絢爛な、ふきのある打掛を羽織る。

高下駄
黒塗りに畳表の下駄。
浮世絵では三枚歯の下駄が見られる。
高さが八寸（約 24cm）もあるものもあった。

振袖新造（ふりそでしんぞう）

15、16 歳までの少女。

髪型
花魁よりも簪の本数などが控えめ。

帯は少し細めで、ちょうちょ結びなど。

打掛はまだ羽織れないので、染め模様の華やかな振袖姿。

下駄
花魁よりも低めのものを、履いていた。

禿（かむろ）

8～12 歳の童女。
特定の花魁についている。
姉さんの紋を使ったものや、関連したデザインのものを、着せてもらっている。

禿島田
あふれるほどの簪が特徴。

広袖（ひろそで）
袖口を作るようにリボンを付け豇豆（ささげ）という五色の紐をヒラヒラ下げている。

帯
黒のビロードなど。

花魁の打掛とお揃い、もしくは関連がある柄。

ぽっくり
歯のある下駄をはいた浮世絵もある。

立兵庫の描き方

1

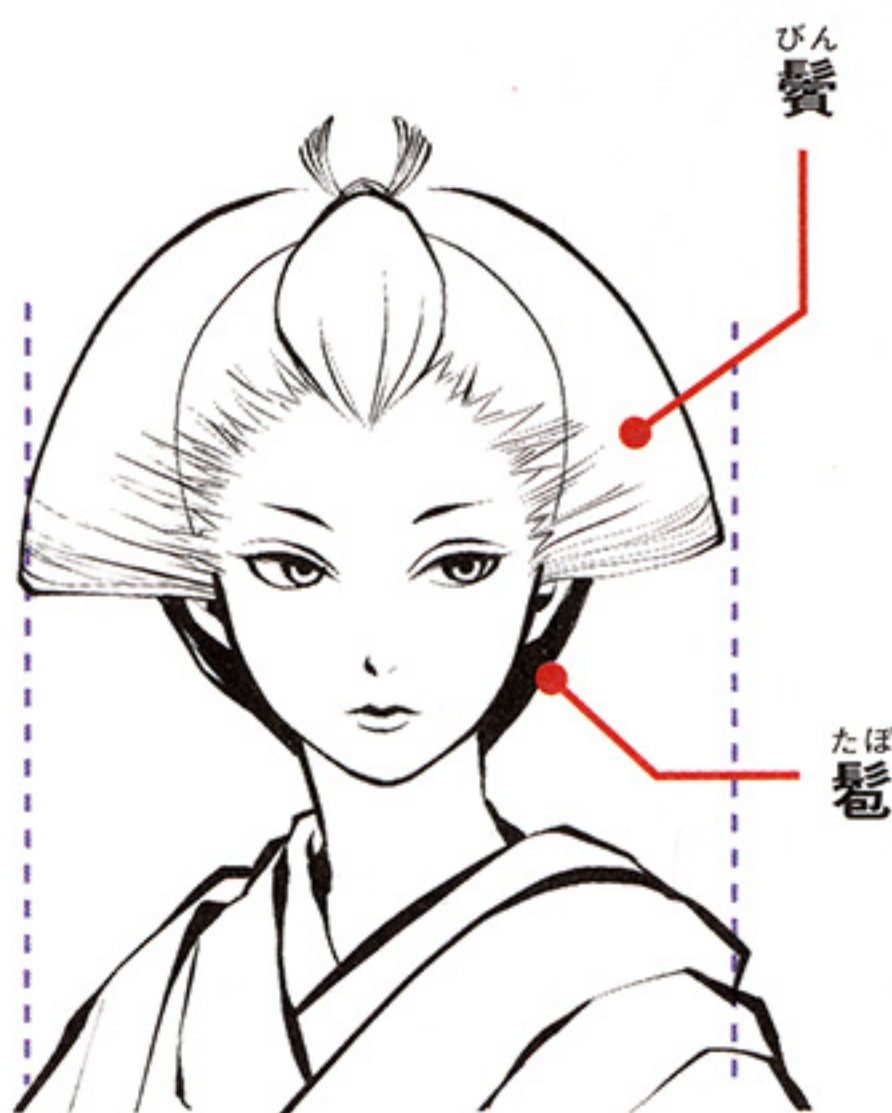
スキンヘッドに、前髪を描く。

2

肩幅と同じくらいに鬢を描き首の上に髱を描く。
正面なら髱はなくても良い。

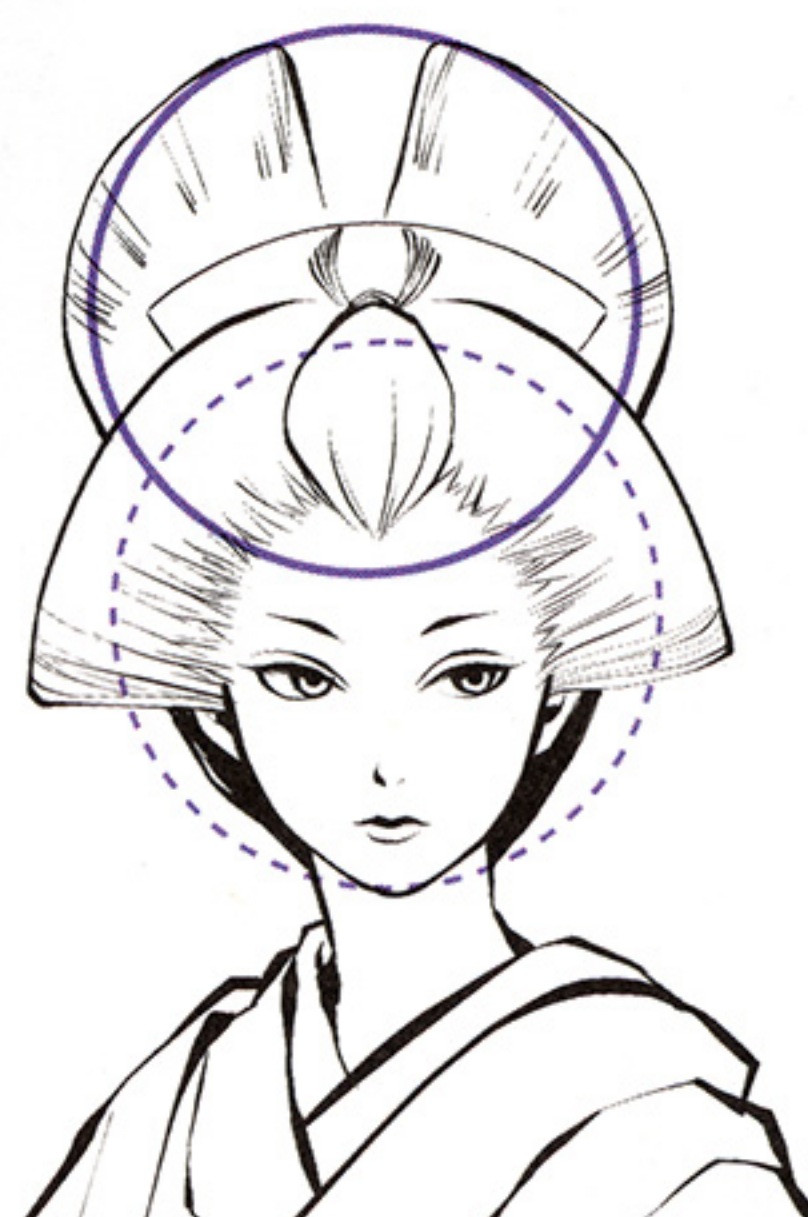
鬢

髱

3

髷は、顔面か頭部と同じくらいの円を描き、真ん中で左右に割る。その手前に、大きめに櫛を描く。

4

櫛の奥に「鹿の子」を２本仕上げに簪をたくさん挿す。

鹿の子

基本は、前髪に「耳かき簪」を左右に２～４本、後ろにも左右２～４本、頭頂に赤玉２本、耳かき２本など。

● アレンジ色々

時代、地域、カツラか否かなど、条件によってフォルムはさまざま。

歌麿期タイプ

髷：とがる

鬢：出っ張る

髱：ない

現代のイベントで見るかつらタイプ

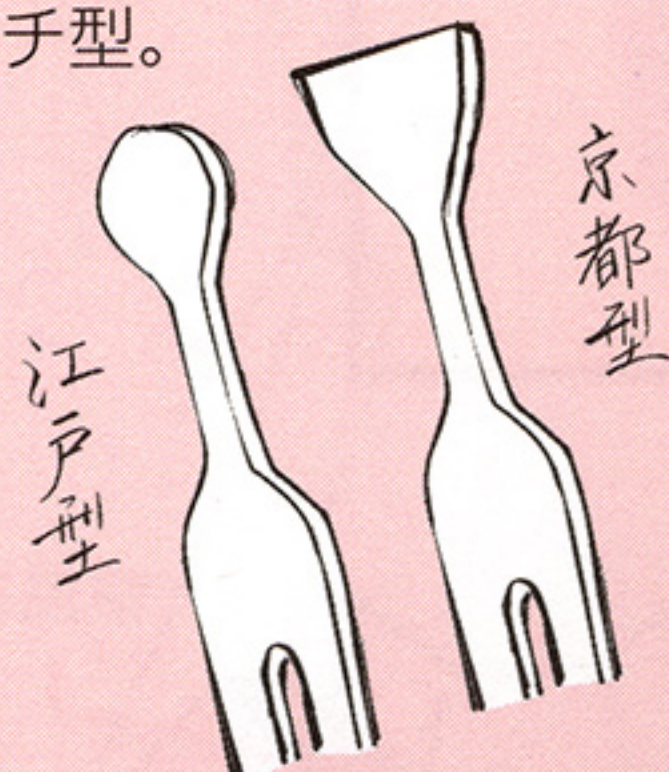
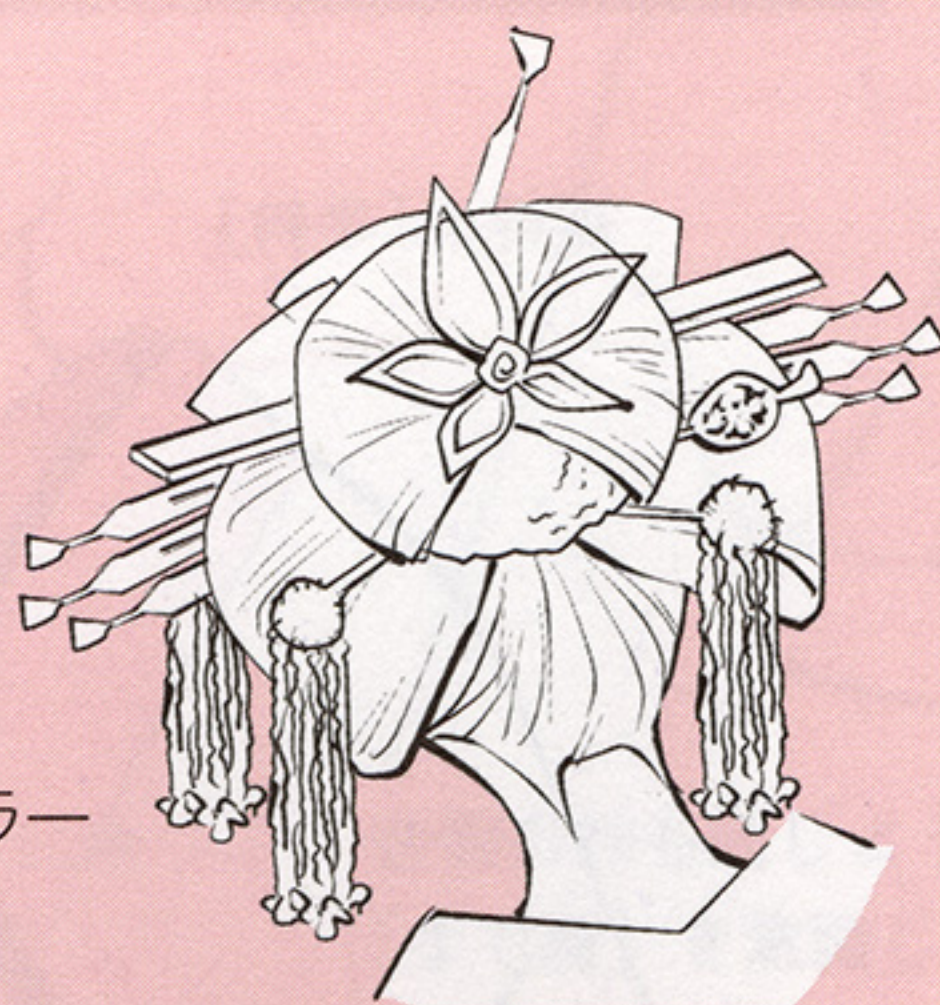
髷：小さい

鬢：縦に細長い（耳が見えない）

髱：縦に長い（幕末型）

ONE POINT

島原（京都）の遊女

江戸時代の三大公許遊郭は、京（島原）、大阪（新町）、江戸（吉原）があり、名称、営業スタイルは全く違いました。
遊女の格、化粧、着るもの、簪、すべて違いますが、創作やドラマでは混同しているものも多々あります。

簪は真横（水平）に挿すのが京阪風。
「霞にさす」という。

ビラビラ簪
ビーズ状の珊瑚がたくさんついた簪。

耳かき簪
島原はバチ型。

江戸型

京都型

島原結び
「心」の字の形をしているという結び方。

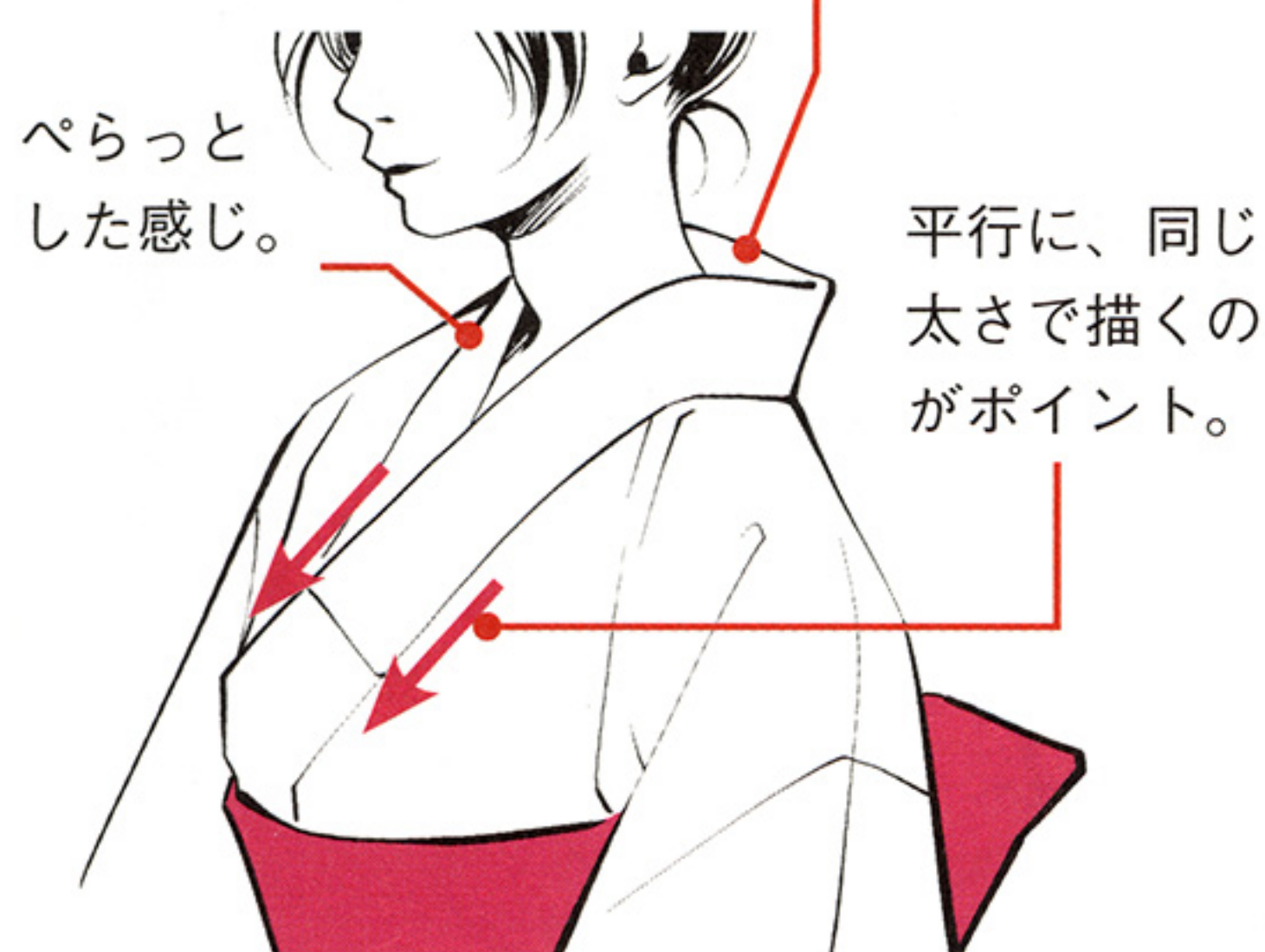
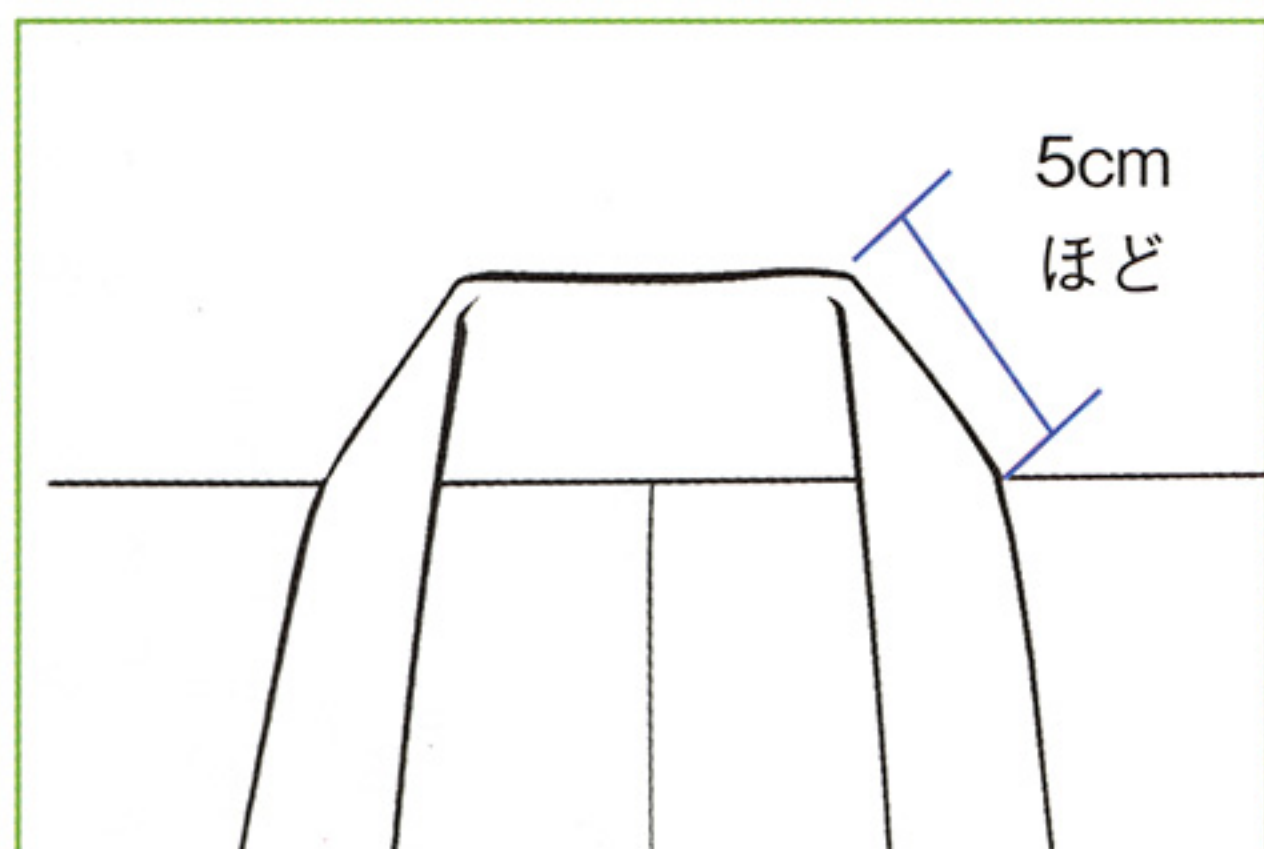
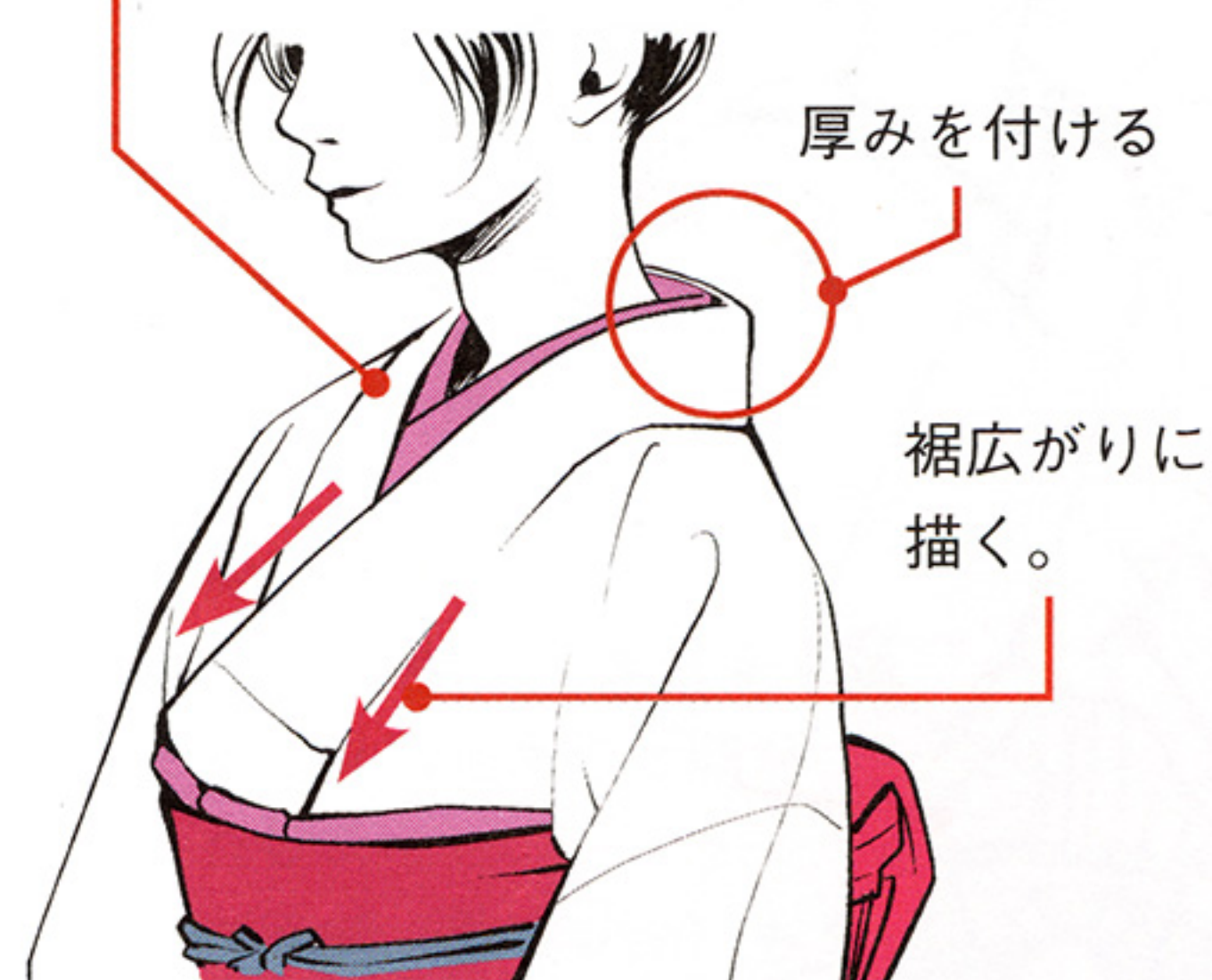
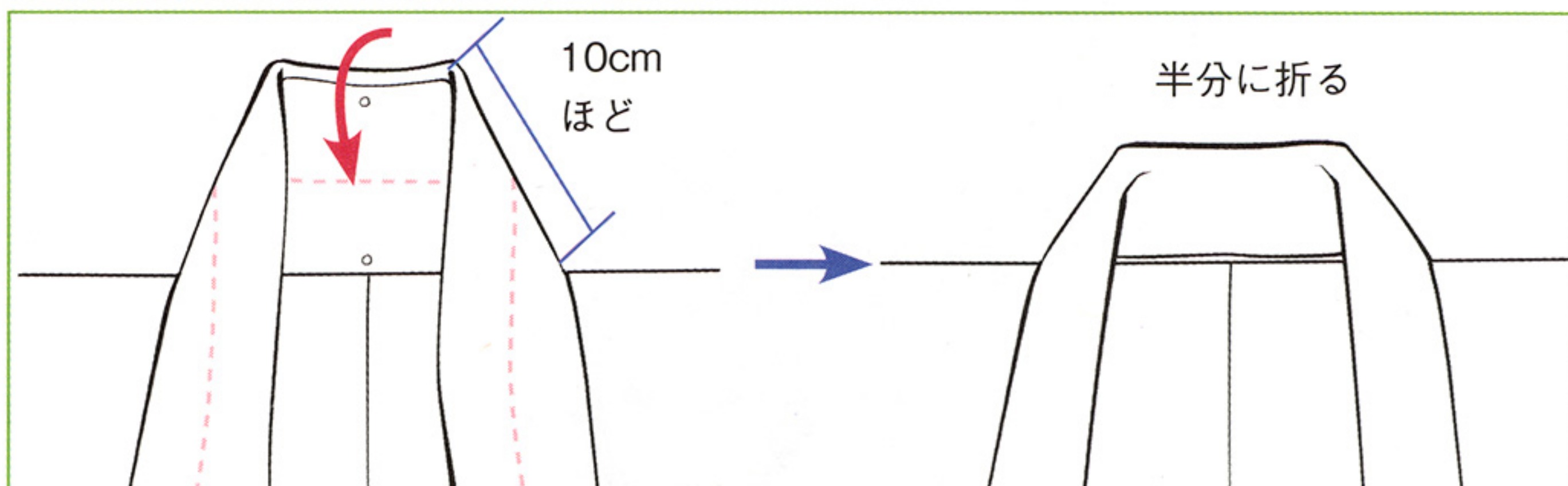
お初
島原で、最もポピュラーな髪型。

18 衿の描き方

着物の着付けの時、「衿を抜く」という言葉を耳にします。古くは男性も女性も衿を抜いて着ることはありありませんでした。時代と共に髪型が変わり、髪型の変化に合わせるように衿の「抜き」が始まりました。

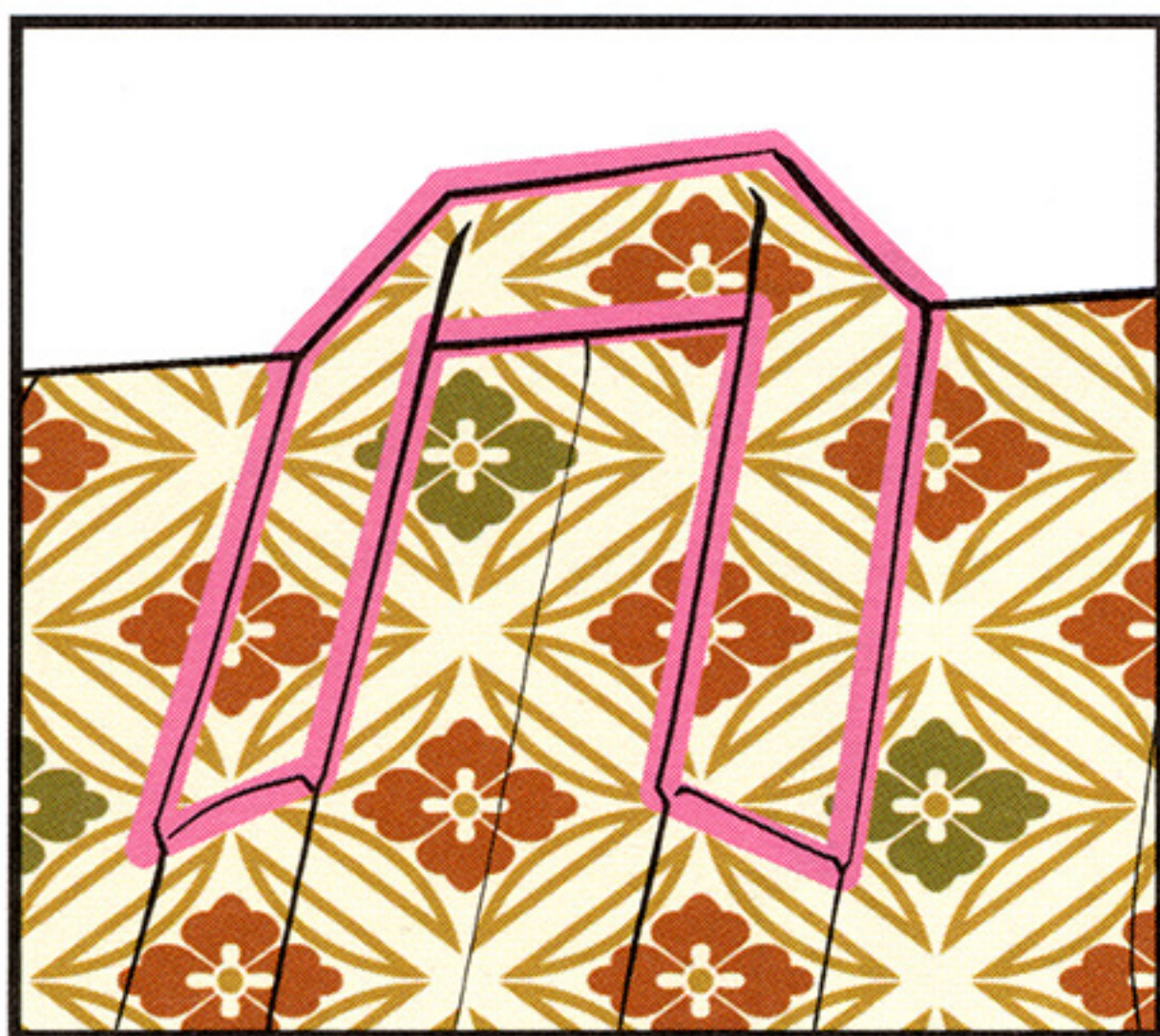
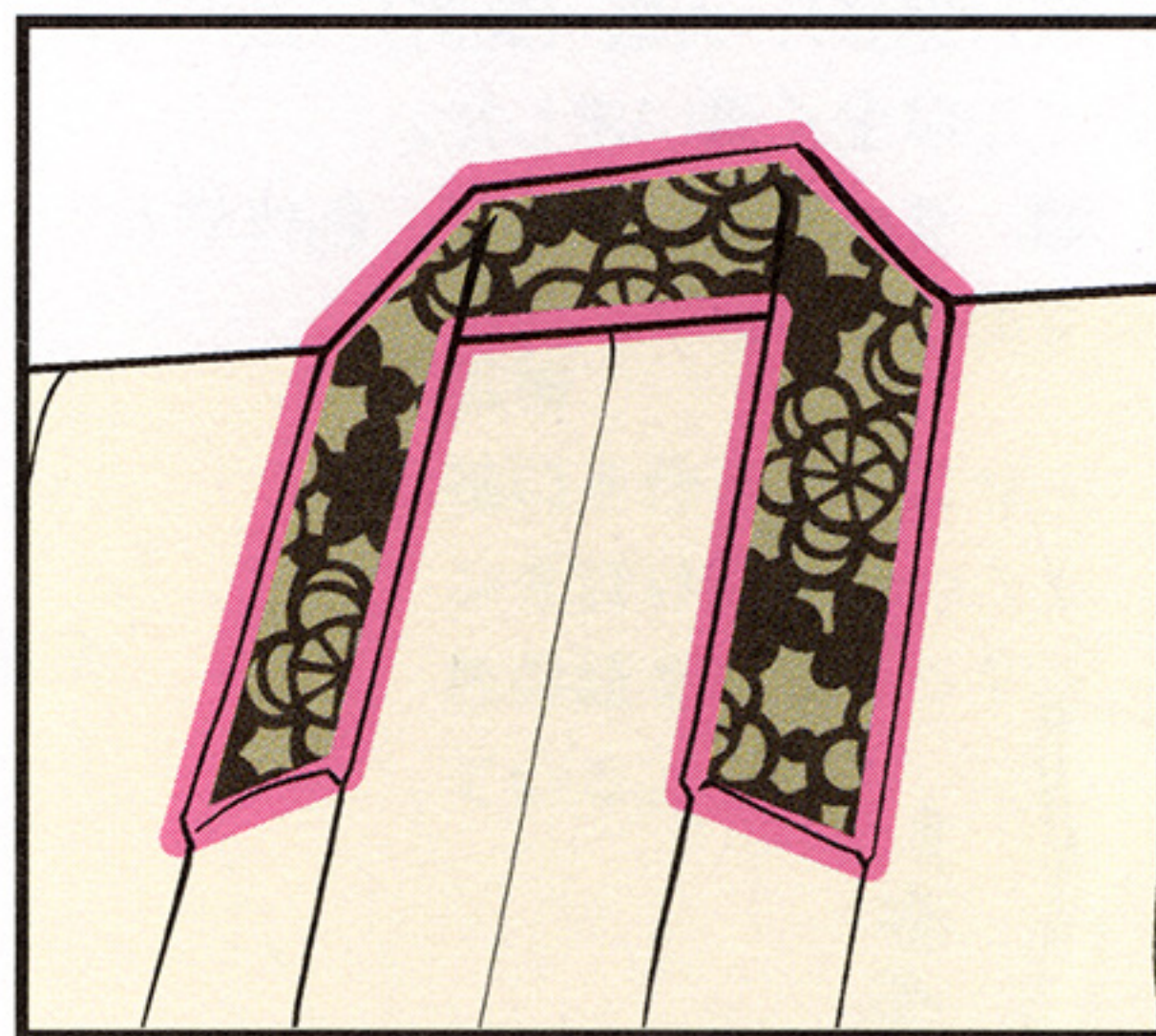
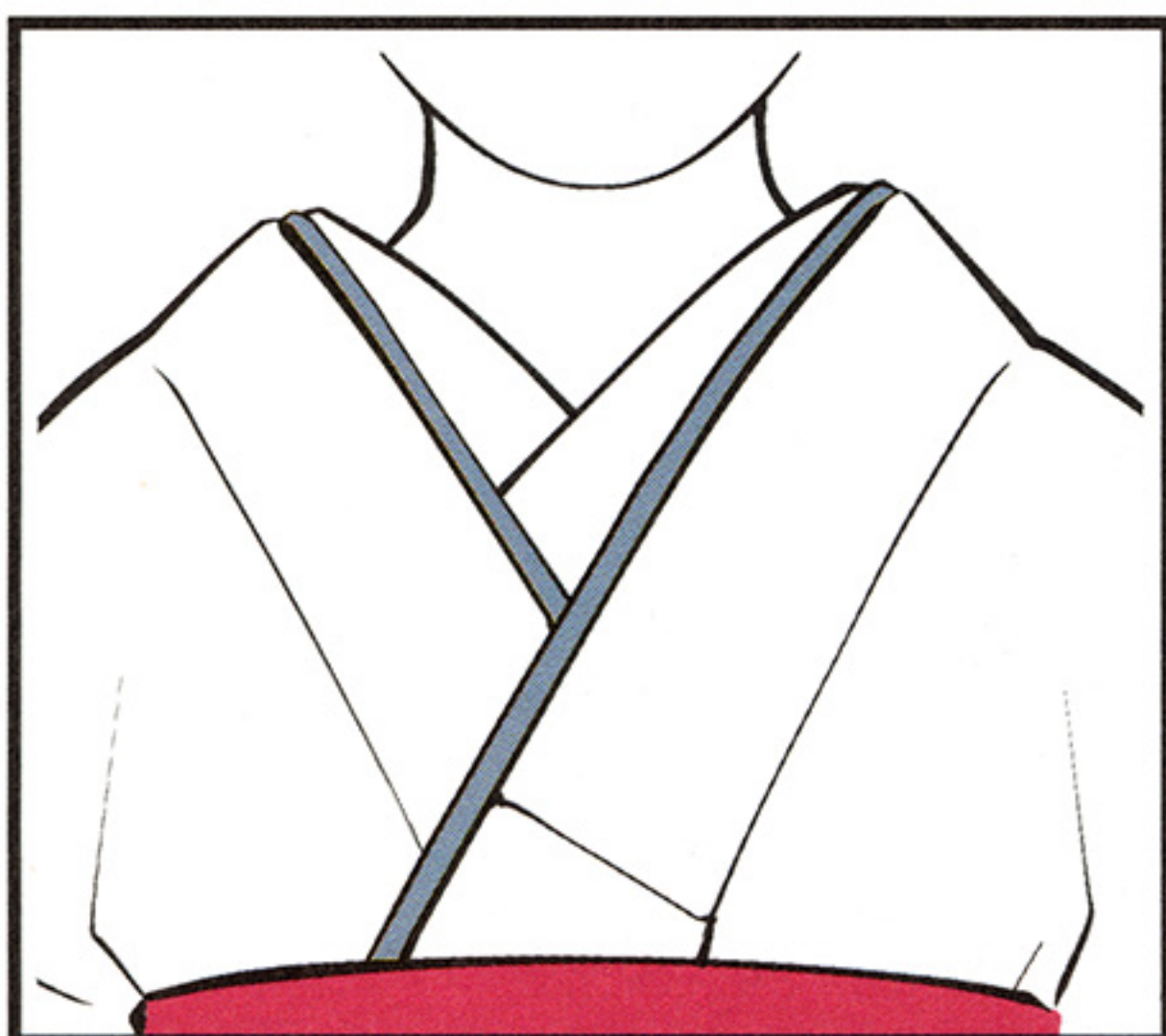
衿の仕立て

衿幅には大きく分けて「棒衿（ぼうえり）」「広衿（ひろえり）」があります。
着用時の姿に大差はありませんが、知っておくと絵にリアリティがでます。

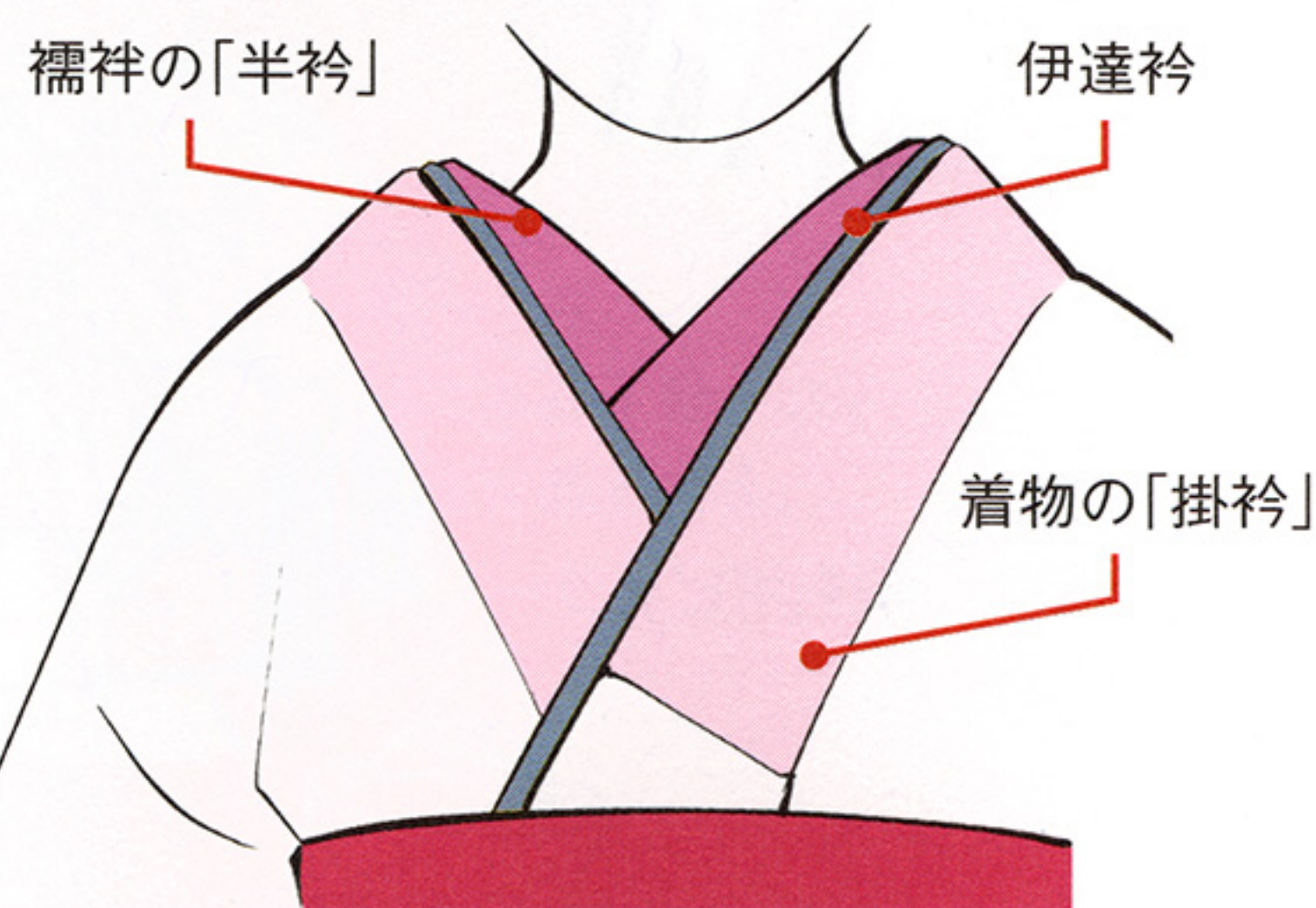
5cm ほど
10cm ほど
半分に折る
ぺらっとした感じ。
平行に、同じ太さで描くのがポイント。
厚みを付ける
裾広がりに描く。

棒衿
初めから 5cm ほどの幅に仕立ててあり、そのまま着られる。襦袢、ゆかた、日常着、子供、男性などはこの仕立て。

広衿
裏地がついた衿で、10cm ほどの幅で仕立てられており、二つ折りにして着用する。現在の女性用の着物は「広衿」または「バチ衿」が多い。

ONE POINT

バチ衿
広衿と同様に二つ折りで着用するが、バチ衿は、最初から縫いとめられています。
衿先になるにつれ、少しずつ広がるように仕立ててあり、形が三味線のバチに似ていることから、その名がついたといわれます。

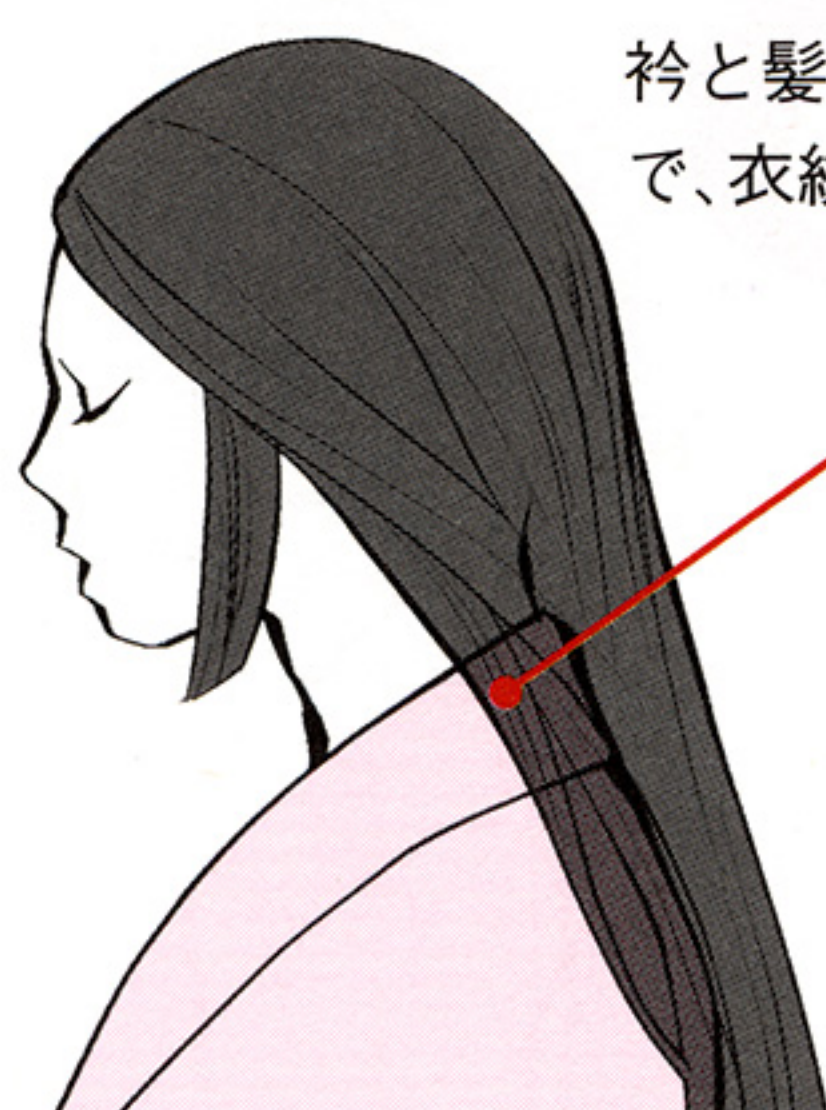
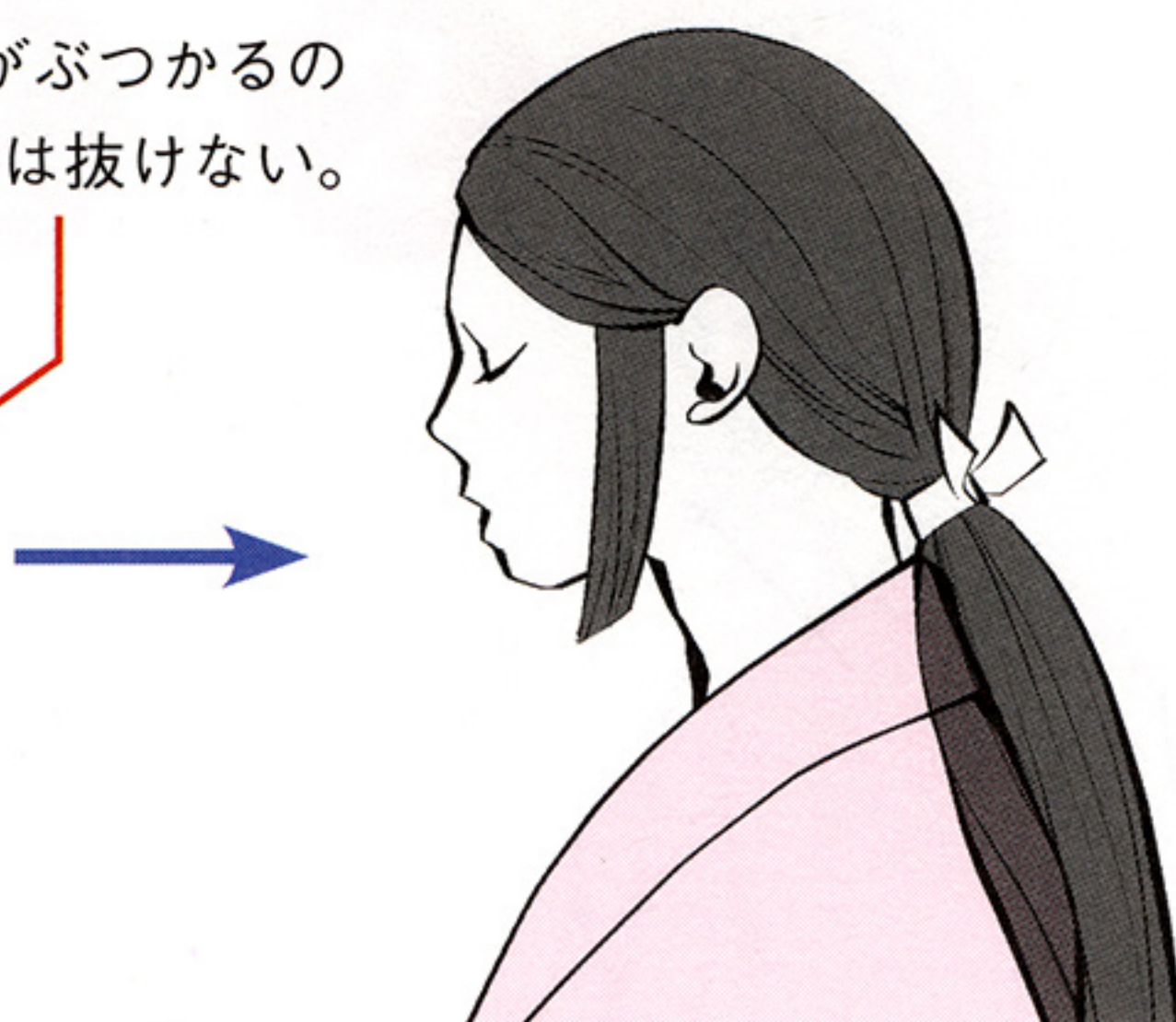
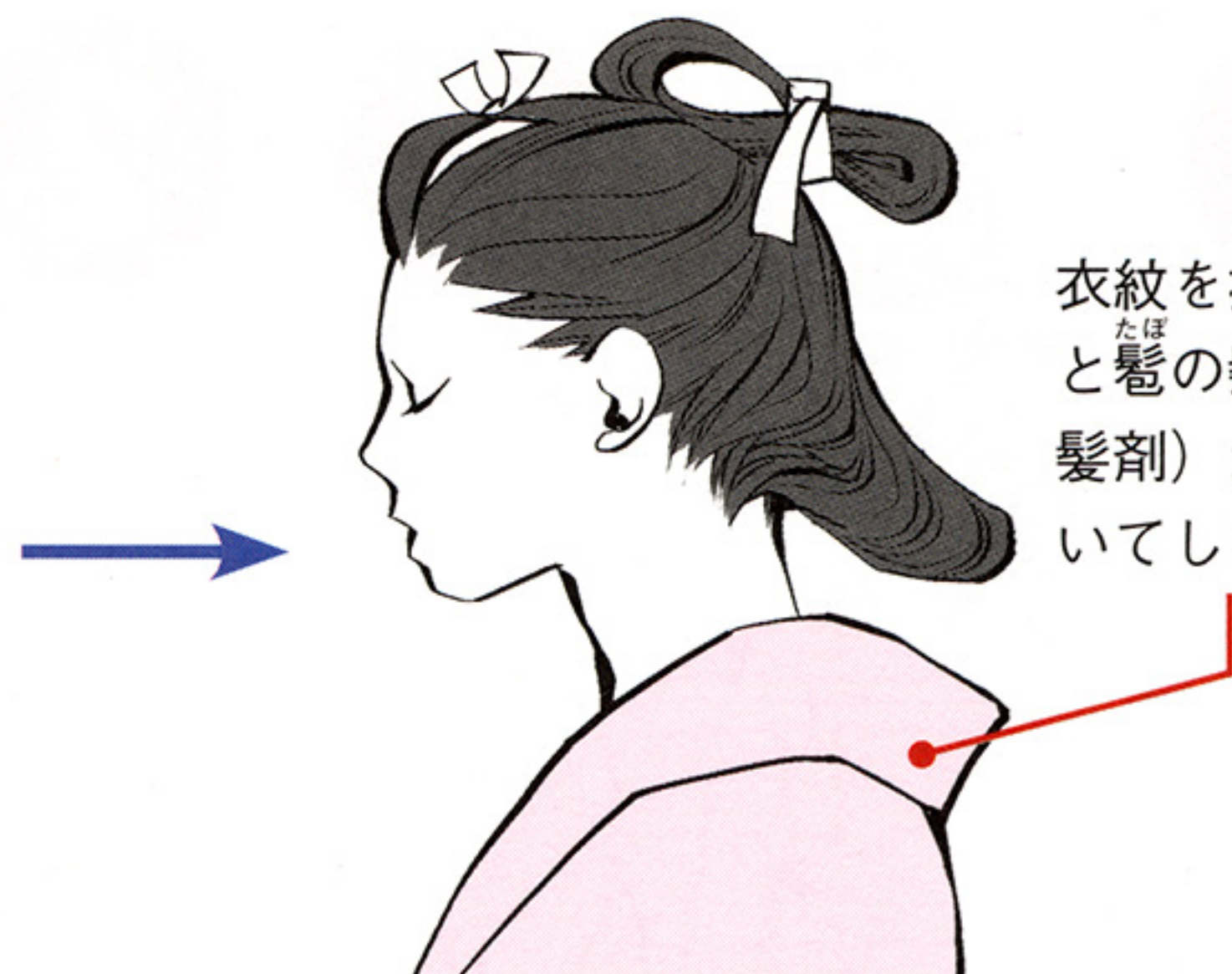
衿の種類

掛衿（かけえり）
衿の汚れ・破損を防ぐため、衿にもう一枚布を重ねて縫い付けるもの。
現代の掛衿は、着物と同じ布を使用するのが一般的。

半衿（はんえり）
襦袢の、衿の汚れを防ぐため重ねて縫い付ける。「掛衿」と違い、頻繁に交換・洗濯して、さまざまな色柄を楽しむ。

伊達衿（だてえり）
重ね着風に見せるため、上衣の衿の内側に付ける「衿だけ」の飾り衿。
上衣の衿に沿うので、あわせを描く時は注意。

襦袢の「半衿」
伊達衿
着物の「掛衿」

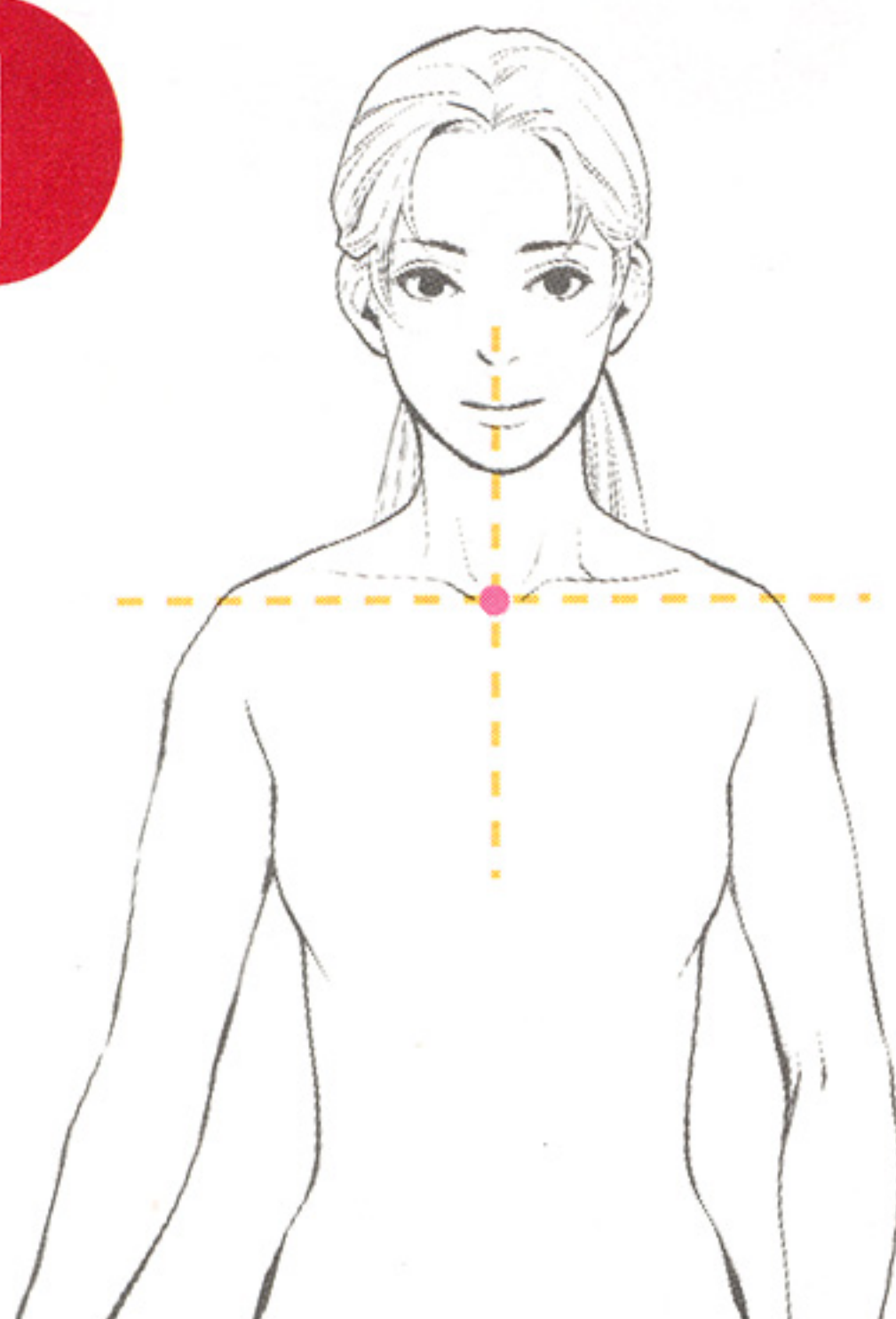
18

衣紋を抜く

江戸時代初期の一般女性は、髪を下ろしていました。衿は首に沿わせて着ていて、衣紋をわざわざ抜く風習はまだありません。江戸時代中期になり、髪を結上げる結髪が発達しはじめると、女性たちの間で「衣紋を抜く」という着こなしが生まれました。

衿と髪がぶつかるので、衣紋は抜けない。

衣紋を抜かないと髱（たぼ）の髪油（整髪剤）が衿についてしまう。

平安時代などの大垂髪

戦国時代までの元結掛けの垂髪

江戸中期ごろの結髪

衣紋を抜かない描き方

江戸時代初期以前を意識した、衣紋を抜かない描き方を紹介します。

1
肩の高さと体の正中線の交差するところ（大抵は鎖骨の窪みあたり）に点をとる。

2
首と輪郭の交点あたりまで、首に沿わせて小文字の「y」を描く。
これが下着（襦袢）の線になる。

3
帯の位置を決める。
帯の右腰に、衿先の終着点を決める。

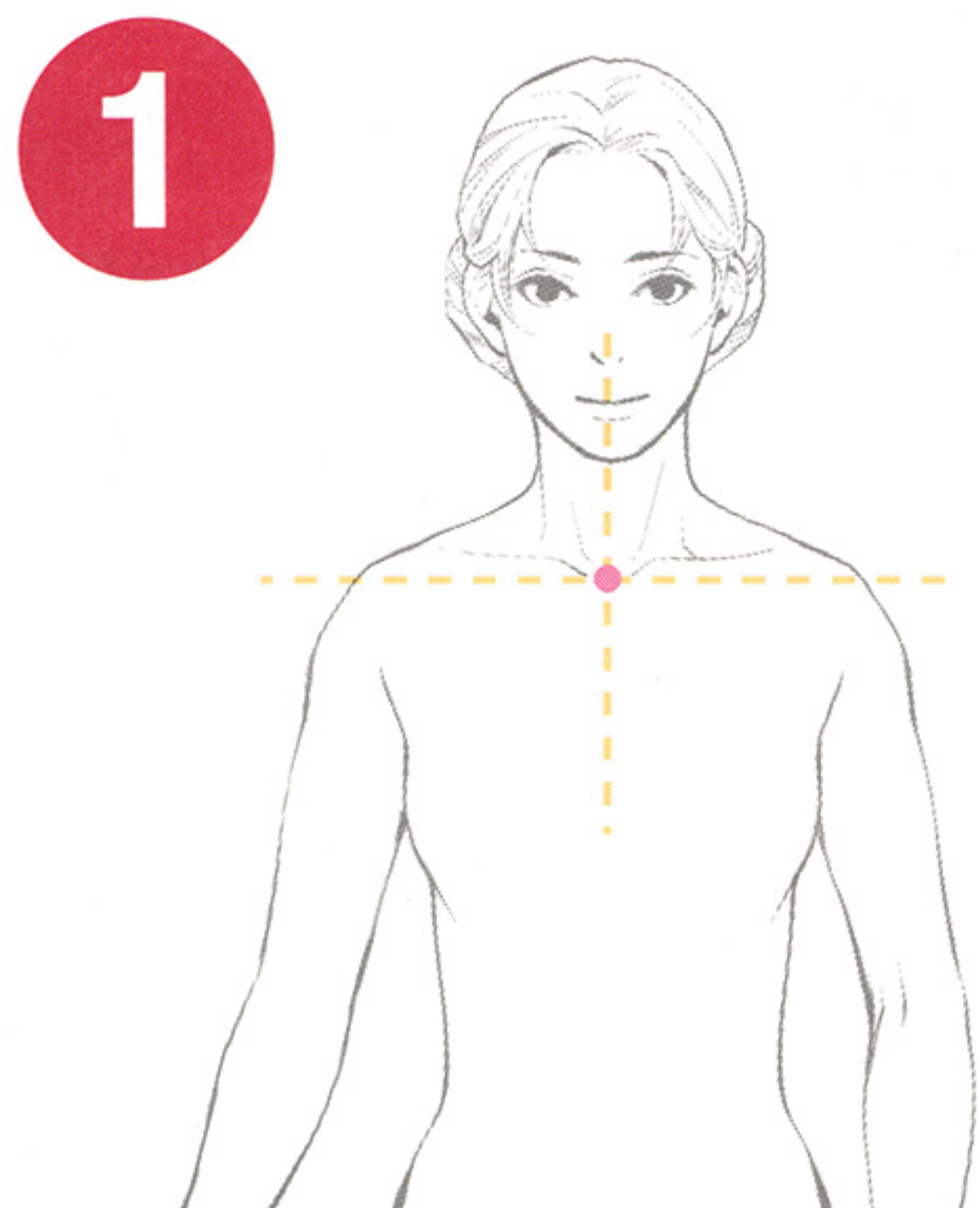
4
右腰の点と、首の付け根を結ぶようにゆるやかなカーブで着物の衿を描く。

5
逆側の衿も同じように。
「なで肩」を意識し、袖などを描く。

6
不要な線を消して完成。

衣紋を抜いた描き方

江戸時代中期以降の、衣紋を抜いた描き方です。
現在の着物も、衣紋を抜いて着ます。

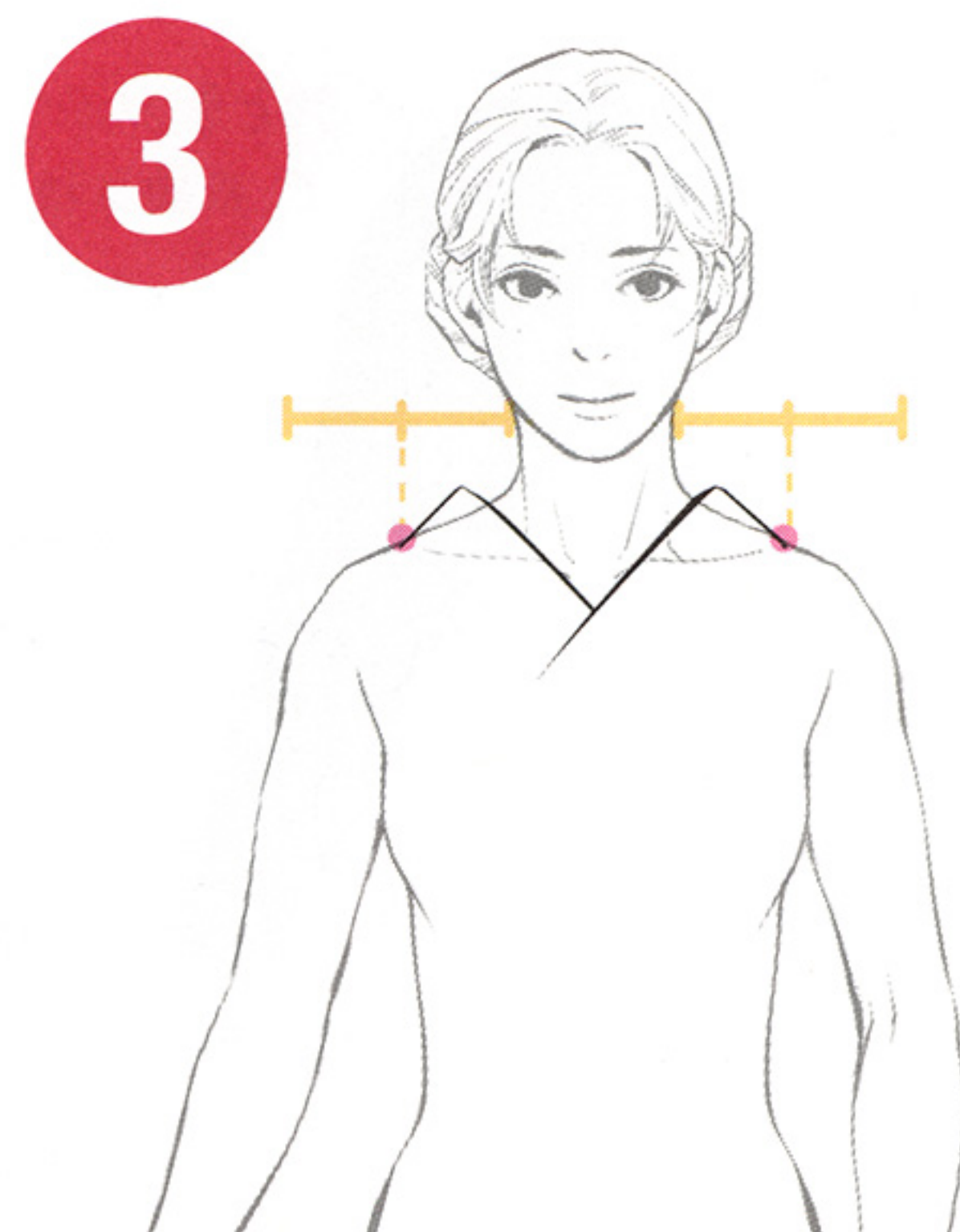
1

肩の高さと体の正中線の交差するところ（鎖骨の窪みあたり）に点をとる。

2

あごの輪郭と同じ角度を意識して、「y」を描く。これが襦袢の線になる。

3

肩の中程に、衿の線を斜めにいれる。

4

同じ点から襦袢も着物も衿が始まる

帯を描き、右腰に衿先の終着点を決める。襦袢の点から、衿先の終着点をゆるやかなカーブで描く。

5

NG

これは衣紋を抜いていない時の見え方

逆側も同様に描き込む。
衿から肩を、あまり角度を変えずスムーズに描くと、自然になります。

6

不要な線を消して完成。

● 衣紋の抜き方色々

指2～3本

一般人は、指2～3本くらいが上品。
抜きすぎるとはしたないイメージに。

指3～4本

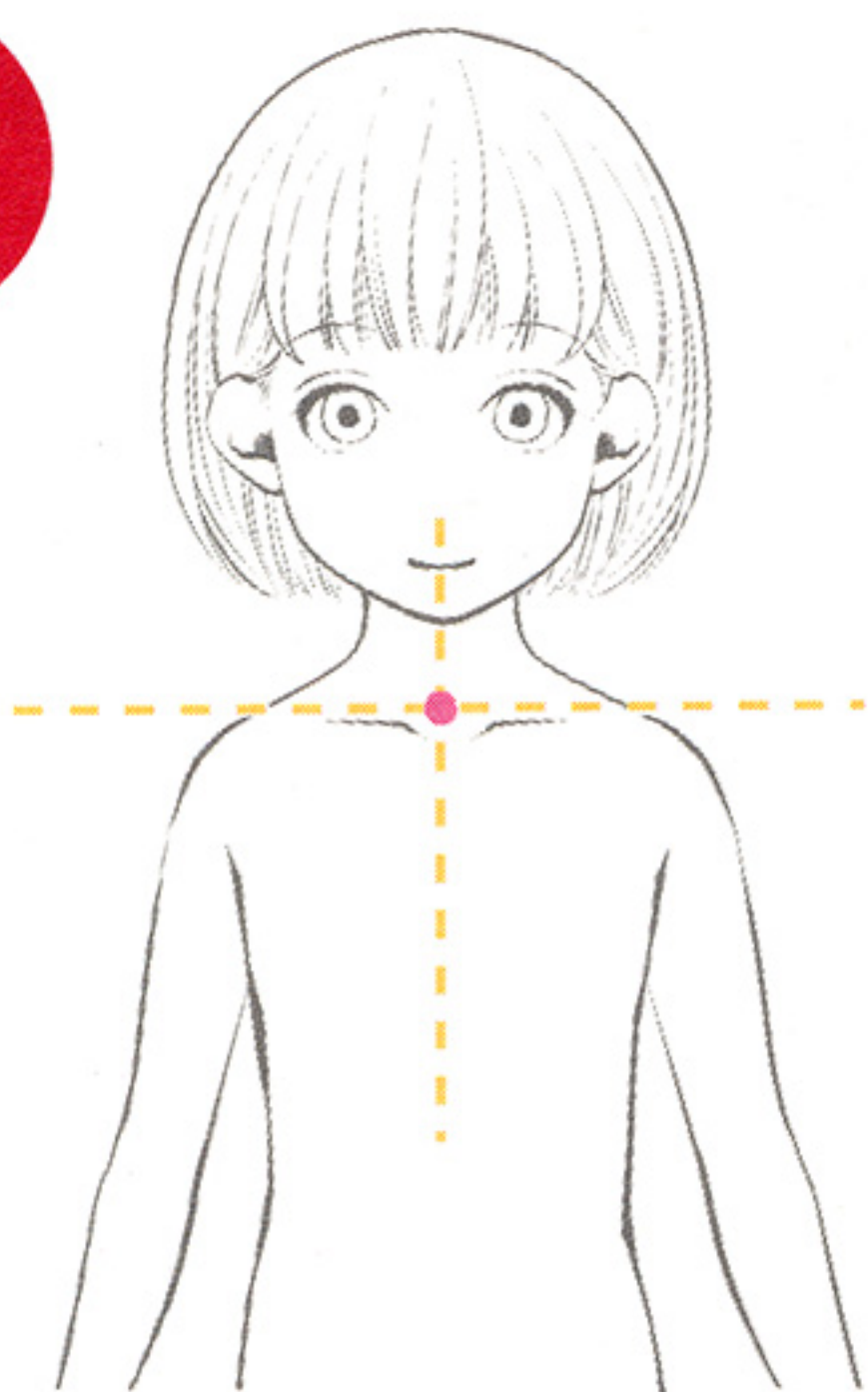
花嫁衣装など、晴着は大きめに衣紋を抜く事が多い。
色っぽさを表現する時は、効果的。

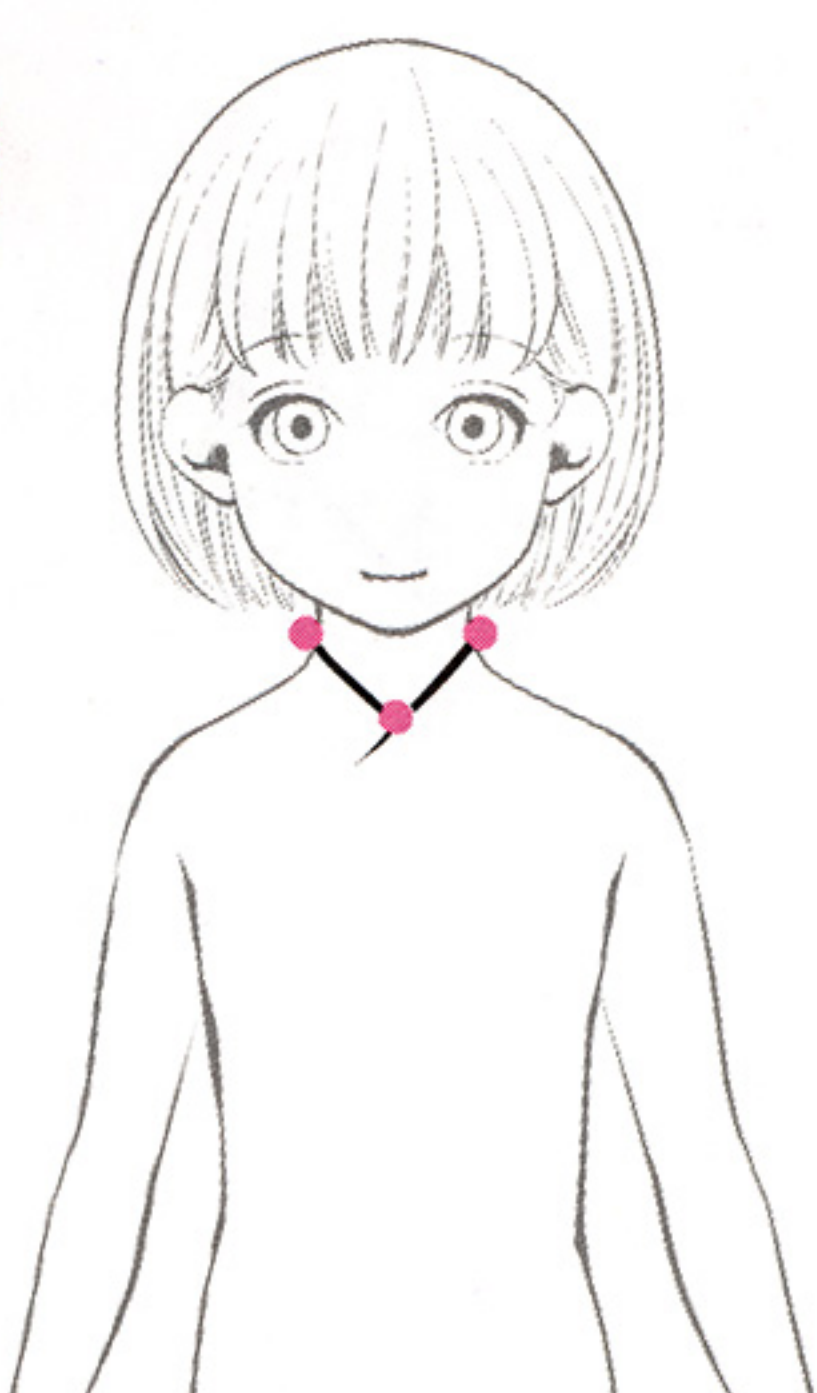
● 後ろ姿

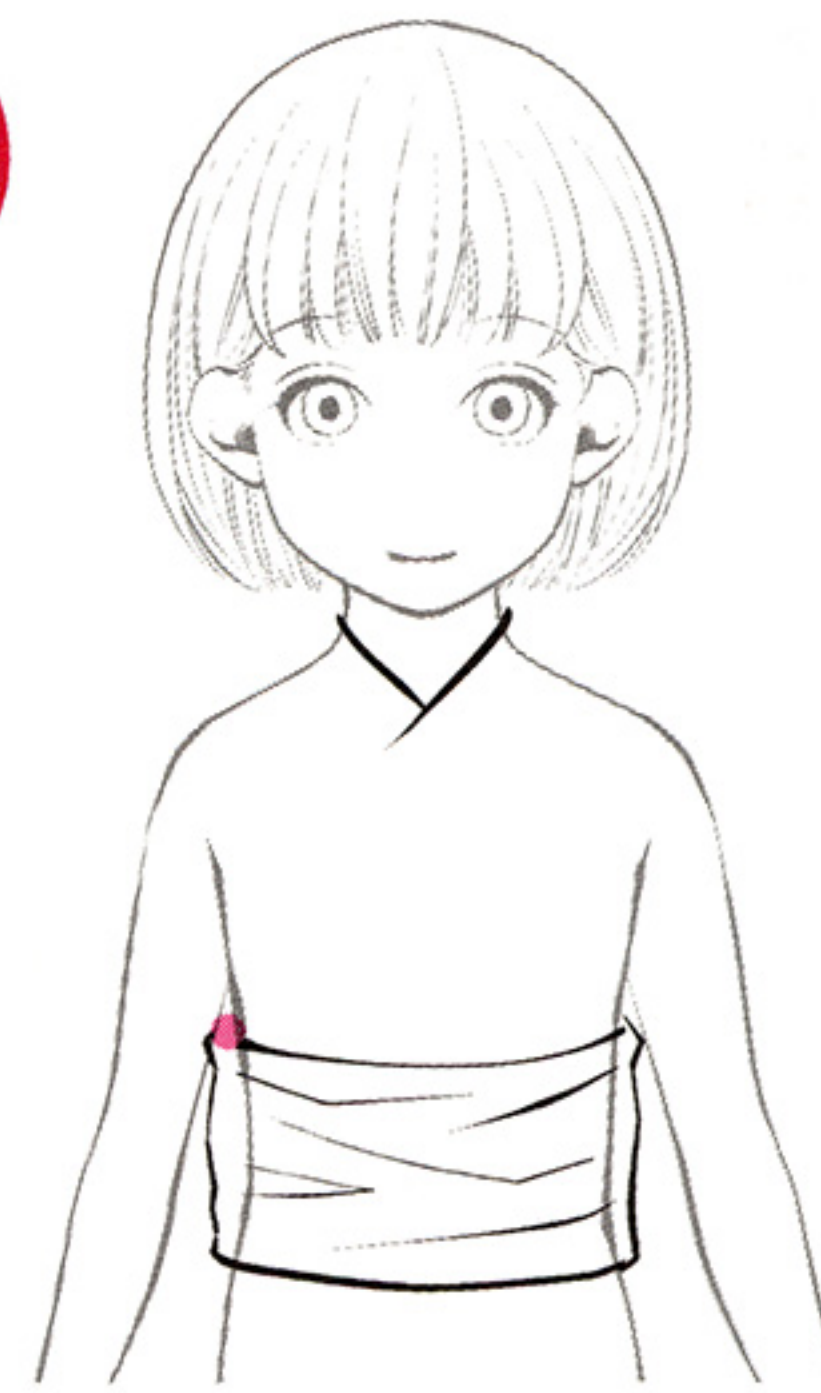
現代では、後ろ姿の衿から襦袢（半衿）が見えるのを忌避する傾向にある。

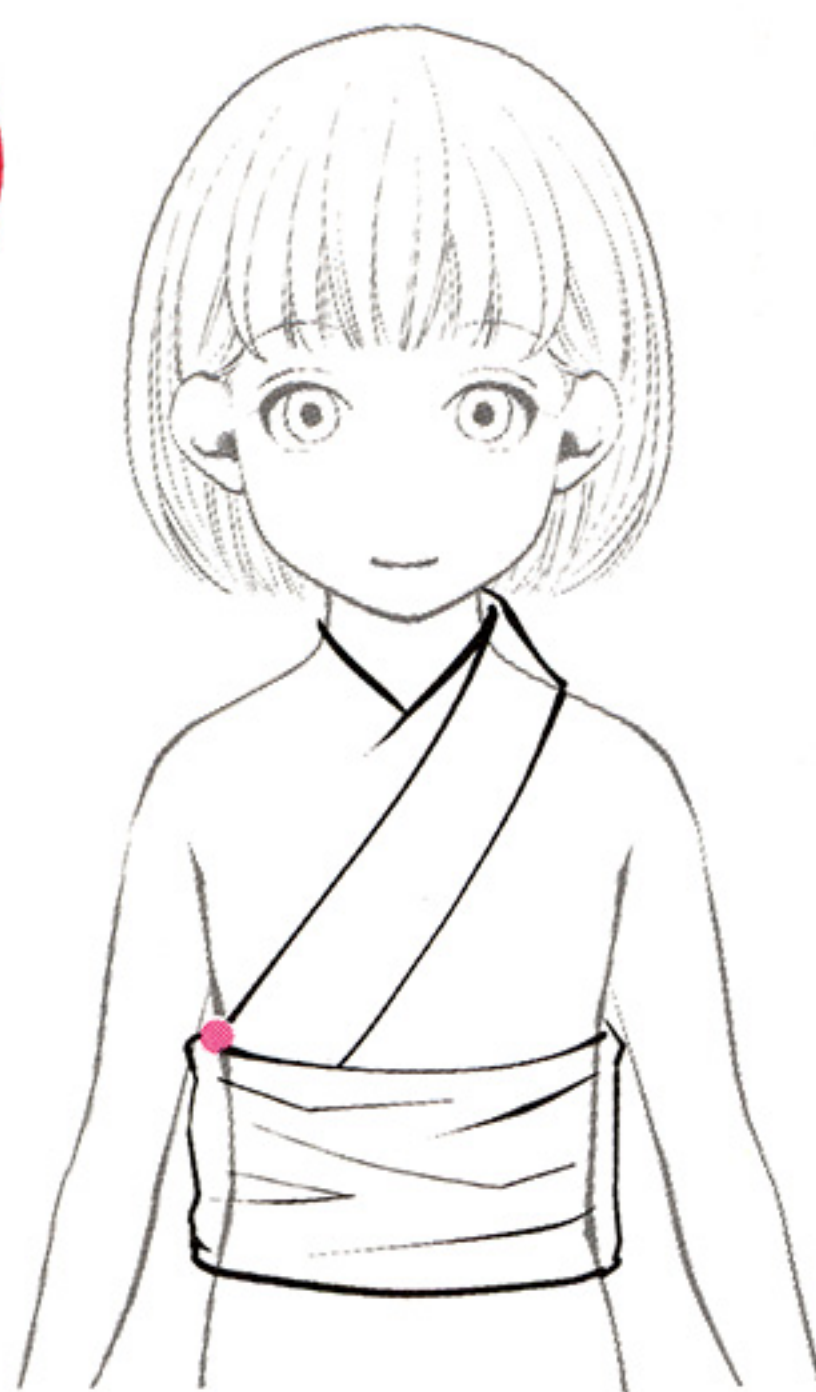
それまでは、わりとおおらかに襦袢の半衿を見せていた。

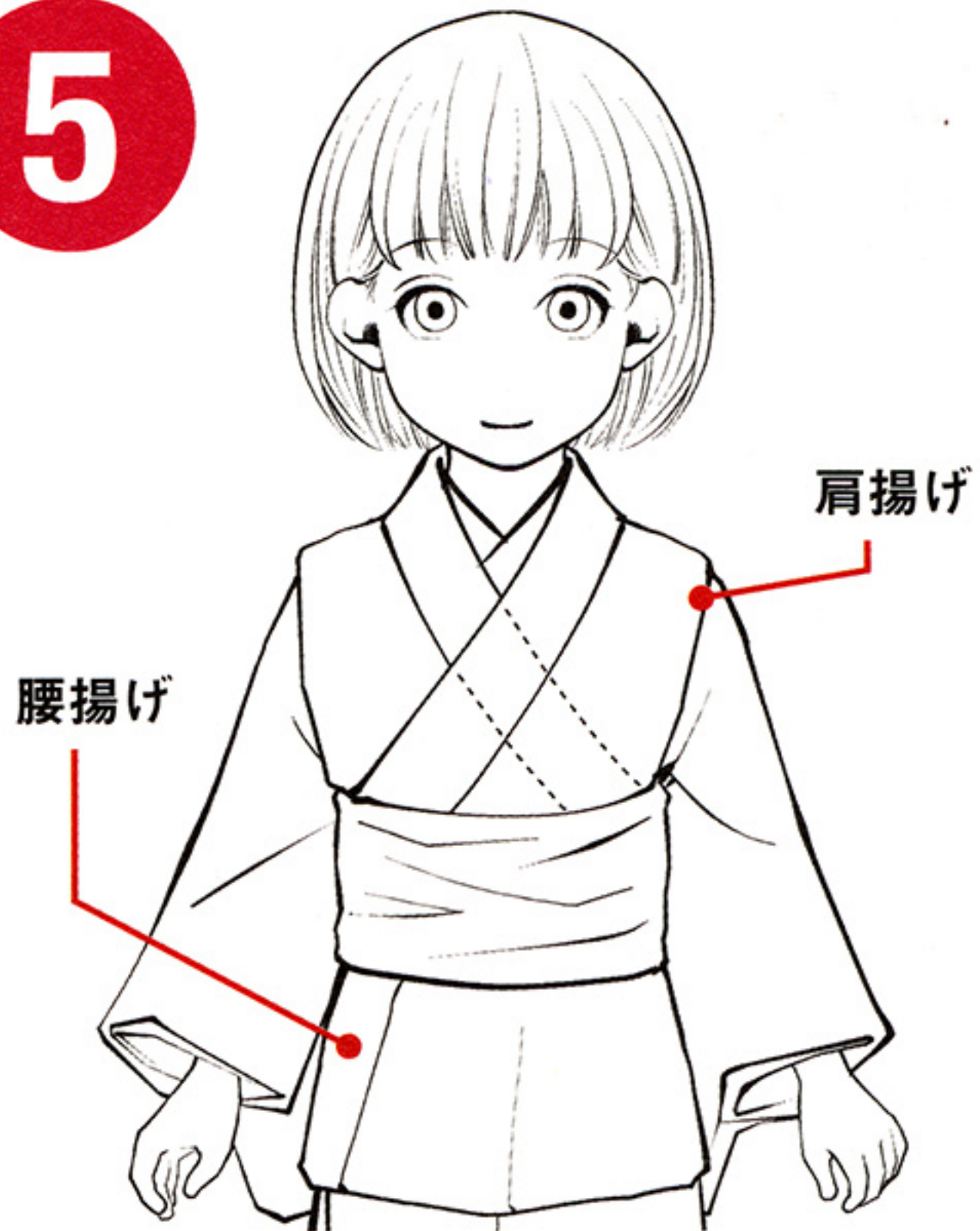
子供の衿の描き方

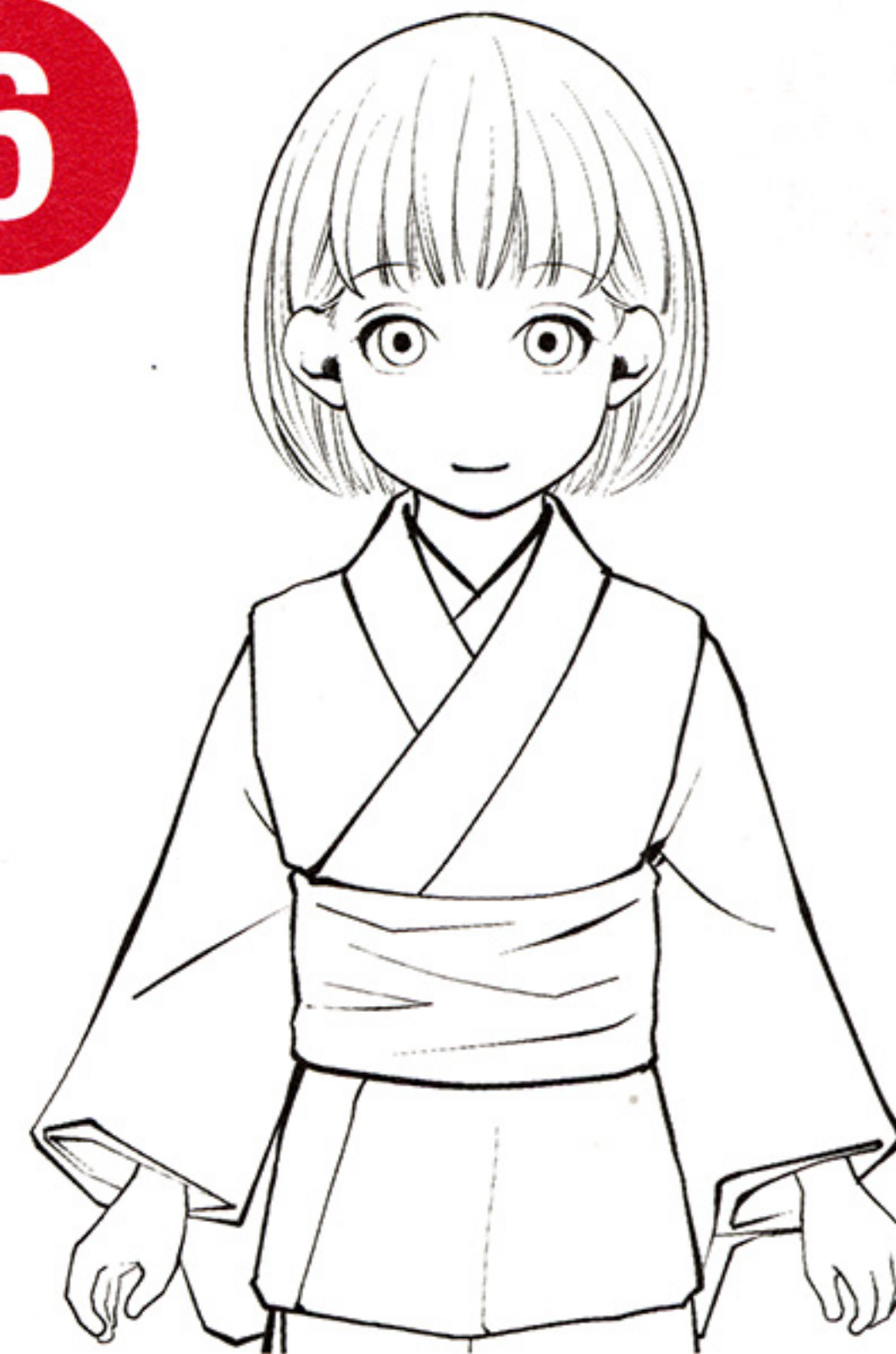
1

肩の高さと体の正中線の交差するところより、少し上に点をとる。

2

首と輪郭の交点あたりまで、首に沿わせて「y」を描く。これが襦袢の線になる。大人より鈍角の「y」にするとかわいいイメージに。

3

帯の位置を決める。子供の帯は、男女ともくびれ辺り。
右腰に、衿先の終着点を決める。

4

右腰の点と、首の付根を結ぶように
ゆるやかなカーブで着物の衿を描く。

5

子供らしさのポイントとして、
「肩揚げ」と「腰揚げ」を描く。
（参照 40ページ）

6

不要な線を消して完成。

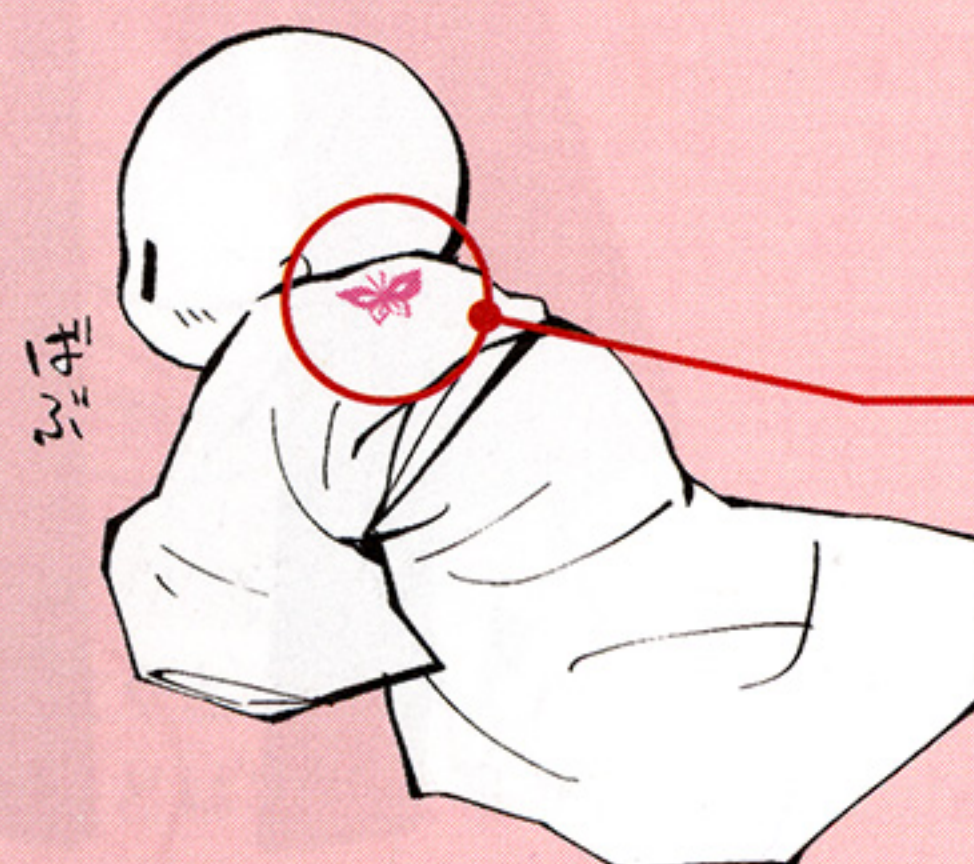
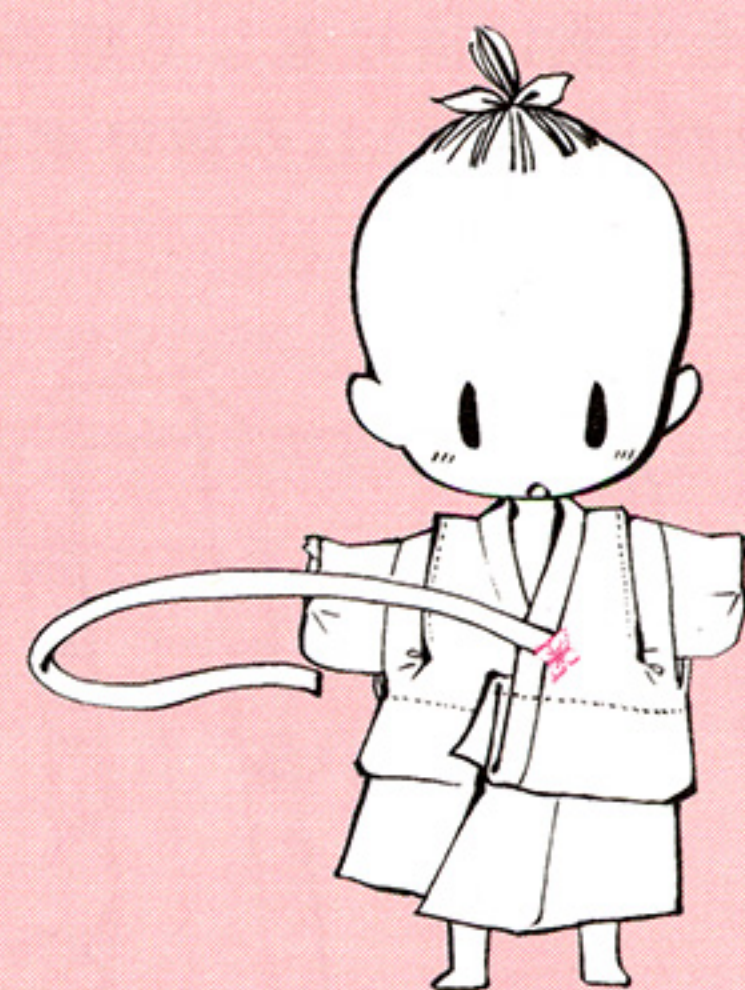
● 後ろ姿

身頃をたくさんはしょって足首を見せると、やんちゃな日常着の雰囲気になる。

ONE POINT

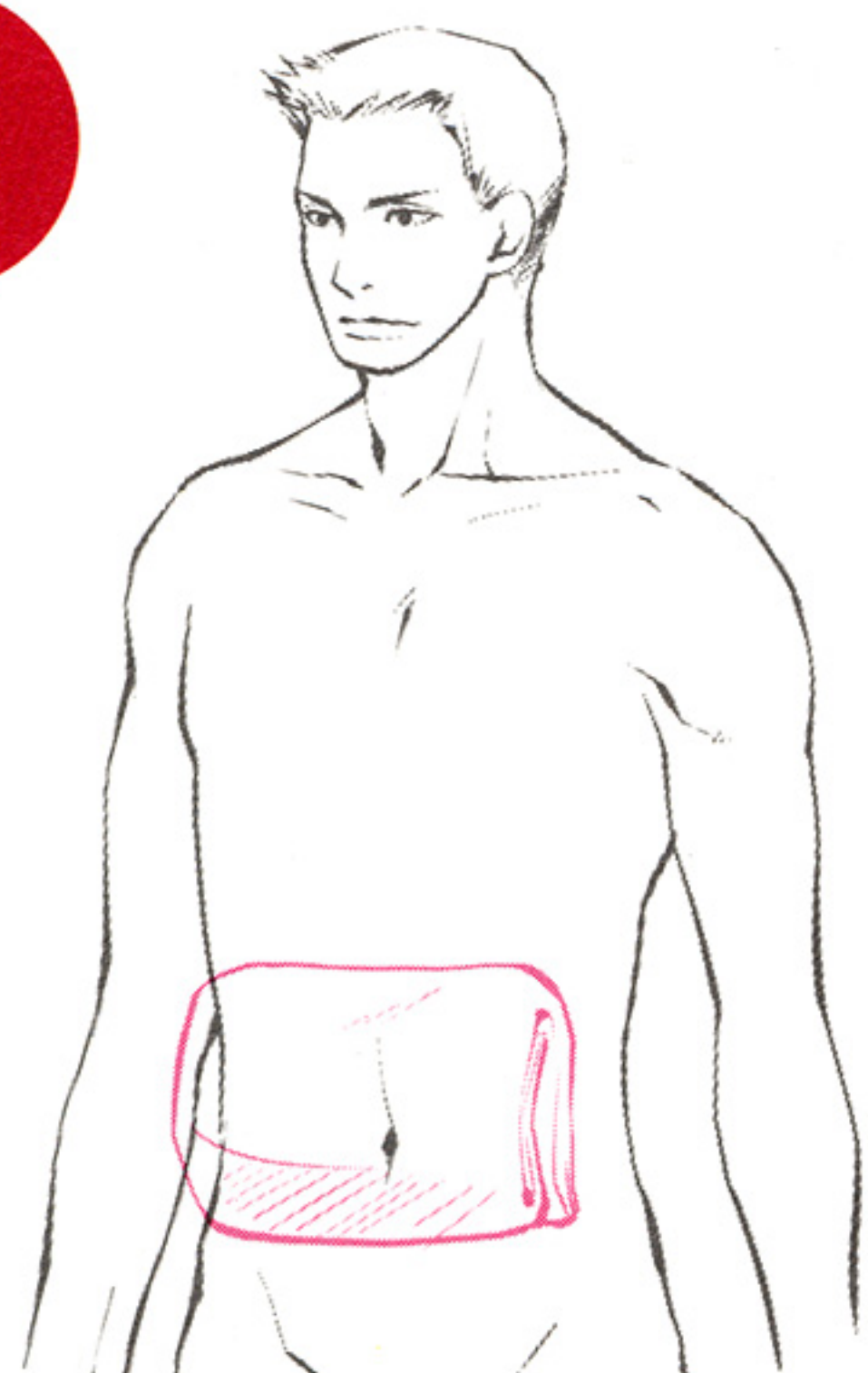
赤ちゃんの着物

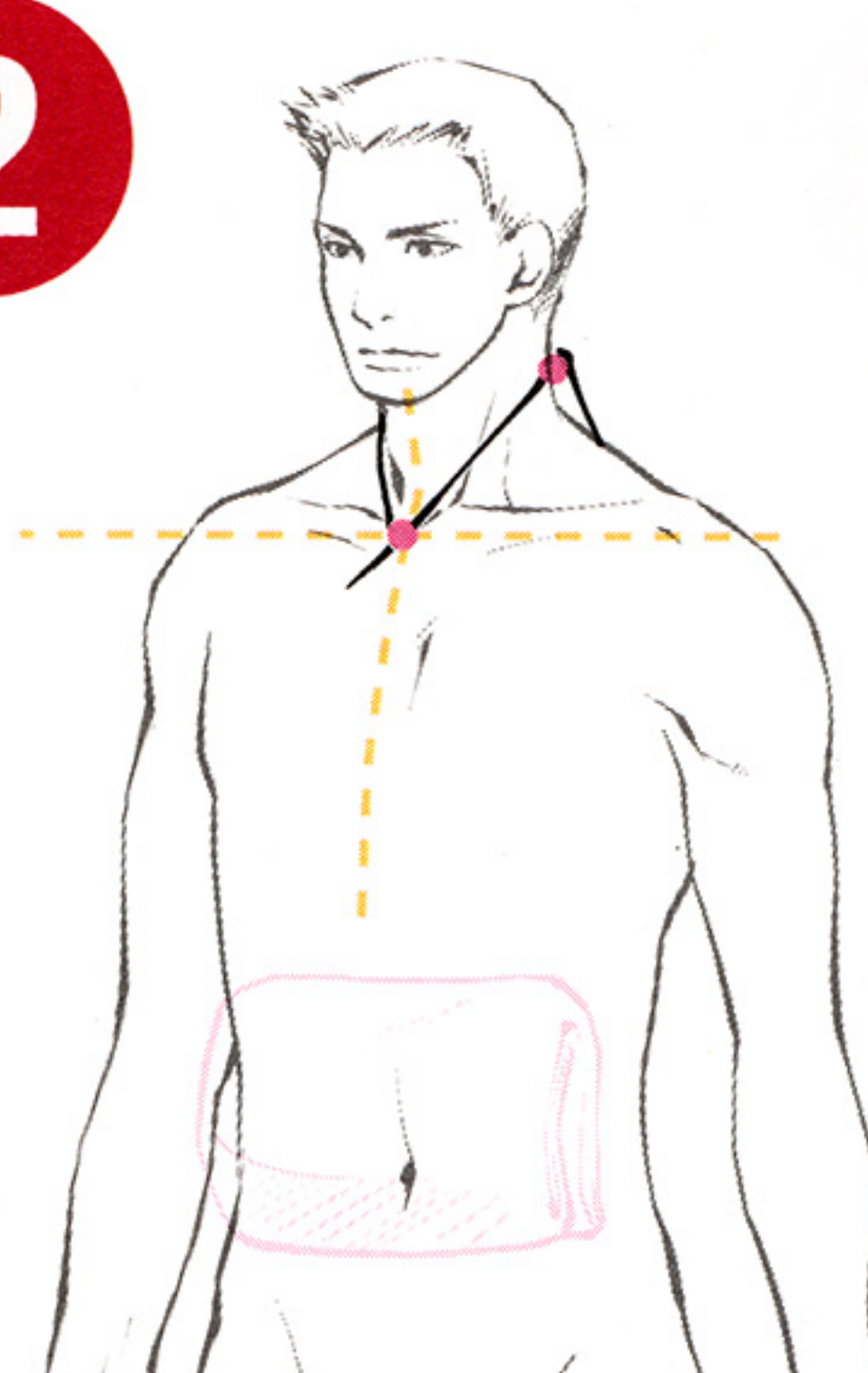
赤ちゃんの着物は、衿のところに腰紐を縫い付けておいて、脇の穴（身八つ口みたいなもの）に通して着せます。
反物一幅ぶんしかない「一つ身」で、背縫い（背の目）がないのは宗教的に無防備とされ、母親が「背守」というお守りを縫います。

背守（せもり）

飾り縫いや、長く糸を垂らしたり形状はさまざま。鬼が来た時、糸が身代わりになるという。

男性の衿の描き方

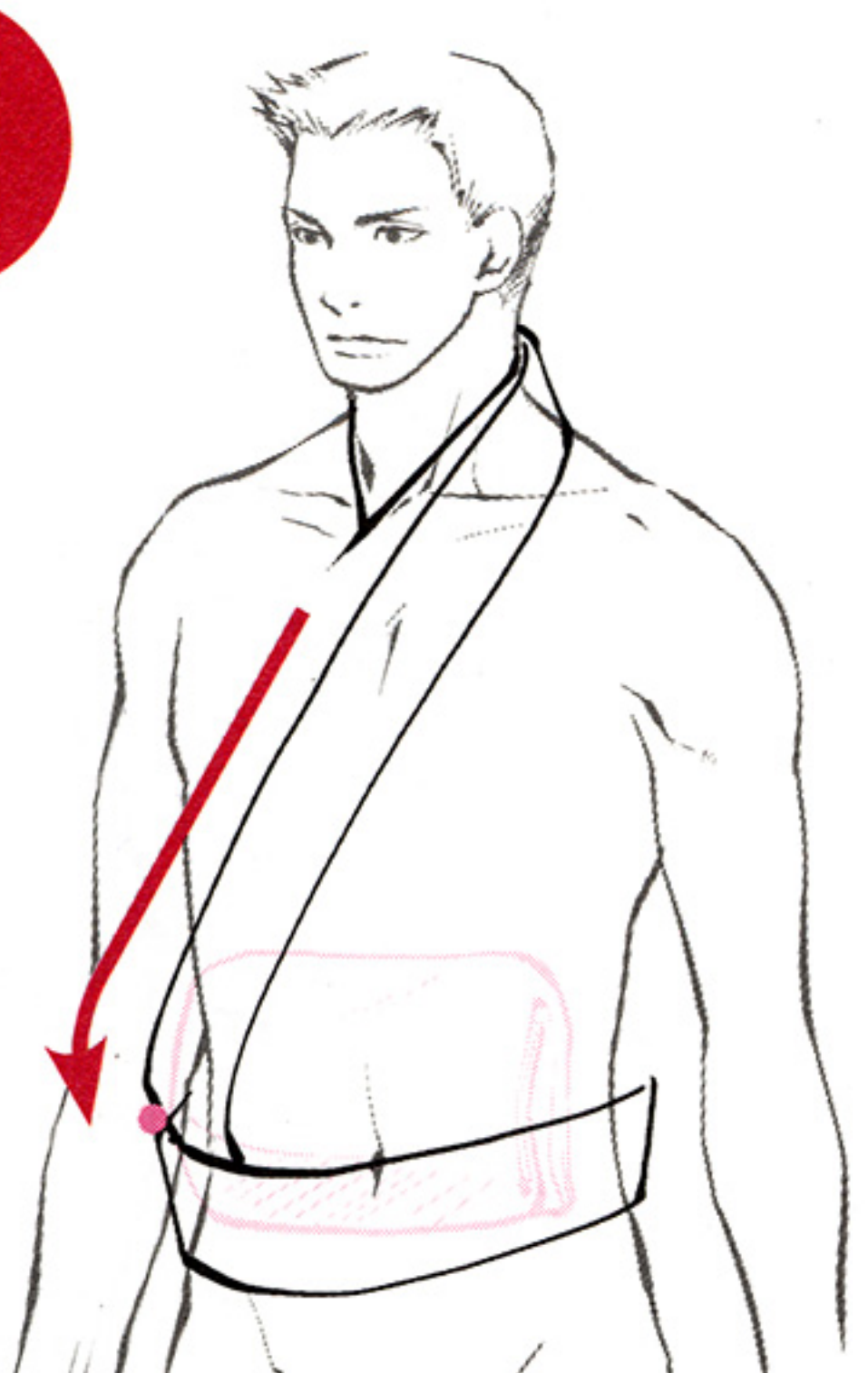
男性は衣紋（えもん）を抜かないので、首の周りに衿が巻き付くようなイメージになります。

1

やせた人は体型補正する。
お腹に、畳んだタオルを入れるつもりで。

2

肩の高さと体の正中線の交差する点（鎖骨の窪み）から首にそわせて「y」を描く。

3

お腹のタオル(肉)を持ち上げる気持ちで、腰骨から背中へ上がっていくように帯を描く。

4

帯の左端に衿先の終着点をとり、体を包み込むように衿を描く。
襦袢の衿は見せない方が男性らしい。

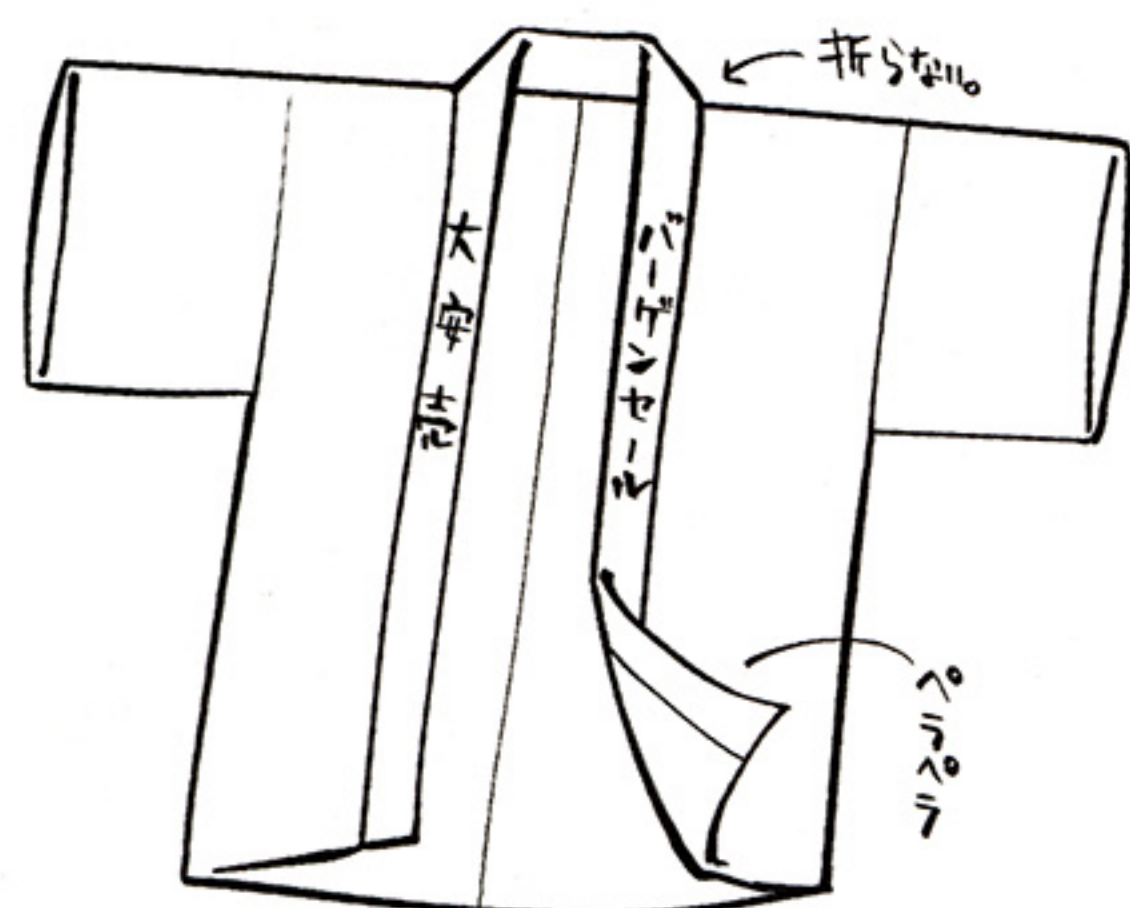
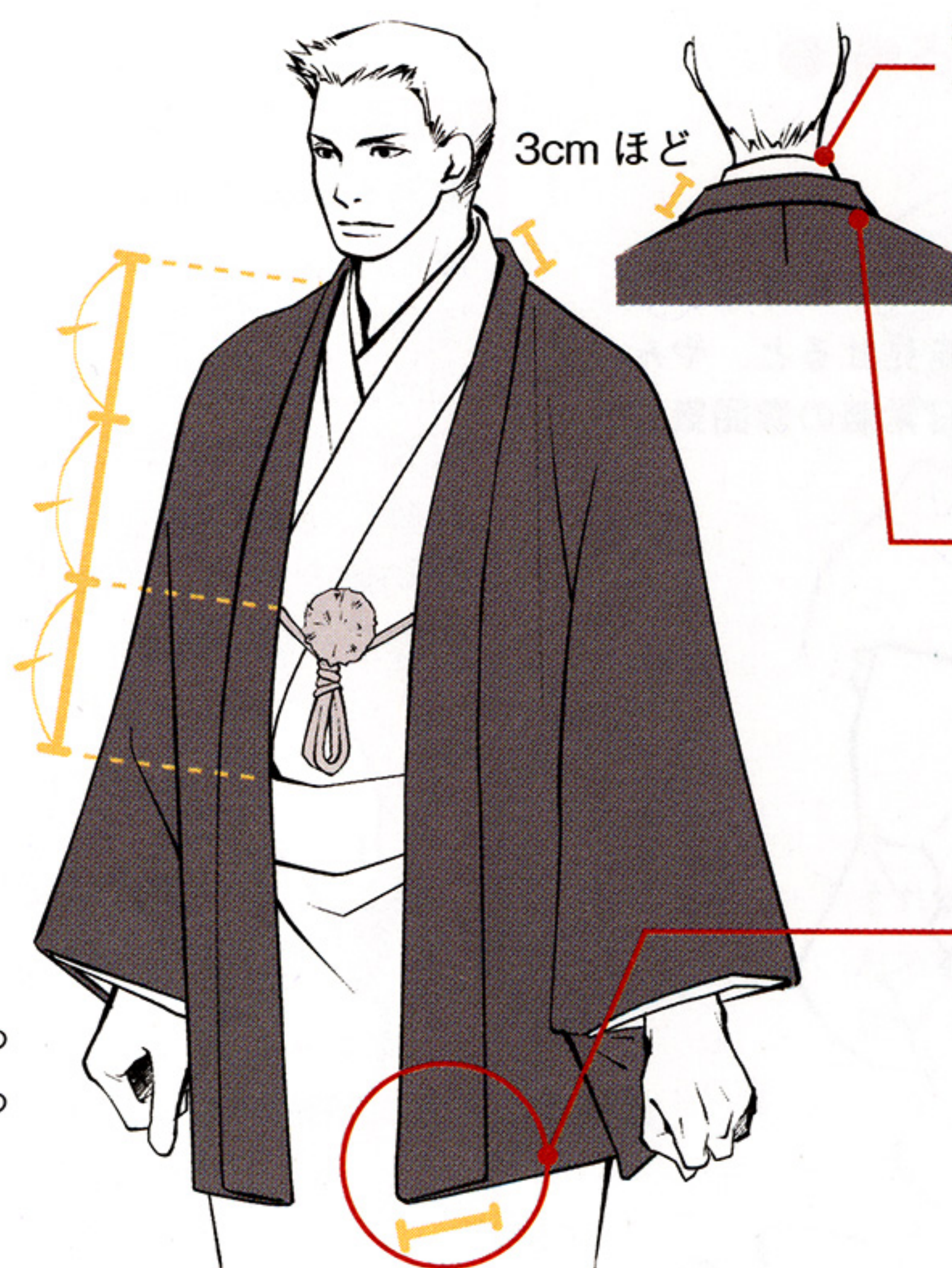
5

逆側も同様に描き込む。

6

不要な線を消して完成。

● 羽織の衿

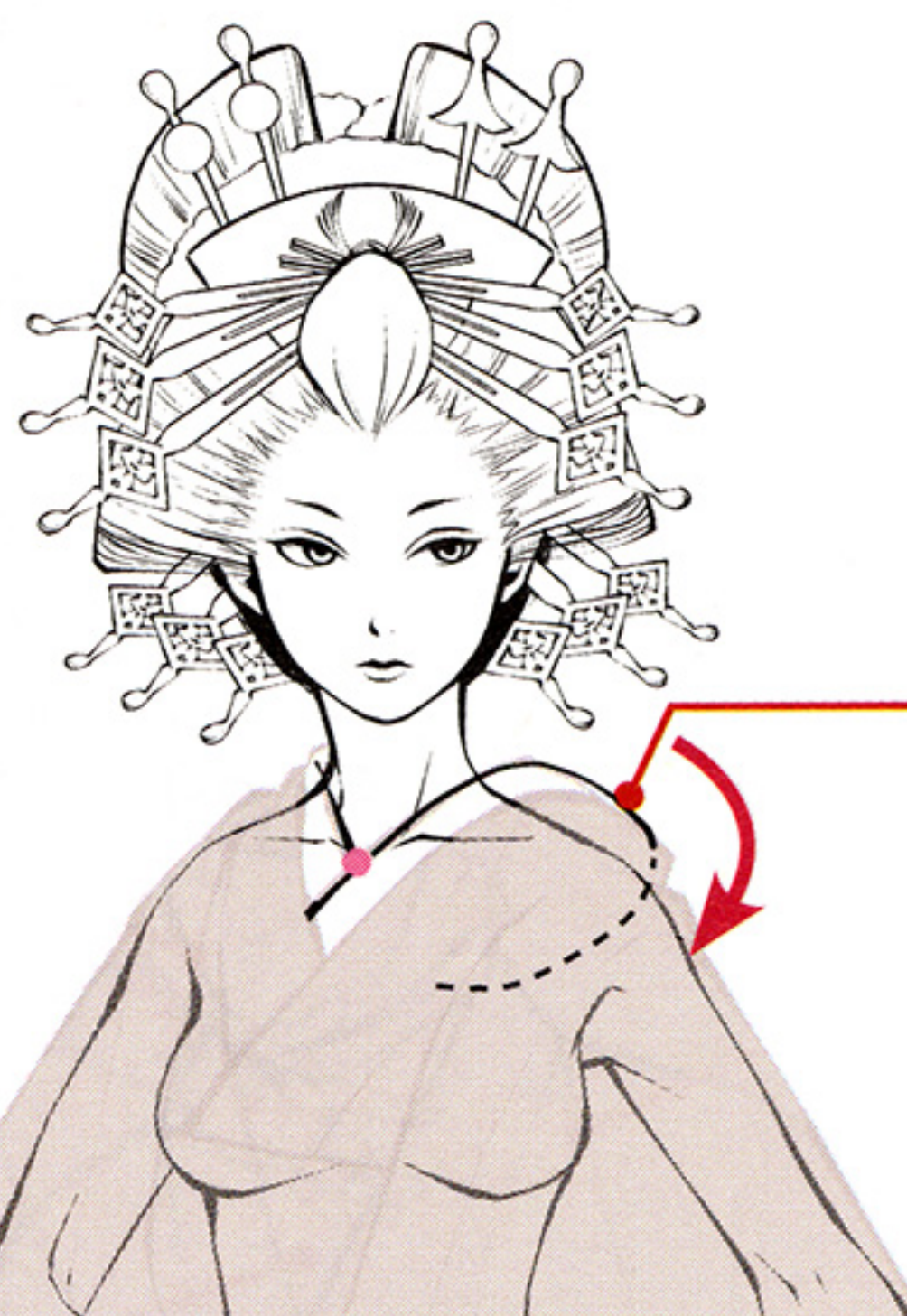
羽織は普通の着物と違って、男女ともに「衿を外側に折り返して着る」のが通常です。
後ろ衿は、半分しか折りません。

祭りの「法被（はっぴ）」や「半纏（はんてん）」などは、衿を折ったりしません。うまく描き分けて、羽織は安っぽくならないように注意しましょう。

衣紋を深く抜いた時のコツ

遊女や舞妓などは、背中が見えるほど衣紋を抜きます。
一般の人は、ここまで抜くことはありませんが、キャラクターなどで色気を出したい時は、あえて大きく衣紋を抜いてみると、良いでしょう。

● 正面

デッサンしていると、肩が小さく華奢すぎるようにも感じますが、これが「大きく抜いた衣紋」と「大きな髪型」による錯覚・視覚効果といえるかもしれません。

見えないところまで意識する。

あわせの位置は通常と変えずに鎖骨のくぼみあたりにしておくと、比較的ちゃんと着ている様に見えます。

衣紋を、前合わせから背中の見えない部分までやわらかなカーブで描く。

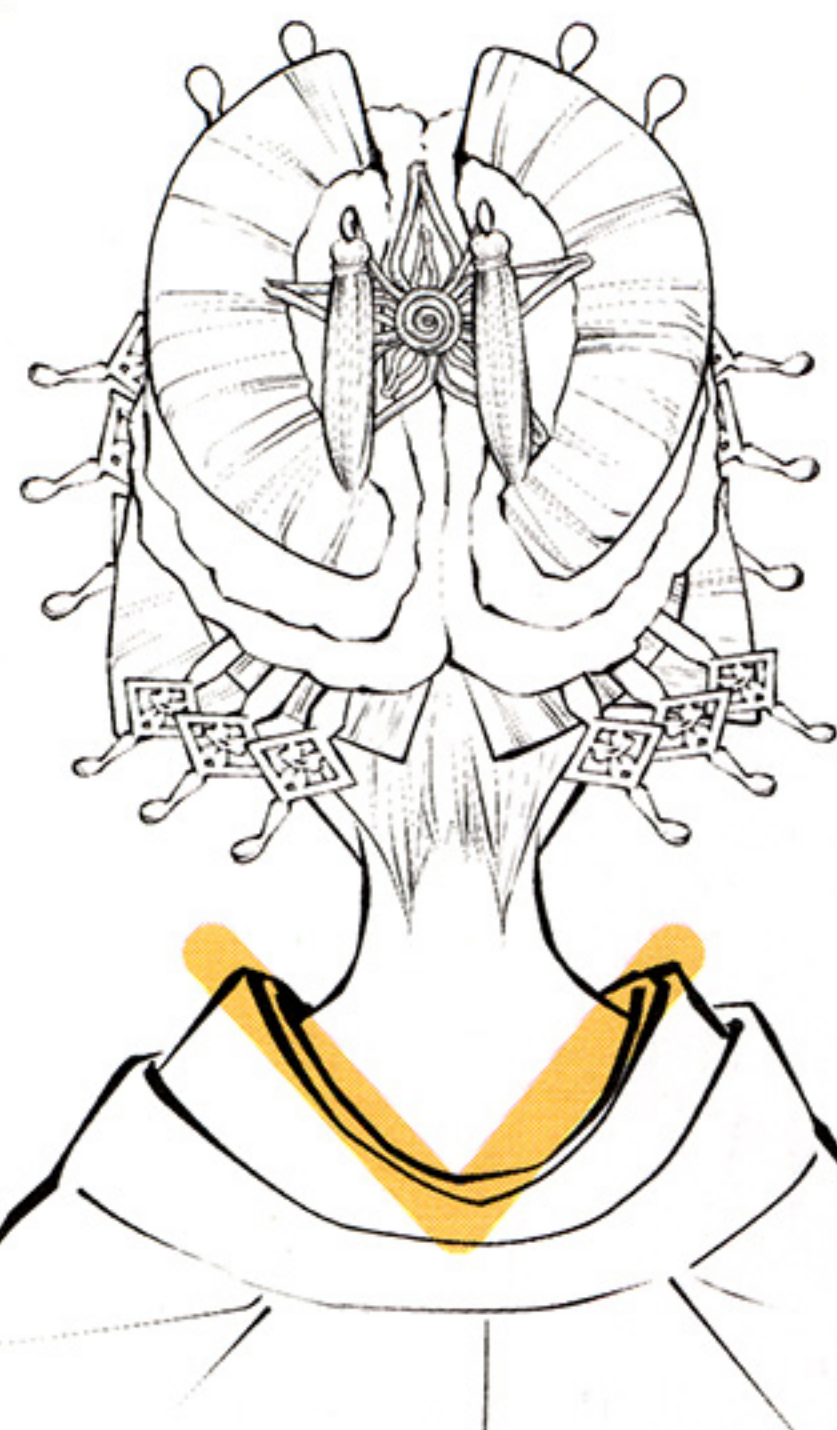
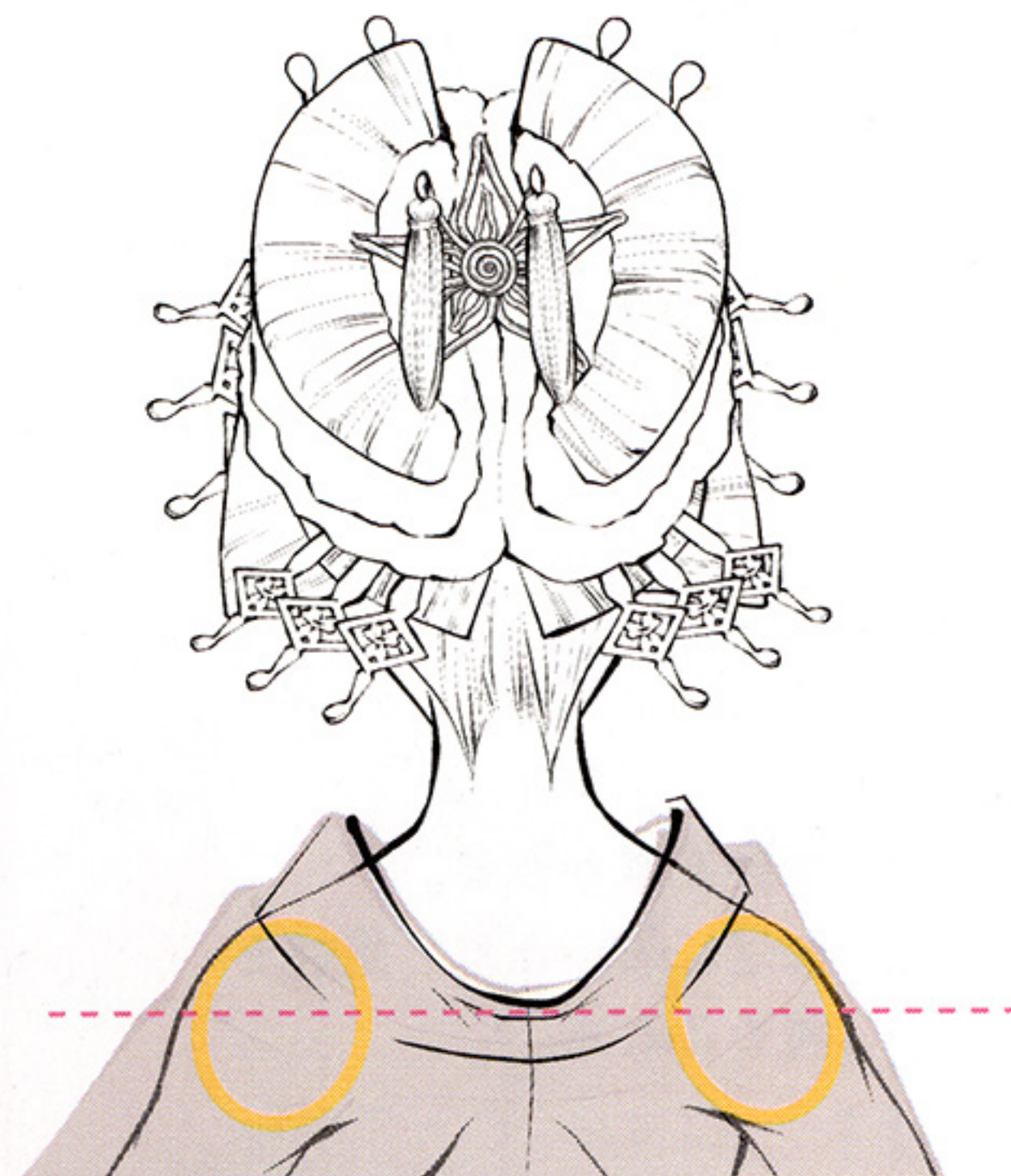
● 横

思い切ってまんまるなカーブで描くのがコツ。

何枚も重ねて着ているので、ボディラインに比べてかなり大きく描く。

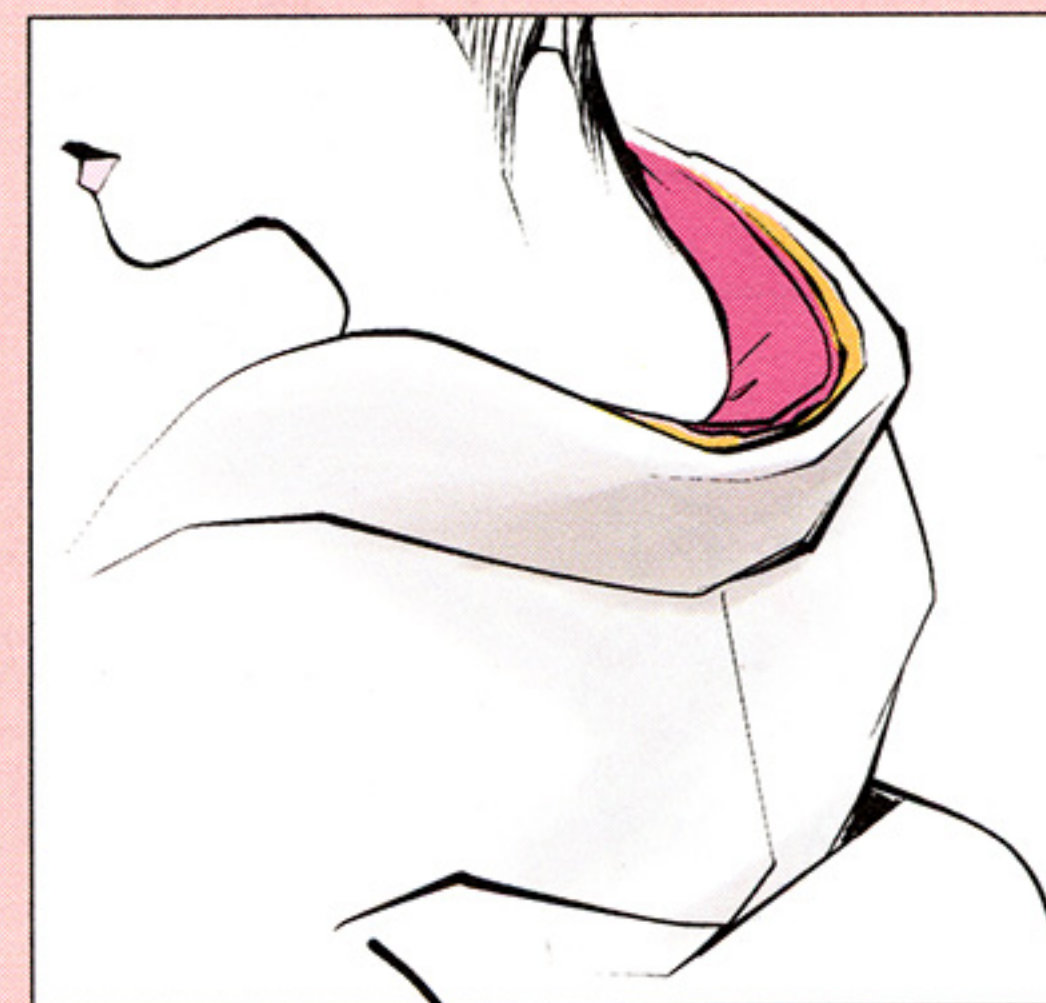
まず最初に、どのあたりまで衣紋を抜くか見当を付けておく。

肩関節の中程を目安にする。
この高さを基準に、控えめにしたり、深くしたりして調整する。

● 後ろ

縦長の「V」字にを意識して描くと、肩があまり出ないので、比較的上品なイメージになる。

肩関節の中程まで抜くと、このように背中が見えます。舞妓などは衣紋と帯が付くほどしっかり抜く。

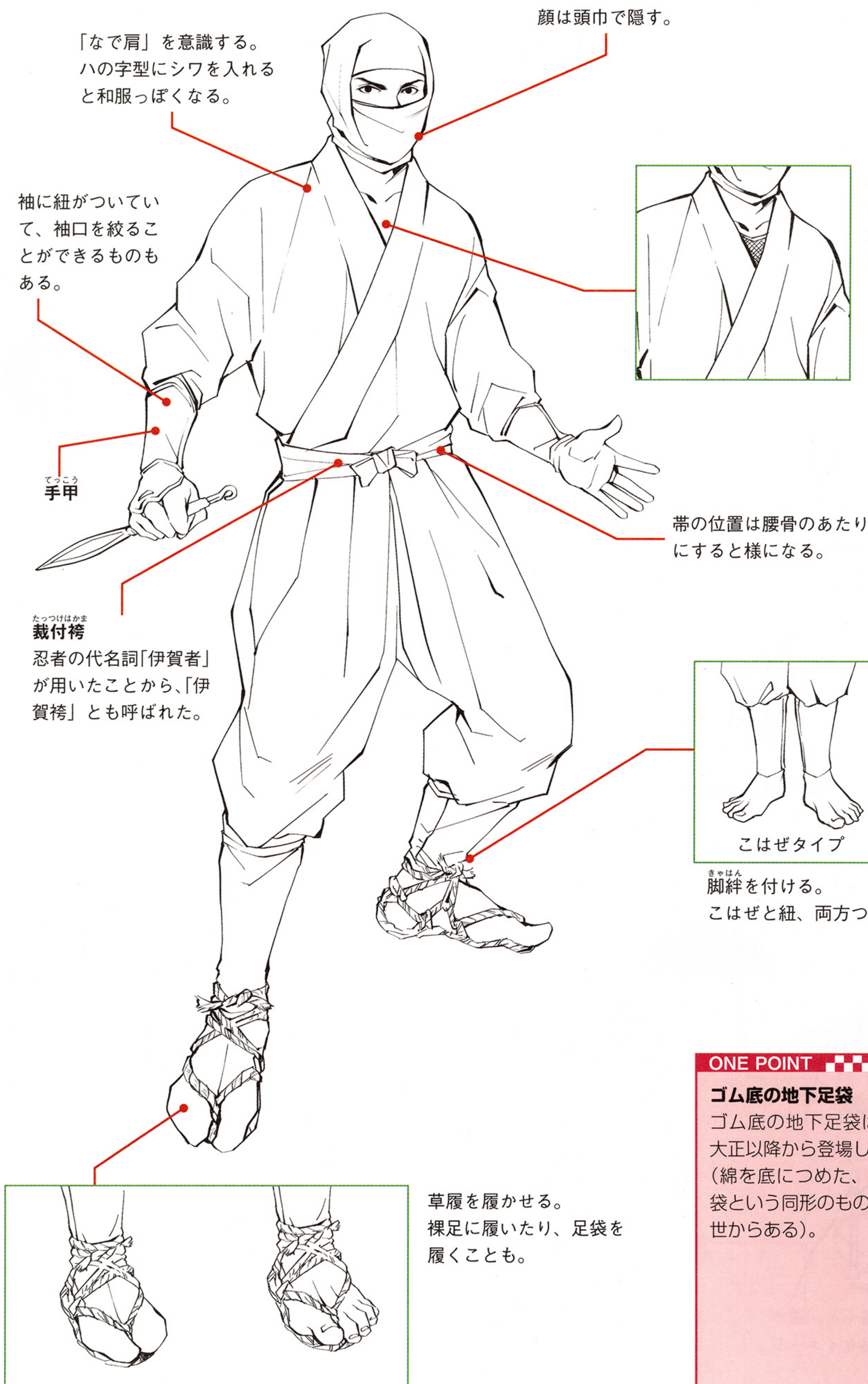
ONE POINT

衿の影
深く衣紋を抜くと、衿の影が出るので中央付近に少し影を描くと、より色っぽくなります。
布地の厚さも表現するとリアリティが増します。

19 忍者

忍びの戦闘服である装束は、農民などが畑仕事の時に着る汚れてもよい、いわゆる「野良着」でした。一般的なイメージの黒以外にも、茶染、柿渋、花紺色などが実際の文献でみられます。世間に目立たず、闇にまぎれ、動きやすい装束であればいいとされ、隠しポケットなどの細工が施されているのが特徴です。

正面

顔は頭巾で隠す。

「なで肩」を意識する。ハの字型にシワを入れると和服っぽくなる。

よく見かける鎖帷子は、実際はあまり着用しなかったといわれているが、創作においては人気が根強い。

袖に紐がついていて、袖口を絞ることができるものもある。

手甲

帯の位置は腰骨のあたりにすると様になる。

子供の忍者は、腰のくびれ位置でもよい。

裁付袴

忍者の代名詞「伊賀者」が用いたことから、「伊賀袴」とも呼ばれた。

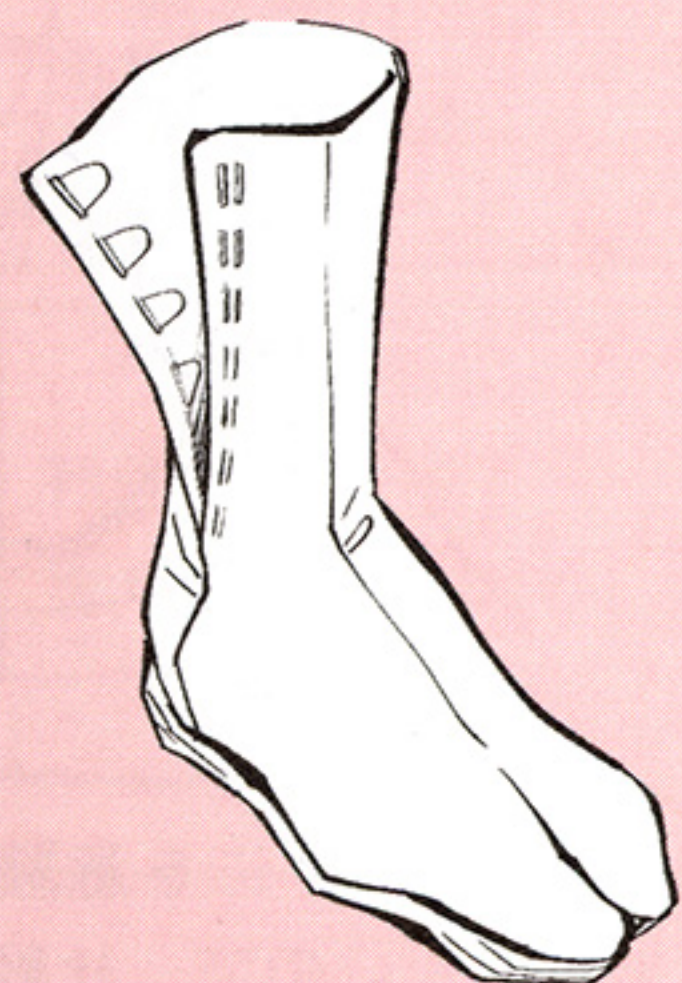
こはぜタイプ

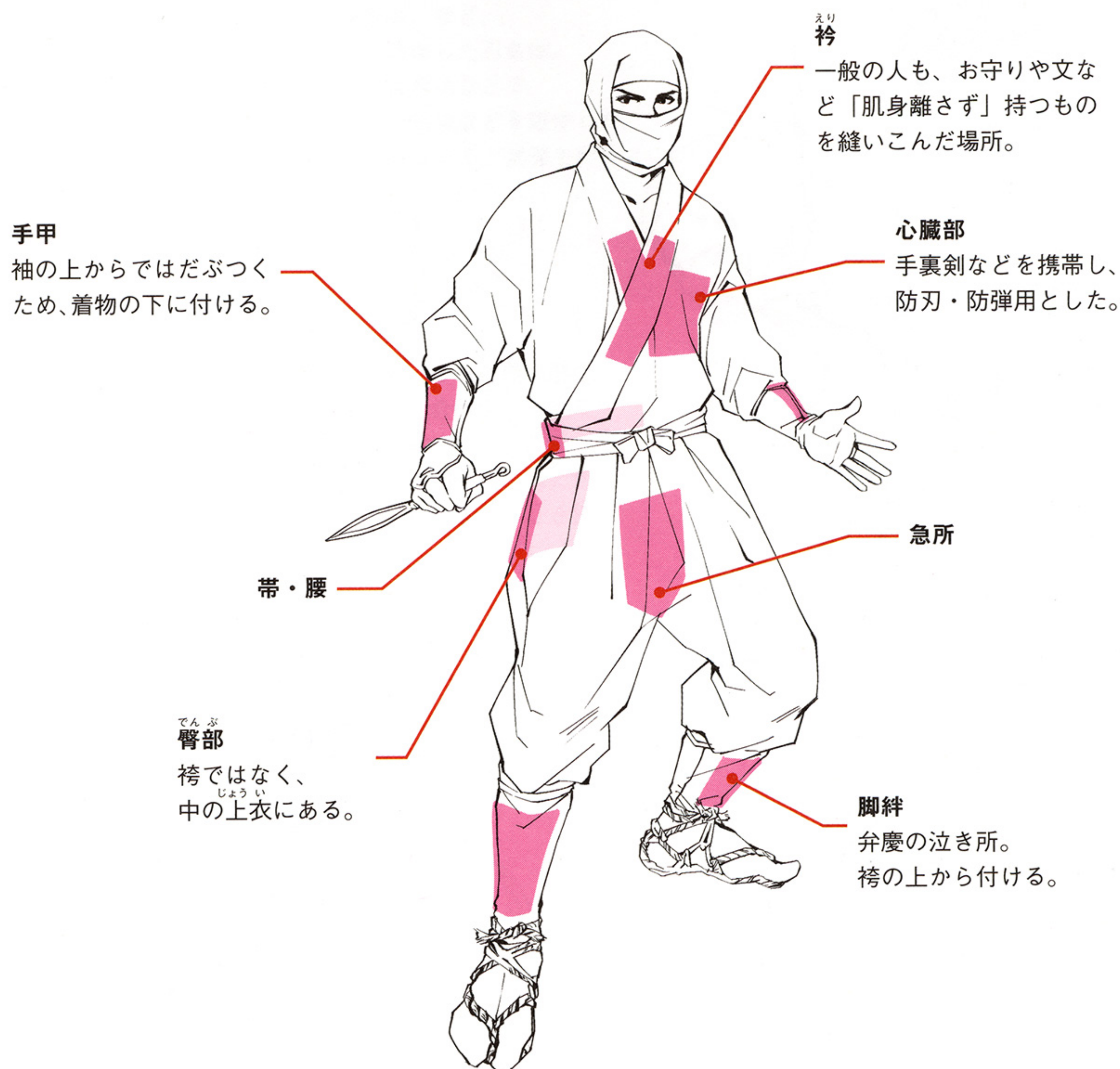
紐で結ぶタイプ

脚絆を付ける。
こはぜと紐、両方ついたタイプもある。

草履を履かせる。
裸足に履いたり、足袋を履くことも。

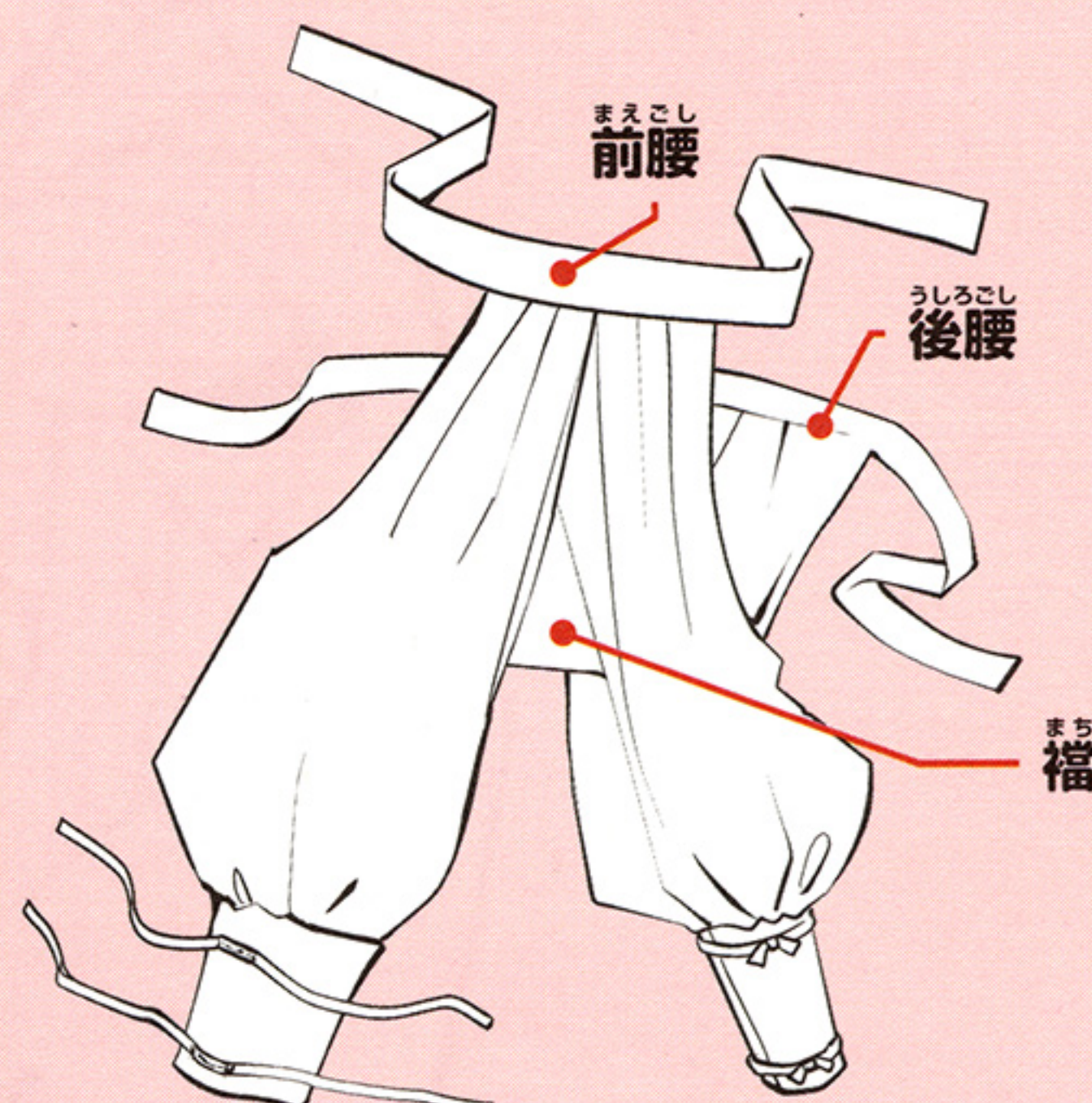
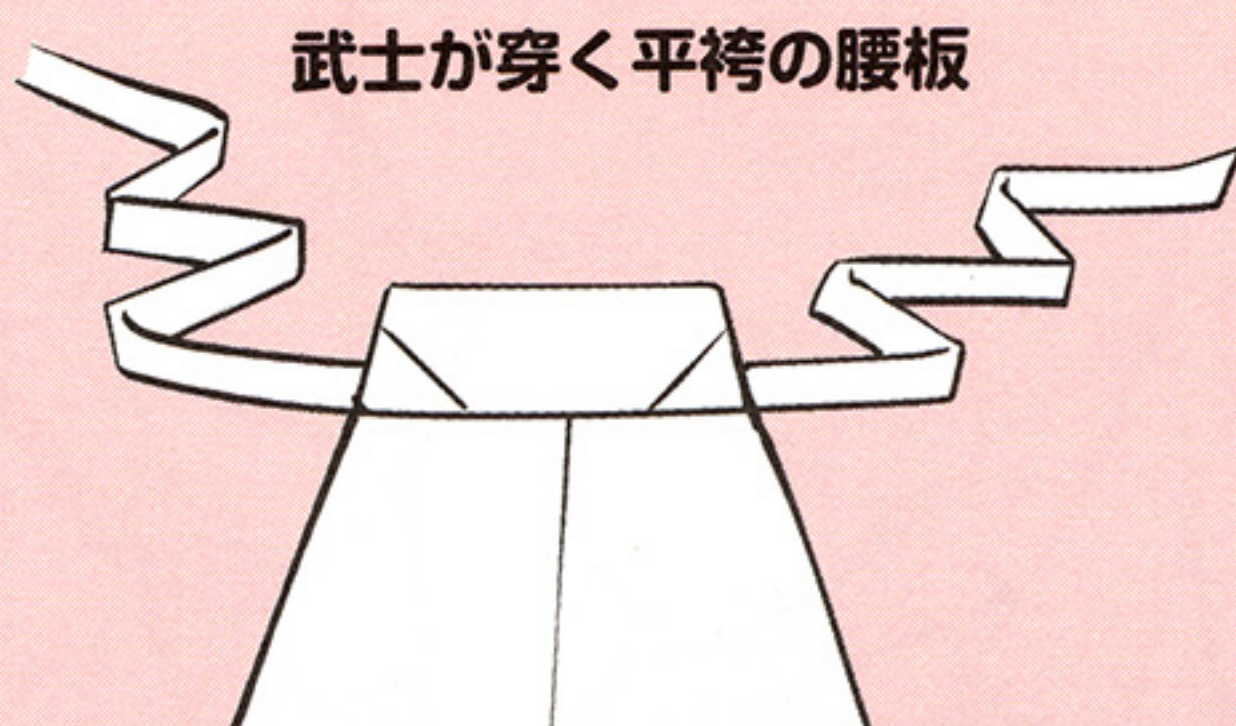
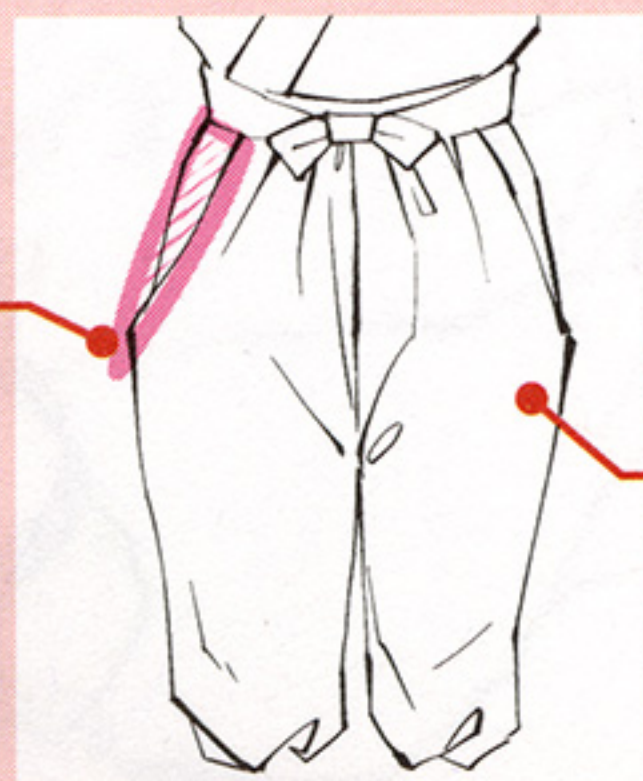
ONE POINT
ゴム底の地下足袋

ゴム底の地下足袋は、大正以降から登場します（綿を底につめた、綿足袋という同形のものも近世からある）。

忍者の隠しポケット

和服には、ポケット状になる部位があります。忍者はそれを最大限に工夫し、道具を仕込む事で「隠し持つ」と同時に人体急所の防御を兼ねたといわれています。

ONE POINT

忍者の袴

忍者の代名詞「伊賀者」が用いたことから、「伊賀袴」とも称される「裁付袴」は、膝下を脚絆のように仕立てた袴です。
武士の正装とは違い、忍者の袴は農山村の労働着（山袴）に近く、本来は腰板がありません。あったとしても、腰紐に芯を入れた程度だといわれますが、現代の創作では、装飾的な大きな台形の腰板も見られます。

シワや袖の動き

半袖や筒袖など、洋服と変わらないフォルムの場合、「和服っぽく描く」のが難しいが、首元から脇にかけての「ハ」の字型のシワを描くと、和服らしくなる。

武士の袴はヒダがしっかりあるのに比べ、農民の山袴や四幅袴は布が少なく、現在のズボンと同じ感覚でシワを描いてOK。

袖口や肘、膝、などにシワを沢山、あまり柔らかい曲線ではなく、固めの線で描くと、麻や木綿の雰囲気になる。

股立は少し大きいかな？と感じるくらい描いた方が、雰囲気が出る。

さまざまなジャンルの忍者

忍者が題材になった、またはキーポイントとして登場する作品は数多くありますが、そのジャンルによって表現は異なり、さまざまな面を見せてくれます。

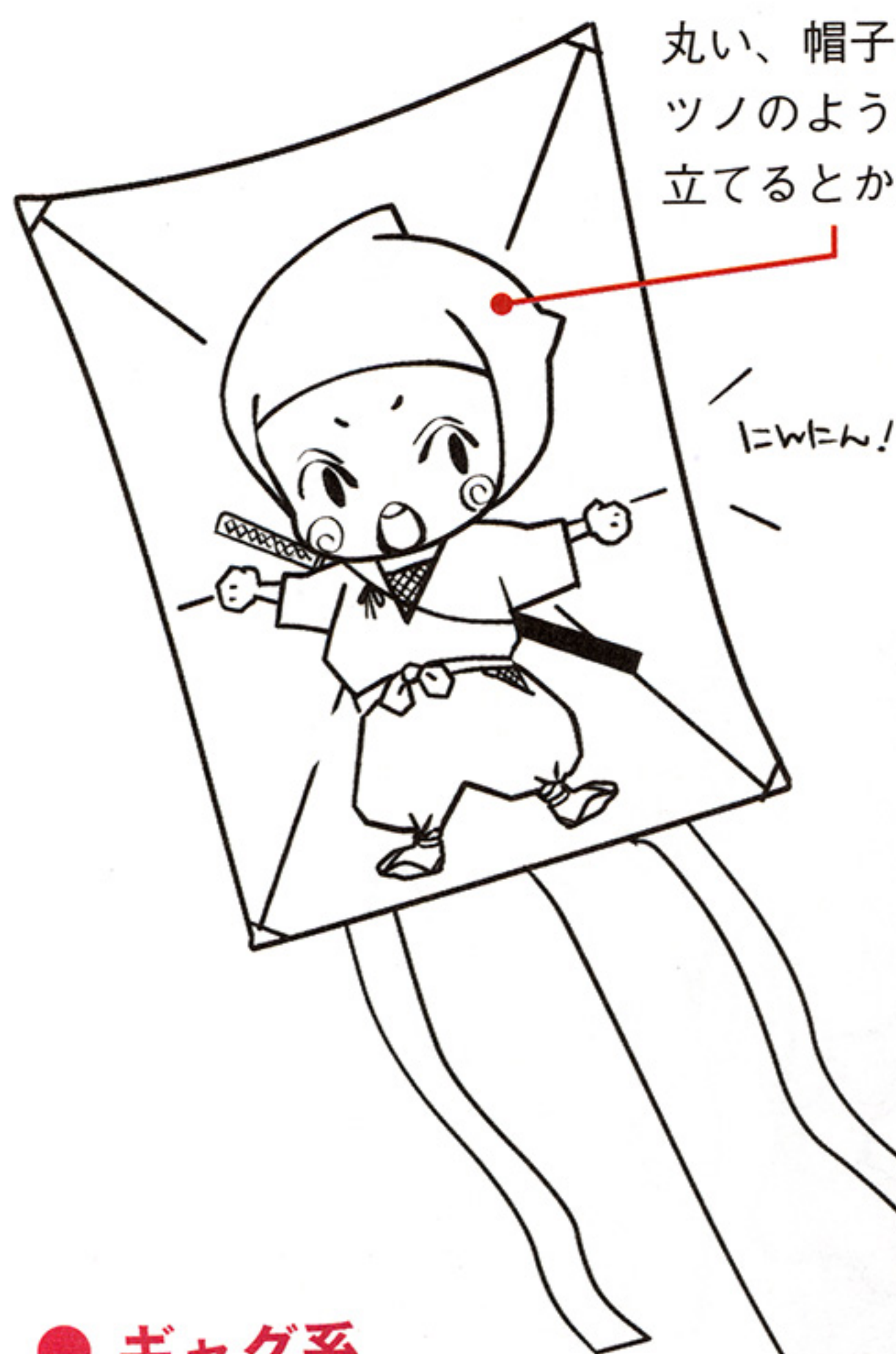
● リアル史実系

実在した「伊賀者」など、
歴史資料を元に想像した忍者像。
戦国時代、多くは農民などで、
農具、体力、自然知識などを駆使した。
容姿も独特なものはなく、武器も持たない。

袴はなしか、短い四幅袴など。

蝦蟇（がまがえる）・なめくじ・大蛇など

● 歌舞伎系ファンタジー

自雷也などに代表される歌舞伎で描かれる忍者像は、仙術・妖術を使うファンタジーヒーロー。
江戸の読本から、近現代の少年漫画へと続く最もポピュラーな忍者像。

丸い、帽子のような頭巾。
ツノのように1～2ヶ所
立てるとかわいい。

にんにん！

色々な暗器（あんき）、飛び道具。

● ギャグ系

子供向けの忍者キャラクター。
制服のような「忍者服」はカラフルなことも多く、
赤やピンクだったりすることも。

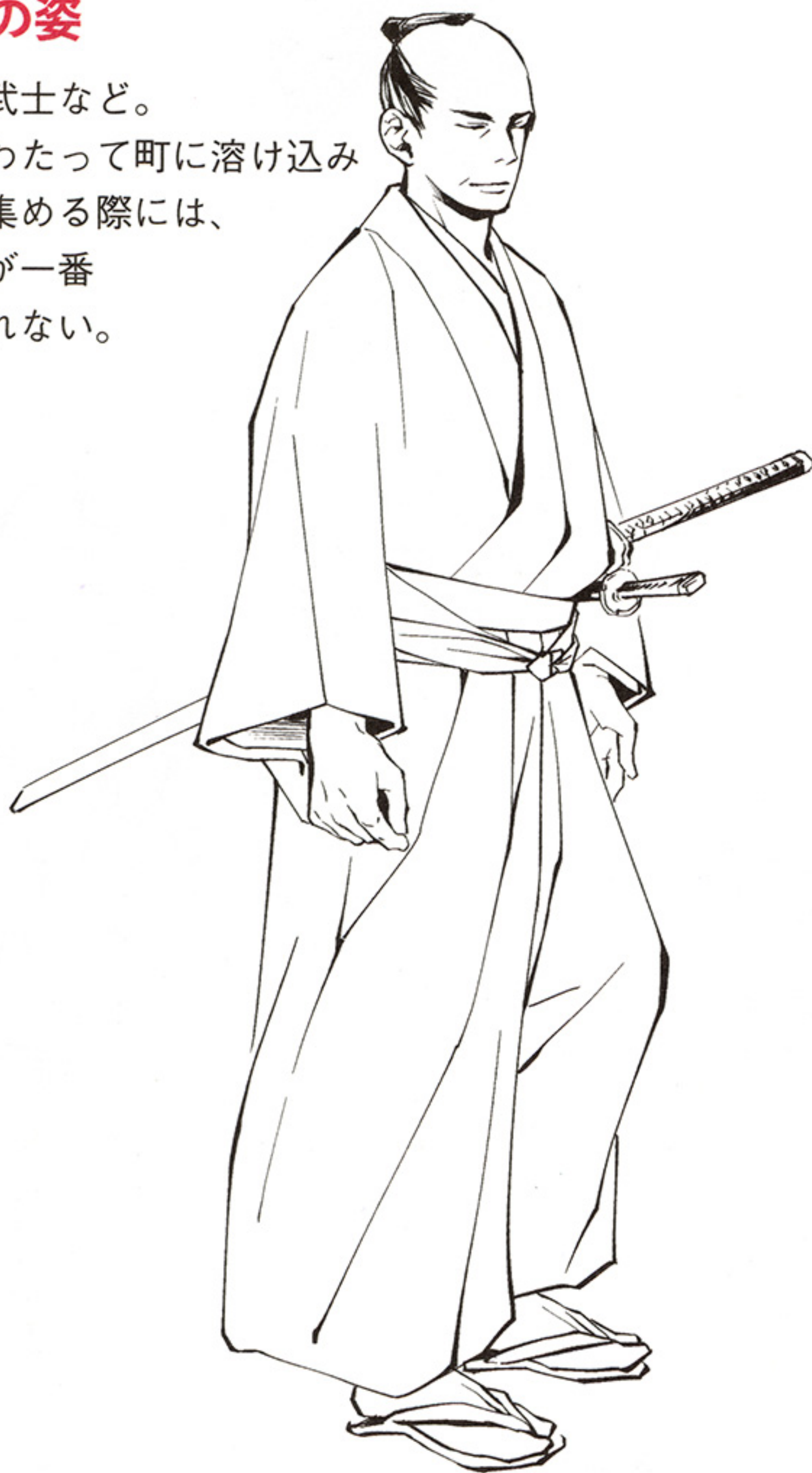
● ドラマ・時代小説系

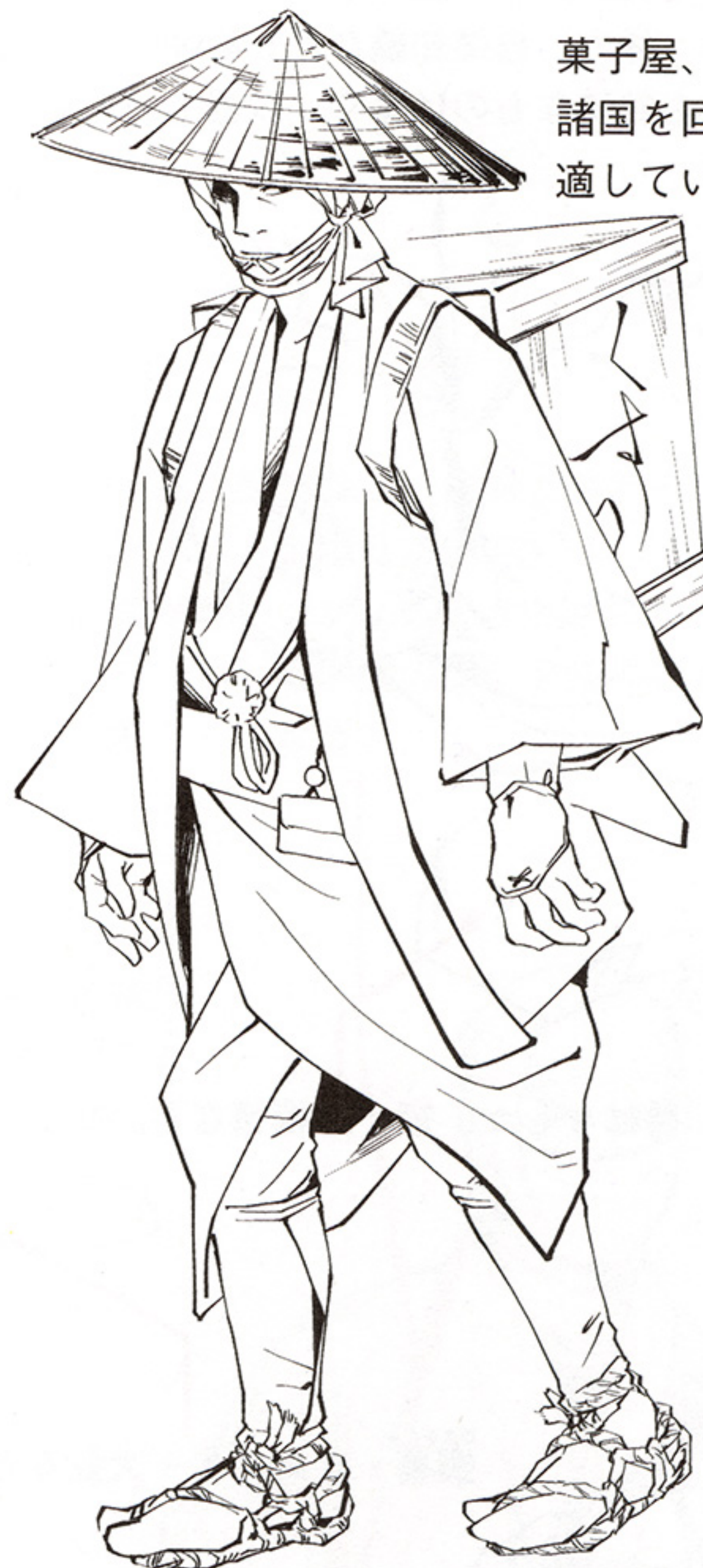
ファンタジー系とリアル系の中間で、超人的な肉体や、魅力的な暗器を持つ。
屈強な男や、身軽な人間、妖艶な女など。

忍者の七方出

闇夜に忍ぶ時以外、実際は様々に姿を変えて世間に紛れ込んでいました。
忍者が変装をするのにうってつけの職業七つを特に「七方出」といいます。

● 常の姿

町人や武士など。
長期にわたって町に溶け込み
情報を集める際には、
この姿が一番
怪しまれない。

● 旅の商人

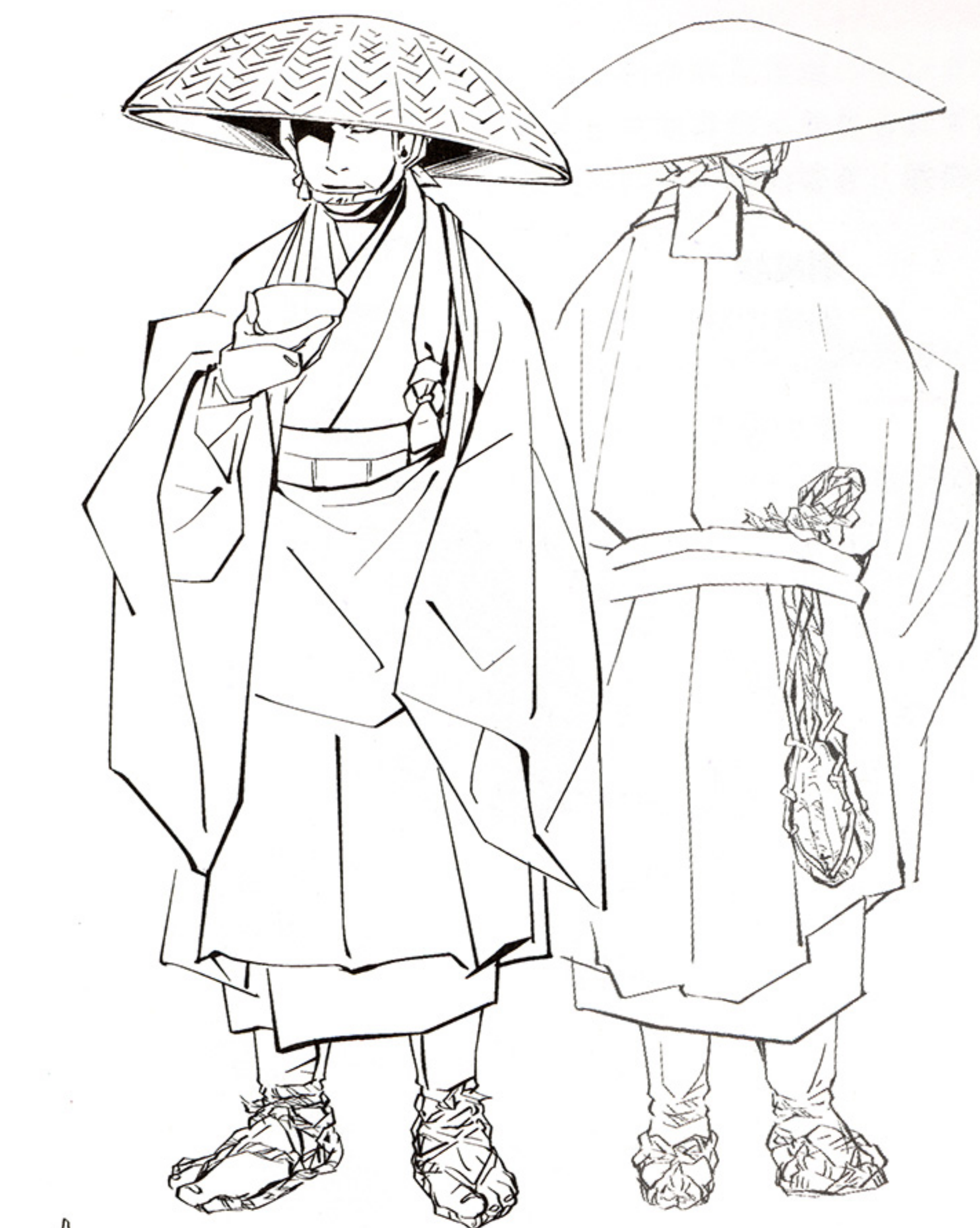
菓子屋、薬屋など。
諸国を回り情報を収集するのに
適していた。

● 猿楽師

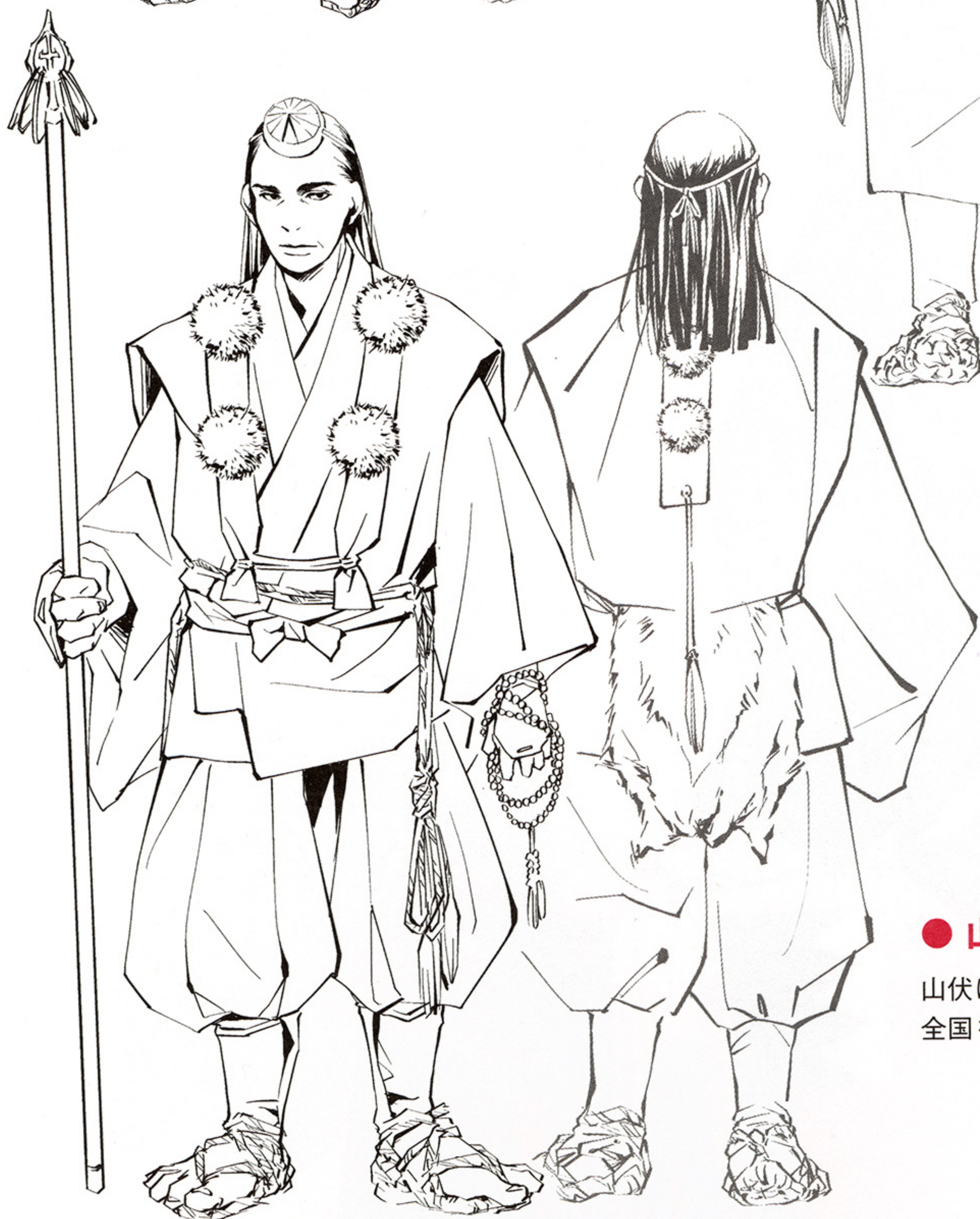
怪しまれず、敵地で権力者に
近づくことができた。
現在の能楽の旧称。

● 放下師

大道芸。手品・曲芸や唄など
で人を楽しませ油断させる。

出家

僧侶。寺は情報の宝庫であり、
さまざまな情報を手に入れることができた。

虚無僧（こむそう）

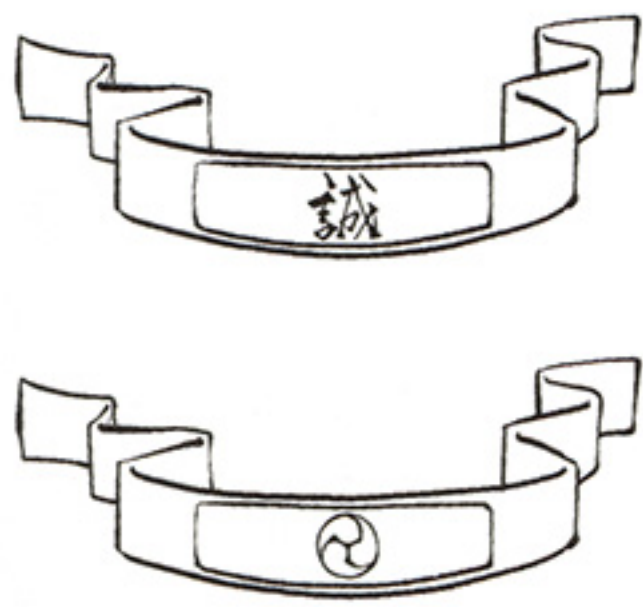
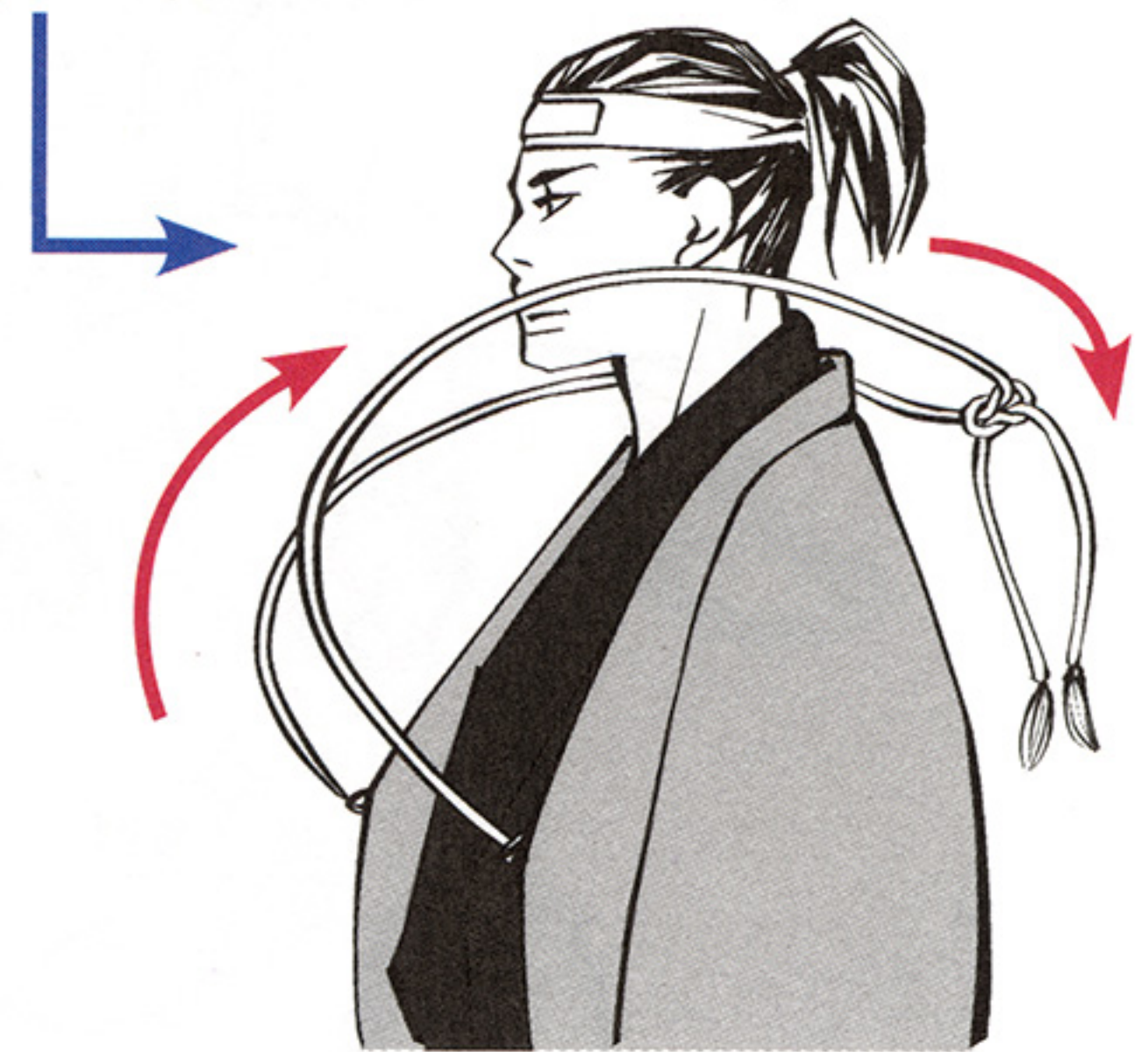
深編み笠は、顔を隠したまま
周りを見ることができるので、
忍者の変装としては最適であった。

山伏

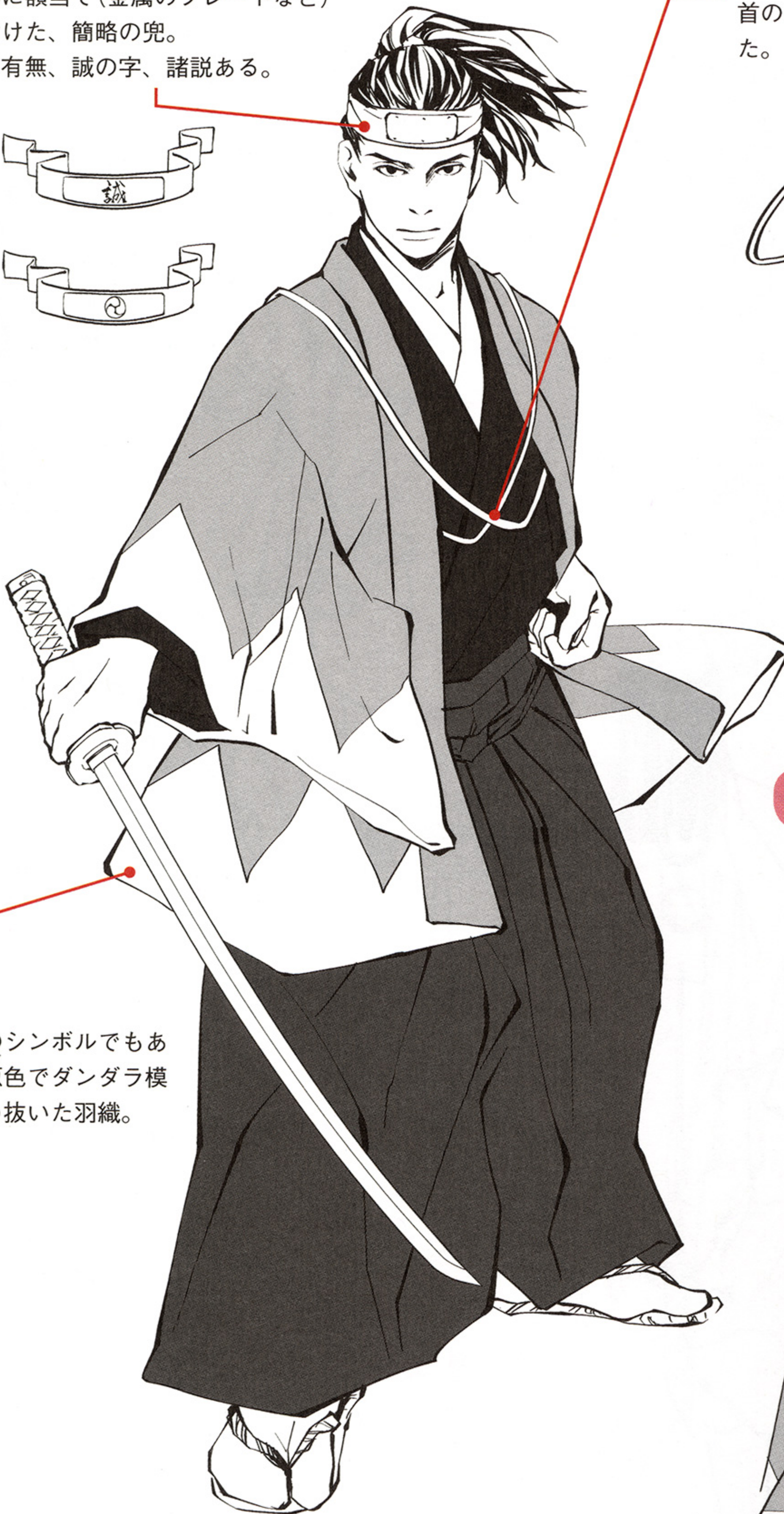
山伏は修行・布教のため、
全国を自由に行き来できた。

20 新選組

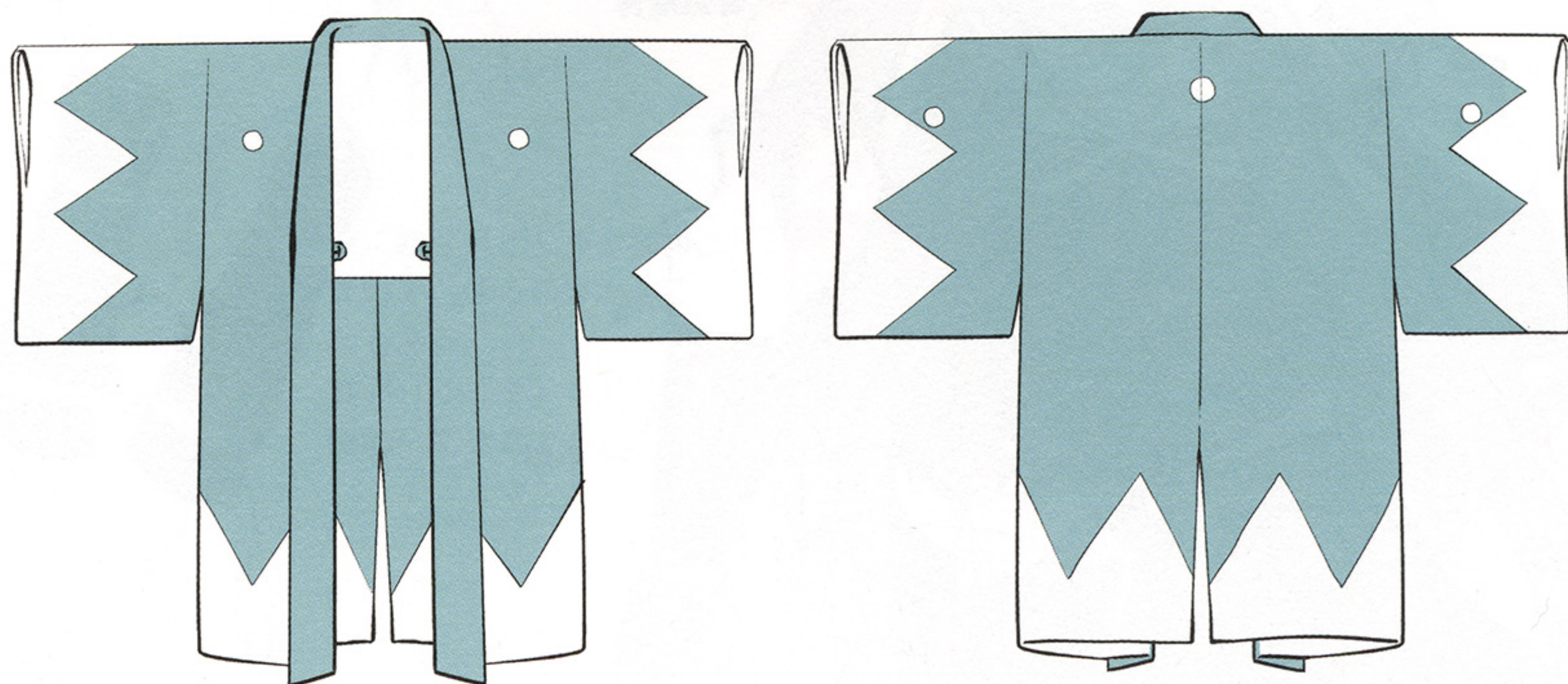
新選組は江戸時代末期に、京都で反幕府勢力を取り締まる警察のような役割をしていました。
現存する史料はさほど多くなく、手記と多くの創作によって語られています。また新選組の「選」の字は「撰」とも表記され、実際の史料でも「新撰組」と表記されたものが数多くあります。

正面

鉢金
鉢巻に額当て（金属のプレートなど）を付けた、簡略の兜。
紋の有無、誠の字、諸説ある。

羽織紐
羽織の紐は、前で結び、交差させて首の後ろに垂らした。

羽織
新選組のシンボルでもある、浅葱色でダンダラ模様に染め抜いた羽織。

後ろ

新選組の羽織

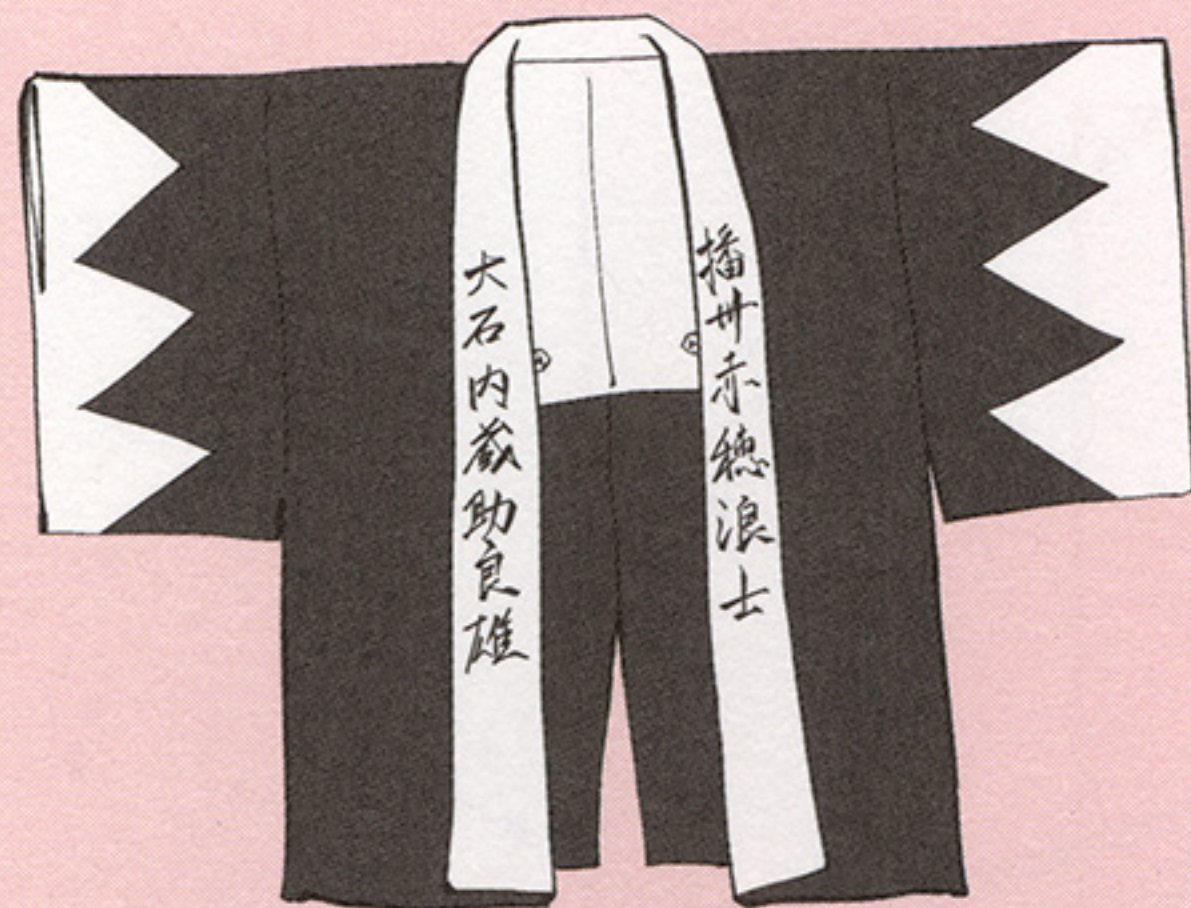
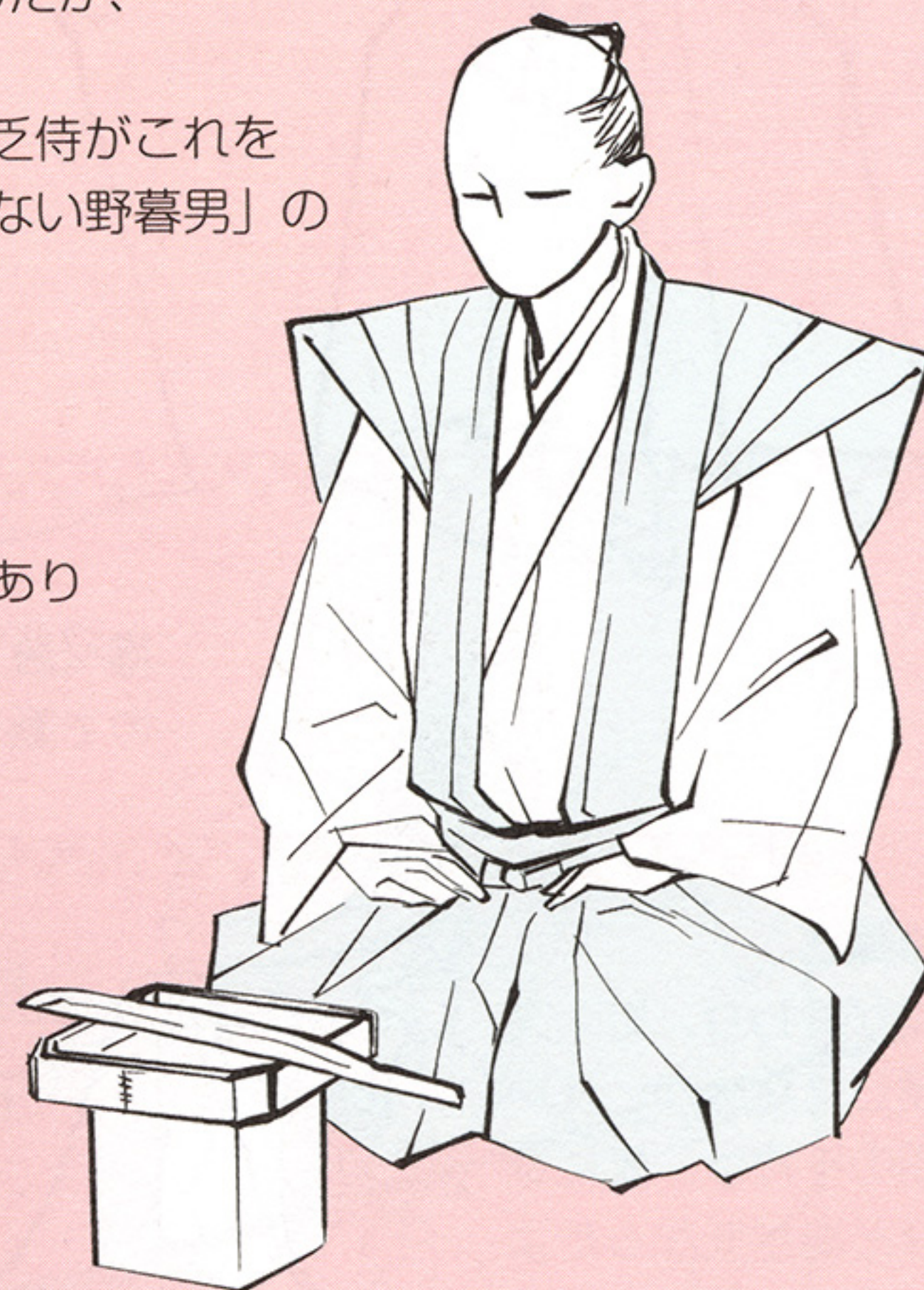
新選組といえば、特徴的な浅葱のダンダラ模様（雁木模様、山形模様）の羽織。
しかし、現存する実物資料は発見されていないため、模様は袖だけなのか、袖と裾にもあったのか、山形の大きさや数、誠の字の染め抜き、紋の有無など、研究家によっても諸説あり、作家によってさまざまな描き方がされています。

袖と裾の両方にダンダラ模様、五つ紋、誠の字なしの例

打裂羽織
背裂、引裂ともいい、帯刀・乗馬の邪魔にならないよう、
陣羽織のように後身頃中央に背割（スリット）を入れた羽織。

ONE POINT

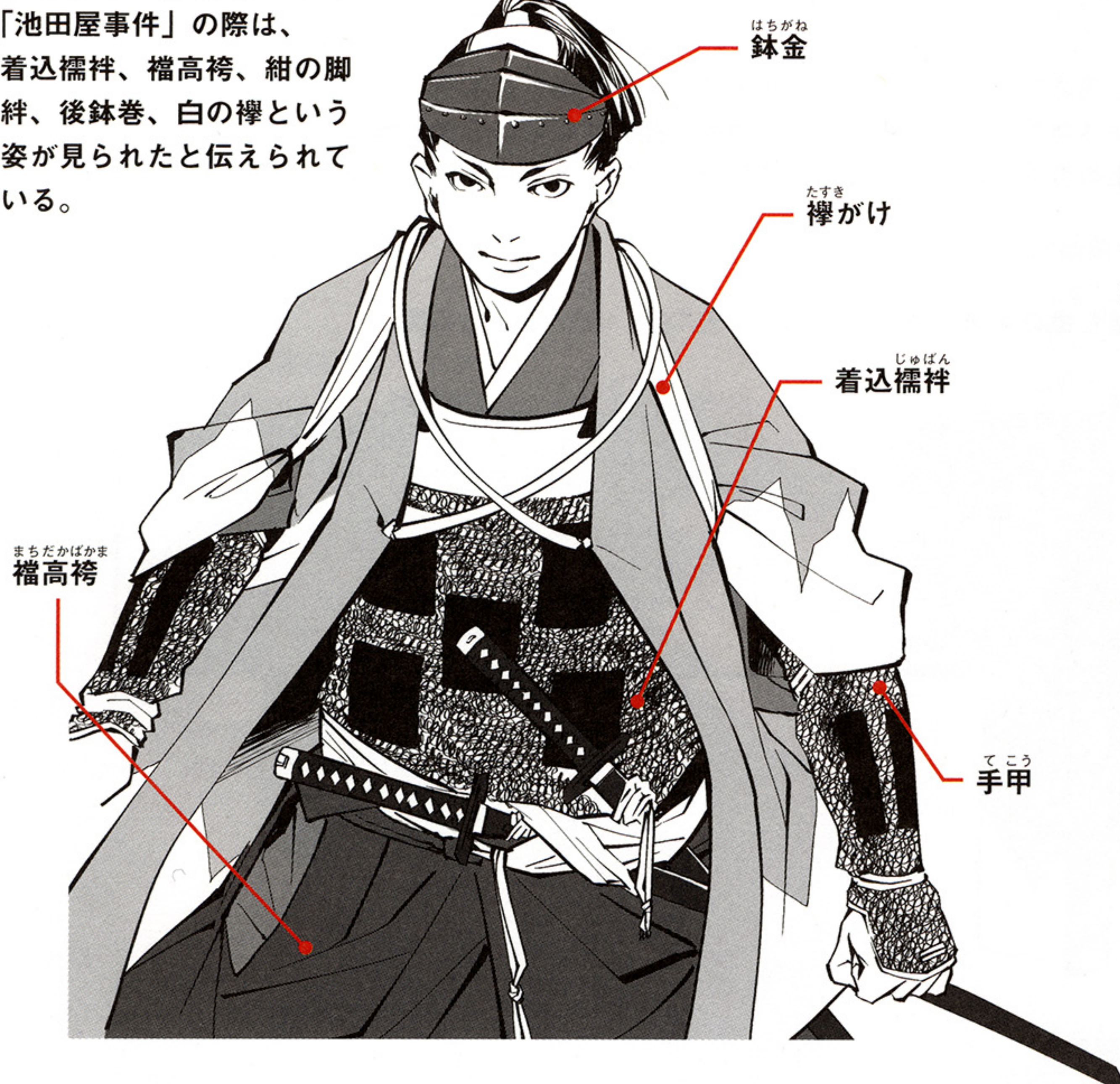
新選組の羽織
武士の正装として代表的だった「浅葱色」（淡い藍色）は、羽織裏としても流行しましたが、
江戸では次第に流行遅れになっていきました。
流行遅れになっても、まだ「浅葱木綿」の裏地を粋がっている地方からの参勤者や貧乏侍がこれを着るのは、遊里の笑い種で、「浅葱裏」といえば江戸では「流行遅れな田舎侍」「もてない野暮男」の代名詞でした。

新選組は、赤穂浪士への憧憬から、四十七士討入りの芝居になぞらえて、
「ダンダラ模様の羽織」を制服に選んだといわれています。
あえて「浅葱色」を選んだのもまた、水浅葱（白に近い淡い藍色）が、切腹裃の色であり
赤穂浪士と同じく、忠信を強く誓ったものだという説はロマンを感じさせます。
しかし、これも諸説あり否定的な意見
もあります。

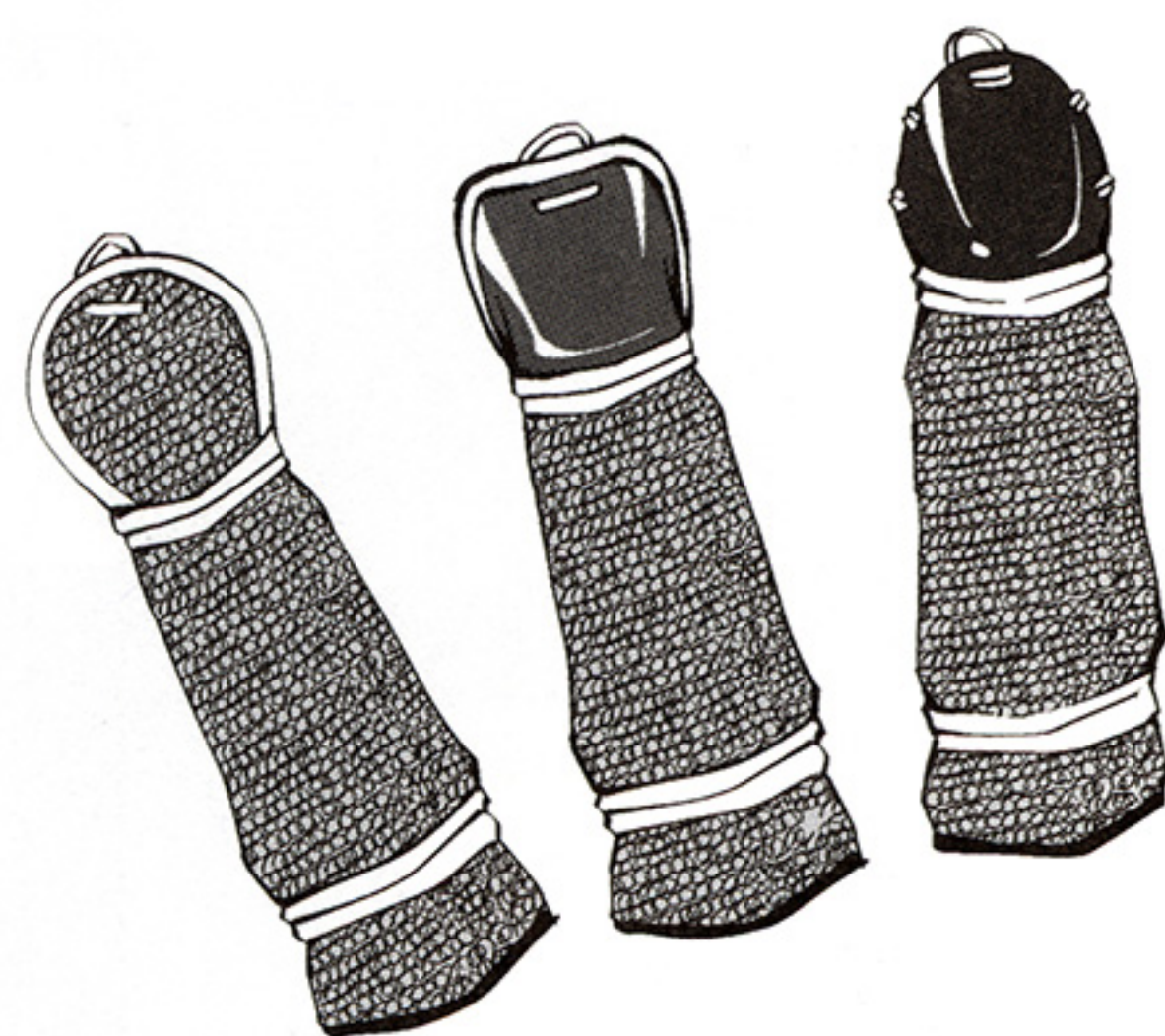
この浅葱のダンダラ羽織自体、実際にはあまり着用されていなかったのではという話もあり、一説には、池田屋事件、もしくは芹沢鴨暗殺の後には廃れ、新選組は「黒衣に黒袴」 という黒尽くめの風体であったといいます。

赤穂浪士の「雁木の羽織」

新選組の衣装色々

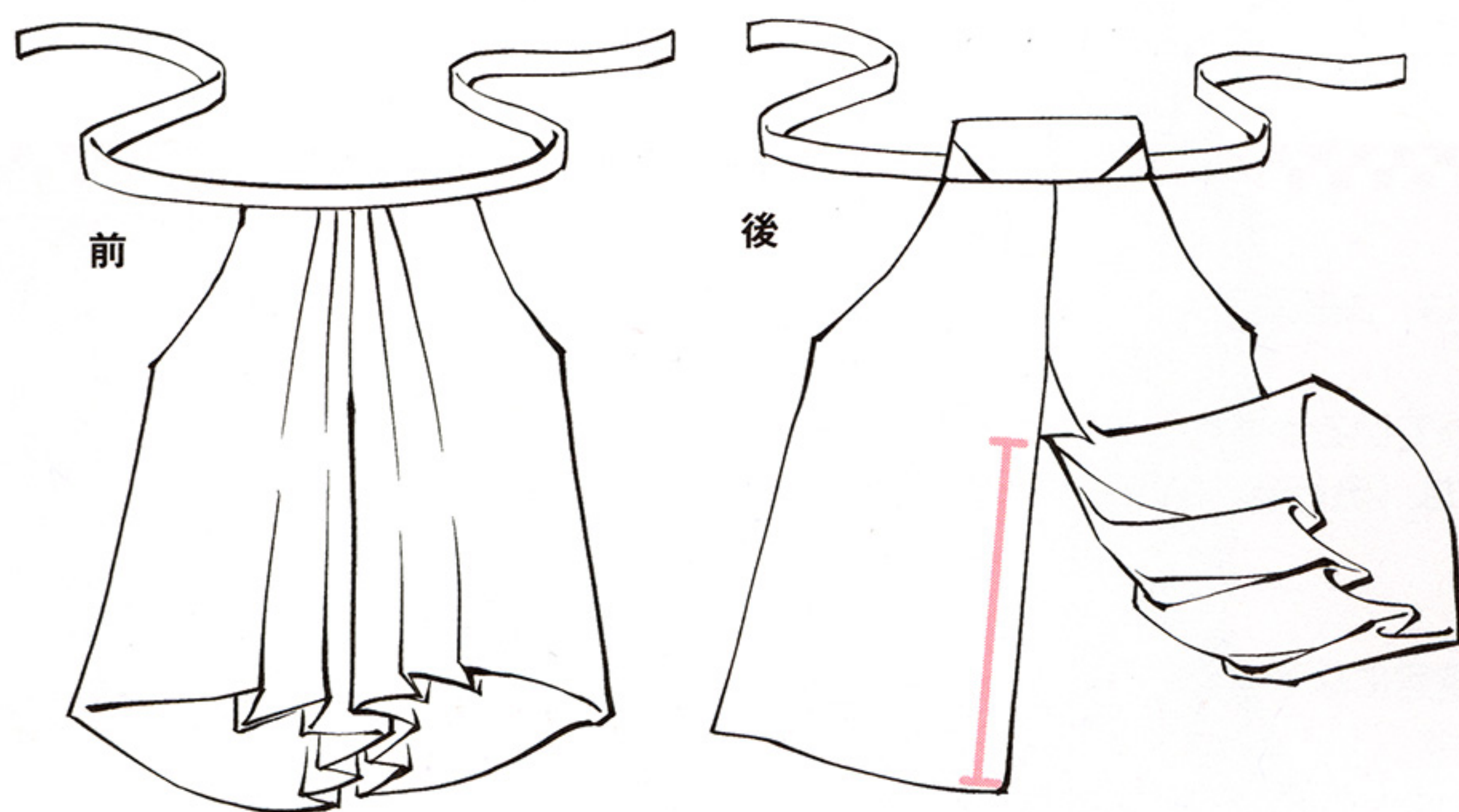
先述のように、新選組に関する現存史料が少なく、手記や創作によるものが多く、衣服や武器、防具についても諸説あります。

新選組を一躍有名にした「池田屋事件」の際は、着込襦袢、襠高袴、紺の脚絆、後鉢巻、白の襷という姿が見られたと伝えられている。

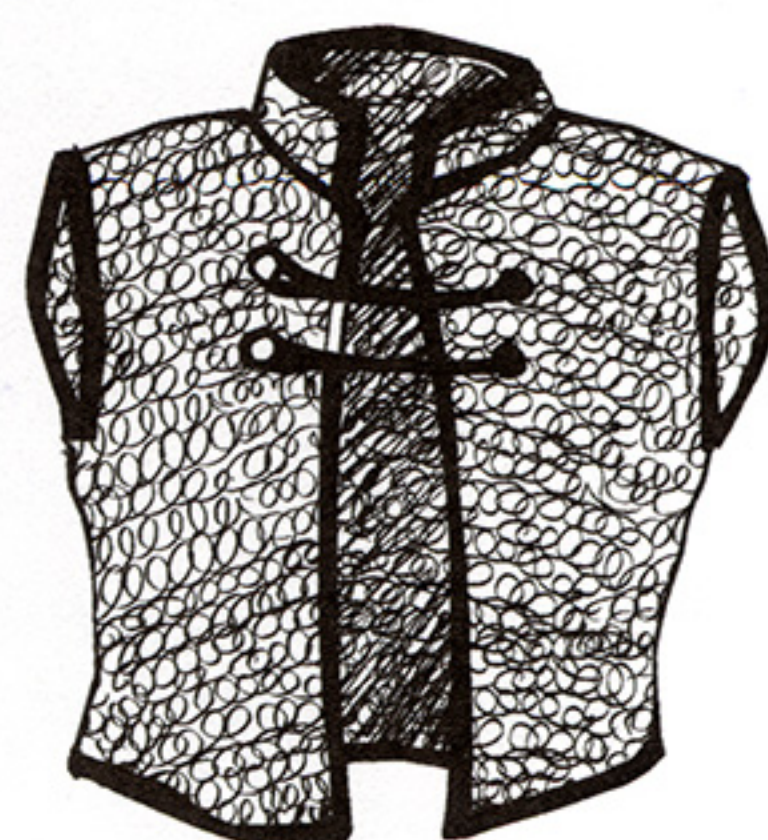
鉢金
襷がけ
着込襦袢
襠高袴
手甲

手甲

手を守る防具の一種。
鎖、漆塗り、鉄製の甲が付いたものなど、さまざま。

襠高袴

動きやすいよう、襠（股下）を高めに仕立てた、武士の袴。
乗馬などに用いた。現在は男性の一般的な正装の袴になっている。

前
後

襠（股下）が充分にあるので動きやすい。

着込襦袢

細い鎖をつなぎ合わせ、襦袢（帷子）などに綴じ付けた物。
鎧や衣服の下に着込む。「着込み」「鎖襦袢」「鎖帷子」ともいう。

ONE POINT

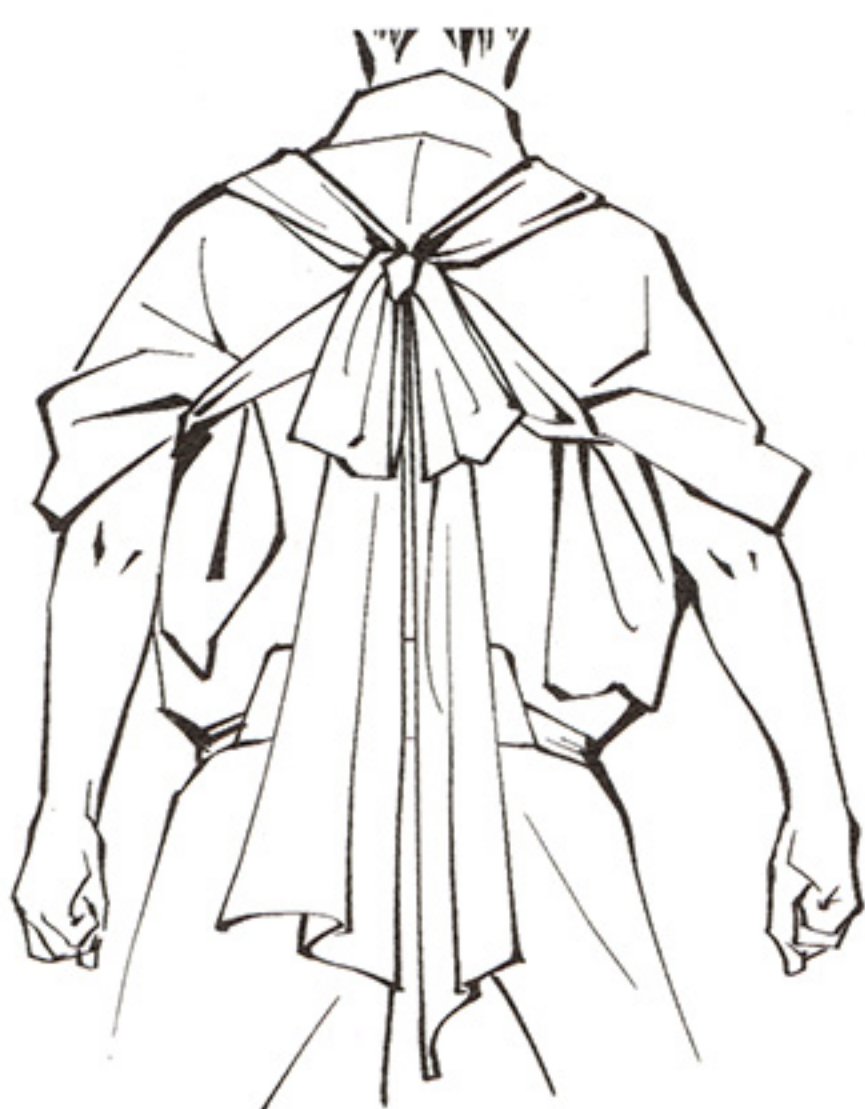
袴の襠の高さ

戦国時代が終わり、町人文化が台頭したためか、江戸時代中期の平袴は、馬に乗れないほど襠が低かったようです。
そのため、「馬乗り袴」という特別に襠の高いものが登場しました。

襠が低い

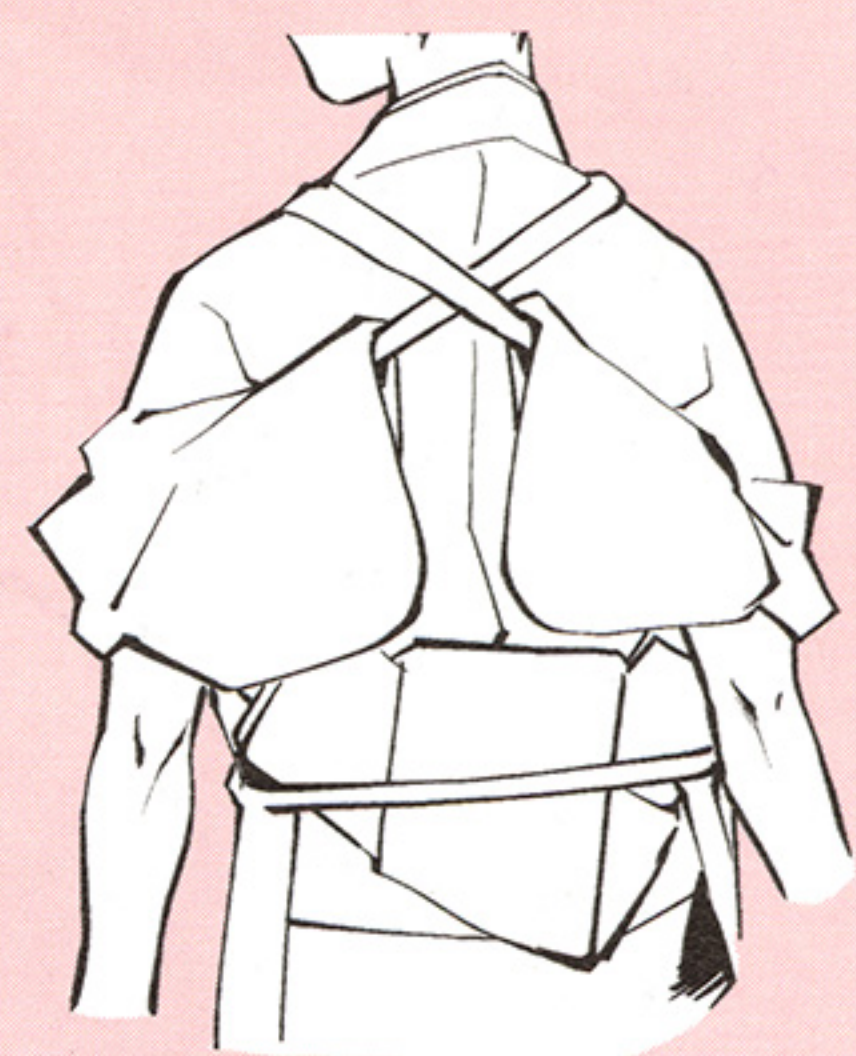
襷がけ

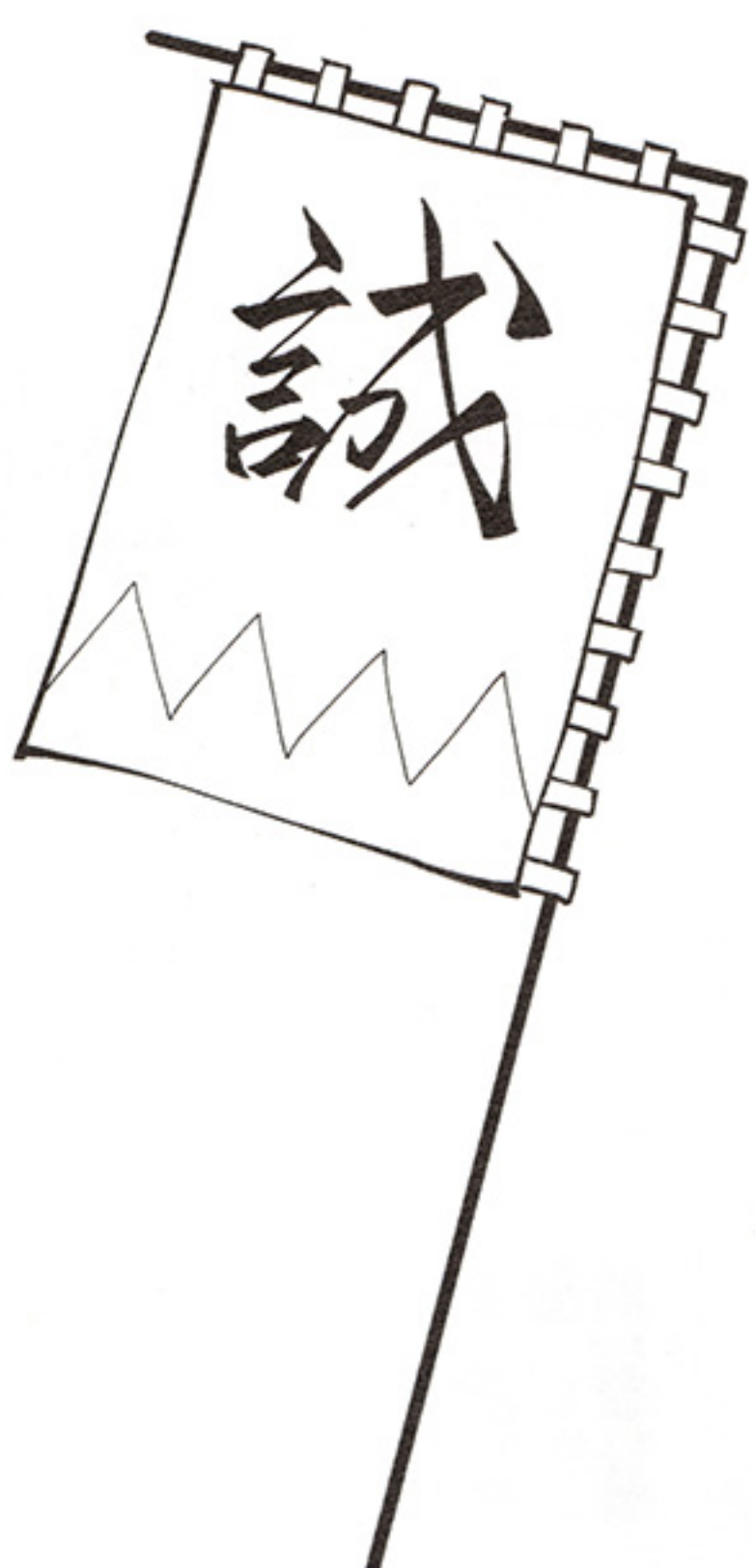
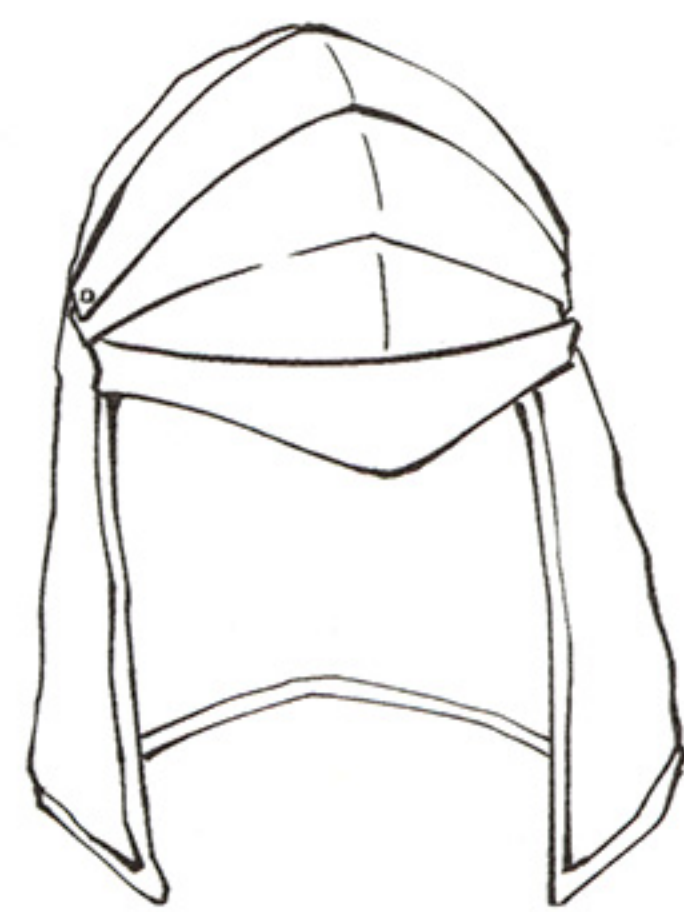
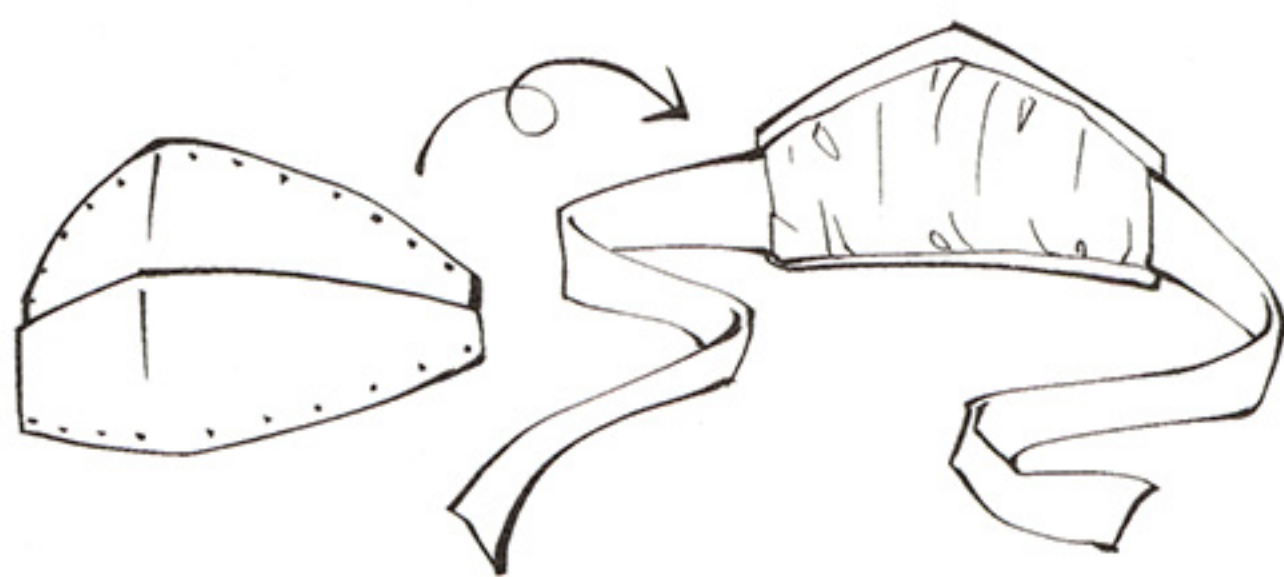
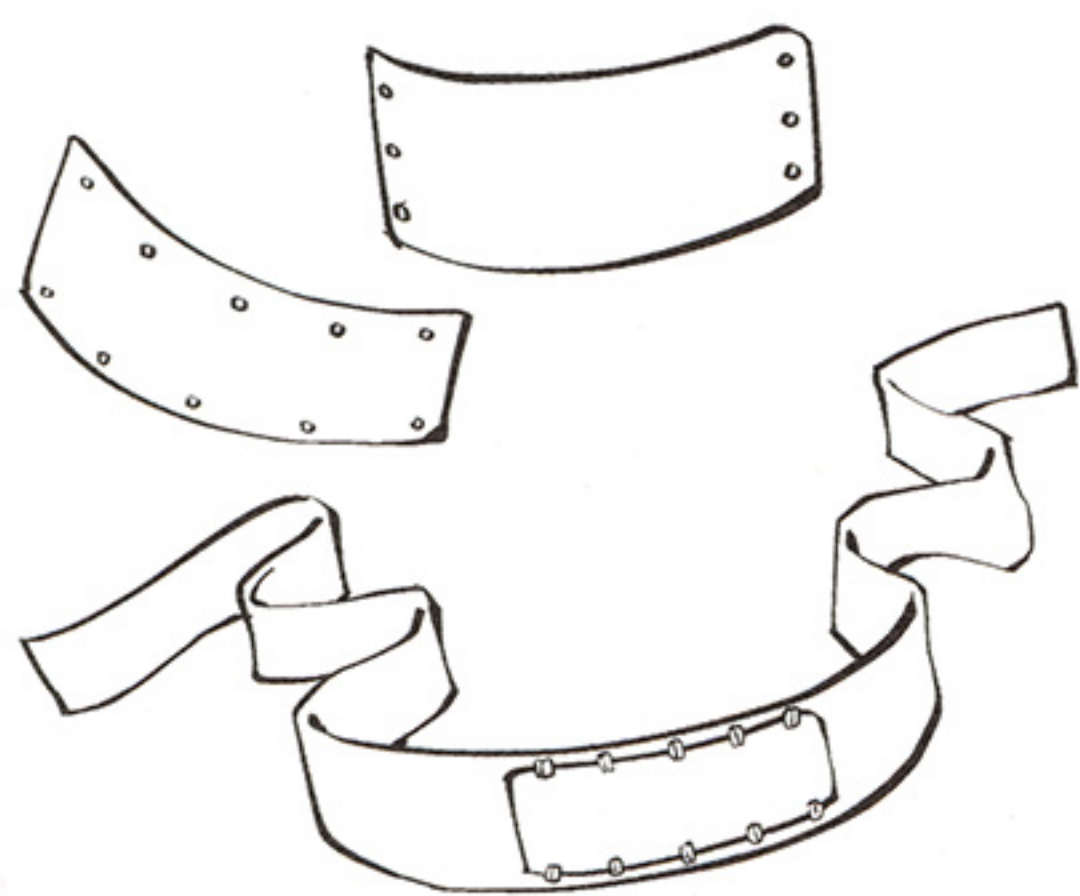
羽織や着物の袖が邪魔にならないように紐で袖を括った。

左肩の辺りで結んだ例。
たくしあげた袖が、邪魔にならないように、袖は後ろに。

前に結び目がくると邪魔なので、後ろにまわすこともある。
長い「しごき」などで装飾的にすることも。

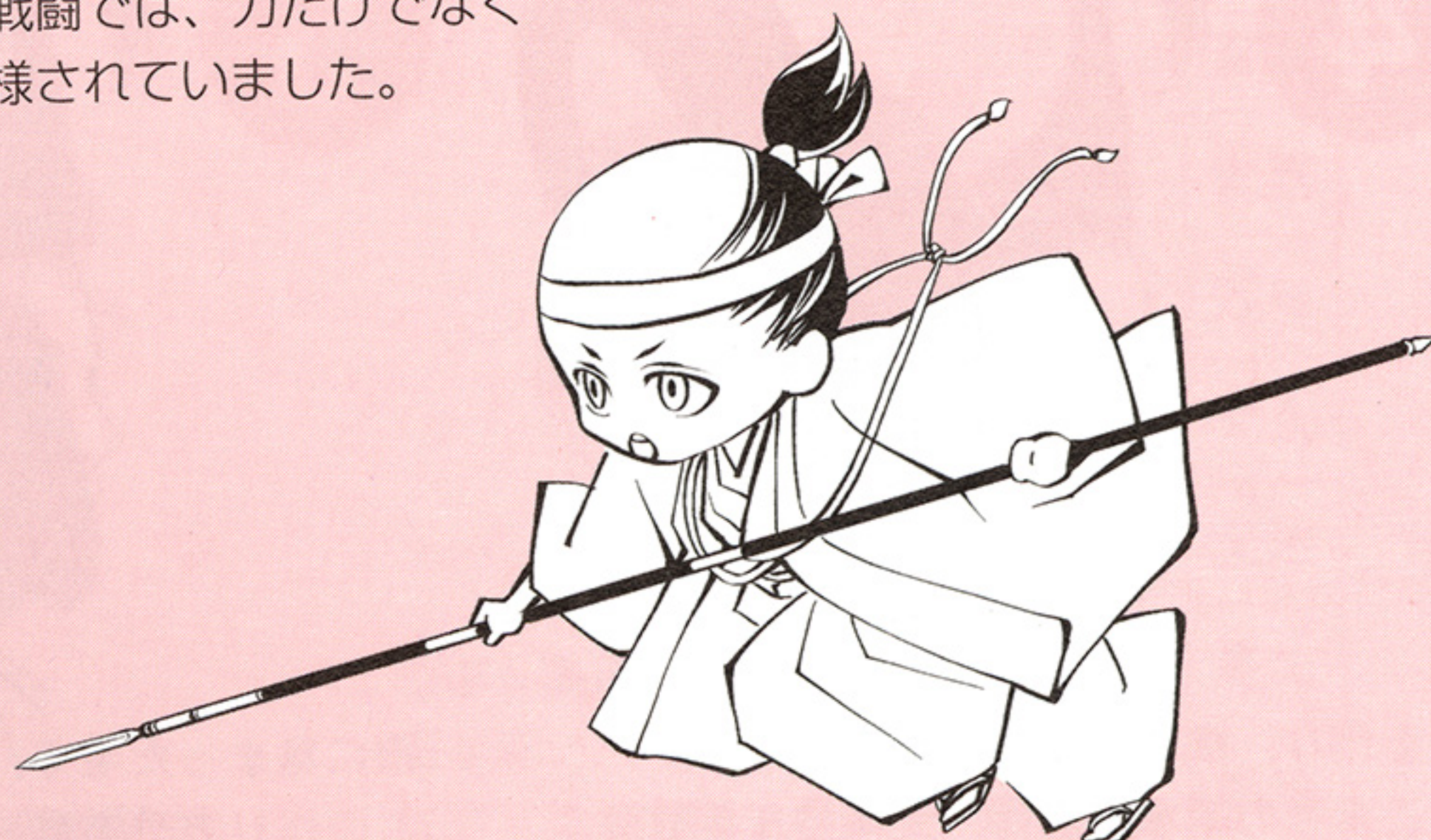
ONE POINT

女性の襷がけ
女性が主に使う、袖がシワにならない上品な襷のかけ方もある。

鉢金（はちがね）

額を守る防具。
二段式、三段式、ヘルメットのようなものなど、さまざまな形状のものがあった。

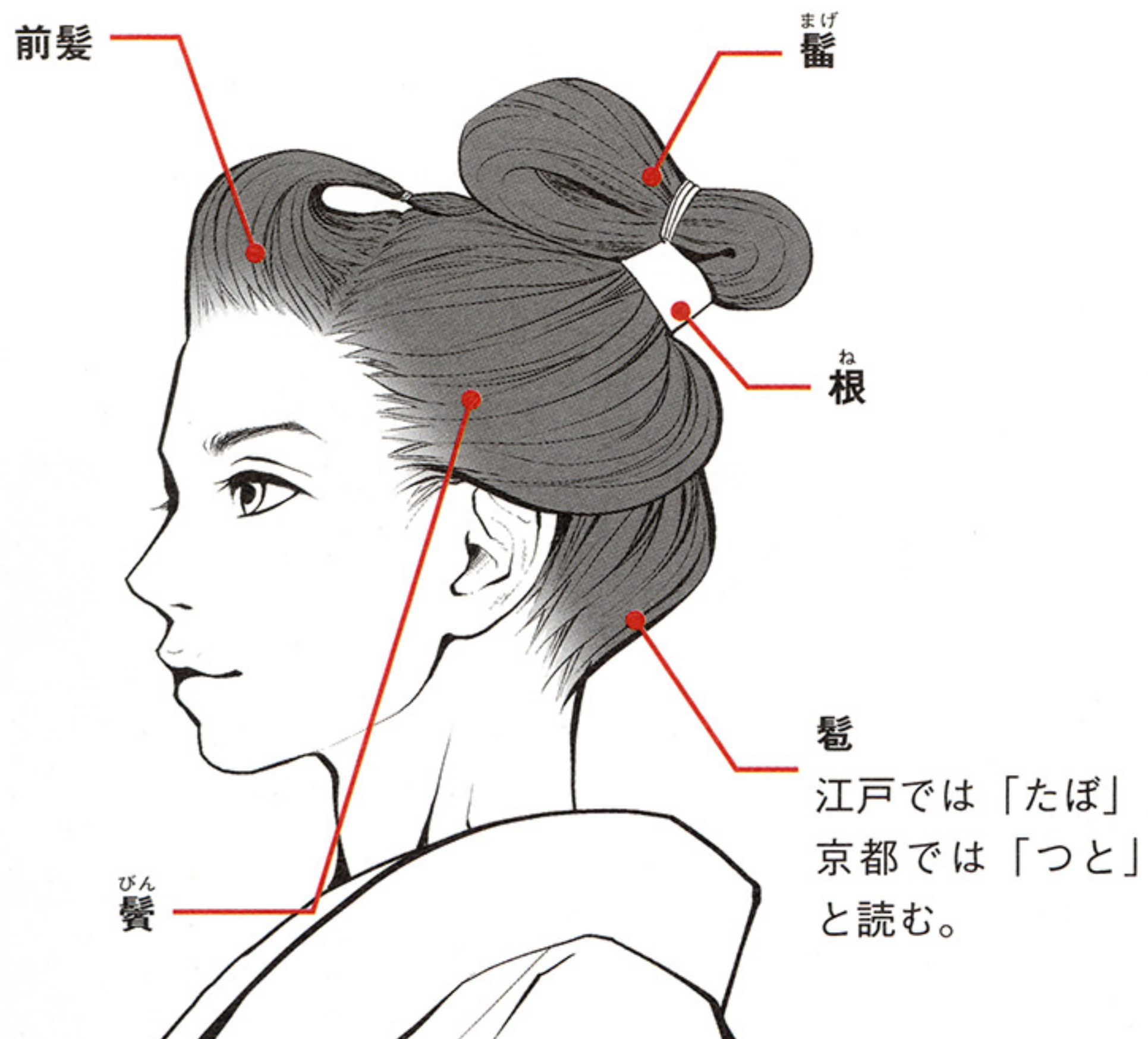
誠

ONE POINT

槍（やり）
実際の戦闘では、刀だけでなく槍も多様されていました。

21 髪型

和装の髪型は、時代の流行や職業によってさまざまな種類があります。
複雑な髪型も構造を理解することにより、リアリティのある結髪が描けるようになります。

日本髪の構造

日本髪は、主に４ヶ所のパーツと、
それを合わせた髷とで構成されています。

前髪
髷
根
髱
江戸では「たぼ」
京都では「つと」
と読む。
鬢

ONE POINT

道具色々

元結
現代の「水引」に似た、紙製の紐。
基本的に髪はこれで結ぶ。

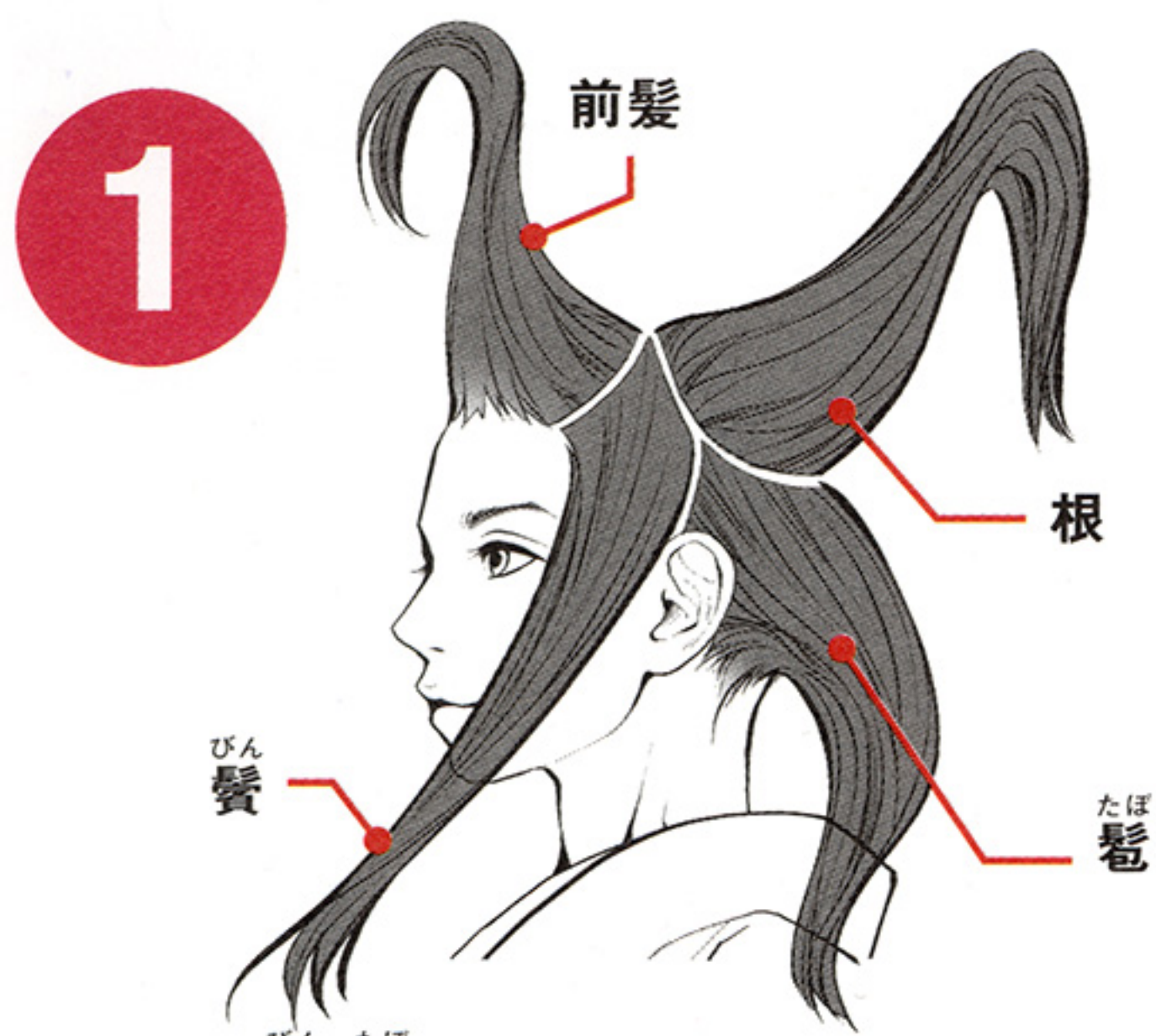
平元結
元結で結んだ上に、装飾として巻く、
細長い紙。

笄
結う時、髪を巻き付けたりした棒。
後から挿し込むだけの場合も。

手絡
鹿の子、綿などの、
髷にかける装飾。

結髪の結い方

これは一例で、地域などで手順は異なります。最初に前髪を結って根に括る手順も一般的です。

1
前髪
根
鬢
髱

前髪、根、鬢、髱の４つにパーツ分けする。

2
根を元結でくくり、ポニーテールに。
（髪型によって、ここでの高さを変える）

3
髱を作り、根（ポニーテール）に
あわせて一緒にくくる。

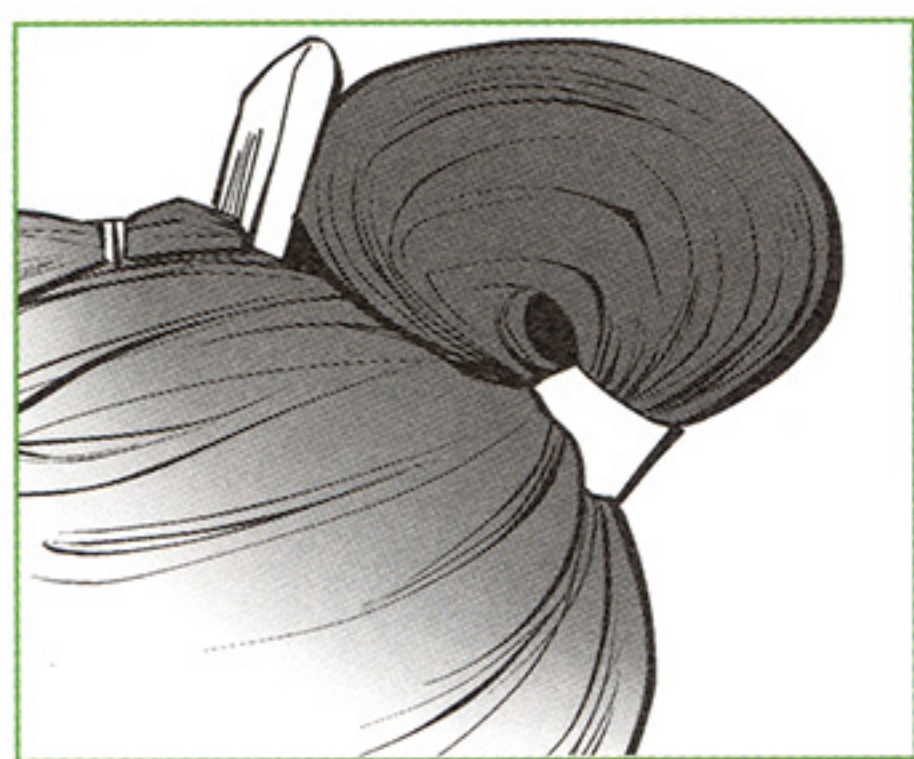
4
鬢を作り、根にさらに一緒にくくる。
ここまでの基本構造は、大体どんな髪型
も同じ。

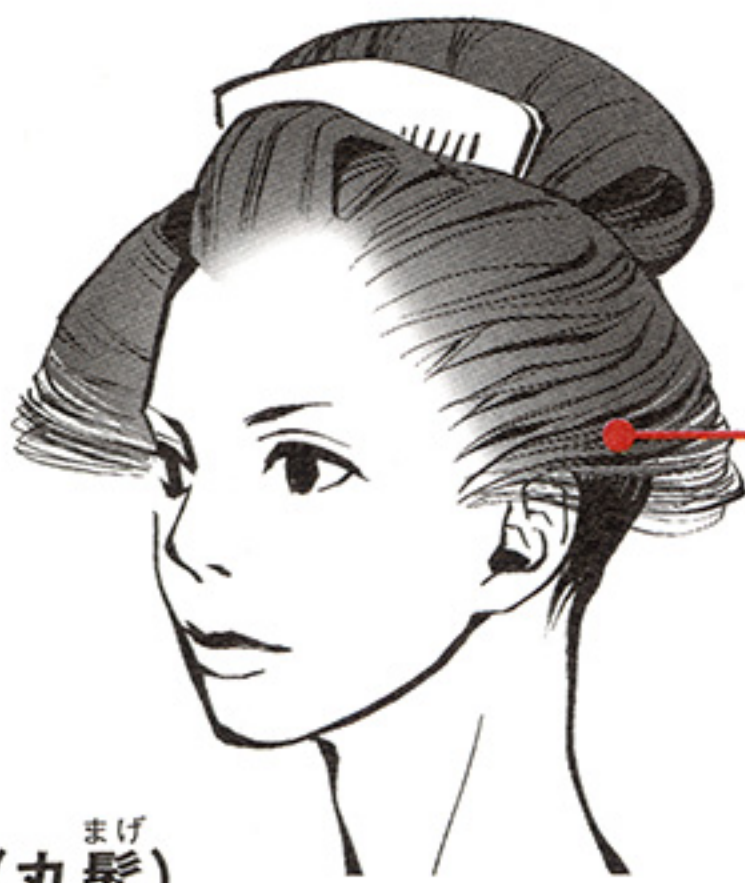
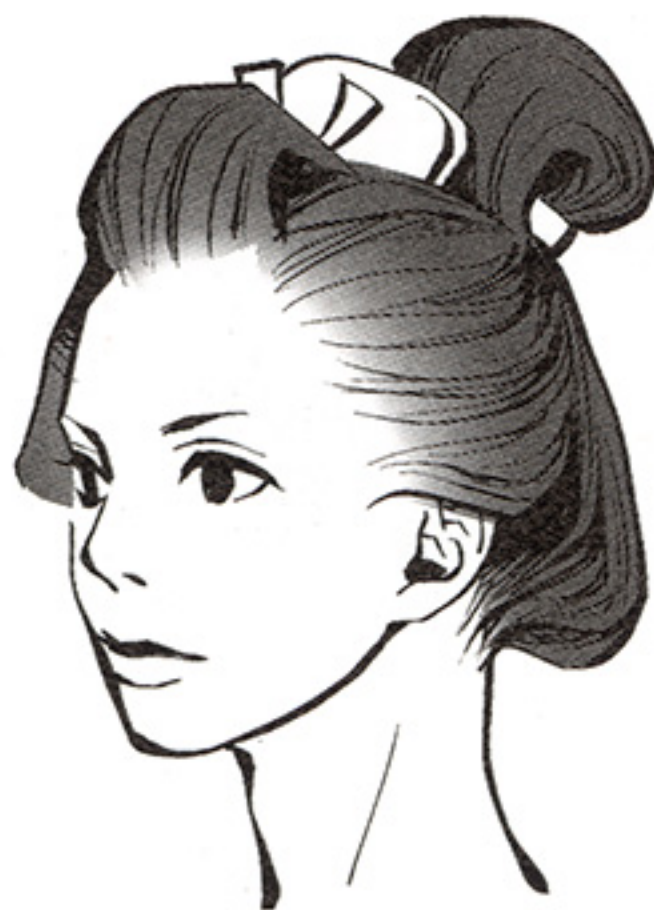
5
例：島田髷

根に集まった毛で、髷を作る。
この作り方や道具・飾りで、数百あると
いうさまざまな髪型になっていきます。

6
前髪を作る。櫛を挿したり、
髷に鹿の子や丈長をかけたり、
簪、根掛、笄など色々に装飾する。

島田髷と丸髷で髪型の時代が分かる！

● 丸髷

江戸後期〜昭和まで結われていた髪型。主婦といえば丸髷、というほどで、既婚者の代表的な髪型。

勝山
元禄時代。
髷が中空の輪になっている。

勝山（丸髷）
江戸後期頃から髷がつぶれ、丸く幅広くなる。

丸髷
幕末頃。
髷の大小、厚薄は年齢などによって違い、若い婦人は大きめ、年をとるほど小さくした。

● 島田髷

二つ折りし、中央で結んだ髷。
江戸初期〜現在まで結われている髪型。様々にスタイルを変えながら、子供、大人、庶民、遊女、武家、公家まで、幅広く結われていく。

大島田
髷先がとても大きく、前髪に乗せたようなもの。

元禄島田
前髪が小さい。鬢と髱は境目がはっきりせずに髱だけが後につきだしている。

髷は、薄く細い。

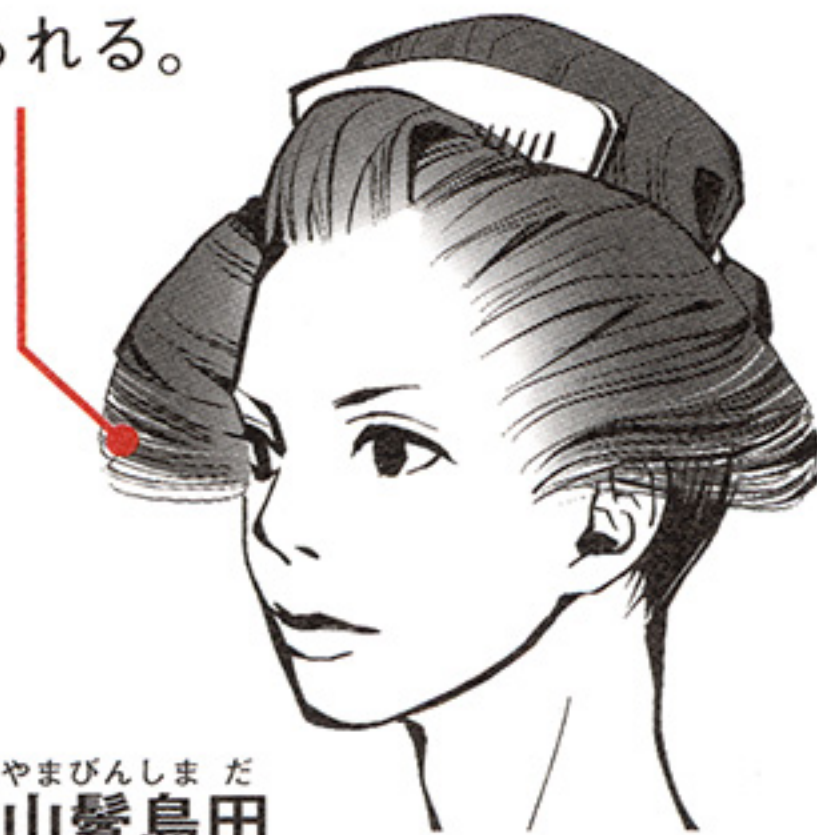
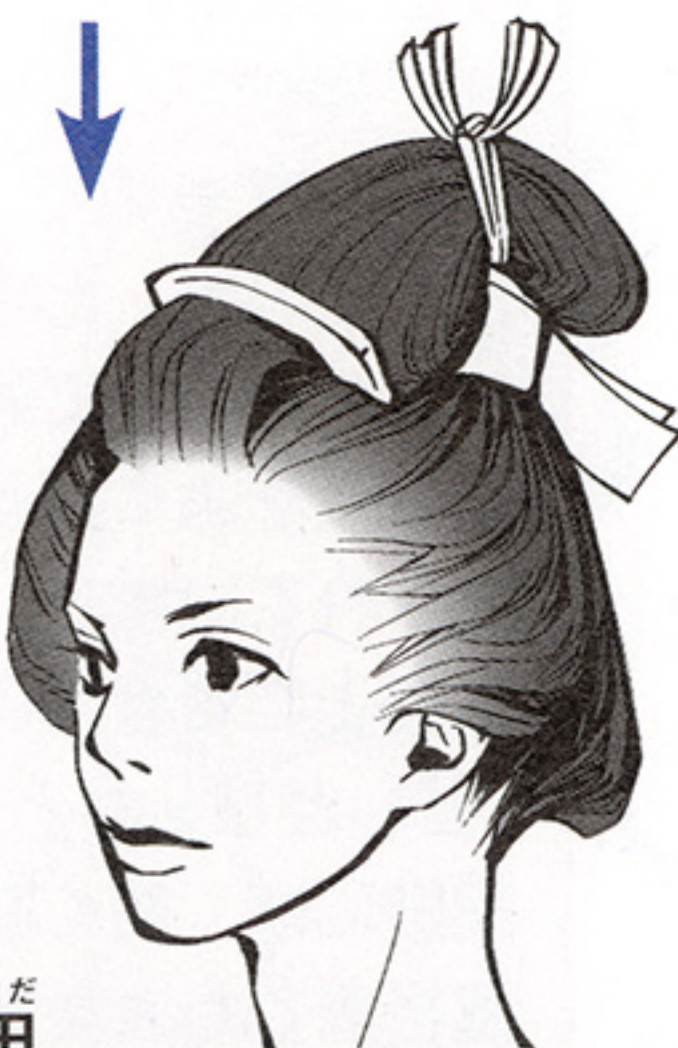
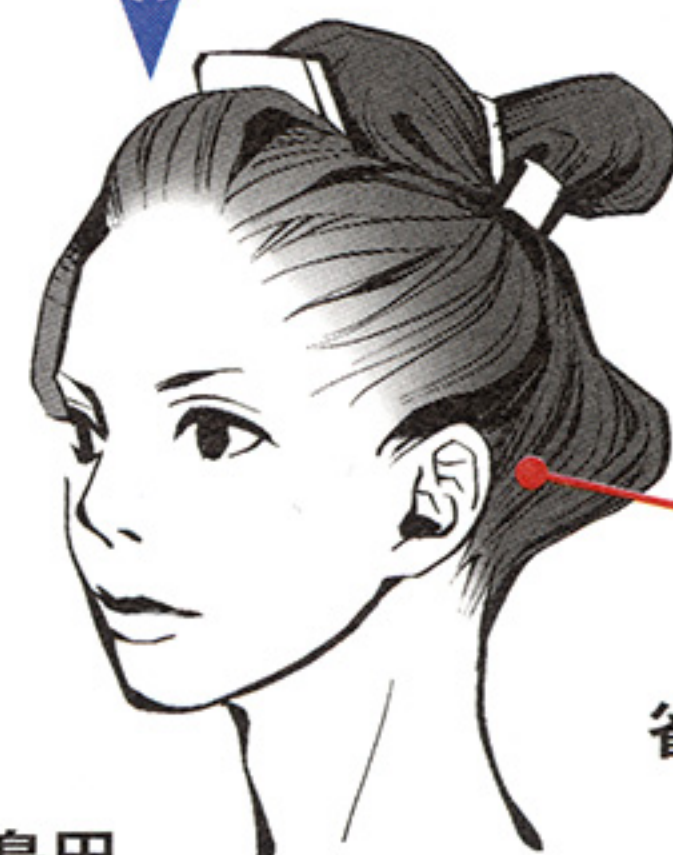
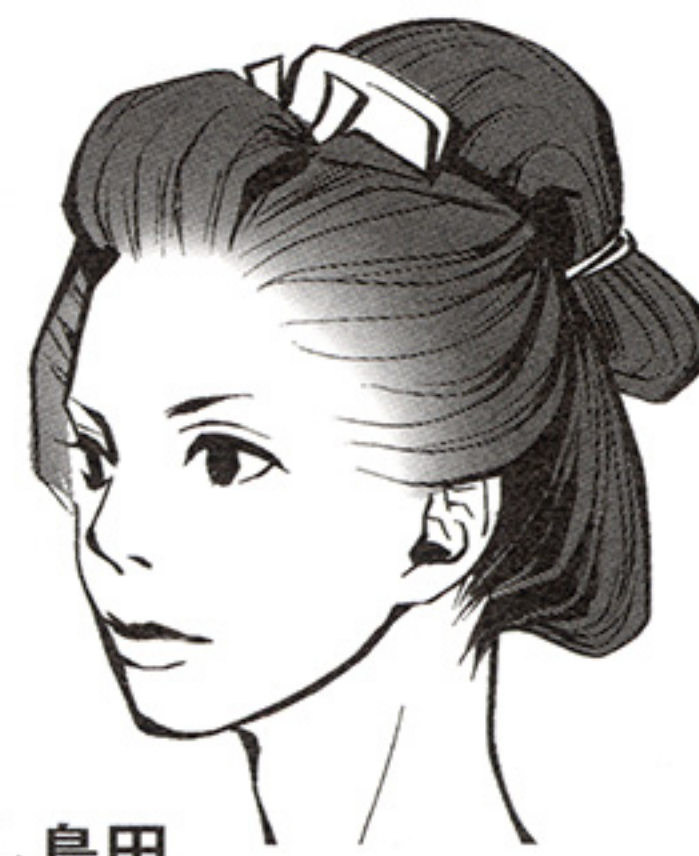
かもめ髱

春信風島田
春信の浮世絵によく見られる当時の流行。宝暦〜明和ごろ町家の娘に結われた。

セキレイ髱

小まん島田
髱が後退・鬢が張り出す前の過渡期。

雀鬢

灯籠鬢
向こう側が透けて美しい。歌麿の美人画などに見られる。

円山鬢島田
明和以降、今度は全く後ろに突き出ない髱が流行。逆に鬢が大きく横に張り出すように。

奴島田
いわゆる高島田。武家の髪型で、現在の花嫁の髪型。

つぶし島田
根が低い、つぶれたような島田。江戸・京・大阪で幅広く、明治まで結われた。

元和 / 寛永 / 正保 / 慶安 / 承応 / 明暦 / 万治 / 寛文 / 延宝 / 天和 / 貞享 / 元禄 / 1700 / 宝永 / 正徳 / 享保 / 元文 / 寛保 / 延享 / 寛延 / 宝暦 / 明和 / 安永 / 天明 / 寛政 / 1800 / 享和 / 文化 / 文政 / 天保 / 弘化 / 嘉永 / 安政 / 万延 / 文久 / 元治 / 慶応 / 明治 / 1900

女性の髪型色々

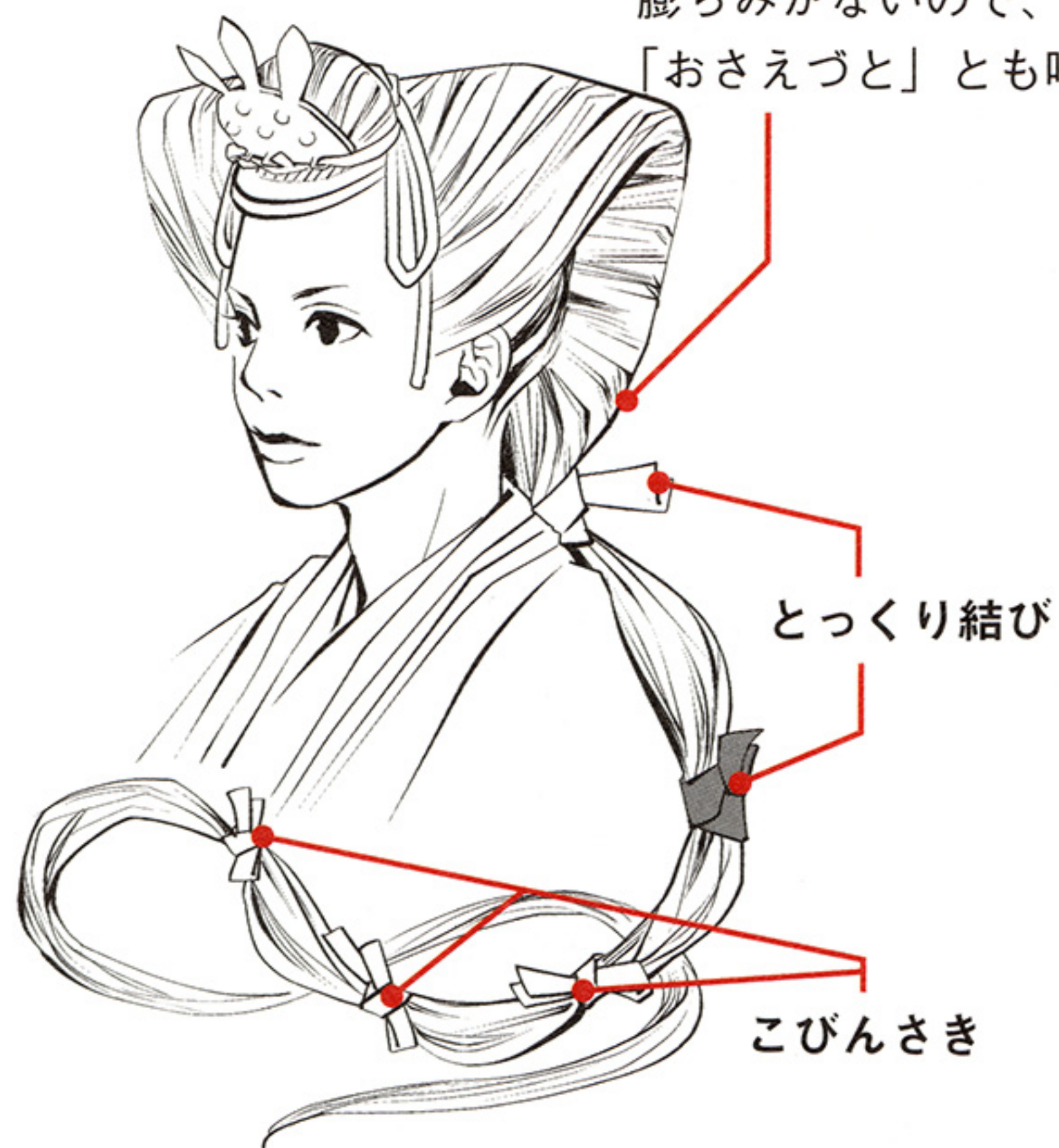
葵髱
膨らみがないので、
「おさえづと」とも呼ばれる。

とっくり結び

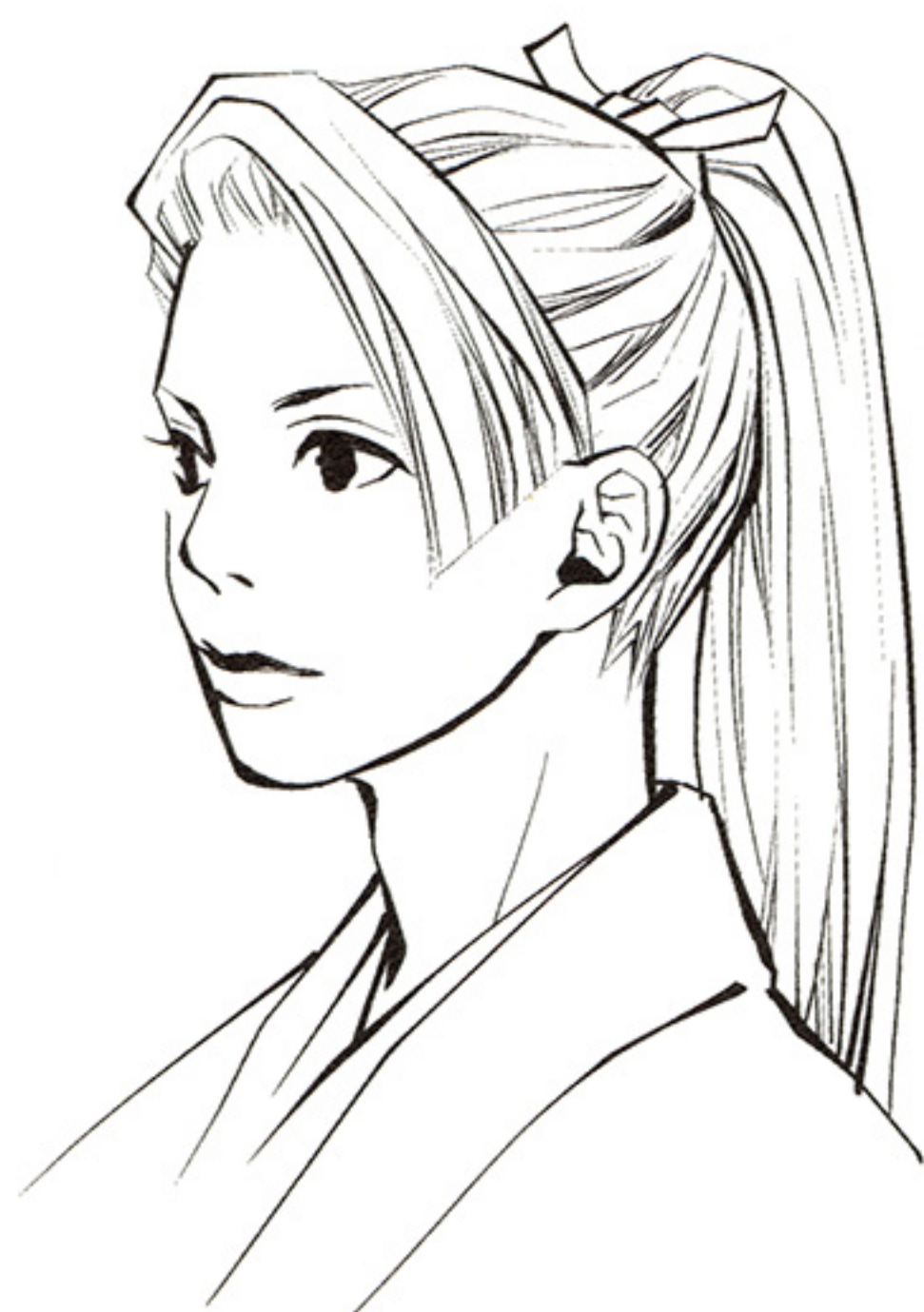
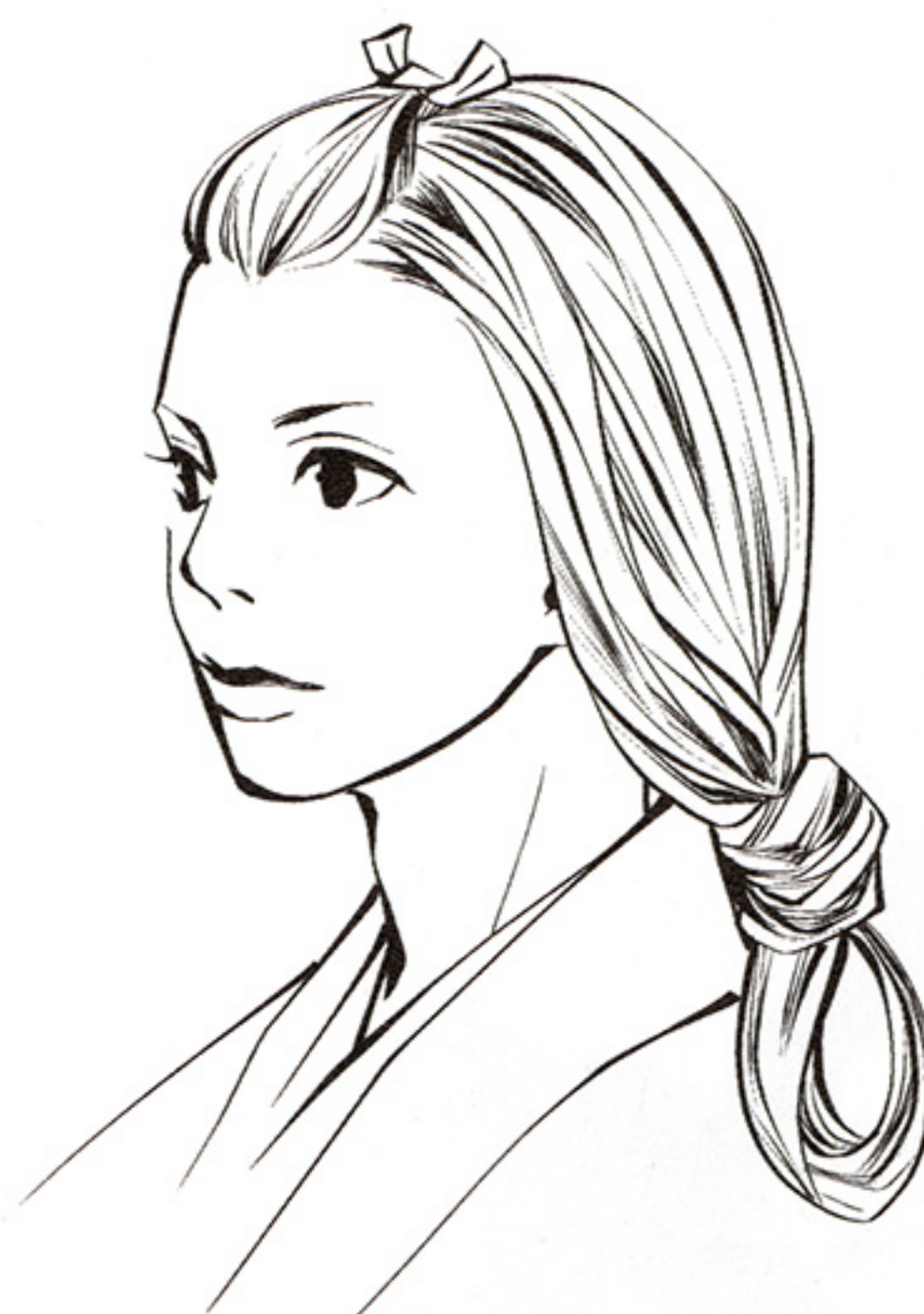
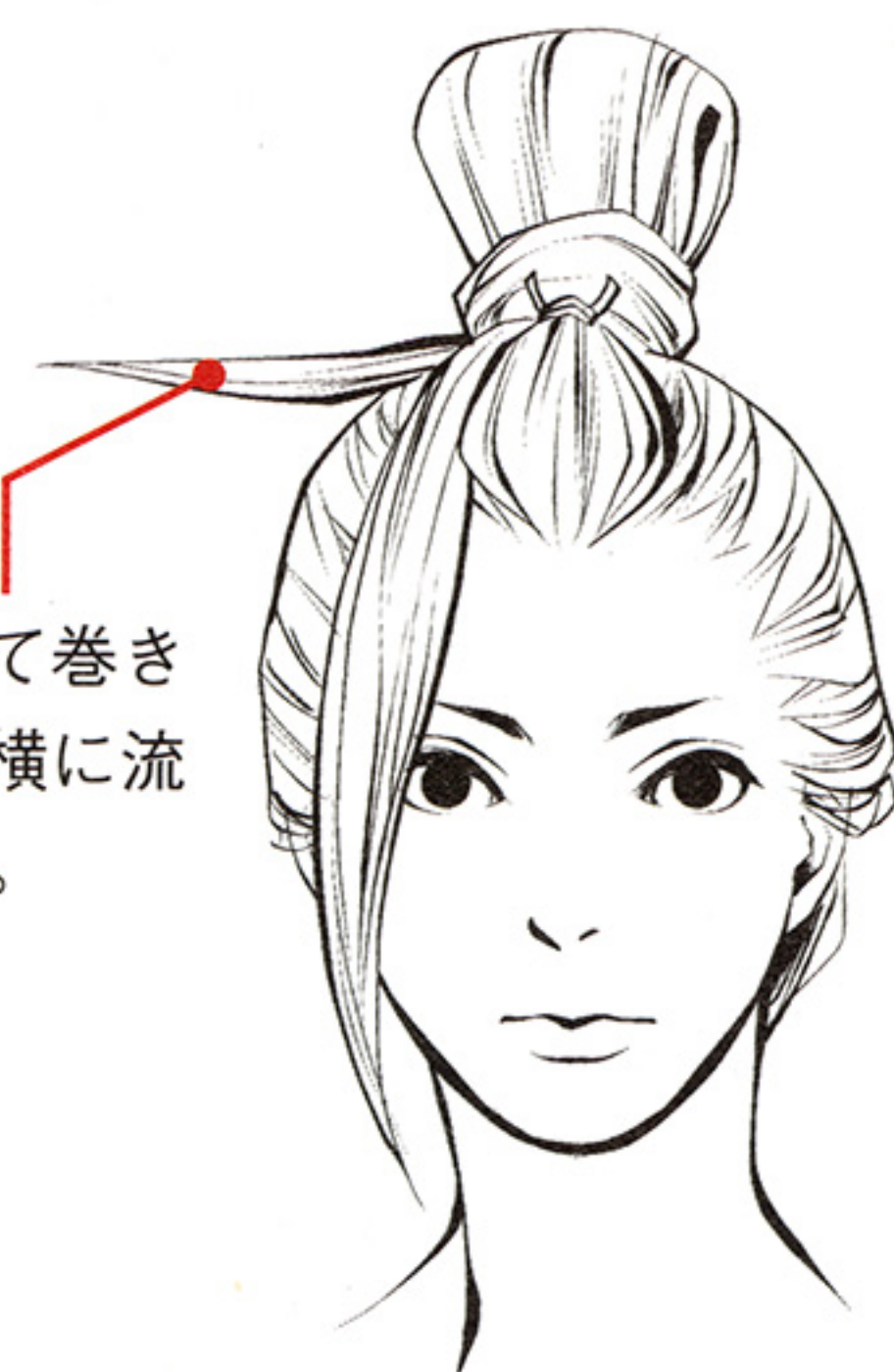
こびんさき

横から

葵髱

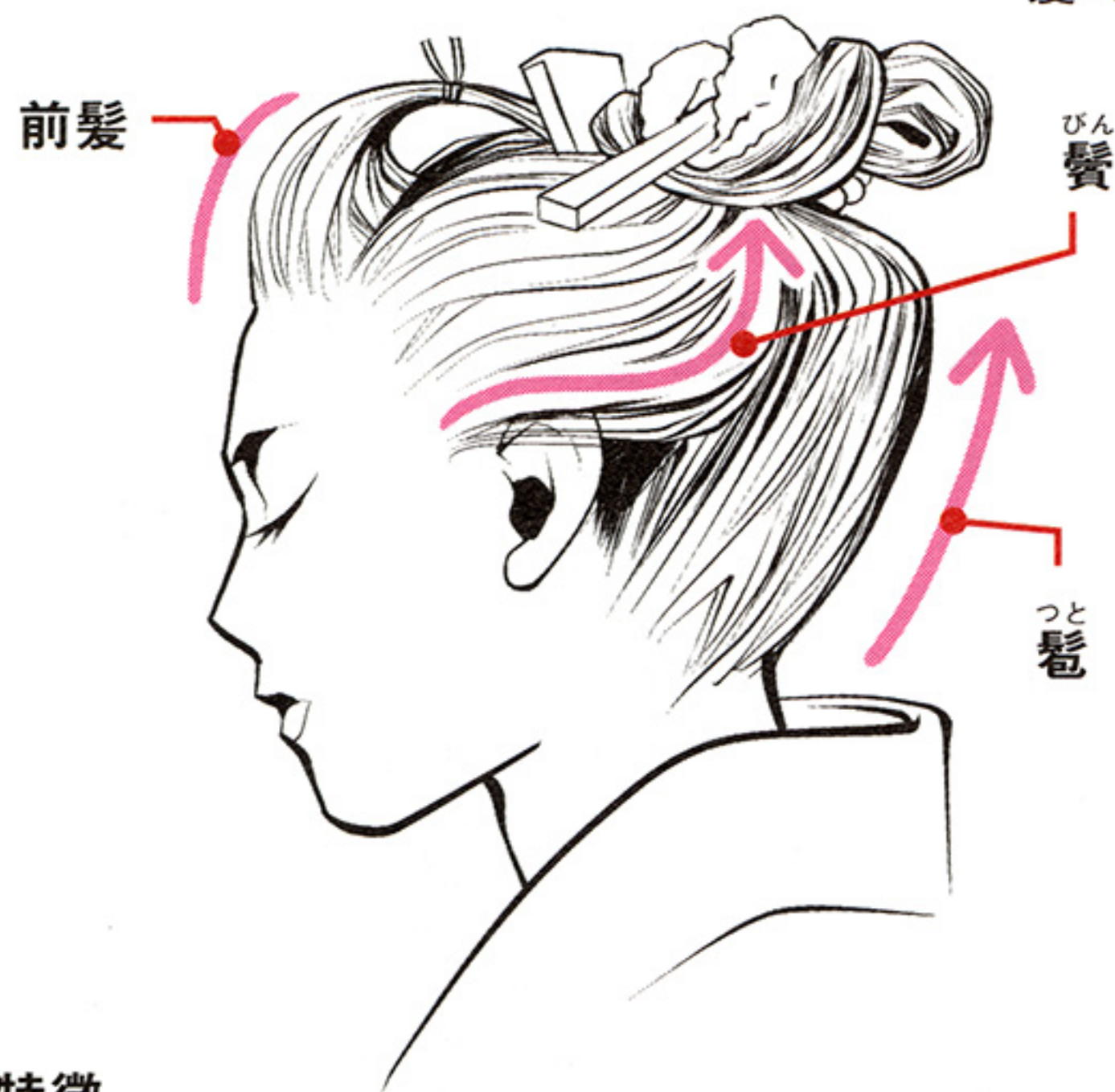
横から見ると、
膨らみがないの
がよく分かる。

おすべらかし
宮中の儀式の髪型。垂髪部分は四または五ヶ所結ばれている。現在も宮中で用いられる。

葵髱つぶ髷
女官見習いの髷といわれる。
宮中の髪型で一般と大きく違う特徴が、葵の葉のような、平らで大きな「葵髱」。

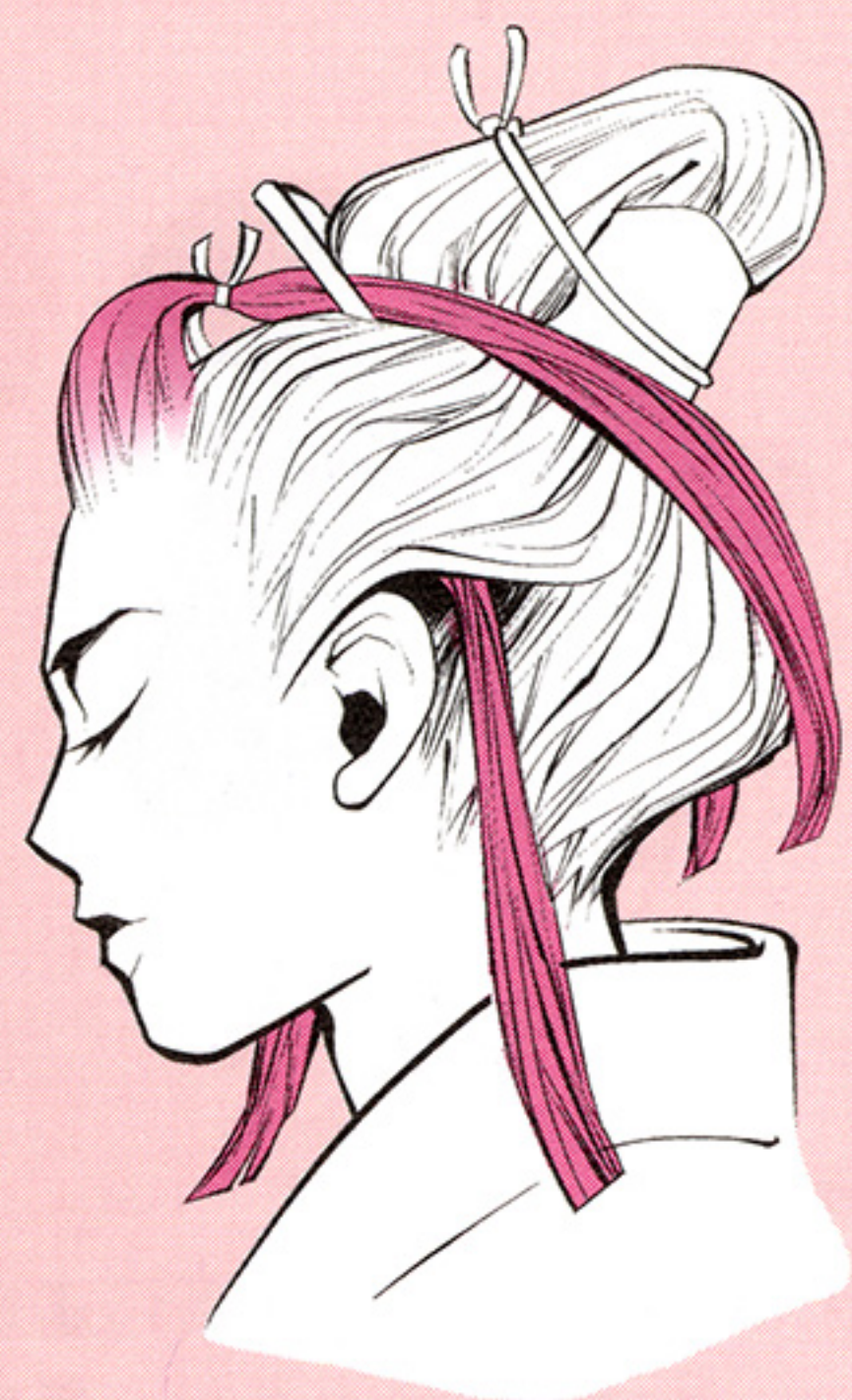
毛先はすべて巻き
付けたり、横に流
したりする。

下げ髪
室町〜桃山時代。「根結い垂髪」ともいい、現在のポニーテール。

玉結び
室町〜桃山時代。高い位置に大きく輪を作ったものが下級で、髪の先のほうに小さく輪を作るのが品がある。
髪の先を布で包むことも。

立て兵庫
江戸初期。立てた髷の根本に、毛先を巻き付けたものを「兵庫髷」といい、他にも多くの種類がある。

前髪

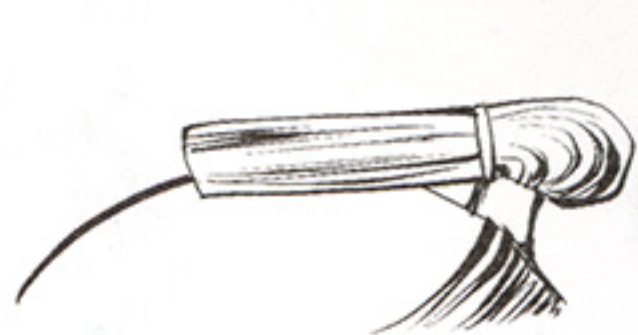
鬢

髱

京都の特徴
京都（上方）は、江戸とは同時代でも流行が違う。
後期の傾向として、髱はしゅっと上がり、鬢はやわらかくたわむような曲線を描く。
髪型自体、関西だけのものもあり、この例は江戸後期に、京都の若い女性だけに結われた「粋書髷」。

ONE POINT

前髪を飾りに？
長い前髪の毛先を装飾に使うことがあります。
櫛で押さえ、髻の左右から後頭部に垂らすものを「振り分け」「いたずらの毛」と呼びます。
これを鬢の中に通すこともあり、浮世絵をよく見ると美人画などに描かれています。
髷の上に渡せば「橋の毛」と呼び、「おしどり」などに見られます。
実際には、長く前髪を伸ばすのは富裕層でも大変なので、付け毛を使用していました。

例：かしまや島田

男性の髪型色々

男性の結髪は、かつて冠下の髪型（髻）だったものが、無冠の時代になり多様化します。
髷の構造はほとんど基本の二種類なので、ここからバリエーションを増やせます。

丁髷
形が「丁」の字。

二つ折り髷

● 武士

郎君風
大名の息子などが結った。

銀杏髷
侍の一般的な結い方。

茶筅髷
戦国時代～江戸初期に結われていた。

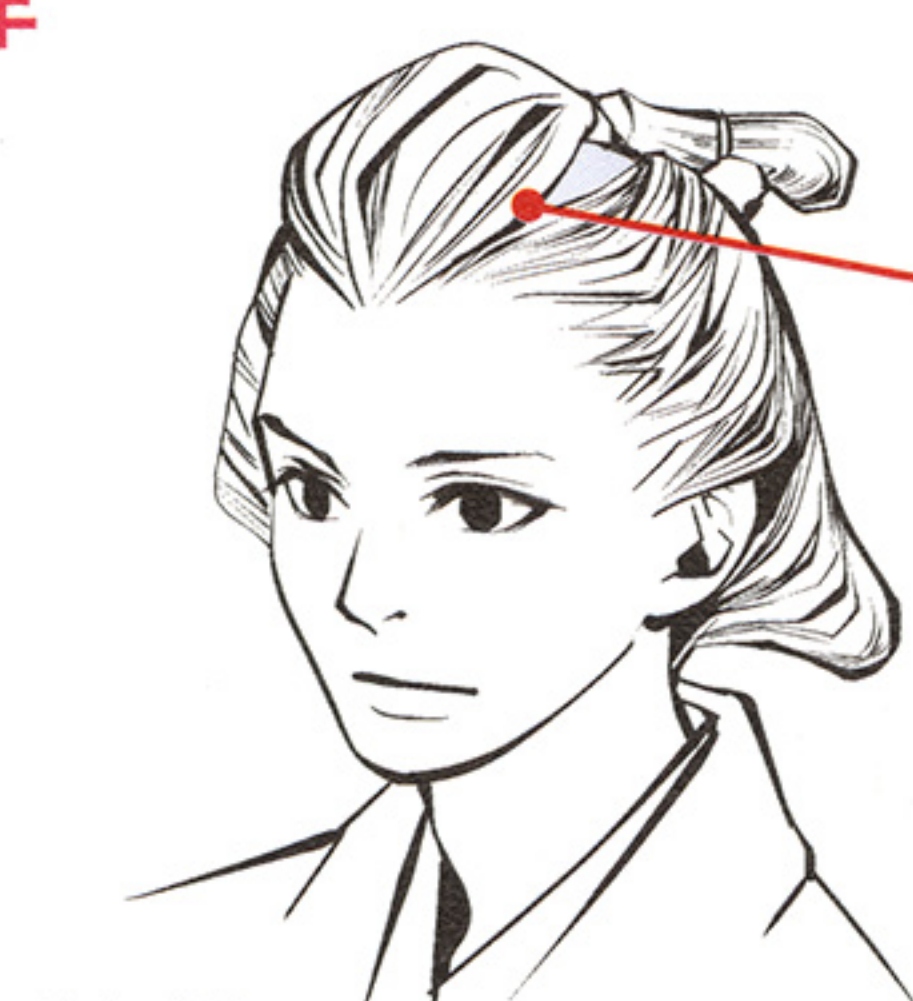
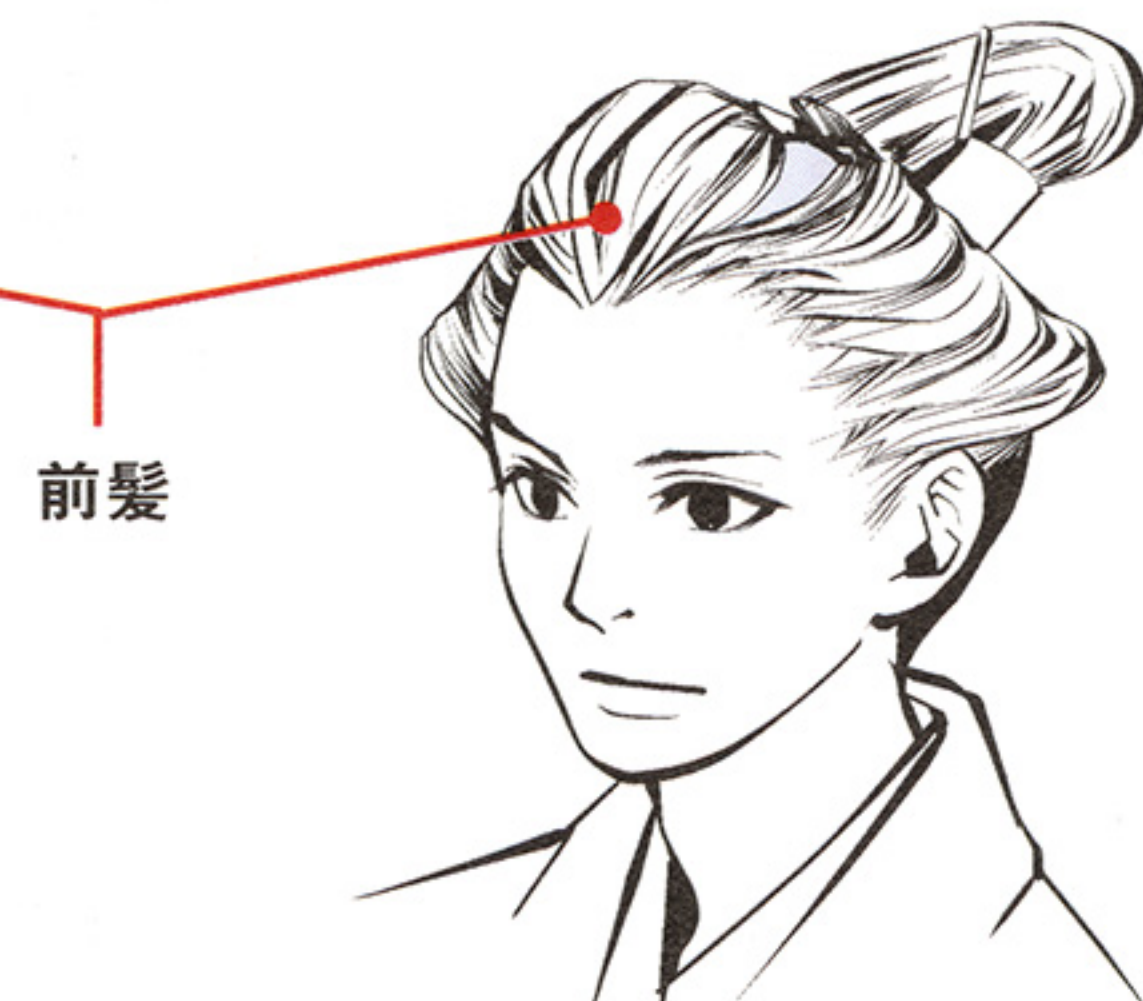
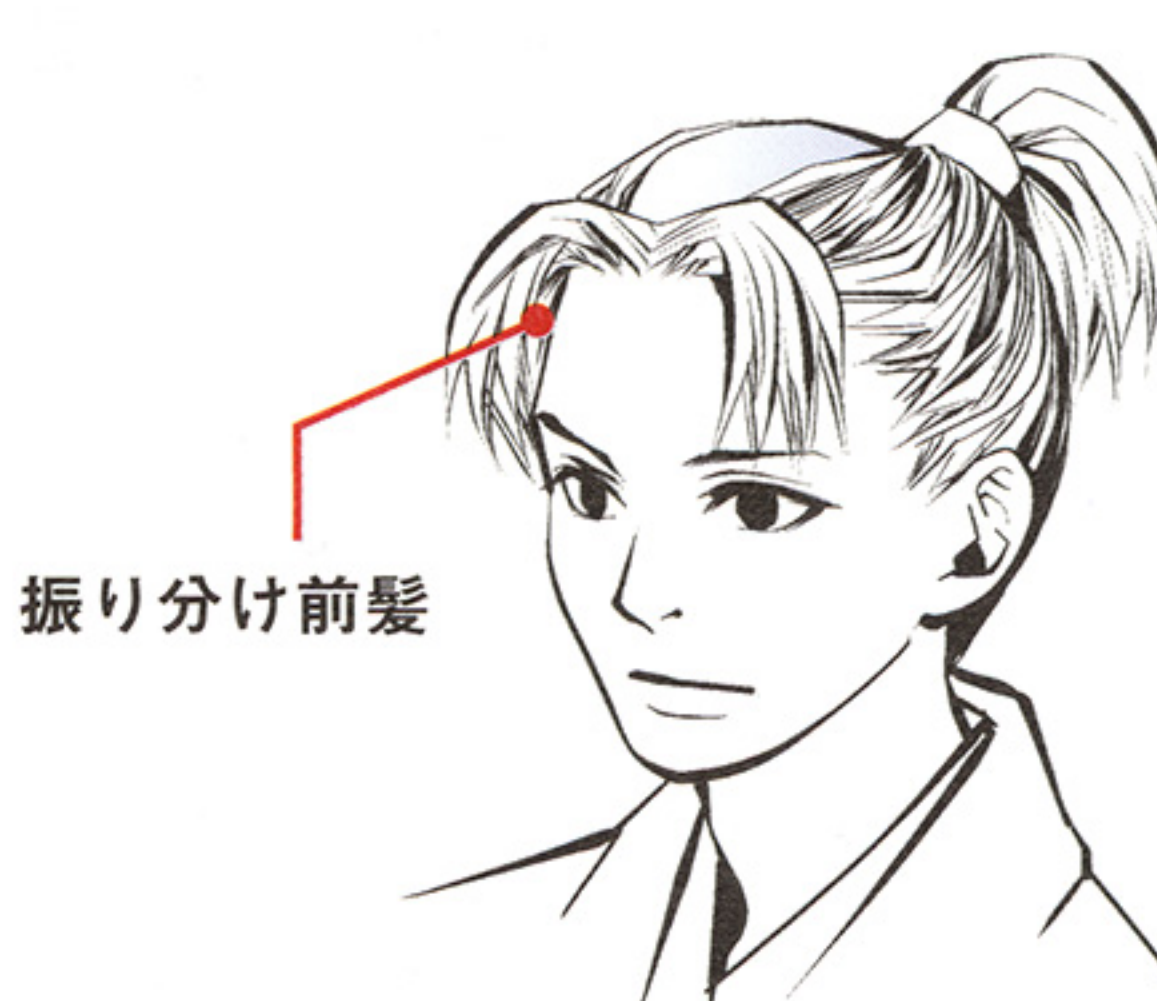
戦国時代までは
まだ月代がない。

● 少年

前髪

振り分け前髪

若衆髷
元服前の男子。

若衆髷（春信風）
江戸中期。

中剃り前髪

● 町人

芝居・歌舞伎風
舞台に映える、大ぶりな髷。

小銀杏
一般の商人。鬢の額側（小鬢）を剃ったりする。

小銀杏“細刷毛”
八丁堀の与力同心が結った。
武家とも町人とも見える独特なスタイル。

● その他

職人
威勢のいい勇み肌のスタイル。

浪人
床屋に行けない(行かない)人は、月代が伸びっぱなし。

疫病本多
「本多髷」は身分・年齢で様々な種類がある。
その中でも「疫病本多」は、病後で毛が抜けた様を美しいとした。

※特に説明がある物以外、江戸時代の髪型です。

男性の髪型の描き方

難しそうに見える髷姿も、基本は同じです。
時代や職業によって、さまざまなアレンジが可能です。

1

スキンヘッドを描く。

2

毛量が多いので、ポニーテールは太めに。

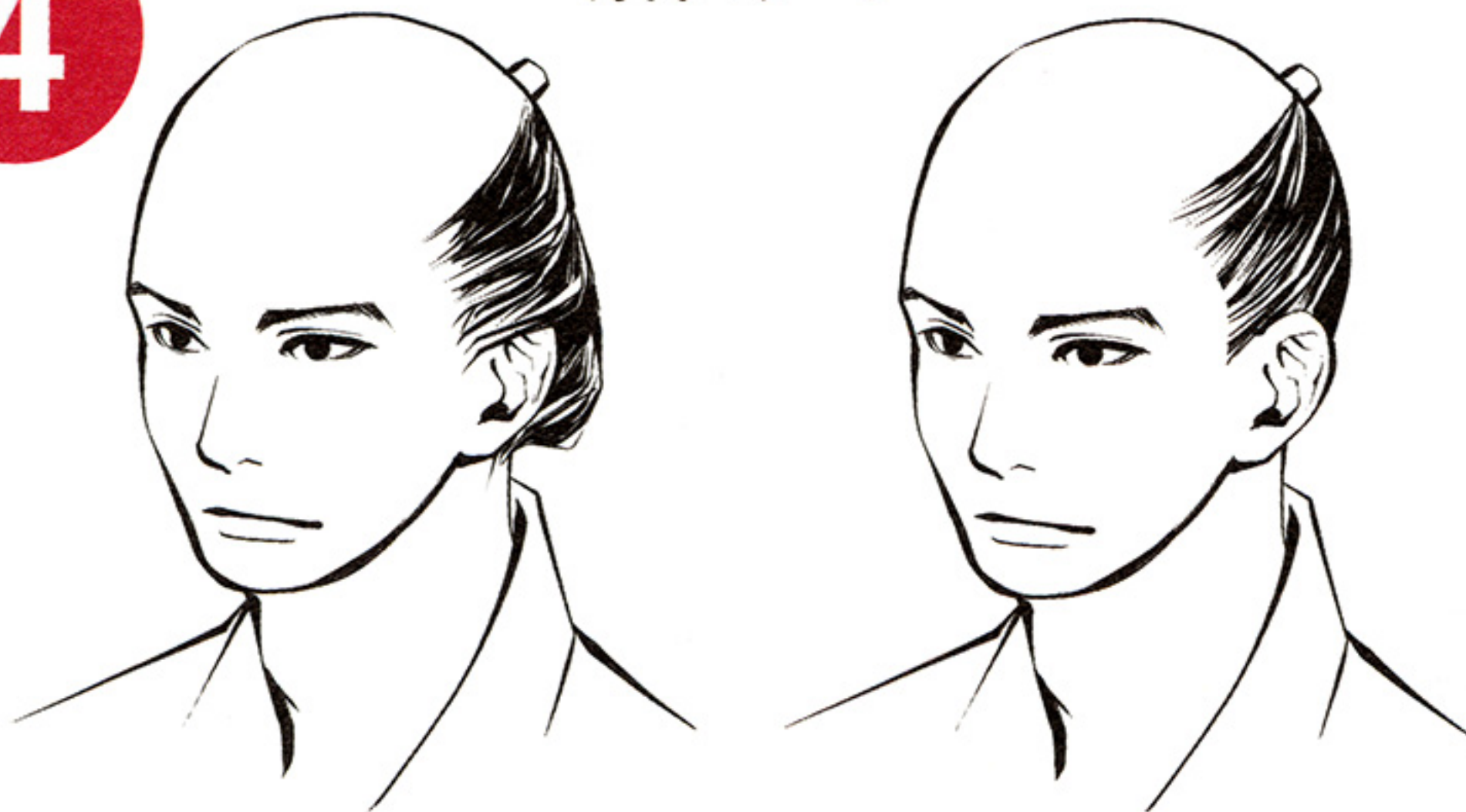
ポニーテールを描く。
これで中世の茶筅髷の完成。

3

毛量が減った分、根が細くなる。

てっぺんを減らす。
これでお殿様風の月代完成。

4

月代パターン

更に月代を広げたり、時代や身分によって、髱や鬢が変形する。

前髪パターン

女性と同様に前髪を作り、鬢を膨らませる。
これで元服前の若衆髷になる。

5

最後に好みや時代に合わせて、髷を乗せます。

日本髪の描き方

日本髪は、手順を追って描けば難しいことはありません。
基本が描けるようになれば、あとは前髪や髷、髱の形でアレンジが可能です。

1

高島田などは高め。

つぶし島田などは低め。

時代と、髪型を決めたら、
まず根の高さを決める。

2

手前の鬢から描く。

3

前髪と、それを抑える櫛を描く。

4

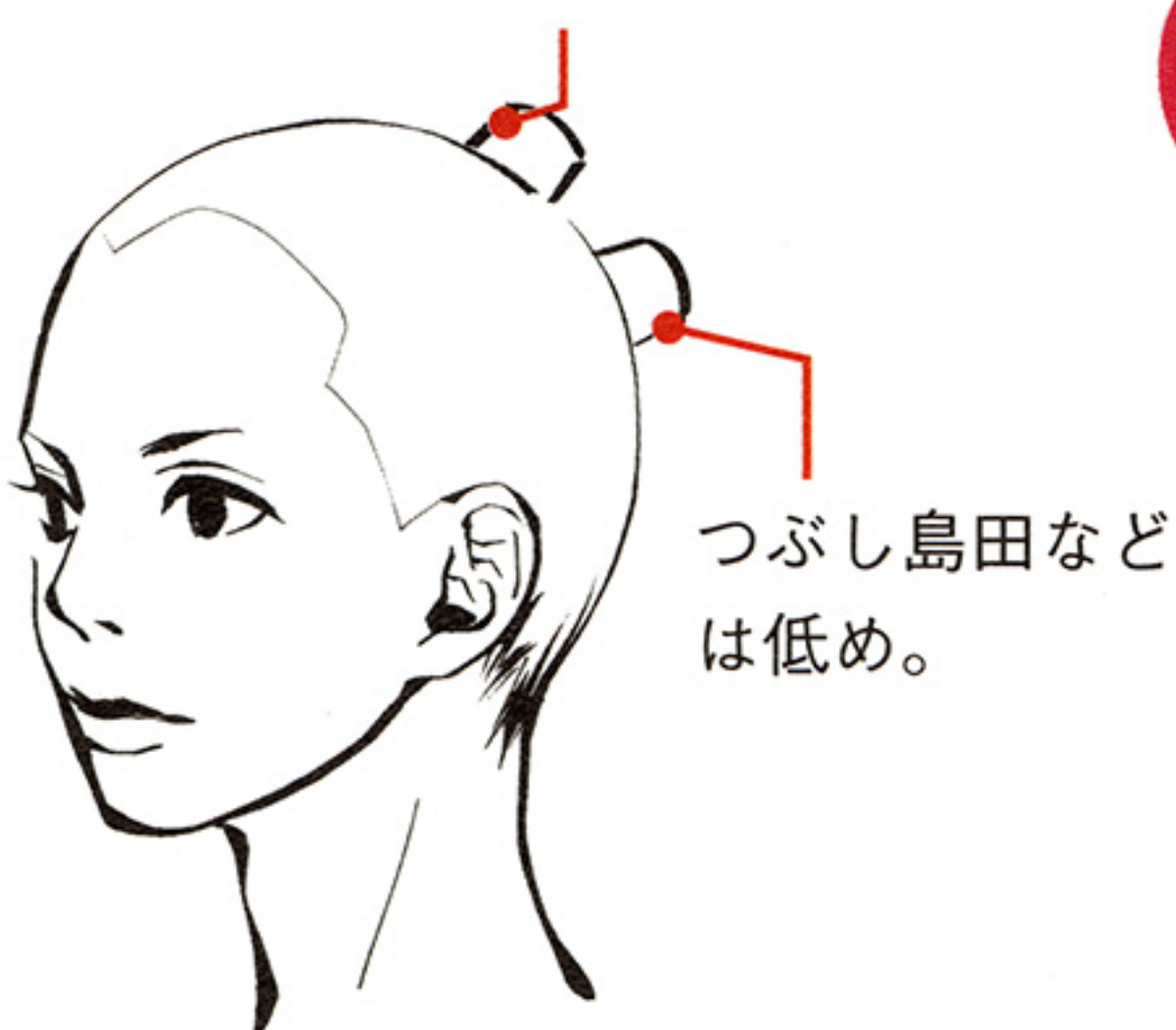
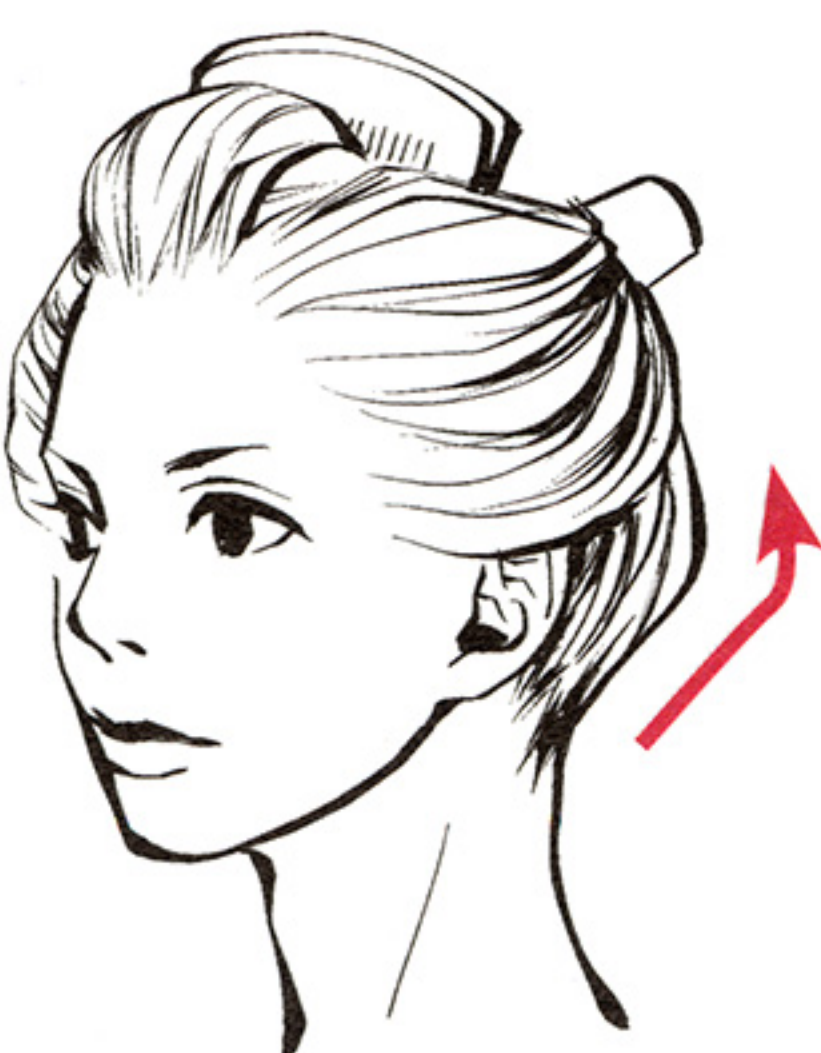
髱を描く。
時代に合わせて、少し膨らませたように描くのがポイント。

5

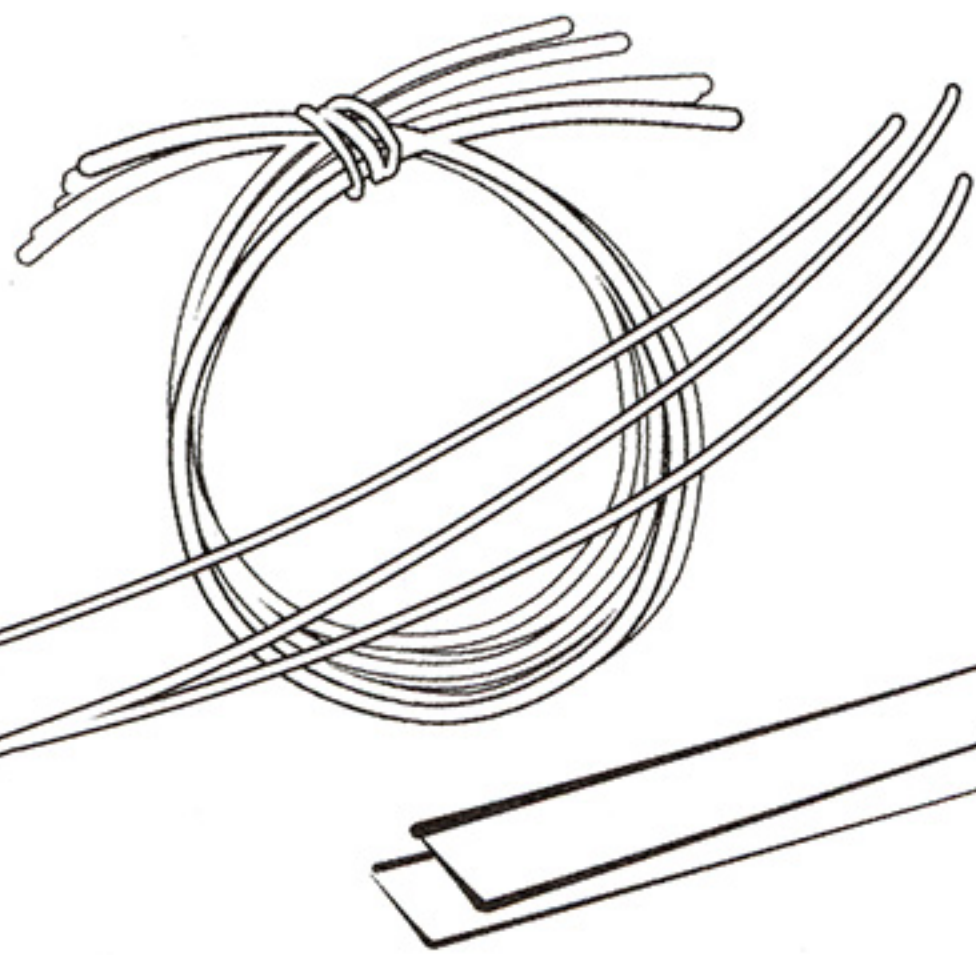
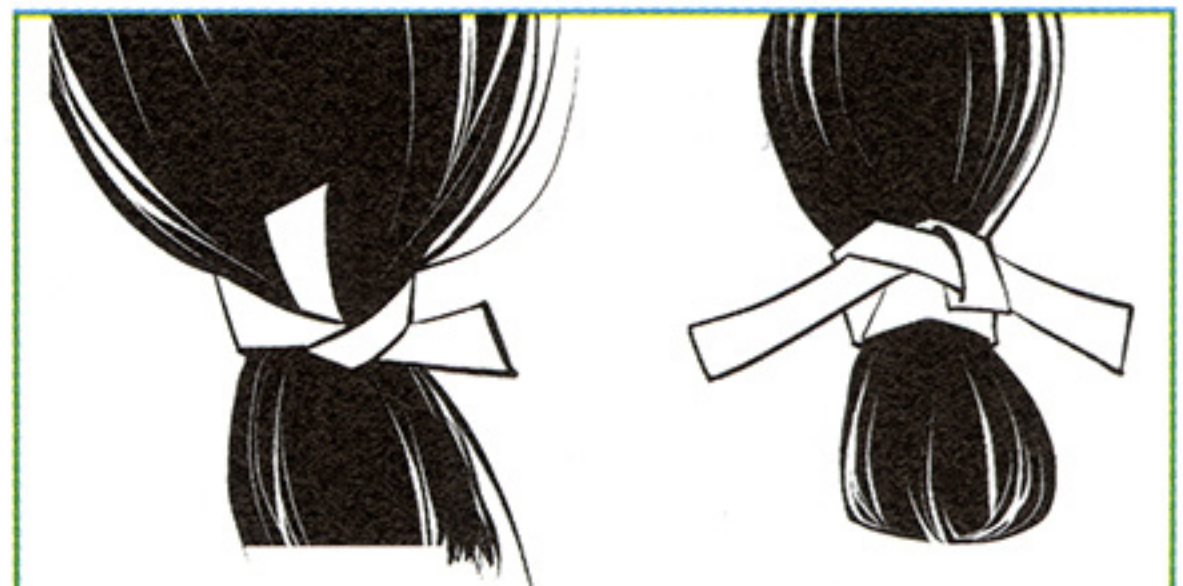
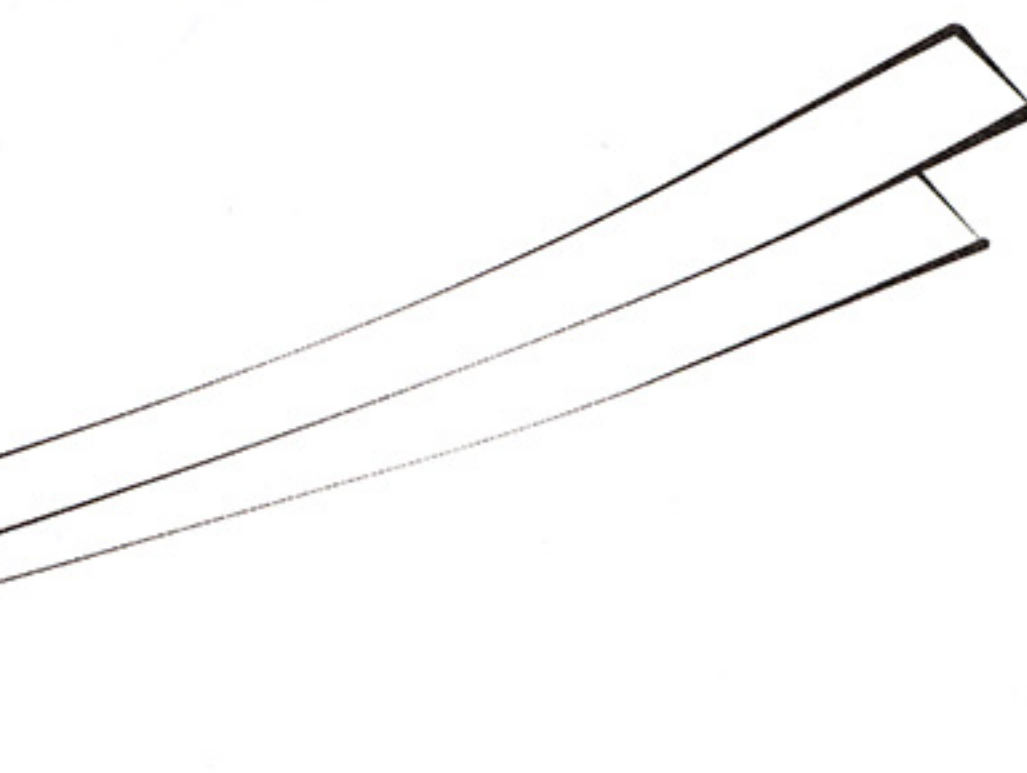
髷を描く。
元結（根）は、実際には隠れるので、位置の目安程度で。

6

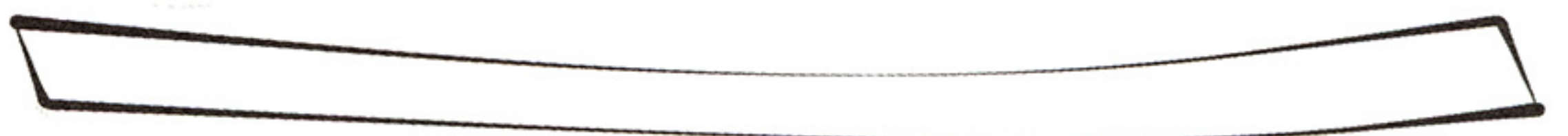
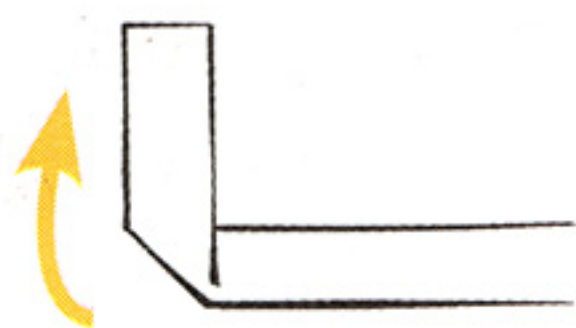
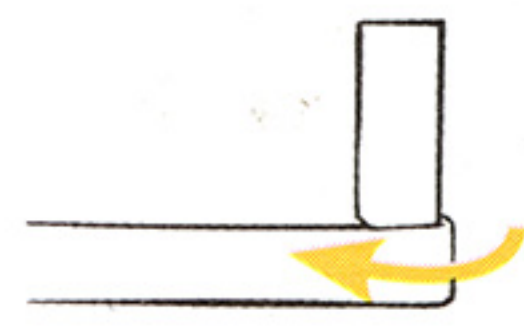
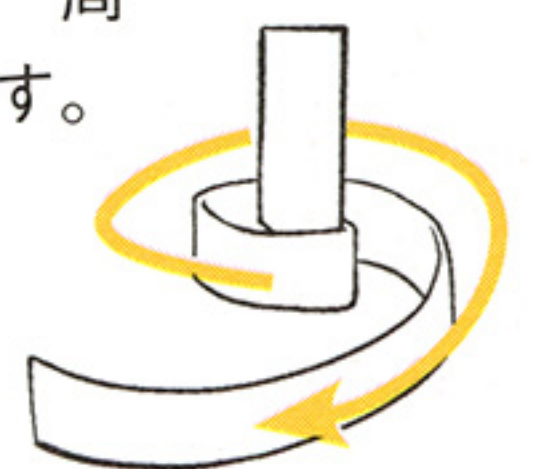
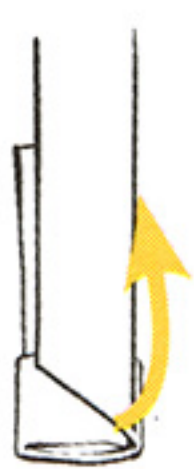
鹿の子や簪などで飾る。
カゲや不安な部分は、ベタで描くと絵が引締まる。

こらむ

● 元結の話

「元結」（もとゆい、もっとい）は、実用の「撚元結」と装飾用の「平元結」があります。
江戸以前は上流階級のものでしたが、丈夫な「撚元結」は元禄以降、今の輪ゴムやビニール紐に代わるような存在でした。
現代は、水引として名残を留めています。

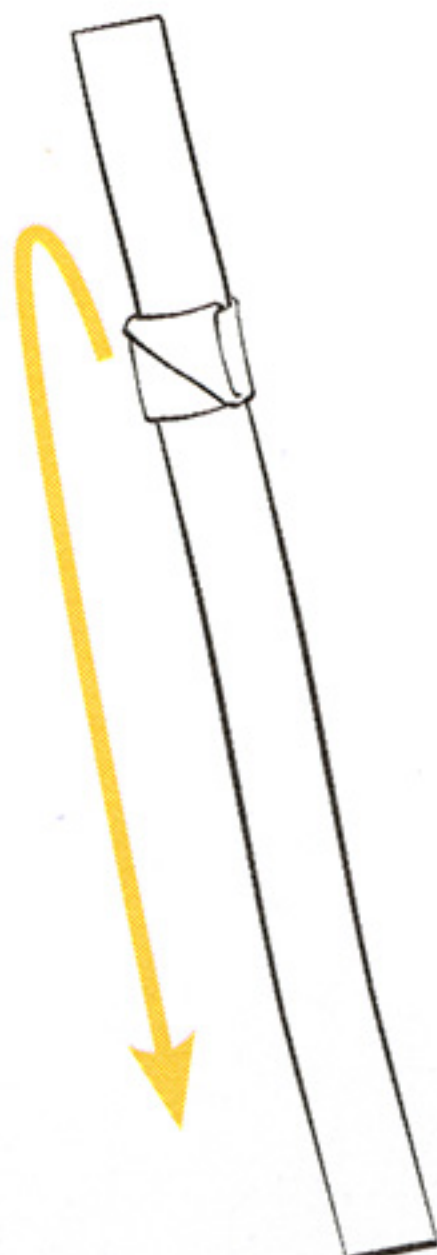
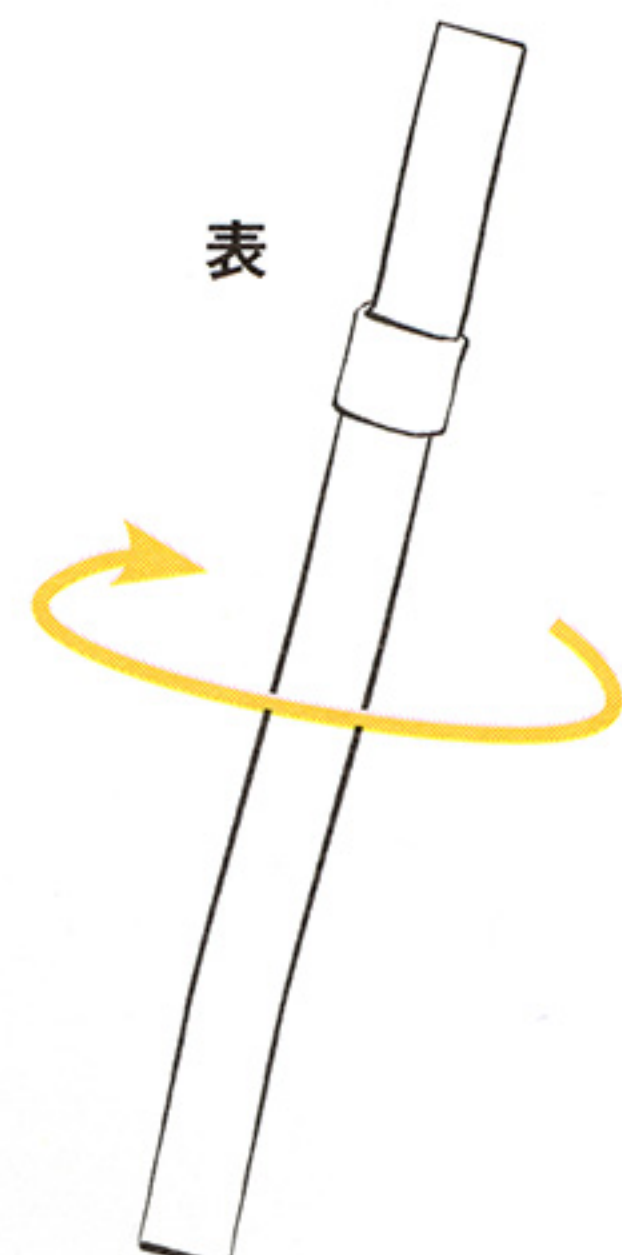
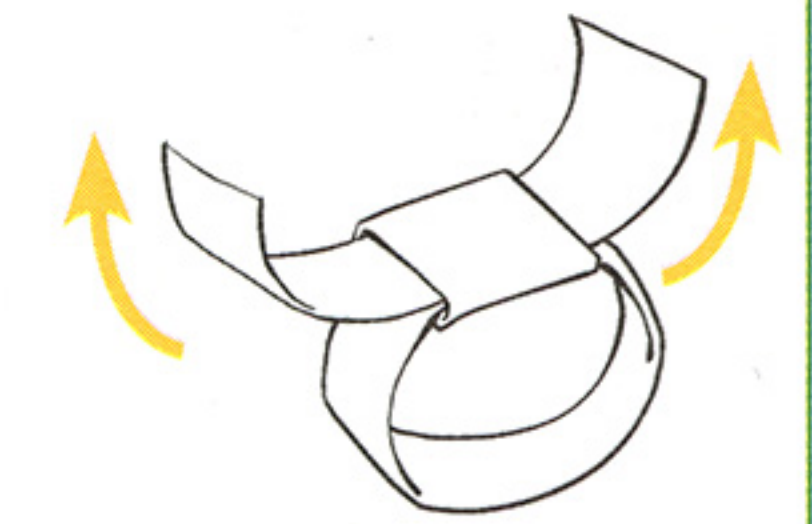
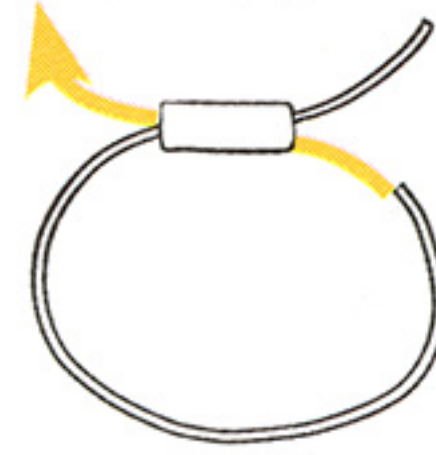
撚元結（より）
紙製の撚り紐。
「文七元結」などが有名。

平元結（ひら）
装飾のみに用いる。

二重回しや、堅結び、結ばずに合せ掛けにするなど、さまざまな巻き方がある。

ドラマなどでよく見る 丈長の折り方

1 幅２～３cm
長さ40cmほどの、
和紙（奉書紙）を
用意します。

2 端から１／４くらいを、上に折り上げる。

3 長い方を、手前に折る。

4 長い方を、一周巻き付けます。

5 そのまま上へ、折り上げる。

6 折り上げたものを、巻き付けに通す。

7 通したものを、最後まで引ききる。

8 裏表ひっくり返して完成。

表

9 長い方を、巻き付けの裏から短い方の下に通すと、表から出てきます。

きゅっと締めれば
けっこう強く締まります。

こらむ

装束の色

装束の魅力のひとつに、色の美しさが挙げられます。色を自由に選ぶことができ、カラフルでとても美しいものでしたが、装束によっては、位によって色や文様に決まりがあります。
また、皇族や高位の公卿のみに許可された「禁色」や、葬儀などの喪服で使われる「忌色」は普段は使用しないなど、色にも注意してみると、よりリアリティが増します。

袍の色

束帯の袍は位袍といい、位によって色と文様が定められています。
摂関期（編案中期）からは次のように決まっています。

親王、王／臣下一位～四位	臣下五位	臣下六位～八位 初位
黒 文様あり	深緋 文様あり	深縹 文様なし

※天皇、上皇、皇太子は、親王や臣下たちとは違う特別な色と文様の袍をそれぞれ着用する。
※親王や王、関白・摂政・太閤などは、黒い袍で、それぞれに特別な文様の入ったものを着用する。
※無位のものは黄色、文様なし。

禁色

禁色を使用するには天皇による「禁色聴許」が必要でした。
時代の流れに従い、制限は緩やかになっていきましたが、明治以降も天皇・皇太子の袍色である「黄櫨染」と「黄丹」の二色は絶対禁色として使用が禁止されています。

禁色七色

黄丹	赤白橡	青白橡	深紫	深紅	深蘇芳	深支子

※青白橡や赤白橡は、単に「青色」「赤色」と呼ばれることもあります。

明治以降の禁色

黄櫨染	黄丹

忌色

忌色は葬儀などの時に使用される色です。
両親の喪に服す「重服」、その他の「軽服」、天皇の「諒暗」など種類があり、それぞれ忌色がかわりました。
黒橡は四位以上の袍色である「黒」と同じように見えるが、袍色の「黒」は紫が濃くなった色なので、「橡」とは異なります。

今日の忌色

鈍色	橡（黒橡）	萱草色	柑子色

※印刷により正確な色が表現できない場合があります。

2

小物編

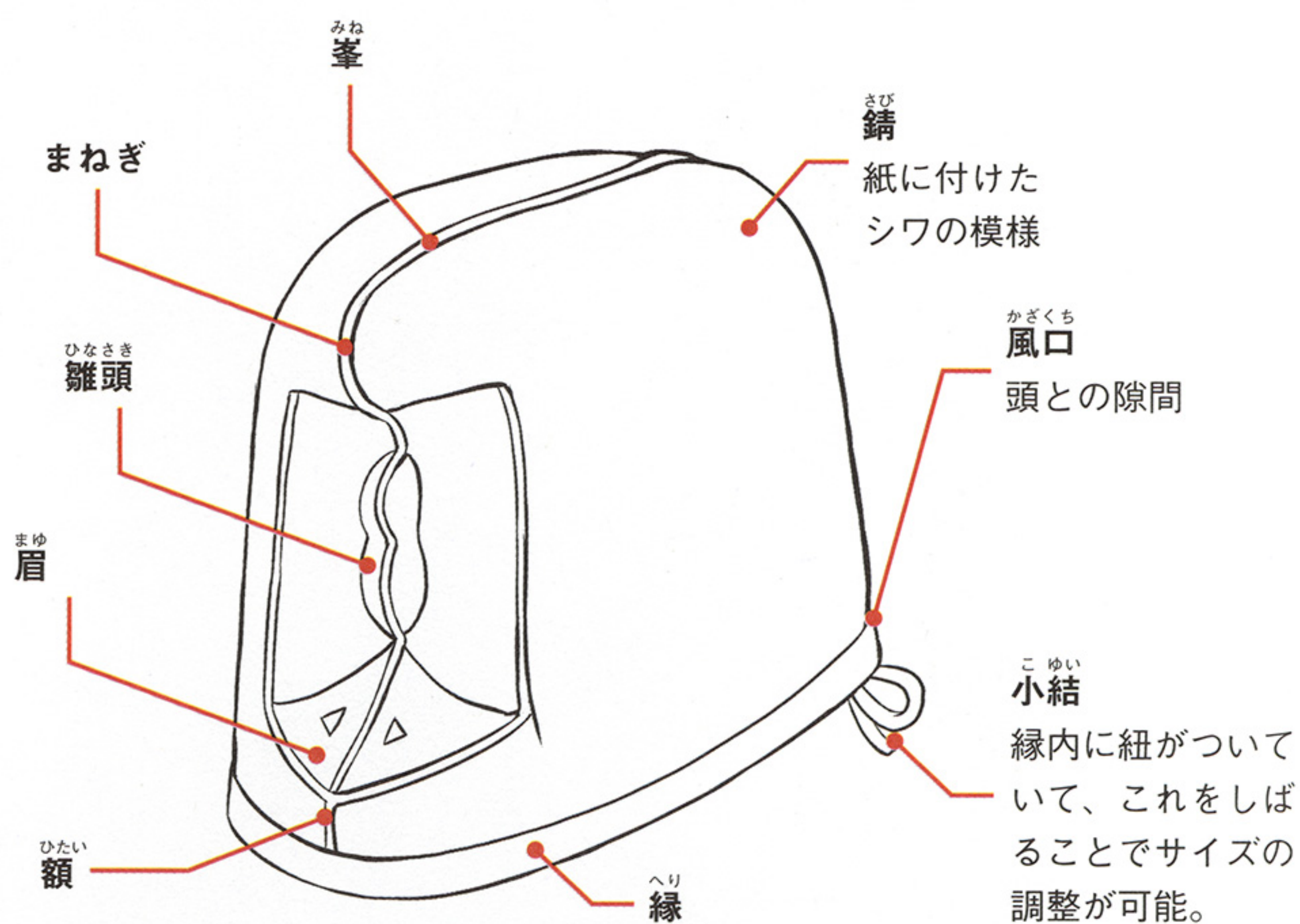
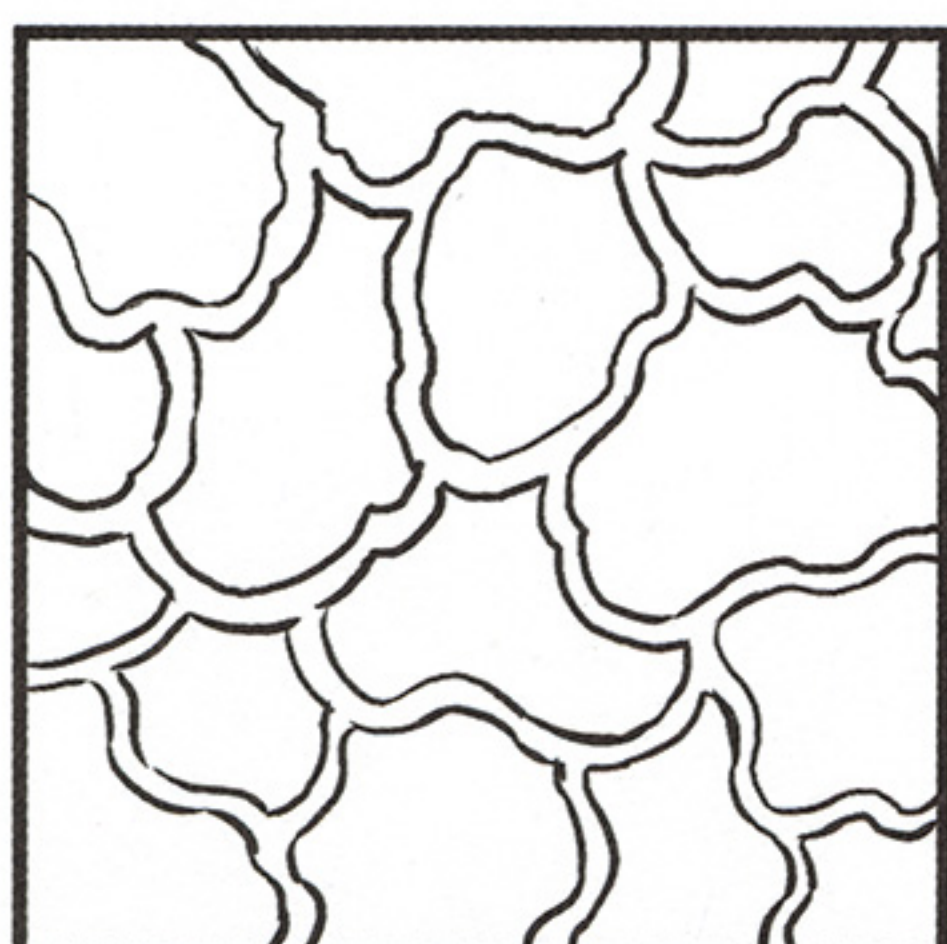
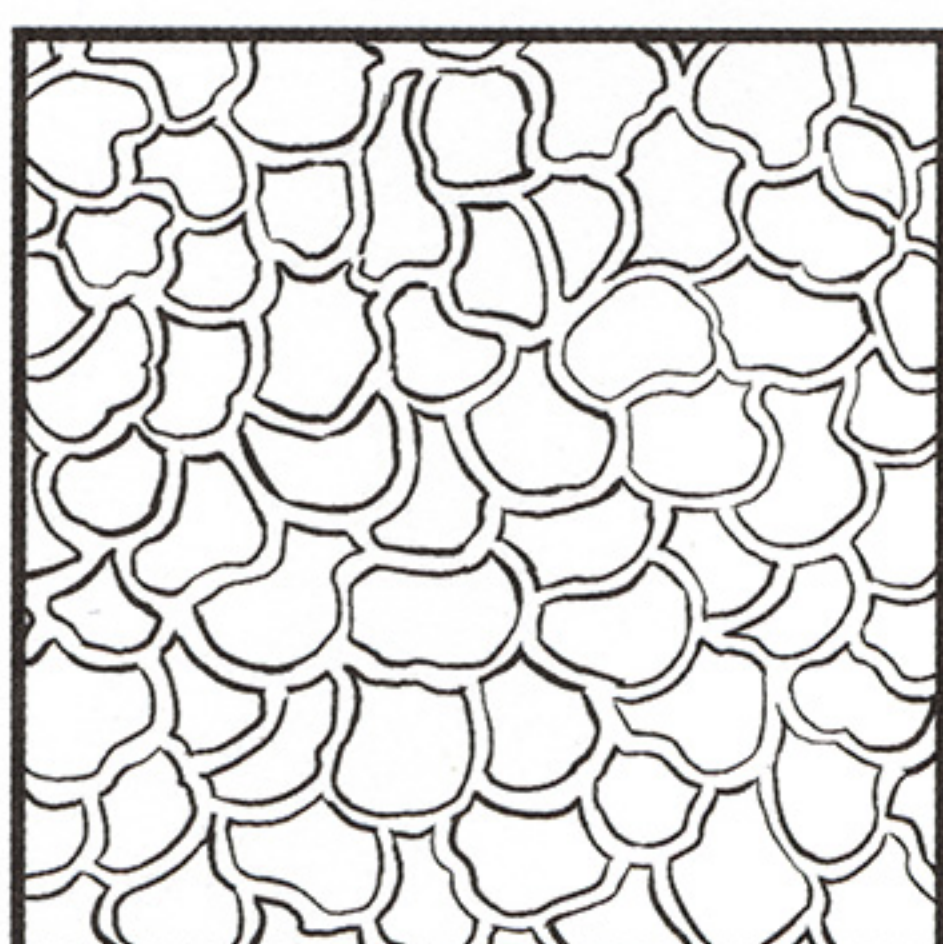
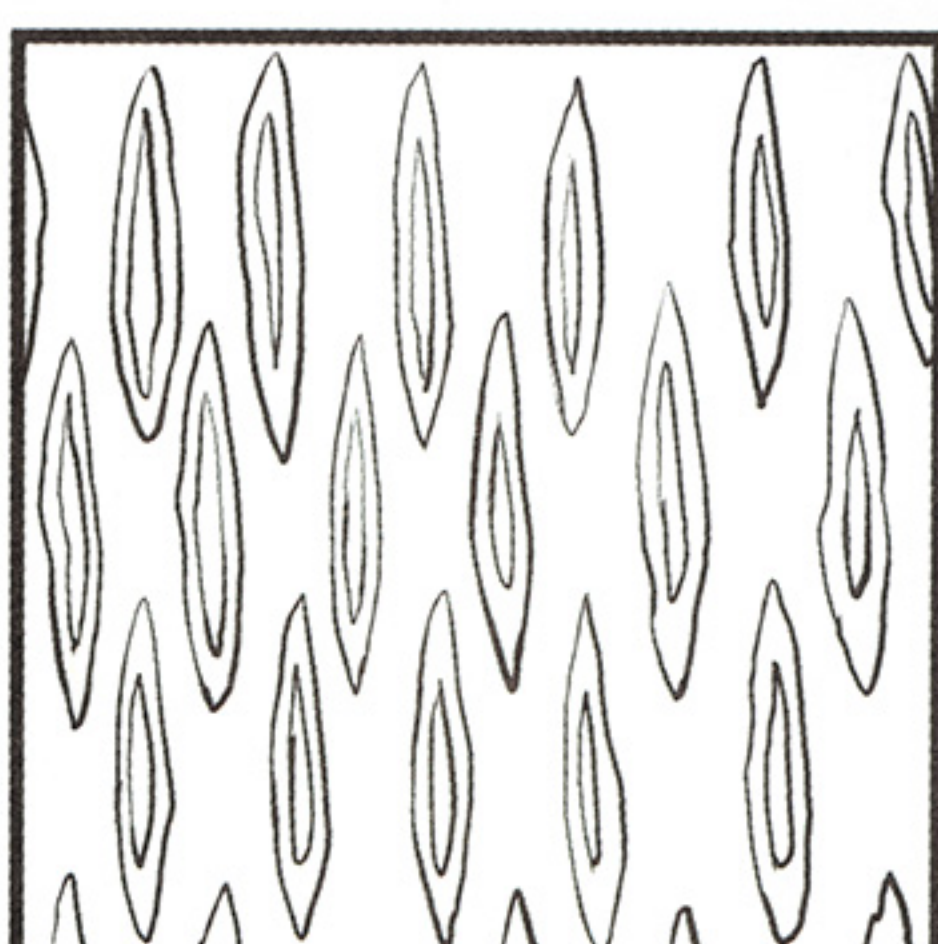
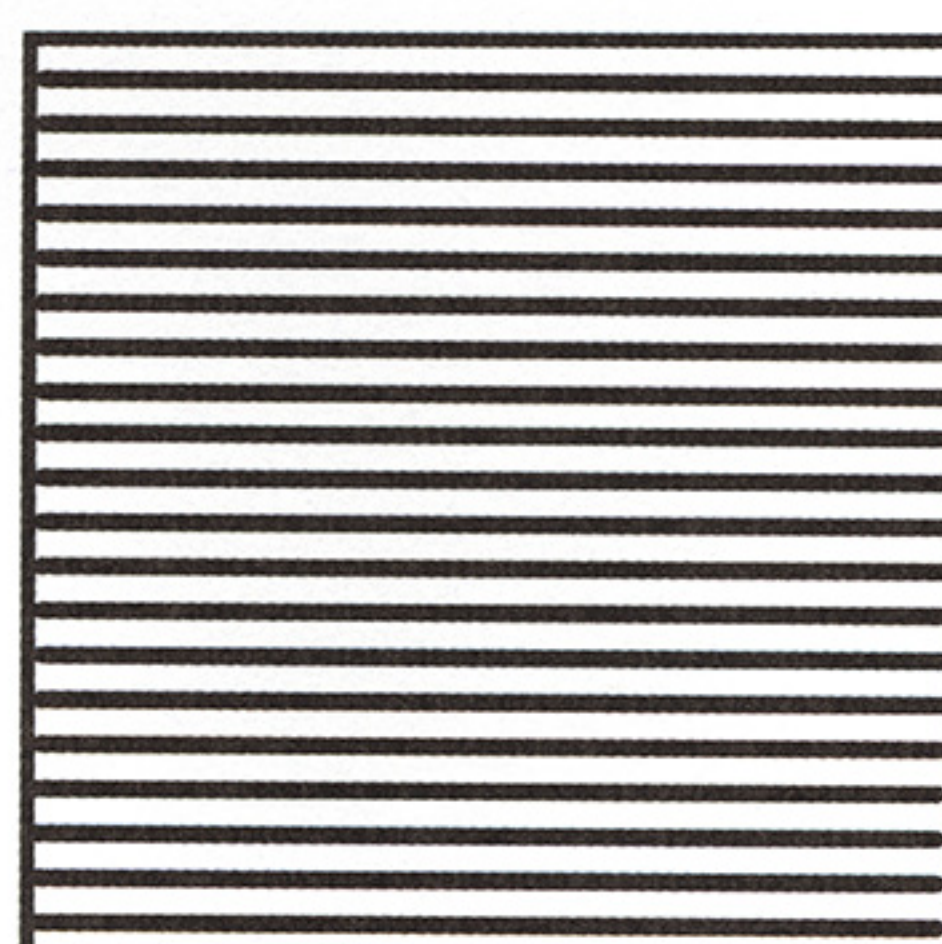
01 烏帽子（えぼし）

烏帽子は公家や公家に仕える人の日常的なかぶり物です。
時代や地位によって形や種類もさまざまです。

着用図

平安時代には羅（ら）（薄い布）でできた袋に漆（うるし）を塗った丈の長い物でしたが、鎌倉時代以降は次第に高さが低くなっていきました。
江戸時代に紙にシワを付けて漆を塗った箱形の物に変化しました。
種類は色々ありますが、基本は公家が一般的に用いた「立烏帽子」です。

部位の名称

江戸時代以降の立烏帽子の例です。
紙をしわくしゃにしてシワを付けたものに、漆を塗ったものです。

烏帽子の錆（シワの模様）

烏帽子の被り方

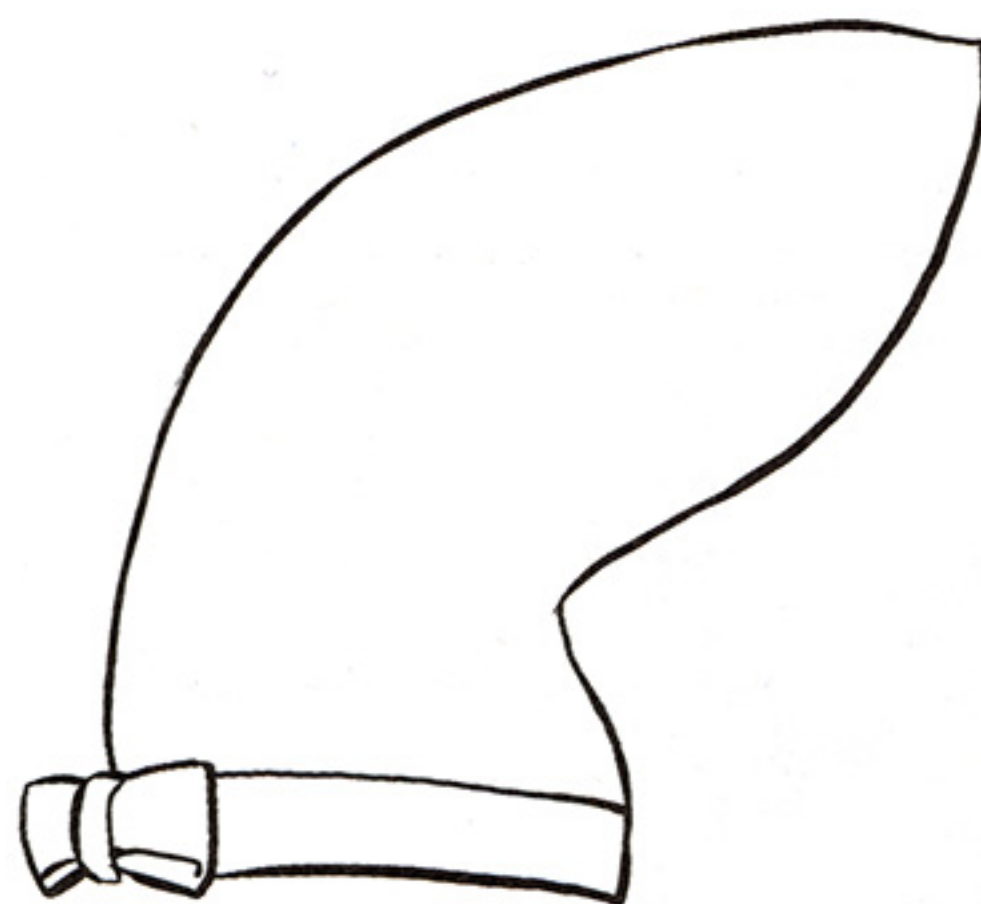
時代や種類により、固定する方法が異なります。
仕組みを意識して描くことでリアリティが増します。

立烏帽子
平安時代の立て烏帽子は、掛紐を使わず、後部にある小結で髷に結び付けて固定していた。
後頭部に、ぴったり付けずに少し余裕を持たせると、それらしくなる。

折烏帽子
髷に紙捻を結び、小結を外に引き出し、烏帽子の後部で結び固定する。

折烏帽子
こちらは掛紐で固定するパターン。
室町時代後期より、髪型が変わったことにより、小結の紐は、飾りに近いものになり掛け紐でとめるようになる。

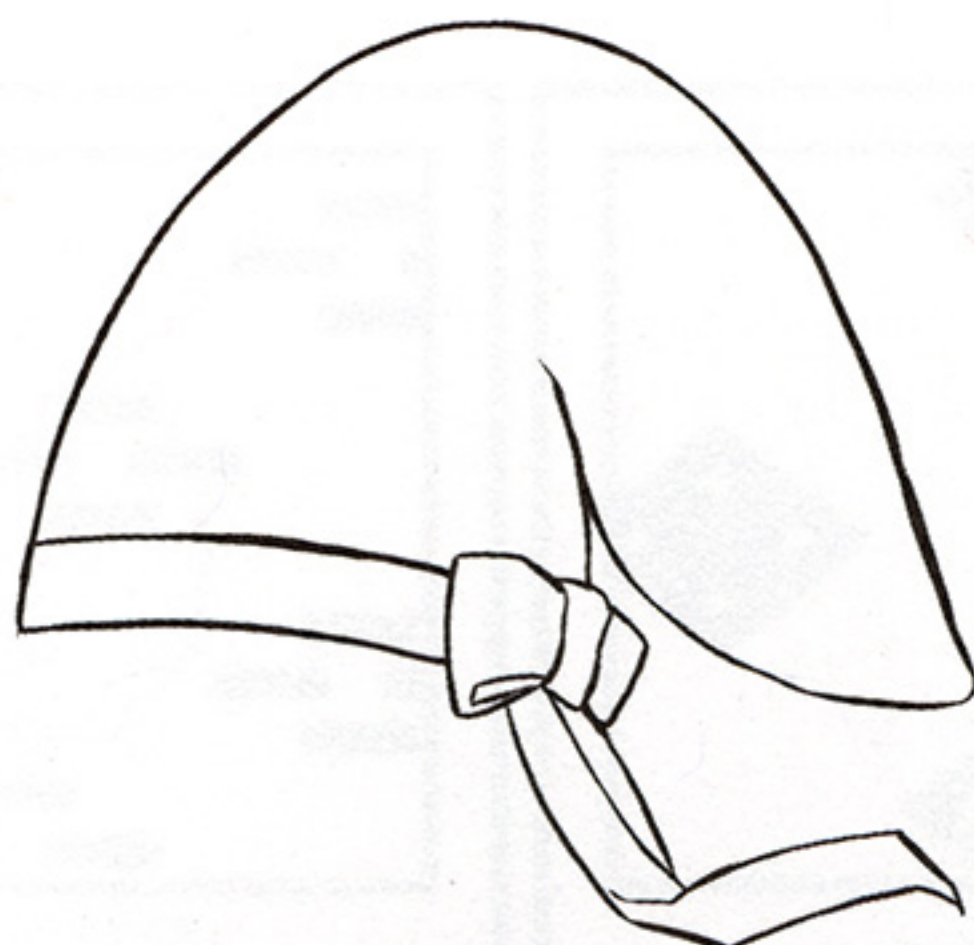
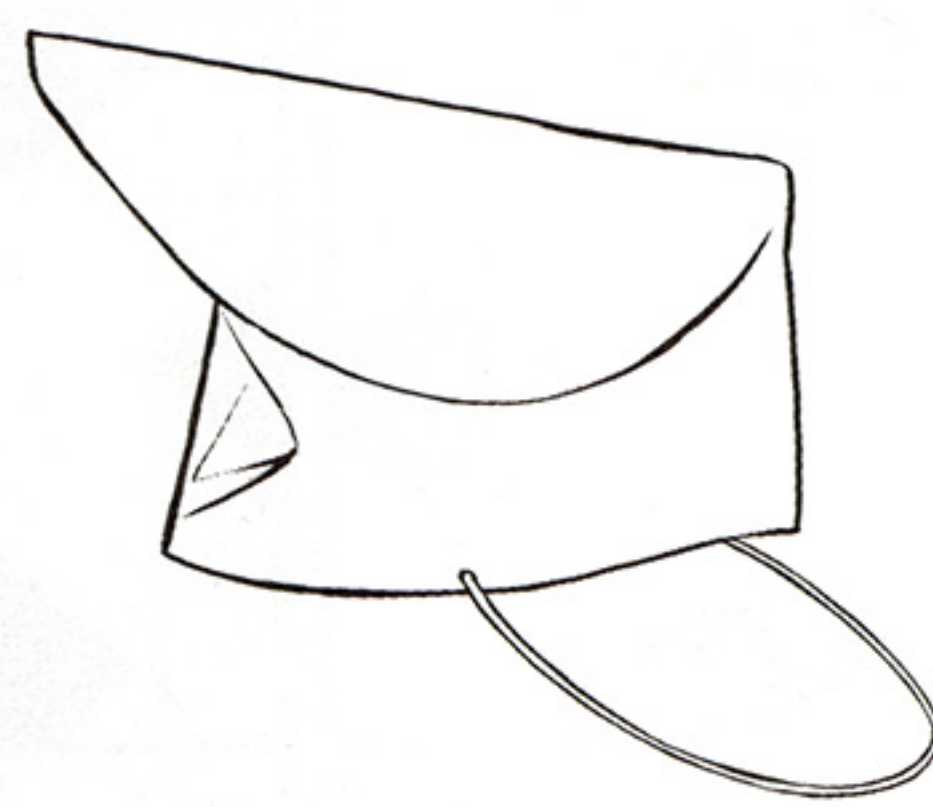
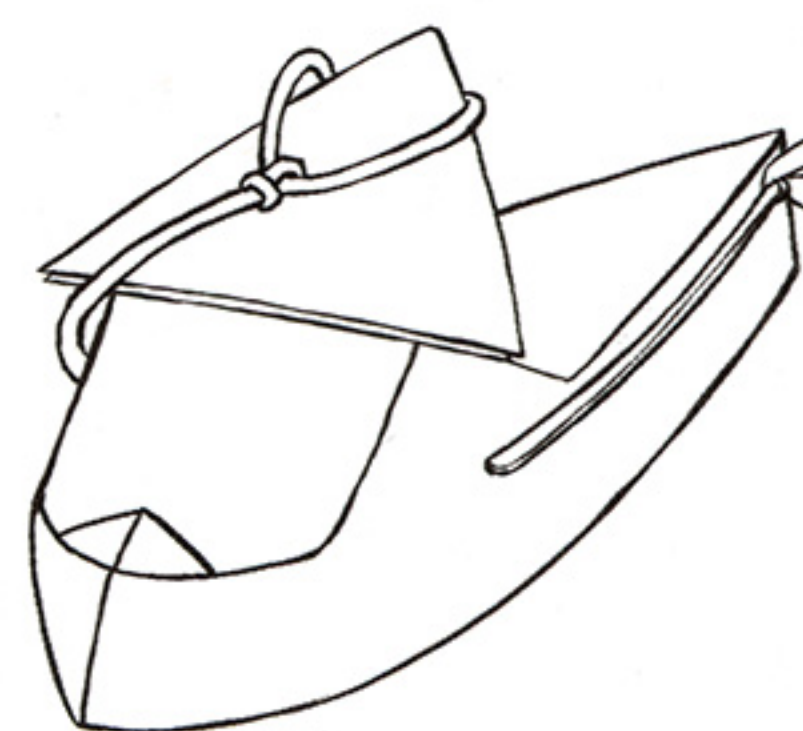
風折烏帽子
TPOに応じて「翁掛」と呼ばれるとめ方を用いることも。

その他の烏帽子

引立烏帽子

梨子打烏帽子

平礼烏帽子

舟形侍烏帽子

02 冠（かんむり）

日常で着用する烏帽子（えぼし）と異なり、冠は朝廷に出仕する際に着用するかぶり物です。
天皇は常時宮中にいるので、常に冠を着用しています。
このように纓（えい）の立った冠が登場したのは平安末期以降だといわれています。

着用図

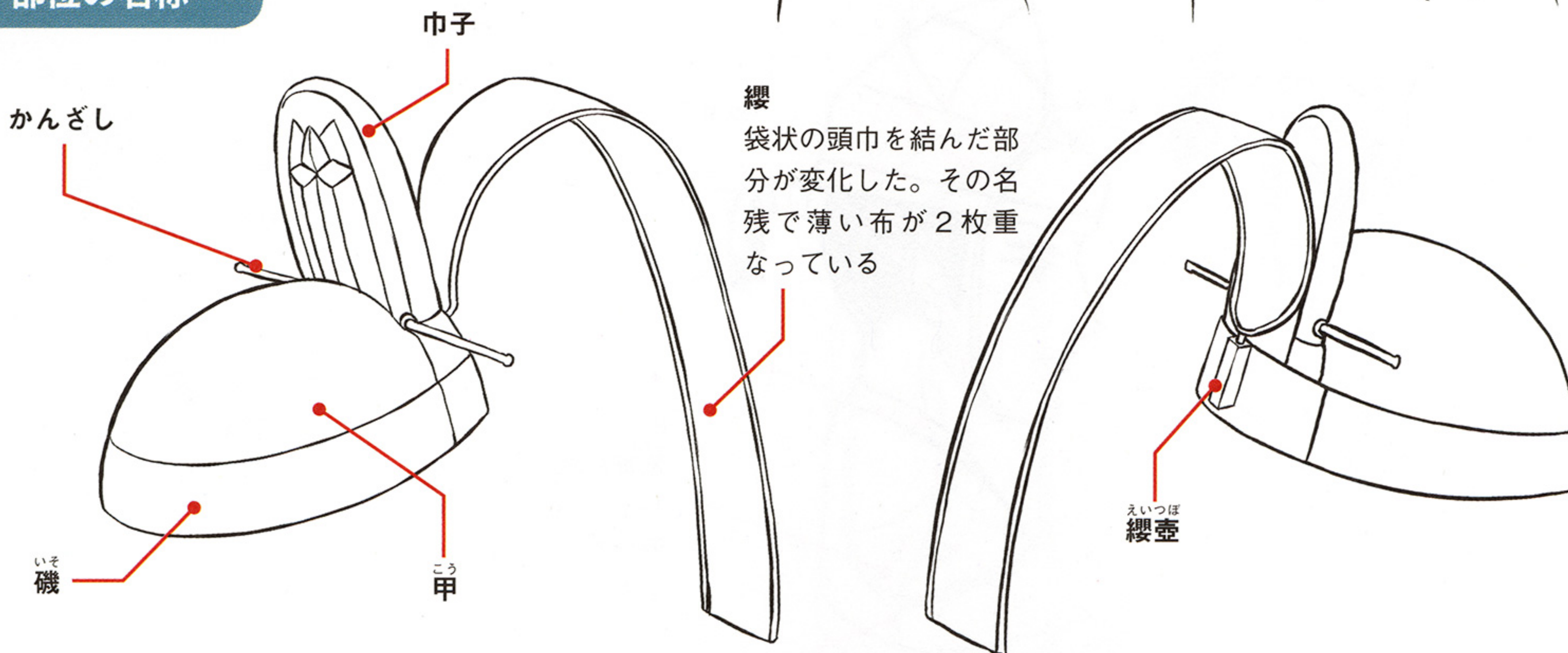
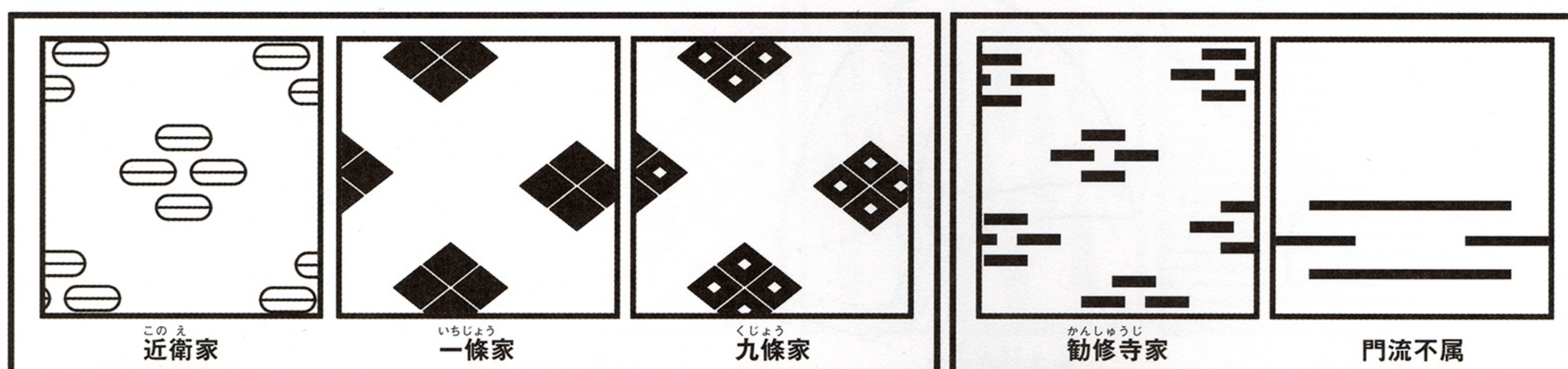
奈良時代の律令では冠は「頭巾（ときん）」と呼ばれる物で羅（ら）や縵（かとり）という薄い布の袋でした。
平安中期までは袋状の冠を使用しており、巾子（こじ）をしっかり形作った冠は摂関期の頃のものと考えられています。
冠は束帯（そくたい）や衣冠（いかん）（明治以降だとまれに小直衣（このうし））に合わせます。
狩衣（かりぎぬ）や水干（すいかん）のような軽装では烏帽子をかぶるので注意が必要です。

部位の名称

冠の文様の一例

摂家門の羅文

他

近衛家（このえ）　一條家（いちじょう）　九條家（くじょう）　勧修寺家（かんしゅうじ）　門流不属

冠の被り方

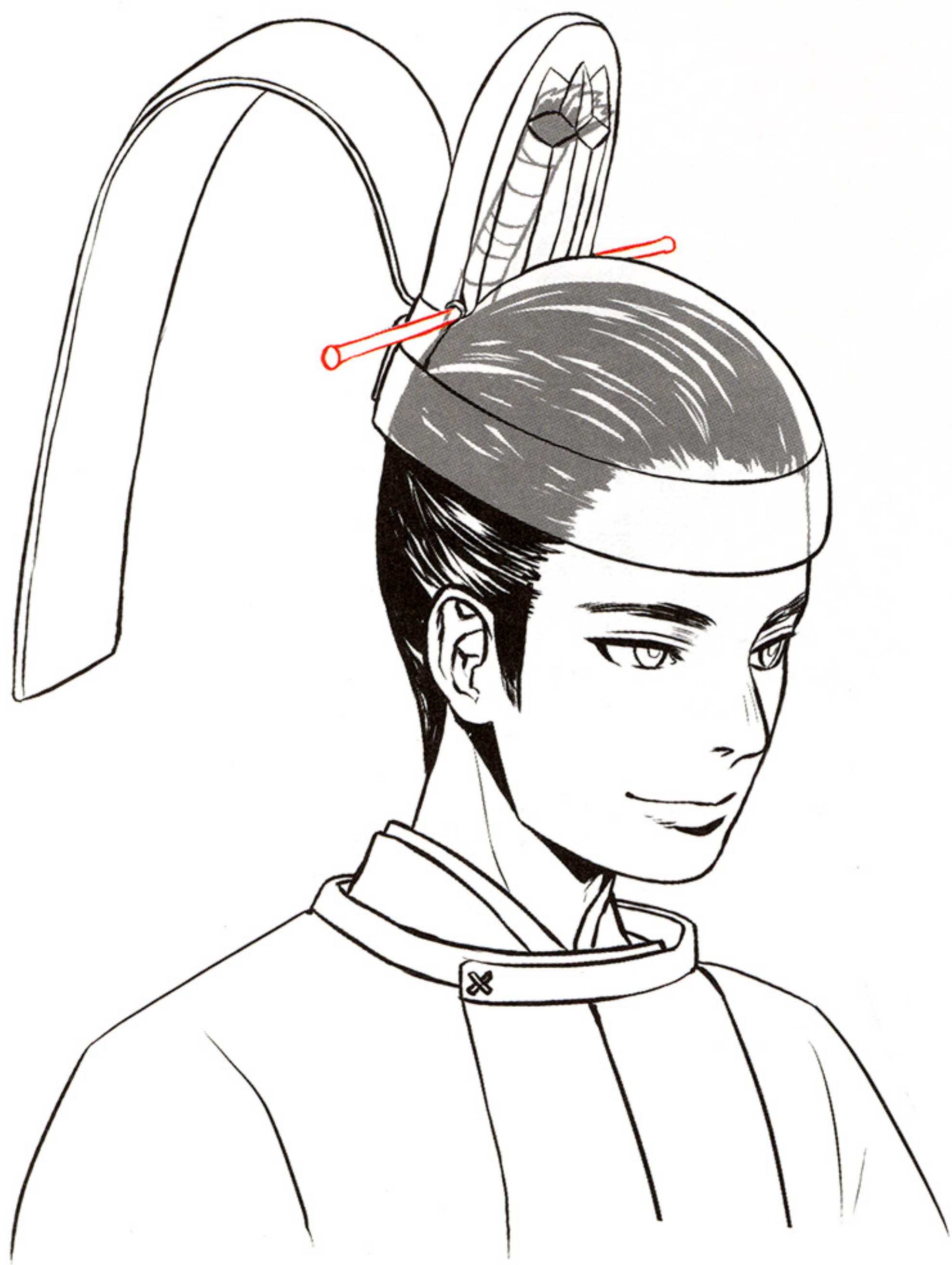
烏帽子と同様に丁髷（ちょんまげ）を利用して固定しますが、紐で縛るのではなく、巾子に簪（かんざし）を貫いて固定していました。

纓の種類

垂纓冠（すいえいかん）
天皇以下、文官が被る。

細纓冠（さいえいかん）
六位以下の武官用。

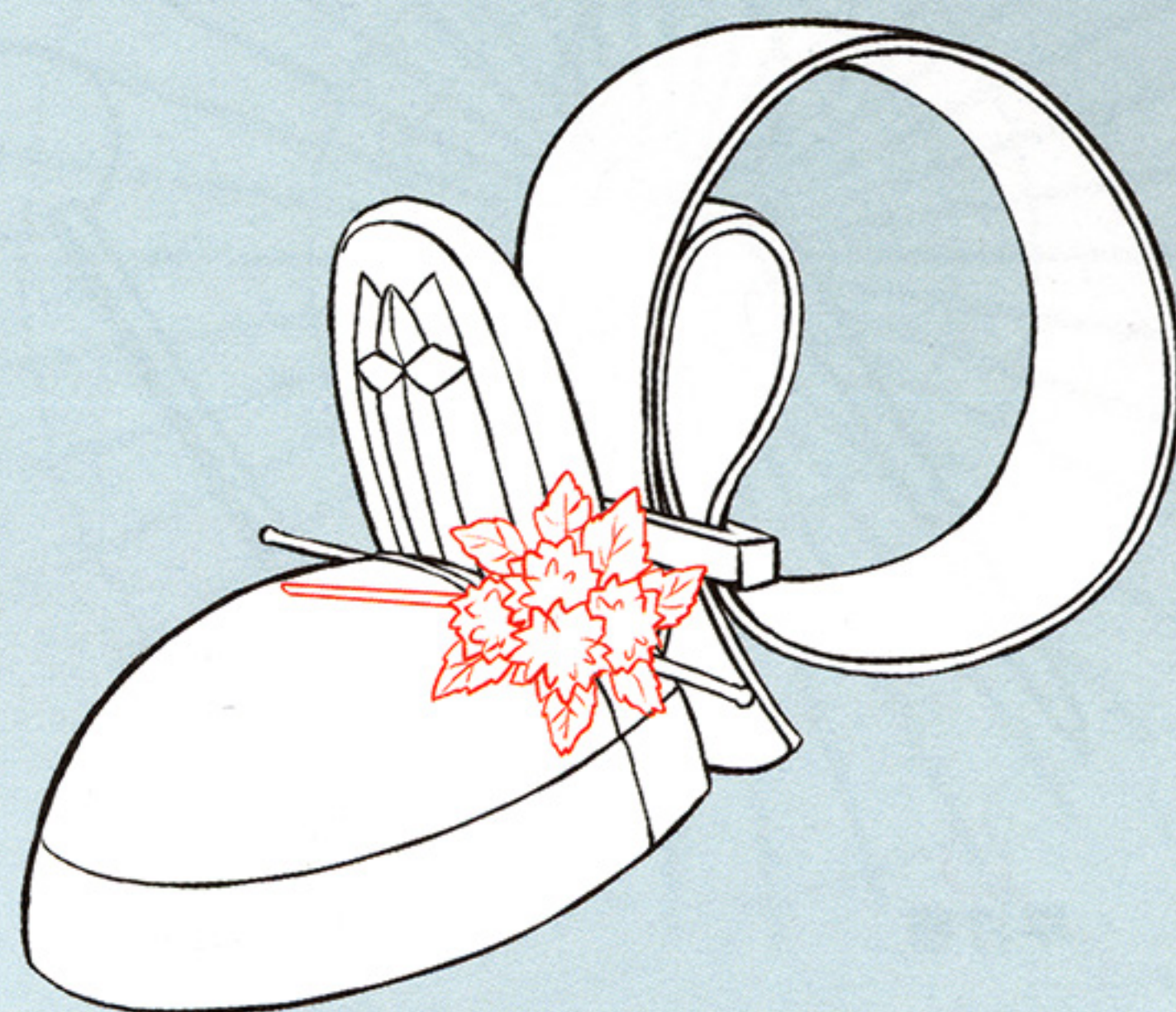
緌（おいかけ）
馬の尾の毛で作った飾り。

巻纓冠（けんえいかん）
武官用の冠。纓を内巻きにして白木の木片で留めたもの。

柏夾の種類

柏夾（かしわばさみ）とは文官が緊急時に、纓を束ね活動しやすいようにしたものです。

ONE POINT

頭挿花（かざし）
儀式などの際、冠に付ける飾りの花です。中国では金属製の頭挿花が使われていましたが、日本では生花や造花を使用していたのが特徴です。

03 櫛・簪・笄

江戸時代初期は下げ髪が主流でしたが、江戸時代中期～後期、日本髪が発展すると共にかんざしが登場し、大流行しました。

使用例

櫛
結った髪にそのまま挿せる。

笄
元々は日本髪を結うための道具の一つ。

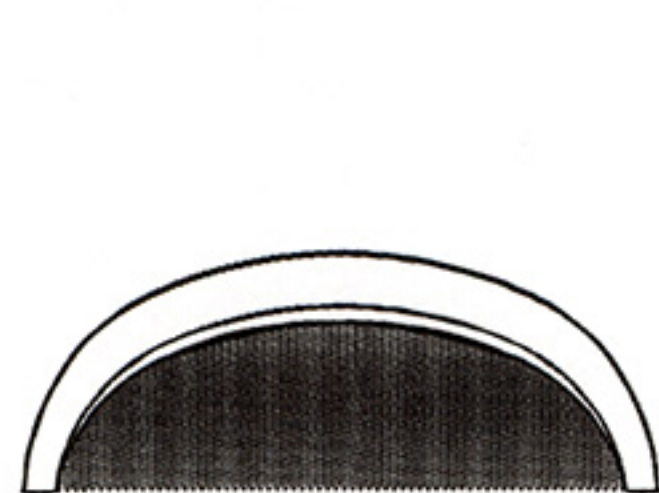
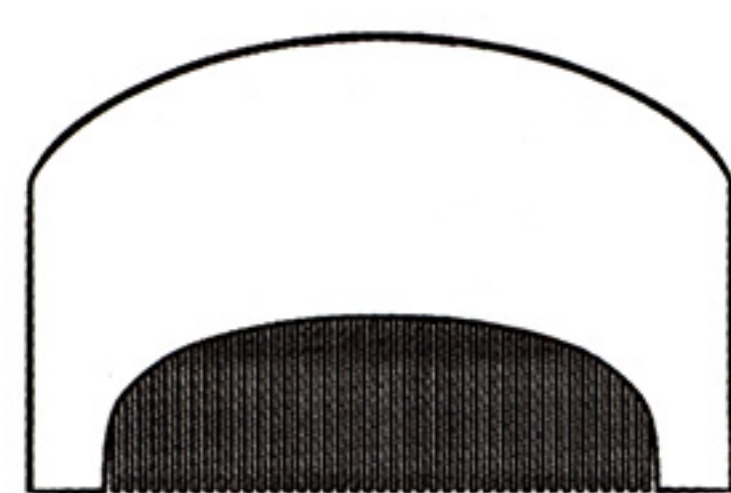
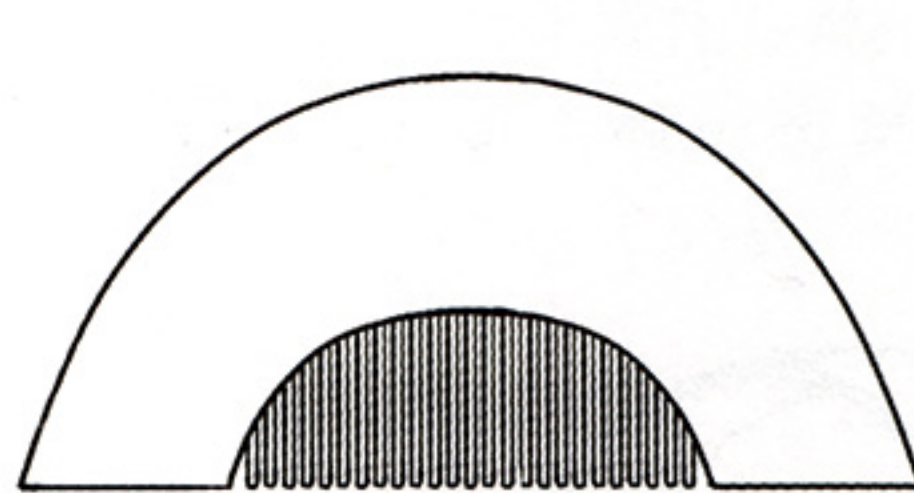
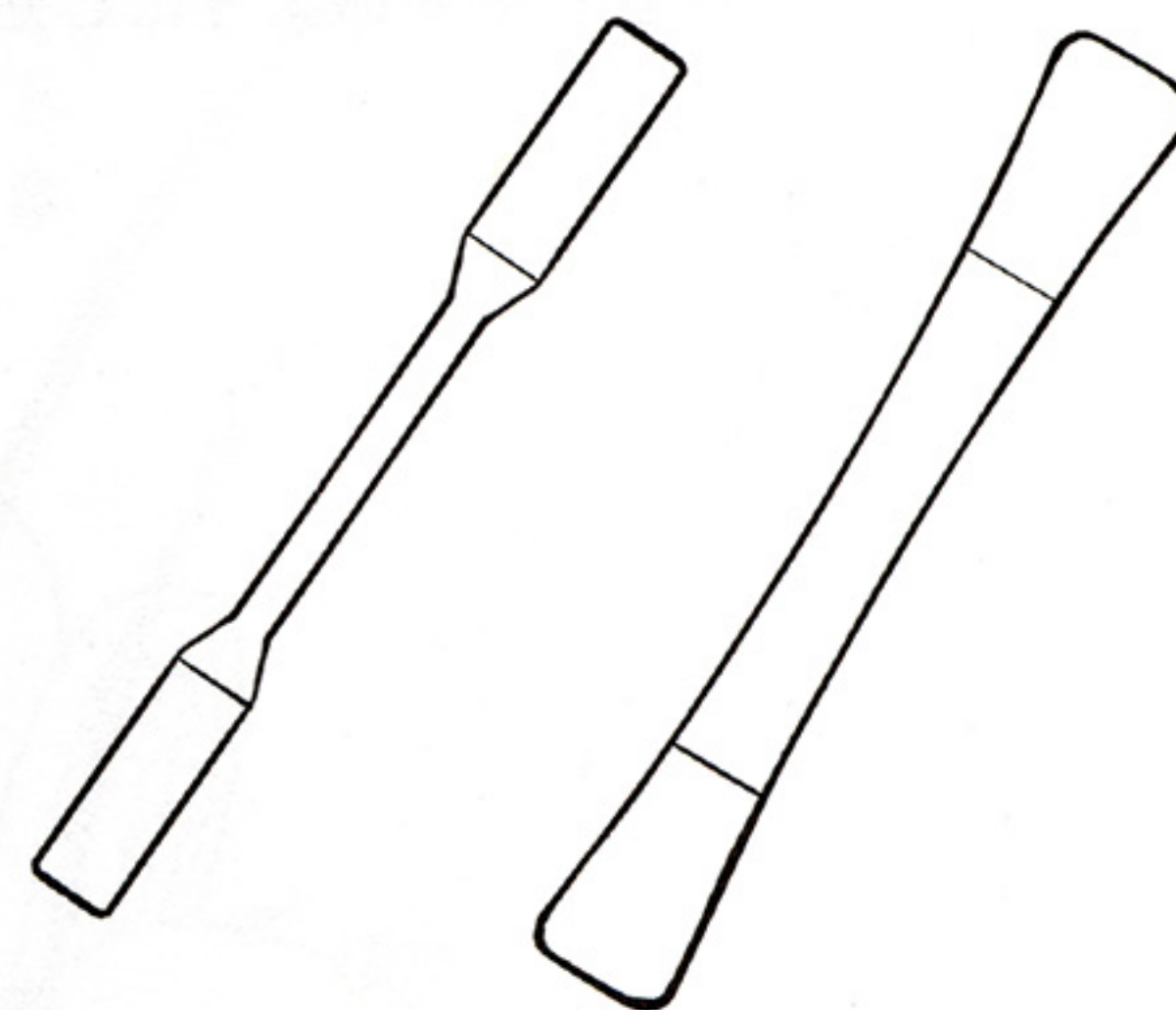
簪
元々は、冠を固定するために使用されていた。

櫛の種類

実用

江戸中期

江戸後期

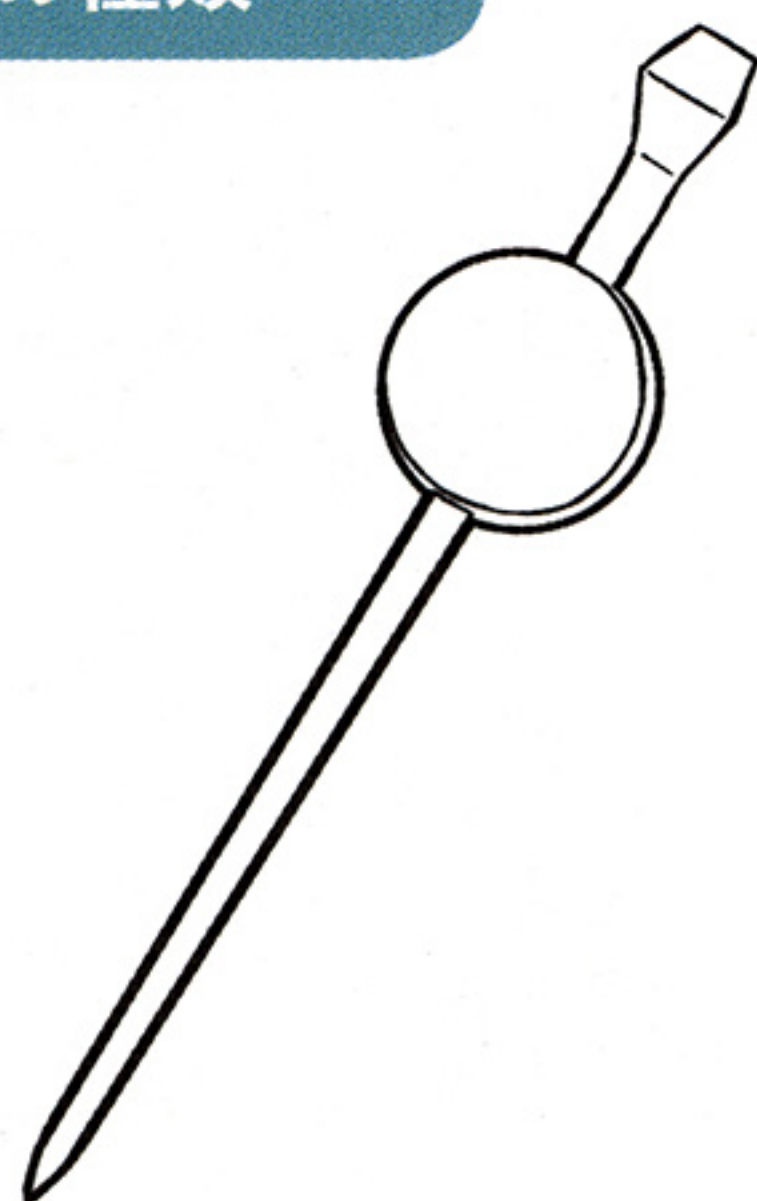
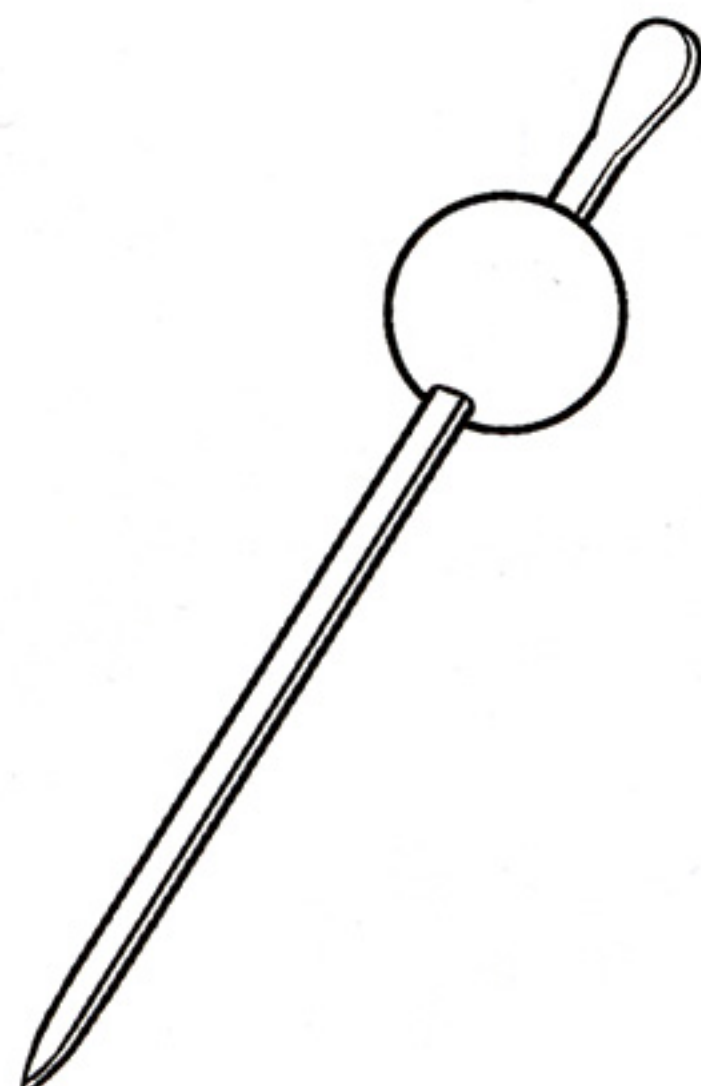
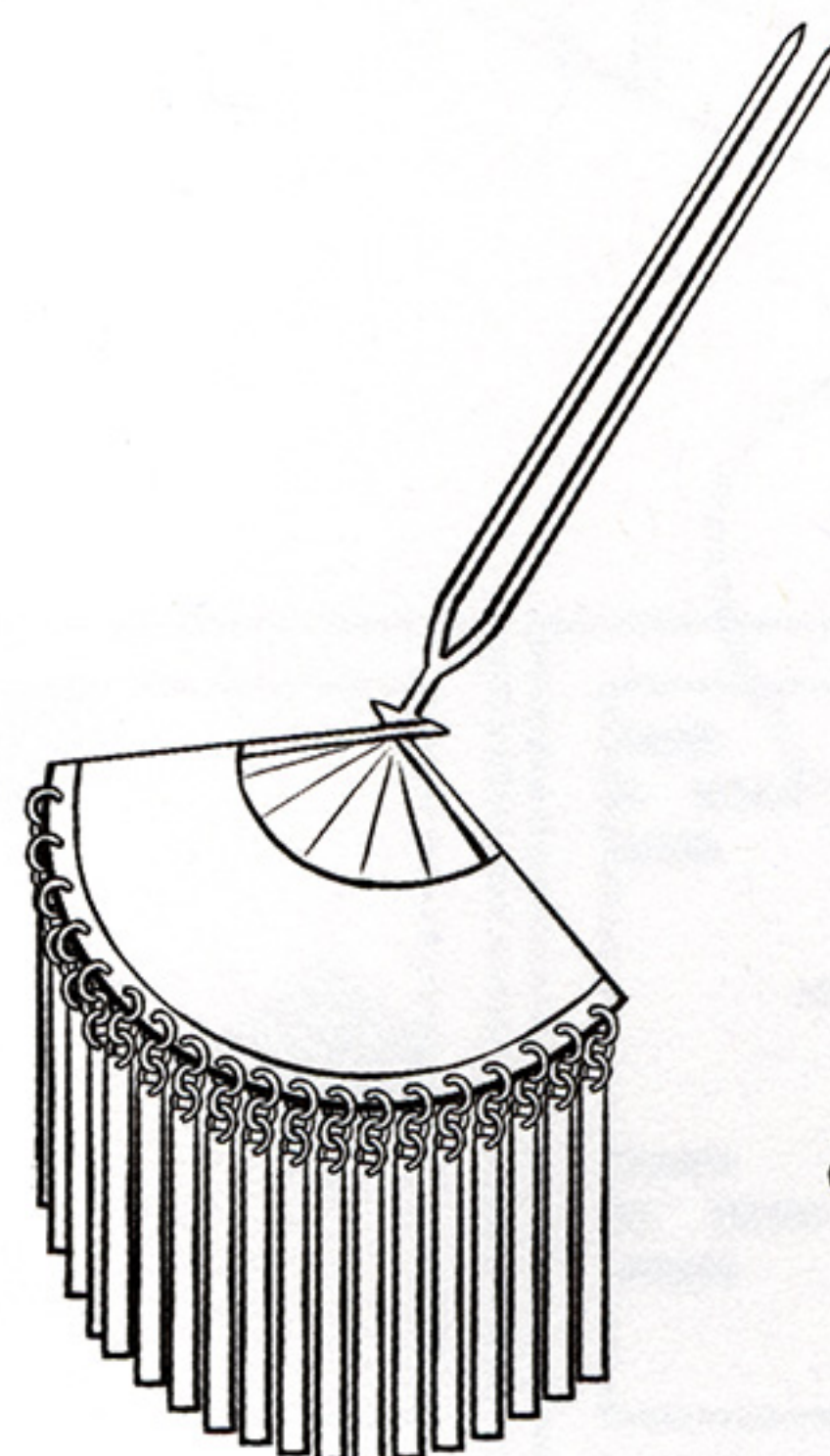
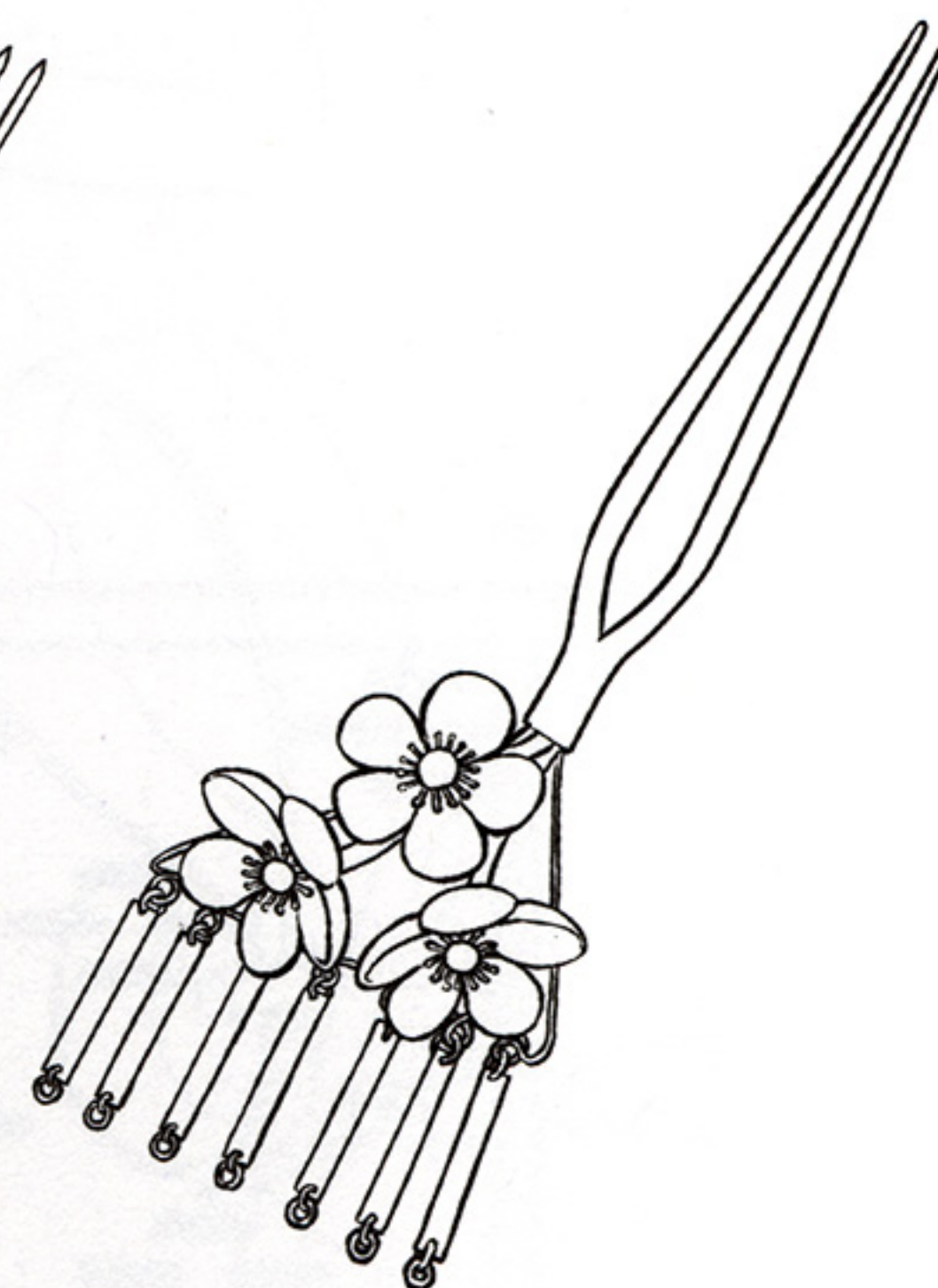
笄

簪の種類

平打簪

玉簪

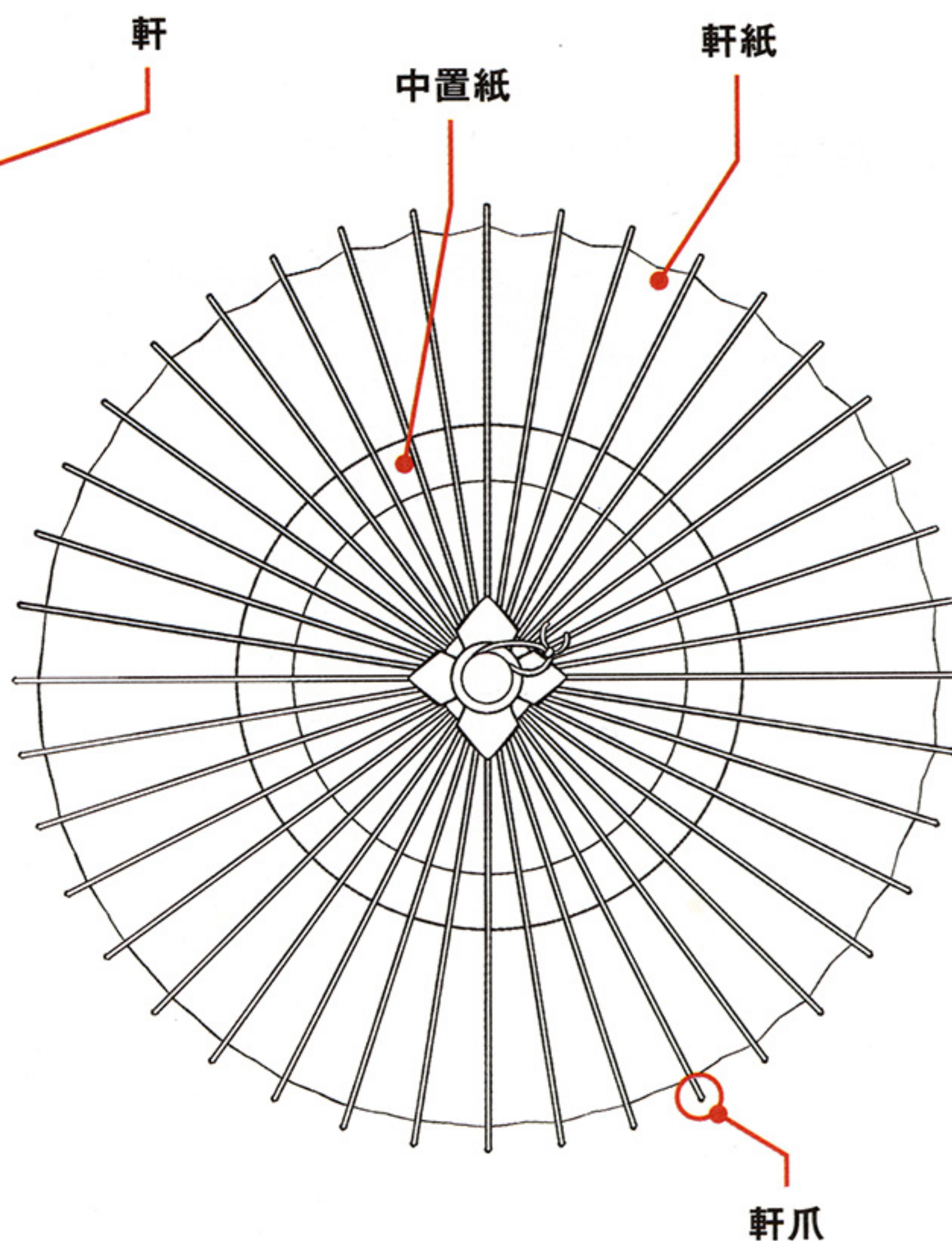
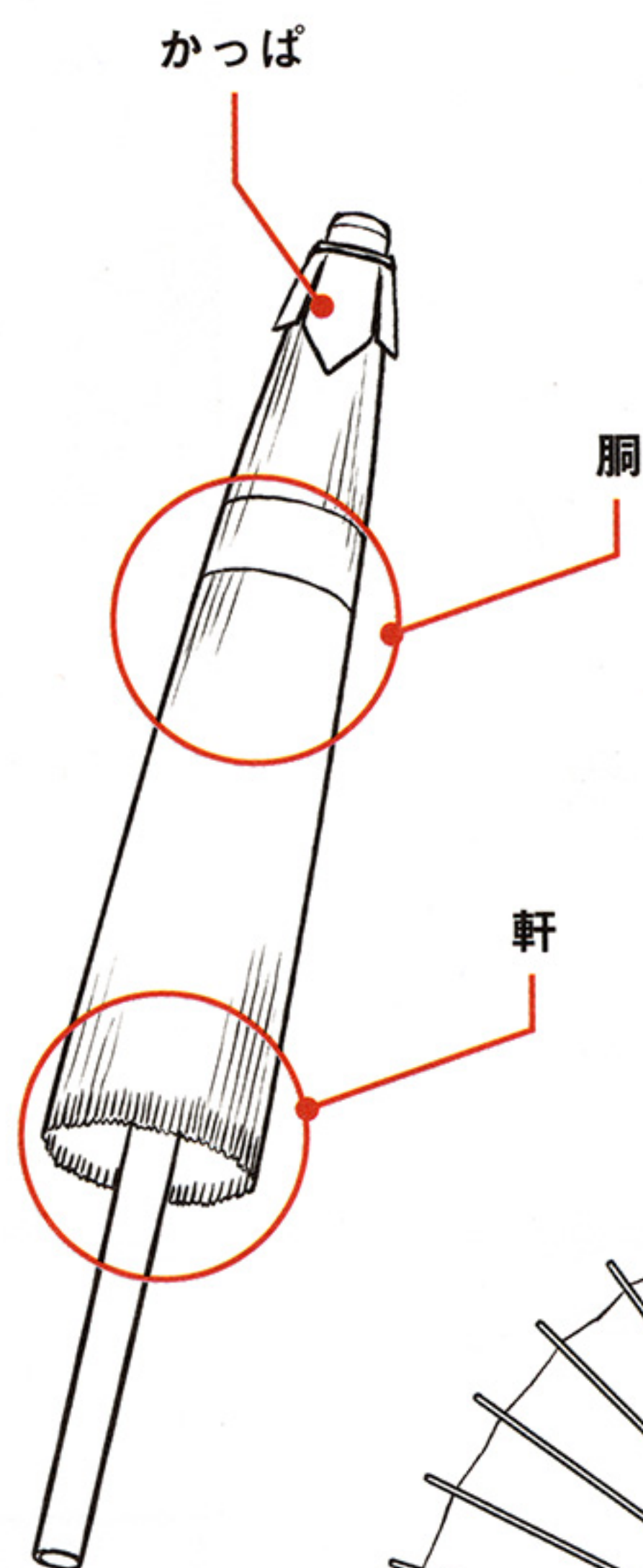
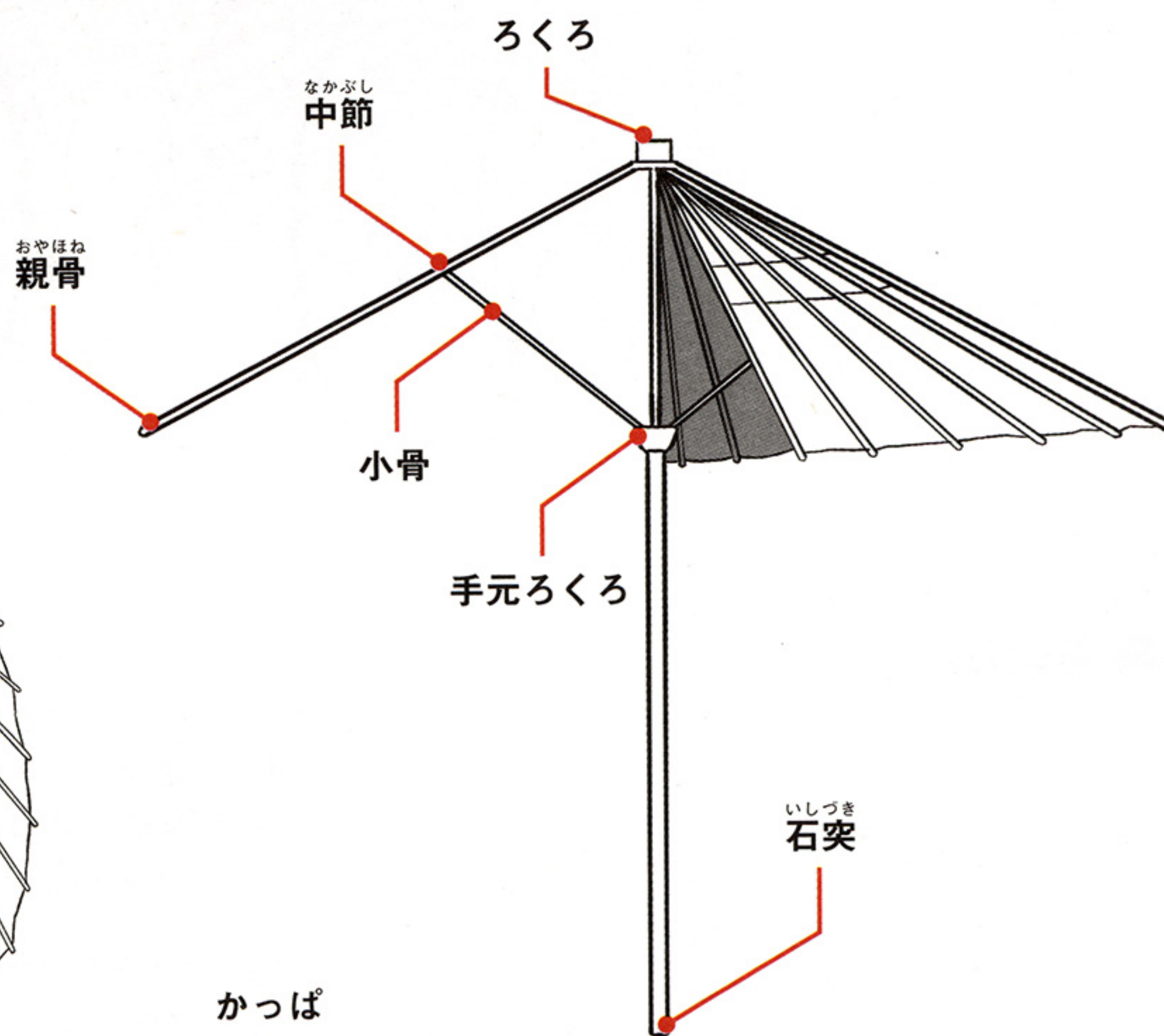
びらびら簪

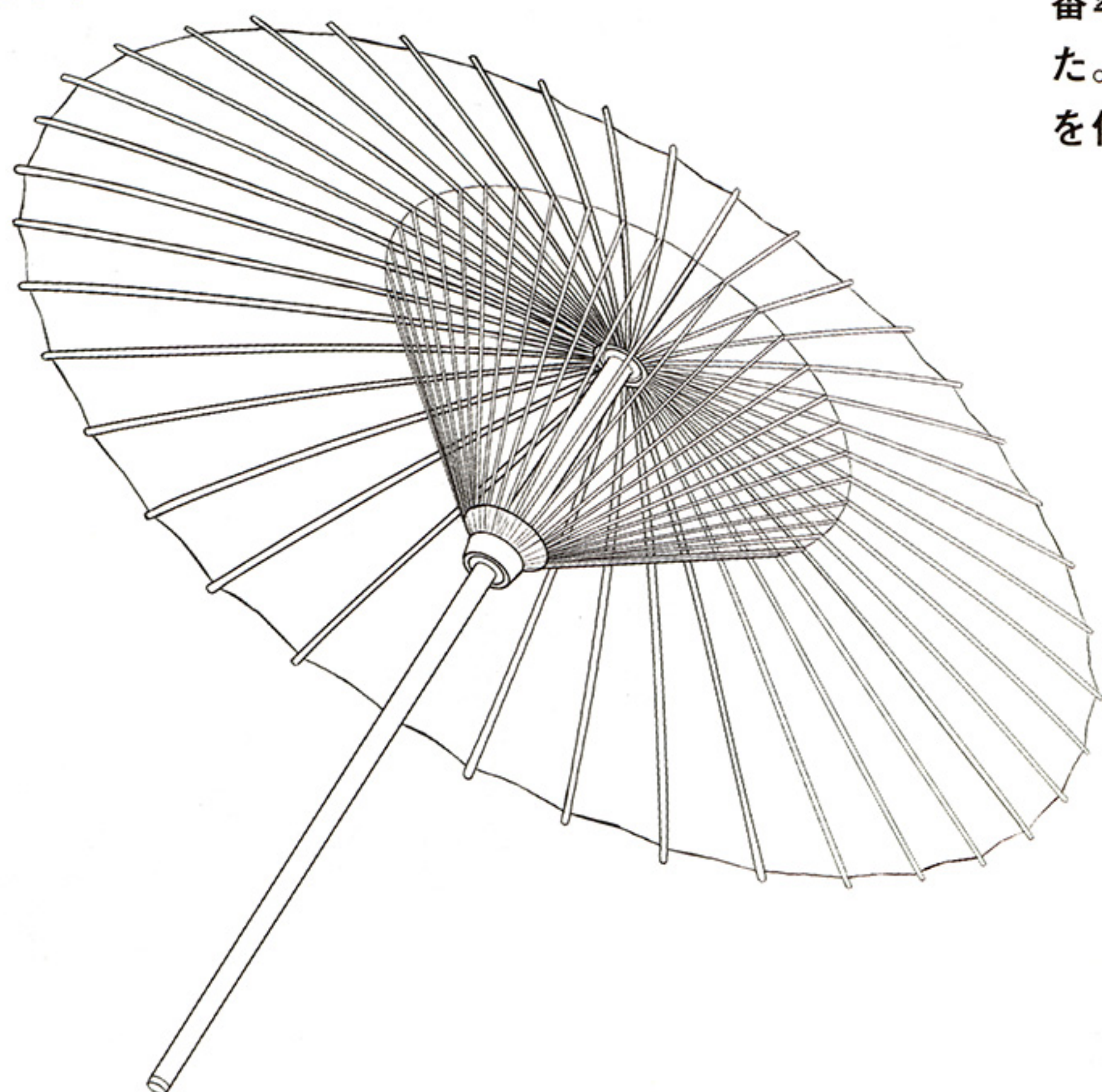
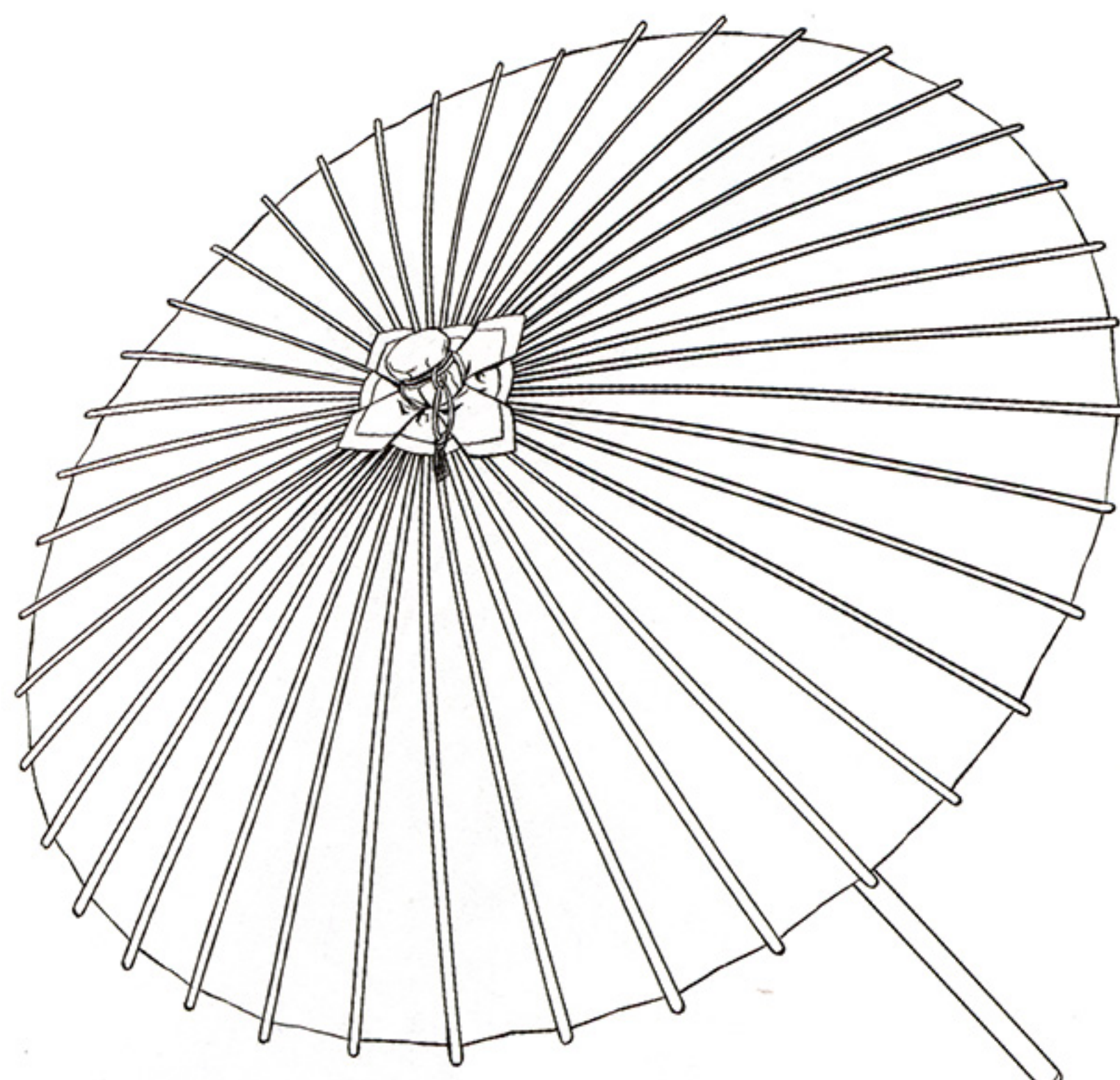
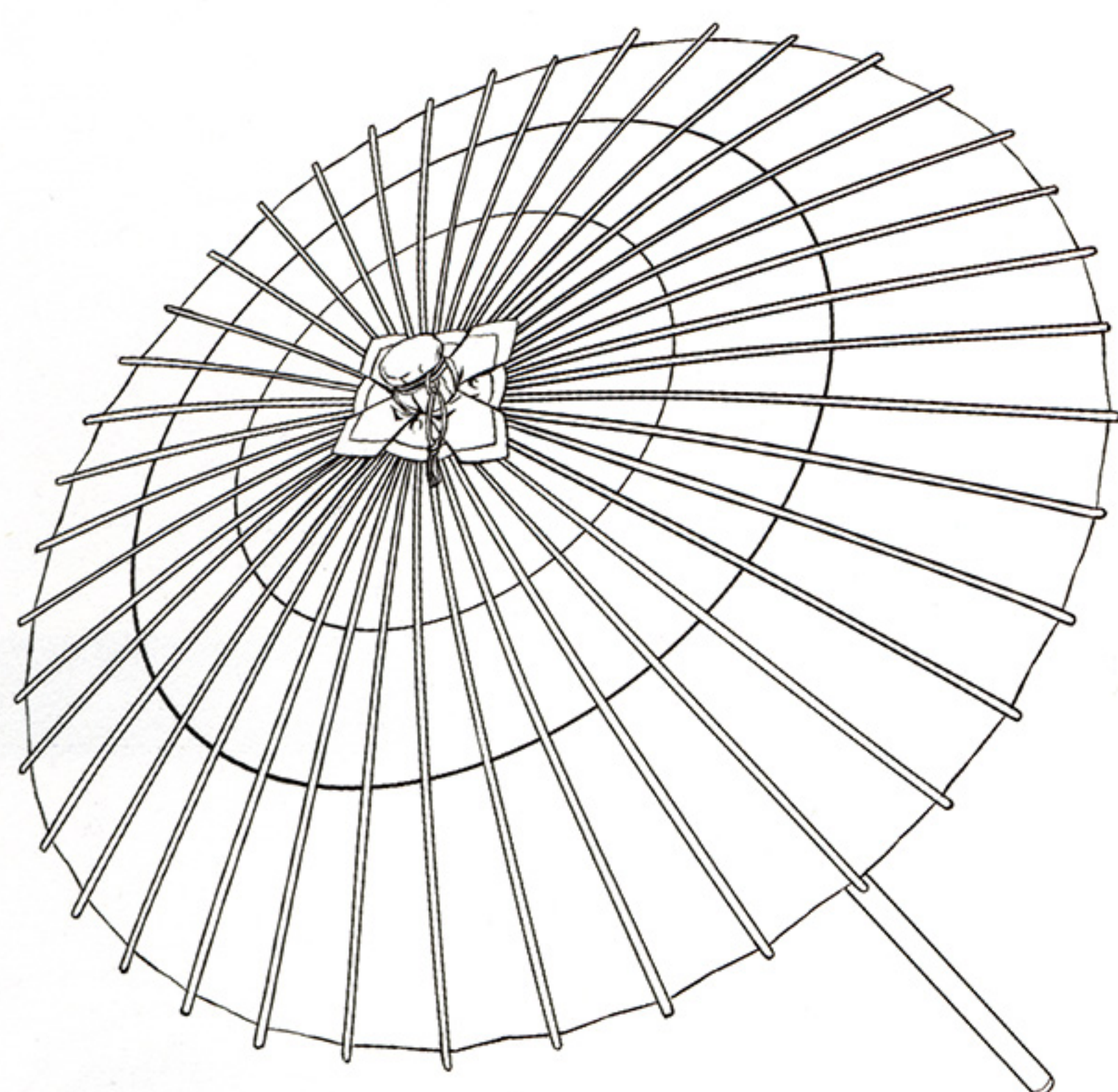
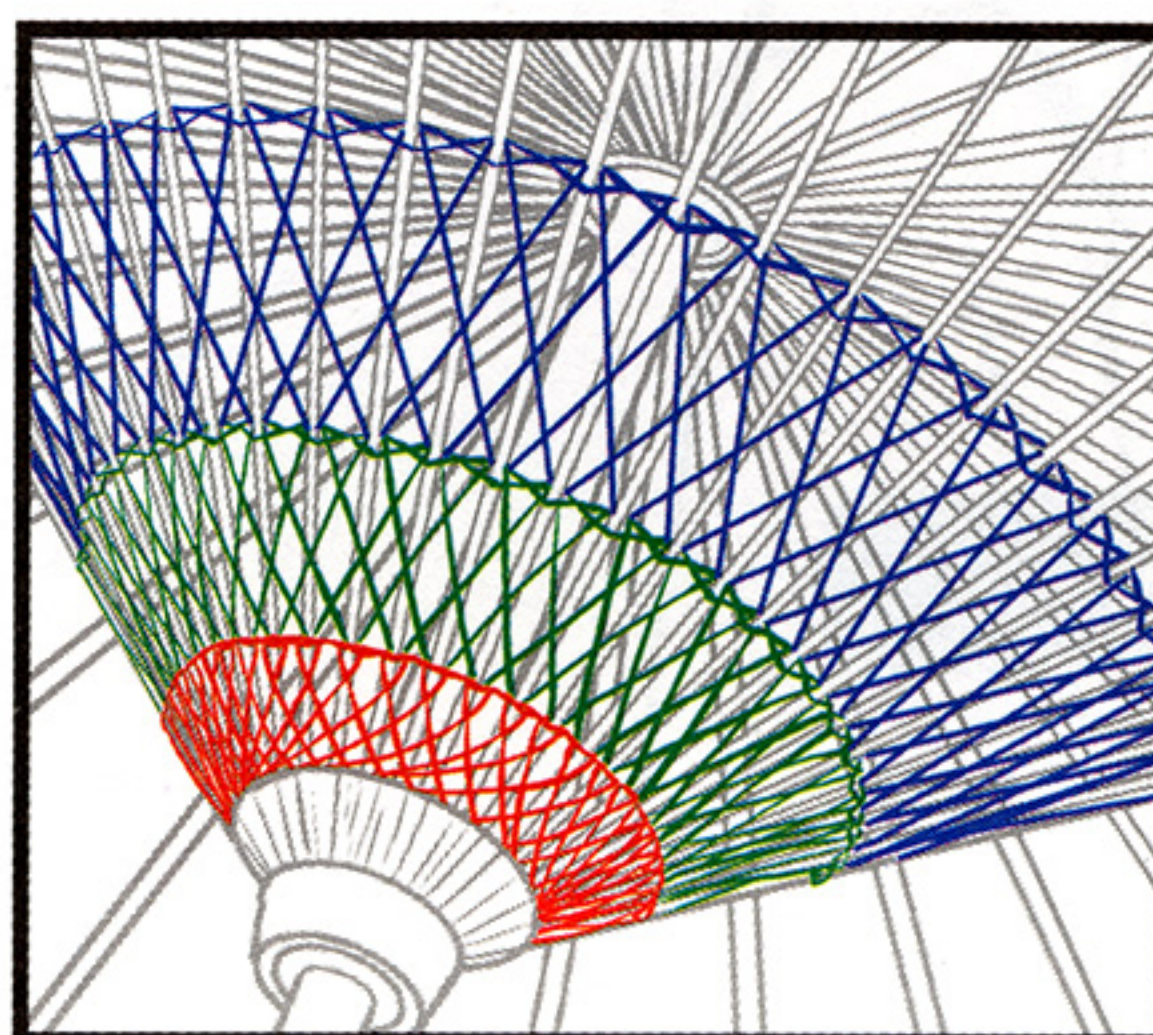
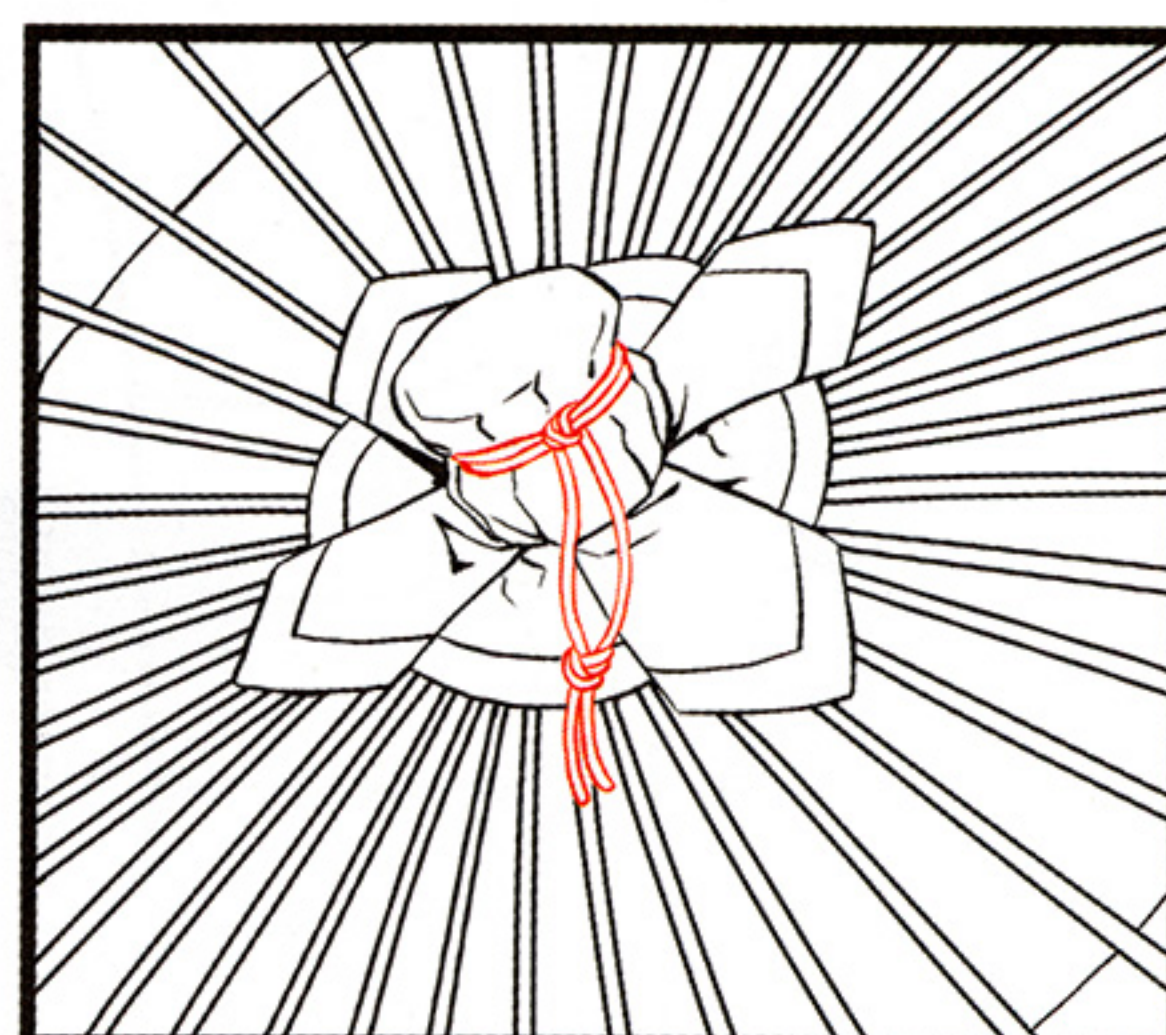
チリ簪

04 和傘

時代劇などでもよく登場する骨の多い紙製の傘です。中国から伝わったものを日本独自の技術で開閉できる形に改良され、まるでからくりのようである事から「からくり傘」が縮まって「唐傘」と呼ばれるようになったという説もあります。

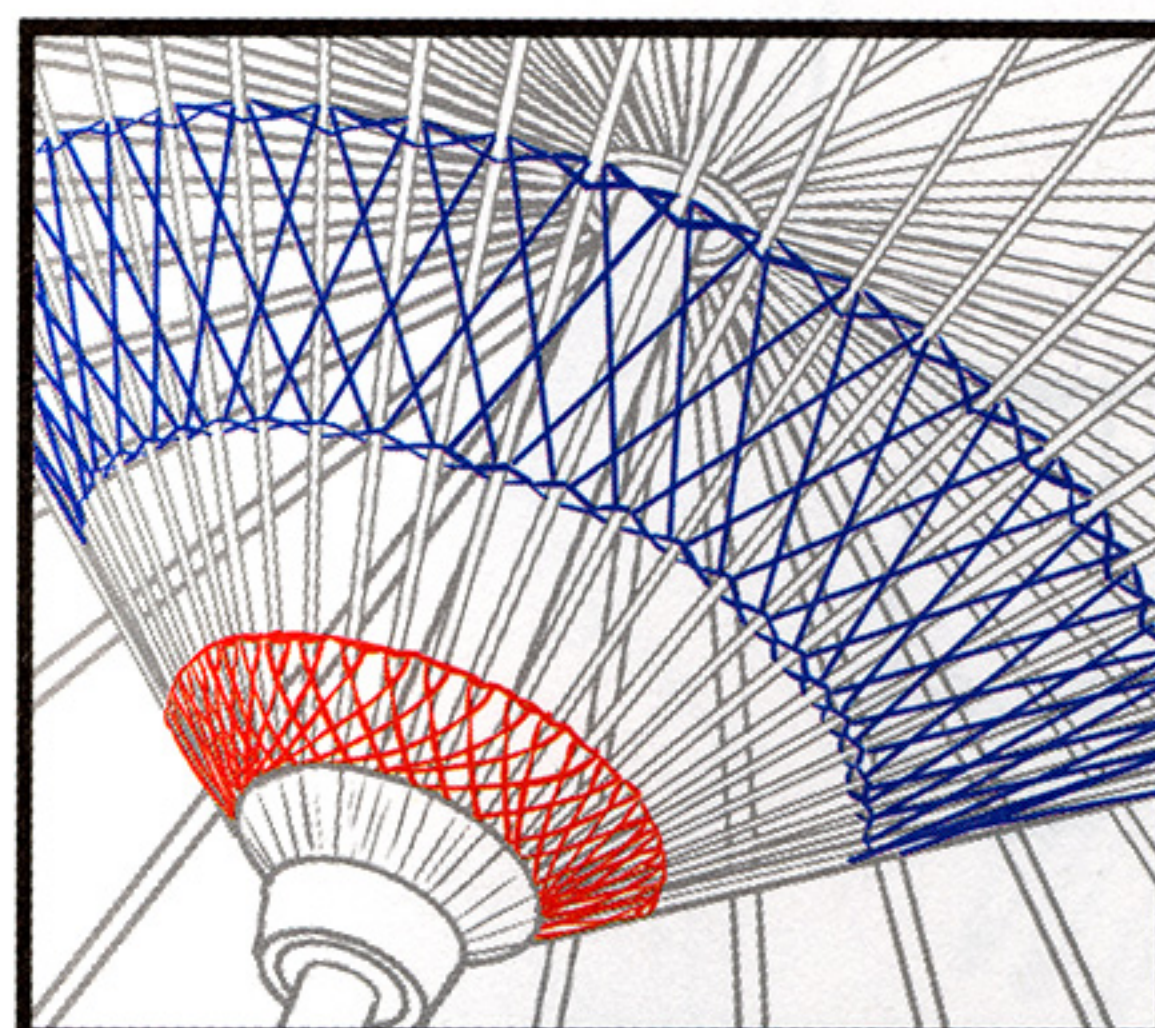
使用例

部位の名称

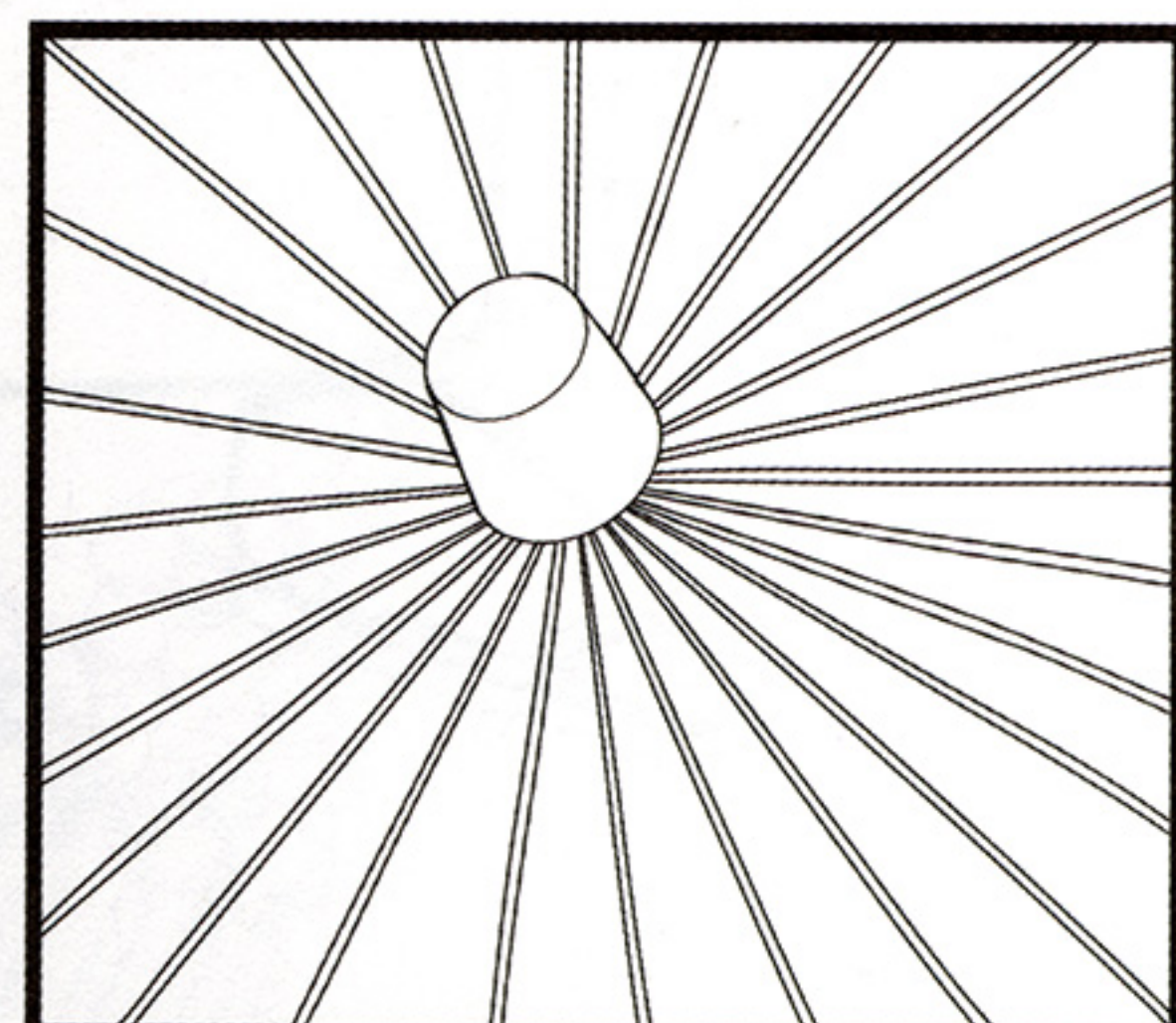
ろくろ
中節（なかぶし）
親骨（おやほね）
小骨
手元ろくろ
石突（いしづき）
かっぱ
胴
軒
中置紙
軒紙
軒爪

和傘の種類

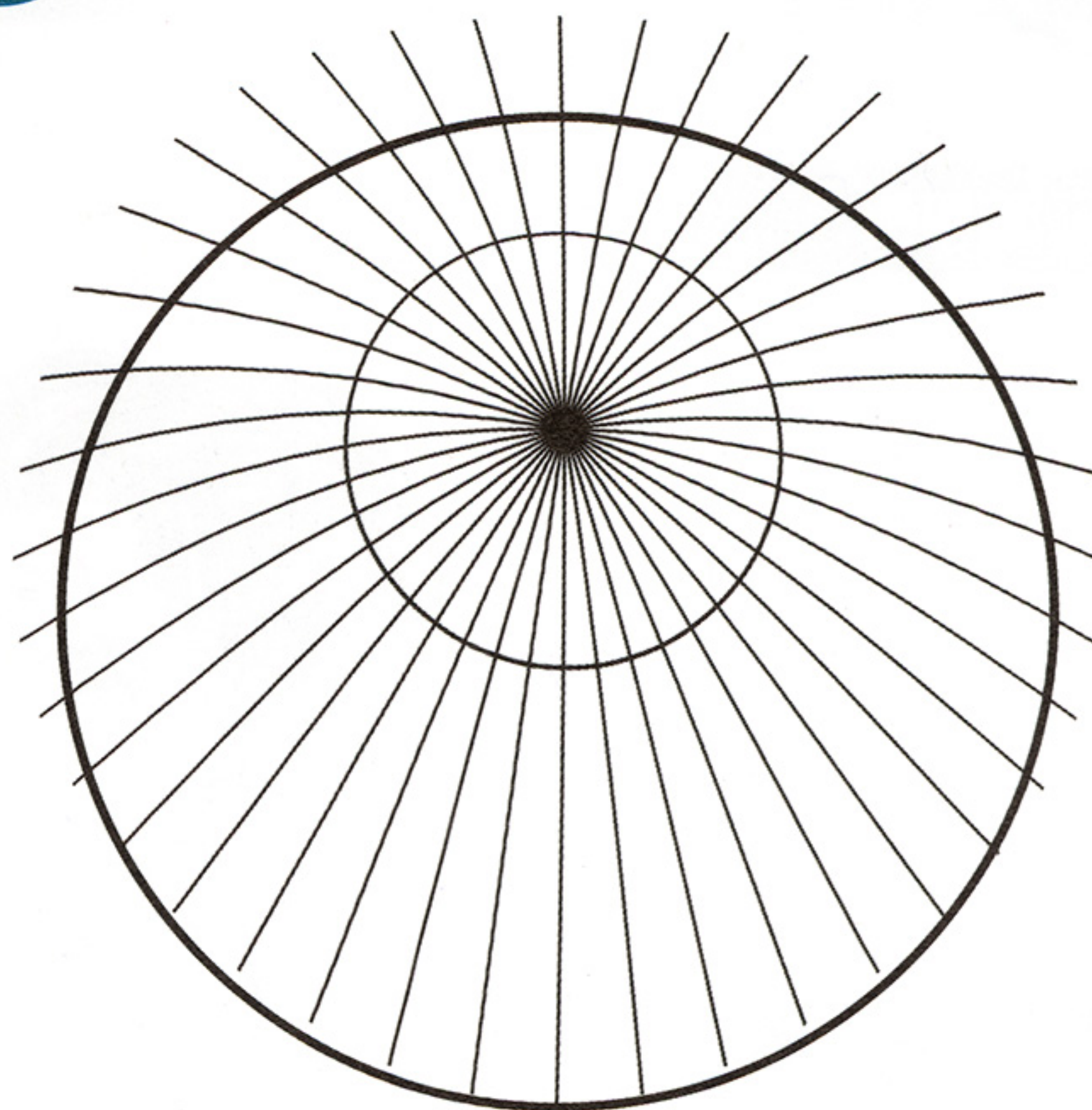
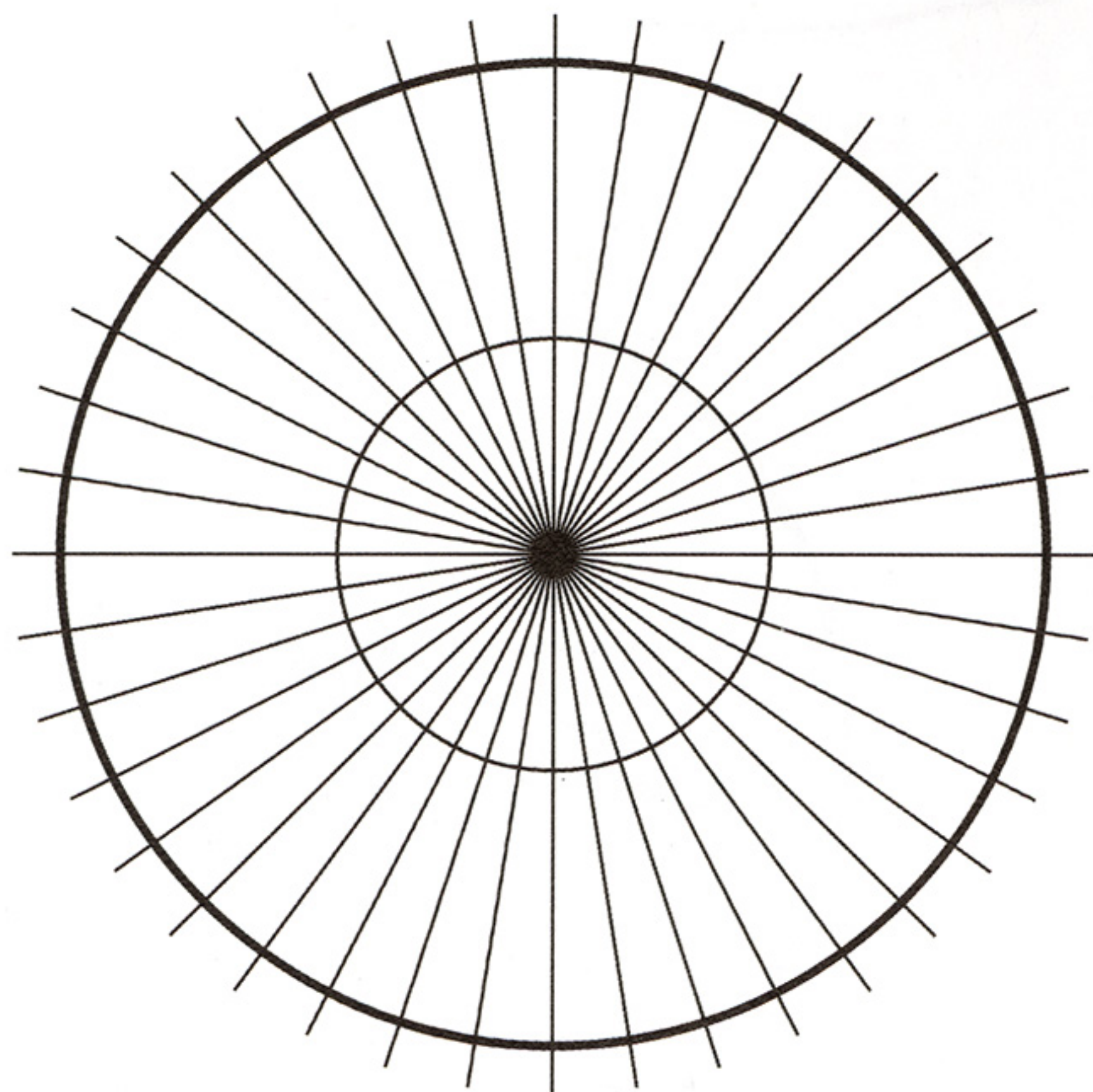
● 番傘

番傘はシンプルで、少し太めの和傘です。主に男性が使用していました。大阪では、主従関係を見分けるために、従者が持つ傘には黒い縁を付けていたそうです。

● 蛇の目傘

傘を上から見た時の柄が、蛇の目に似ていることから、蛇の目傘と呼ばれ始めました。現在は無地の物でも蛇の目傘と呼ばれています。
番傘より細身なのが特徴です。高級品であり、富裕層が用いました。

蛇の目傘には飾り糸がある。

カッパ部分に紐があり
閉じた時はここを持つ。

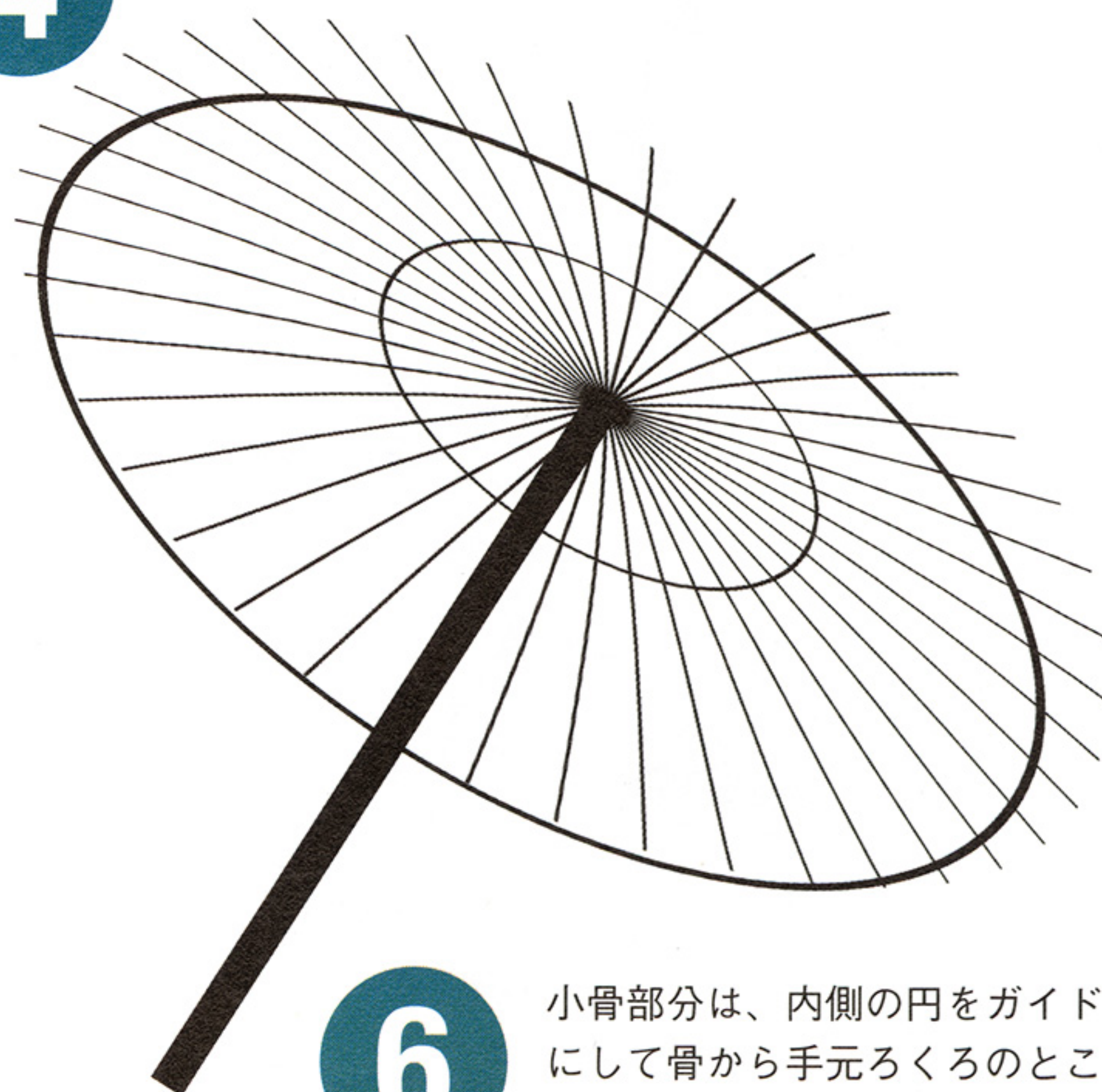
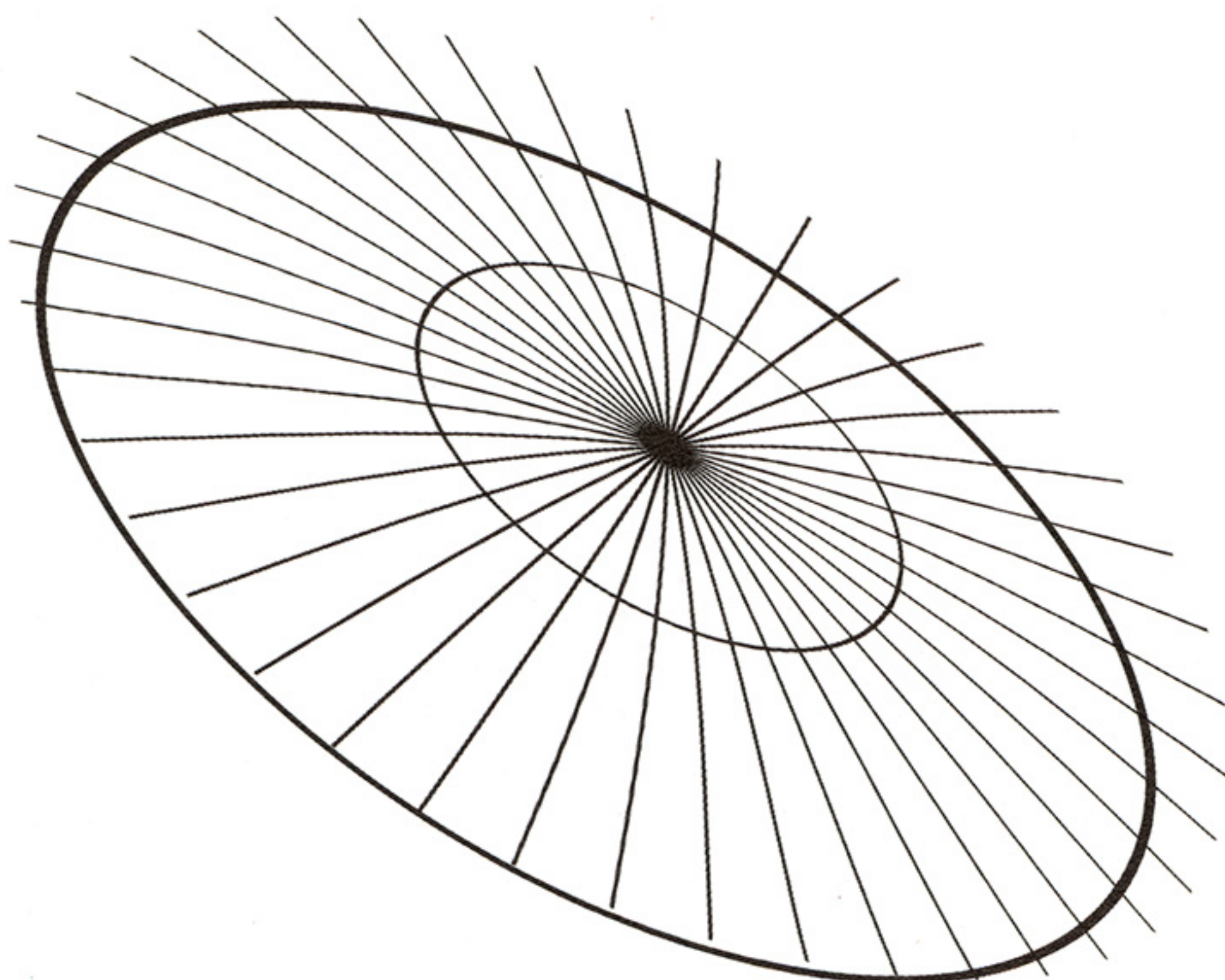
● 舞傘・日傘

本絹を使用した、舞踏用のやや小ぶりな傘です。
舞踏用のため、非常に軽くできており、見た目も透明感があり、艶やかで美しいデザインです。
雨傘と比べると傘の厚みが薄くなっています。

舞傘にも美しい飾り糸がある。

頭頂部にカッパがない。

和傘の描き方

1 Photoshopなどのソフトがある場合は、円と放射状の線をそれぞれ別のレイヤーで描き、傘を真上から見たような図を作る。

2 中心の小さい円と、放射状の線を変形ツールで図のように歪ませる。

3 全体を縦につぶし、斜めに傾ける。
Photoshopなどのソフトがない場合は、この図をイメージして描き始める。

4 放射状の線の中心に傘の柄を描き加える。

5 放射状の線をガイドにして骨を描き込む。
骨と骨の間を少しアーチ状にすると傘の縁がそれらしくなる。

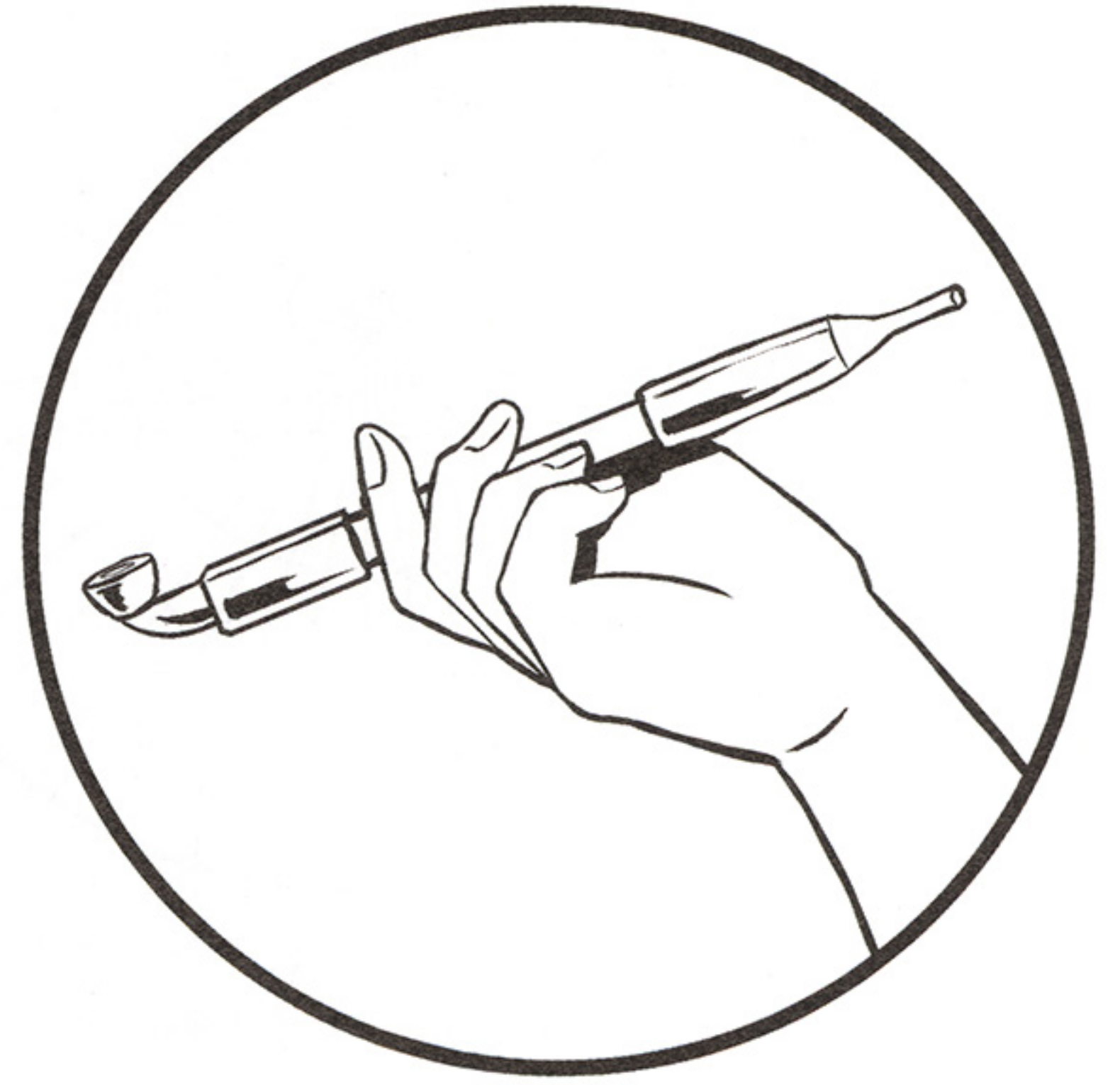
キレイな線ではなくフリーハンドで描くことでランダム性が出て、傘の材質の質感が表現できる。

6 小骨部分は、内側の円をガイドにして骨から手元ろくろのところまでを線で繋げて描く。
1本1本描き込まず、省略してもそれらしく見える。

05

煙管（きせる）

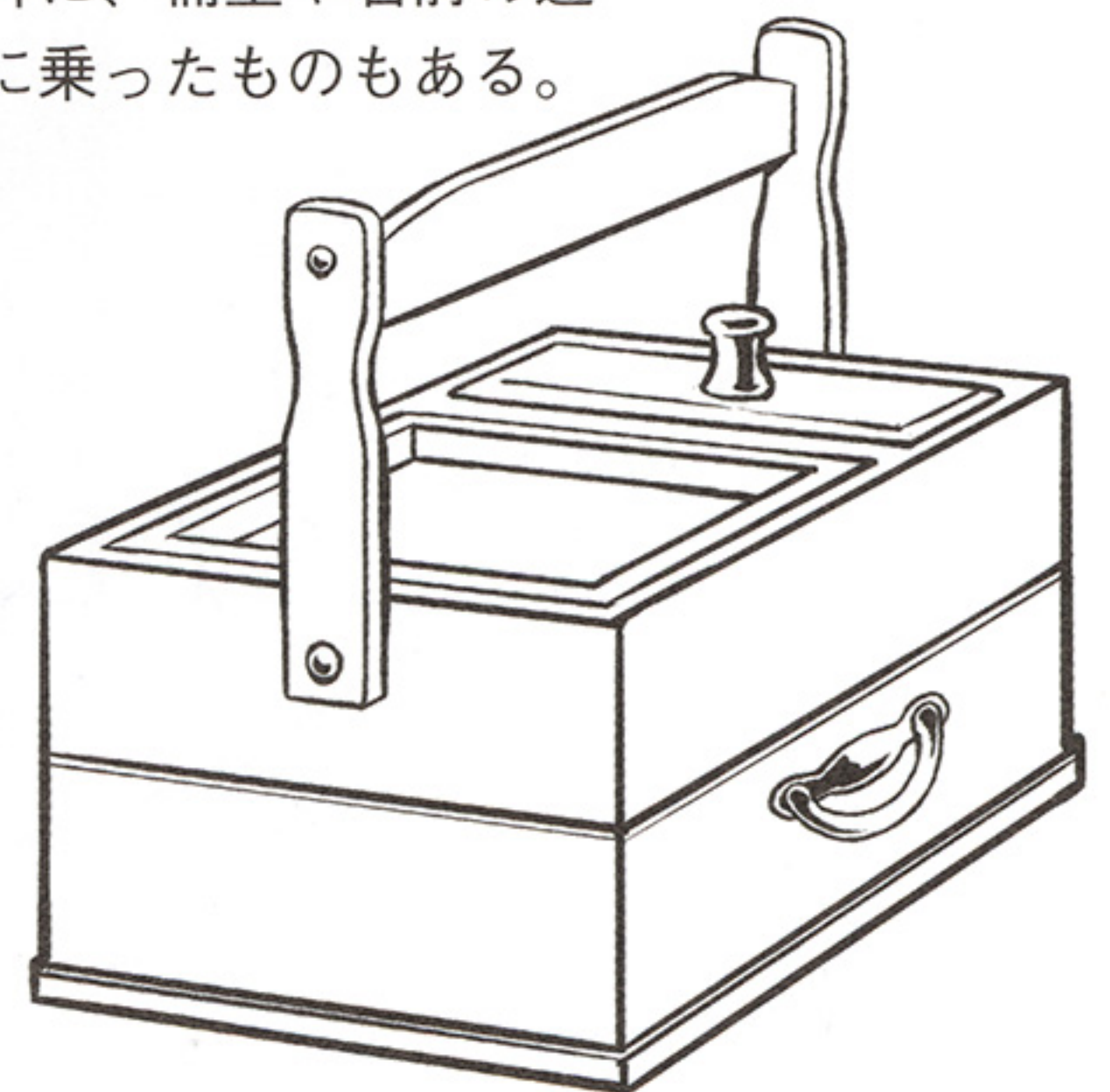
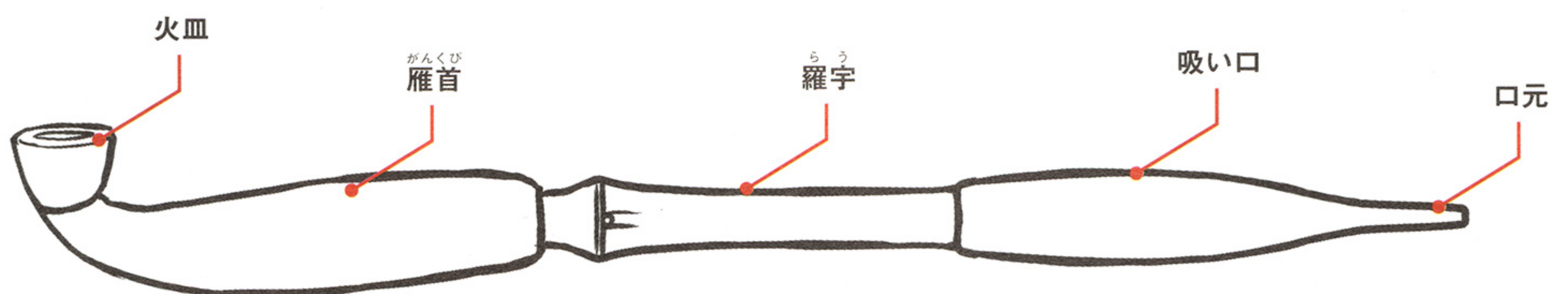
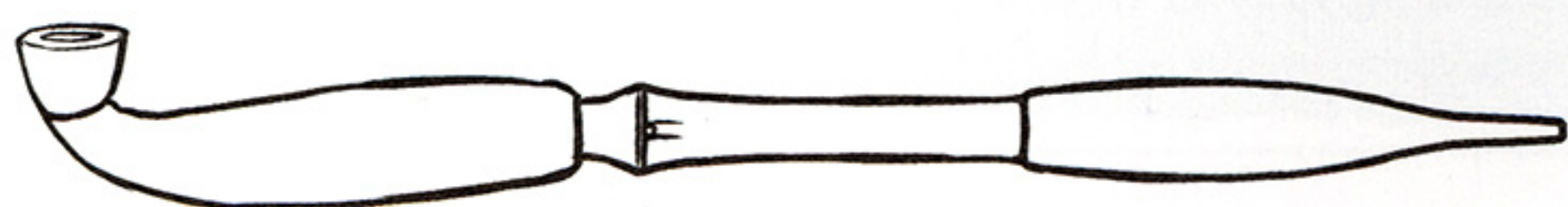
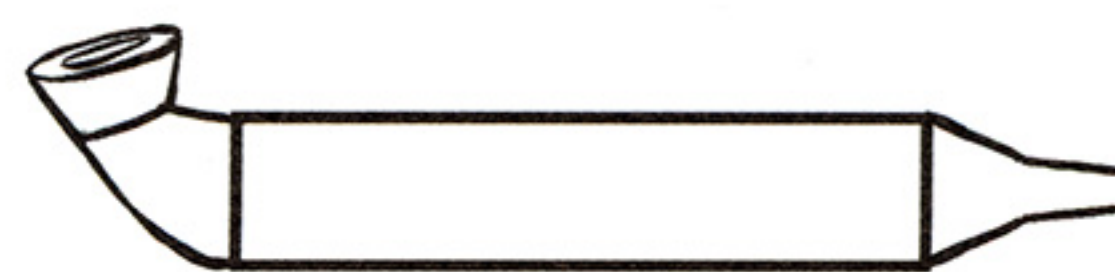
煙管は小道具として時代劇などで登場することが多く、吉原の遊女が煙管を吸うシーンなど数多く見られます。当時は嗜好品としてではなく、一種のファッションやステータスとしてのシンボルであったともいわれています。

着用例

たばこ盆
煙管を吸うために必要な道具一式をまとめたもの。箱型以外に、桶型や名前の通りお盆に乗ったものもある。

部位の名称

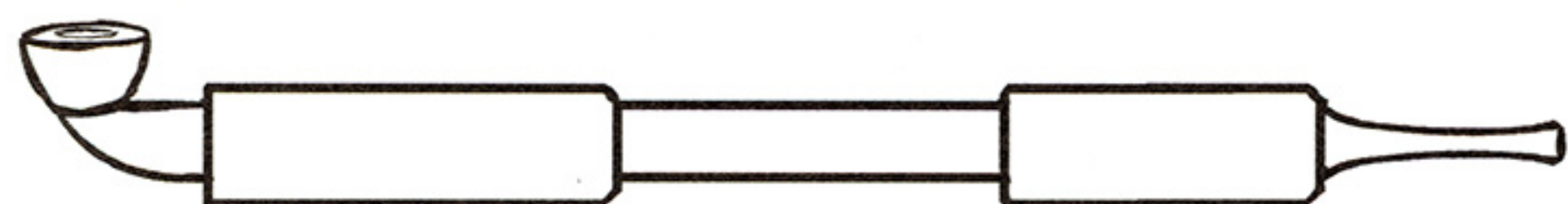
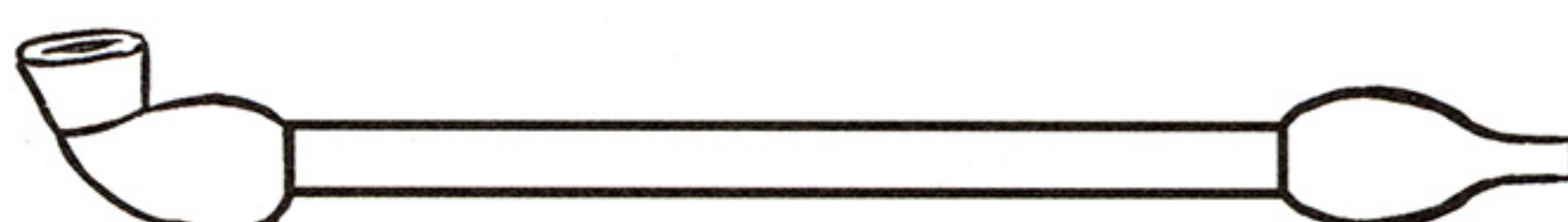
火皿
雁首（がんくび）
羅宇（らう）
吸い口
口元

煙管の種類

石州
一般的な形のひとつ。

刀豆
全体が扁平で持ち歩きやすい形。

延べ煙管
全体が金属でできている。

手綱
形の大胆さを見せるためのもの。

如心
石州と並び一般的な形。

光大寺
吸い口が丸く、火皿が小さいのが特徴。

ONE POINT

歌舞伎役者の煙管の持ち方

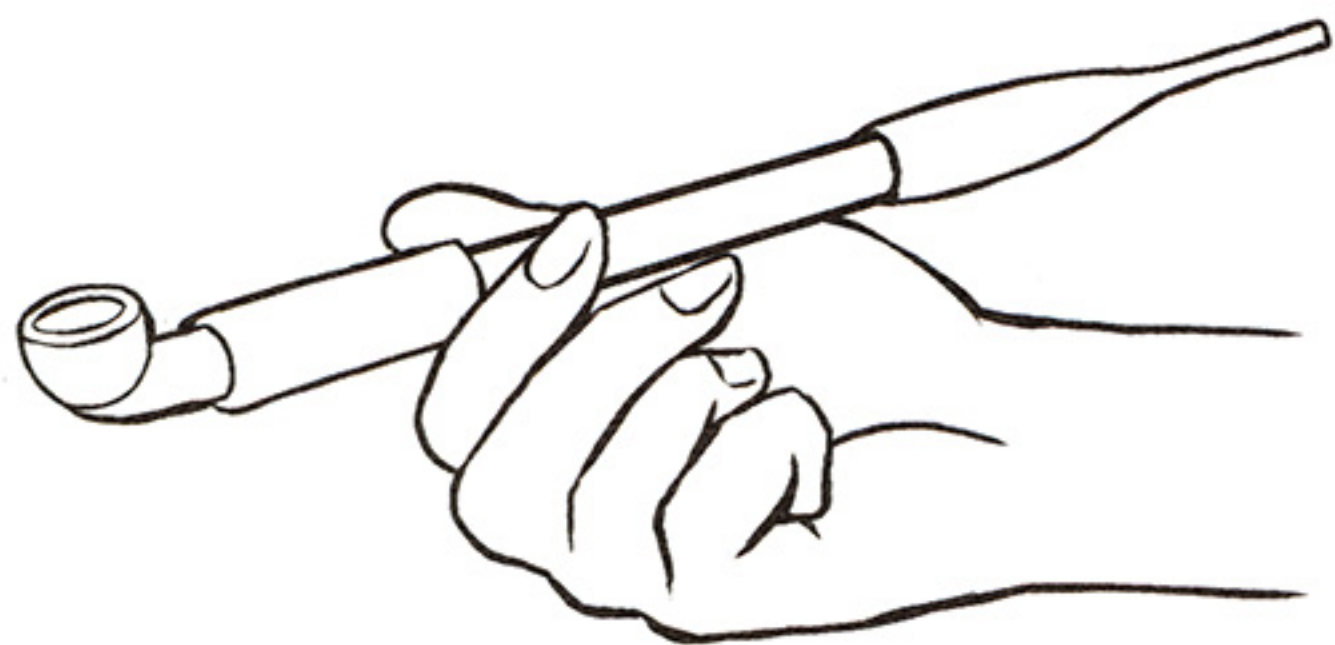
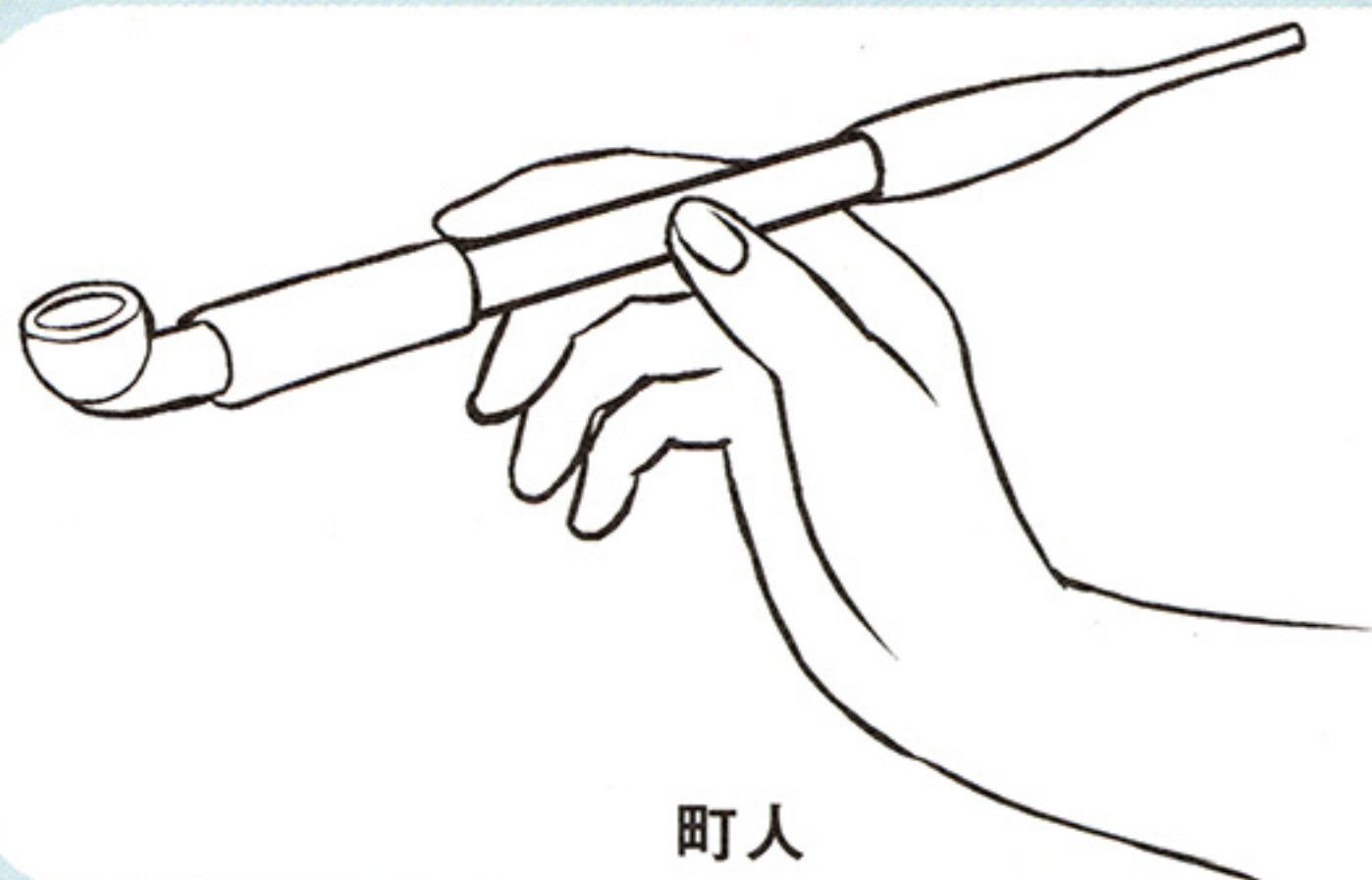
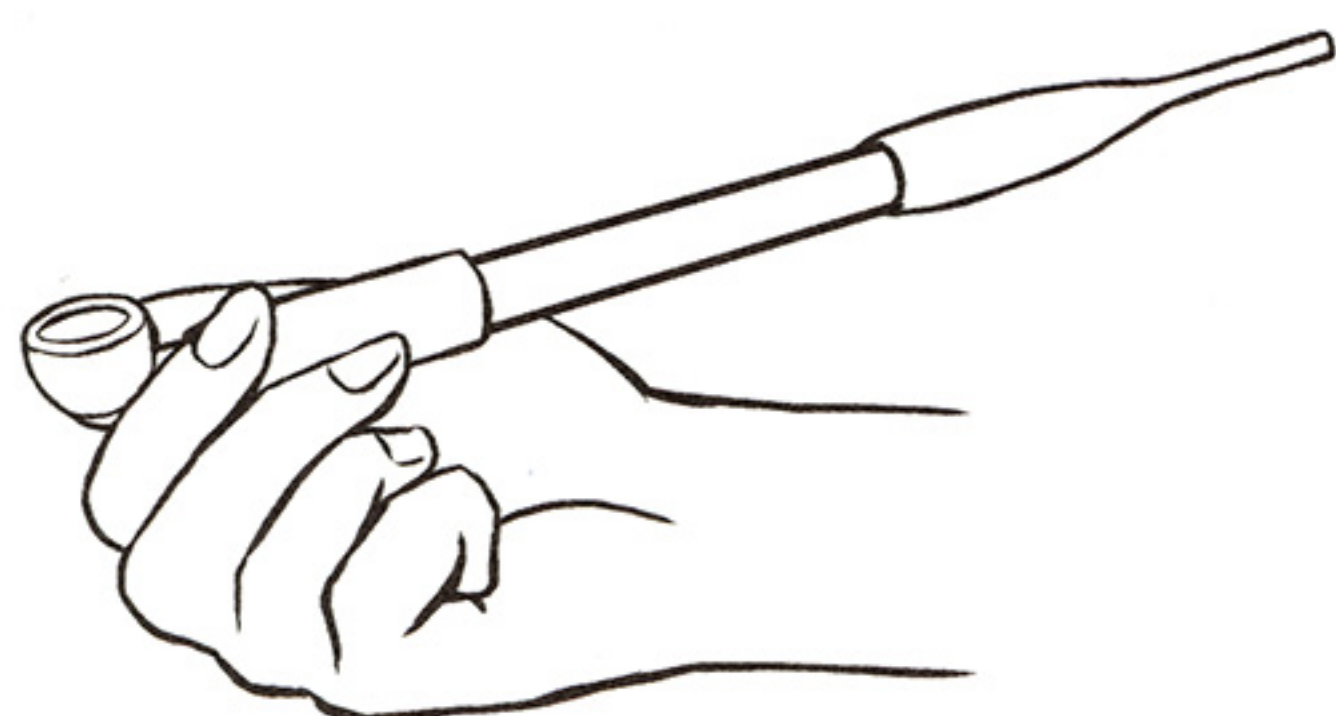
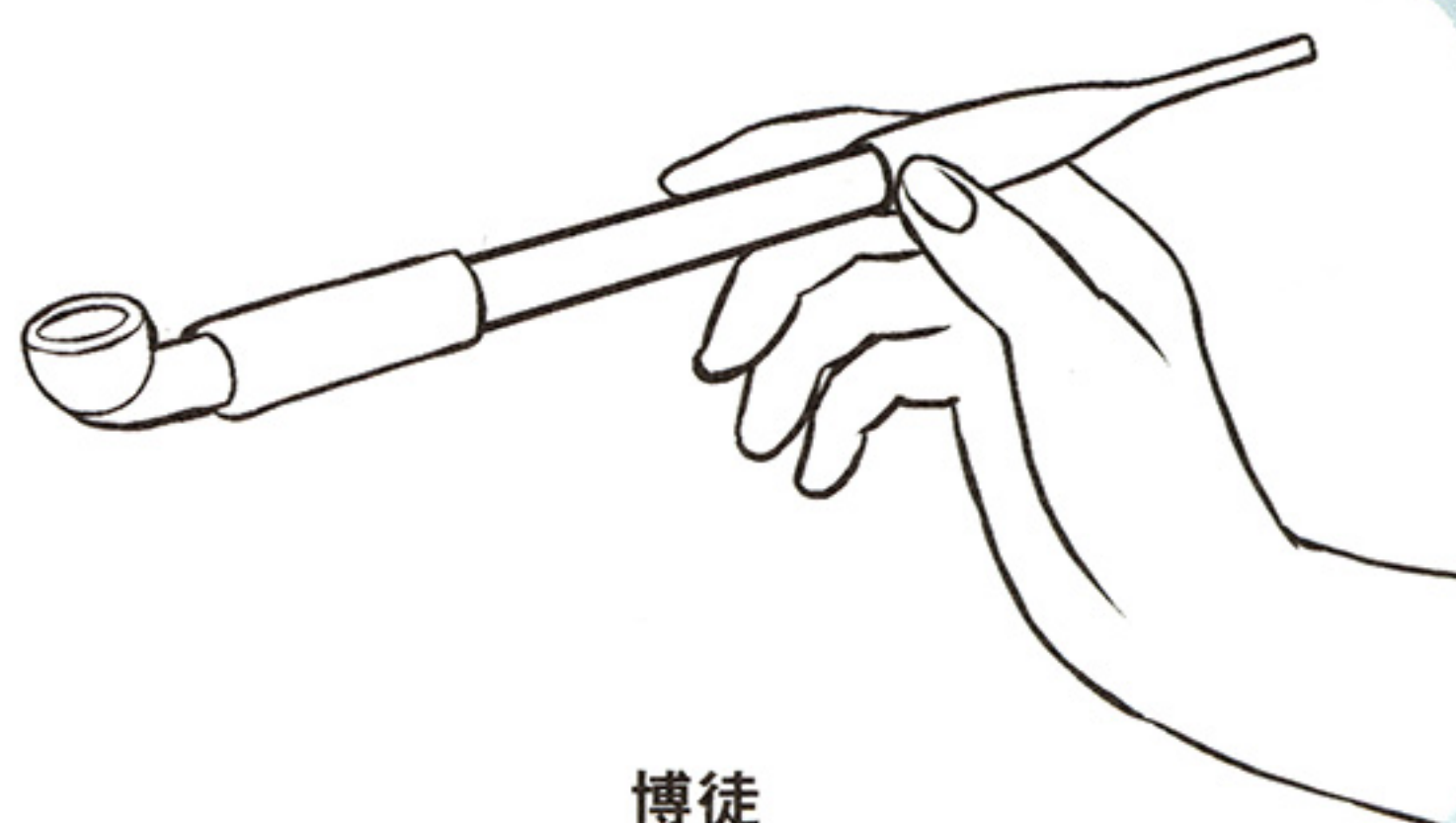
歌舞伎では、煙管の持ち方をかえて役柄を表現しています。
細かいところに注意して見てみるのも面白いでしょう。

武士

町人

農民

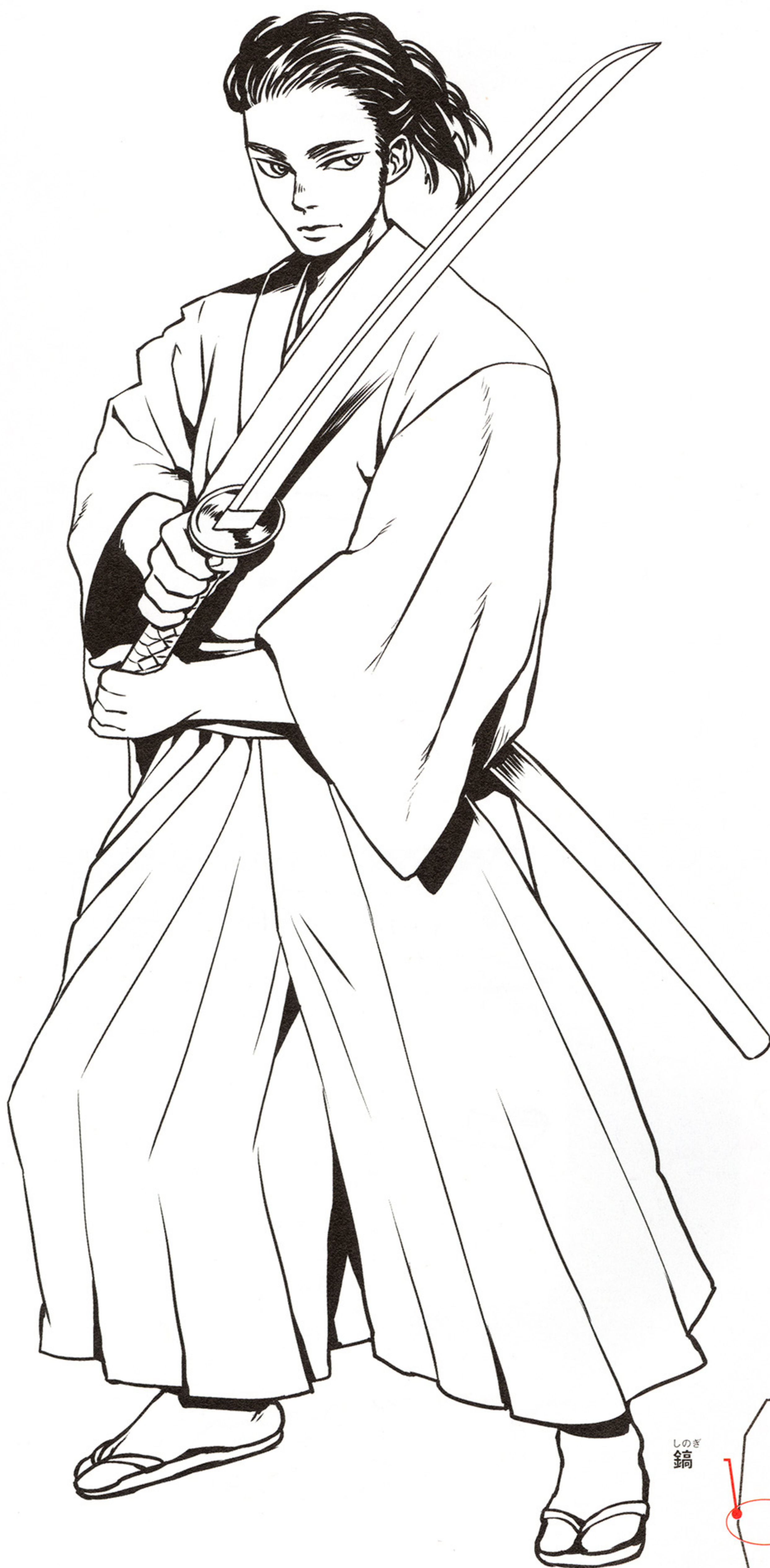
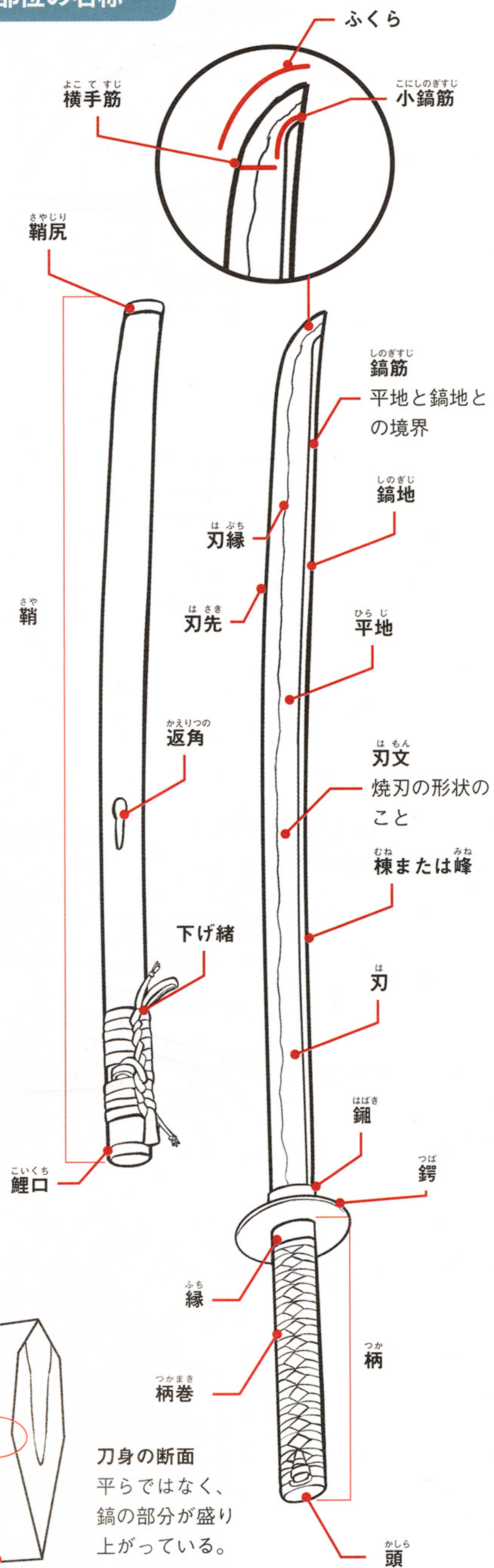
博徒

06 日本刀

日本の刀剣といえば「日本刀」が思い浮かびます。
日本刀は日本独自の鍛冶製法によって作られた刀の総称です。時代によって反りや長さなどに変化はあるものの、構造が大きく変わることはなく、ほとんどが片刃のものです。

装備例

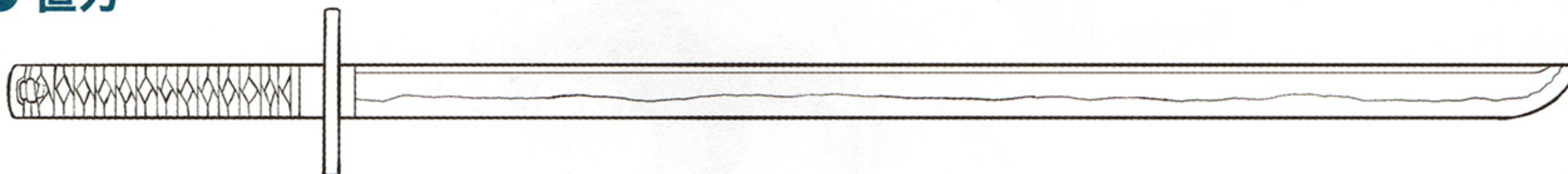
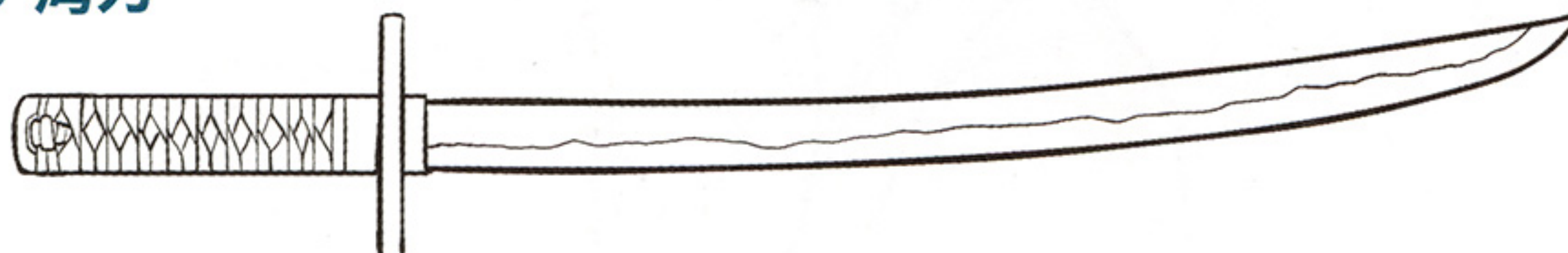
部位の名称

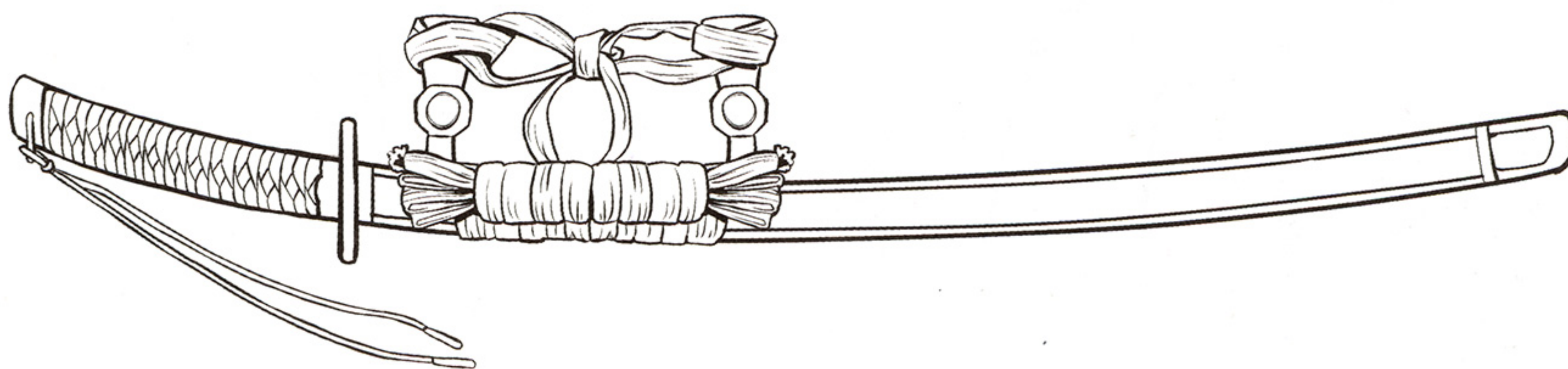
ふくら
横手筋
小鎬筋
鞘尻
鎬筋
平地と鎬地との境界
鎬地
刃縁
刃先
平地
鞘
返角
刃文
焼刃の形状のこと
棟または峰
下げ緒
刃
鎺
鯉口
鍔
縁
柄
柄巻
頭

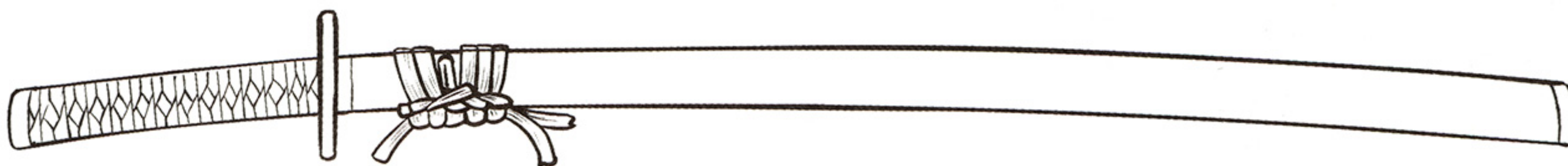
鎬
刃先

刀身の断面
平らではなく、鎬の部分が盛り上がっている。

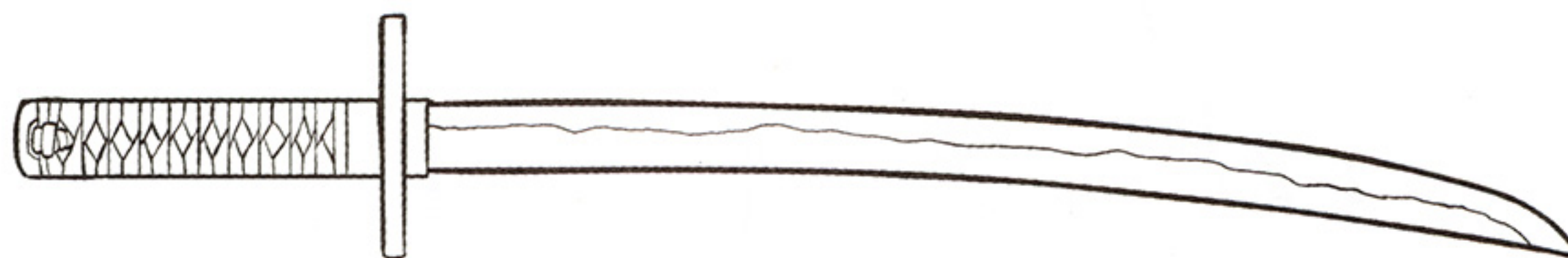
刀の種類

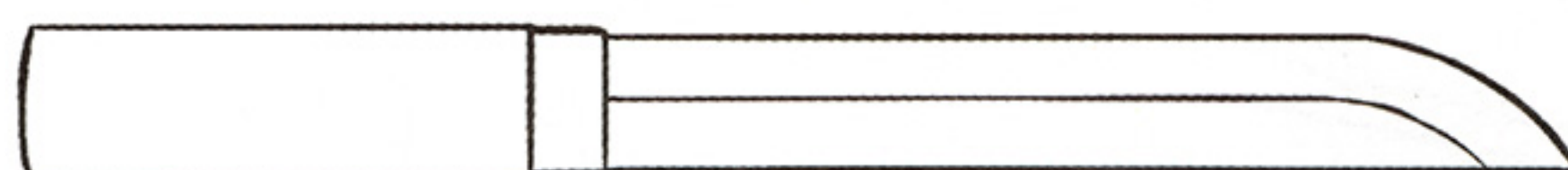
古くは刀身に反りのない直刀(ちょくとう)が主流でしたが、平安中期以降から反りの入った湾刀(わんとう)へと移行していきました。
移行した時期についてはさまざまな説があります。

● 直刀

● 湾刀(わんとう)

● 太刀(たち)

太刀は刃を下にして、吊して（佩(は)く）携帯した。打刀に比べると反りが深いものが多い。
刀身が 60cm（二尺）以上のもので、90cm 以上のものは大太刀と呼ばれた。

● 打刀(うちがたな)

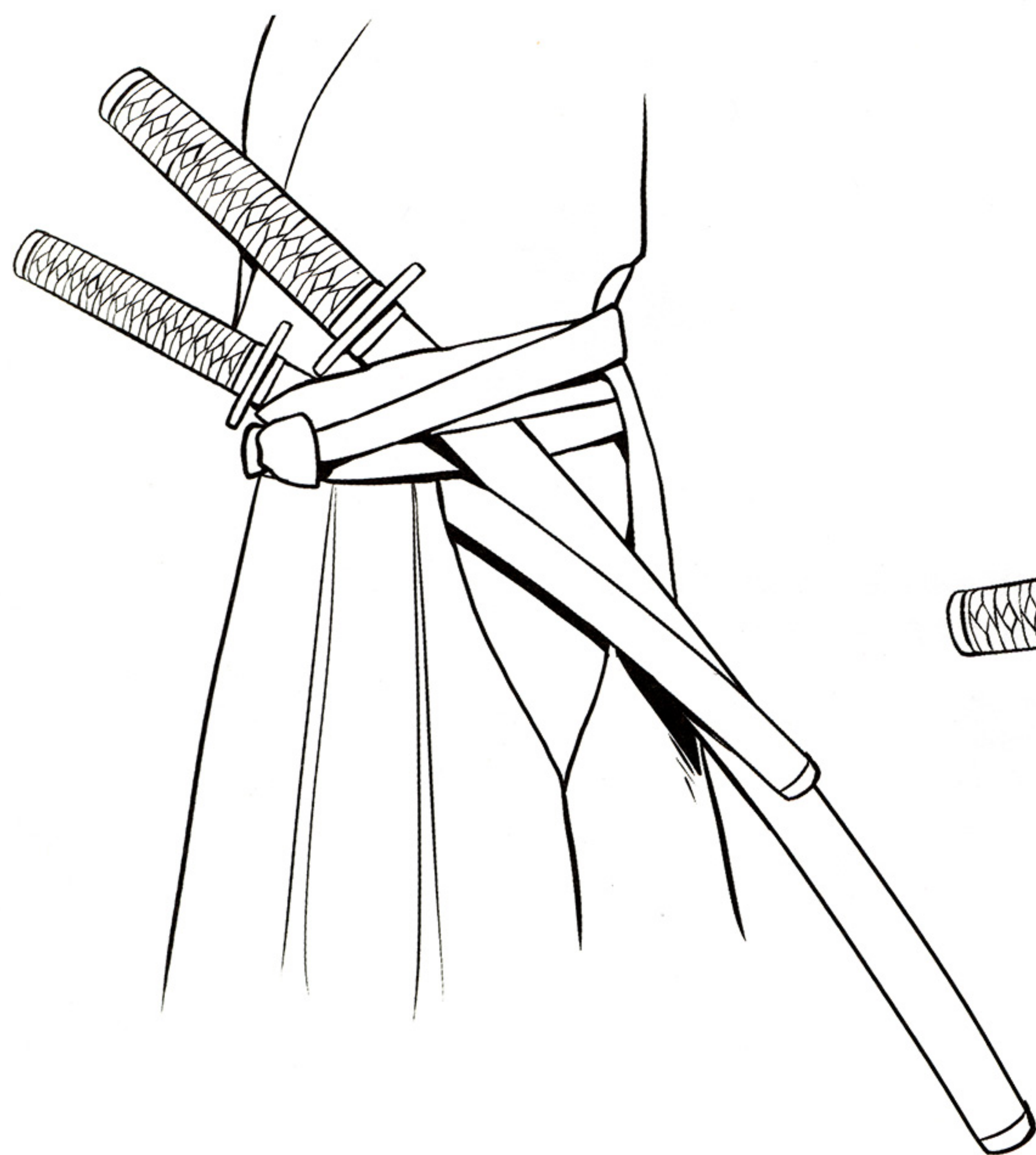
室町時代末期になると、集団の戦闘でも動きやすいよう短く軽量な打刀が登場する。
素早く戦闘態勢に入れるよう、刃を上にして腰に差して携帯した。
刀身が 60cm（二尺）以上のものを差す。

● 脇差(わきさし)

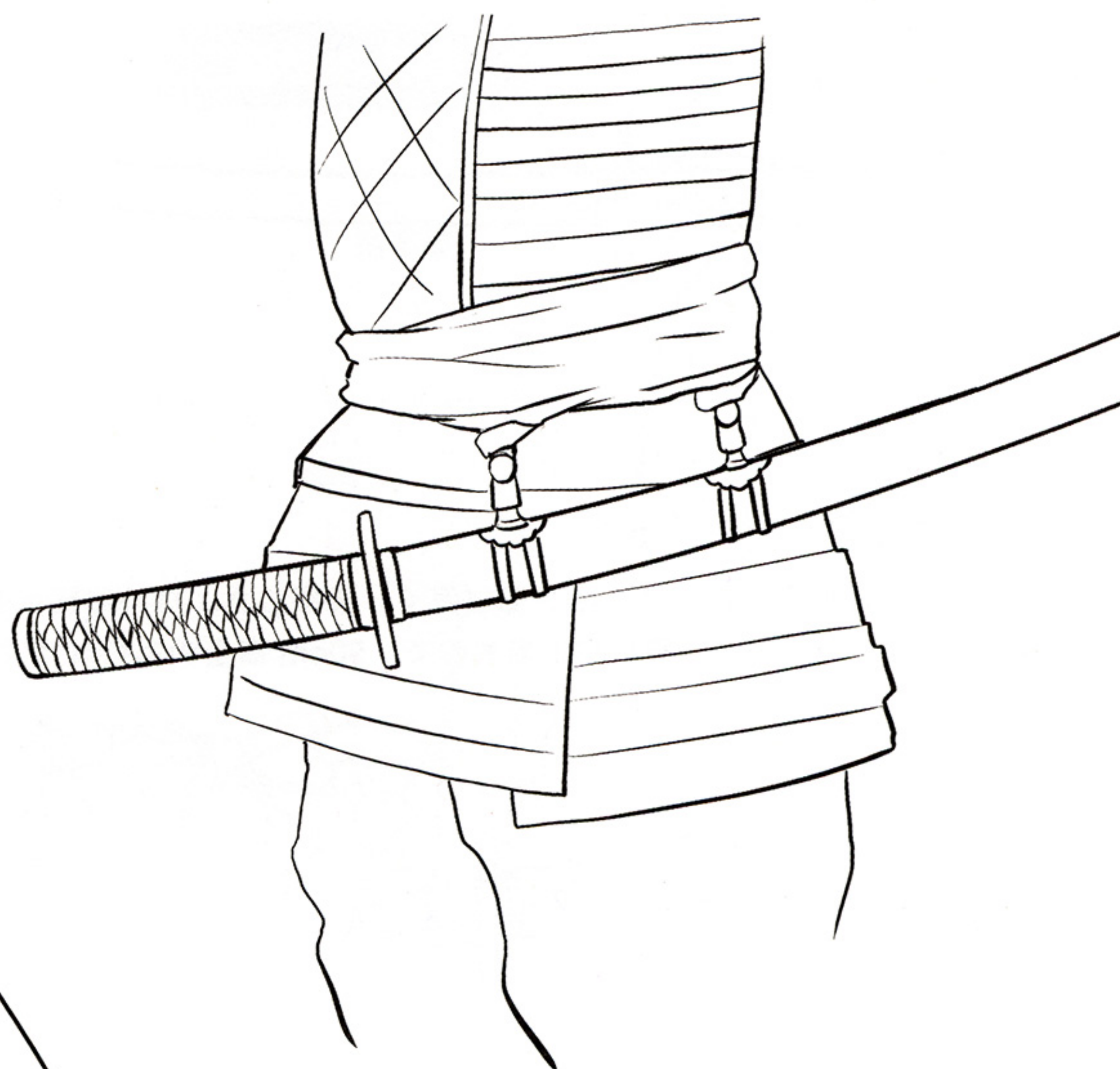
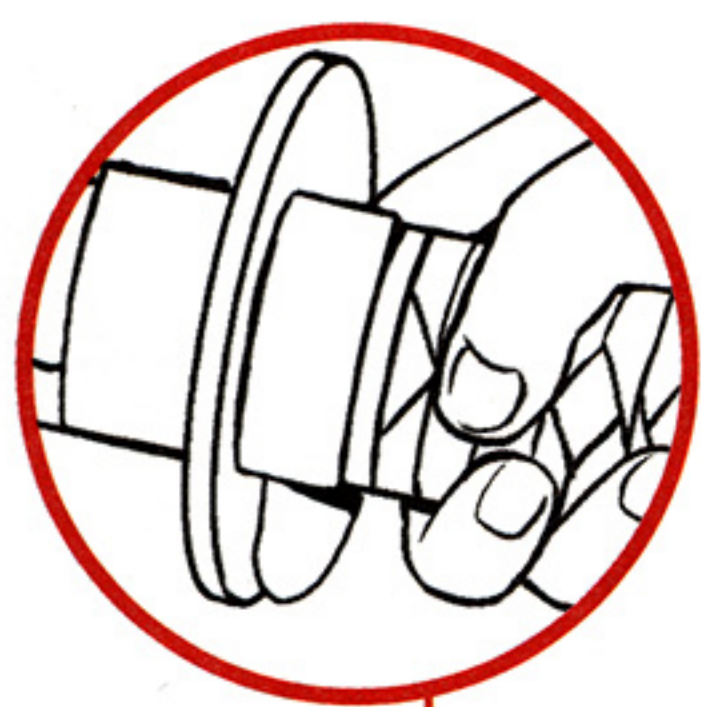
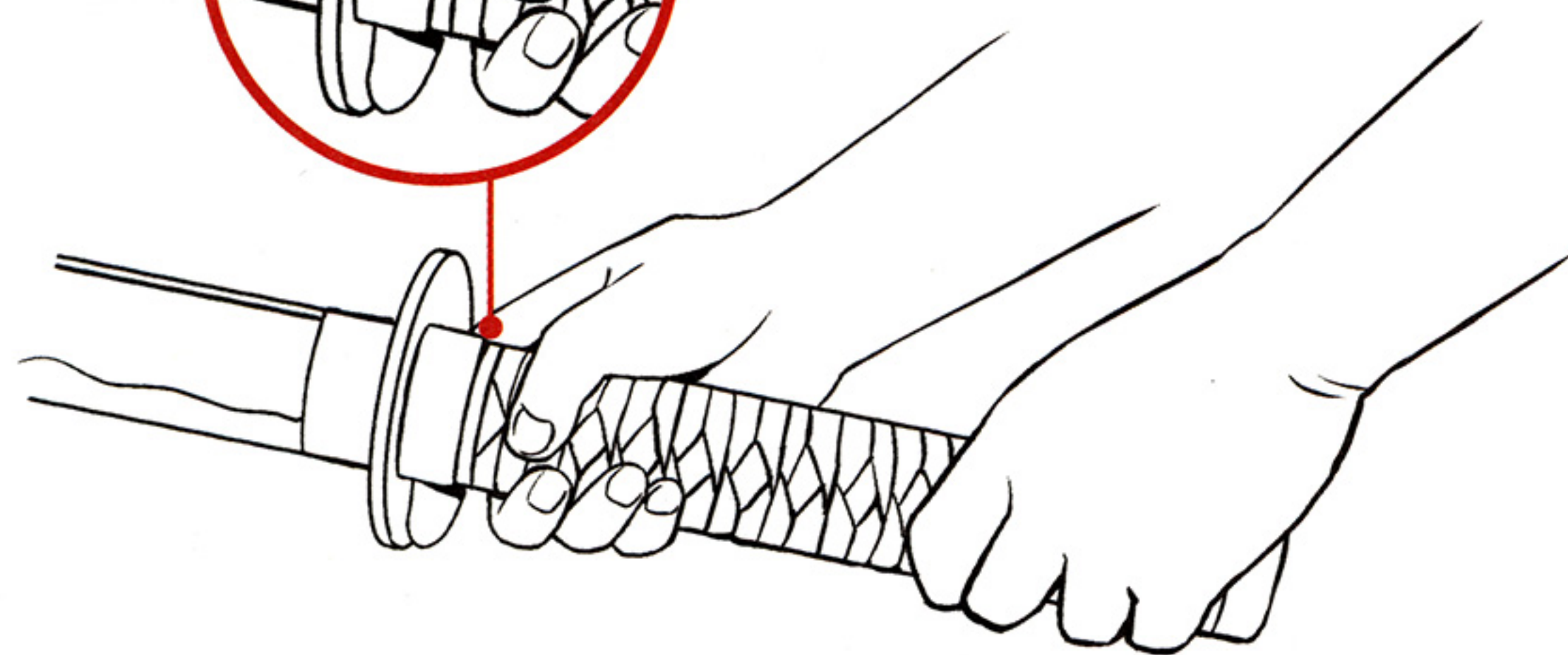
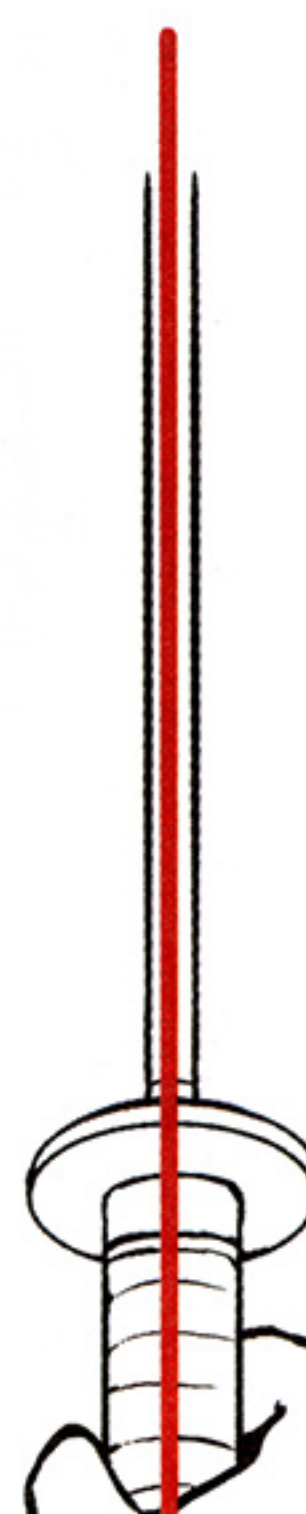
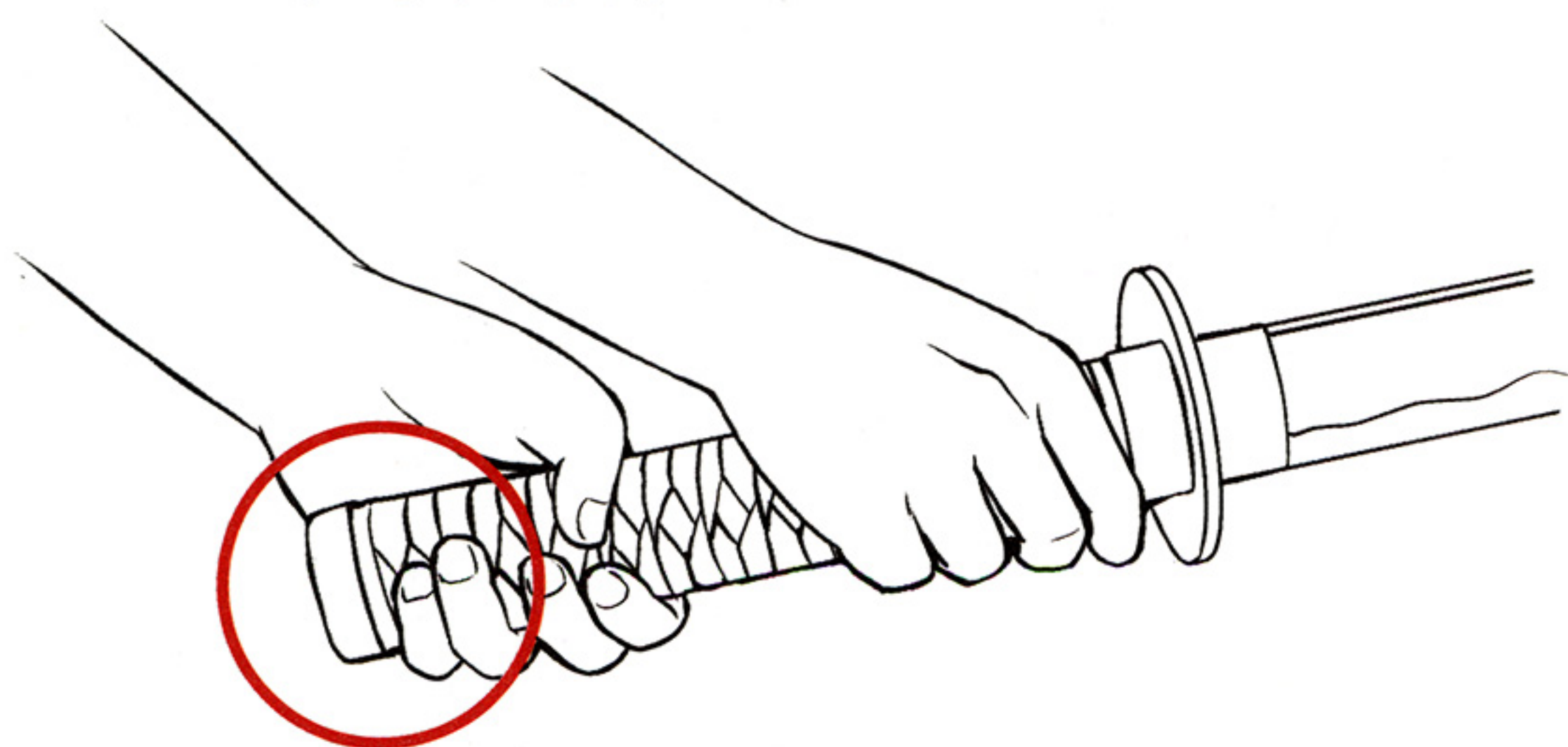
刀身が 30cm 〜 60cm 程度のもの
江戸時代の武士は打刀と脇差の二本差しが多く見られる。

● 短刀(たんとう)

刀身が 30cm 〜 60cm 程度のもの。
護身用として使用されたほか、子供や女性などが護り刀として携帯することもあった。

※長さは目安で、厳密なものではありませんので注意ください。

刀の差し方

● 打刀

刃を上に向けて、帯に差し込む。

● 太刀

刃を下に向け、太刀緒を使い、
佩(は)いて（吊して）いた。

刀の持ち方

右手は縁に人差し指がかかる。
親指は柄巻を持ち、
縁にはかからないように握る。

左手は小指が頭にかから
ないようにする。

上から見た時に、親指と
人差し指の股が柄の中心
にくるように握る。

刀の構え方

● 正眼（中段）の構え

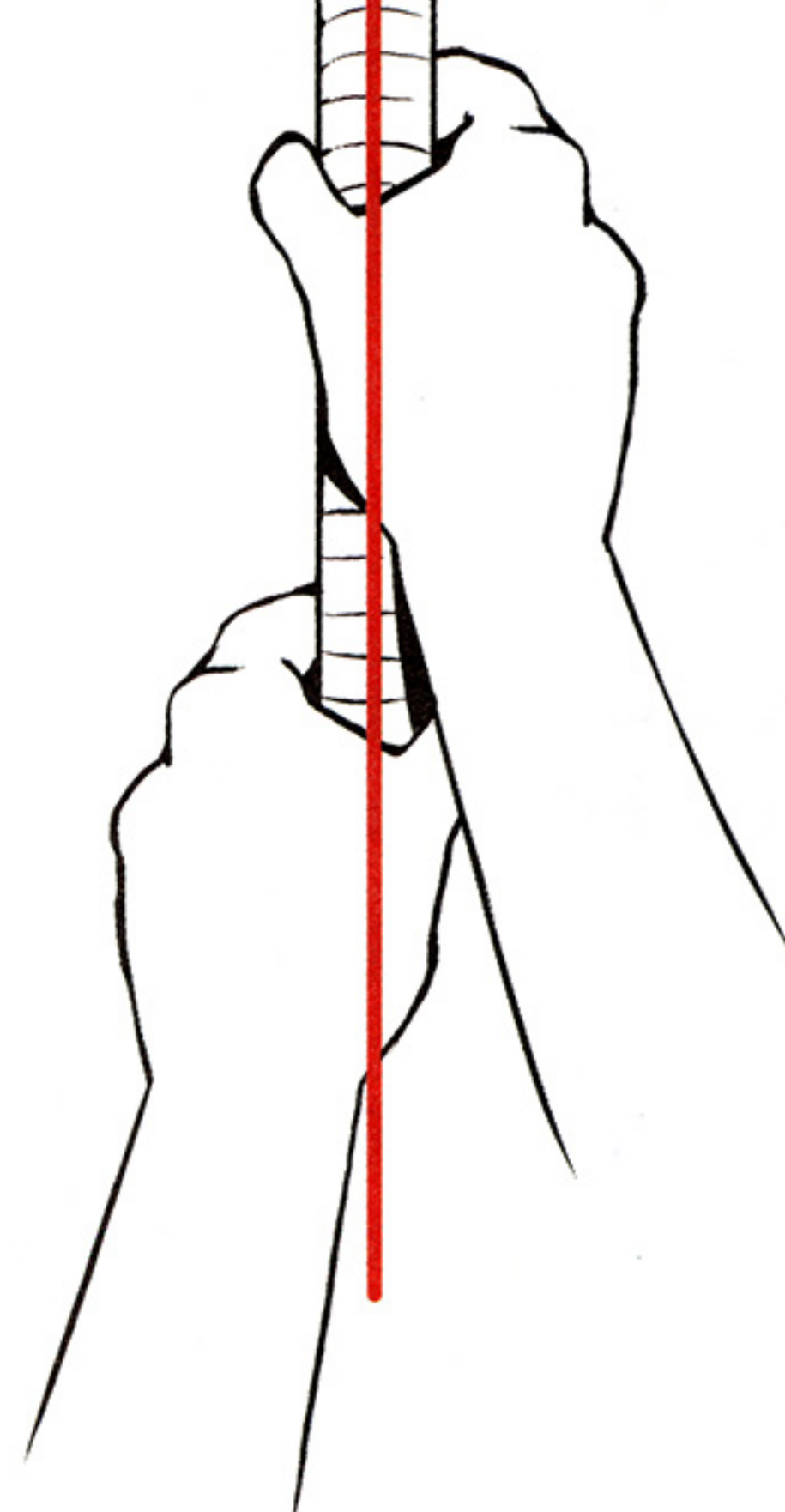
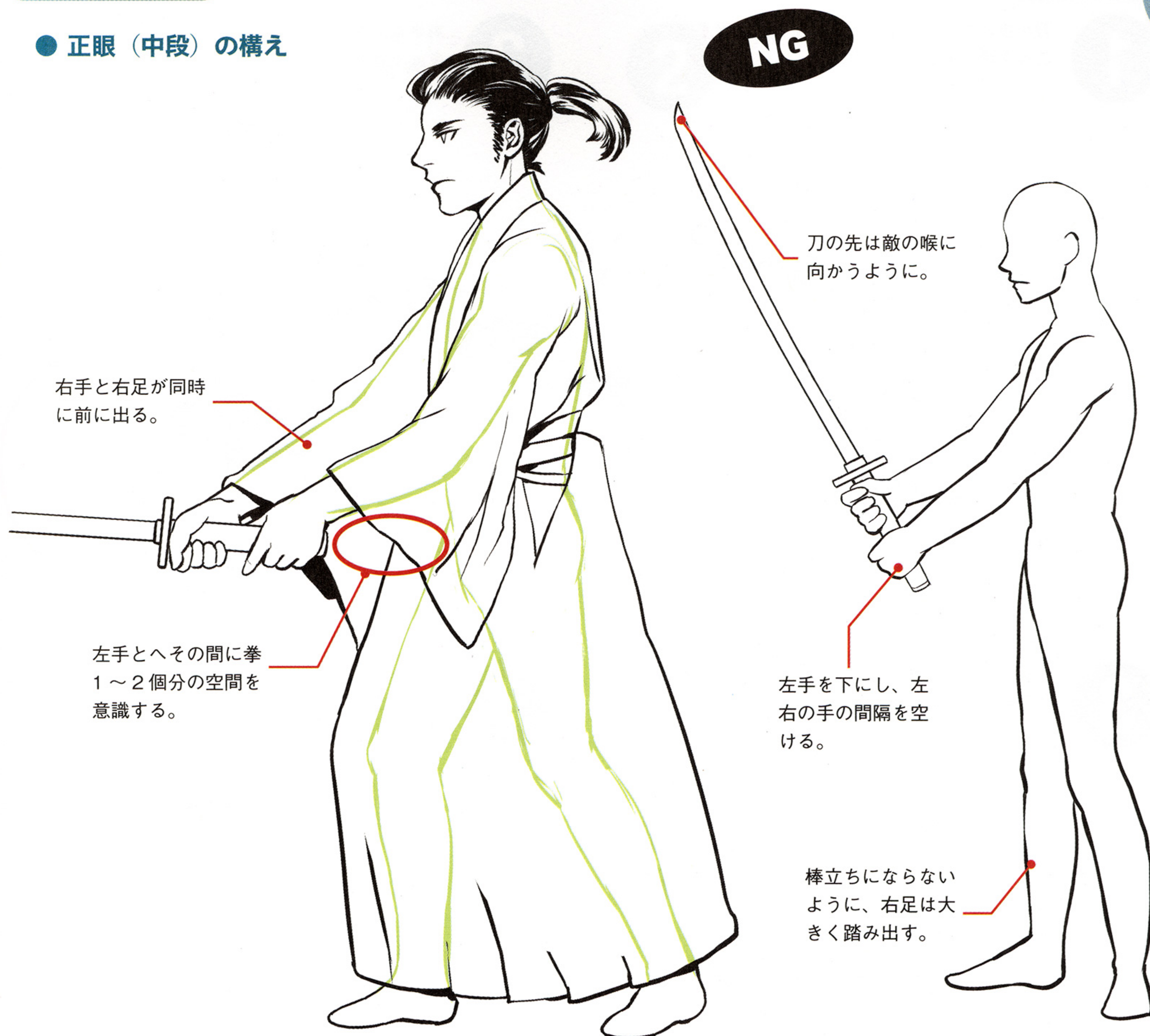
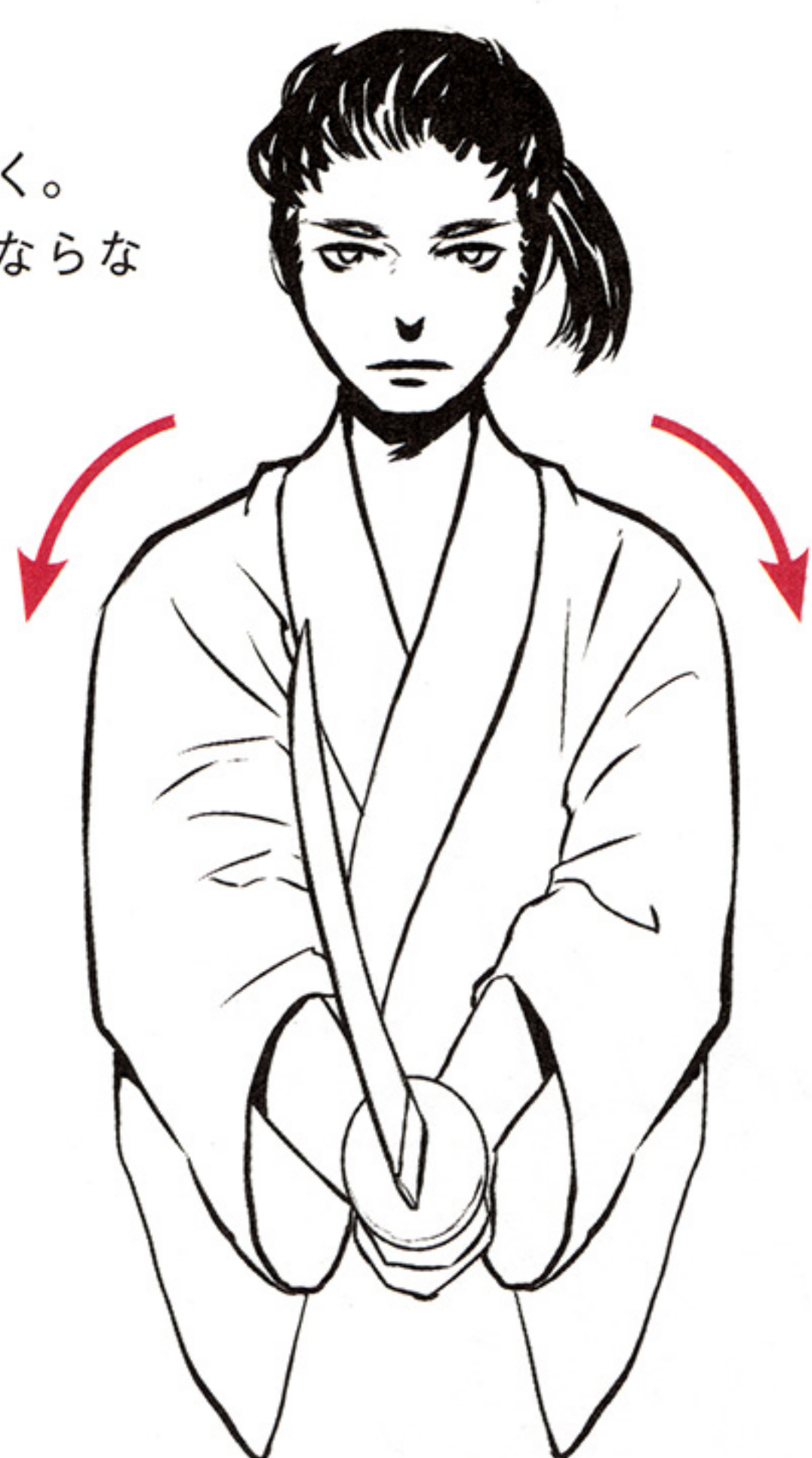
右手と右足が同時
に前に出る。

左手とへその間に拳
1～2個分の空間を
意識する。

NG

刀の先は敵の喉に
向かうように。

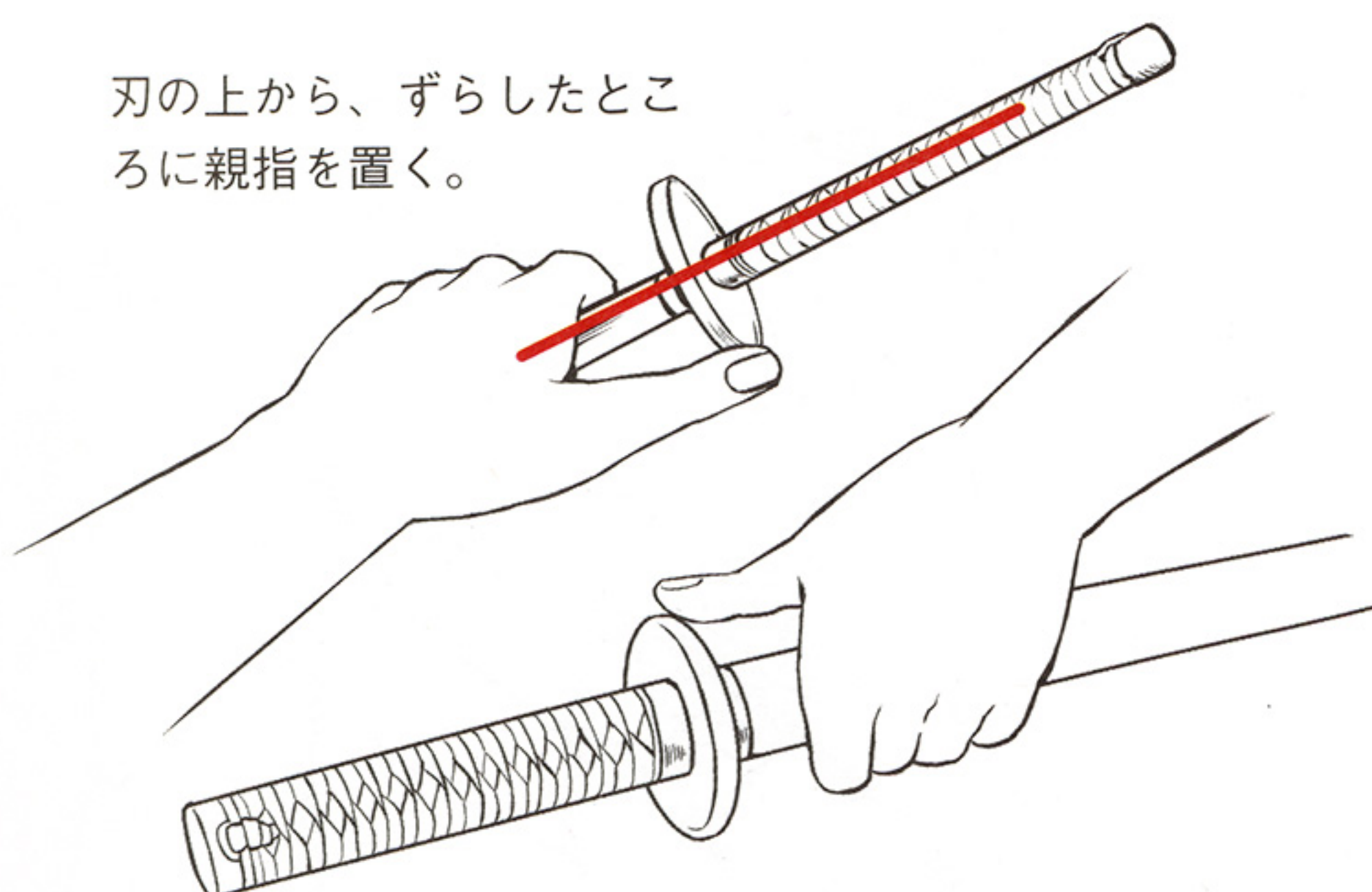
左手を下にし、左
右の手の間隔を空
ける。

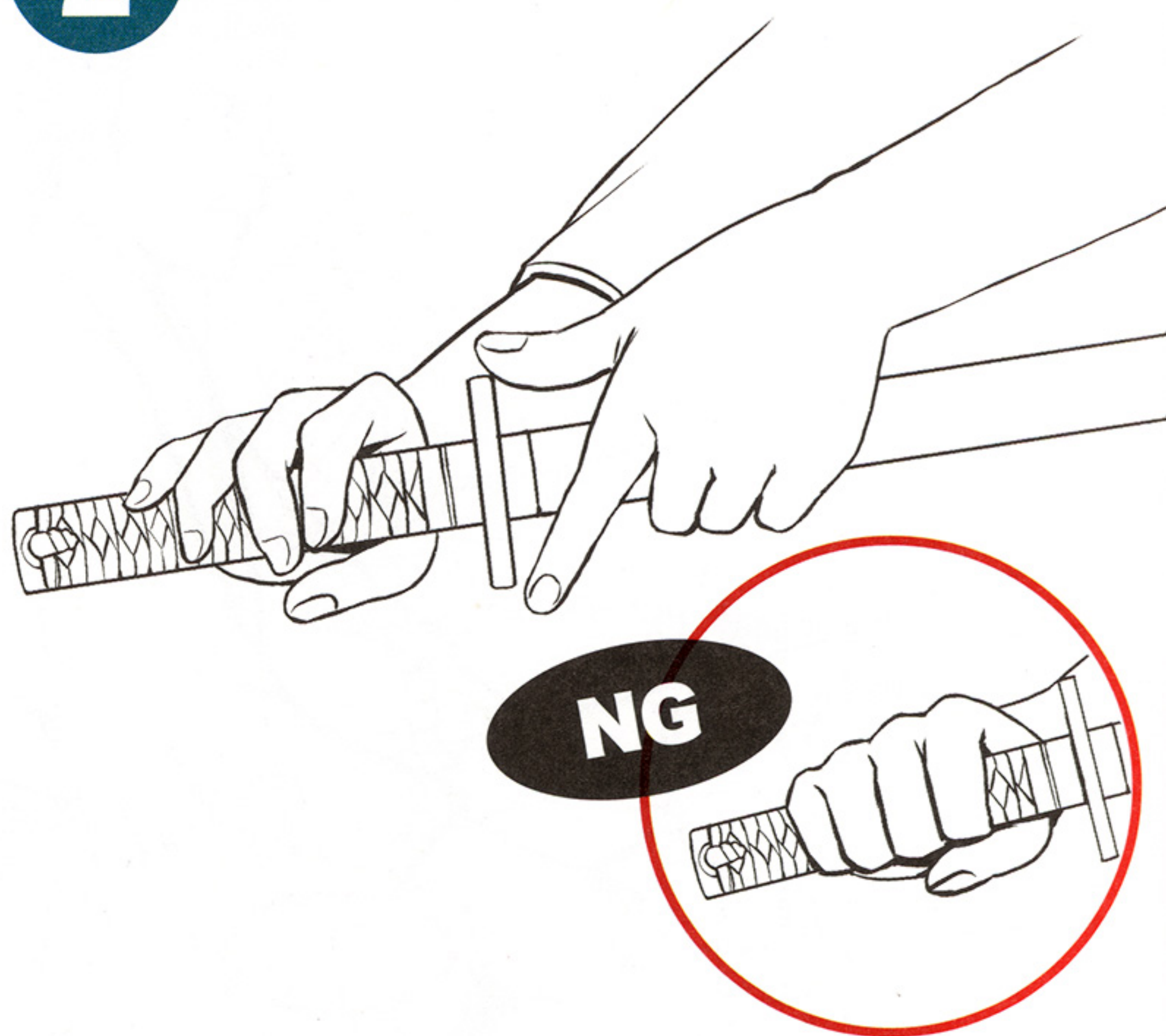
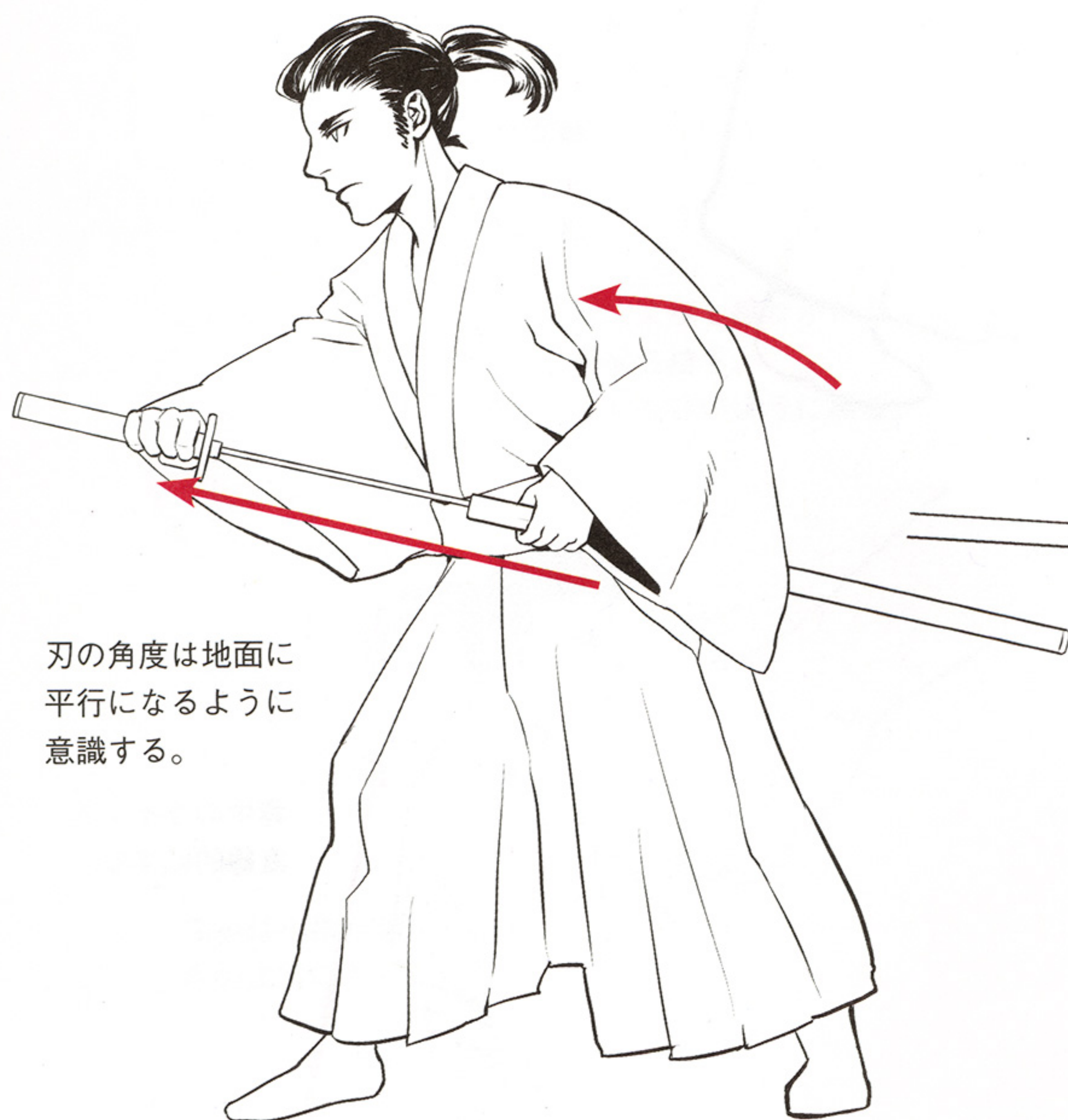
棒立ちにならない
ように、右足は大
きく踏み出す。

肩の力は抜く。
いかり肩にならな
いように。

背中のラインを
直線的にする。

※流派などにより異なりますので注意ください。

抜刀（ばっとう）

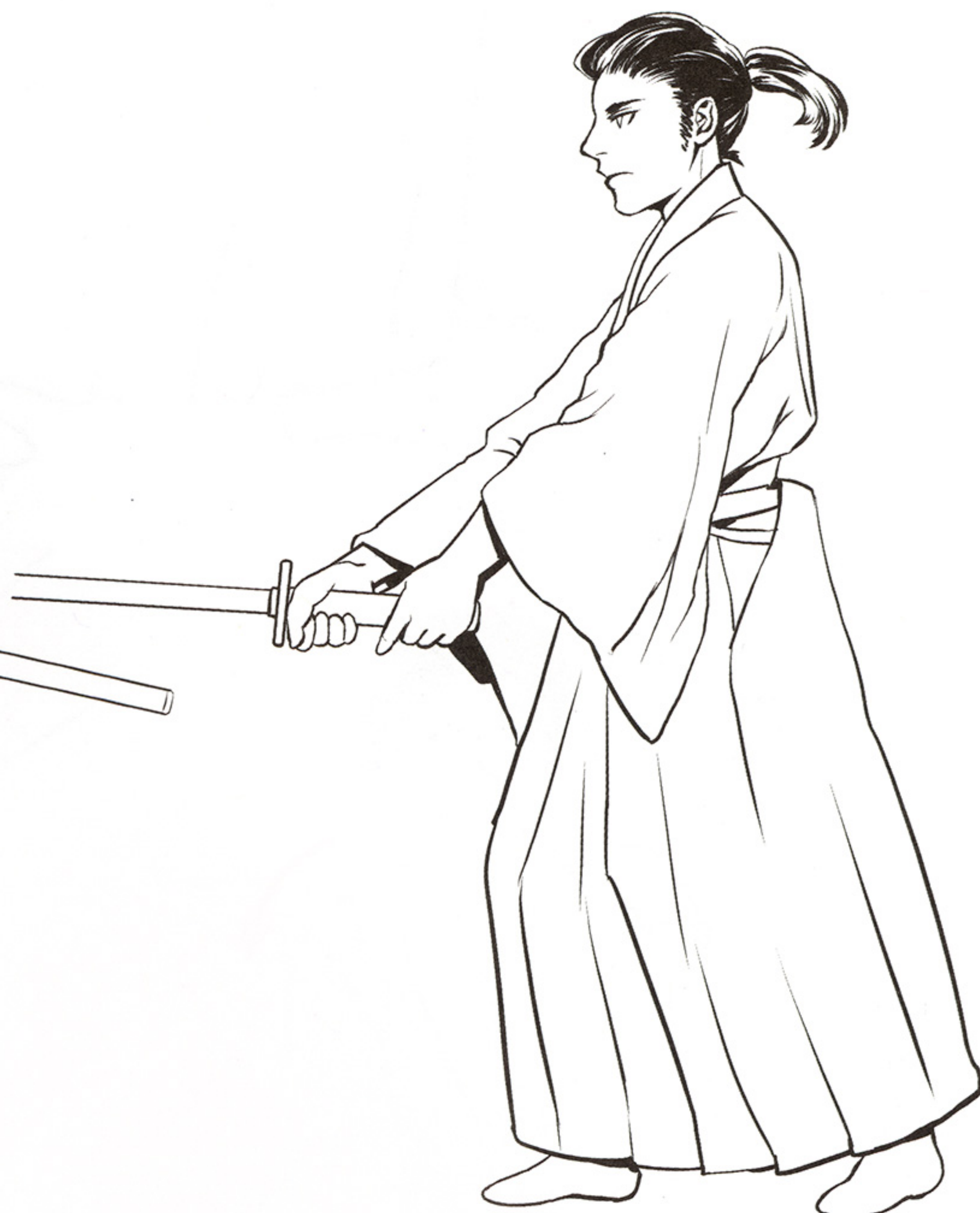
1 刀が抜きやすいように、刃を少し引き出す
これを鯉口（こいくち）を切るという。

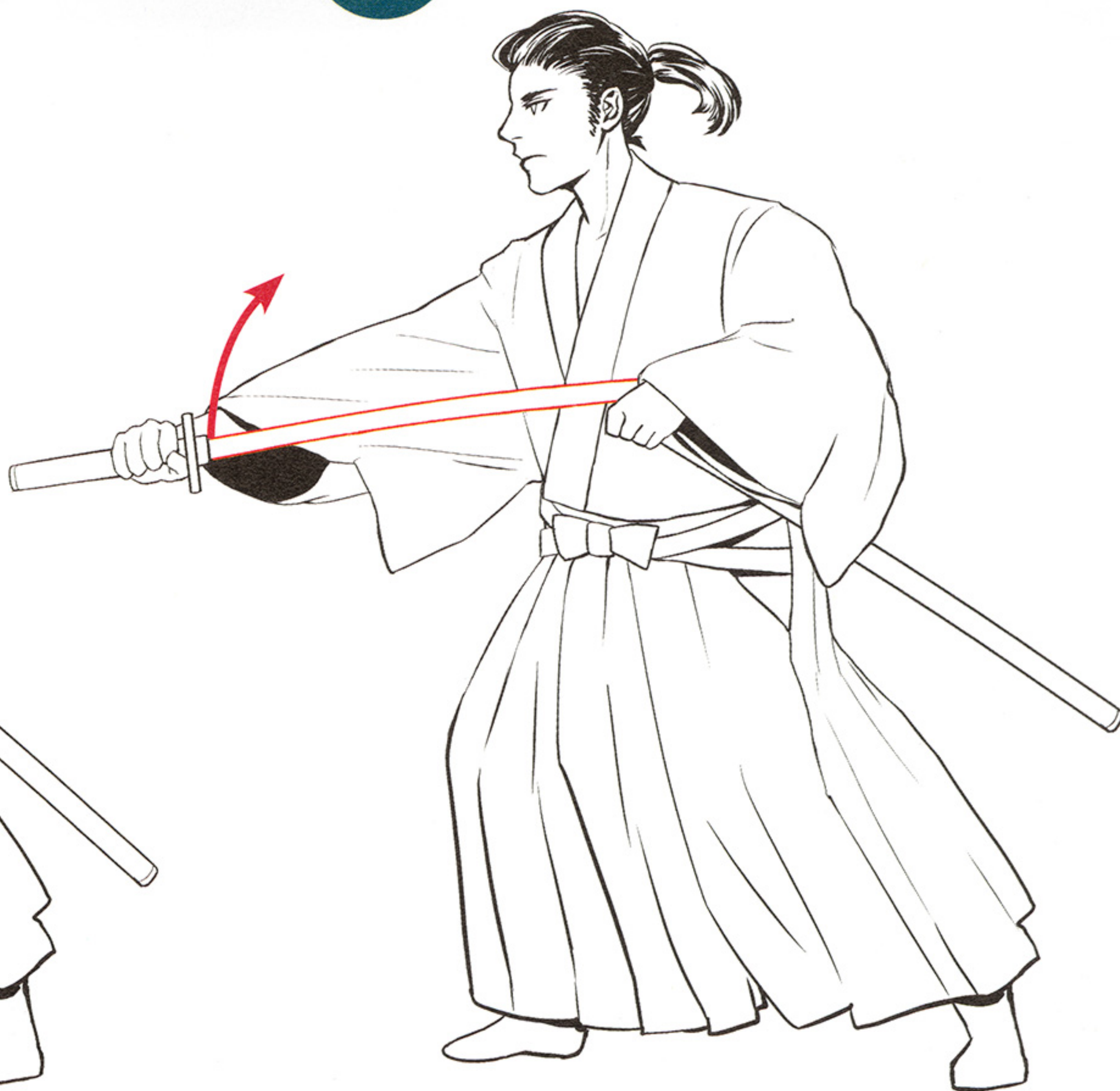
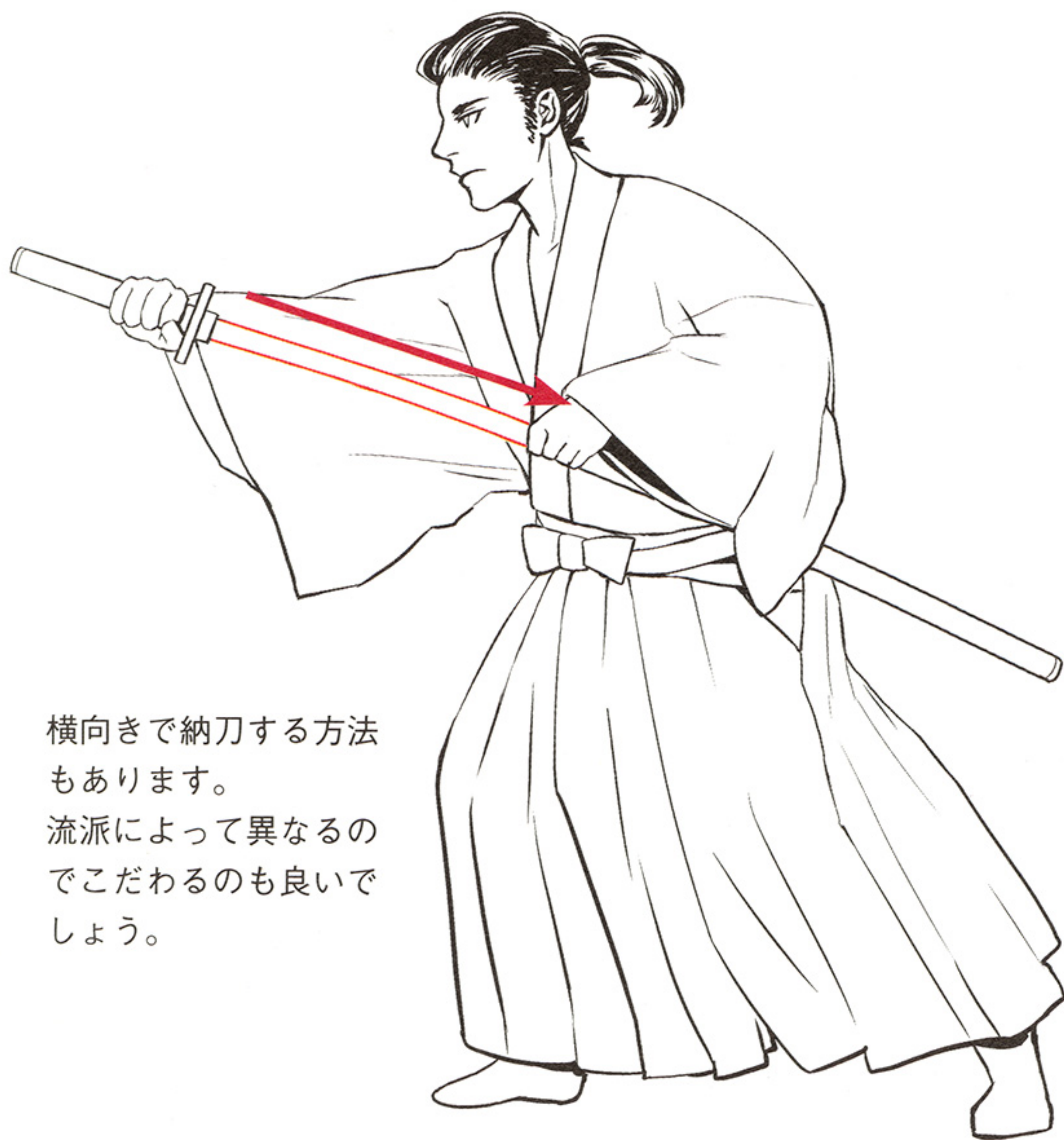
刃の上から、ずらしたところに親指を置く。

2 右手は上から添えるように
ギュッと握らない。

NG

3 刀を抜く時は、前傾姿勢で腰を引いた体勢を意識すると、スピード感のある抜刀になる。

刃の角度は地面に平行になるように意識する。

前傾姿勢ではなく、上に向けて刀を抜くとゆっくりした動作の抜刀になる。

4 刀の先は相手の喉元に向けると雰囲気がでる。

納刀(のうとう)

1 鞘(さや)を持ち上げ、刀の鍔(つば)を鯉口に近づける。
刀の峰を左手の親指と人差し指の間をすべらせる。

2 刀の先を鯉口に入れる。

3 刃を上向きにして、刀を納める。

4

横向きで納刀する方法もあります。
流派によって異なるのでこだわるのも良いでしょう。

07 槍

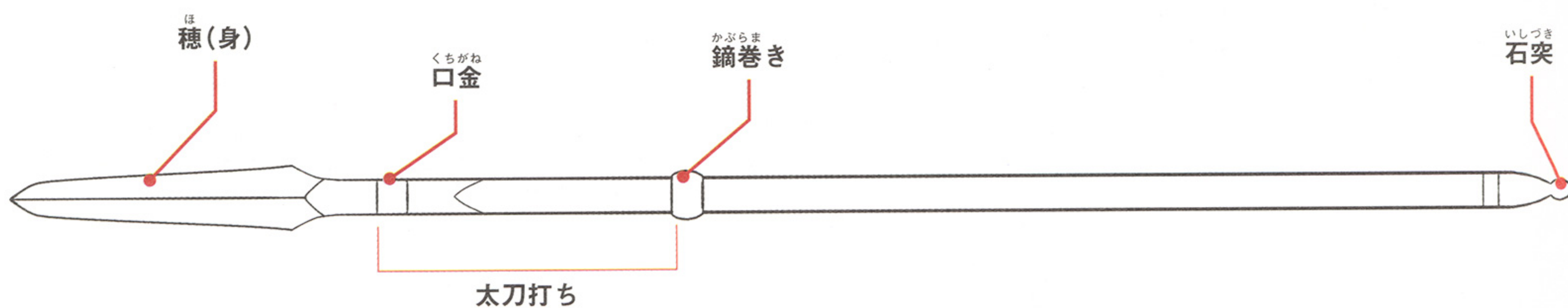
槍は長い柄の先に穂（身）と呼ばれる刃物がついた長柄武器です。
鎌倉時代中期～後期にかけて登場したといわれています。柄と穂の長さに決まりはなく、数十センチのものや、長い物では6メートル近くあるものまでさまざまです。

装備例

部位の名称

穂(身)
口金
鏑巻き
石突
太刀打ち

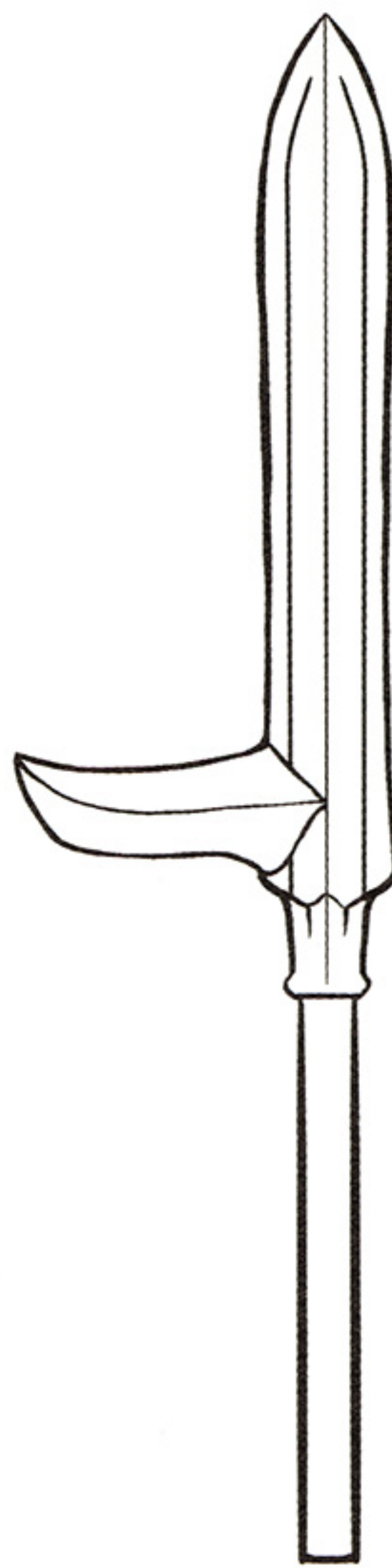
穂の形状

直槍（すやり）

一般的な槍の形。
文字通り真っ直ぐな形をしている。

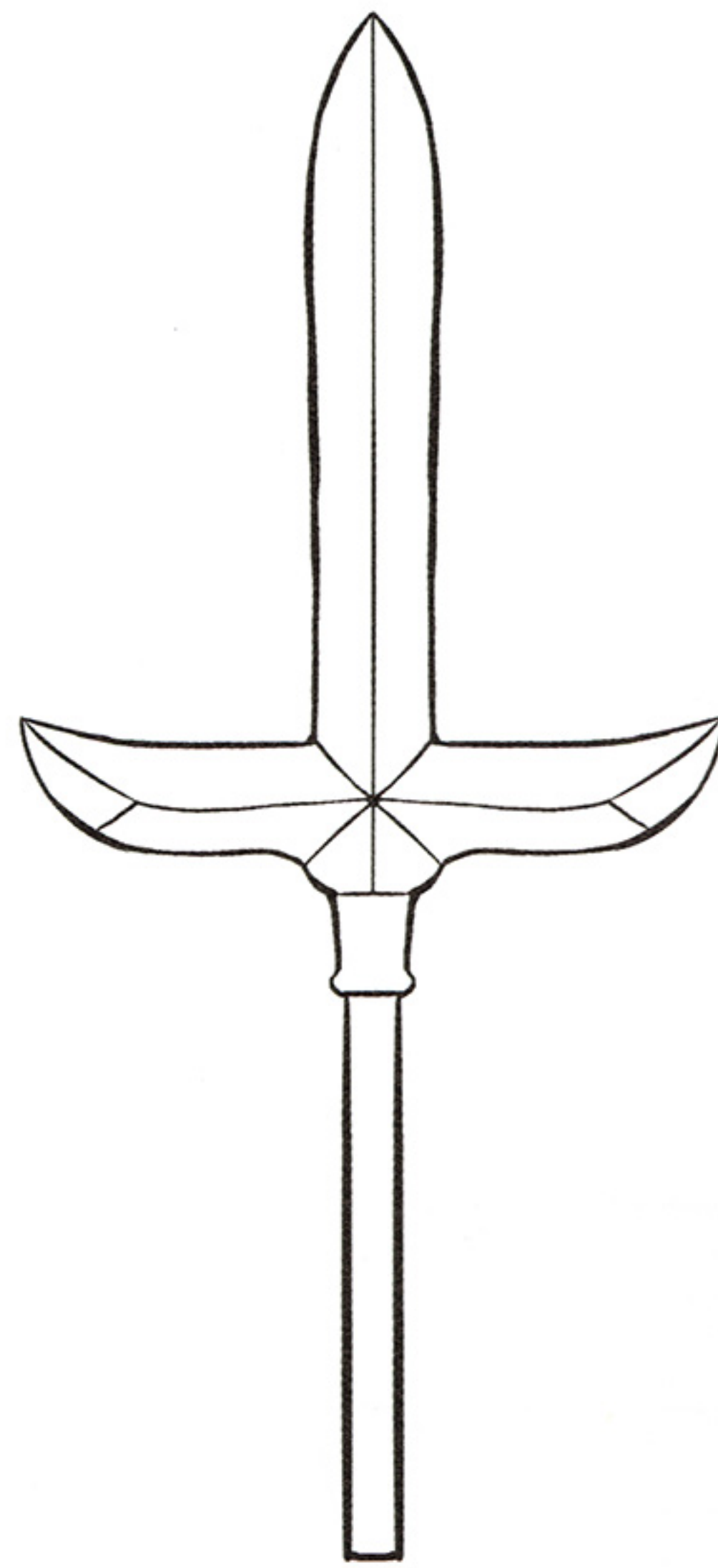
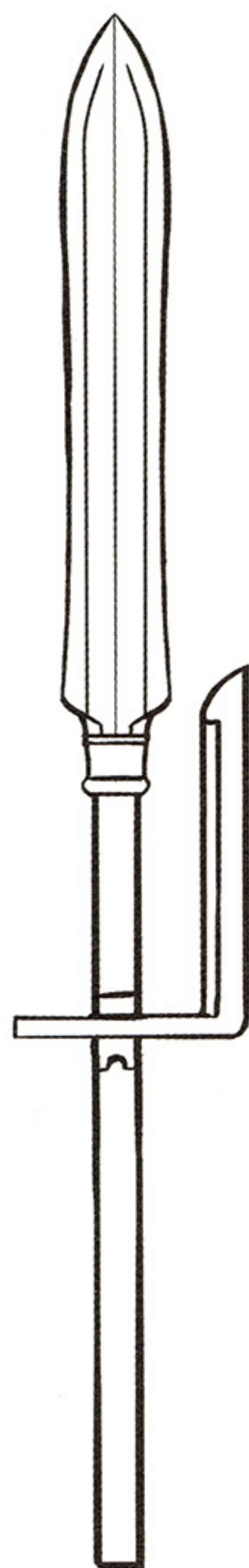
菊池槍（きくちやり）

長い柄の先に短刀を付けたもの。

鎌槍（かまやり）

片方に枝がある槍。

十文字槍（じゅうもんじやり）

左右に枝があり十文字の形をしている。
「引き」「払い」の機能を強化した形状。

鍵槍（かぎやり）

十手のような金具がついた形状。
ここで敵刃を受け止めたりする。

槍の基本的な使い方
- 突く
- 引く
- 斬る
- 叩く
- 払う

この5つを使ってさまざまな戦い方をした。

08 刀剣の長さ

日本刀と槍の長さを人物と比較してみました。長さを意識して描くことで、よりリアリティさが増します。ここで紹介するのはほんの一例です。

日本刀の長さ

150cm

100cm

50cm

155cm
江戸時代の
成人男性の平均身長

約 30cm
短刀

約 30cm ～ 60cm
脇差

約 70cm 以下
打刀

約 60cm ～ 90cm
90cm 以上は大太刀
太刀

槍の長さ

08

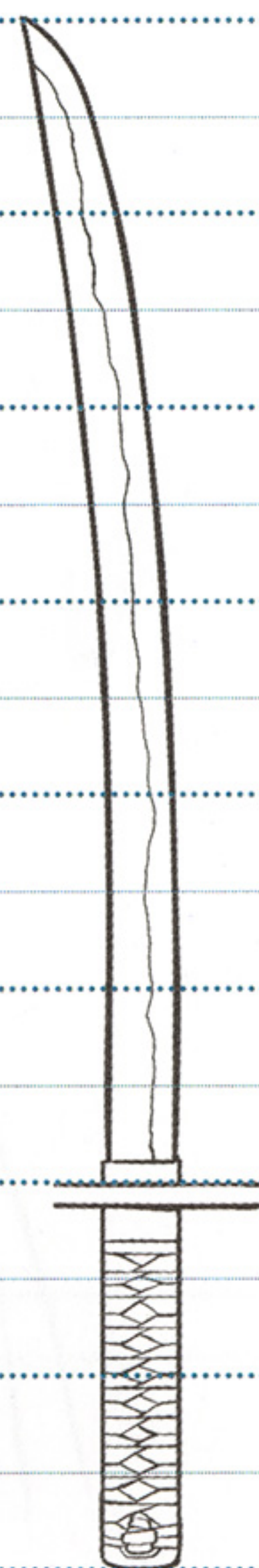
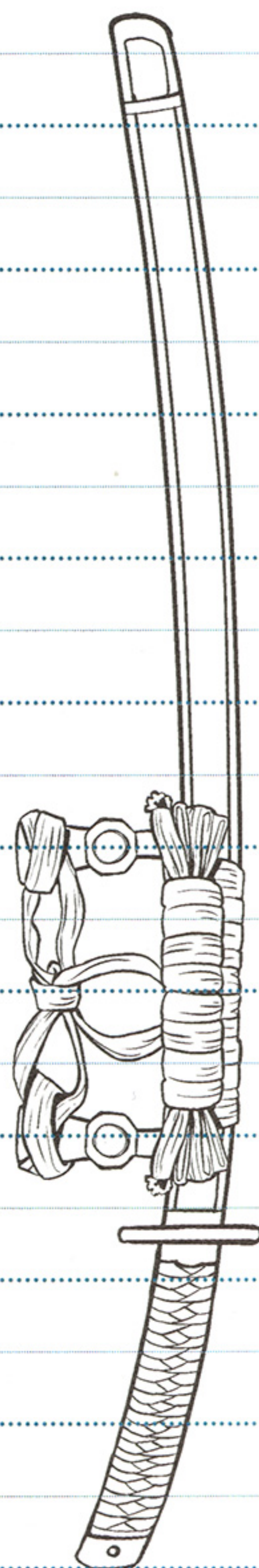
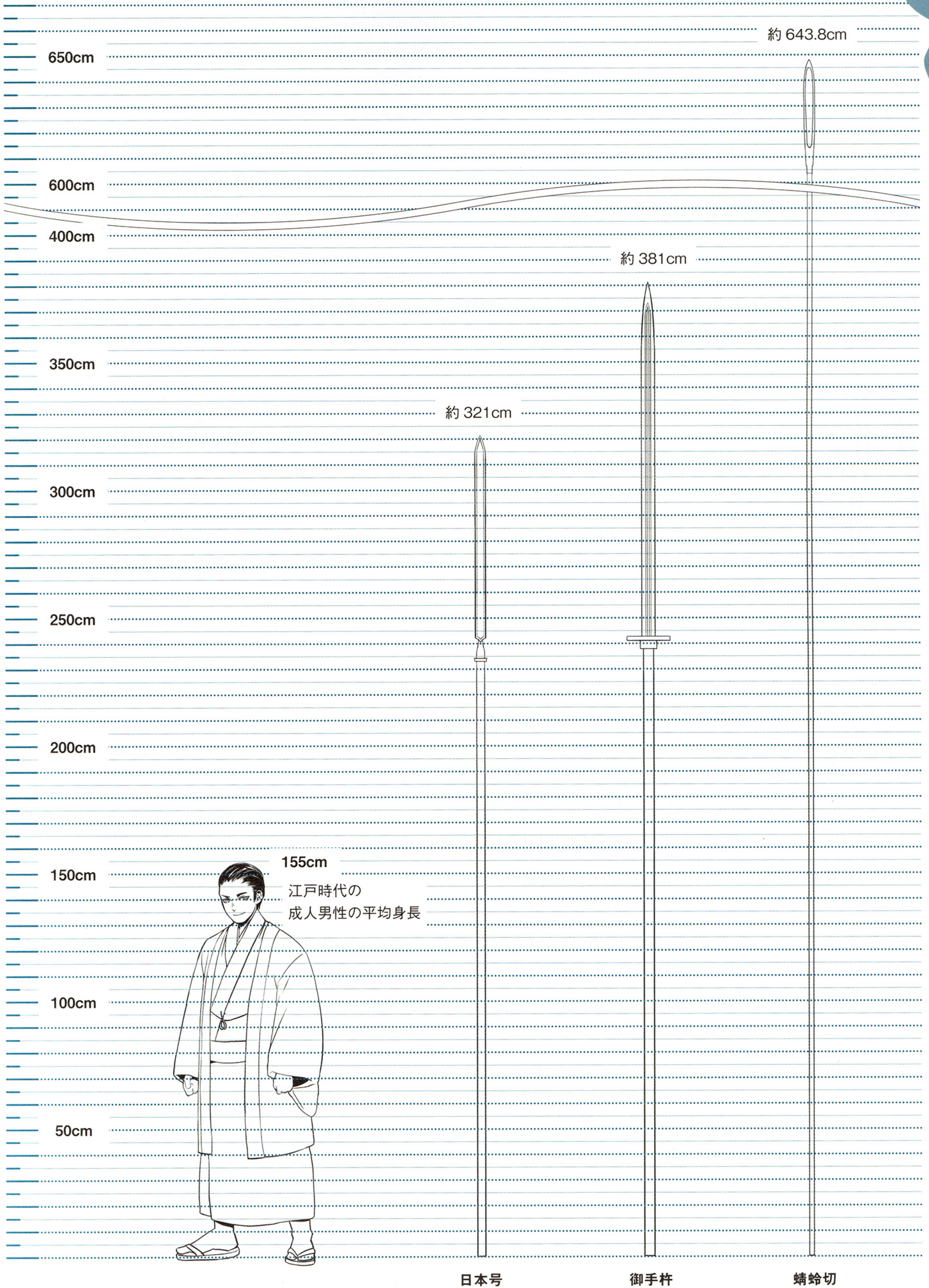
650cm
600cm
400cm
350cm
300cm
250cm
200cm
150cm
100cm
50cm

約643.8cm
約381cm
約321cm

155cm
江戸時代の
成人男性の平均身長

日本号
御手杵
蜻蛉切

09

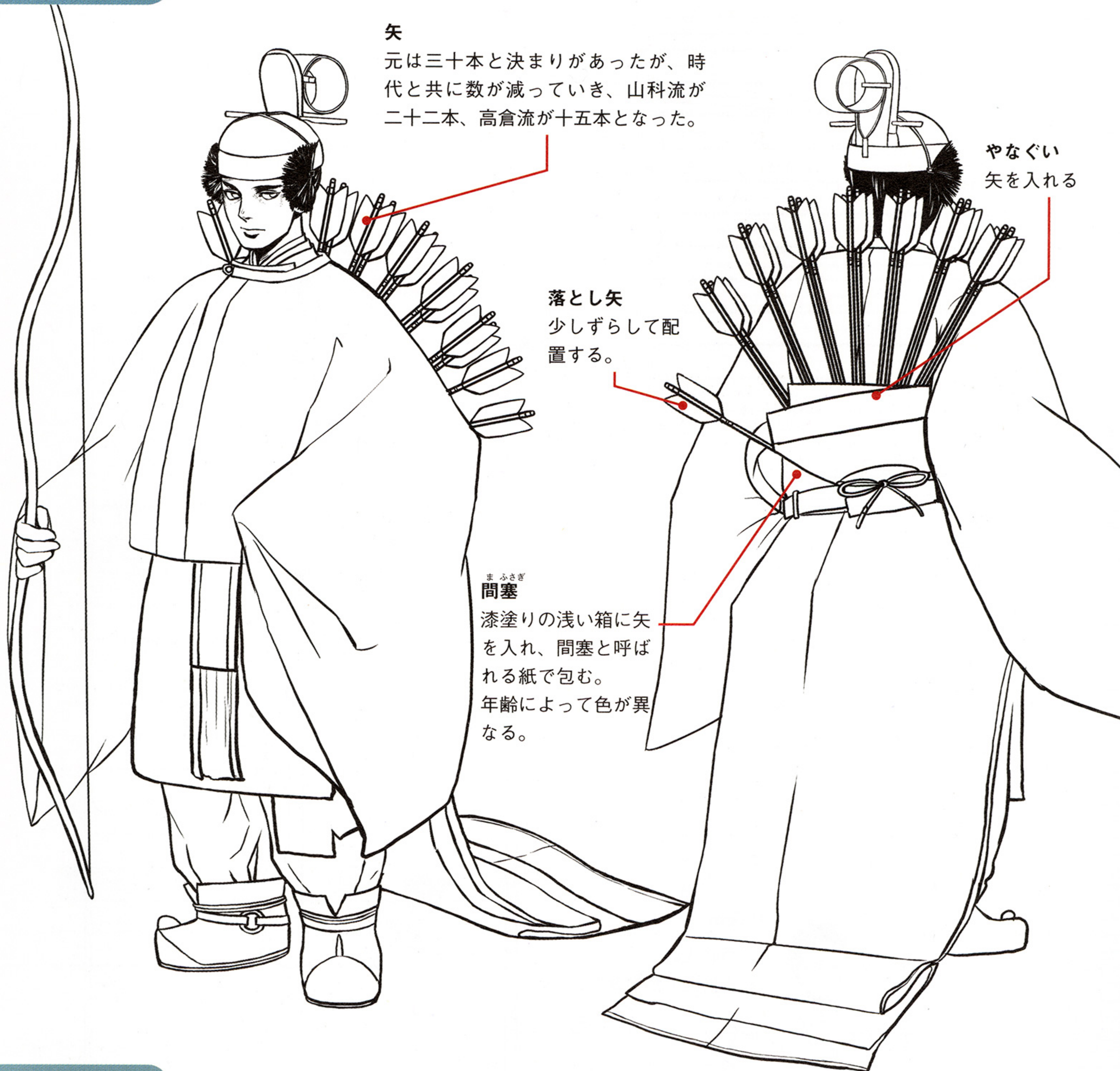
弓矢

弓術は長弓を使った武術の一種です。平安時代、武官束帯に用いられた「儀仗の弓」は実用ではなく、見栄えが重要視されていました。
装束や武具などを美しく見せるため、着付けの作法があります。現代には「山科流」「高倉流」という二つの流派が伝えられています。

着用例

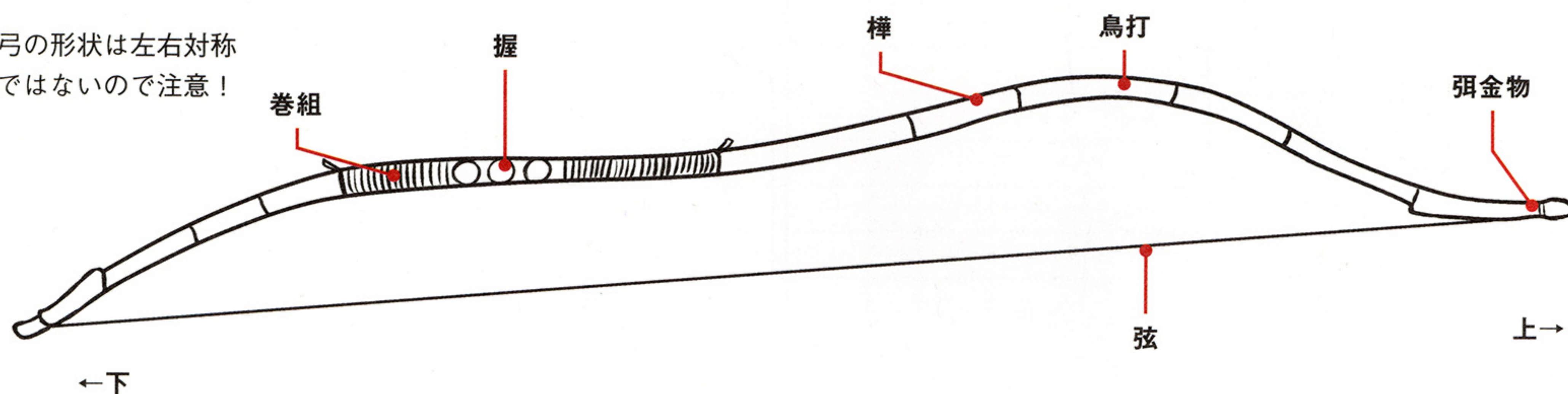
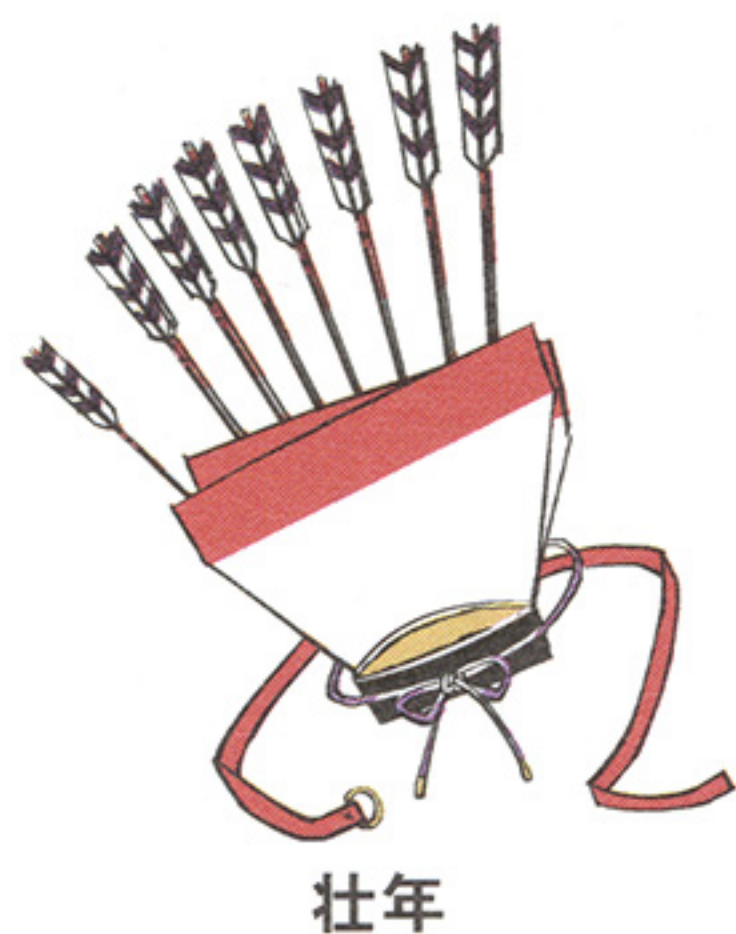
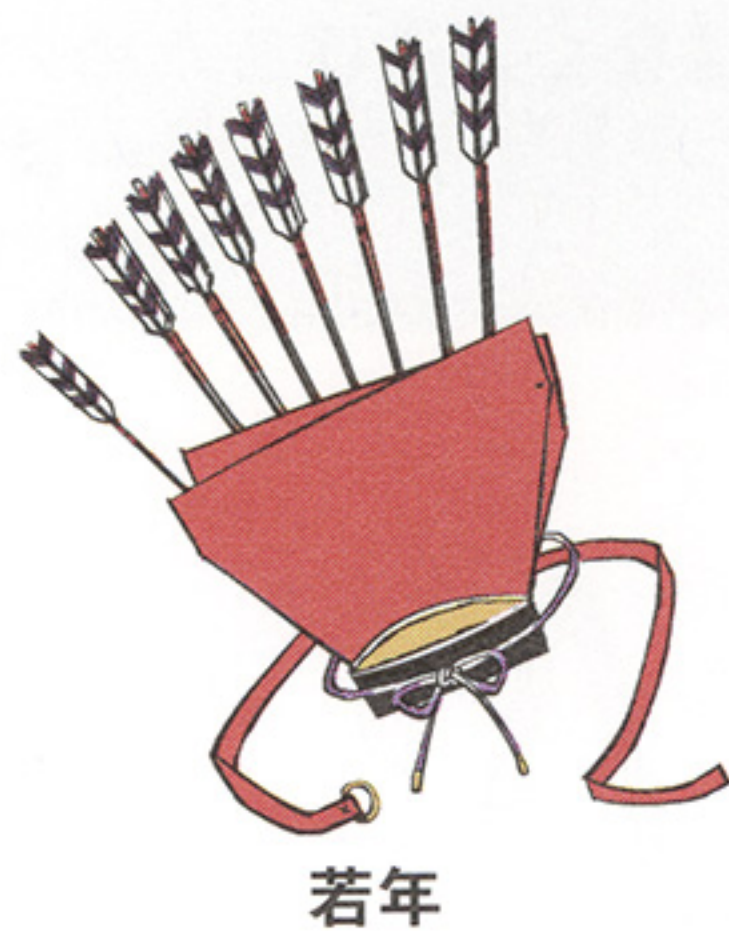
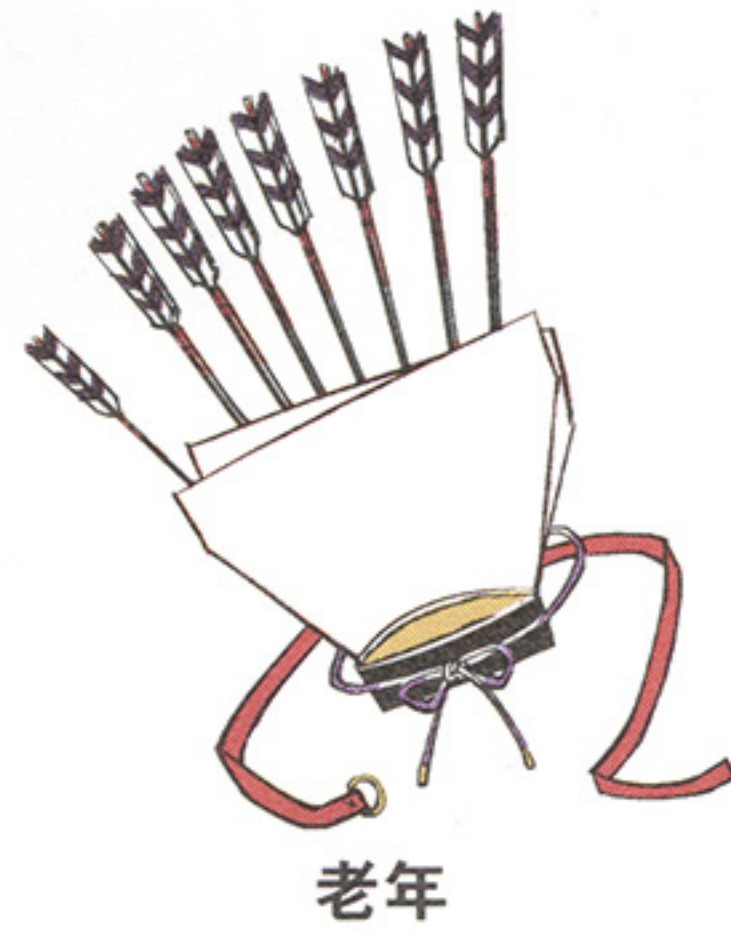
矢
元は三十本と決まりがあったが、時代と共に数が減っていき、山科流が二十二本、高倉流が十五本となった。

やなぐい
矢を入れる

落とし矢
少しずらして配置する。

間塞
漆塗りの浅い箱に矢を入れ、間塞と呼ばれる紙で包む。
年齢によって色が異なる。

部位の名称

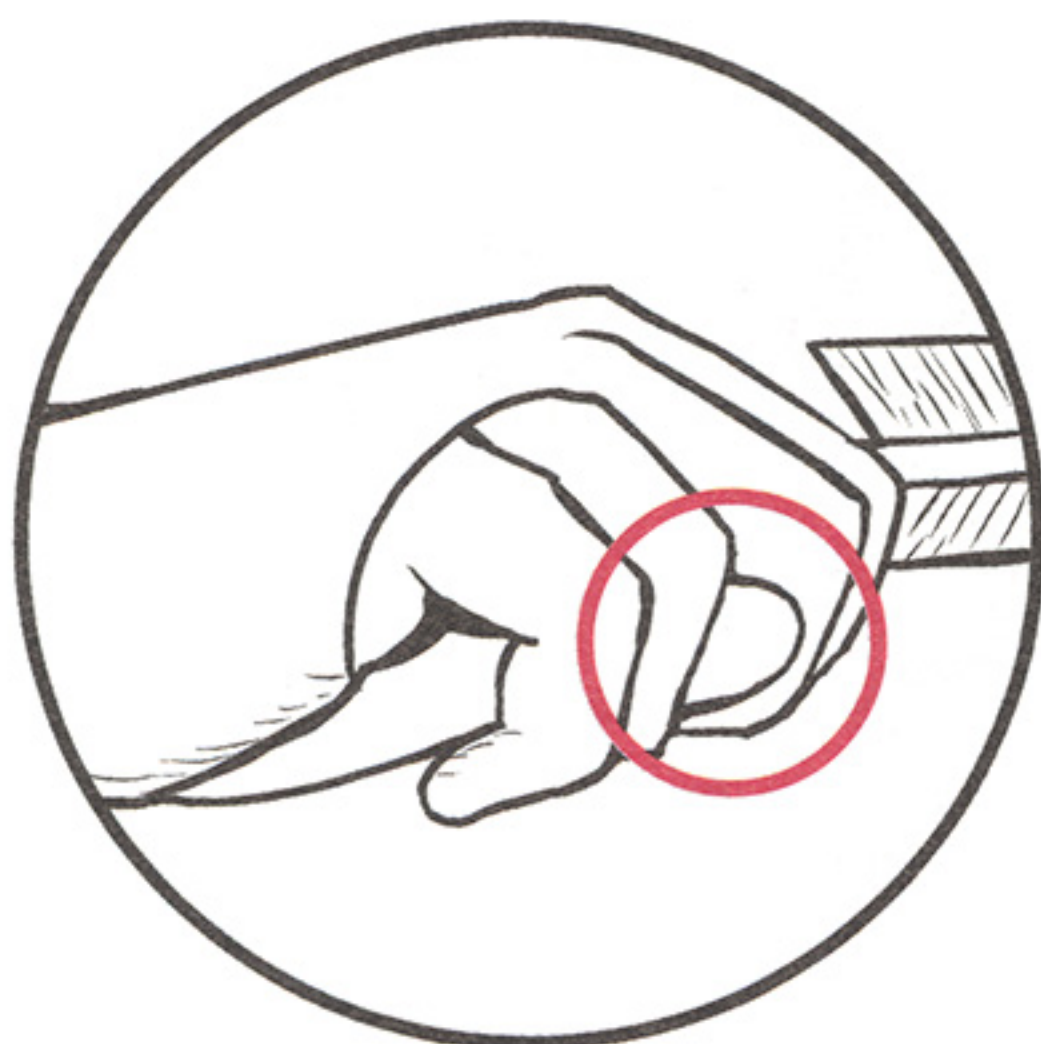
弓の形状は左右対称ではないので注意！

握
巻組
樺
鳥打
弭金物
弦
上→
←下

間塞(まふさぎ)の色の違い

壮年

若年

老年

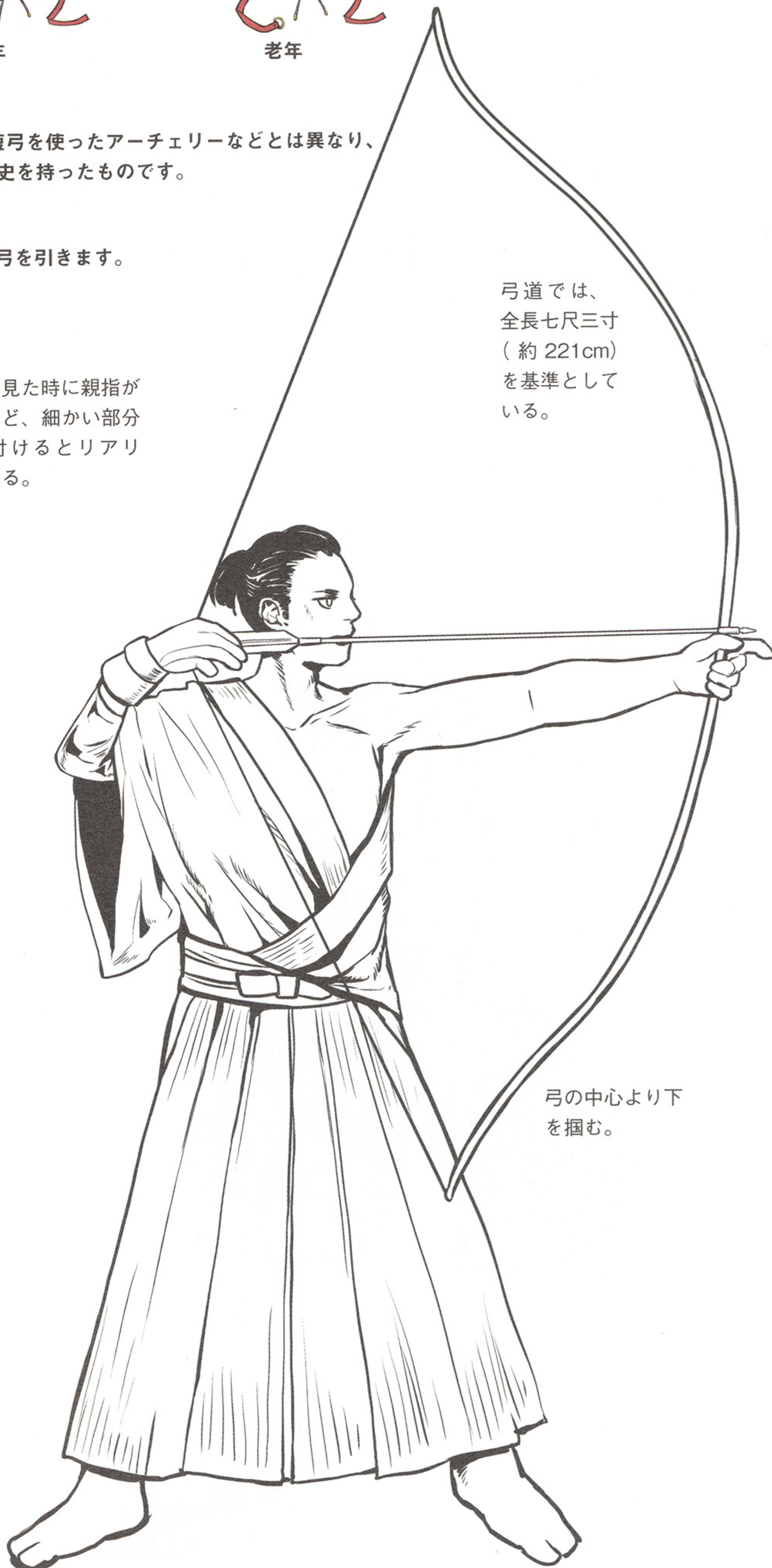
平やなぐいには間塞という
紙が巻かれており、
壮年は紅白の紙。
若年は紅梅一色。
老年は白一色。
と色が決まっている。

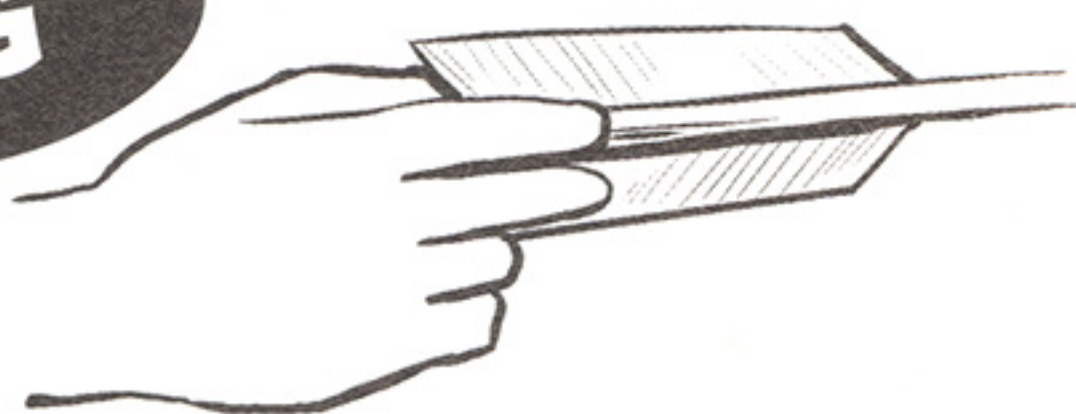
弓道（弓術）

弓術は、ヨーロッパなどの短弓を使ったアーチェリーなどとは異なり、日本独自の技法・文化・歴史を持ったものです。

弓道では右手にゆがけを装着し、蒙古式という形で弓を引きます。

側面から見た時に親指が見えるなど、細かい部分に気を付けるとリアリティがでる。

弓道では、
全長七尺三寸
（約221cm）
を基準としている。

内側から見た図

弓の中心より下を掴む。

NG

アーチェリーなどの西洋式では
指を伸ばして持つことも

10 手裏剣

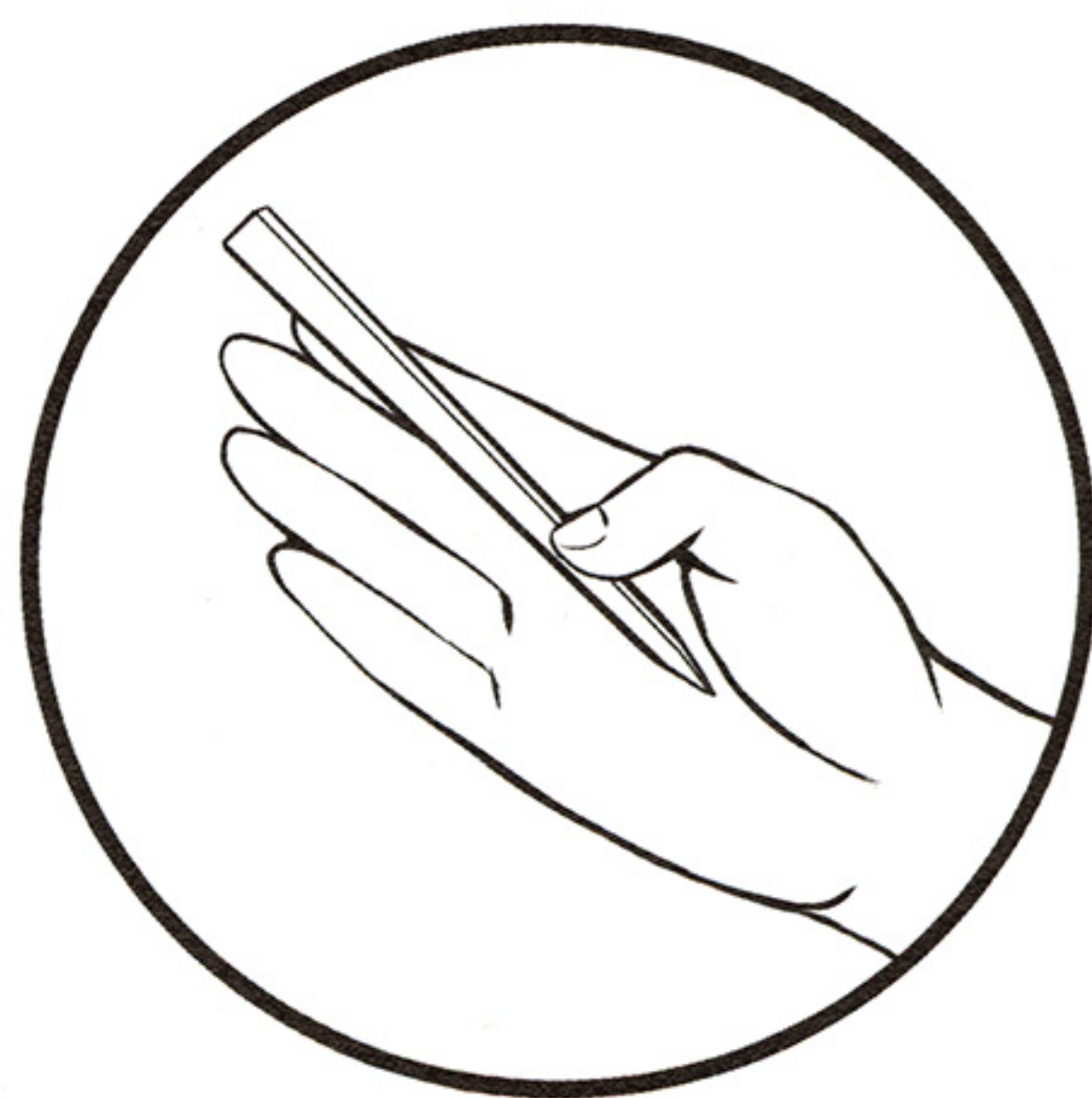
忍者の武器といえば「手裏剣」というほど、忍者とは切り離せないものです。
主な武器として有名ですが、殺傷するためではなく、逃げるための時間稼ぎや護身用として使用されていたといわれています。

使用例

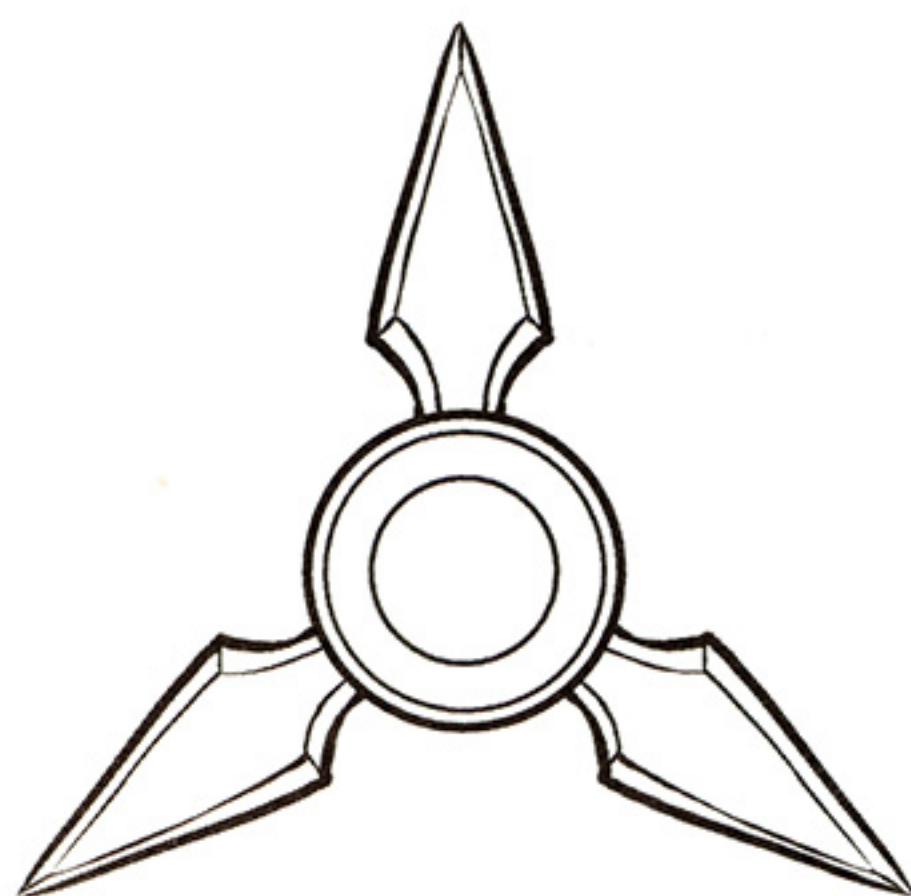
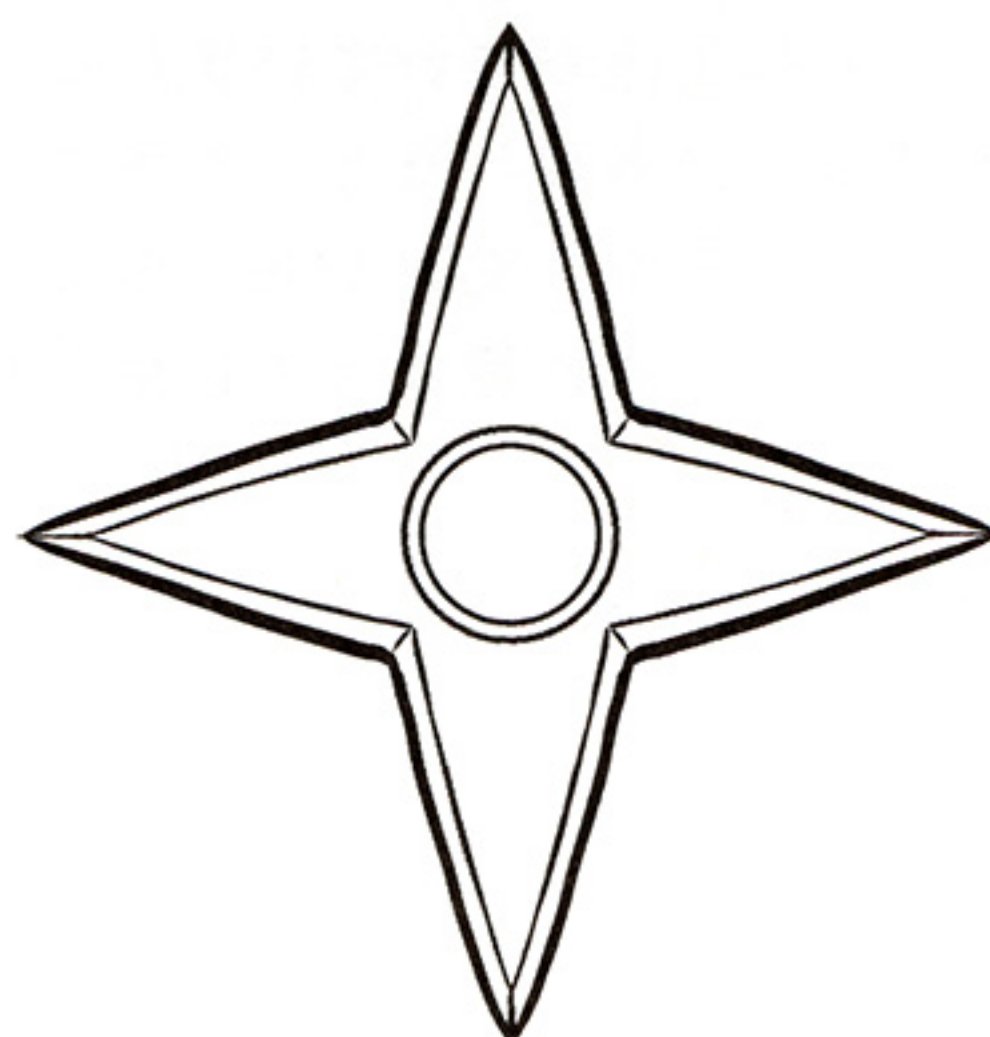
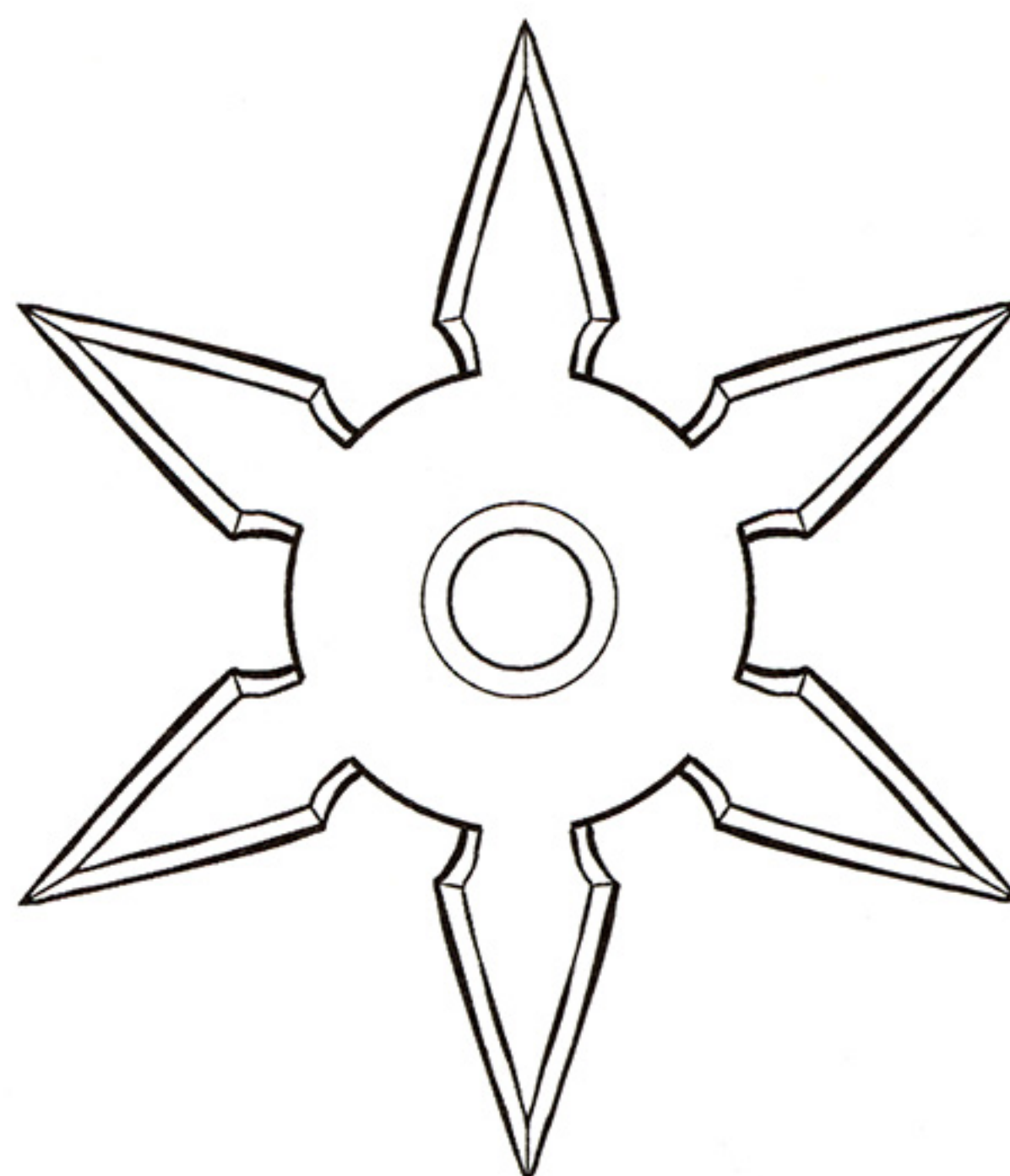
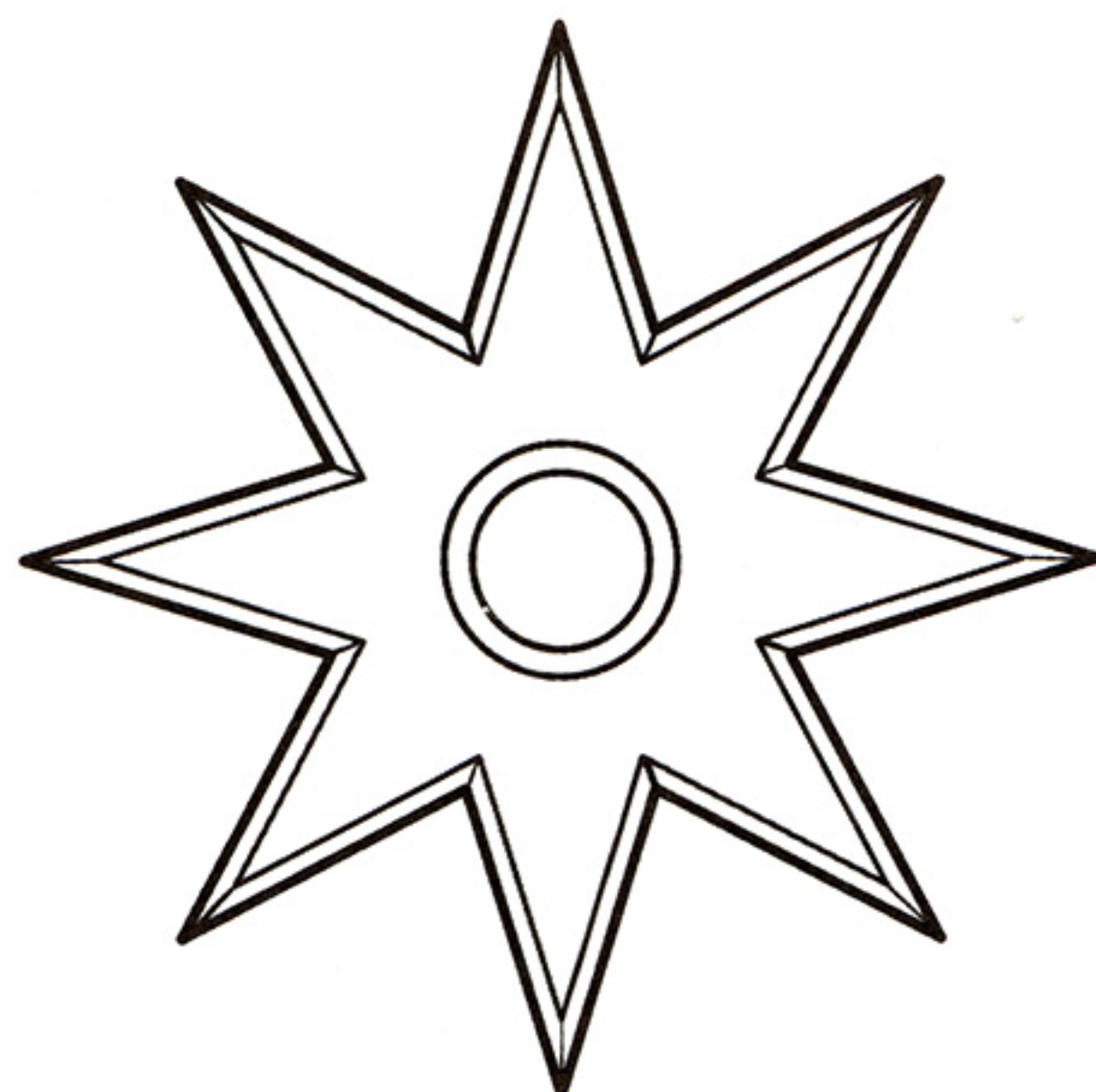
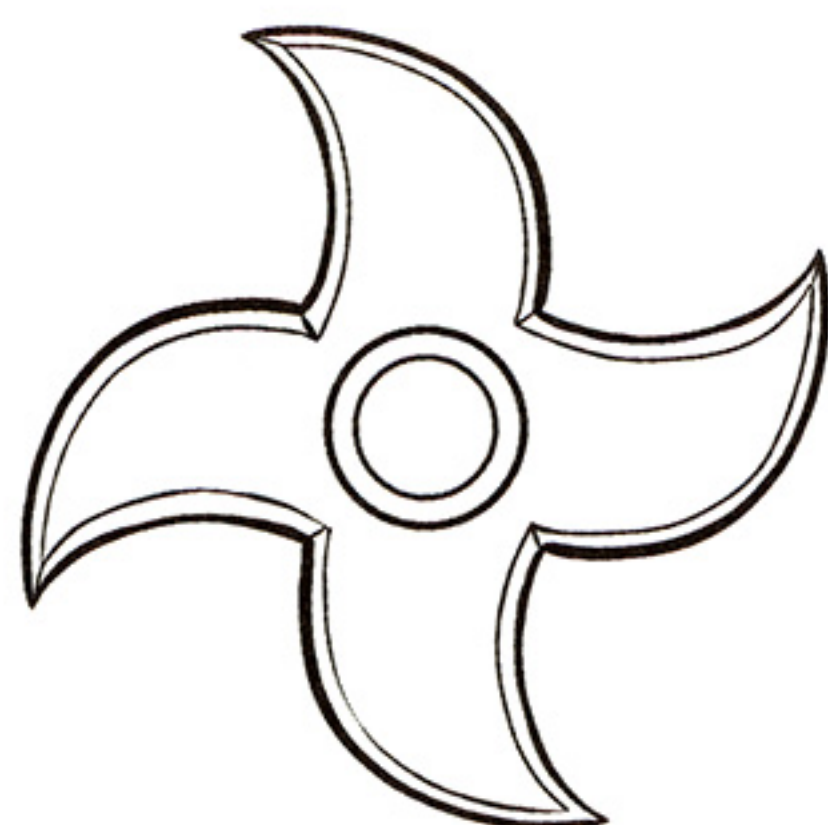
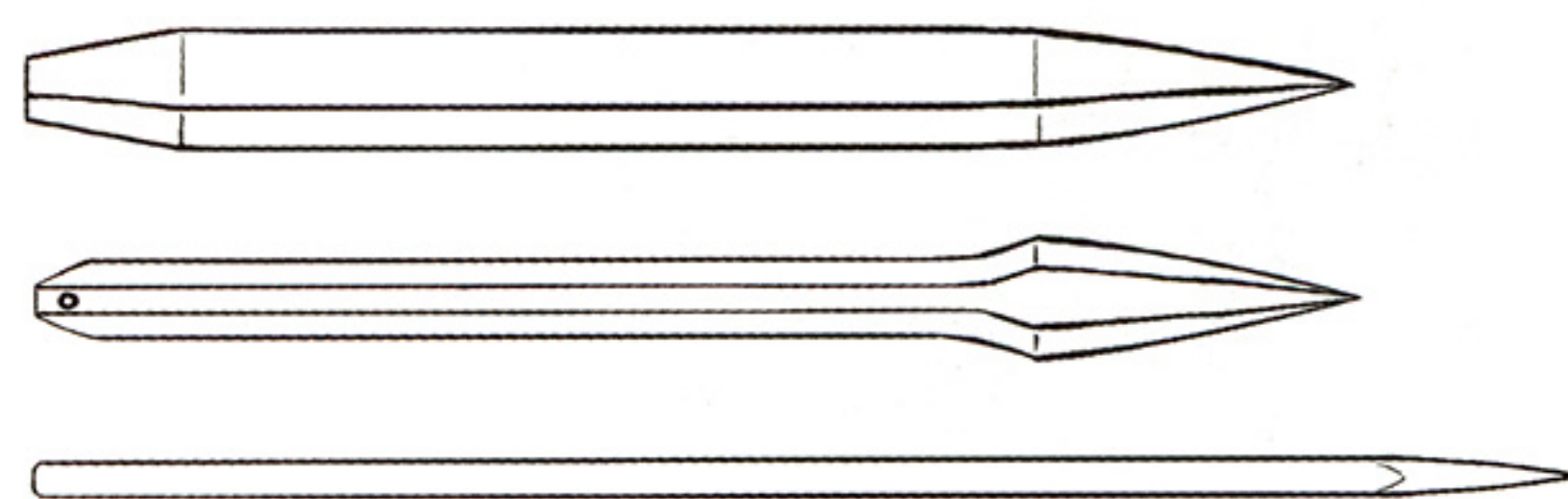
振り下ろすように投げる。

手裏剣の持ち方

本手持ち
剣先を指先側に向ける。

逆手持ち
剣先を手首側に向ける。

車輪持ち
中指、薬指、小指で包むように握る。

手裏剣の種類

手裏剣の一例です。
ここで紹介した以外にもさまざまな形の手裏剣があります。

三方手裏剣

四方手裏剣

六方手裏剣

八方手裏剣

卍手裏剣

棒手裏剣

ONE POINT

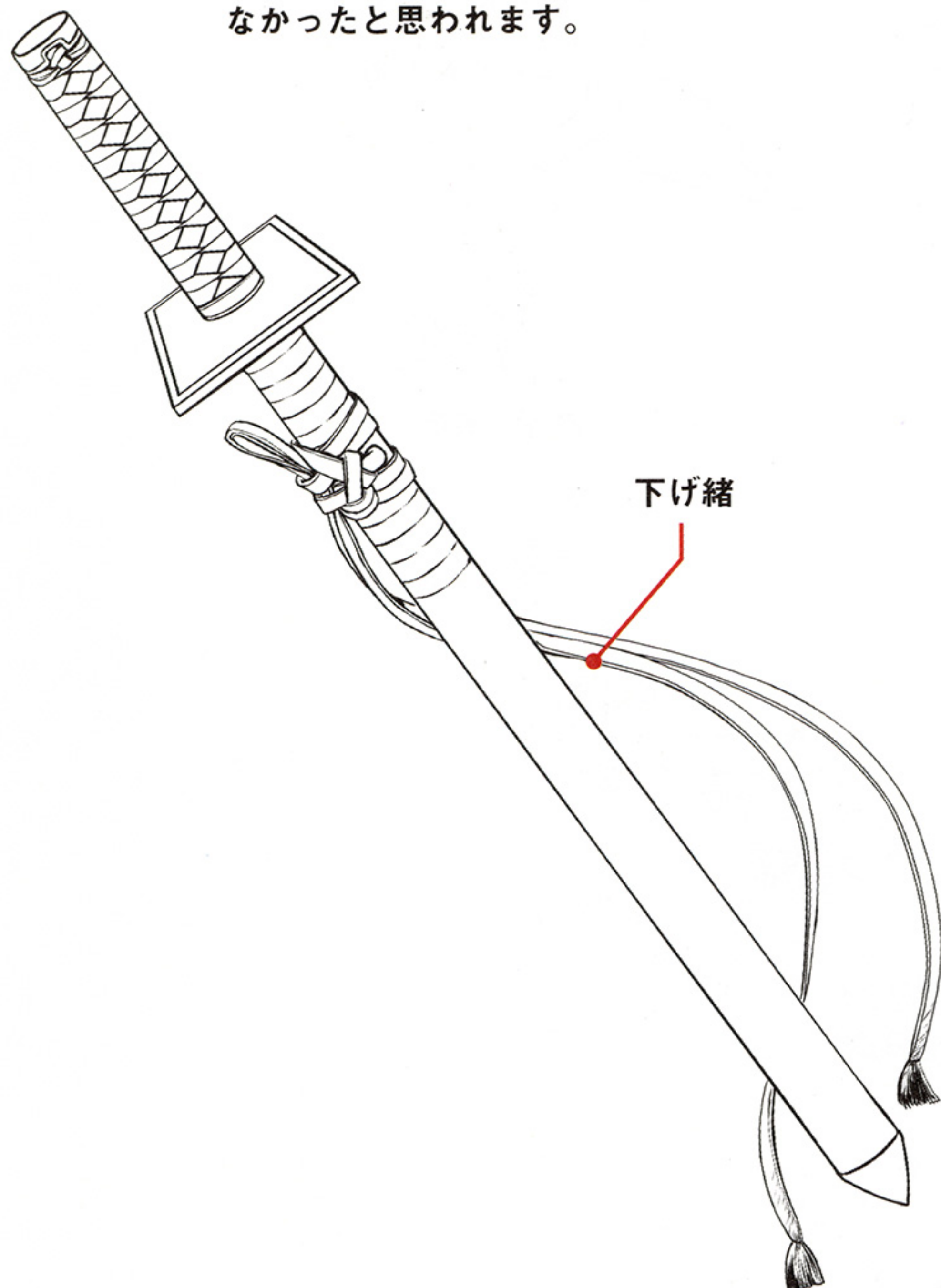
連続投げはフィクション!?

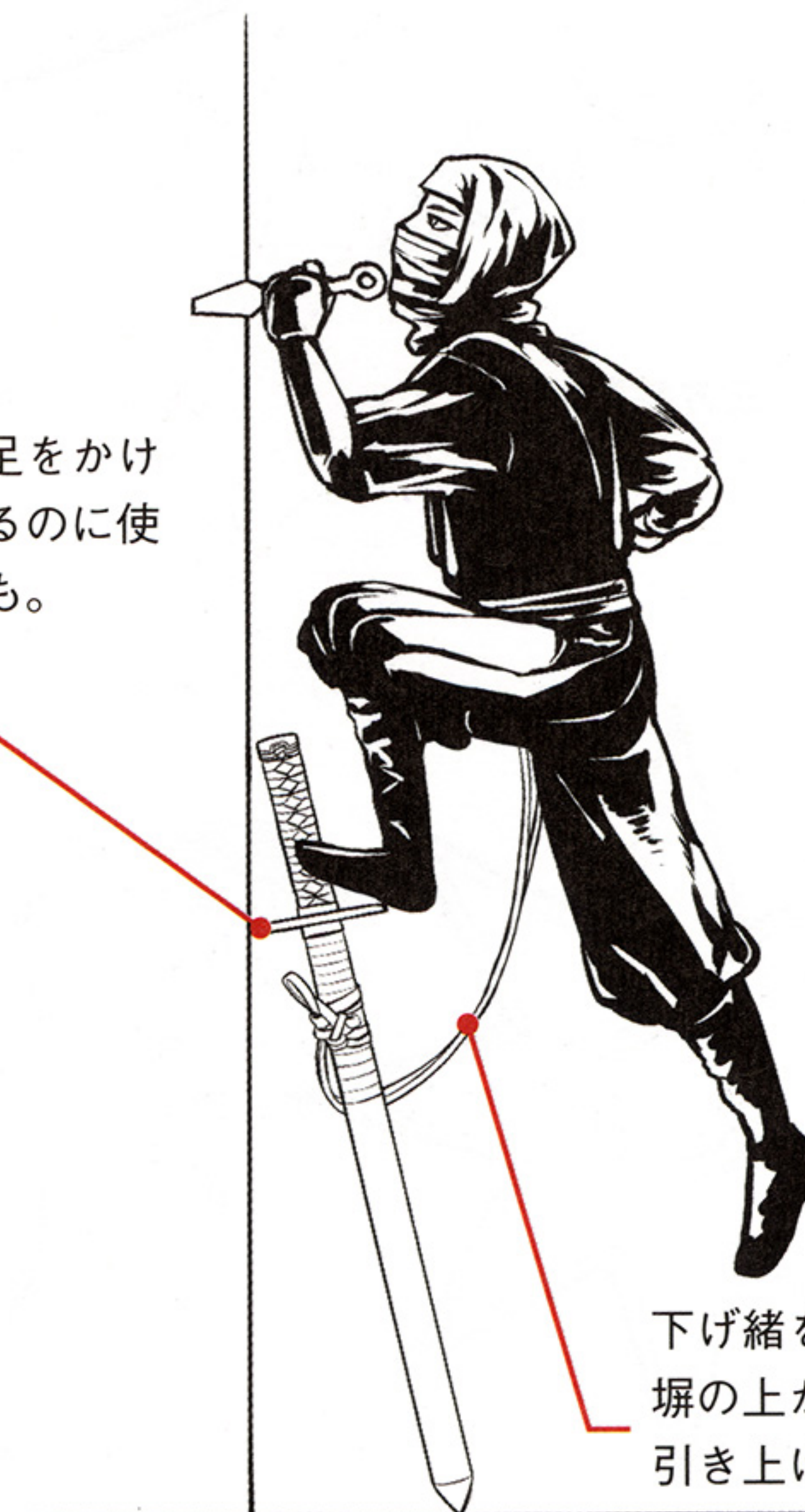
時代劇やマンガなどでは、手の平をこするように横向きに連続して手裏剣を打つ描写が見られます。
実際は、そのようにたくさんの手裏剣を連続で打つことはしません。
忍者は身軽であることが重要なので、手裏剣は大量に持ち歩かず 1、2 枚であったといいます。

11 忍者の武器

忍者の武器は手裏剣以外にも、さまざまな武器があります。
古くは隠密と忍者は同一であったので、道具は隠し武器のように一見普通の道具に見える物が多数ありますが、ここではいかにも忍者らしい武器を紹介します。

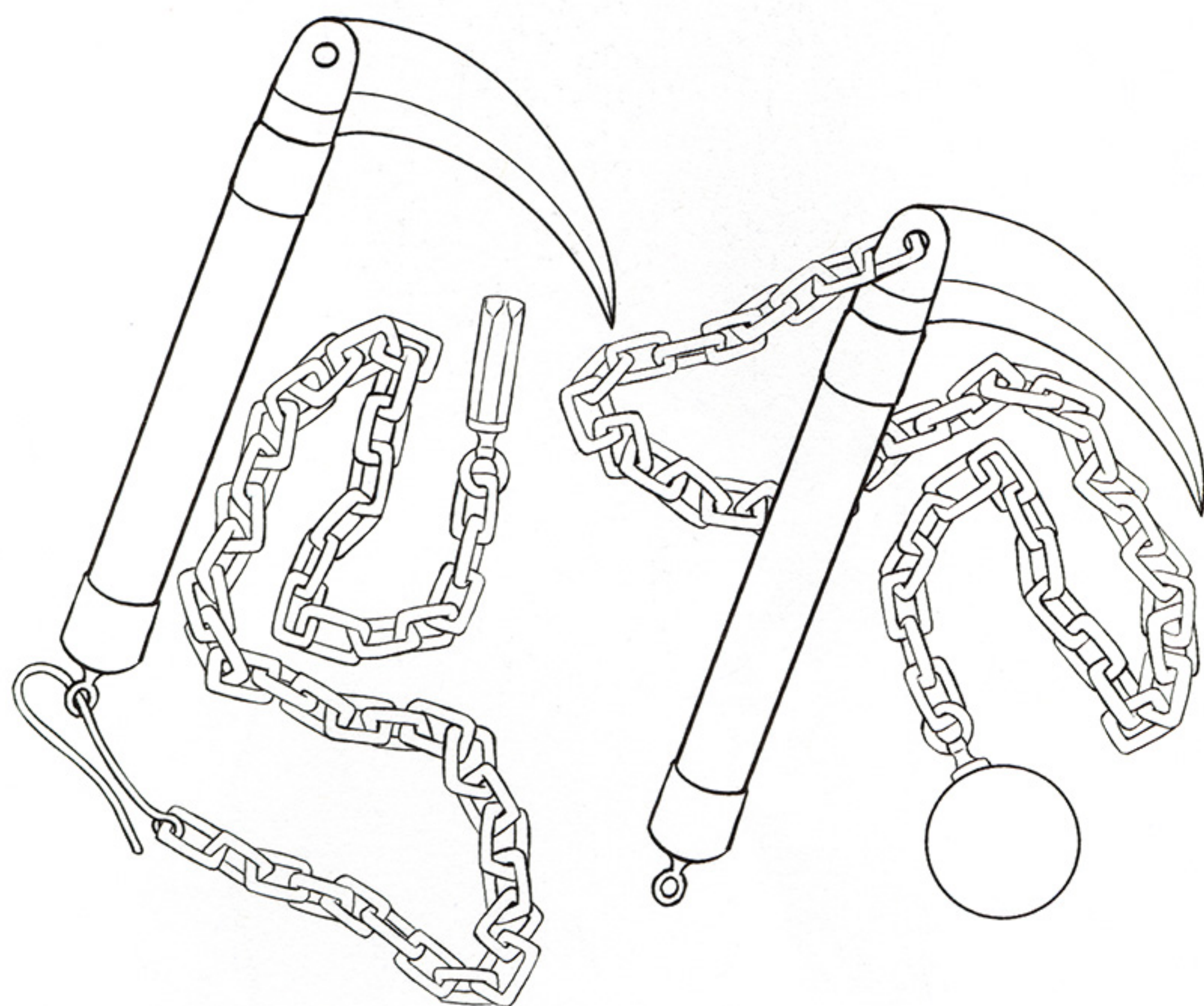
忍刀（しのびがたな）

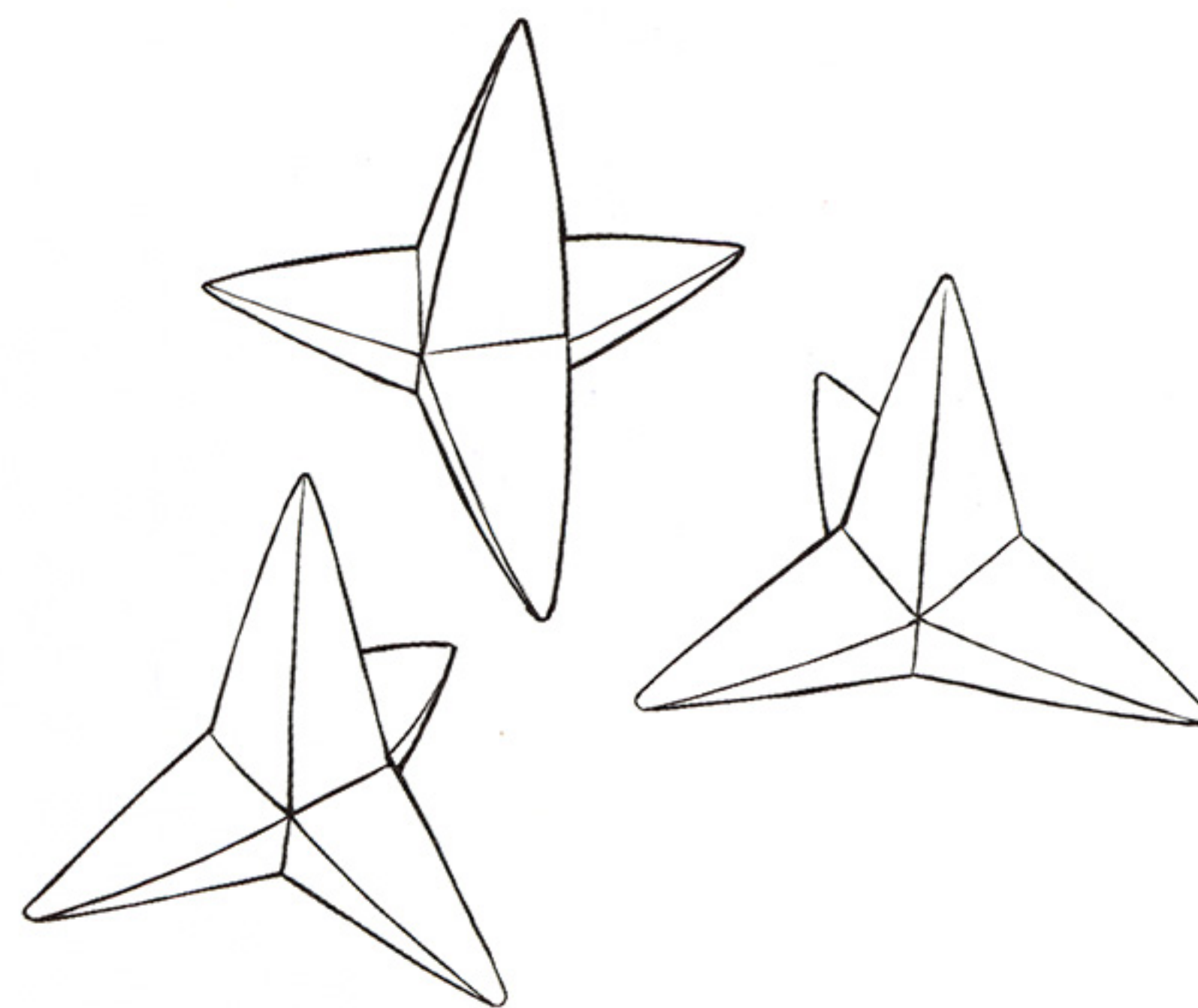
侍が使用する刀に比べると、サイズや鍔（つば）の大きさに工夫がされていました。
脇差と打刀の中間の長さで、反りの少ない「直刀」が多かったといわれています。
鍔は大きく、鞘（さや）は光の反射が少ない艶消しに仕上げられ、丈夫で軽く作られていました。
とはいえ、あまりに普通の刀との差がありすぎると、逆に目立ってしまうため、あまりこだわりはなかったと思われます。

下げ緒

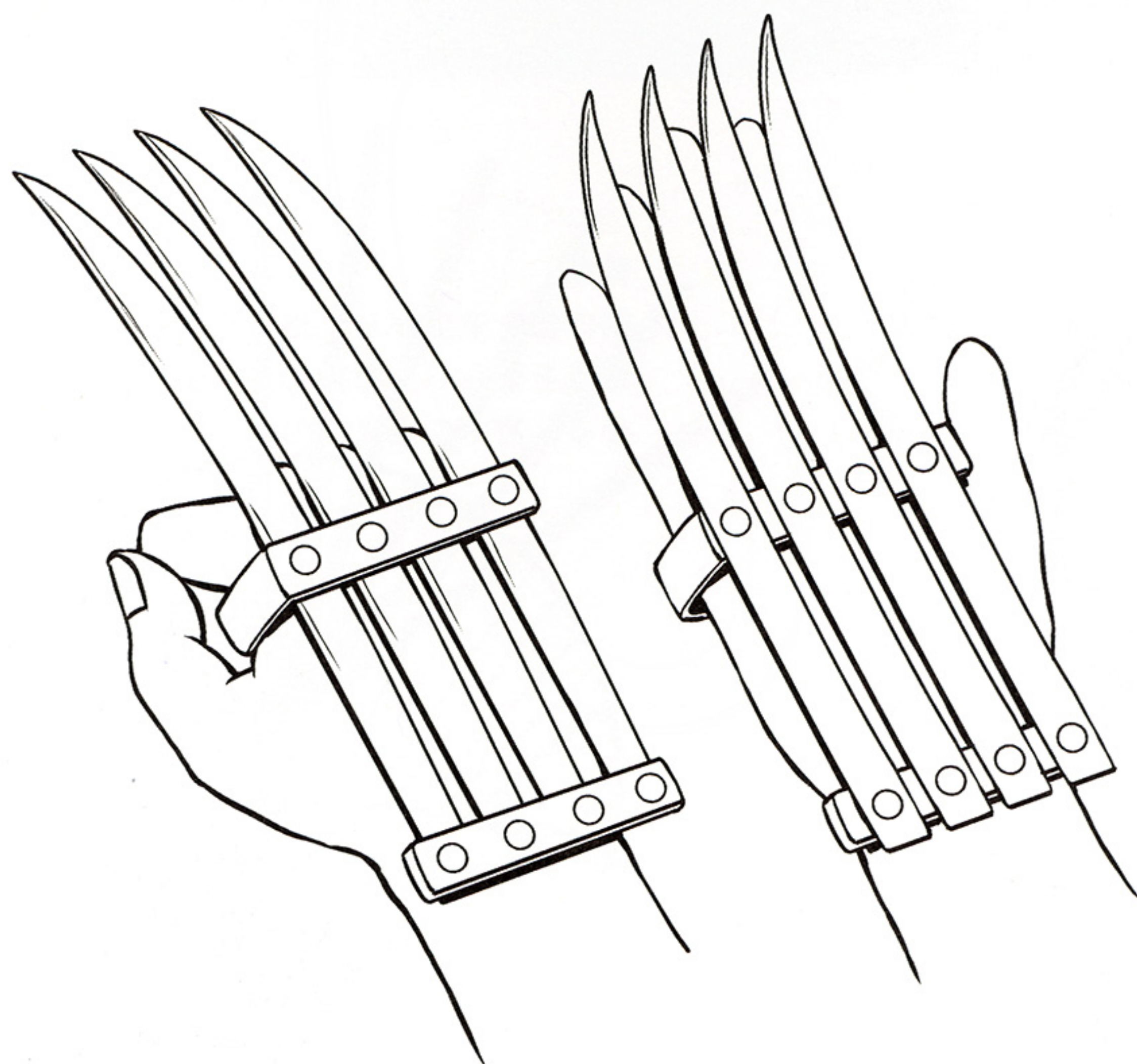
大きな鍔に足をかけて塀を越えるのに使用することも。

下げ緒を口にくわえ、塀の上から刀を引き上げる。

鎖鎌（くさりがま）

農具である鎌に鎖分銅（くさりふんどう）を取り付けた武器です。
農具の鎌と比べると小さく、懐に入れて携帯できるコンパクトなサイズだったと考えられます。
鎖を振り回し相手に巻き付けたり、鎌や分銅で攻撃して使用していました。

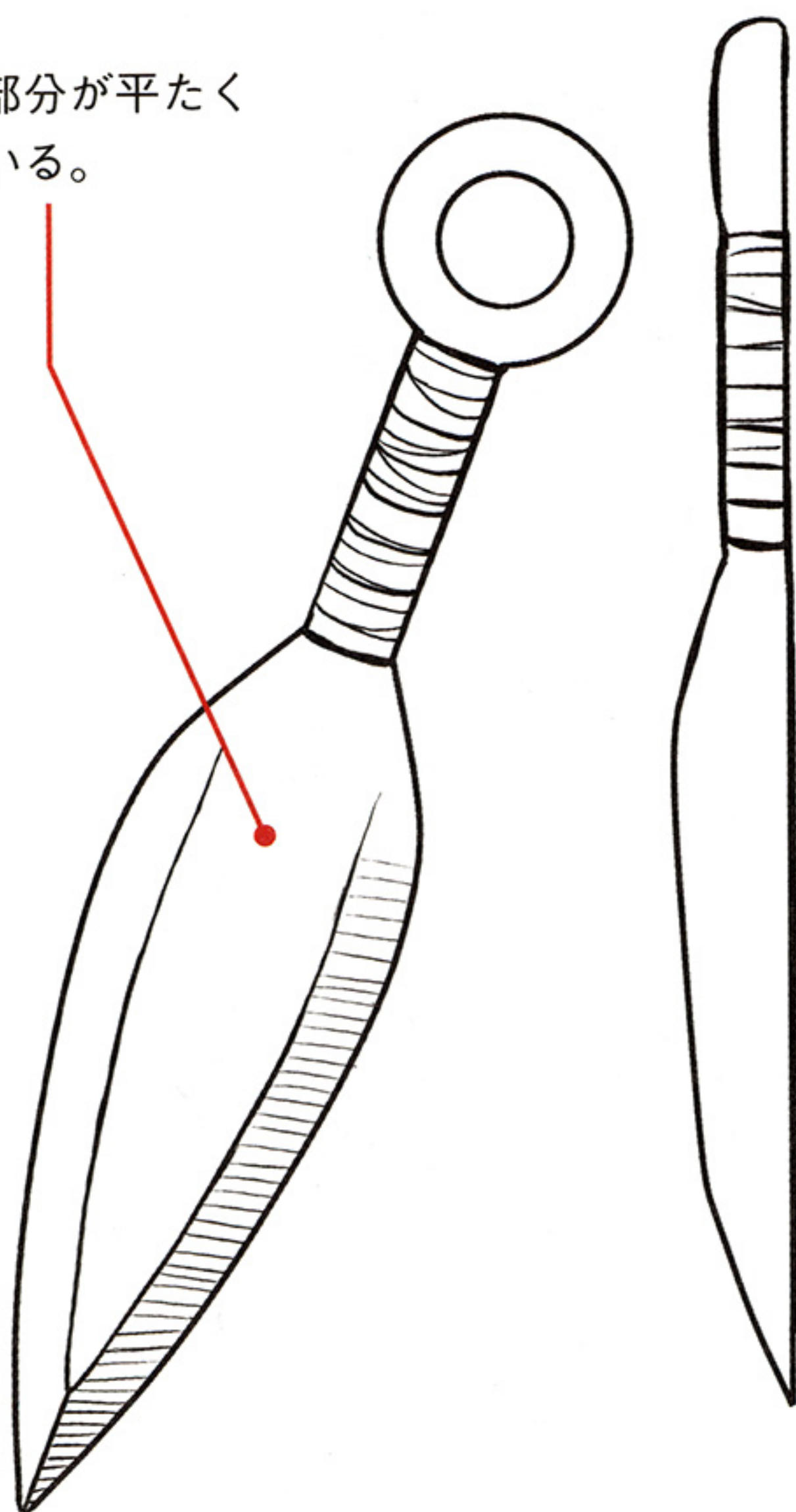
撒菱（まきびし）

追っ手の足止め用の道具です。
四方にトゲがあり、必ずトゲが上を向くような作りになっていました。

手甲鉤（てっこうかぎ）

鋭くとがった爪のついた武器です。
握って手の甲に装着するものと、手のひら側に爪が付くものの２種類あります。

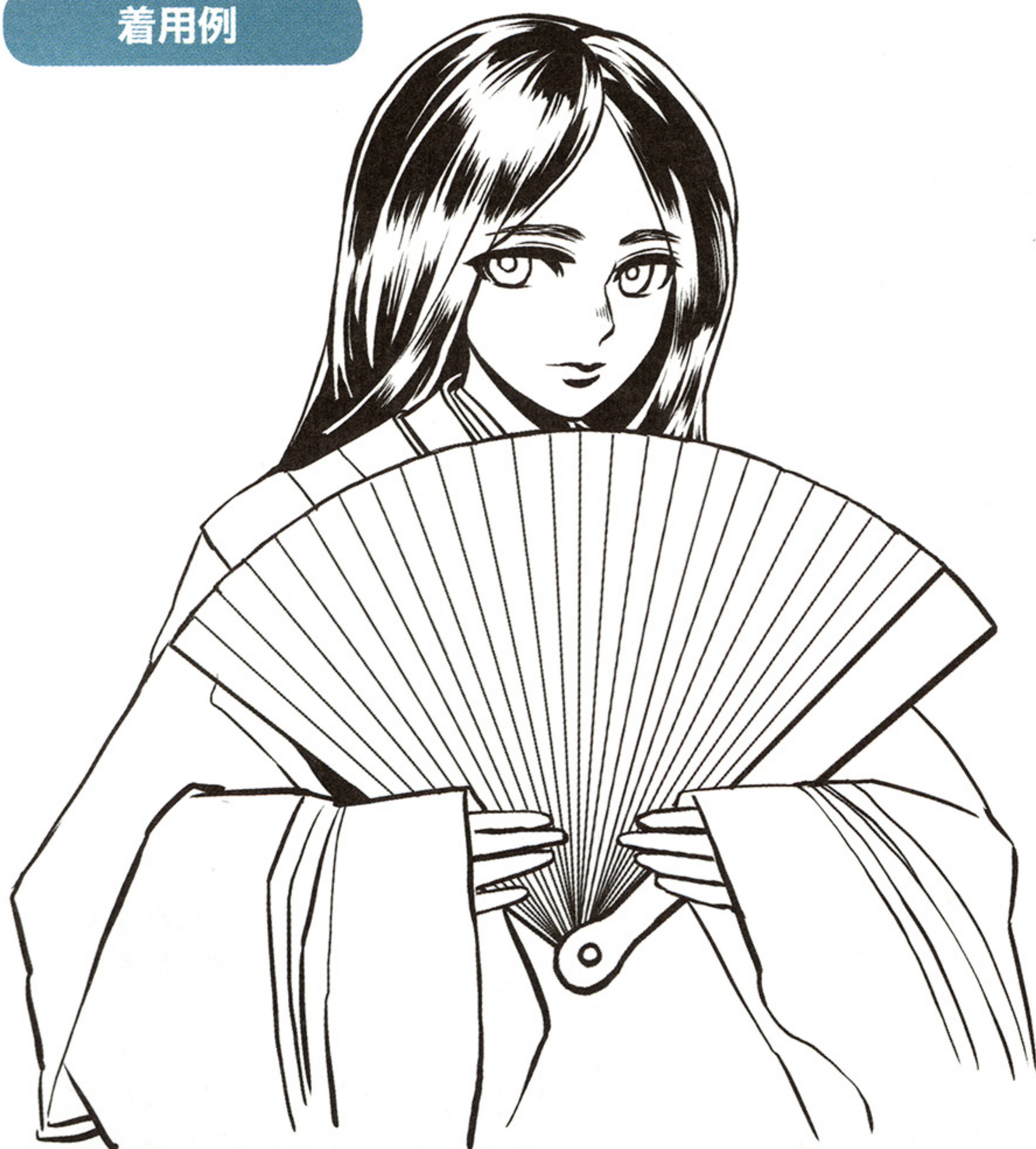
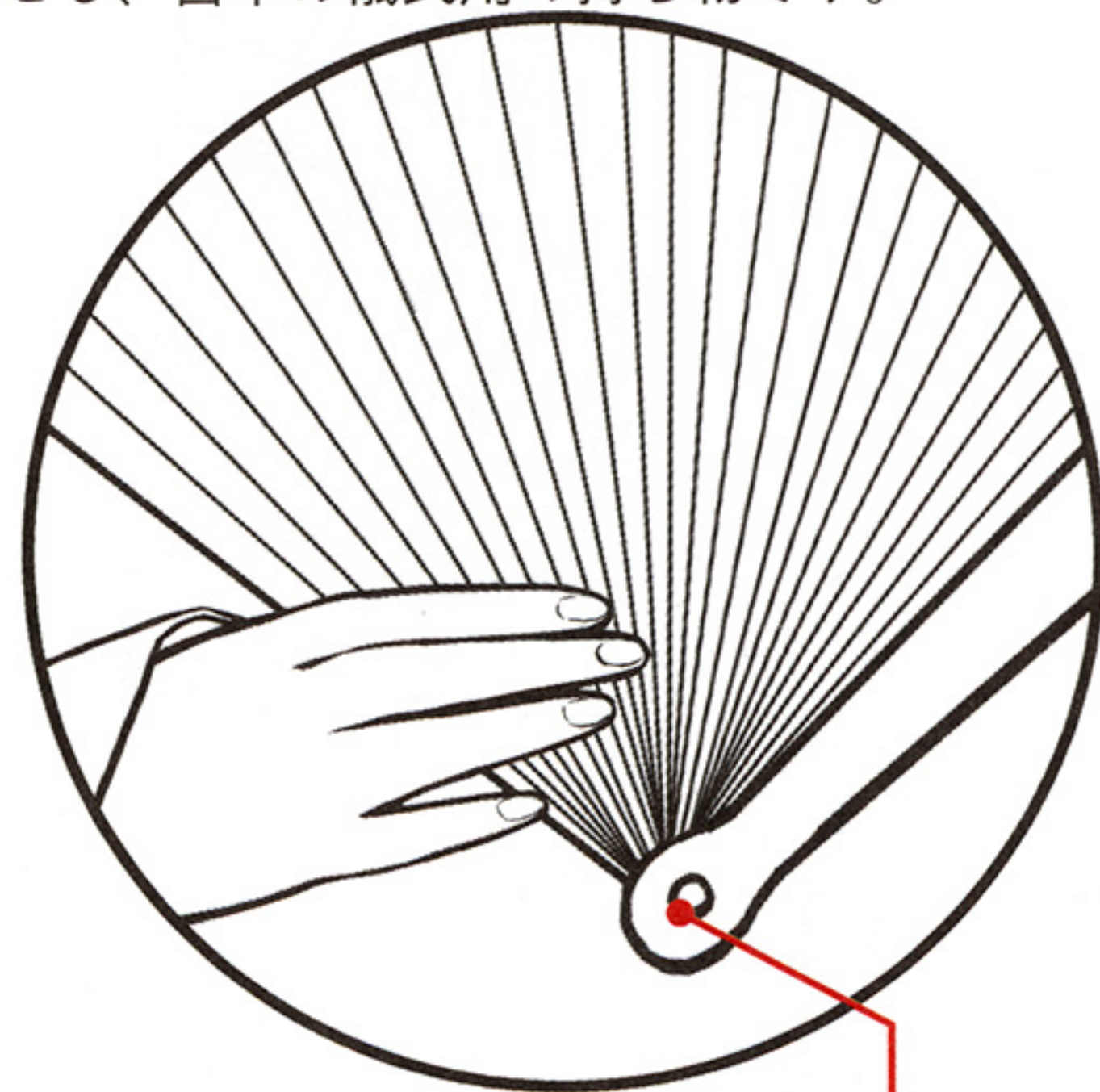
苦無（くない）

鋼や鉄でできていて、真ん中が平たくなっています。
手で持って武器として使用するだけでなく、穴を掘るスコップとして使用したり、小型のものは投げて手裏剣のように使用するなど、さまざまな使用方法がありました。

壁に打ち込み登器として使われることも。

真ん中部分が平たくなっている。

12 扇子

扇子はうちわと同様に涼をとる用途として使用されていますが、儀式用や贈答品、遊びの道具としても使用されていました。奈良～平安時代頃は檜で作られた板を束ねた檜扇と呼ばれるものがあり、メモ帳代わりに用いられたともいわれています。

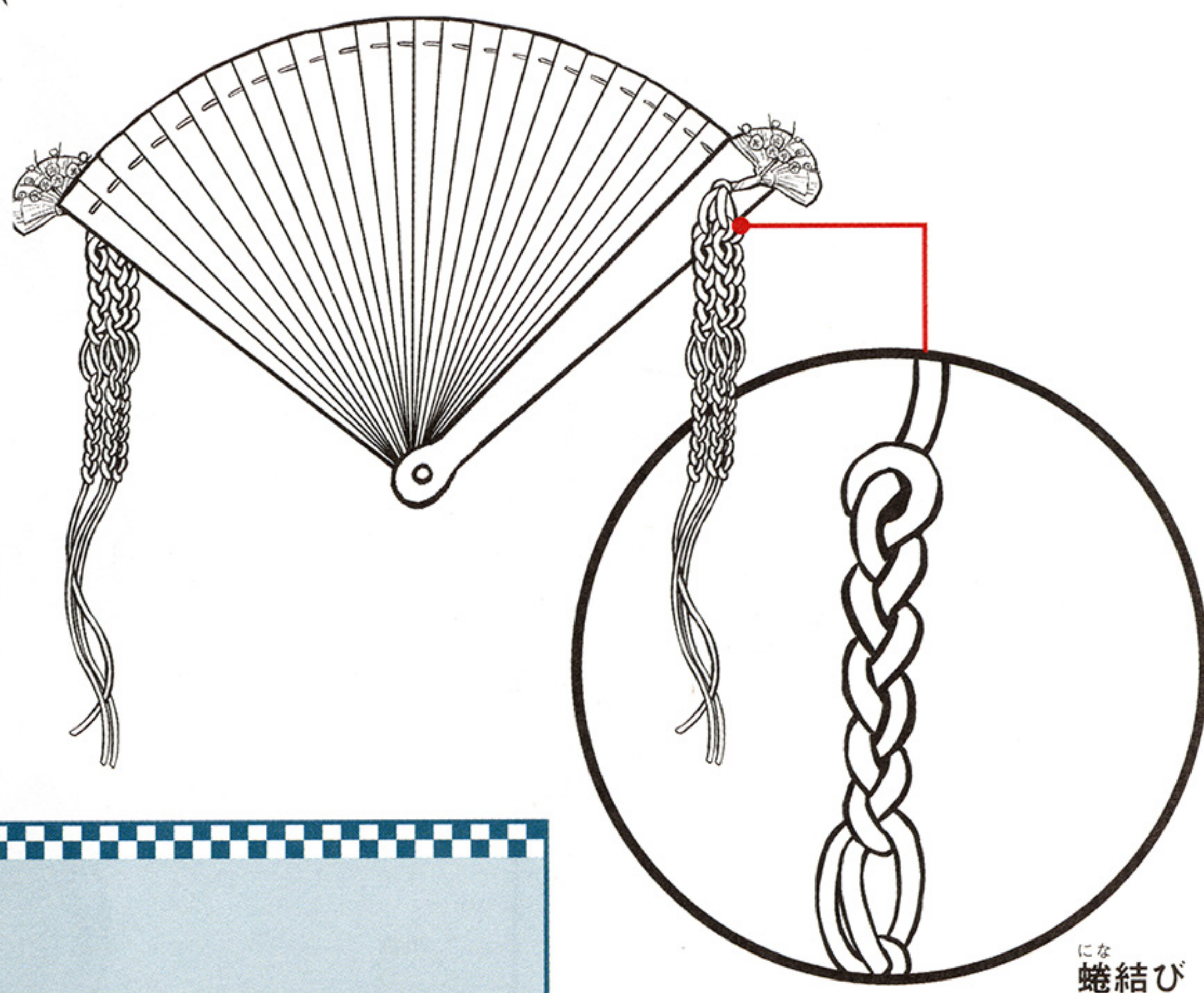
着用例

檜扇

檜の板を末広がりに綴り合わせたもので、表に金銀箔を散らし、彩絵して束帯や十二単などに合わせる、宮中の儀式用の持ち物です。

要

根元を留めるためのもの。持つ時は要に手が触れないように持つ。

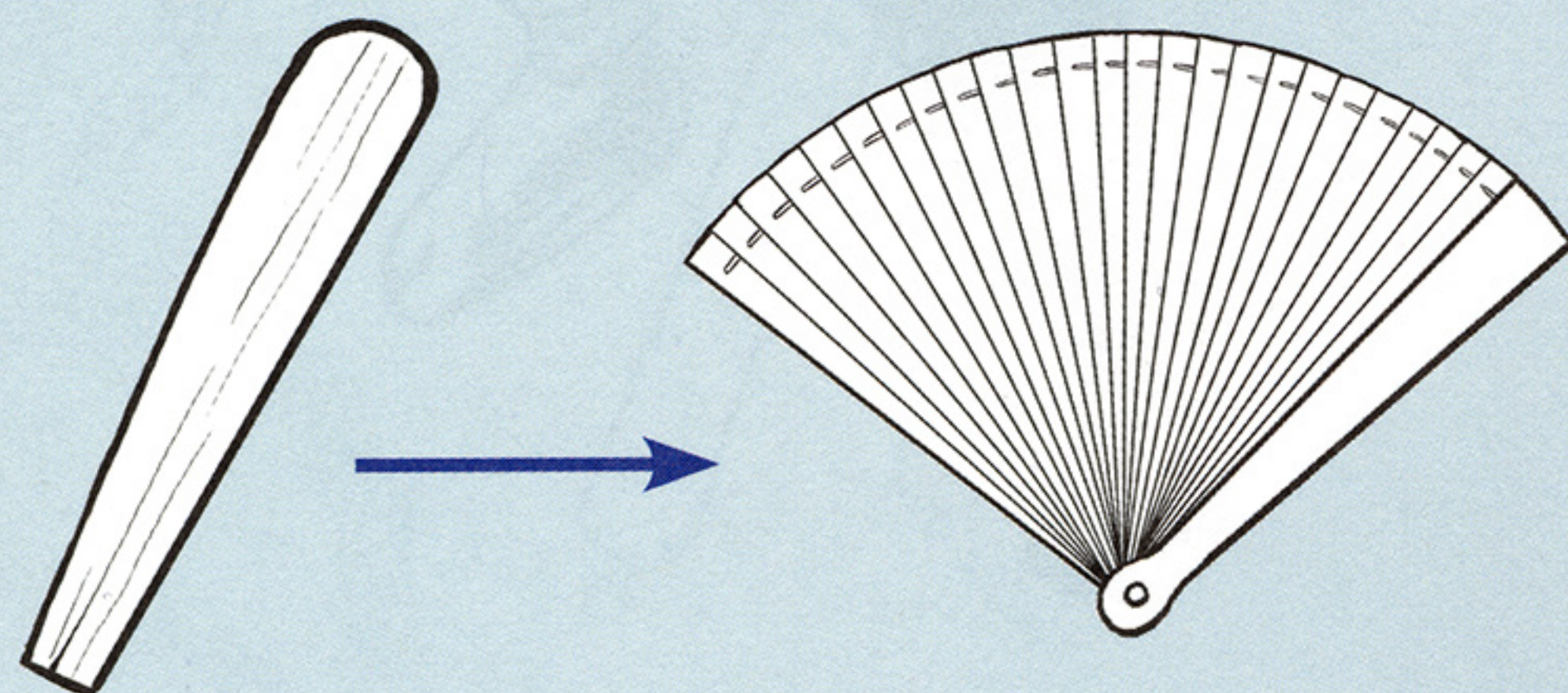
檜扇の枚数

板は「橋」といい、かつては公卿が25橋、殿上人が23橋でしたが、現在は25橋が一般的です。

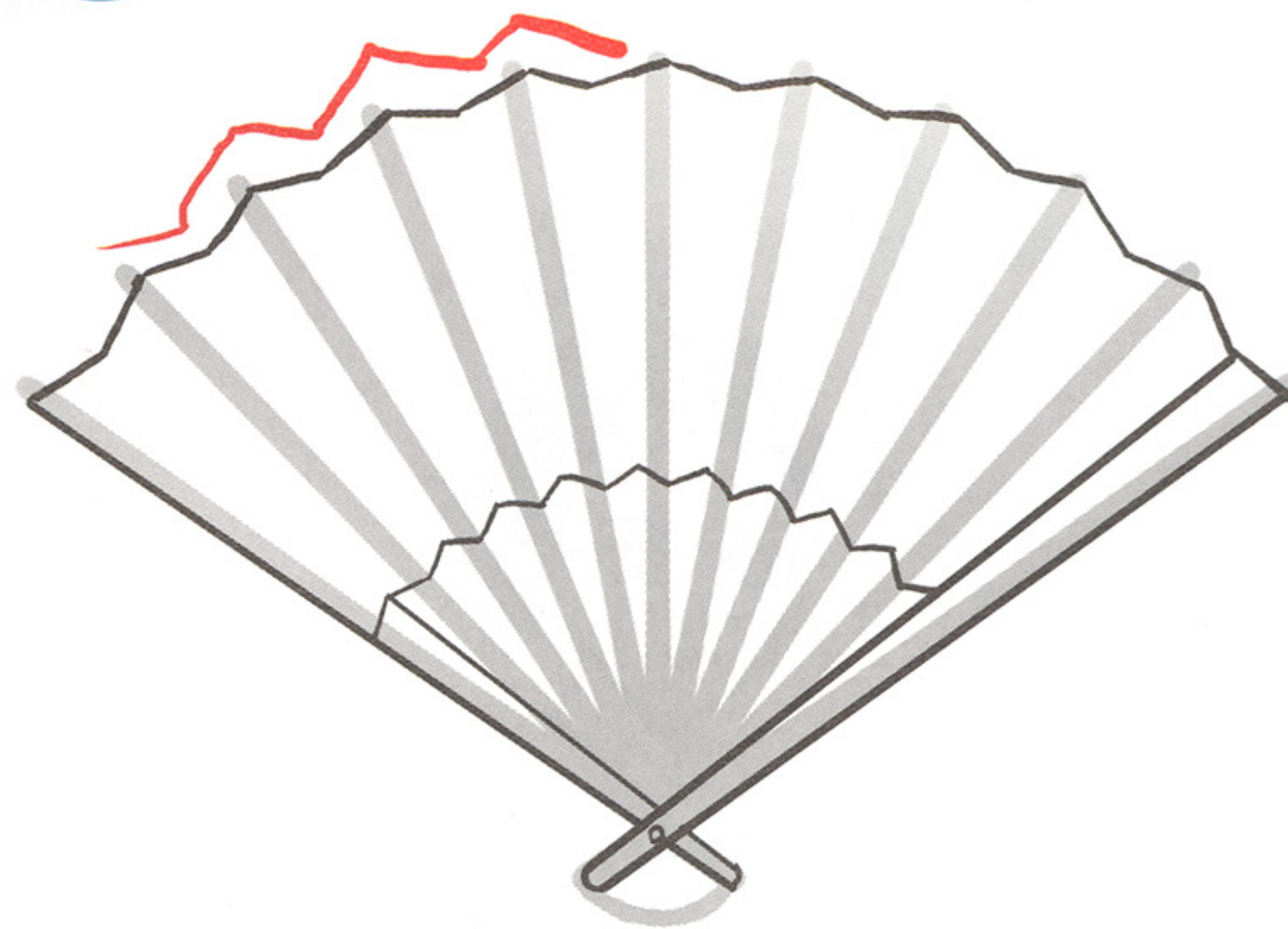
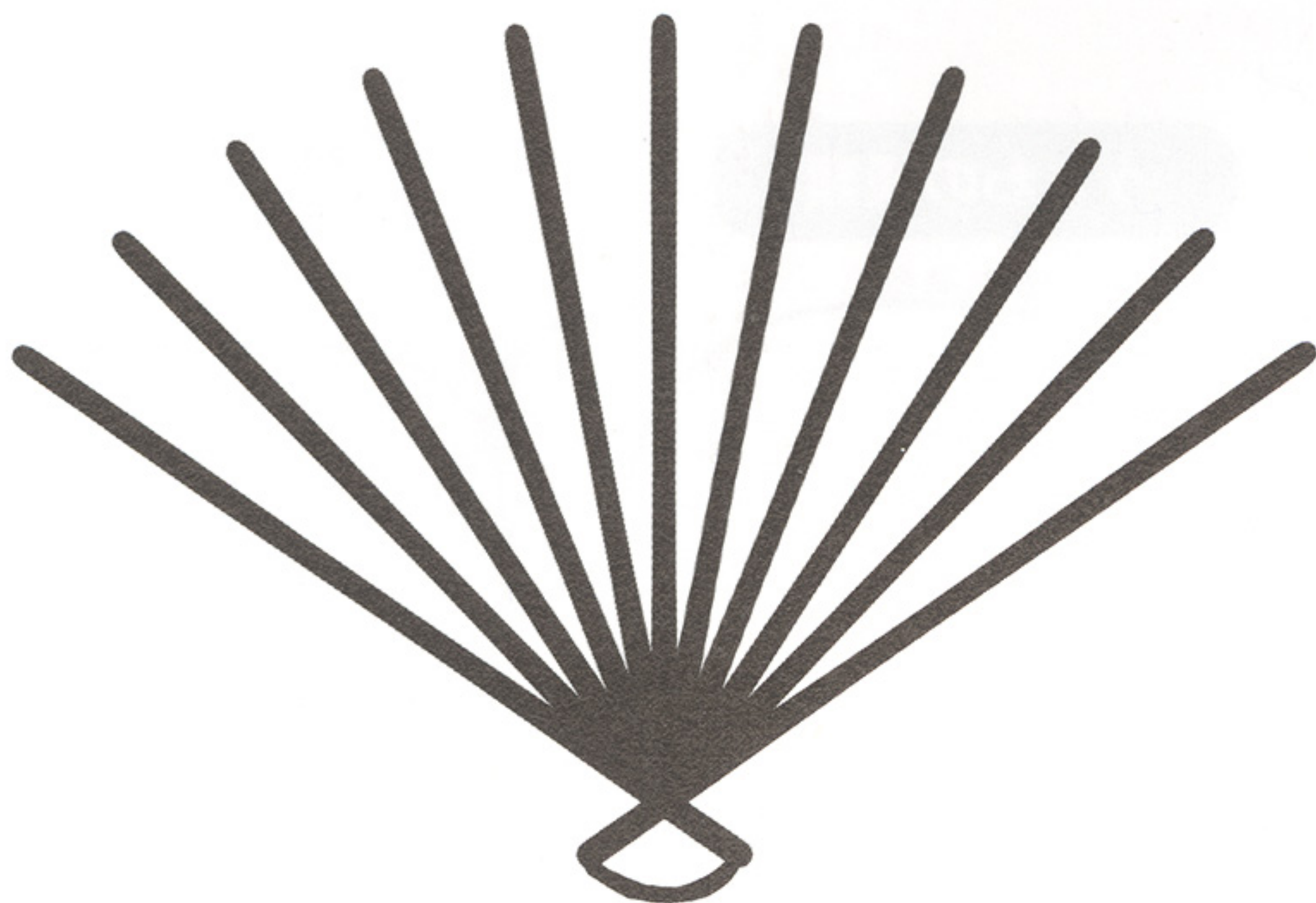
現在の女性用の檜扇は金彩や胡粉などで吉祥画を描き、六色の紐を両端に蜷結びをして梅や松などの造花を飾り付け、美しい物となっています。

蜷結び

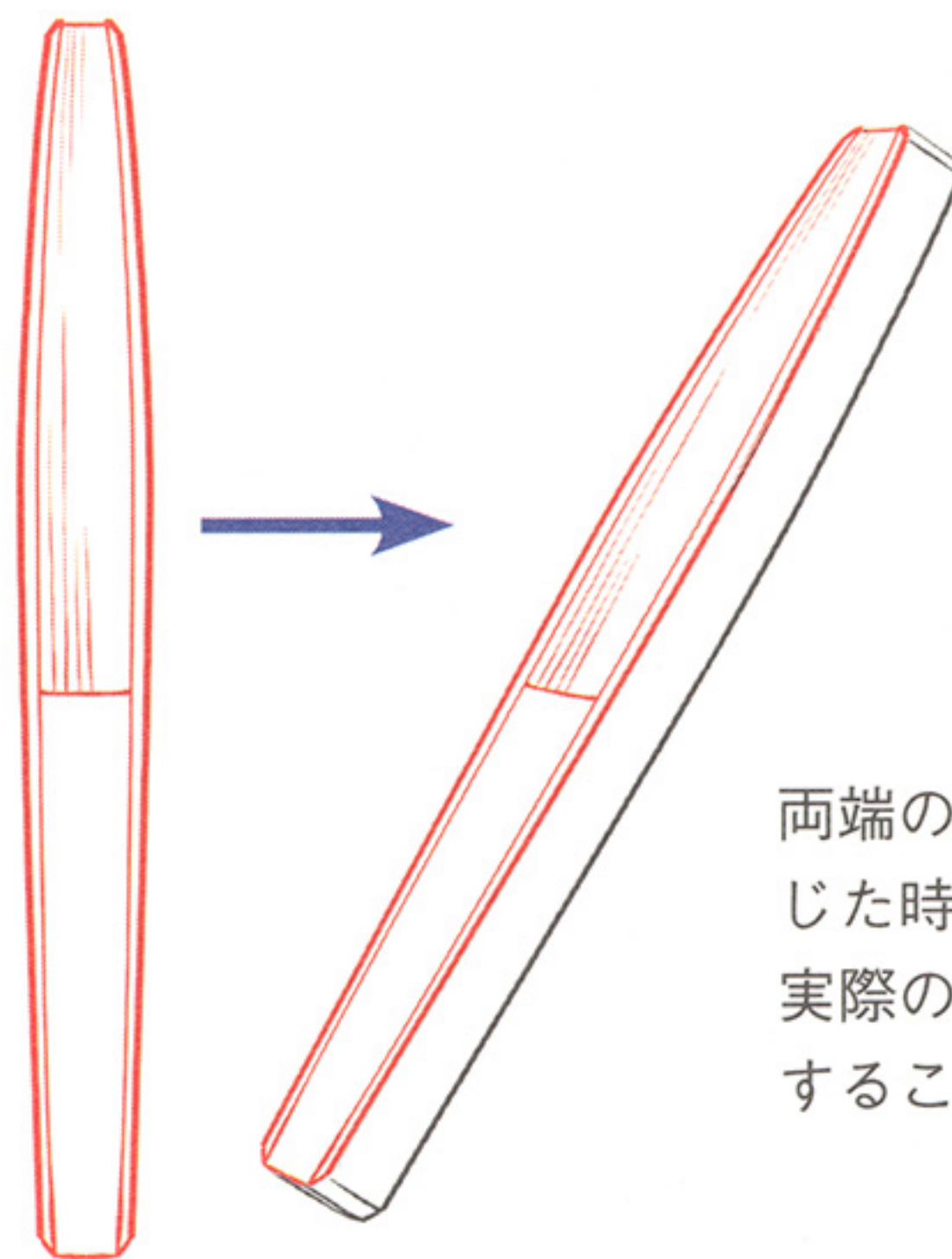
ONE POINT

元はメモ帳代わり!?

檜扇は中国から伝わった笏が元になっています。
当時、笏はメモ帳代わりに使用されていました。しかし笏だけではメモ欄が少ないという理由からか、薄い檜板を糸で綴って扇の形にしたのが檜扇といわれています。

扇子の描き方

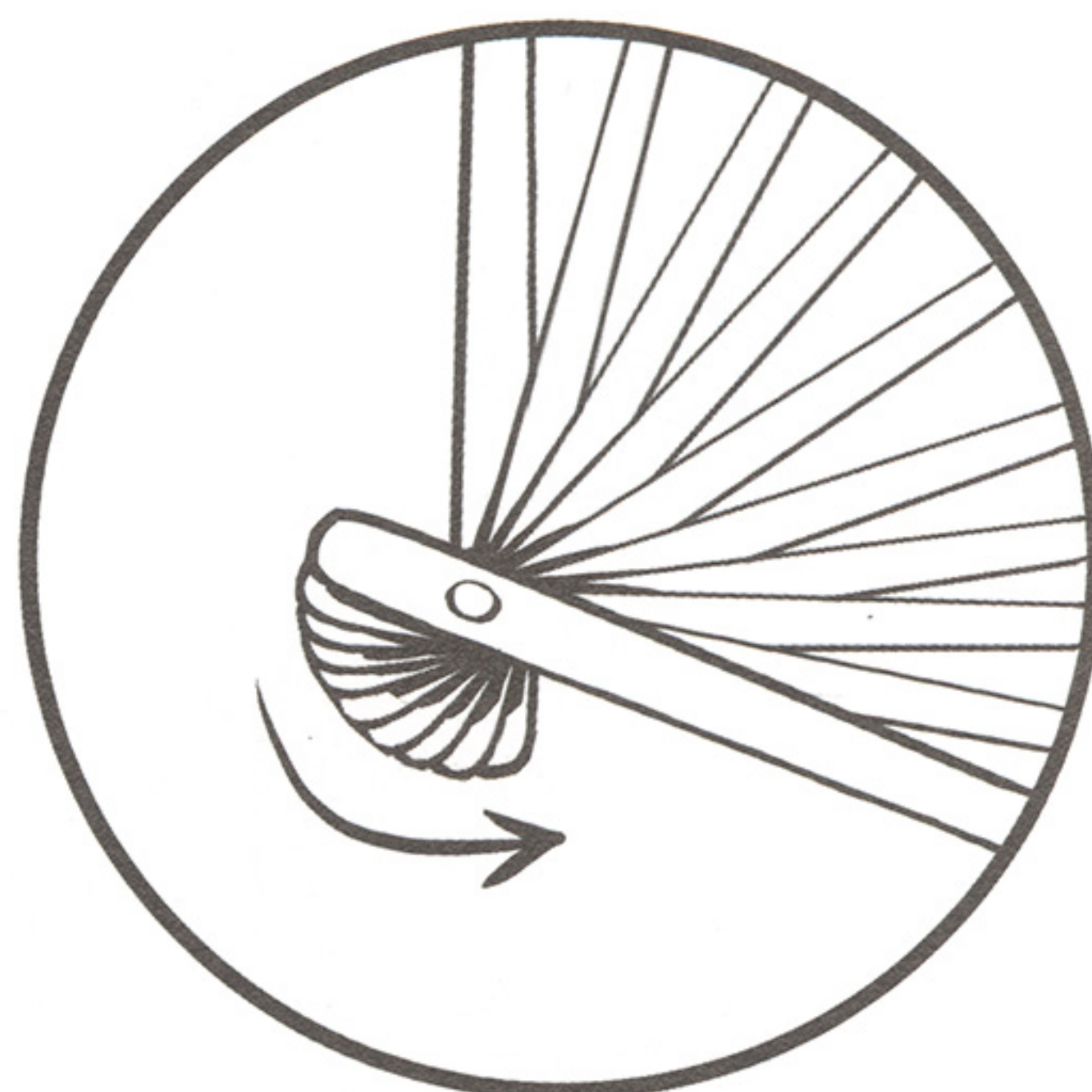
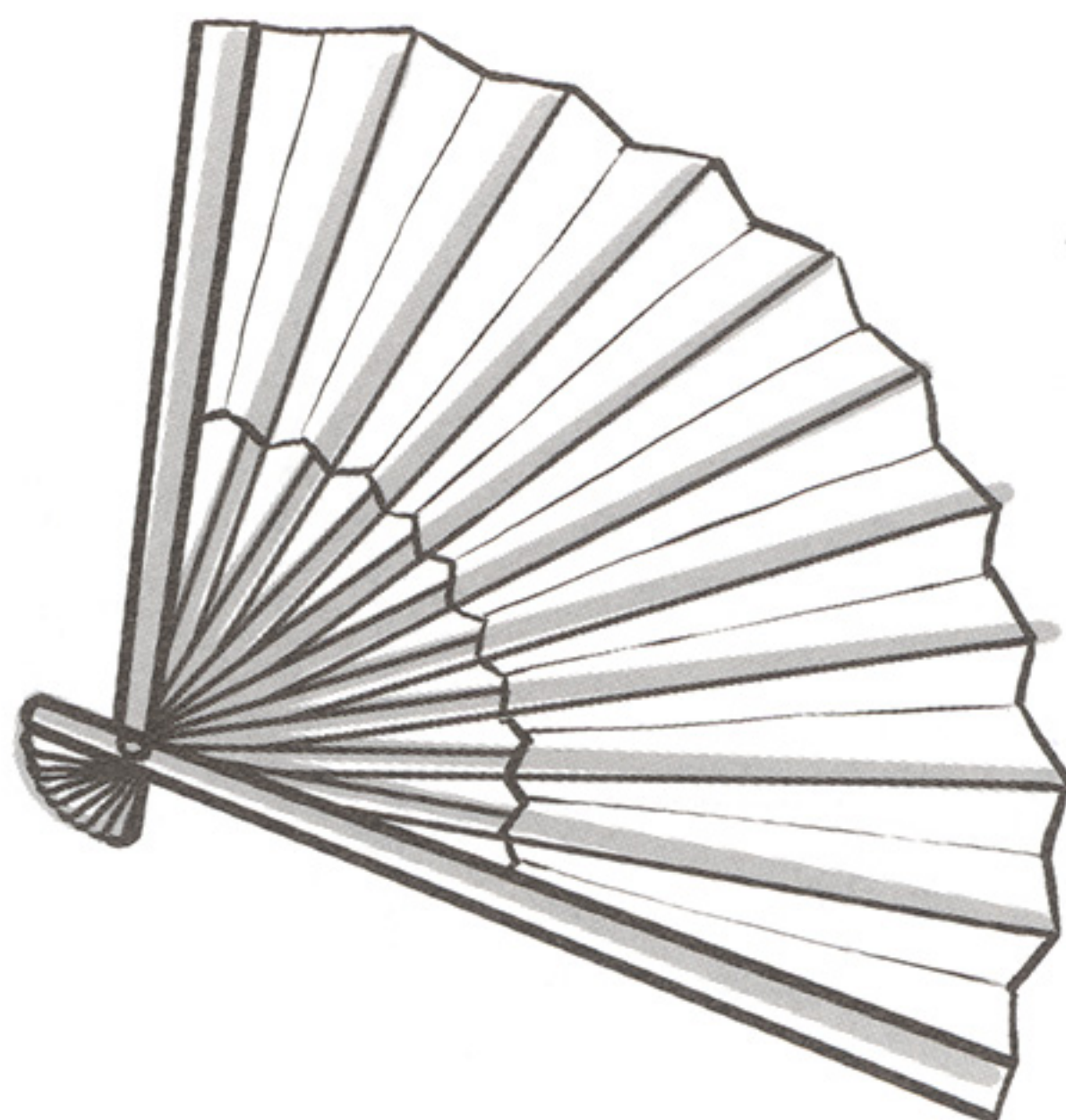
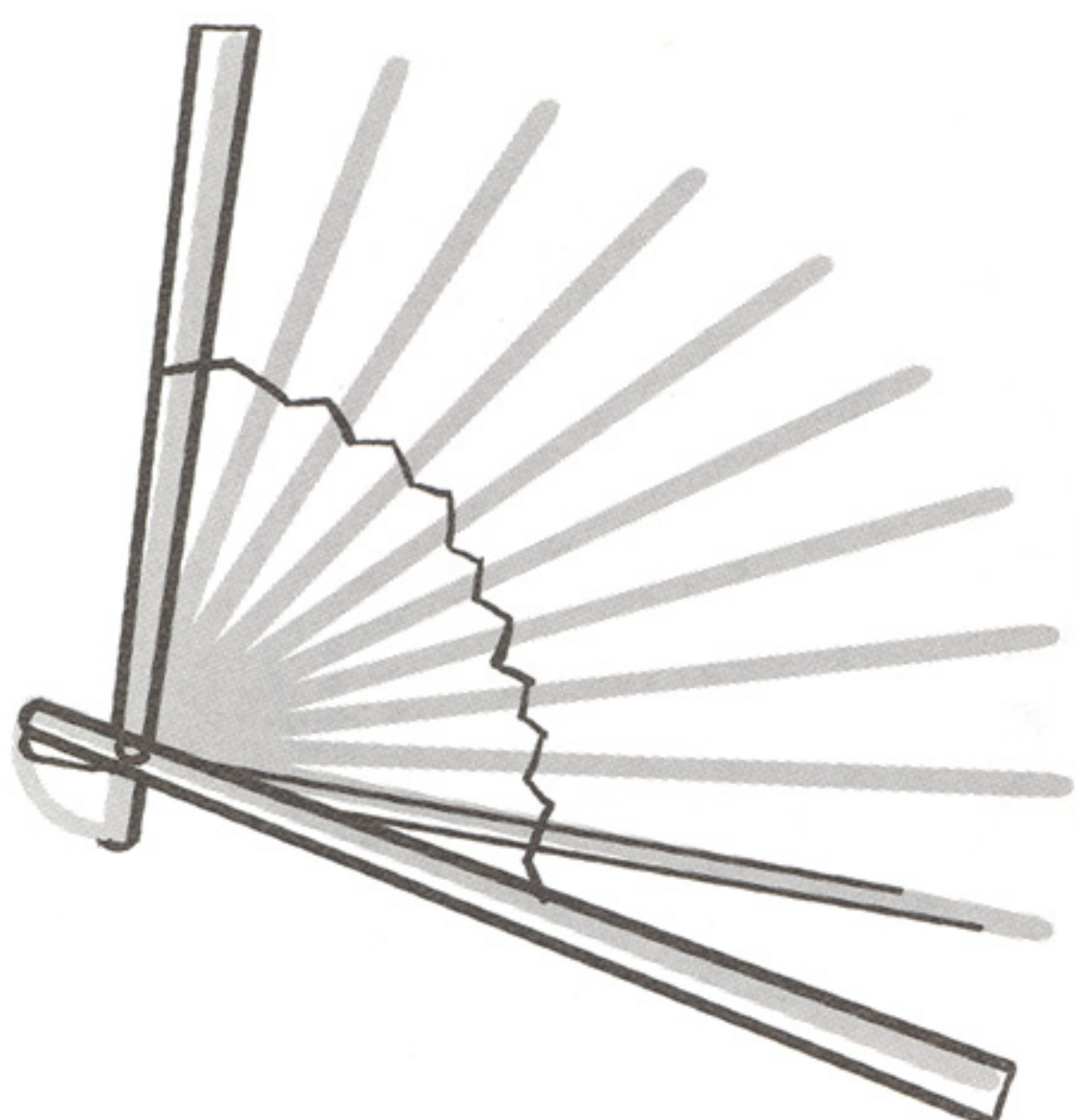
1 少し太めの線でアタリを描く。

2 アタリを元に形を描き込む
ギザギザと折り目部分を意識する。

3 ギザギザの折り目部分に線を入れ、要部分の重なりは骨の数と合うように描き込んだら完成。

両端の部分は他の骨より太くなる。

両端の部分の形によって閉じた時の形が変わるので、実際の扇子をよく見て観察することも重要！

斜めなどの角度がついた構図でも同様に太めの線でアタリを描く。

要部分はカーブを意識する。

13 うちわ

古来、うちわはもっと大型で、儀式や占いなどに使われていました。その後、材質などが時代によって変化し、室町時代に現在の形となります。
江戸時代に一般大衆に普及し、涼や炊事などさまざまな場面で活躍しています。

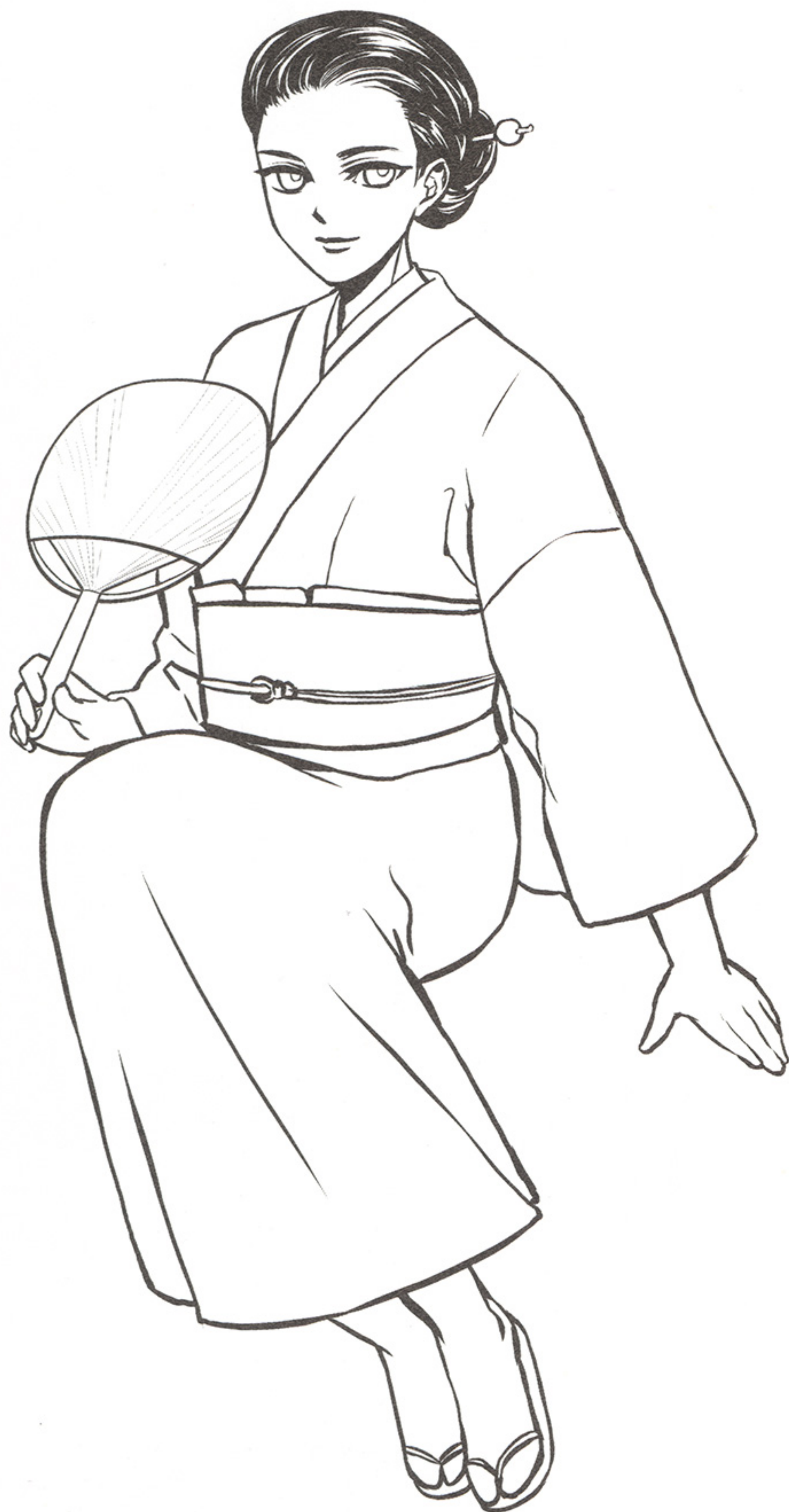
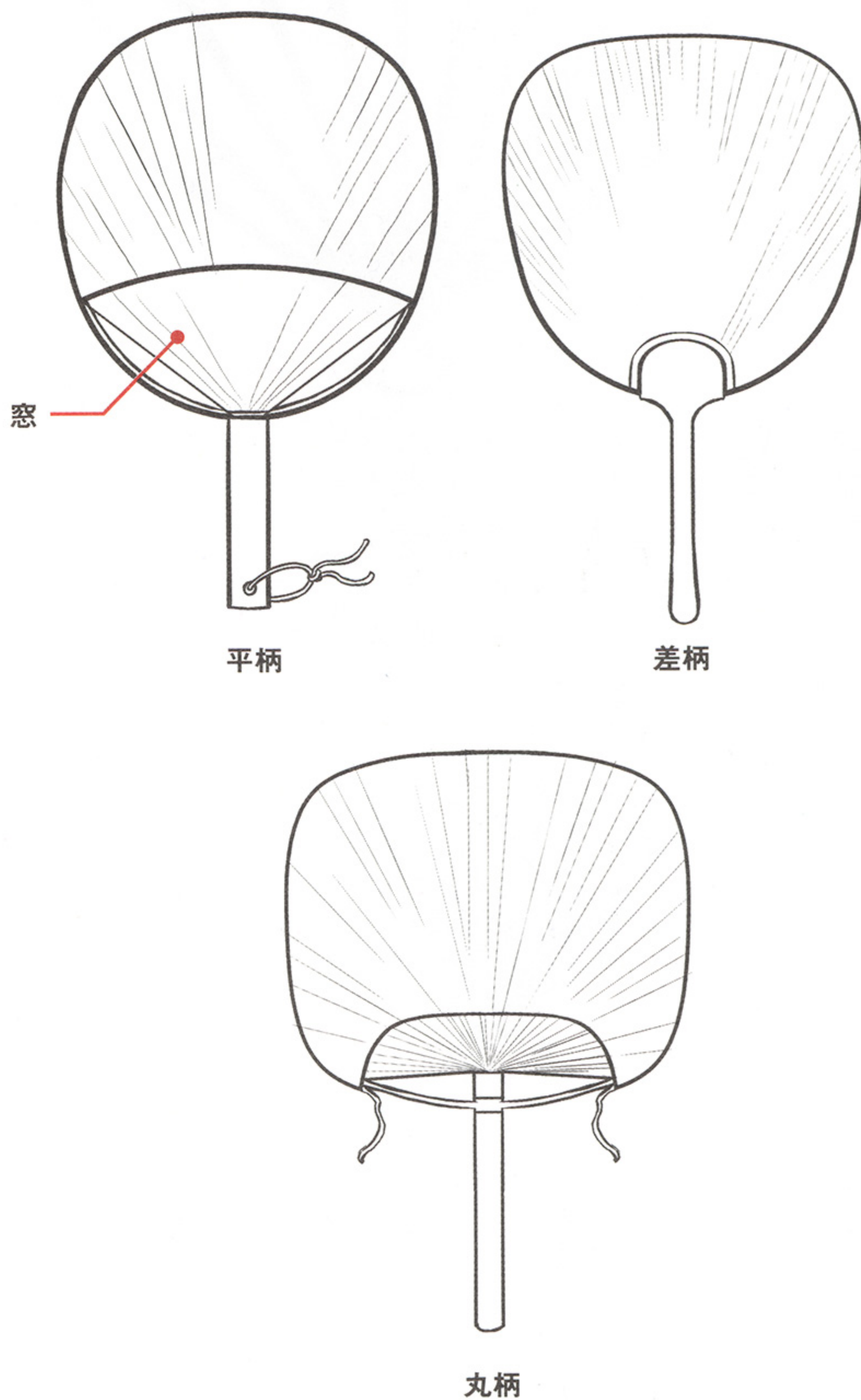
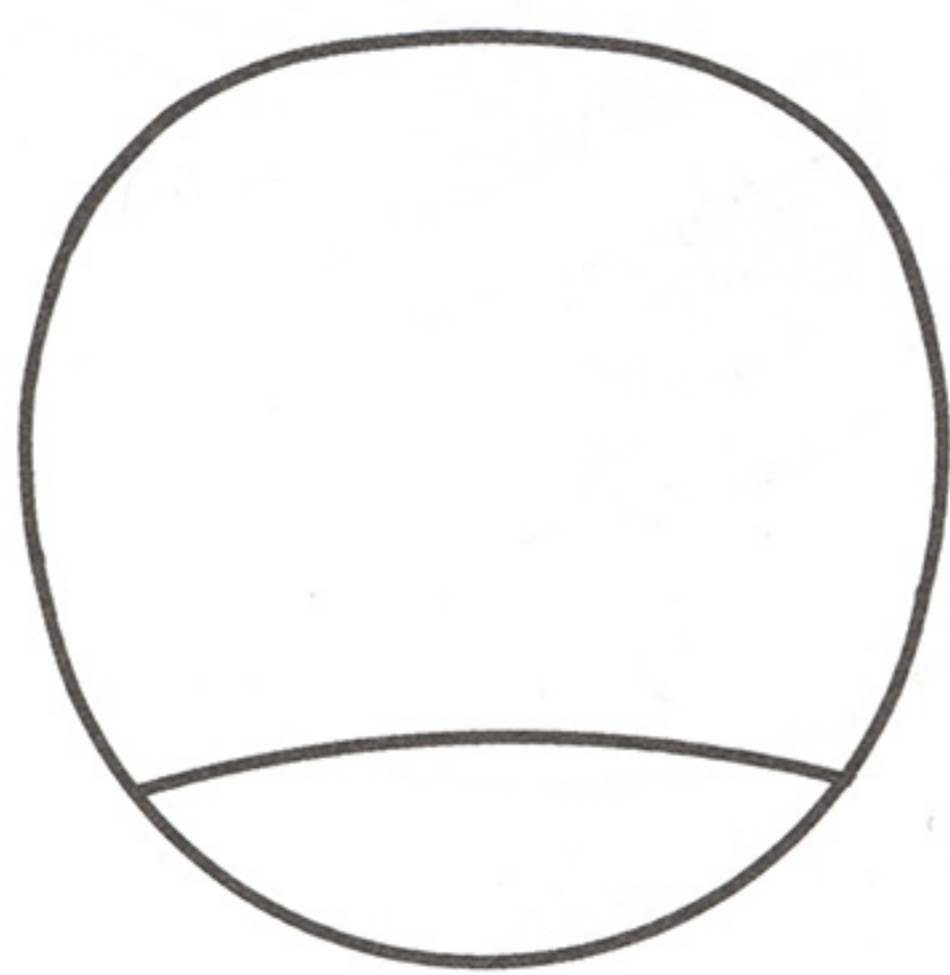
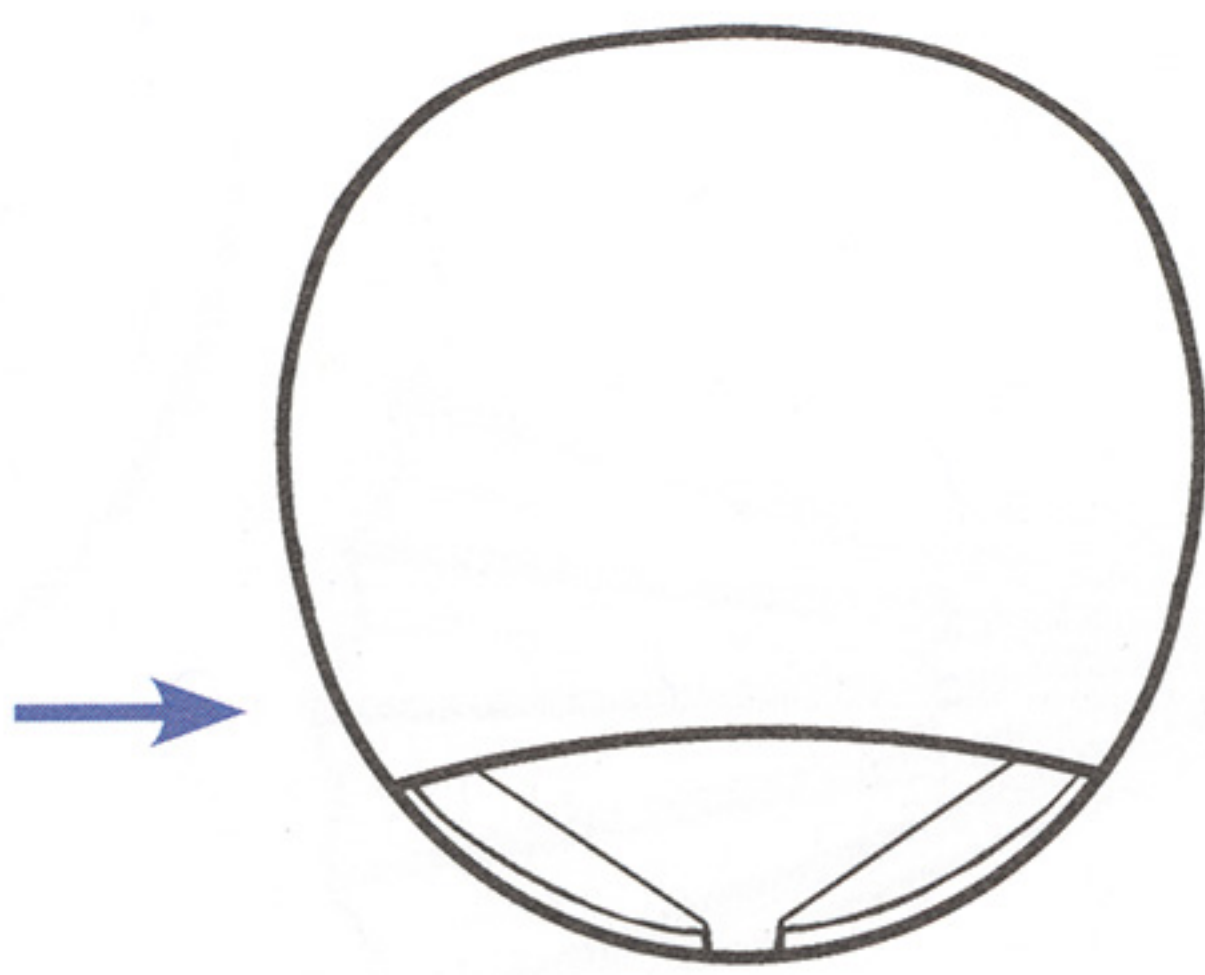
着用例

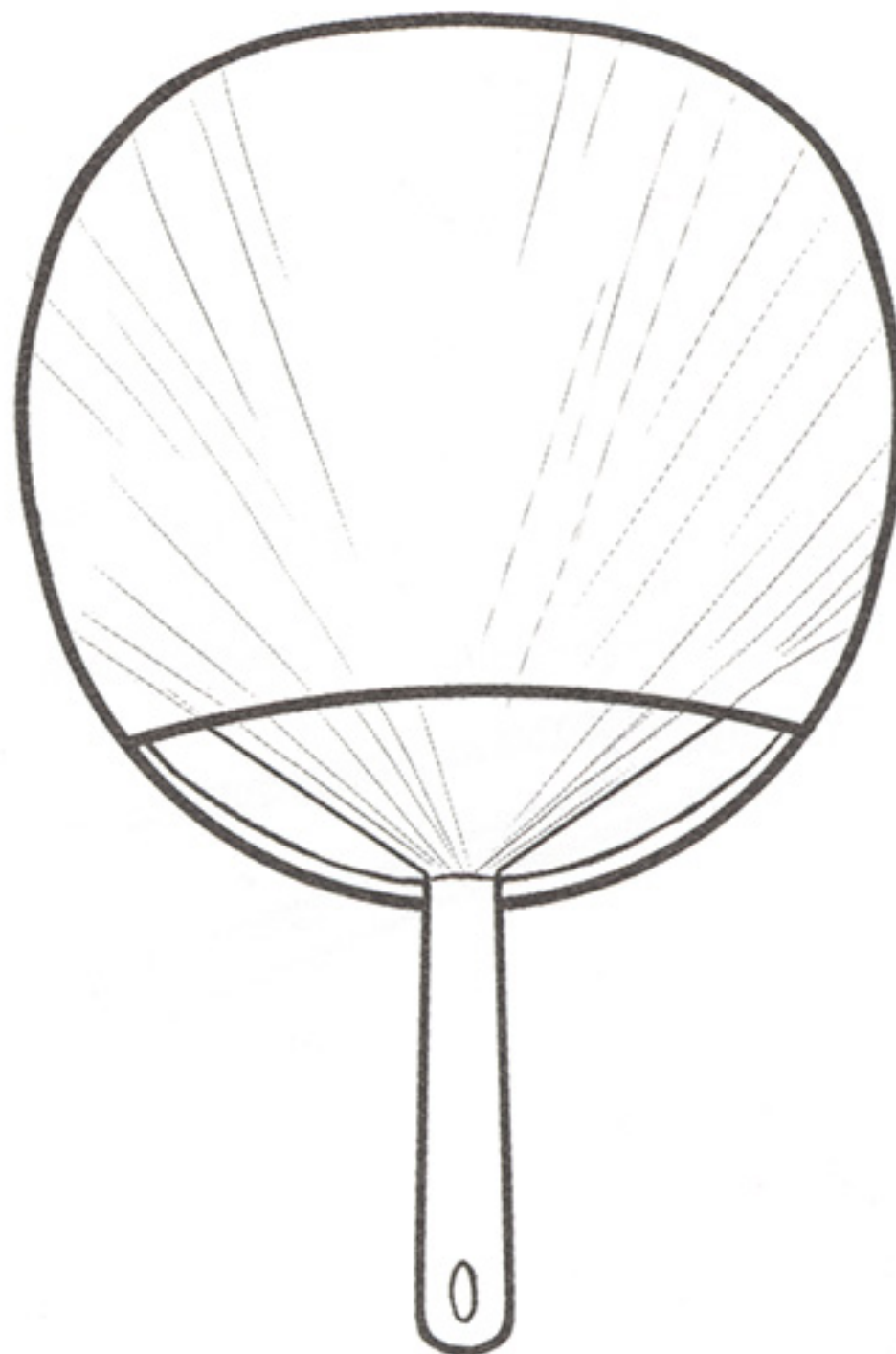
うちわの種類

窓

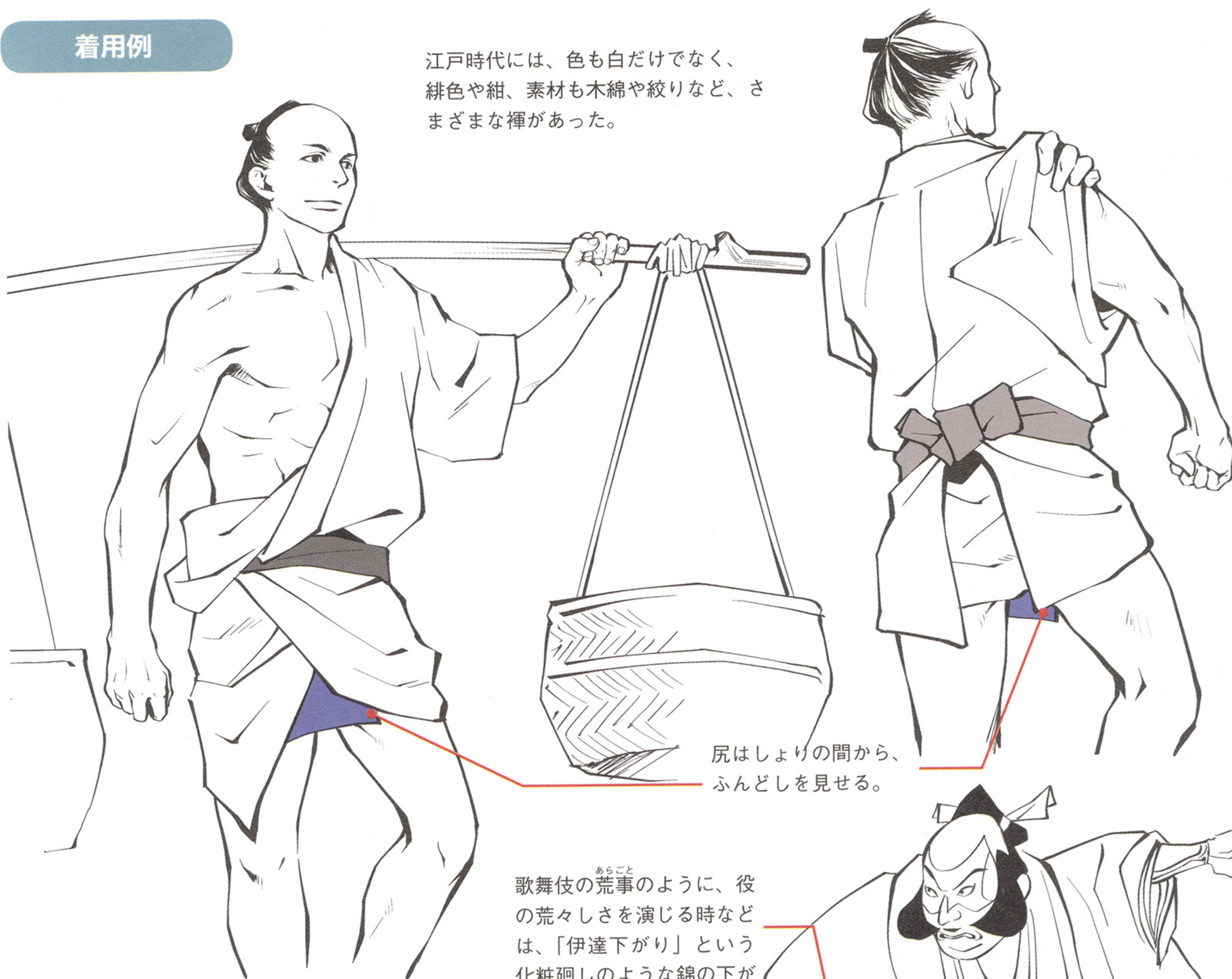
平柄

差柄

丸柄

うちわの描き方

貝殻に近い楕円を意識して下 1/4 の位置に横線を入れる。

窓の部分は一番外側になるところをしっかり描き込む。

14 褌（ふんどし）

日本の伝統的な下着で、江戸時代には「下帯（したおび）」とも呼ばれていました。
褌や脚を見せることも、男性の粋なオシャレのひとつで、現代でも祭事や演芸においては、恥とされません「見せる下着」という、和服において欠かせない要素の一つです。

着用例

江戸時代には、色も白だけでなく、緋色や紺、素材も木綿や絞りなど、さまざまな褌があった。

尻はしょりの間から、ふんどしを見せる。

歌舞伎の荒事（あらごと）のように、役の荒々しさを演じる時などは、「伊達下がり」という化粧廻しのような錦の下がりを見せる。

部位の名称

※例は六尺褌です。

褌（みつ）

横褌（みつ）
（横まわし）

前袋

縦褌（みつ）
（縦まわし）

前垂れ

歌舞伎などの芝居では、着物をはしょったり、割った裾の間から、前垂れを粋で美しくのぞかせるため、端におもりを縫いこむなど工夫をしていた。「武士」は白、「粋な色男」なら赤の羽二重や縮緬（ちりめん）、「町人役」は白のさらしで三角形など、表現の決まりもある。

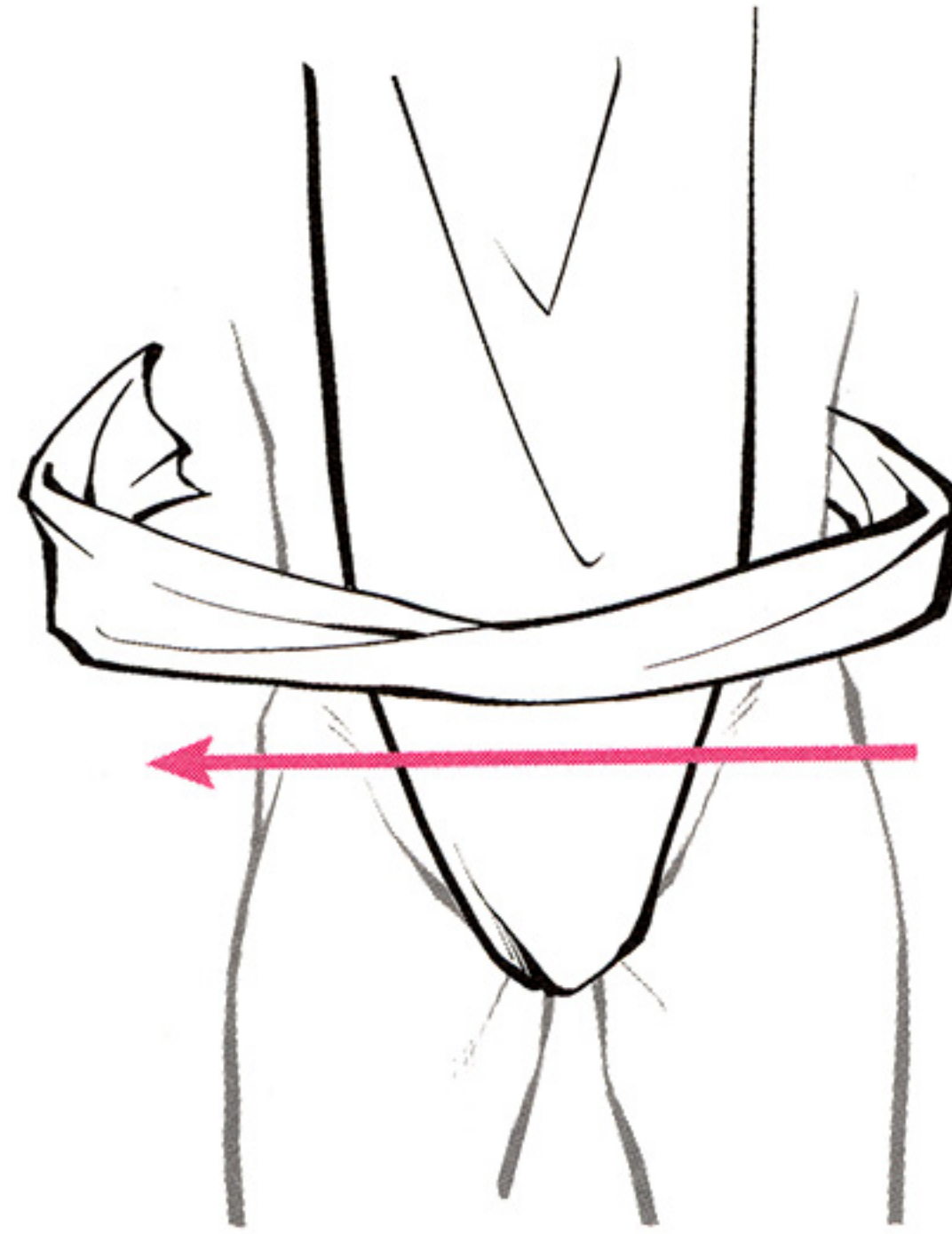
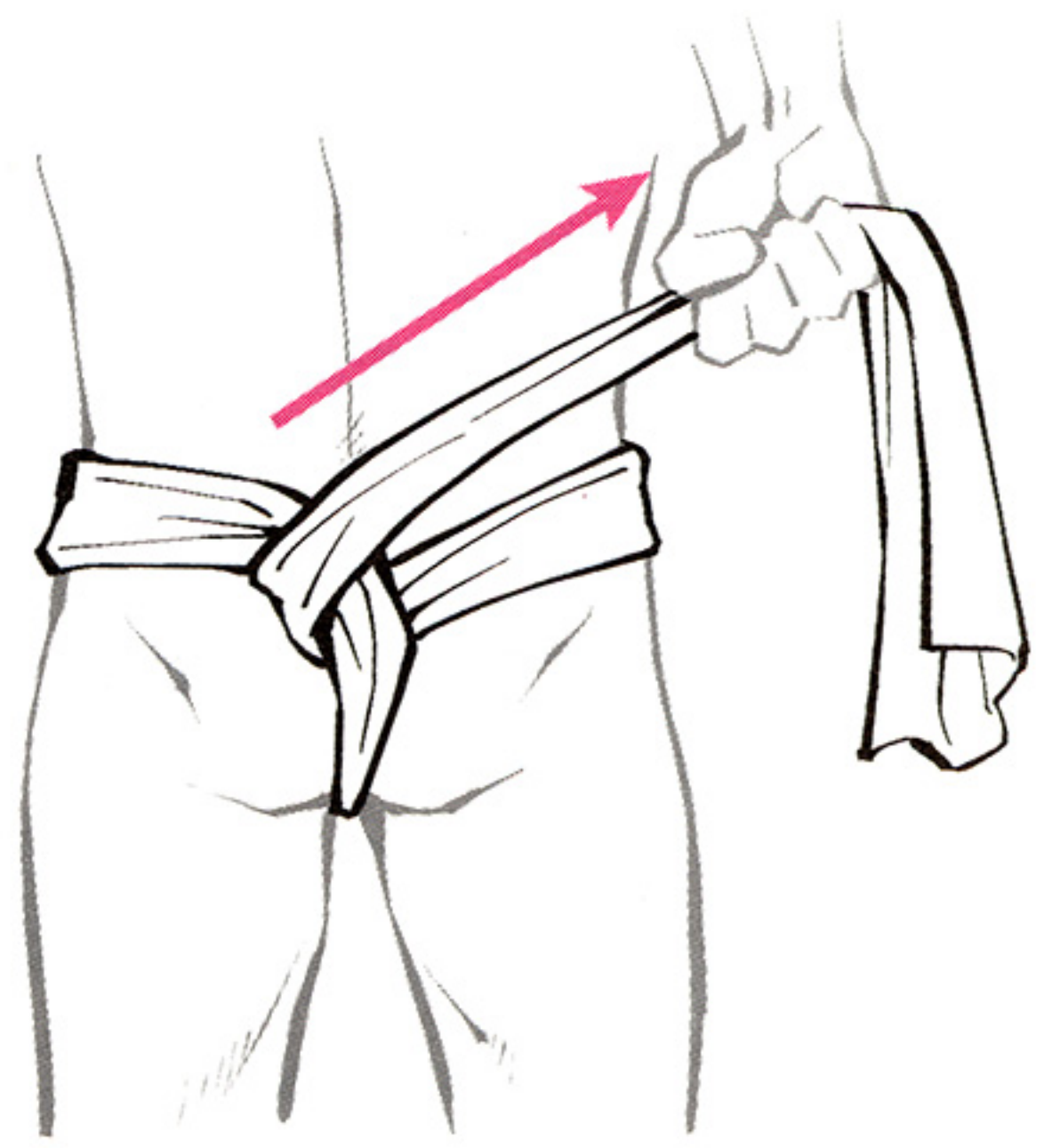
褌の締め方

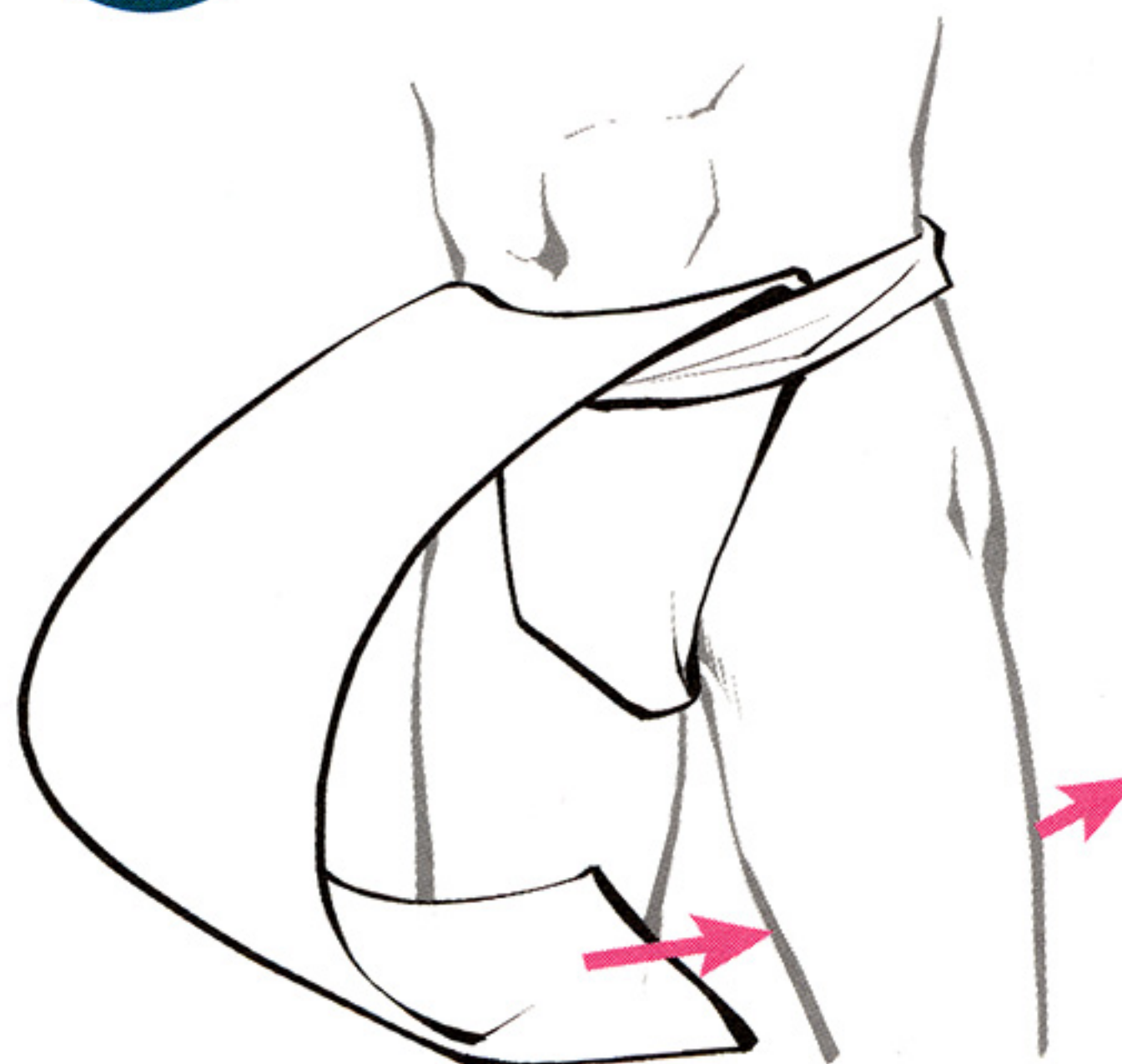
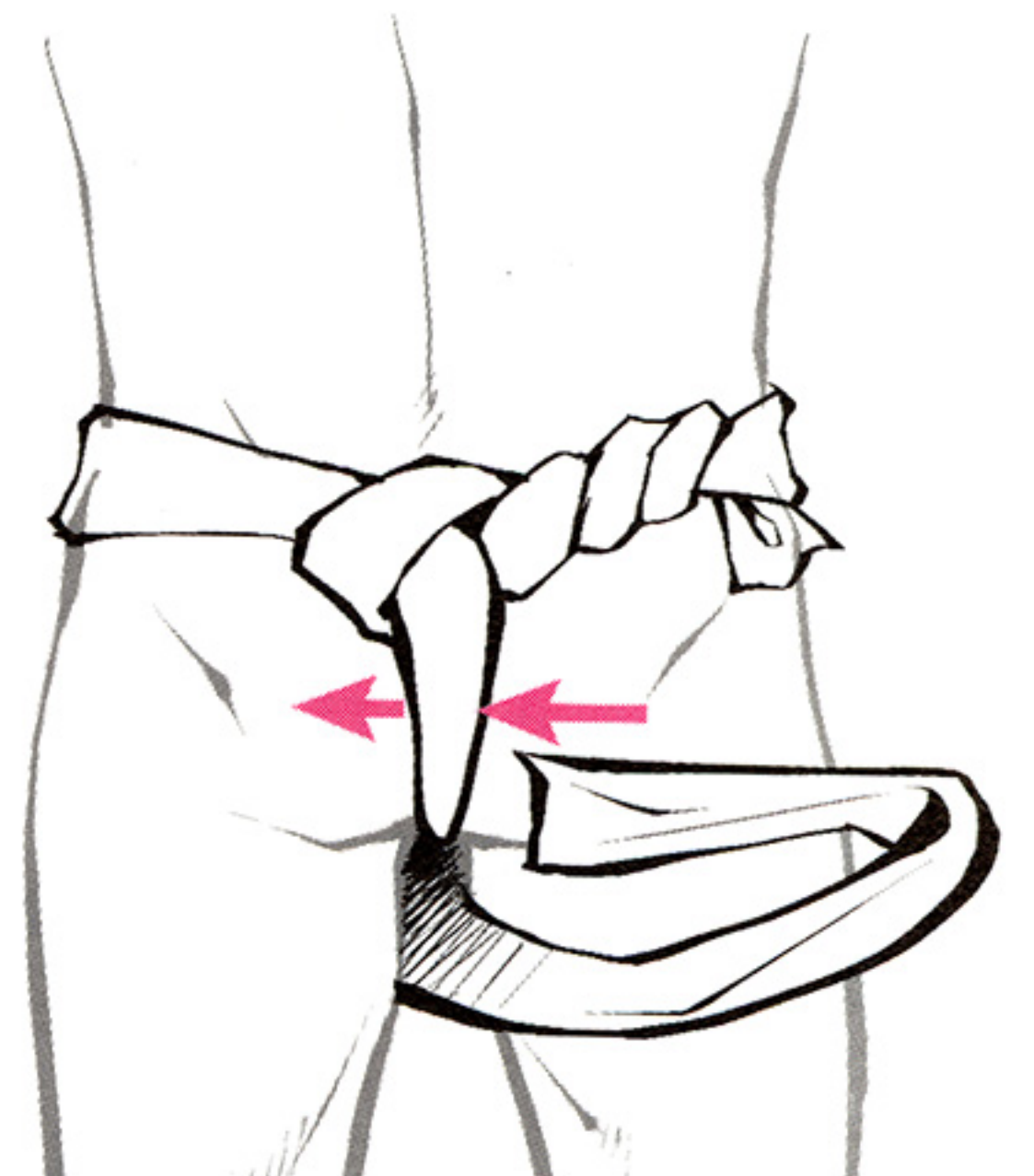
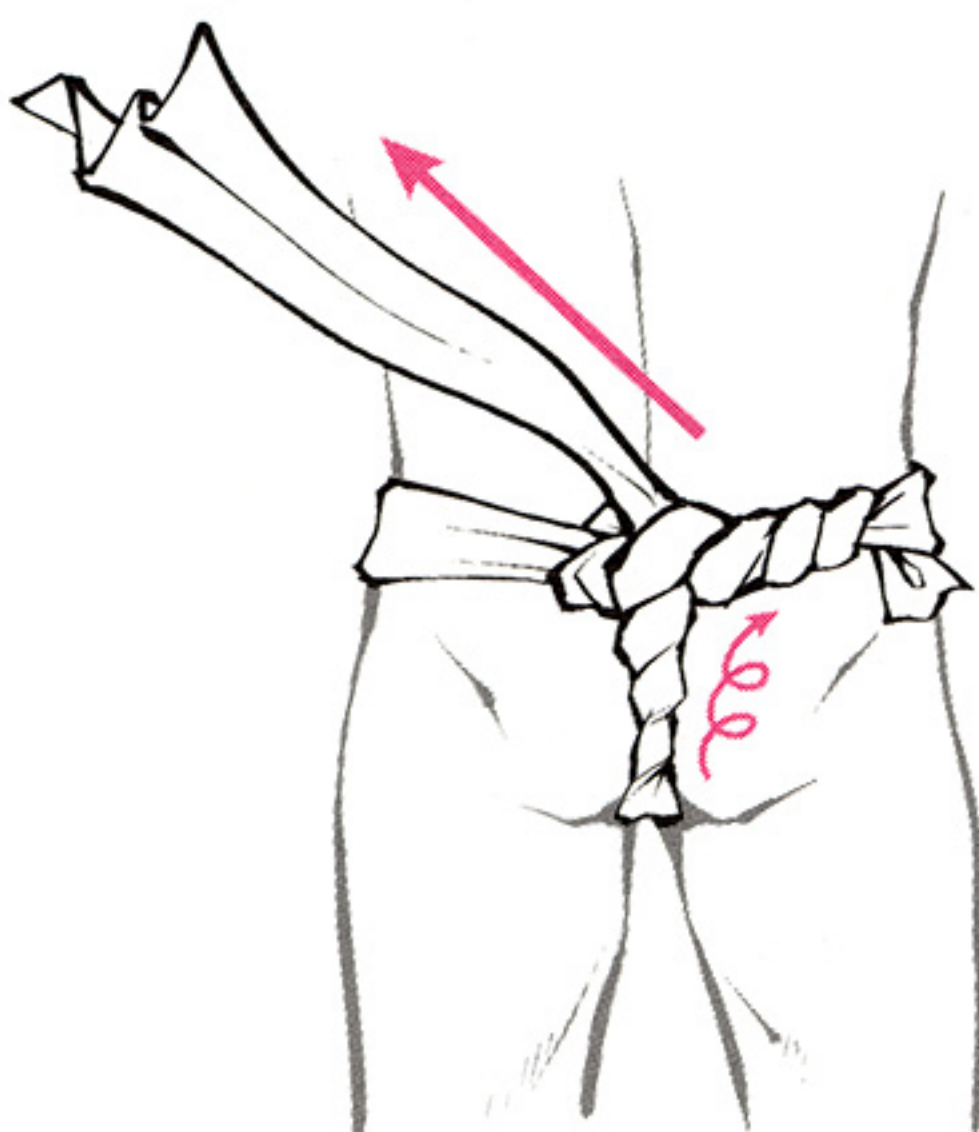
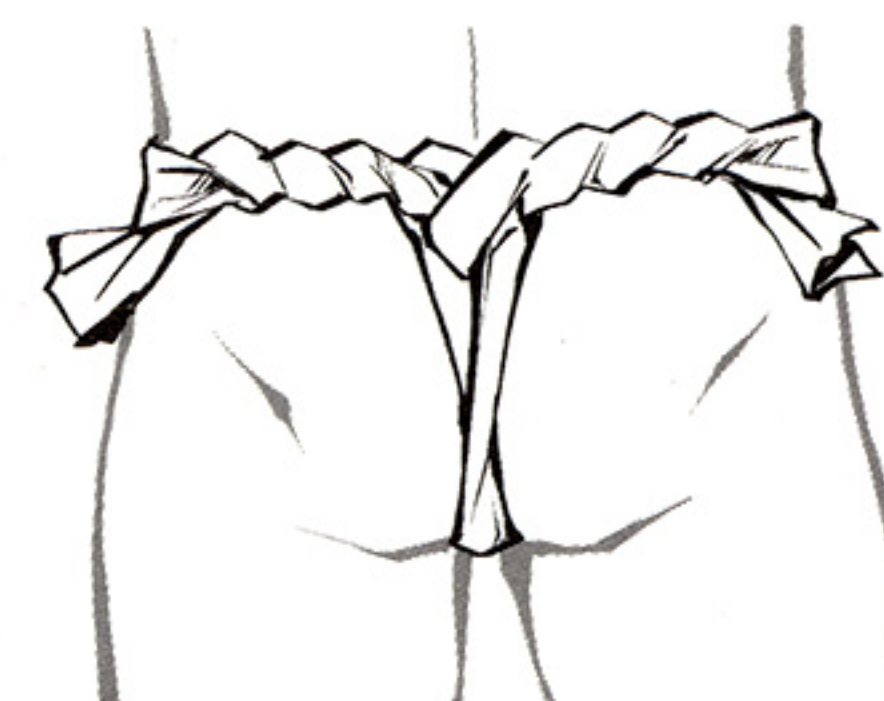
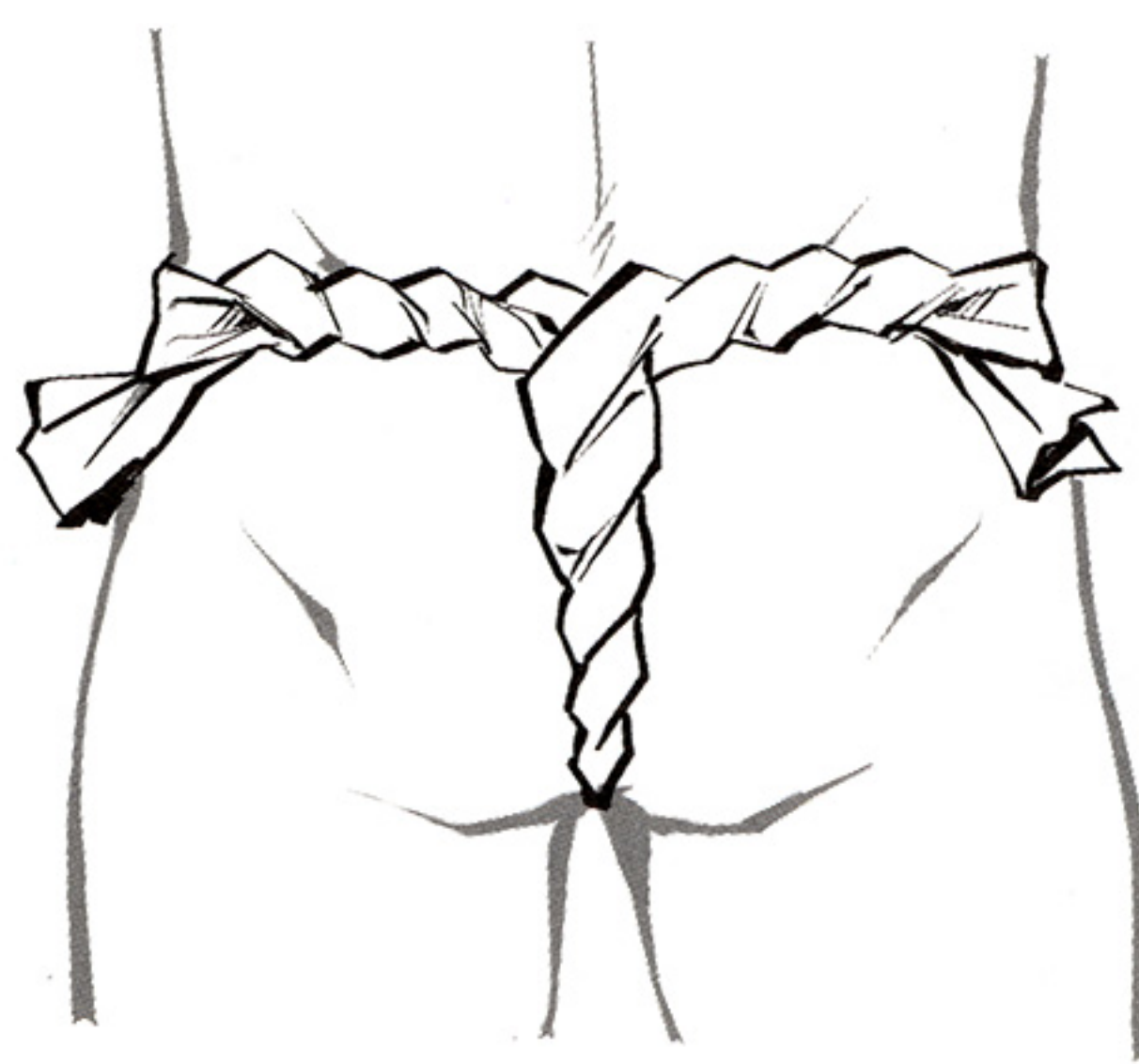
● 六尺褌

長さが六尺（180cm ～ 228cm ほど）ある、ただの切りっぱなしの布。さらし木綿など。

1 端をあごで押さえるか、肩にかけて、もう一方の端を股にくぐらせる。

2 股にくぐらせた方を、横向きにしてお腹にまわす。

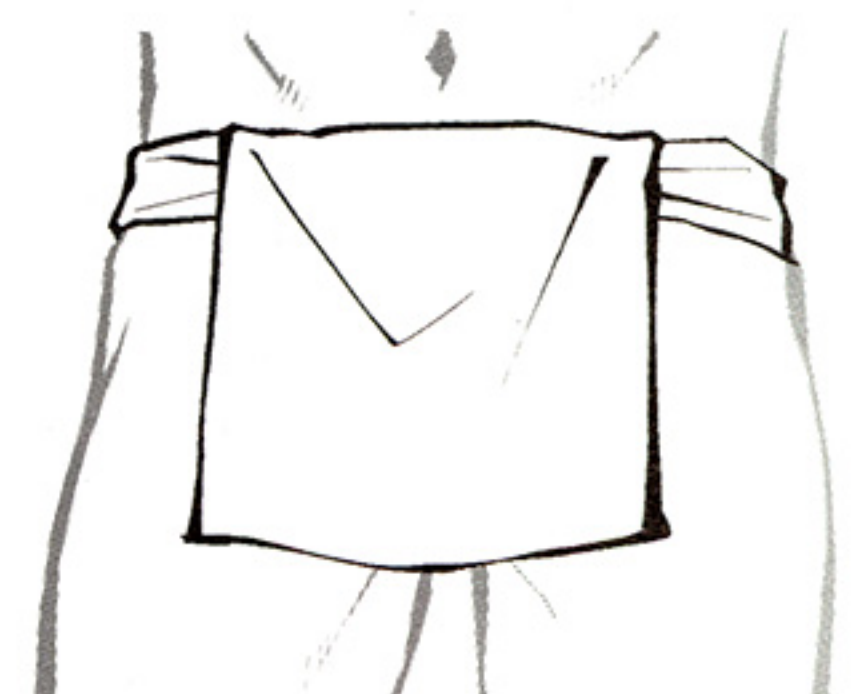
前から見た図

3 横にまわした端を、尻の布にひっかけ、「T」になるようにする。

4 横褌（みつ）にねじこむ。3回以上ねじこむと緩みにくくなる。

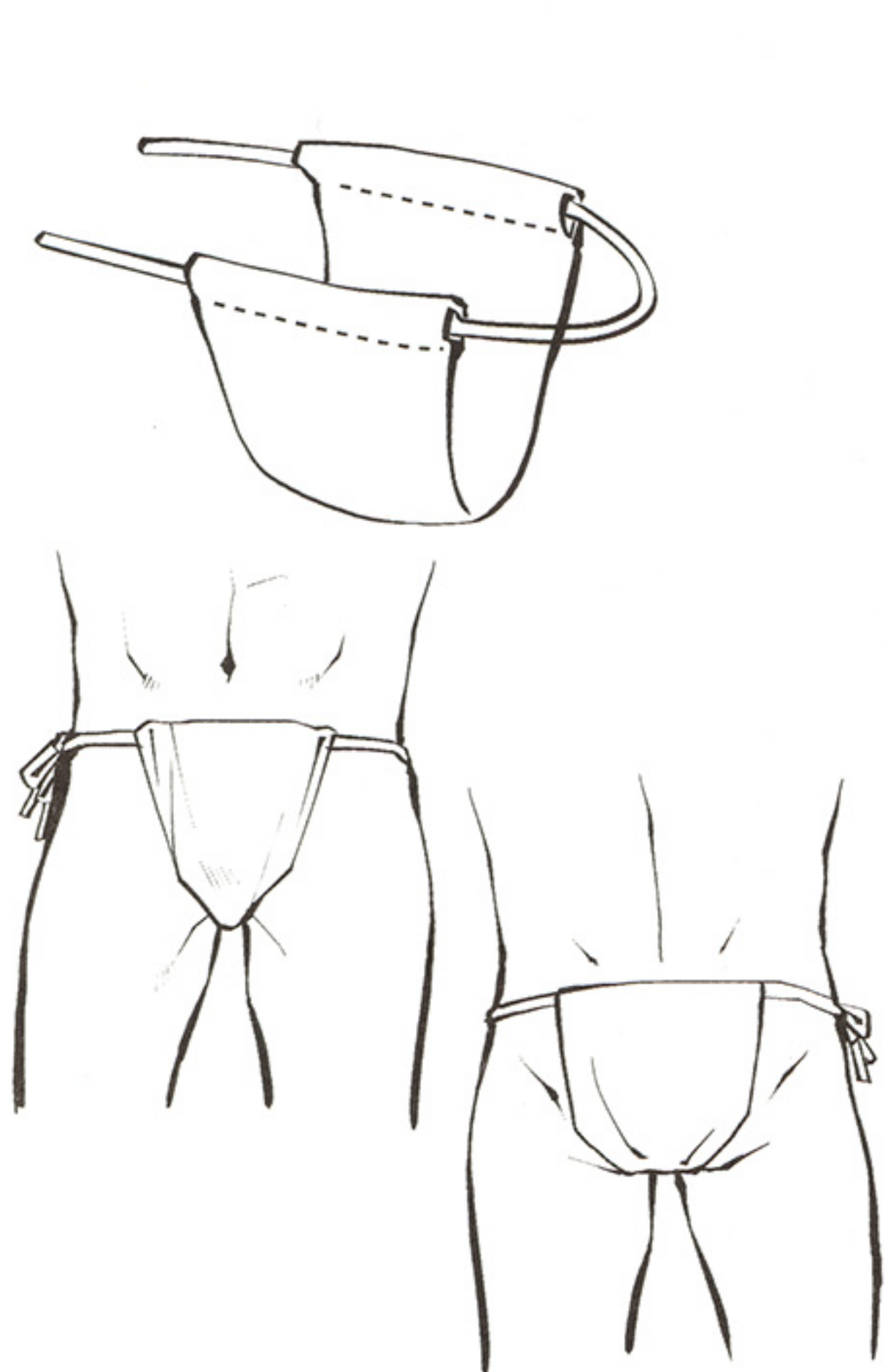
5 あごで抑えていた方を下ろして、股をくぐらせる。

6 縦褌（みつ）にねじこむ。これも3回程度ねじこみ、しっかりと締める。

7 ③でひっかけた「T」の部分から、端を引き抜く。

8 引き抜いた端を、反対側の横褌に3回程度ねじこんで完成。左右対称が美しい。

ここで紹介したのは、一例です。その他、色々なアレンジが可能です。

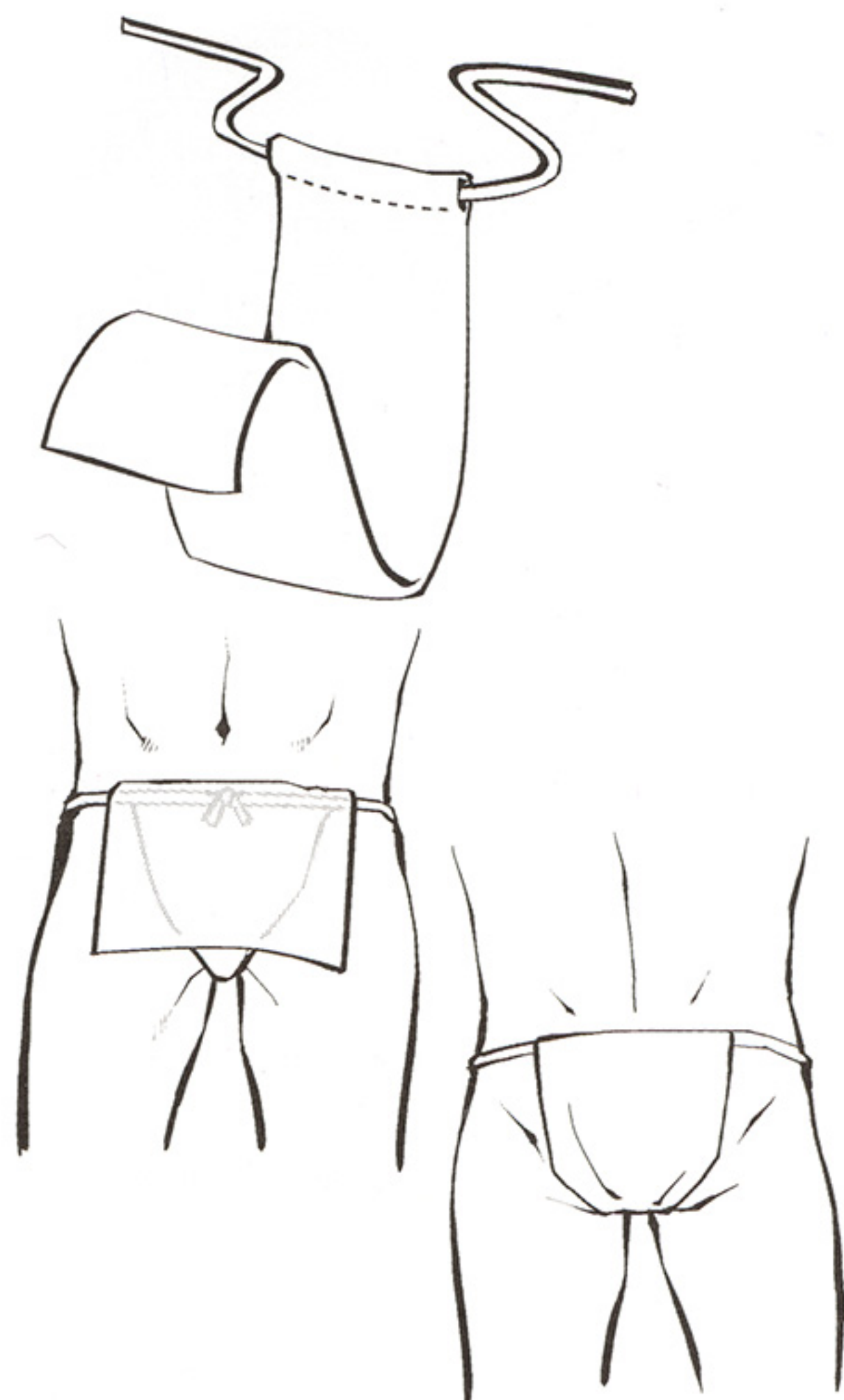
縦褌に、ねじこまないバージョン

前垂れを作るバージョン

褌の種類

● 畚褌（もっこ）

布の端に、紐を通した形。着脱が楽だが、締め付け具合が調整できない。
江戸時代、女形の俳優などがこれを用いたという。

● 越中褌（えっちゅう）

着脱・制作が簡単で、布も少なく経済的なため、洋装化が進んだ明治以降も、日本軍で支給され、使用された。

● 割褌（わり）

鎧の下に着用する褌。首の部分をほどくと緩められるので、鎧や袴などを脱がなくても、用をたすことができた。

もともとは
布の端を
割いて結んでいた。

ONE POINT

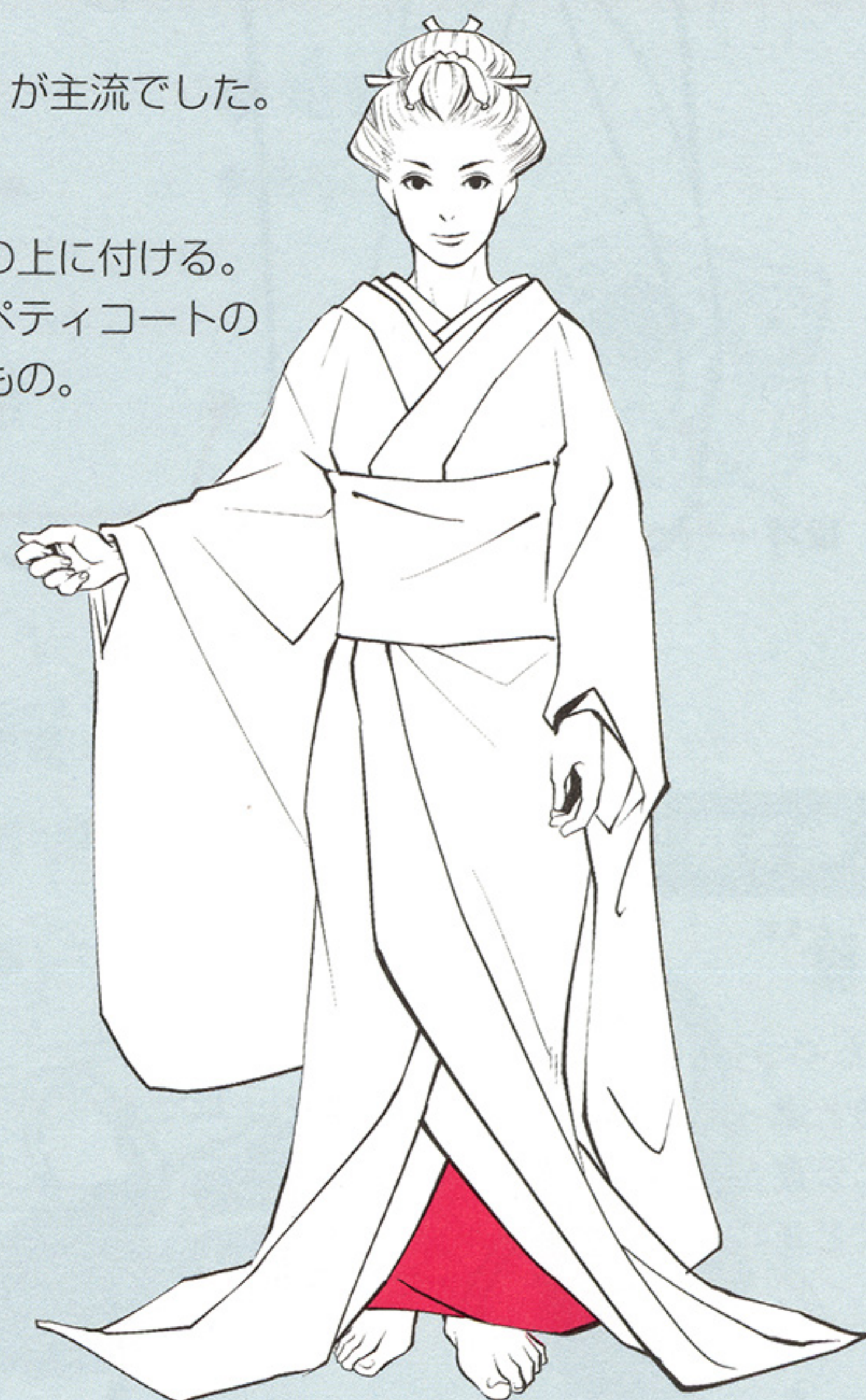
女性の下着

女性の場合は、褌ではなく「湯巻」「湯具」「湯文字」と呼ばれる「巻きスカート型」が主流でした。
（一部、女性も褌を穿いていたこともあります。）

湯文字
反物二幅で作ったので「二布（ふたの）」ともいう。
上方では「脚布（きゃふ）」とも呼ばれる。

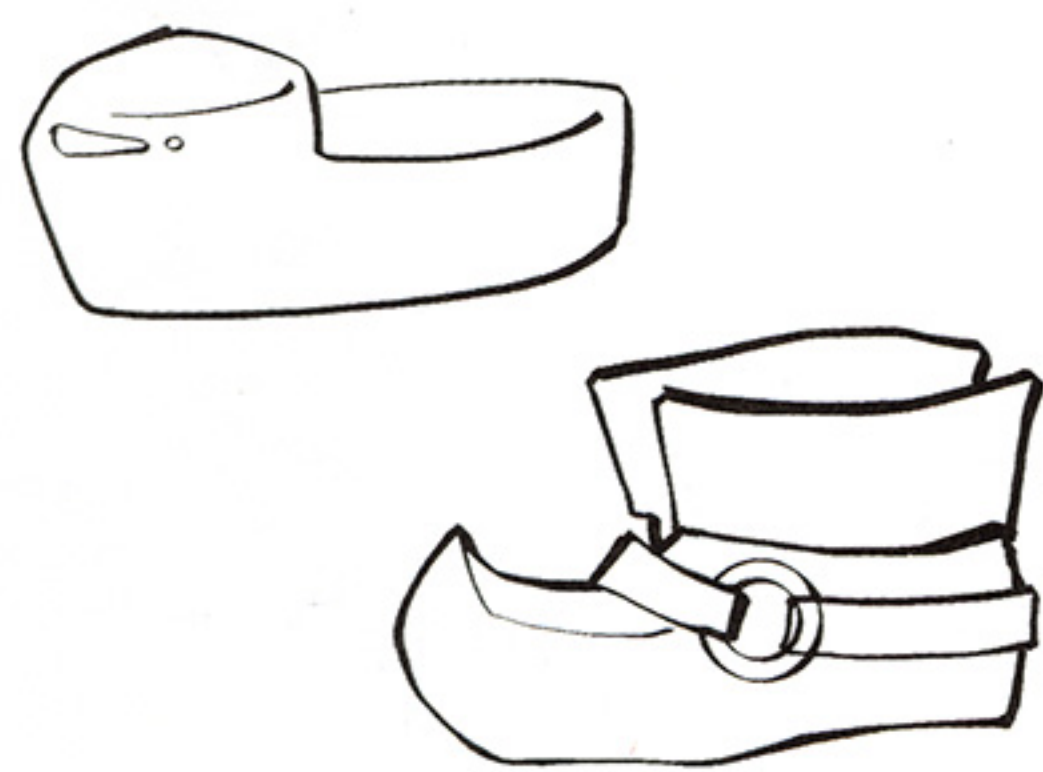
裾よけ
湯文字の上に付ける。現代のペティコートのようなもの。

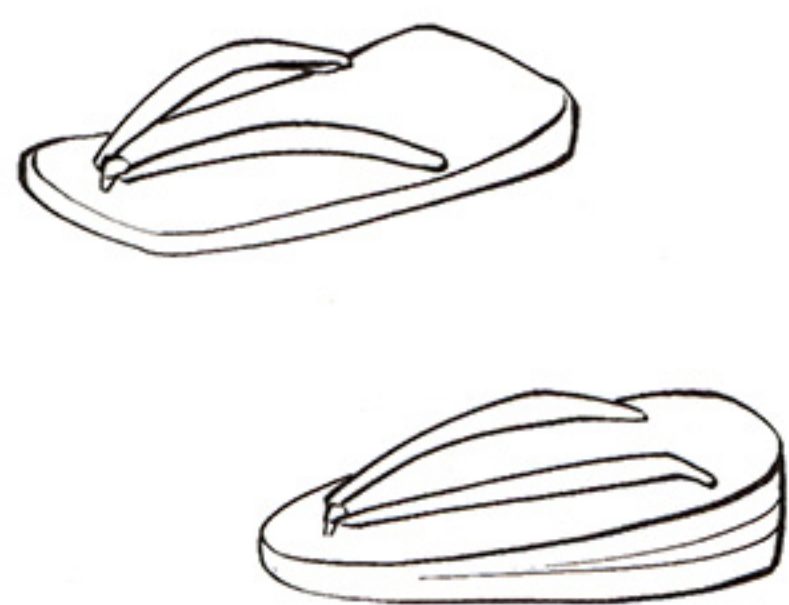
「裾よけ」は「湯文字」が発展し長くなったもので、湯文字の上に着用します。
江戸では、「蹴出し」ともいい、江戸時代後期には、歩くたび着物の間からチラチラ見せるのが大流行、緋色の蹴出しからのぞく白い脚、…という画が流行ります。
「半襦袢」「肌襦袢」などと組み合わせ、「二部式襦袢」、「うそつき襦袢」などともいいます。
ただし現代では、この「裾よけ」を堂々と露出させ歩くことは少なく、色も白や、桃色、浅葱など淡色が主流です。
芸者さん・舞妓さんは今でも緋色の「蹴出し」を見せて歩きます。

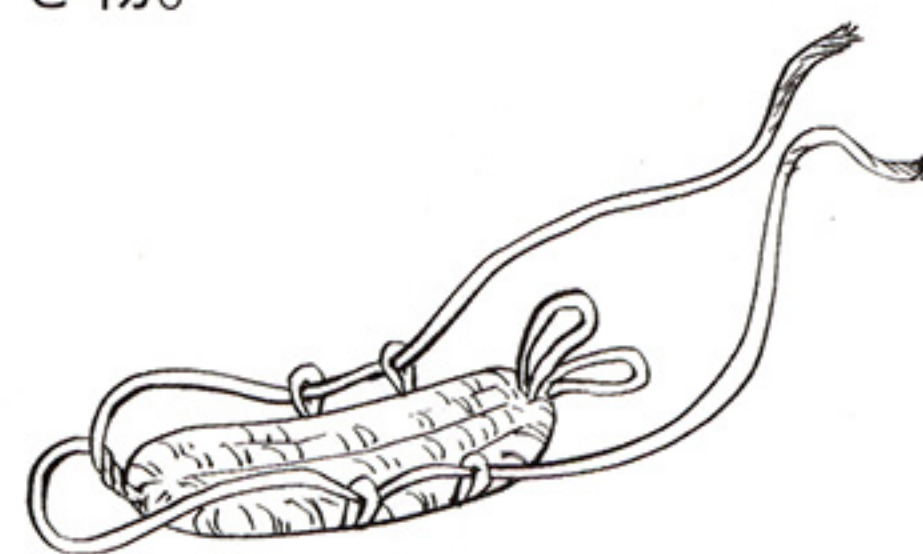
15 履き物

古くは、足の保護が目的で履かれていたと考えられています。平安時代では、装束や身分に合わせて履き物を変えていました。和装の履き物は、大きく分けて「靴（沓）」「草履」「草鞋」「下駄」の4つがあります。それぞれの、特徴などを見ていきましょう。

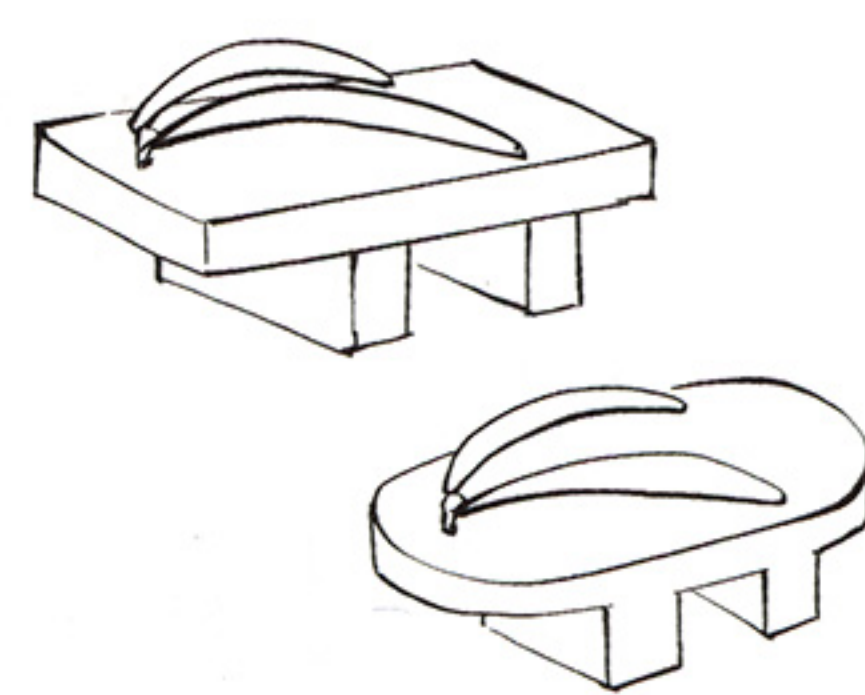
履き物の種類

● 靴（沓）

皮や布でできた、足を包む履き物。公家・上級武家の正装などで履かれた。

● 草履

台と鼻緒で構成された、草・革製の履き物。

● 草鞋

台と長い鼻緒で構成され、長い鼻緒を足に巻き付けて履く、遠距離歩行・労働用の履き物。

● 下駄

台と鼻緒で構成され、歯がある木製の履き物。

部位の名称

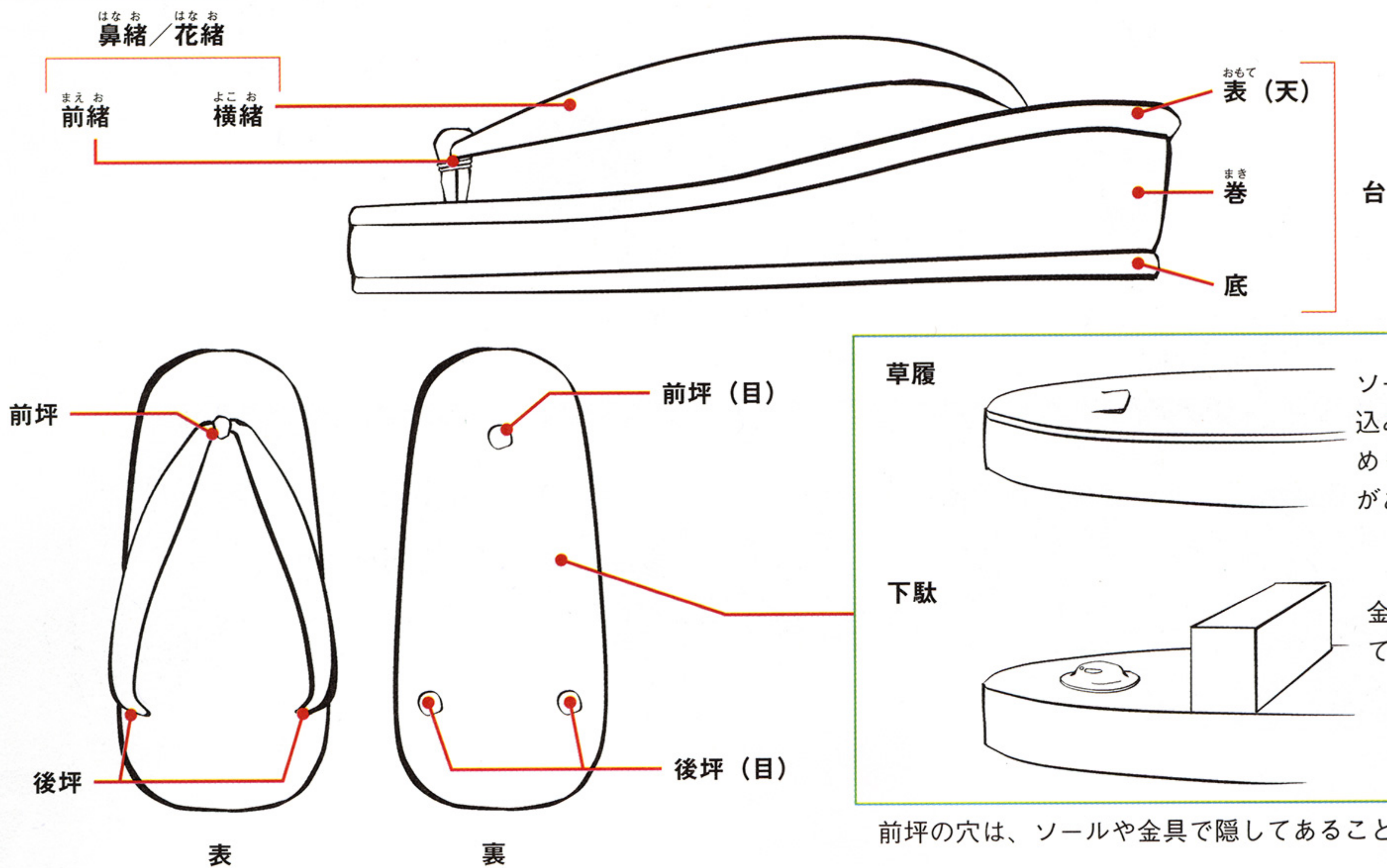
時代・地域によって異なります。ここでは女性物の草履を例に説明します。

鼻緒／花緒
前緒
横緒
表（天）
巻
底
台

前坪
後坪
表

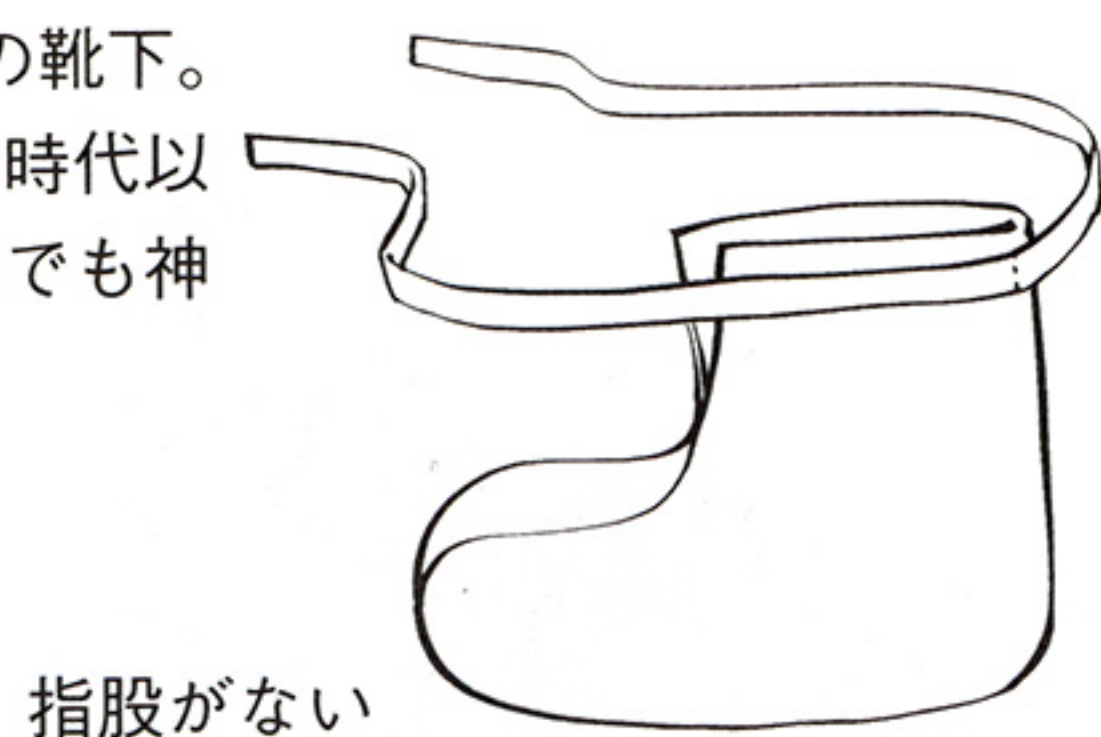
前坪（目）
後坪（目）
裏

草履
ソールに切れ込みがあり、めくると前坪がある。

下駄
金具で隠されている。

前坪の穴は、ソールや金具で隠してあることが多い。

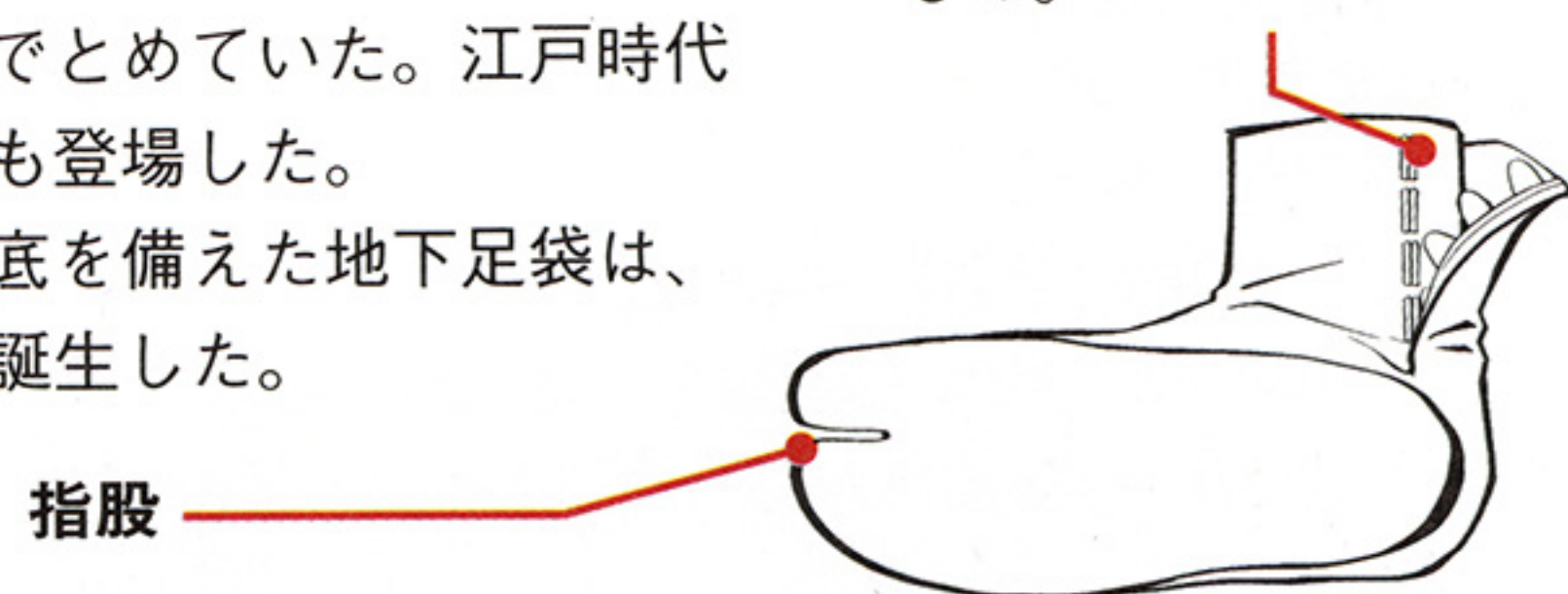
靴下類

● 襪

「したぐつ」とも呼ばれる、絹製の靴下。足袋と違って指股がない。平安時代以前に公家が履いた。また、現在でも神職などがこれを用いる。

指股がない

● 足袋

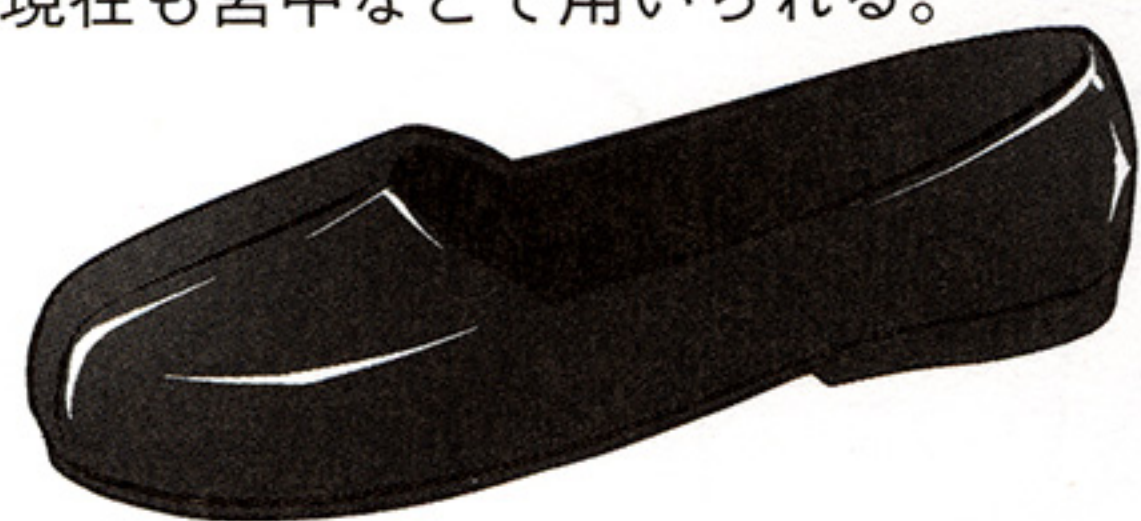
古くは革製、絹製、麻製、などで、小鉤ではなく紐でとめていた。江戸時代以降に木綿製も登場した。
ソールにゴム底を備えた地下足袋は、大正時代ごろ誕生した。

鞐（小鉤）
足首の内側（親指側）にある、足袋をとめるもの。

指股

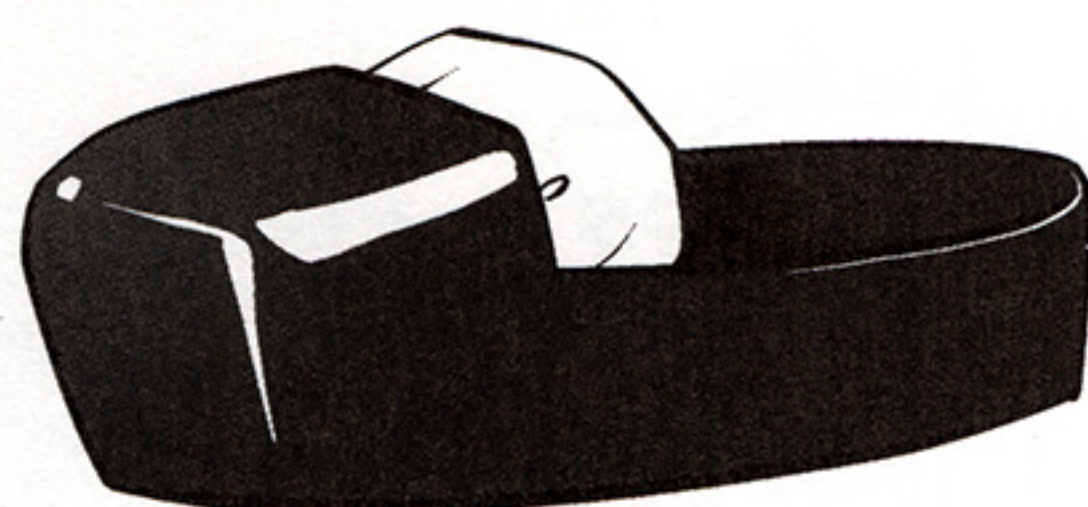
靴（沓）

公家の装束や、中世までの武家の正装に使われる大陸風の靴。
現在でも宮中や神職、舞楽の世界で使われています。

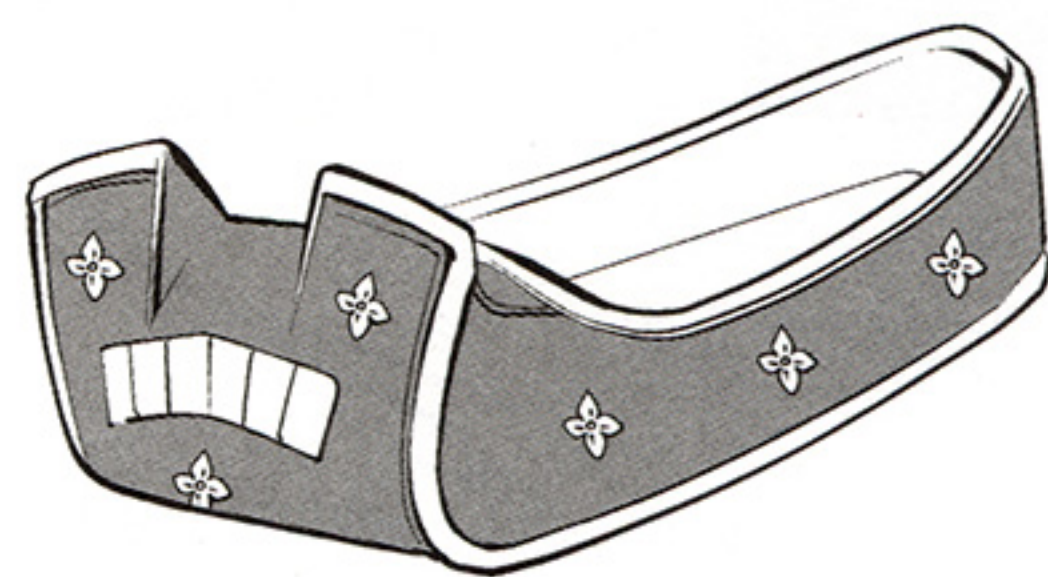
● 烏皮履（くりかわのくつ）

「うひり」とも呼ばれる。
文官の朝服に用いられた革製の靴。後に木製の「浅沓」に変化する。
現在も宮中などで用いられる。

硬いのでクッションと中敷きを入れて履く。

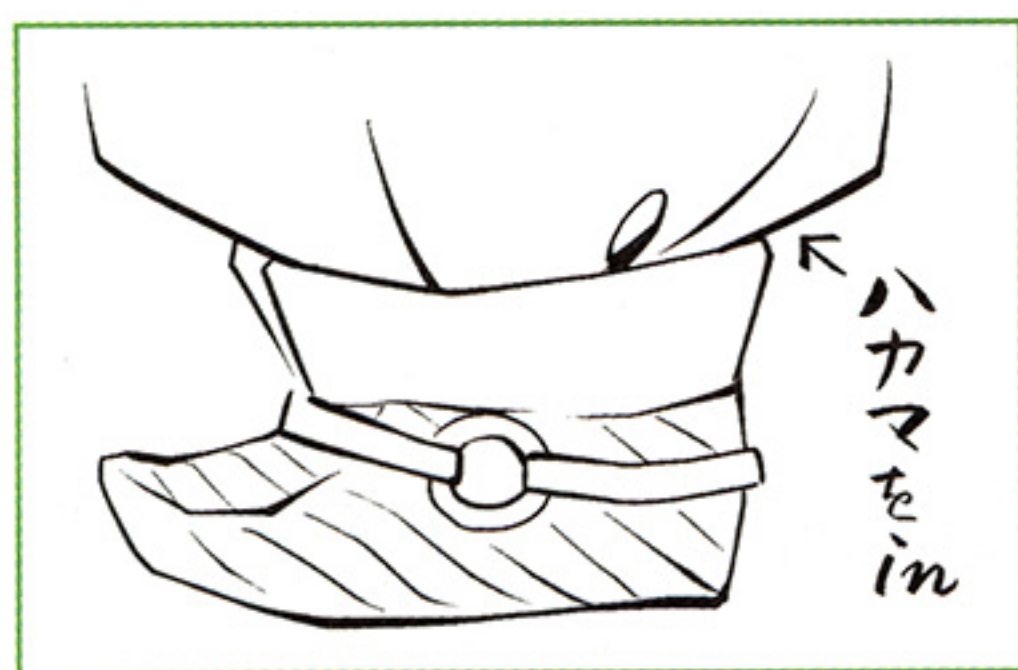
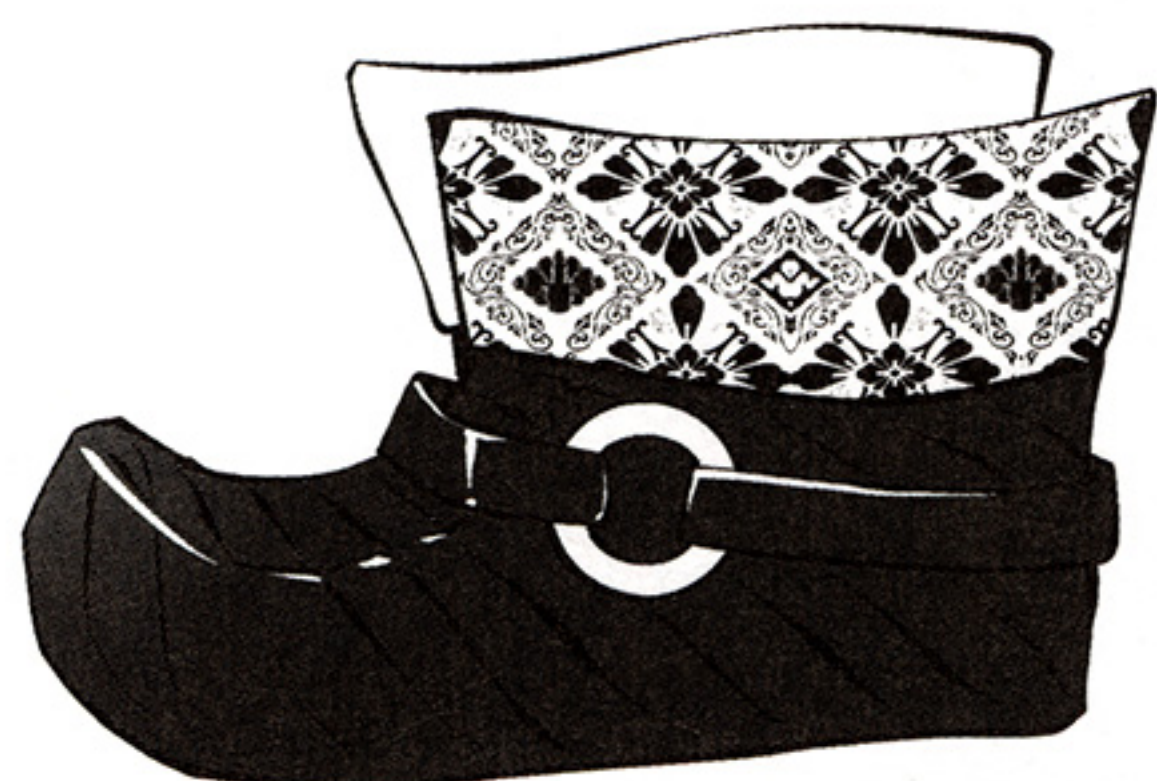
● 浅沓（あさぐつ）

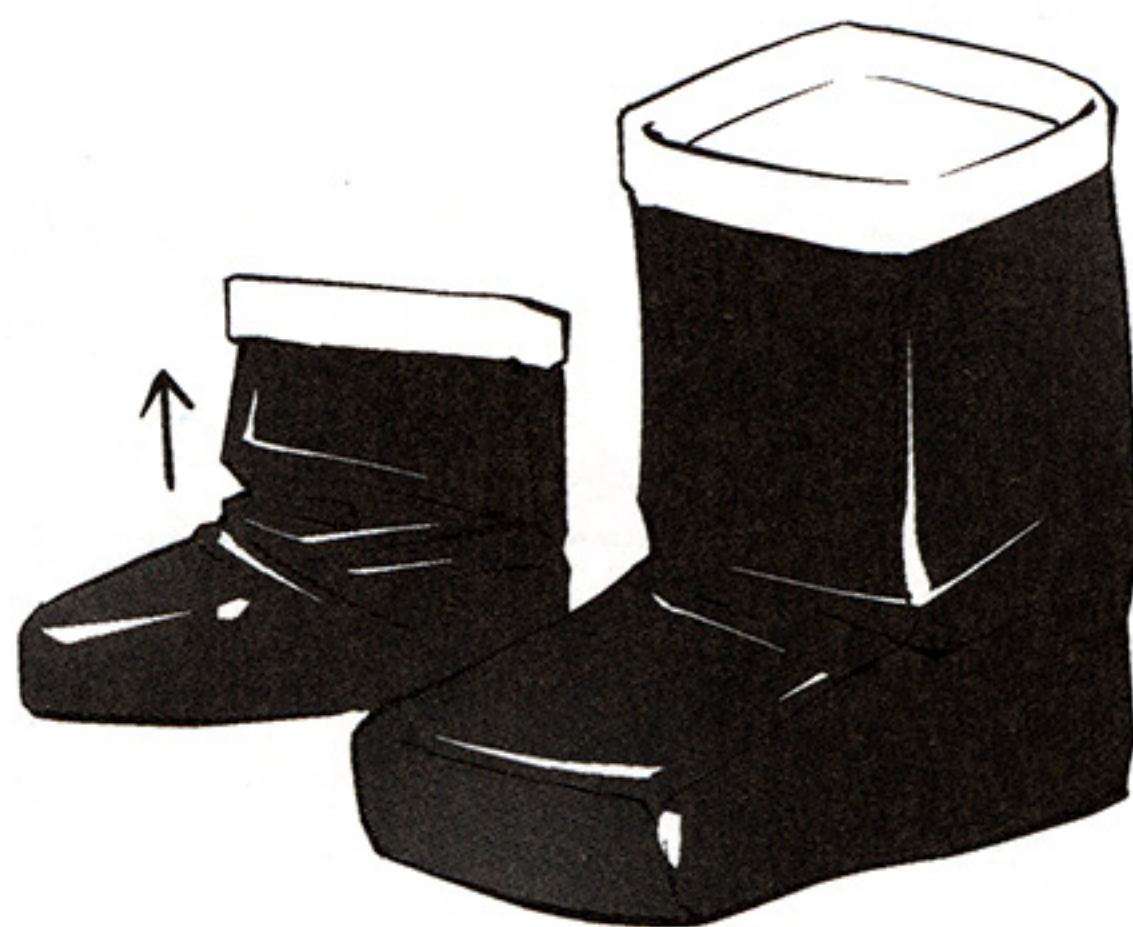
文官が束帯用に用いた。
「烏皮履」が変化したもの。
桐製や張子に漆塗りで作られている。

烏皮履と同様、クッションと中敷きを入れて履く。

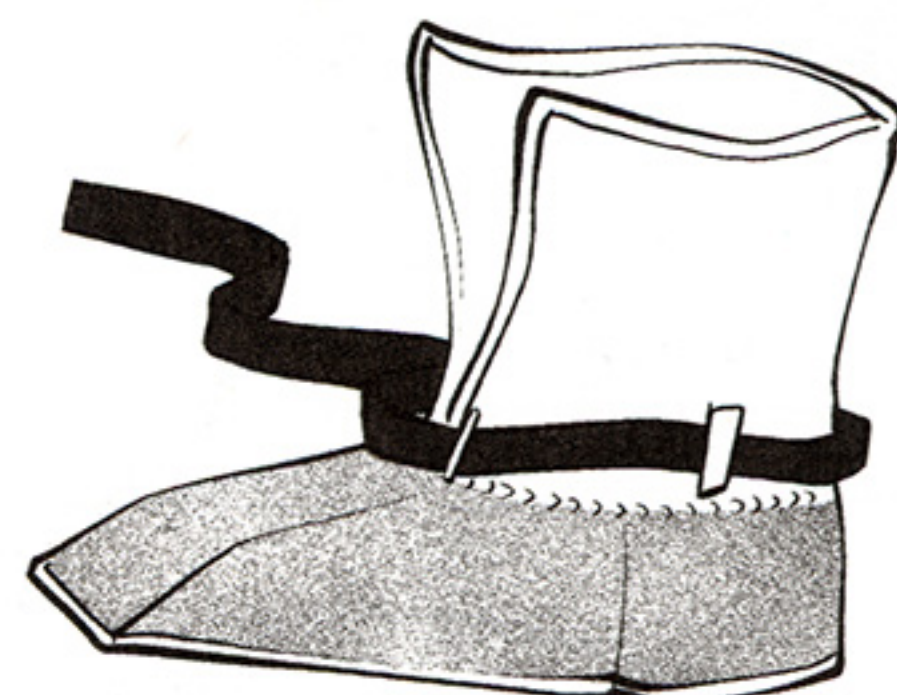
● せきのくつ

皇太子や諸臣の礼服用に用いられた、浅い革製の靴。
女性用などもある。

● 靴の沓（かのくつ）

束帯の時に履く。文武共に用いるが、特に武官束帯には必需品。
着用時は袴を中に入れる。
上部の錦部分を「靴氈（かせん）」といい、標準は赤地だが、若年者や検非違使は青地のこともある。

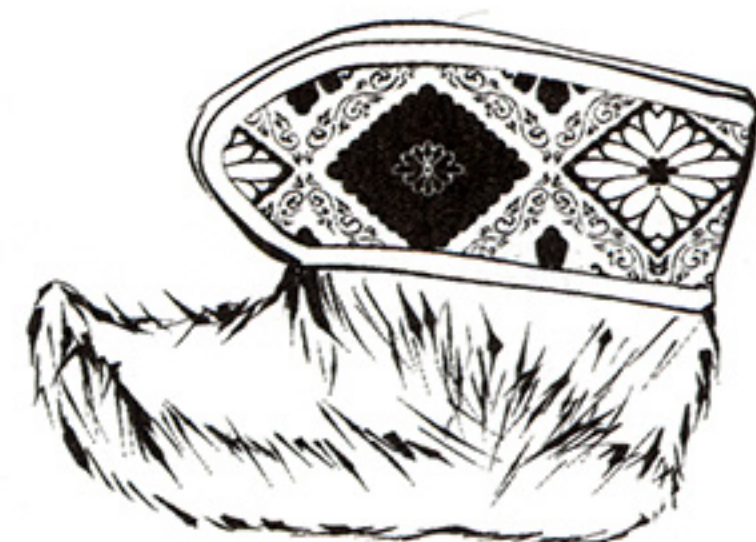
ハカマをin

● 深沓（ふかぐつ）

雨天・雪天用の長靴。
上下に延ばせるようになっている。

● 鞠沓（まりぐつ）

蹴鞠用。

● 半靴（ほうか）

公家の略衣に用いる。

● 毛沓（けぐつ）

騎馬用。

● 絲鞋（しかい）

下級武官が履いた、白い絹糸で編んだ靴。下級武官の履物は他にも、苧麻製の「麻鞋（まかい）」から藁製の「草鞋（わらうず）」へと変化する。
現在は、皇族の成人式や舞楽に用いる。

● 頬貫（つらぬき）（綱貫（つなぬき））

武士が戦や乗馬の際に用いた。熊，牛，猪などの毛皮製。
緒を足の裏へ回して、足の甲で結んで履く。

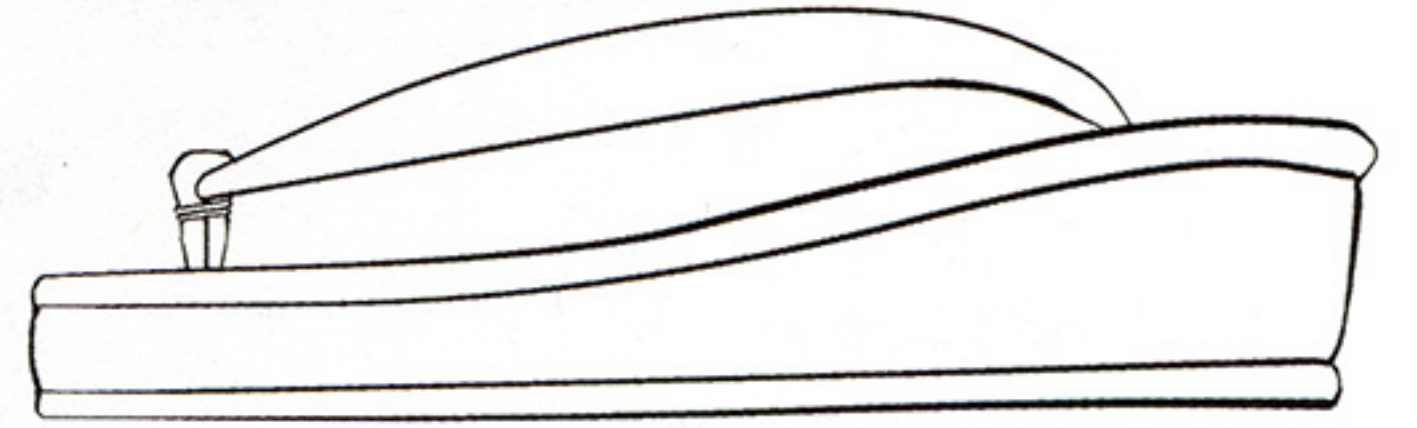
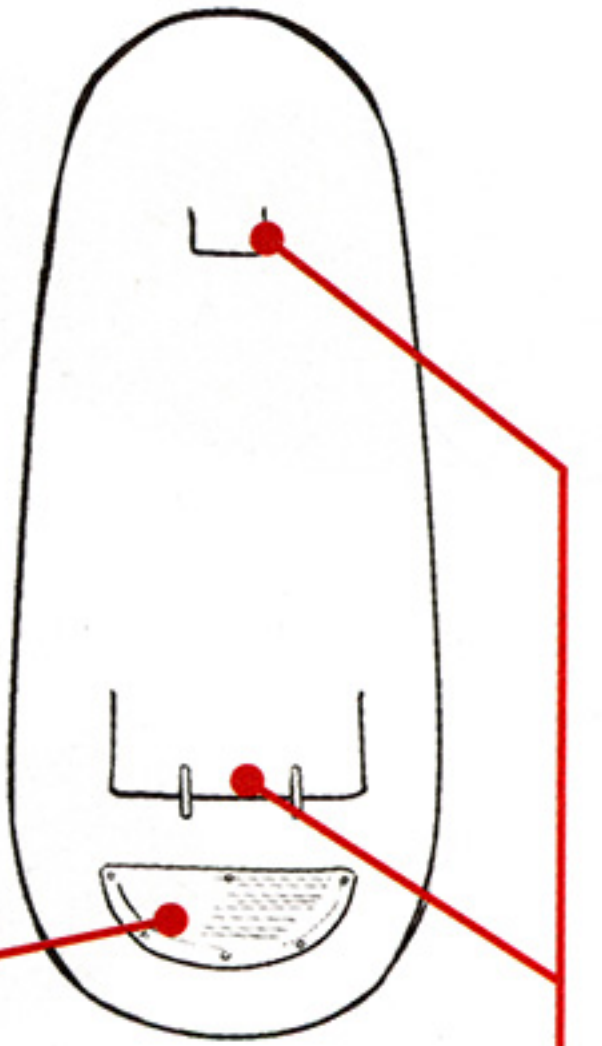
草履

下駄よりも正装。

真横

表

裏

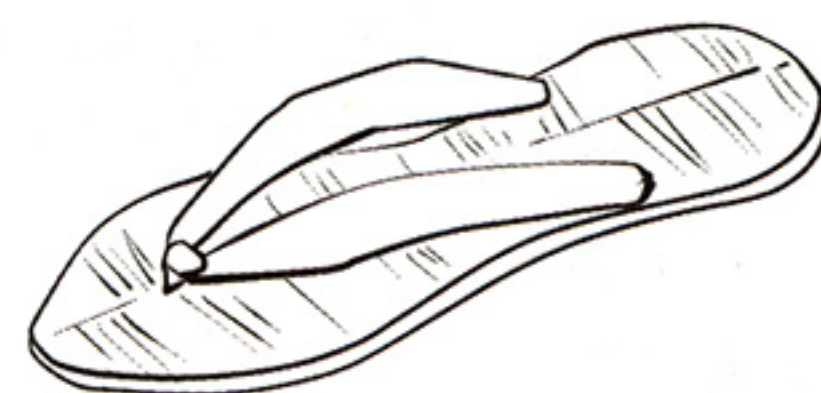
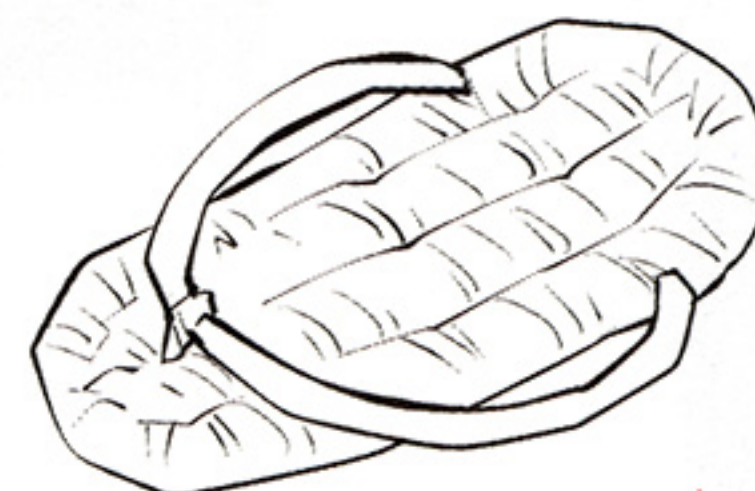
台が分厚く、かかとが高いものほど格が高いといわれている。

現在のものには、かかと部分に、ゴムがついているものもある。

ソールの切れ目をめくると「坪」がある。

色々な草履

台の厚さ、形はさまざま。

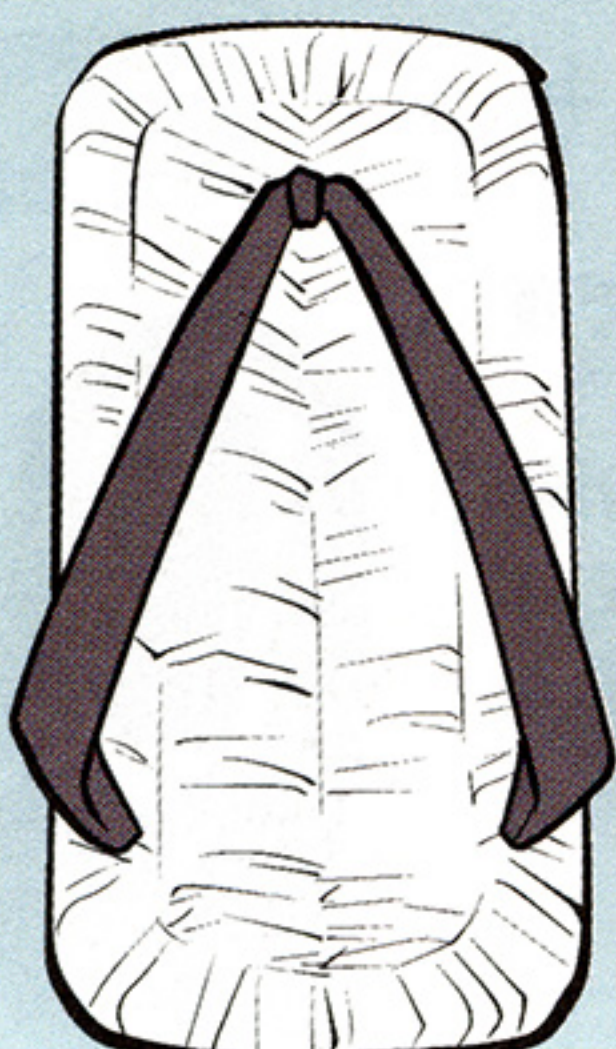
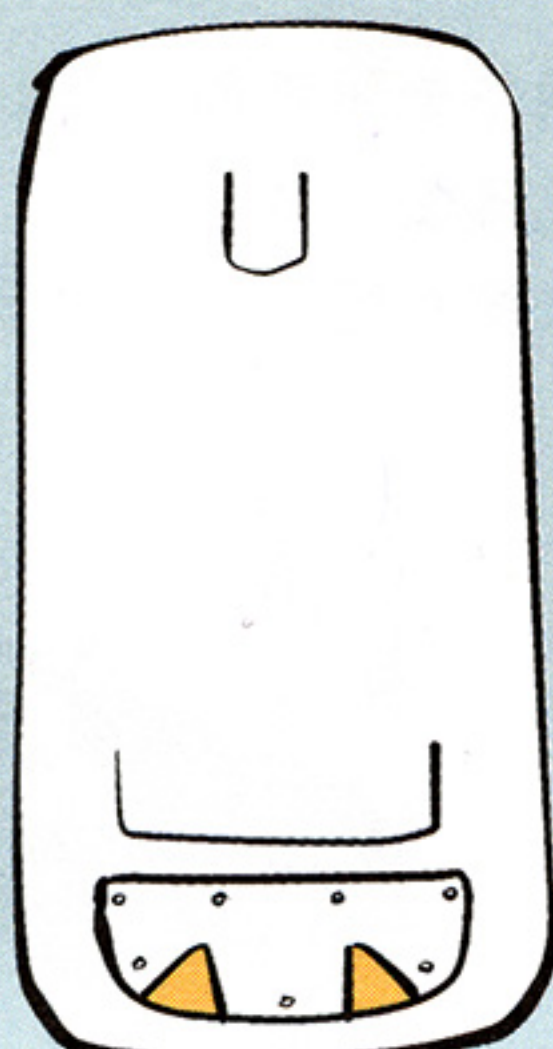
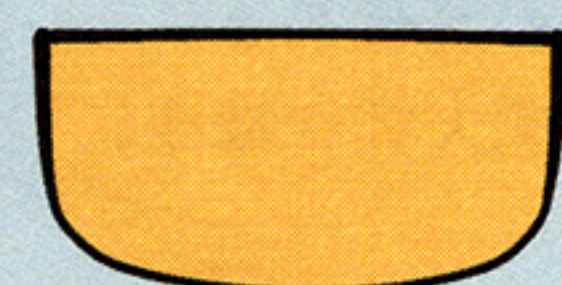
部屋草履
大奥や吉原などで使われた、室内用。

時雨草履
雨天用につま先を水や泥から守る爪皮（つまかわ）（ビニールや皮製のカバー）がついている。

金剛草履（こんごうぞうり）
とても安価だったことから、「二束三文」という言葉の語源といわれる。

藁草履（わらぞうり）
草鞋と同じ藁製だが、鼻緒で履く物は「ぞうり」と呼ばれる。

尻切（しきれ）／足半（あしなか）
かかとの部分がない。
または履き古してかかと部分がすり切れてしまっているもの。

ONE POINT

雪駄（せった）
現在は男性が履くことが多い草履です。
表は棕櫚（しゅろ）や竹皮などを使用し、裏面は革などで防水性をもたせ、かかと部分に金具がある。
かかとの金属が、歩くと「ちゃらちゃら」と鳴る。

表

裏

薄いので「軽装履き」とも呼んだ。

裏の金属部分を「尻鉄（しりがね）」といい、さまざまなものがある。尻鉄を付けない人もいる。

15

草鞋

草履は手作りの消耗品なので、編んだ人、また地方によって形も呼称もさまざまなものがあります。

農村においては、一晩に何足作れるかが、成人としての大きな目安とされた。
旅ともなれば１日に２～３足は、履きつぶれる（３～４里で一足消耗する）。
まさに消耗品である。

横

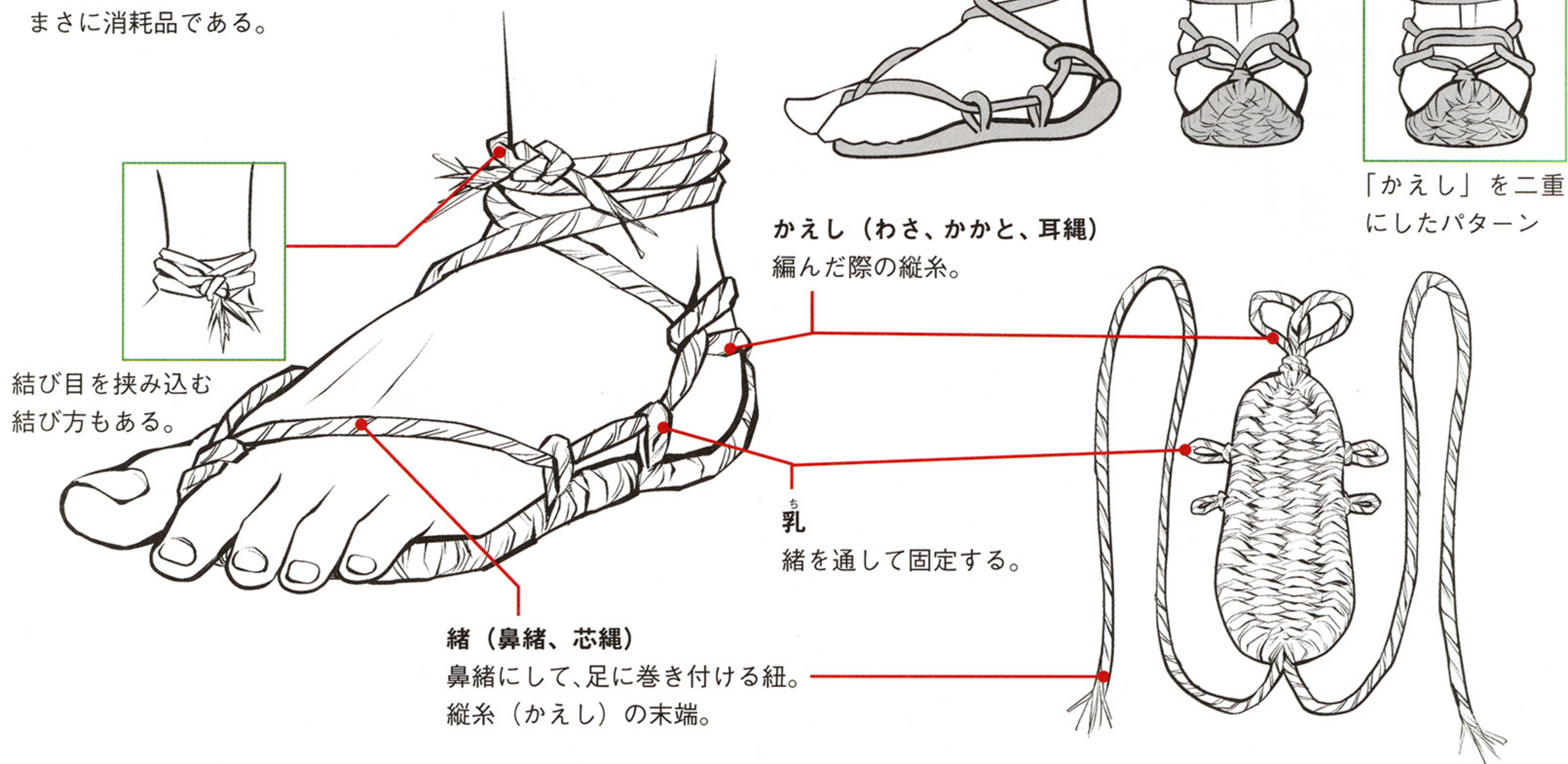
後

「かえし」を二重にしたパターン

結び目を挟み込む結び方もある。

かえし（わさ、かかと、耳縄）
編んだ際の縦糸。

乳（ち）
緒を通して固定する。

緒（鼻緒、芯縄）
鼻緒にして、足に巻き付ける紐。
縦糸（かえし）の末端。

草鞋の結び方

草鞋の結び方も、地方・用途・身分で千差万別。労働内容や土質などによっても違い、この他にも全国にさまざまなものが伝わっています。

かえしに通したあと、戻って緒にひっかけて、足首に巻き付けたパターン。

図のように「かえし」を長く編み、かえしを乳に通すタイプもある。

後ろの乳にかえしを通し、そこに緒を通してから、足首に巻き付けたパターン。

緒を反対側の緒にひっかけて、足首に巻き付けたパターン。

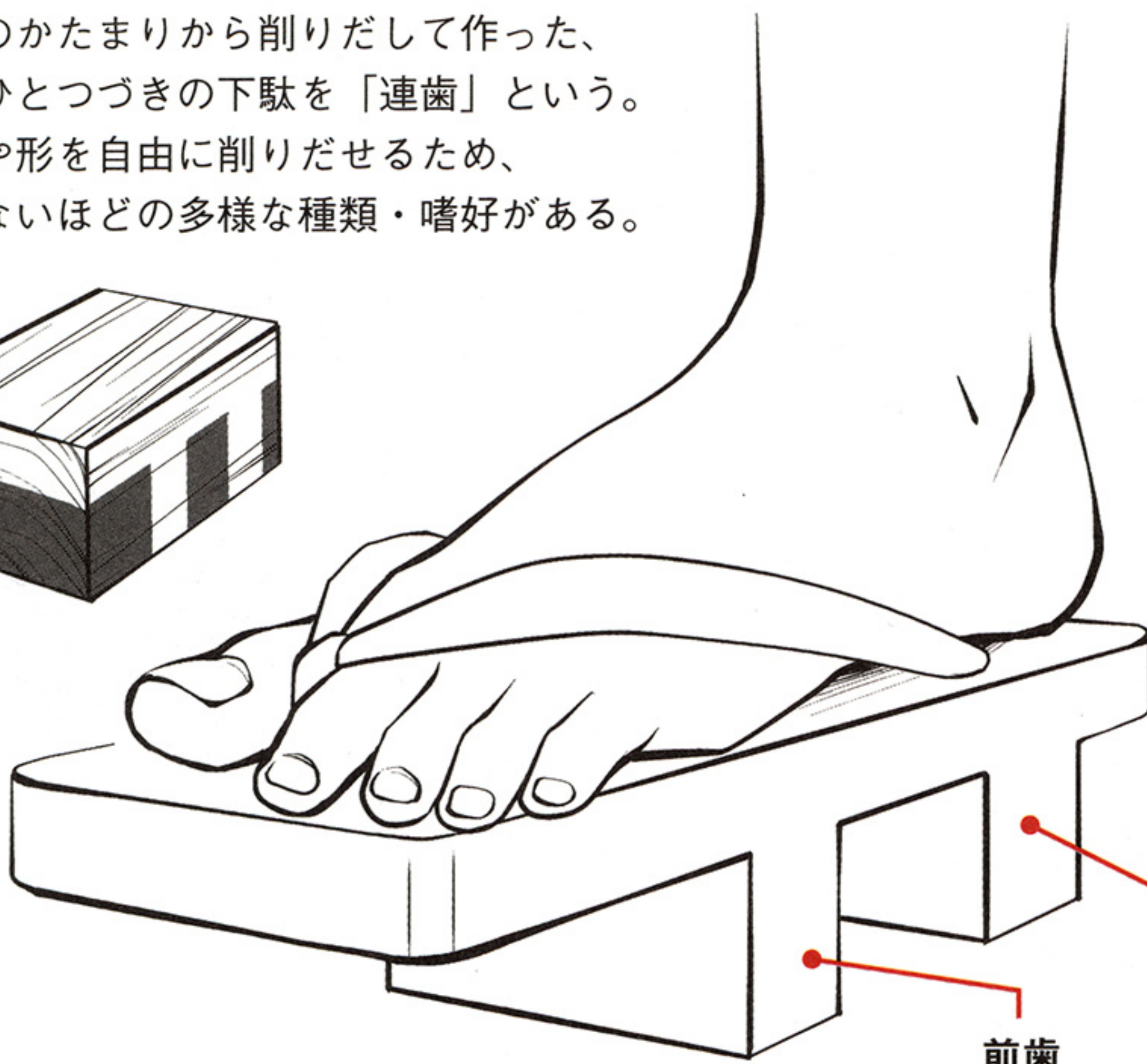
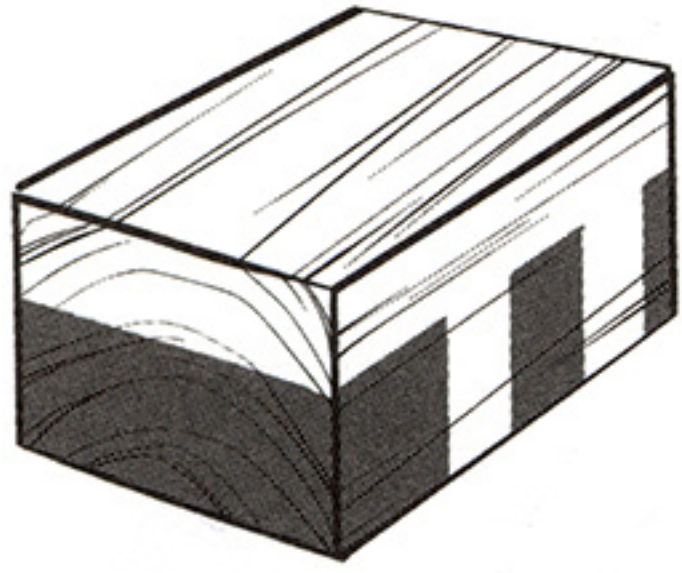
緒を足の下（土踏まず）に通したパターン。

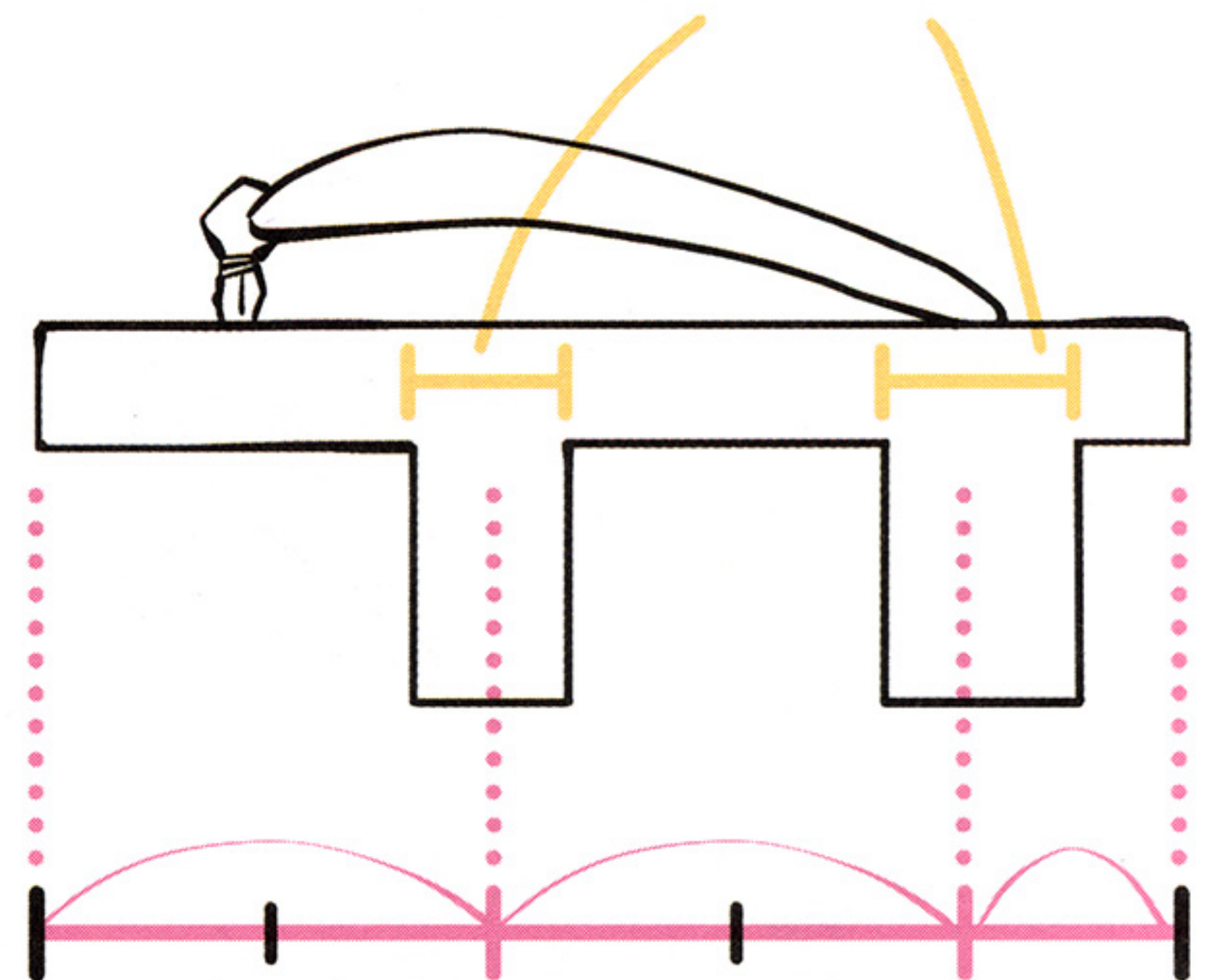
上と同じ手順で足首に巻く前にかえしに引っかけているパターン。

下駄

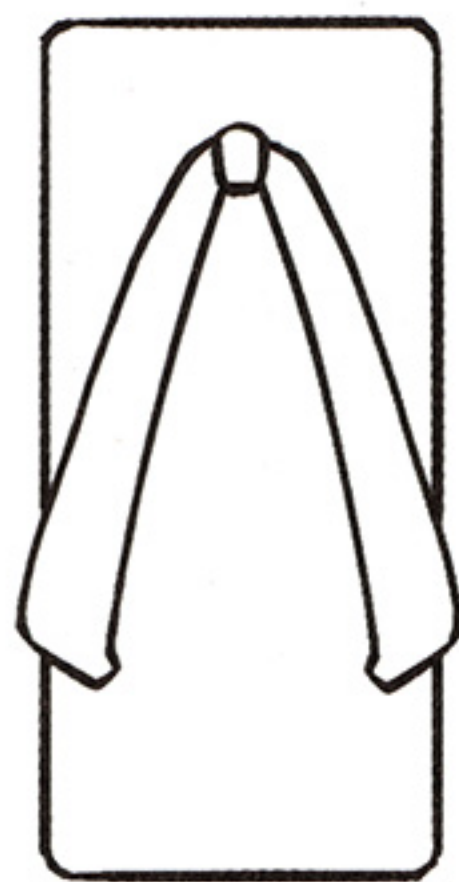
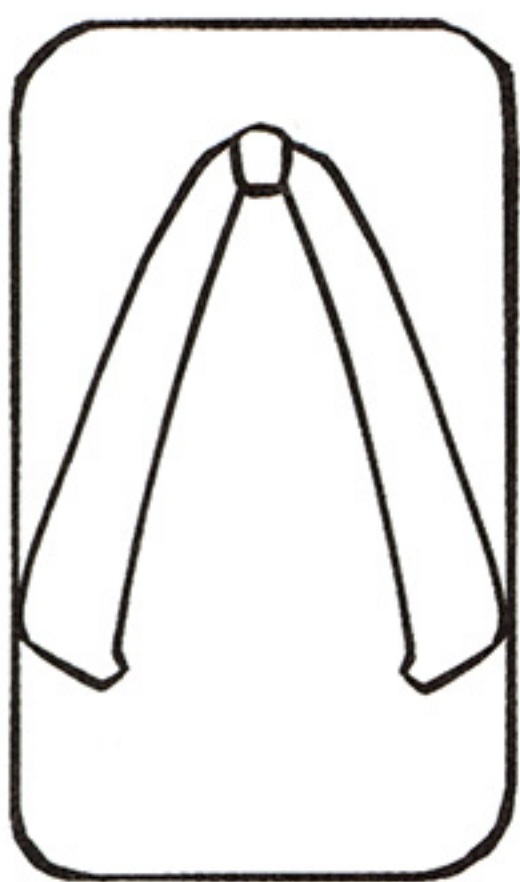
木製の台に３つの穴をあけ、鼻緒を付けた履き物を「下駄」と呼びます。歯と呼ばれる足が、通常２本ついています（例外もあります）。下駄は大きく分けて二種類「連歯」と「差歯」があります。

連歯下駄

一つの木のかたまりから削りだして作った、台と歯がひとつづきの下駄を「連歯」という。歯の厚さや形を自由に削りだせるため、数えきれないほどの多様な種類・嗜好がある。

前歯
後歯

後歯のほうが、前歯より少し厚い事が多い。

二本歯は、均等な1/3の位置ではありません。バランスに注意するとリアリティが出る。

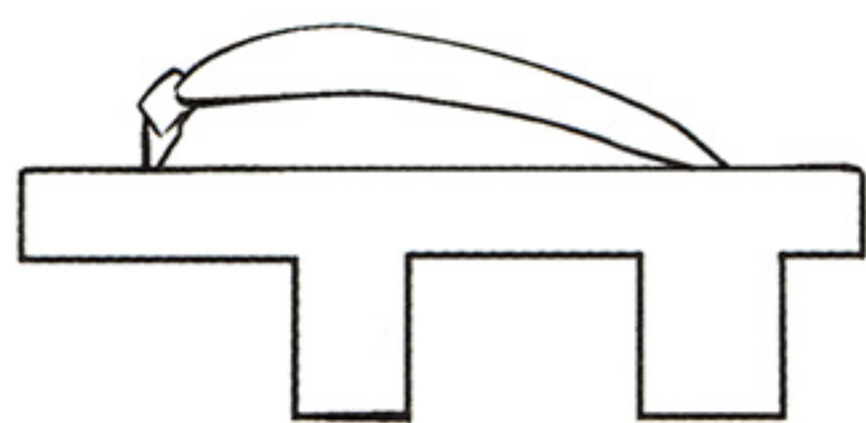
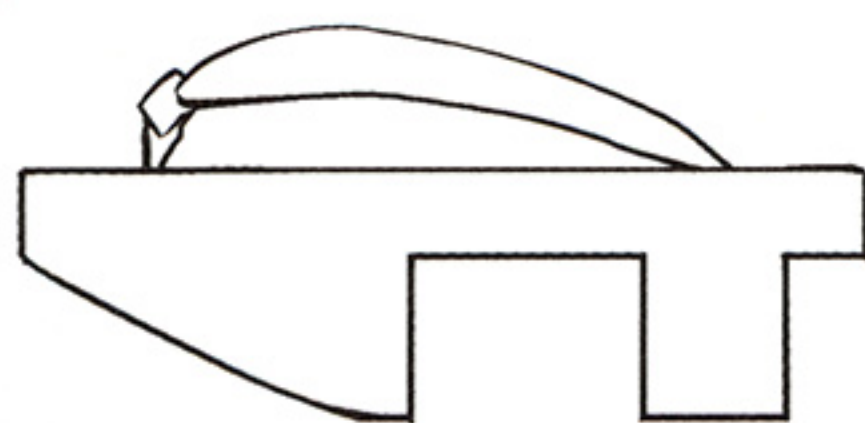
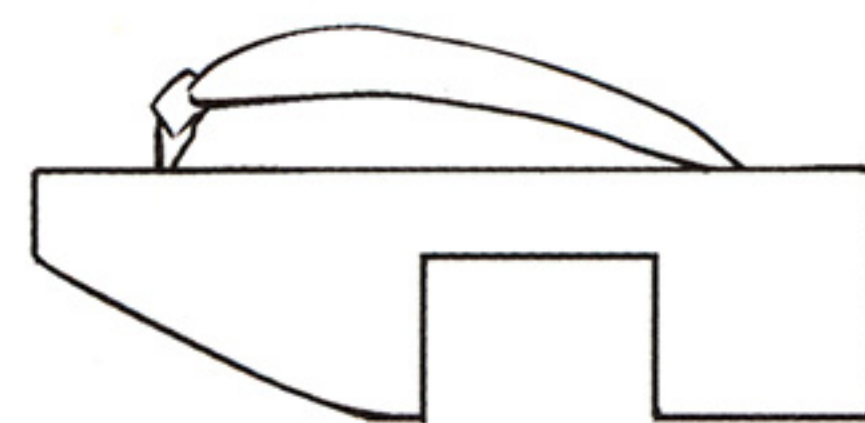
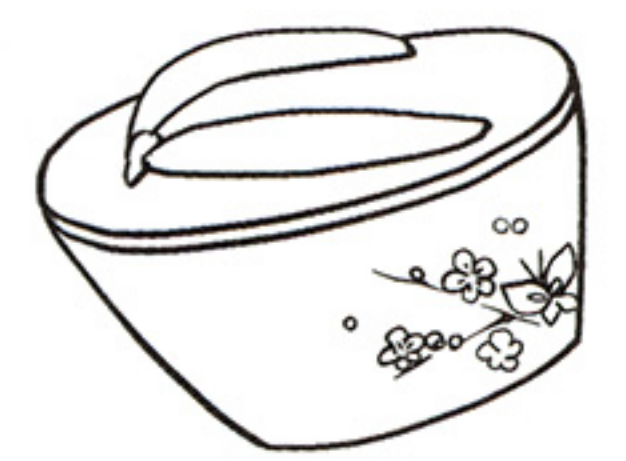
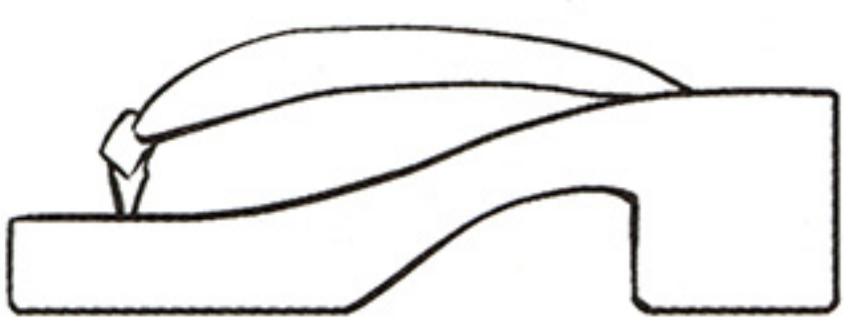
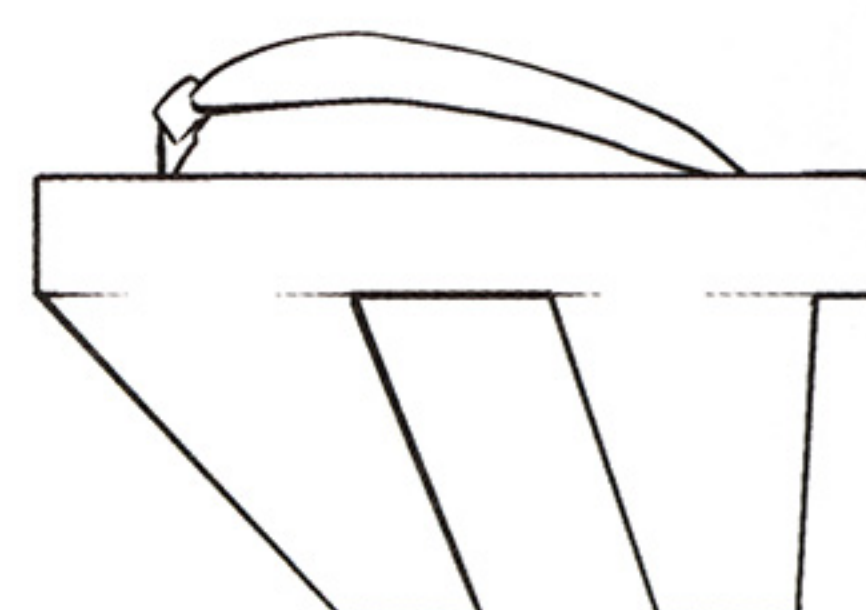
男女の違い

男性物の下駄

四角い形。

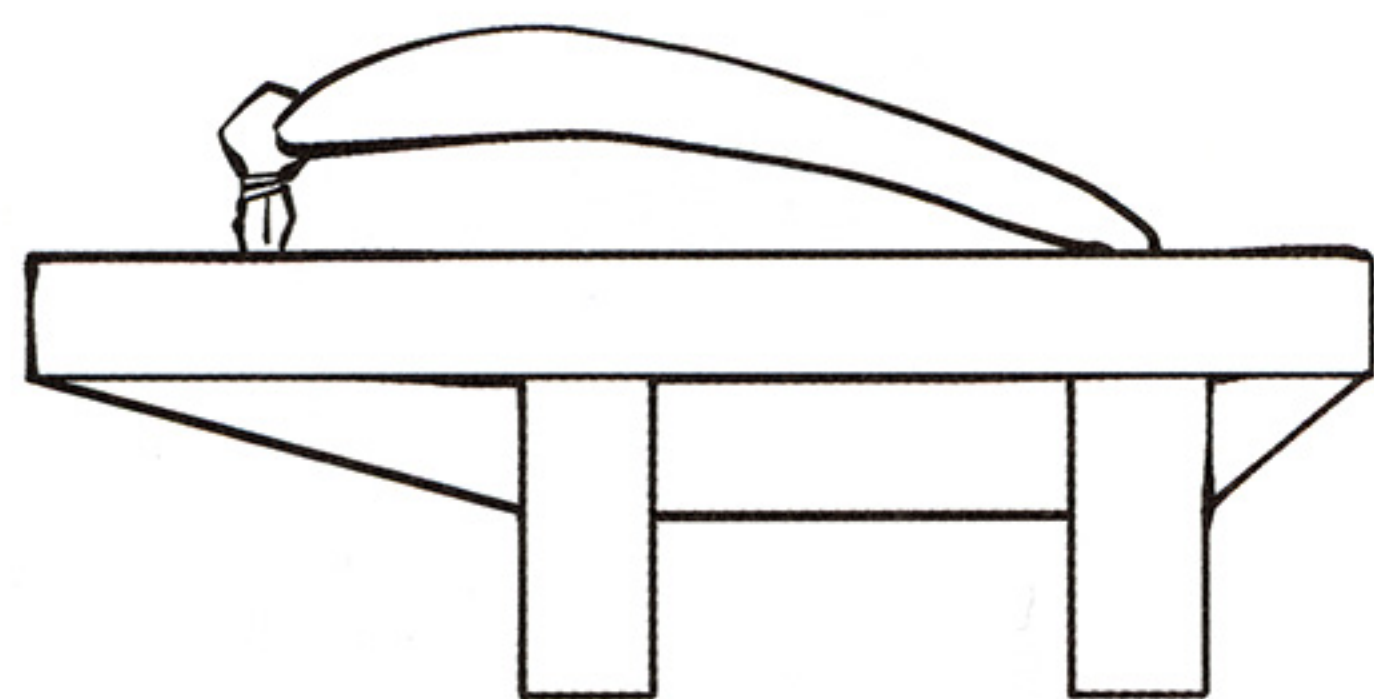
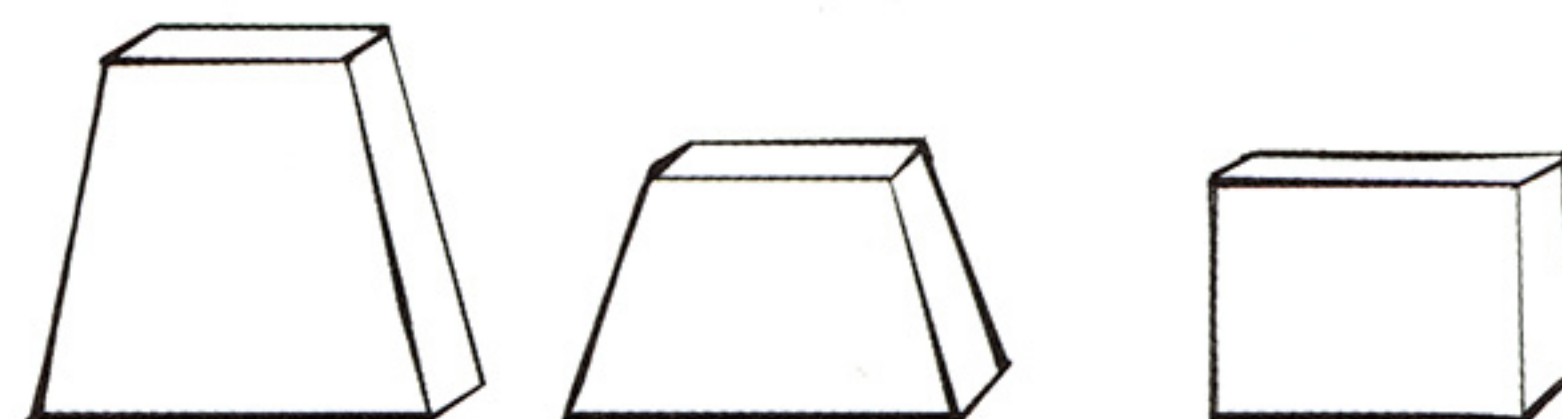
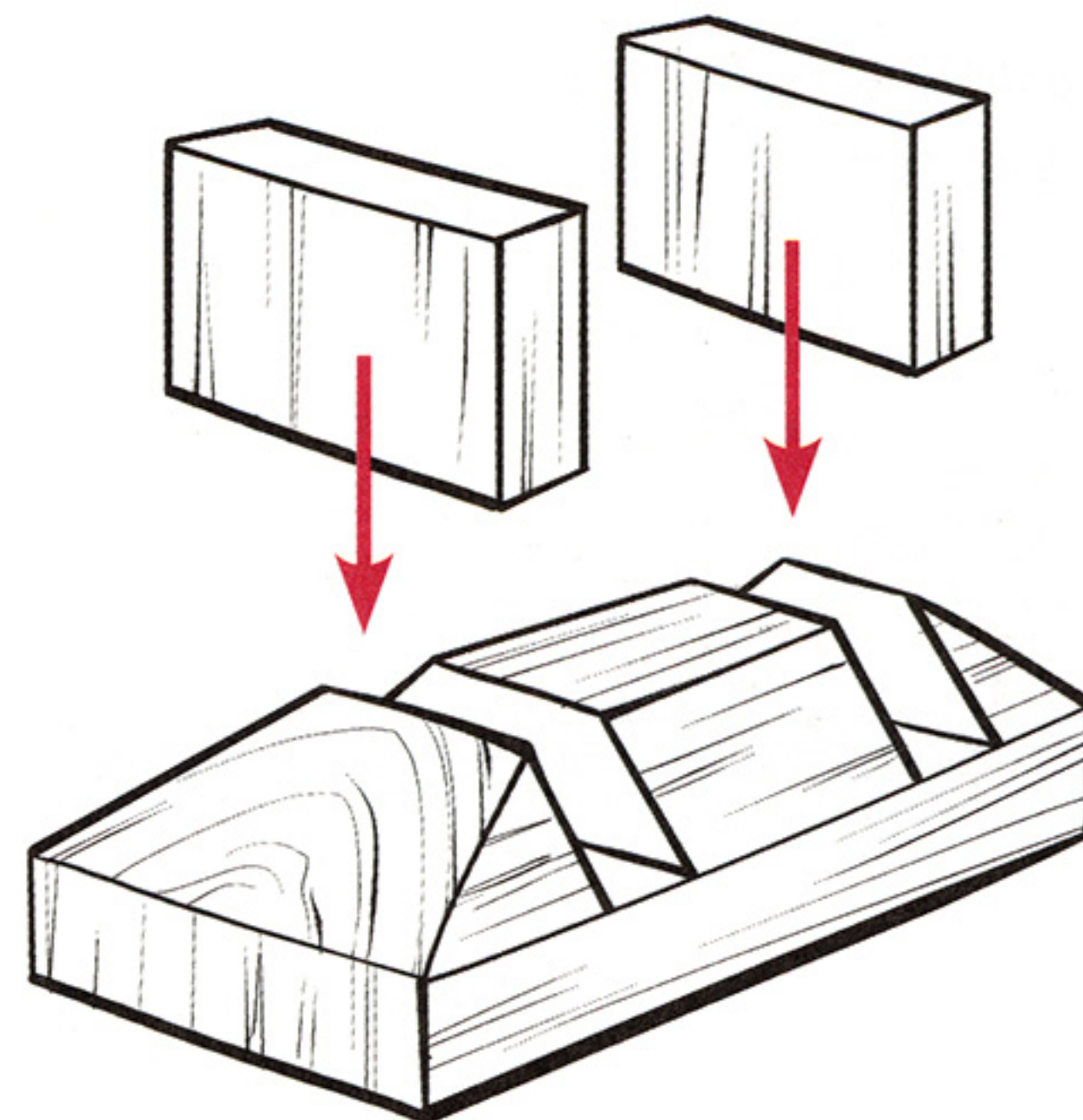
女性物の下駄

丸っこい。
形もさまざまで、男性物より女性物の方が、形が豊富。

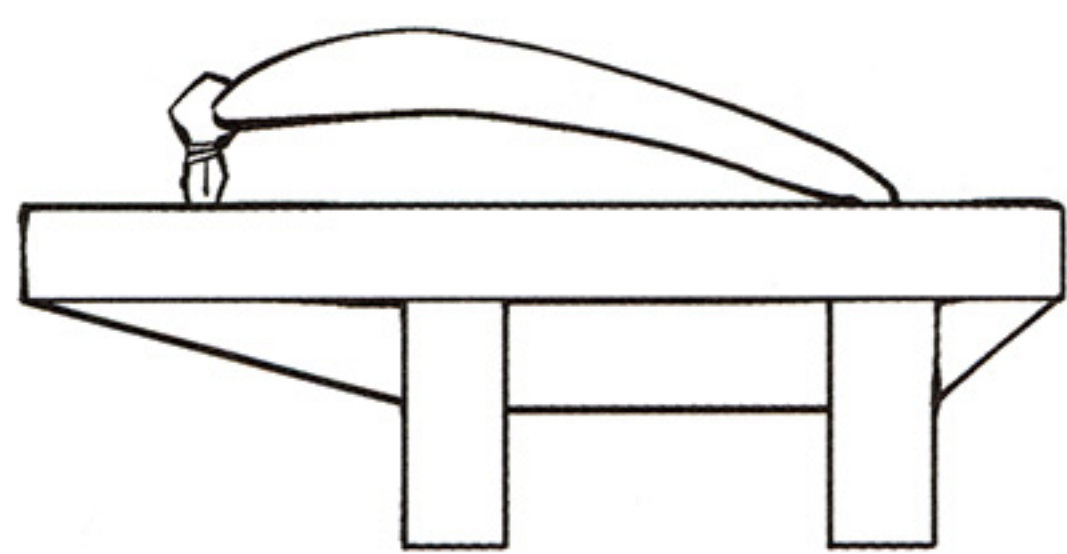
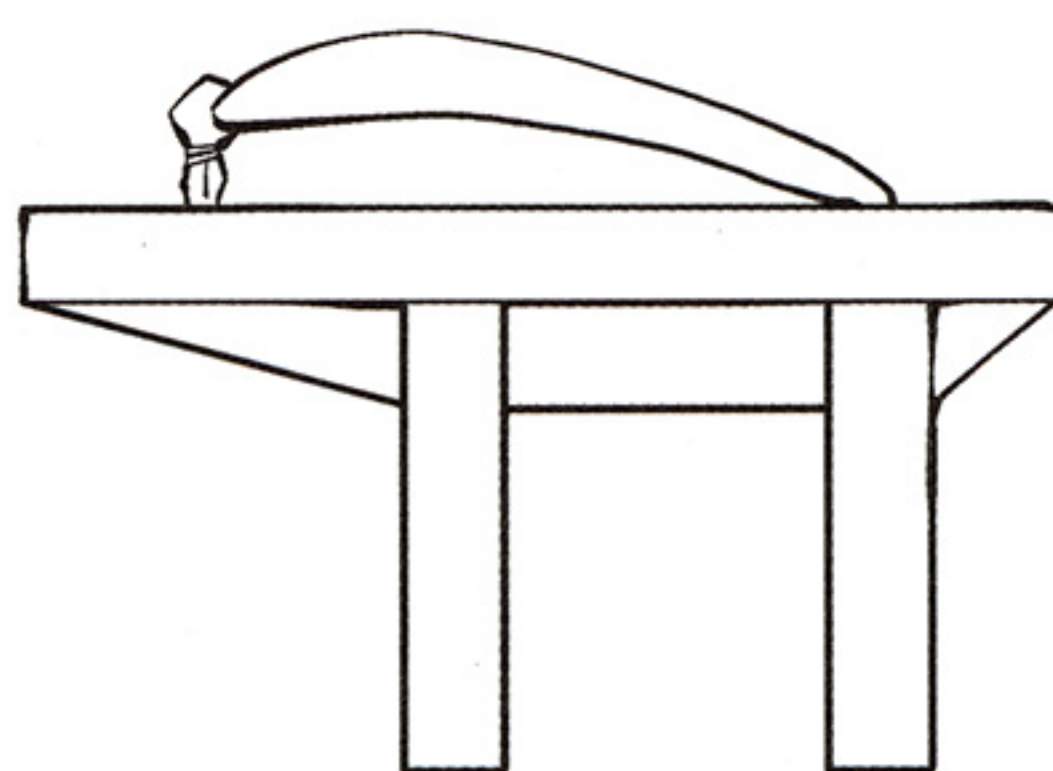
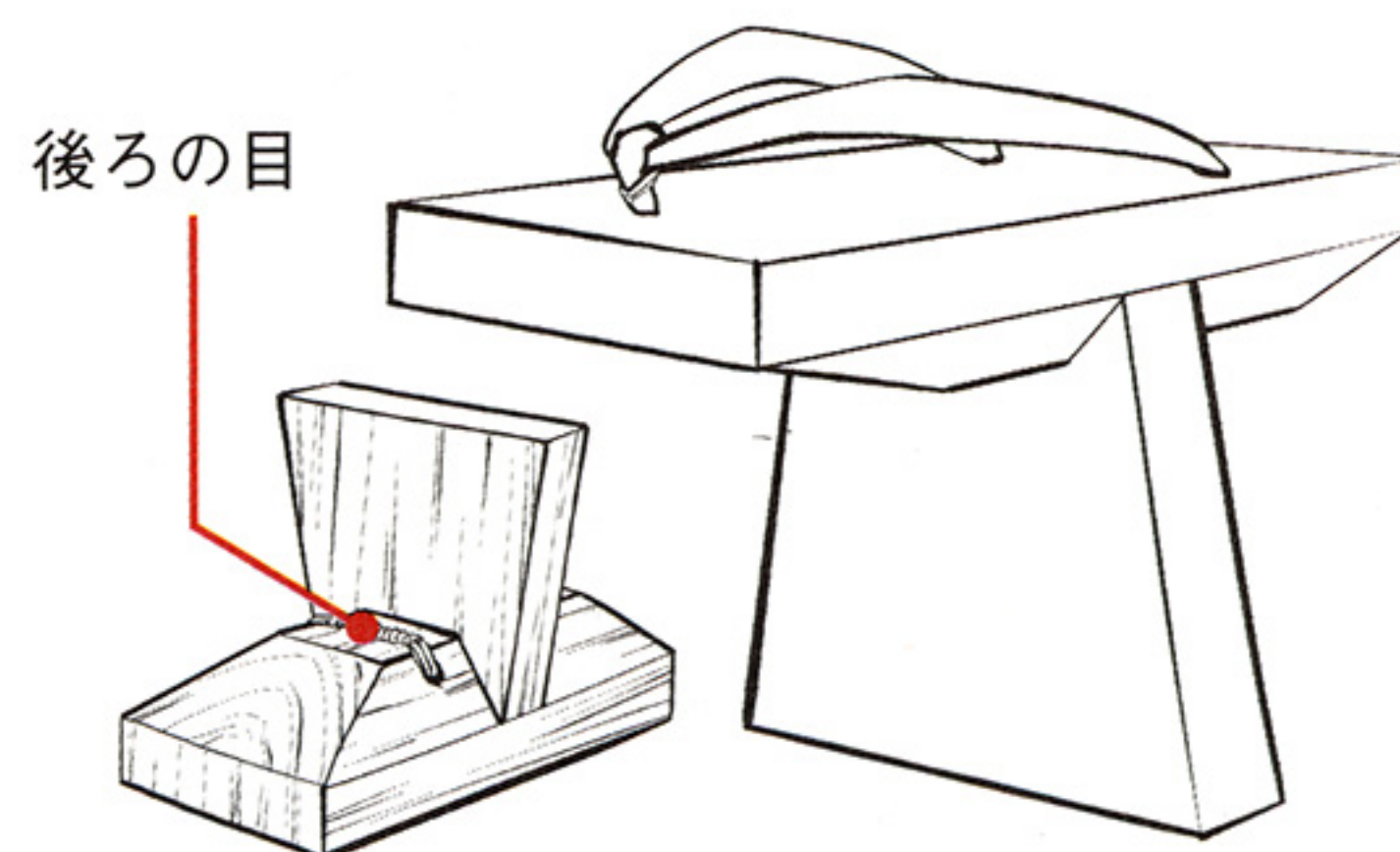
連歯下駄の種類

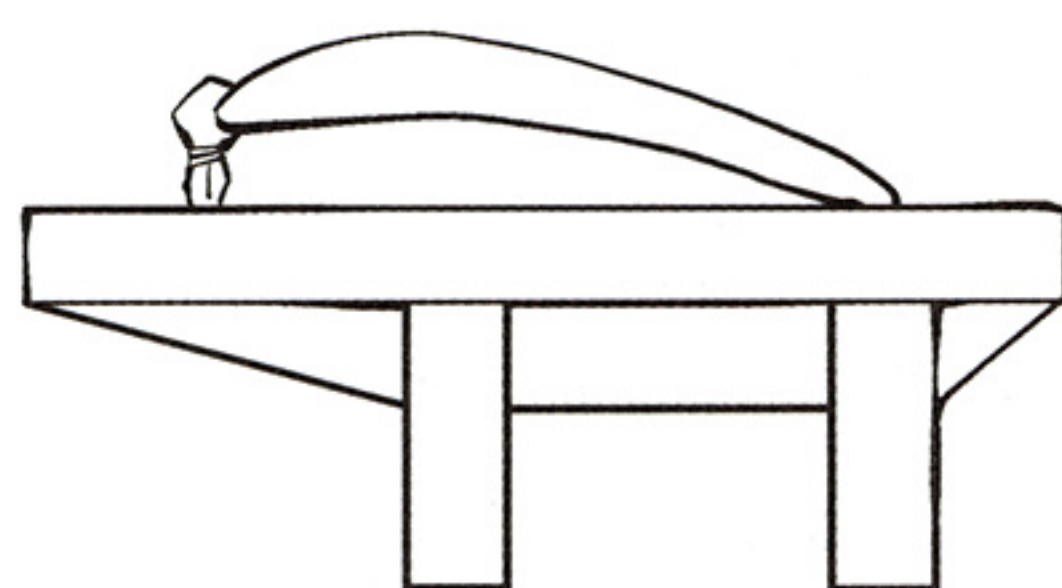
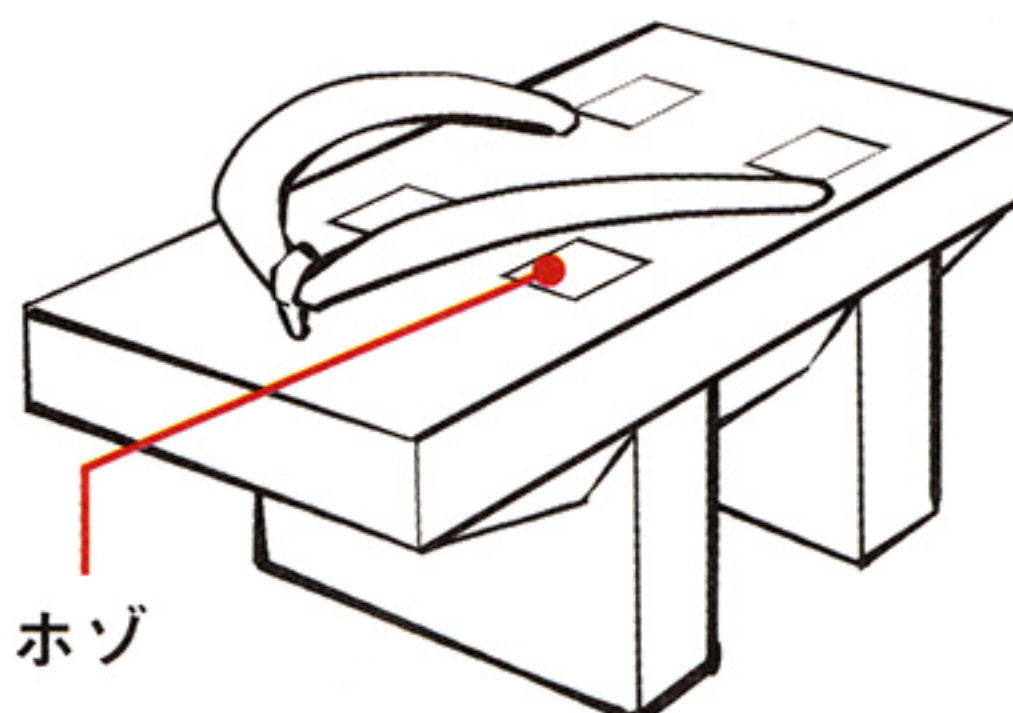
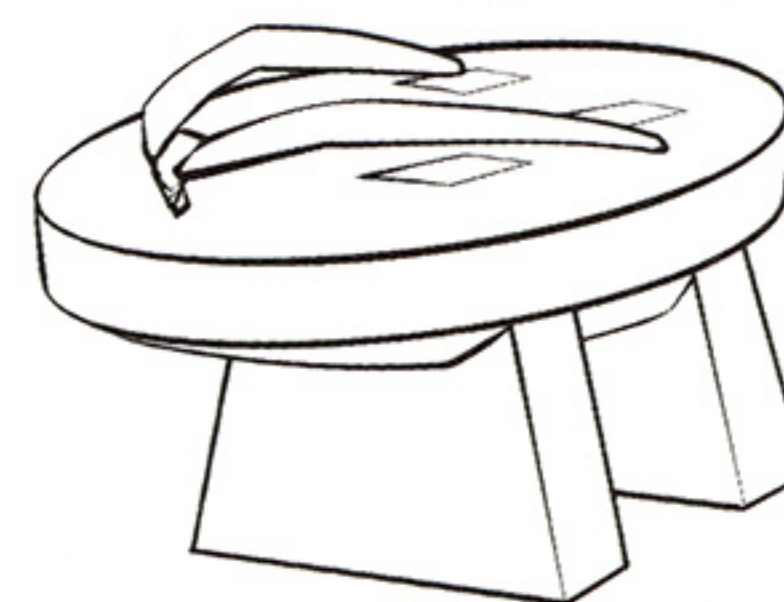
基本的に女物の呼称です。
江戸か上方かなど、地域・時代、お店によっても違ったりします。

芳町
最も基本的な形。
細長いものを「日光」と呼ぶこともある。

堂島（千両）
畳表にしたものを、堂島と呼ぶ。

小町
前歯が、斜めに切り落とした「のめり」で、後ろ歯が丸い「後丸」。

ぽっくり（こっぽり）
「ぽっくり」は子供用。
鈴が入っていたりする。

右近　**舟形**
靴と形が近く、近年人気の形。
「右近」と「小町」の中間のような形や、混同されていたり、逆に呼ぶこともあるようです。

雪下駄
歯の間につまった雪が落ちるよう、歯がナナメになっているものもある。

差歯(さし)下駄

台と歯を別々に作り、差し込んで使う下駄。
摩耗した歯を、新品に替えて使い続ける事ができ、経済的。
軽くて肌ざわりのよい「桐」を台に、
堅くて丈夫な「朴」「樫」を歯に使うなど、
素材の性質にあわせて作られることも合理的。

連歯下駄よりも、少し歯が薄めである事が多い。
全体的なフォルムに違いはない。

歯もさまざまな形がある。

差歯下駄の種類

基本的に女物の呼称です。
江戸か上方かなど、地域・時代、お店によっても違ったりします。

日和(ひより)下駄
「朴」の歯を差したもの。男物は「大朴坂」と呼ぶ。
もともと、庶民の日中用の履き物で、現在は高下駄（雨下駄）に対し、晴れた日に履く。

高下駄（足駄）
朴歯の高下駄は、明治以降バンカラ学生が好んだことで有名。
もともと、雨天用の履き物で「雨下駄」とも呼ぶ。

一本歯
修験者が山岳修行で履くという。
天狗の履き物で有名。

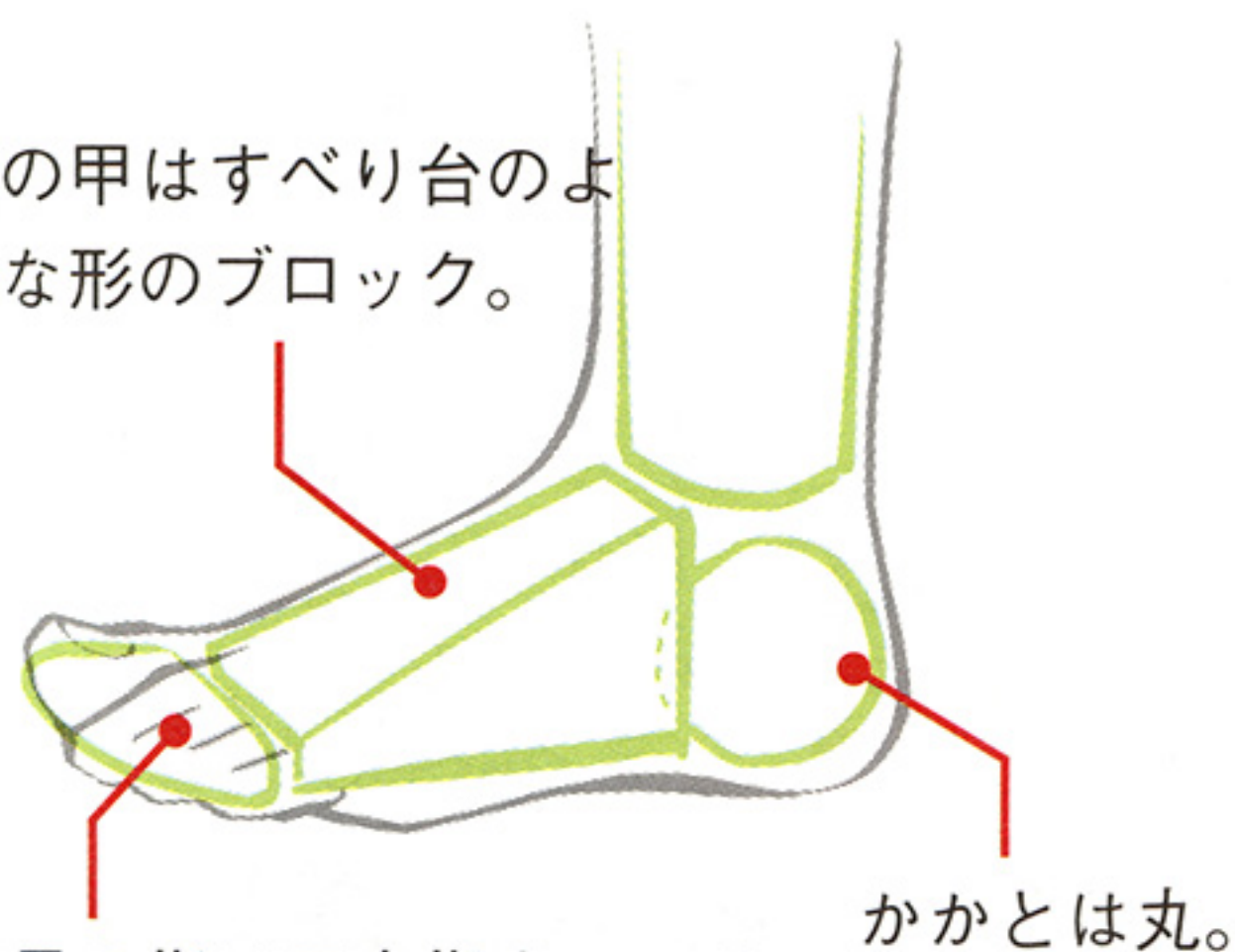
利休
「樫」の歯を差したもの。
男物は「五分橋」と呼ぶ。

露卯(ろぼう)
歯を差し込んだ「ホゾ」が、台の表面から見えている。

室町時代の足駄(あしだ)
長円形の杉の台に、銀杏の歯を差した露卯の高足駄。
平安時代にはまだ僧兵や民間の履き物だった下駄※が、室町時代に一般化する。
※本来、当時はすべて足駄と総称していたとされる。

足を描くコツ

草鞋、下駄、草履…と、和装を描く時は裸足を描くことが多くなります。
足は、大まかな形で捉えるようして描くのがコツです。

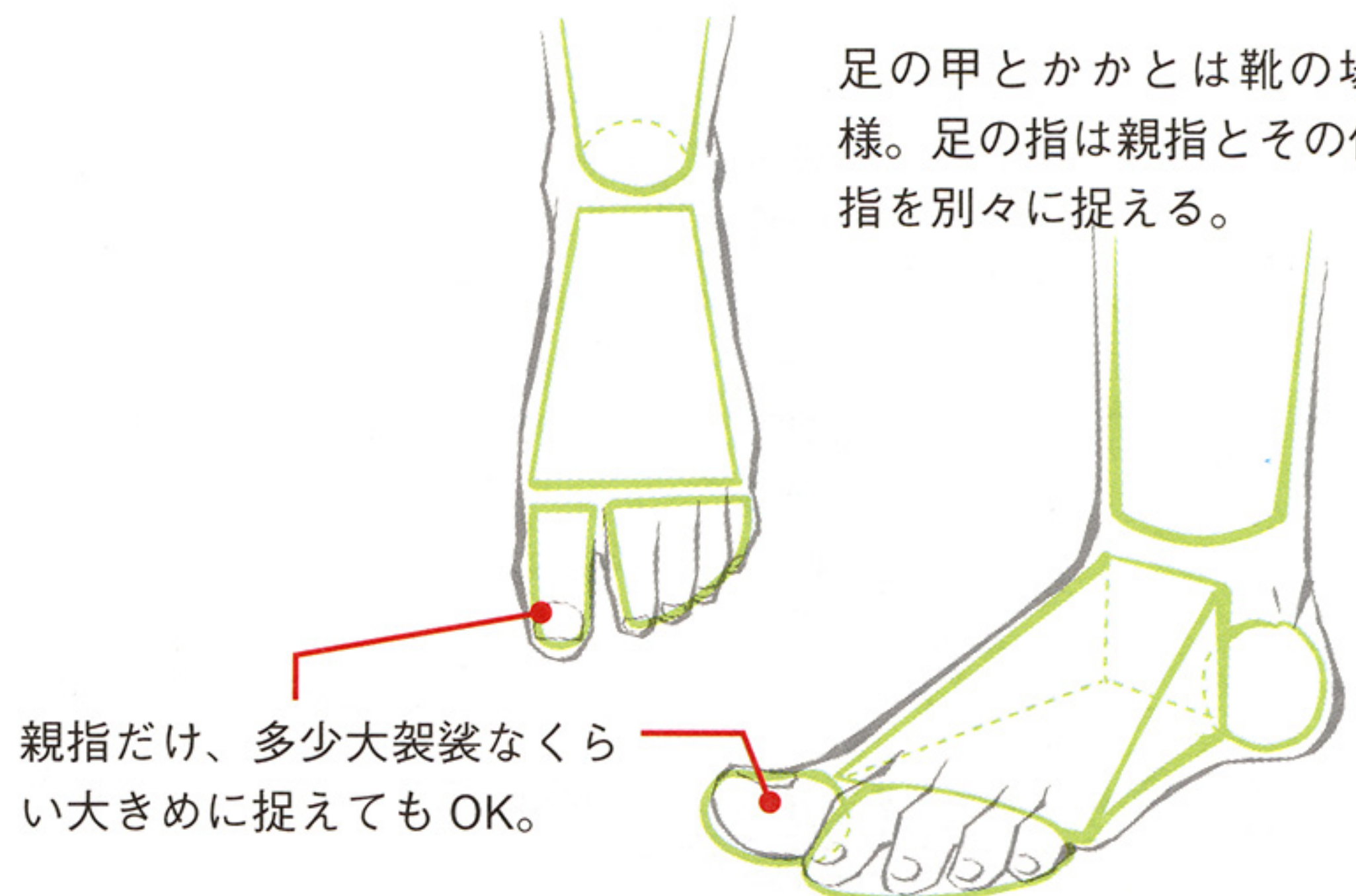
● 靴をはかせる場合

足の甲はすべり台のような形のブロック。

かかとは丸。

足の指は五本指を一つのかたまりとして捉える。

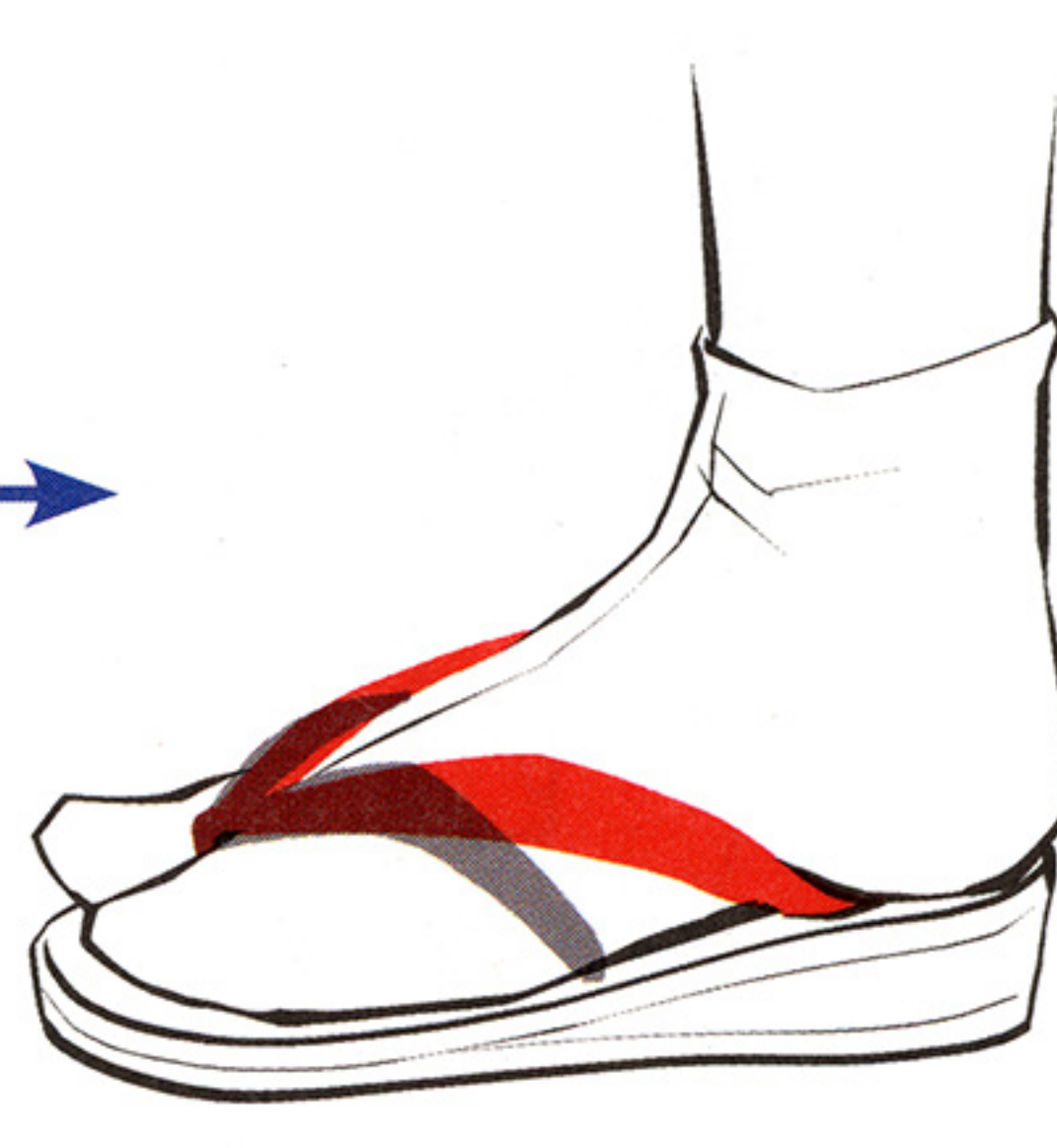
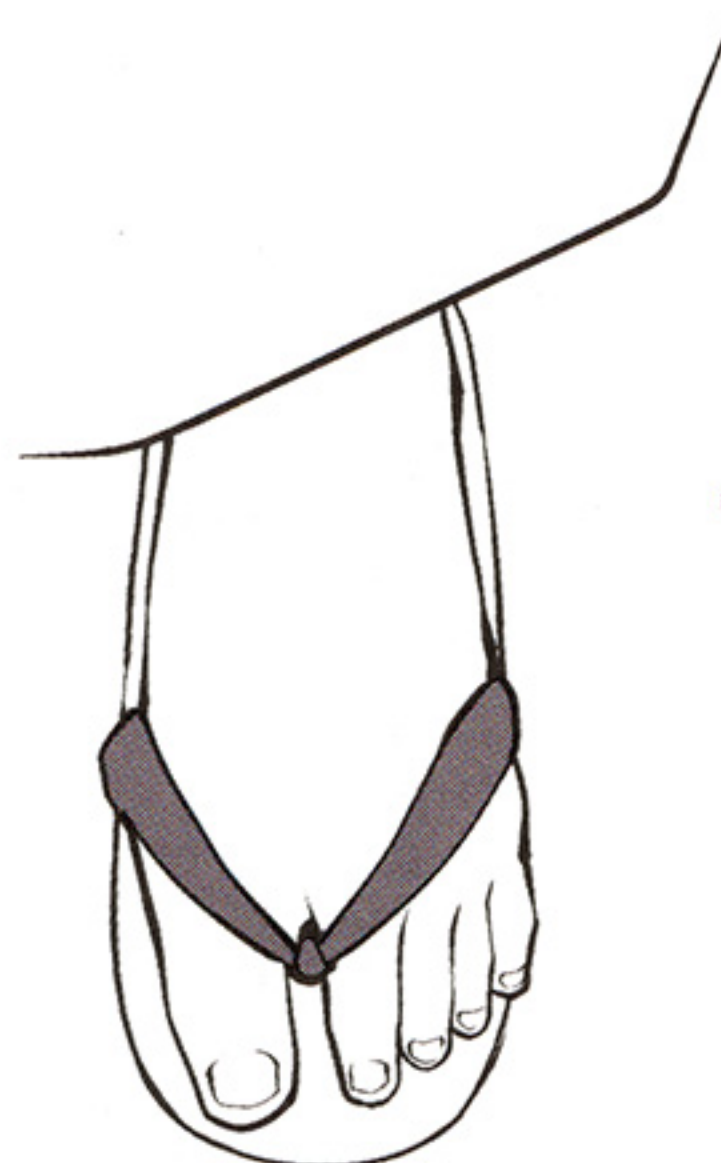
この３つのかたまりを意識して描く。
上から靴を描くので、細かい造形にとらわれなくてもOK。

● 草履、下駄などをはかせる場合

足の甲とかかとは靴の場合と同様。足の指は親指とその他の四本指を別々に捉える。

親指だけ、多少大袈裟なくらい大きめに捉えてもOK。

よくある間違い

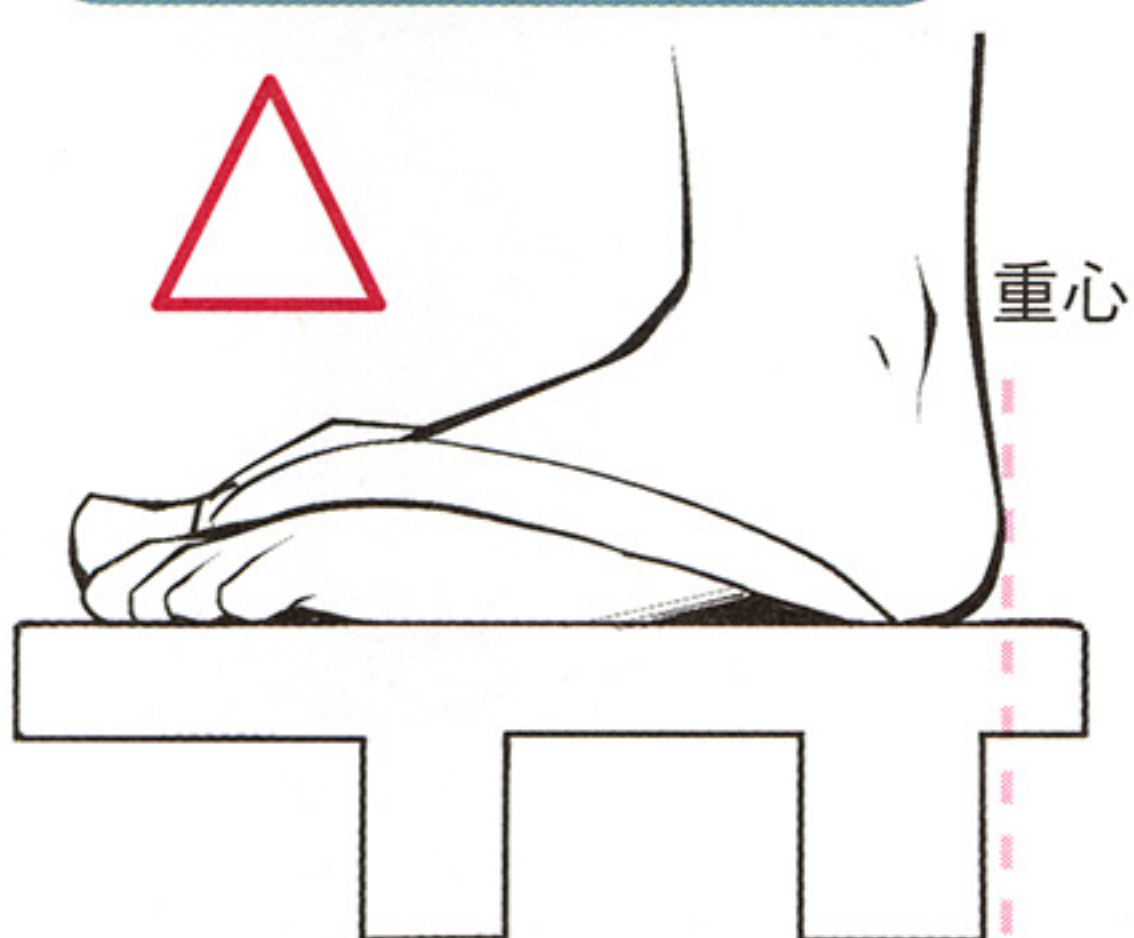
NG

鼻緒が短すぎて、鼻緒の後坪を踏んでしまっています。
このような草履・下駄はありません。

草履や下駄の鼻緒は、かかとの手前まであり、
土踏まずに回り込むようになっています。

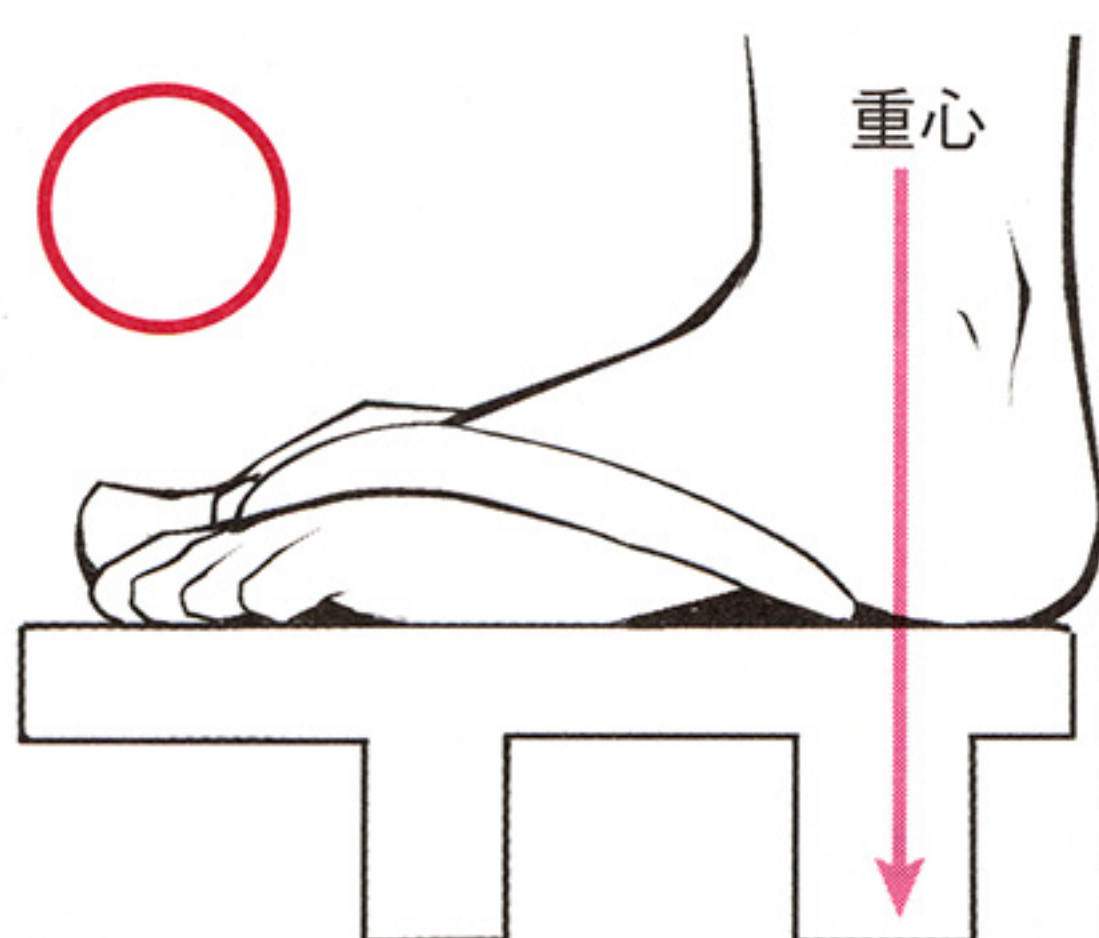
かっこいい履き方

あくまで「かっこよさ」であり、マナーやしきたりではないが、知っておくと、絵に幅がでます。

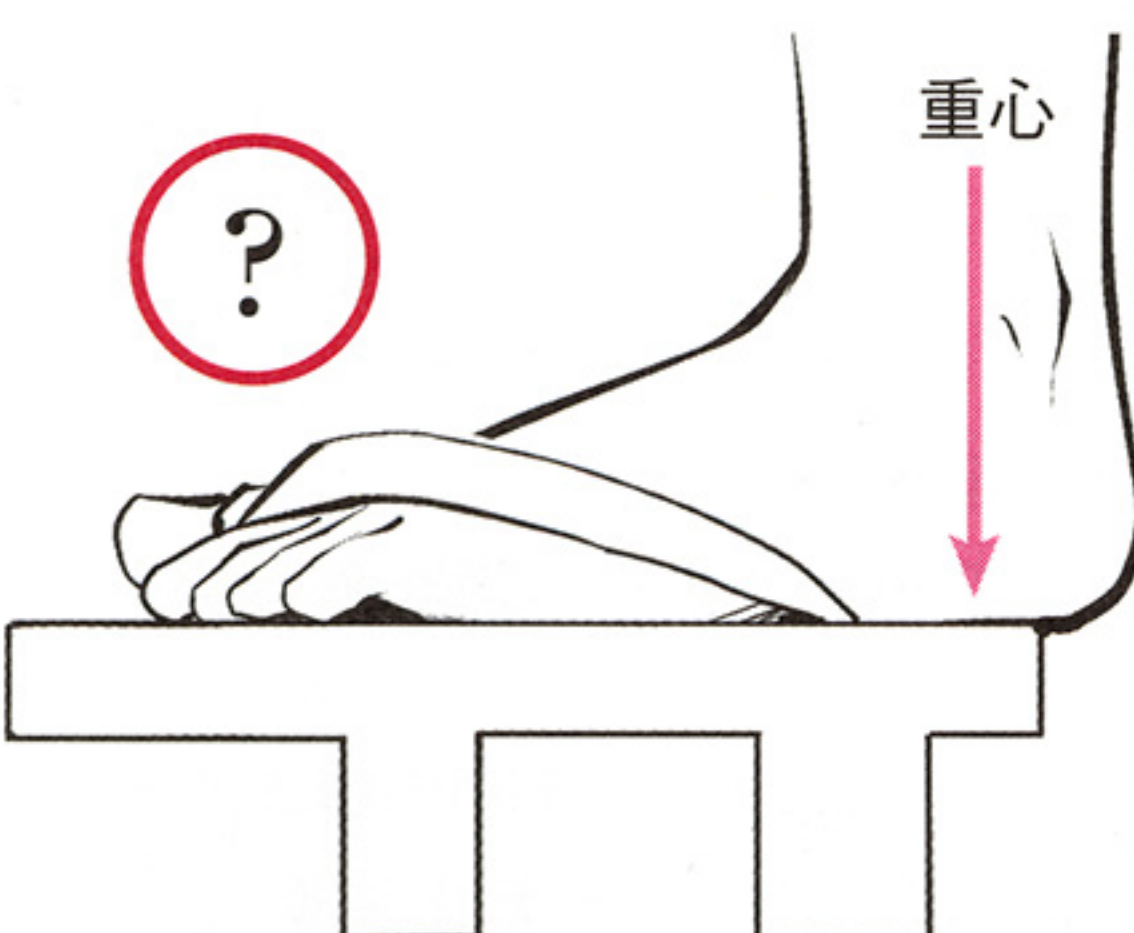
△

重心

下駄にも適したサイズがあり、かかとの後ろが大きく余ると、少々野暮ったい。
また、大きすぎる下駄は重くて歩きにくく、ひきずってしまう。

○

重心

かかとが台から少し出るくらいが、美しいとされる。
実際に歩きやすい。

?

重心

これくらいかかとを出し、鼻緒も指先で引っ掛けるくらいが粋だ、という人もいる。
かかとへの衝撃が大きいので、痛みを我慢する必要がある。

ONE POINT

東西で鼻緒の位置が違う

東西で鼻緒の後ろ位置が違うということがあり、履き心地や、鼻緒のすげ方は少しだけ違います。
短気な江戸っ子は、つっかけやすいように、鼻緒が短いという説もあります。

江戸の下駄　　京阪の下駄

索引

和装の描き方

和装イラスト完全マスターブック

9784768306291

1929472019008

定価：本体1,900円＋税
雑誌　63380-50

ISBN978-4-7683-0629-1

C9472 ¥1900E